

中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究

(課題番号：19900107)

平成19年度科学研究費補助金（特別研究促進費）研究成果報告書

平成20年 3 月

研究代表者 矢 田 俊 文

(新潟大学人文社会・教育科学系教授)

はしがき

平成19年度文部科学省科学研究費補助金の交付をうけた研究課題名「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」の研究組織・研究経費および研究発表などは、以下のとおりである。

研究組織

研究代表者 矢田 俊文（新潟大学人文社会・教育科学系教授）
研究分担者 原 直史（新潟大学人文社会・教育科学系准教授）
研究分担者 堀 健彦（新潟大学人文社会・教育科学系准教授）
研究分担者 浅倉 有子（上越教育大学大学院学校教育学研究科准教授）
研究分担者 仁木 宏（大阪市立大学・大学院文学研究科准教授）
研究協力者 前嶋 敏（新潟県立歴史博物館主任研究員）
研究協力者 片桐 昭彦（練馬区教育委員会文化財係郷土資料調査員）
研究協力者 森田 真一（群馬県立歴史博物館学芸員）
研究協力者 皆川 義孝（駒沢女子大学人文学部講師）
研究協力者 中井 淳史（大手前大学史学研究所 PD 研究員）
研究協力者 福原 圭一（上越市総務部総務課公文書館準備室学芸員）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
平成19年度	2,900,000円	0 円	2,900,000円
総 計	2,900,000円	0 円	2,900,000円

研究発表

(1) 雑誌論文

矢田俊文「地震被害と摂津天王寺西浦・遠江中部低地」
（『中世考古学文献研究会会報』8号，査読無，2007年，1－15）
浅倉有子「場所請負制下における漆器の流通と生産地」
（『中世考古学文献研究会会報』9号，査読無，2007年，1－2）
原 直史「近世港町をめぐる蔵ネットワーク」
（『中世考古学文献研究会会報』9号，査読無，2007年，19－35）
堀 健彦「明治中期の新潟県郷土雑誌と越後古図」
（『資料学研究』5号，査読有，2008年，発表予定）

(2) 学会等発表

浅倉有子「場所請負制下における漆器の流通と生産地」

(中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究会 (略称：中世考古学文献研究会), 2007年11月3日, 新潟大学)

仁木 宏「中世寺院都市論の可能性―越前国平泉寺 (福井県勝山市) 都市プラン復元の試み―」

(中世考古学文献研究会, 2007年11月3日, 新潟大学)

原 直史「近世港町をめぐる蔵ネットワーク」

(中世考古学文献研究会, 2007年11月3日, 新潟大学)

矢田俊文「地震被害と摂津天王寺西浦・遠江中部低地」

(中世考古学文献研究会, 2007年11月3日, 新潟大学)

堀 健彦「地震・津波災害と中世安濃津」

(中世考古学文献研究会, 2007年11月3日, 新潟大学)

堀 健彦「歴史災害の資料論―会津越後間交通と地盤災害―」

(公開シンポジウム「中世総合資料学の実践―間宮海峡から琉球弧へ―」, 中世総合資料学研究会, 2008年1月14日, 東洋大学白山キャンパス)

(3) 出版物

堀 健彦「地盤災害からみた阿賀川ルートの特質と城氏」柳原敏昭・飯村均編『御館の時代―十二世紀の越後・会津・奥羽―』高志書院, 2007年, 131-164, 総228頁

浅倉有子「近世における浄法寺漆器の生産と流通」大嶽幸彦先生退職記念改編『地域と地理教育』共同出版, 2007年, 393-400, 総408頁

原 直史「商人の周縁性と多様性」(1-11)「商いがむすぶ人々―重層する仲間と市場―」(191-241)原直史編『身分的周縁と近世社会 3 商いがむすぶ人びと』吉川弘文館, 2007年, 総245頁

仁木 宏「寺内町と城下町―戦国社会の達成と継承―」懷徳記念会編『大坂・近畿の城と町』和泉書院, 2007年, 39-68, 総165頁

後藤雅知・斎藤善之・高埜利彦・塚田孝・原直史・森下徹・横田冬彦・吉田伸之編『身分的周縁と近世社会 9 身分的周縁を考える』吉川弘文館, 2008年, 総225頁

原 直史「第7編第6章 干鯛の生産と流通」千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 通史編近世2』千葉県, 2008年 (刊行予定)

平成15年度～平成18年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（計画研究）の交付をうけ、本研究と同課題名「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」の研究を行っている。

本科研はその成果を踏まえた上で行っているので、参考に平成15年度～平成18年度「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」の研究組織・研究経費および研究発表も掲載する。

平成15年度～平成18年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（計画研究）の交付をうけ、本研究と同課題名「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」の研究組織・研究経費および研究発表などは、以下のとおりである。

研究組織

研究代表者 矢田 俊文（新潟大学人文社会・教育科学系教授）
研究分担者 原 直史（新潟大学人文社会・教育科学系助教授）
研究分担者 堀 健彦（新潟大学人文社会・教育科学系助教授）
研究分担者 浅倉 有子（上越教育大学学校教育学部助教授）
研究分担者 仁木 宏（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
平成15年度	2,200,000円	0 円	2,200,000円
平成16年度	2,200,000円	0 円	2,200,000円
平成17年度	2,200,000円	0 円	2,200,000円
平成18年度	2,900,000円	0 円	2,900,000円
総 計	9,500,000円	0 円	9,500,000円

研究発表

(1) 雑誌論文

矢田俊文「中世考古学のための中世・近世初期の文献研究について」

『中世考古学文献研究会会報』1号，査読無，2003年，1－2

矢田俊文「奥山荘下町坊城遺跡D地点を検討する視点」

『中世考古学文献研究会会報』1号，査読無，2003年，4－6

矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 建蓋・天目」

『中世考古学文献研究会会報』1号，査読無，2003年，16－17

矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山小屋」

『中世考古学文献研究会会報』1号，査読無，2003年，17－18

矢田俊文「戦国時代の上杉氏」『新潟県立歴史博物館研究紀要』5号，査読無，2004年，1－13

矢田俊文「考古学のための御伽草子・猿の草子解説 首都物資流通圏」

『中世考古学文献研究会会報』2号，査読無，2004年，1－2

仁木 宏「播磨国美囊郡淡河市庭（神戸市北区）の楽市制札をめぐる一考察」『兵庫のしおり』 7号，査読無，2006年，20－36

矢田俊文「新潟県中越地震被災地の文化遺産とその救出」『遺跡学研究』 2号，査読無，2005年，44－49

原 直史「史料紹介－大名家道具帳」
『中世考古学文献研究会会報』 2号，査読無，2005年，11－27

矢田俊文「集散地を検討する視点－文献史学と中・近世考古学の融合のために－」
『中世考古学文献研究会会報』 4号，査読無，2005年，1－2

原 直史「集散地における『場』の構造－江戸・大坂の魚肥市場を例として－」
『中世考古学文献研究会会報』 4号，査読無，2005年，9－16

矢田俊文「戦国期の信濃・越後・甲斐」『武田氏研究』 34号，査読無，2006年，1－15

矢田俊文「考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵」
『中世考古学文献研究会会報』 6号，査読無，2006年，1－8

矢田俊文「土蔵・塙列建物研究の意義－学融合研究の視点から－」
『中世考古学文献研究会会報』 7号，査読無，2006年，1－4

浅倉有子「近世寺院の漆器生産と流通」
『中世考古学文献研究会会報』 7号，査読無，2006年，60－61

堀 健彦「三輪長泰『改正越後国佐渡国全図並付録』について」『資料学研究』 4号，査読有，2007年，1－19

(2) 学会等発表

矢田俊文「中世考古学のための中世・近世初期の文献研究について」
(中世考古学文献研究会，2003年11月3日，新潟大学)

矢田俊文「奥山荘下町坊城遺跡 D 地点を検討する視点」
(中世考古学文献研究会，2003年11月3日，新潟大学)

矢田俊文「文献史学における学融合の可能性」
(文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創生』第1回公開シンポジウム「中世総合資料学の可能性：新しい学問体系の構築に向けて」，2003年11月30日，中央大学駿河台記念館)

矢田俊文「中世の物資流通研究と瀬戸内地域」
(広島県立歴史博物館・文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創生－」公開シンポジウム「中世瀬戸内の流通と交流」，2004年10月23日，広島県立歴史博物館)

矢田俊文「集散地を検討する視点－文献史学と中・近世考古学の融合のために－」
(中世考古学文献研究会，2004年11月3日，新潟大学)

原 直史「集散地における『場』の構造－江戸・大坂の魚肥市場を例として－」
(中世考古学文献研究会，2004年11月3日，新潟大学)

浅倉有子「北日本における交易と流通」
(中世考古学文献研究会，2004年11月3日，新潟大学)

仁木 宏「中世猪名川流域の地形と交通路」

(中世考古学文献研究会, 2004年11月3日, 新潟大学)

矢田俊文「能登畠山氏と前田氏」

(特定領域研究計画研究「中世拠点城郭および都市遺跡の分析方法に関する学融合的研究」グループ・特定領域研究計画研究「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」グループ合同シンポジウム「能登七尾城・加賀金沢城シンポジウム」, 2005年6月18日, 奈良大学)

仁木 宏「守護所・七尾城下町・小丸山城下町」

(特定領域研究計画研究「中世拠点城郭および都市遺跡の分析方法に関する学融合的研究」グループ・特定領域研究計画研究「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」グループ合同シンポジウム「能登七尾城・加賀金沢城シンポジウム」, 2005年6月18日, 奈良大学)

矢田俊文「考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵」

(中世考古学文献研究会, 2005年11月3日, 新潟大学)

堀 健彦「会津盆地における歴史地理環境—会津と越後のつながりに注目して—」

(中世考古学文献研究会, 2005年11月3日, 新潟大学)

矢田俊文「文献史学からみた中世瀬戸内の流通」

(特定領域研究計画研究「中世土器・陶器における生産技術及び編年に関する全国的研究と流通様相の年代的解明」グループ・特定領域研究計画研究「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」グループ・日本中世土器研究会合同シンポジウム「中世瀬戸内の流通—岡山・香川を中心にして—」, 2006年10月1日, 岡山大学)

仁木 宏「近江国石寺城下町の空間構造—楽市令と考古・地図資料の再検討—」

(中世考古学文献研究会, 2006年11月3日, 新潟大学)

浅倉有子「近世寺院の漆器生産と流通」

(中世考古学文献研究会, 2006年11月3日, 新潟大学)

矢田俊文「土蔵・塙列建物研究の意義—学融合研究の視点から—」

(中世考古学文献研究会, 2006年11月3日, 新潟大学)

(3) 出版 物

矢田俊文「文献史学における学融合の可能性」前川要編『中世総合資料学の可能性』新人物往来社, 2004年, 56-73, 総231頁

矢田俊文・竹内靖長・水澤幸一編『中世の城館と集散地』高志書院, 2005年, 総312頁

第1部 城館と集散地

奥山荘政所条遺跡群の展開—坊城館から江上館へ— 水澤 幸一

歴史地理学からみた波月条絵図とその周辺 青山 宏夫

文献史料からみた奥山荘中条の政治・経済ネットワーク

—中世前期の北越後における「潟湖河川交通」に留意して— 高橋 一樹

城下町松本の上州砥石間屋跡 竹内 靖長

集散地における『場』の構造

—江戸・大坂の魚肥市場を例として— 原 直史

浄法寺漆器の生産と流通 浅倉 有子

港津と守護所をめぐる—考察—若狭国小浜と越中国放生津— 仁木 宏

中世の流通に関する考古学的分析の現状と課題 伊藤 裕偉

中世都市奈良の都市構造の認識

—近世地誌『奈良坊日拙解』の読み解きから—

堀 健彦

第2部 文献資料と中世考古学

文献からみたモノ資料—法会・神事における土師器の使用—

中井 淳史

中世考古学のための文献資料解説

(1) 城と城下

蔵屋 上野国長楽寺永禄日記

片桐 昭彦

小屋・庭 上野国長楽寺永禄日記

片桐 昭彦

山（金山城）の小屋 上野国長楽寺永禄日記

片桐 昭彦

金山城における小屋 上野国長楽寺永禄日記

片桐 昭彦

長手の小屋 上野国長楽寺永禄日記

片桐 昭彦

山小屋 上野国長楽寺永禄日記

矢田 俊文

魚津城のとばり 上杉氏関連文書

福原 圭一

亀ヶ崎城跡出土木簡と内田文書

福原 圭一

犬追物 梅花無尽蔵・蔭涼軒日録

皆川 義孝

江戸城の郭と陶器 梅花無尽蔵

皆川 義孝

(2) 街道と渡

平塚の渡 上野国長楽寺永禄日記

森田 真一

平塚の渡周辺で活動する人々 上野国長楽寺永禄日記

森田 真一

古戸の渡 上野国長楽寺永禄日記

森田 真一

(3) 出土卒塔婆文字

浦廻遺跡

前嶋 敏

堅田B遺跡

前嶋 敏

由比ヶ浜南遺跡

前嶋 敏

(4) 土器・陶磁器ほか

土器杯・ヌリモノ、杯 上野国長楽寺永禄日記

伊藤 啓雄

建盞・天目 上野国長楽寺永禄日記

矢田 俊文

首都物資流通圏 御伽草子「猿の草子」

矢田 俊文

史料紹介 大名家道具帳

原 直史

a 今度長崎ニ而相調申卷物并御道具之帳

b 越後高田御本城広間并三階櫓御道具帳

c 越後高田御本城雑蔵道具帳

d 越後高田御城所々御道具帳

矢田俊文「中世の物資流通研究と瀬戸内地域」柴垣勇夫編『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房、2005年、49-69、総314頁

矢田俊文「能登畠山氏と前田氏—能登府中と城館の変遷—」(53-62)・仁木 宏「守護所・城下町と府中・所口湊—都市史のなかの「七尾」—」(63-79)、千田嘉博・矢田俊文編『能登七尾城・加賀金沢城—中世の城・まち・むら』新人物往来社、2006年、総181頁

浅倉有子「天保期における抜荷問題と新潟・蝦夷地」、菊池勇夫他編『列島史の南と北』吉川弘文館、2006年、140-162、総264頁

- 原 直史「越後巨大地主と流通市場―北前船による作徳米流通を中心に―」原直史・大橋康二編『日本海域歴史大系』第5巻近世篇2，清文堂出版，2006年，153－175，総403頁
- 仁木 宏「戦国・信長時代の茨木の町と茨木氏」中村博司編『よみがえる茨木城』清文堂，2007年，3－23，総251頁

目 次

はしがき	1
中世考古学文献研究会会報	
1 号	
中世考古学のための中世・近世初期の文献研究について（報告要旨）	矢田 俊文 13
「中世考古学研究者が望む文献研究」とは何か（報告要旨）	伊藤 裕偉 15
奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点を検討する視点（報告要旨）	矢田 俊文 16
奥山荘政所条遺跡群の展開	
一下町・坊城遺跡 D 地点の新知見を加えて―（報告要旨）	水澤 幸一 18
歴史地理学からみた波月条絵図とその周辺（報告要旨）	青山 宏夫 23
文献史料からみた奥山荘中条の政治・経済ネットワーク	
―日本海交通と北越後の内水面交通に留意して―（報告要旨）	高橋 一樹 25
討論：奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点の検討と学融合	27
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 建蓋・天目	矢田 俊文 28
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山小屋	矢田 俊文 29
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 蔵屋	片桐 昭彦 30
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭	片桐 昭彦 30
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 骨	前嶋 敏 31
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 塔婆	前嶋 敏 31
2 号	
考古学のための御伽草子・猿の草子解説 首都物資流通圏	矢田 俊文 33
考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・祠堂	皆川 義孝 34
考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・江戸城の城壁	皆川 義孝 35
考古学のための出土遺物文字解説 浦廻遺跡出土卒塔婆	前嶋 敏 35
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山の小屋	片桐 昭彦 38
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説	
中世鎌倉街道上道利根川渡河点・平塚	森田 真一 42
史料紹介―大名家道具帳	原 直史 43
3 号	
考古学のための出土遺物文字解説 堅田 B 遺跡	前嶋 敏 61
考古学のための出土遺物文字解説 由比ヶ浜南遺跡	前嶋 敏 63
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋	片桐 昭彦 64
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説	
鎌倉街道上道利根川渡河点・長井の渡	森田 真一 67
考古学のための梅花無尽蔵・蔭涼軒日録解説 犬追物	皆川 義孝 70
考古学のための上杉氏関係文書解説 城郭「とぼり」	福原 圭一 72
考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 土器(杯)・ヌリモノ、杯・茶杯	伊藤 啓雄 75

4号

集散地を検討する視点

－文献史学と中・近世考古学の融合のために－（報告要旨）	矢田 俊文	79
城下町松本の上州砥石問屋遺跡について（報告要旨）	竹内 靖長	80
中世砥石の流通について（報告要旨）	高桑 弘美	83

集散地における『場』の構造

－江戸・大坂の魚肥市場を例として－（報告要旨）	原 直史	87
北日本における交易と流通（報告要旨）	浅倉 有子	95
中世集散地（遺跡）における職人集団の社会構造（報告要旨）	仁木 宏	95
討論：中・近世の集散地		98
法会・神事における土師器の使用	中井 淳史	105
流通・交易に関する考古学的分析の現状と課題	伊藤 裕偉	116
歴史地理学における資料と資料批判	堀 健彦	120

5号

会津盆地の歴史地理環境

－会津と越後のつながりに注目して－（報告要旨）	堀 健彦	123
中世初頭の会津（会津盆地西北部を中心に）（報告要旨）	吉田 博行	125
陣が峯城跡について－会津地方中世前期城館の一事例－（報告要旨）	五十嵐和博	131
阿賀野市大坪遺跡の調査（報告要旨）	荒川 隆史	138
越後・出羽の地域構造と城氏権力（報告要旨）	高橋 一樹	144
田川氏の存在空間（報告要旨）	山口 博之	148

6号

考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵	矢田 俊文	151
文書・記録からみた五十子（いかつこ）陣	森田 真一	158
中世考古学のための本願寺天文日記解説 町屋	片桐 昭彦	160
考古学のための梅花無尽蔵解説 椰子椀・中国産陶磁器	皆川 義孝	163
新潟県中越地震と県指定史跡栖吉城跡	広井 造	165
世良田諏訪下遺跡（群馬県太田市（旧尾島町）世良田）出土卒塔婆	前嶋 敏	166

7号

土蔵・塙列建物研究の意義－学融合研究の視点から－	矢田 俊文	173
瀬戸内の港湾集落と蔵－広島県草戸千軒町遺跡の事例－	鈴木 康之	177
堺環濠都市遺跡の蔵遺構－塙列建物の検討－（報告要旨）	續 伸一郎	188
中世前期京都と蔵（報告要旨）	大村 拓生	194
近世土蔵造の成立－建築史の立場から－	高屋麻里子	197
文書・記録からみた五十子陣(2)	森田 真一	215
文献史料からみた「遺棄葬」	前嶋 敏	224
近江国石寺城下町の空間構造－楽市令の再検討－	仁木 宏	230
近世寺院の漆器生産と流通	浅倉 有子	232

8号

地震被害と摂津天王寺西浦・遠江中部低地	矢田 俊文	235
地震・津波災害と中世安濃津（報告要旨）	堀 健彦	248
中世の災害とその克服～伊勢を事例に～	伊藤 裕偉	252
加賀の低地と中世遺跡	向井 裕知	262
中世越後の水害と低地遺跡（報告要旨）	水澤 幸一	273

9号

場所請負制下における漆器の流通と生産地	浅倉 有子	277
中世寺院都市論の可能性		
—越前国平泉寺（福井県勝山市）都市プラン復元の試み—	仁木 宏	279
「天盃」「天酌」と土師器の表象	中井 淳史	284
近世港町をめぐる蔵ネットワーク	原 直史	295
中世考古学と文献史料	福原 圭一	312
出土卒塔婆文字と文献史料	前嶋 敏	315
中世考古学と禅宗資料	皆川 義孝	319
戦国期の文献史料にみえる「小屋」の多義性	片桐 昭彦	323
文書・記録からみた中世後期の陣	森田 真一	334
あとがき		339

中世考古学文献研究会会報

中世考古学のための中世・近世初期の文献研究について（報告要旨）

矢田俊文（新潟大学人文学部）

a. 考古学・文献史学それぞれの研究の特徴を理解する必要性について

考古学と文献史学とでは依拠する資料が異なることから研究の特徴がある。考古学・文献史学それぞれの研究の特徴を理解することなしに学融合は進まない。

文献史学の佐々木銀弥氏は、文献資料では、京都の資料が圧倒的に多ことから、研究の偏りがあること、日常品の研究が弱いと指摘している。私は、考古学は生産地、消費地の研究には強いが、集散地の研究はあまり強くないように感じる。考古学ではモノを流通させる中心人物が商人であるという観点が弱いように思う。考古学という学問が流通が複雑ではない社会の研究からはじまったということからくる問題があるのではないか。モノの流通が活発な社会の研究をすすめるべきではないか。このように考えると近世考古学が果す役割は大きいと思う。

信州松本城下の砥石問屋の発掘を行なった竹内靖長氏は次のようにのべる。発掘地の本町第4次調査地（長野県松本市中央2丁目2-21）は、信州松本城下本町は親町である本町・中町・東町3町の内の一つで、問屋等の大店が集中する町人町にあたる。第1検出面は18世紀末～19世紀前半である。一軒分の敷地全域を発掘し、通りに面して母屋、中央部分に中庭、奥に土蔵がある。中庭に廃棄土坑があり、そのうち第36土坑・第38土坑からは多量の砥石（出土点数4859点）が見つかった。出土砥石は火災により被熱したため廃棄されたものである。廃棄された砥石は、製作工程の最終段階に施された工具跡が認められる。砥石は群馬県甘楽郡南牧村砥沢産のもので、すべて未使用である。文献史料には、「上野砥問屋 一人」（松本市中記）とあることから、本町第4次調査地は、上野産の砥石を商う砥石問屋の敷地である。また、「宝暦十三年（1763） 松本町中馬往来荷品」には、信州飯田行荷物として、「上野砥 貳拾駄程」とあることから、松本城下町の砥石問屋が信州飯田に上野産砥石を売り捌いていたことがわかる。

以上の竹内氏の説明から、松本城下町跡本町第4次調査地を集散地遺跡として位置付け直してみたい。

松本城下町跡本町第4次調査地から、2つの集散地遺跡の遺物の特徴を明らかにすることができる。第1点は、未使用製品が出土したこと、第2点は、製作工程の最終段階に施された工具跡が認められることである。このうち、製作工程の最終段階に施された工具跡が認められるという点は重要である。製作工程の最終段階に施された工具跡が認められるということは、モノを製品化するのは集散地で行なわれるのであって、生産地でおこなわれるのではないことがわかる。いいかえれば、物資を流通させるヒトは、集散地のヒトであって、生産地のヒトではないことがわかる。

b. 中世考古学の成果

中世考古学の成果は多くあるが、モノの流通圏研究、集落の移動論、居館・城の移動論などは、とりわけ重要な成果である。このような考古学の成果を取り込むことなしに、文献史学の発展はあり得ない。

c. 集散地遺跡、商人について

モノを流通させる中心的役割を担う者は商人であることは文献史学では共通の理解であるとおもわれる。しかし、考古学ではかならずしも共通の理解になっていない。そうであるならば、学融合のためにも、遺物として残る陶磁器・石製品・漆製品等の流通の復元研究をしなければならない。

d. モノにこだわって研究することの重要性について

道具帳、儀礼・贈答におけるモノ、財産目録、分散関係史料などの研究を文献史学として積極的にすすめる必要がある。

e. 中世考古学のための史料解説の作成について

学融合をすすめるためには、中世考古学研究者を意識した史料の解説を文献史学の側で行なう必要があると思われる。その場合、考古学研究者による遺物・遺構研究を念頭に置いた解説が必要である。その試みとして、中世考古学文献研究会作業部会では、上野国禅宗寺院長楽寺の僧義哲が永禄八年（一五六五）正月から九月まで書いた日記である『長楽寺永禄日記』の解説に取り組み、現時点では、建蓋・天目、山小屋、蔵屋、小屋・庭の項目の解説が出来上がっている。

f. 埋没遺跡の研究

文献資料では湊として確認できるにもかかわらず、現在の地形では湊とは理解しがたい地点がある。元禄地震によって隆起した安房府中などの湊がそれに当たる。

[参考文献]

- 佐々木銀弥「中世後期地域経済の形成と流通」永原慶二・佐々木潤之介編『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会、1988年（同『日本中世の流通と対外関係』吉川弘文館、1994年、所収）
- 竹内靖長「松本城下における砥石流通の一事例—松本城下町—松本城下町跡本町第4次発掘調査から—」『松本市史研究』9号、1999年
- 矢田俊文「中世水運と物資流通システム」『日本史研究』448号、1999年
- 矢田俊文「日本中世史研究と中世考古学」前川要編『中世総合資料学の提唱—中世考古学の現状と課題』新人物往来社、2003年
- 矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説—建蓋・天目」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年
- 矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説—山小屋」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年
- 片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説—蔵屋」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年
- 片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説—小屋・庭」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年

はじめに

報告者に与えられたテーマは、「中世考古学研究者が望む文献研究について」についてである。この課題と完全に一致しないかも知れないが、これに多少とも関わる報告者の考えを述べさせていただいた。

歴史を研究するなかで、それぞれの資料的な性格から、考古学・文献史学という枠組みが存在する。いうまでも無く、それぞれ独特の方法論が存在している。しかしそれは「学」としての体系の問題であり、歴史総体を認識するにあたって考古学・文献史学という区分が存在すると見る見解には賛同できない。報告者はとくに地域史を専攻している。この立場として、ありとあらゆる資料を手に、可能な限りの認識を得ようとしている。歴史学の存在を根底で支える地域住民への説明の責務を果たそうとすると、「考古学では何々です（≡文献での解釈は知りません）」という説明では、無責任の謗りを免れないという一面もある。

ただし、考古学・文献史学それぞれが持つ方法論を混同したうえでの議論は却って混乱を招いてしまうことは言うまでもない。そのためか、中世史における歴史叙述が多岐化するなかで、最近では「考古学独自の・・・」という言い方が多く聞かれる。では、考古学の独自性とは何か。そのことに関していくつかの問題点を抽出してみた。

1 中世考古学における検討の手法（1）流通論

ここでは、『岩波講座日本考古学3 生産と流通』（岩波書店 1986 年）と『考古学による日本歴史9 交易と交通』（雄山閣 1997 年）を素材に、「物の動き」を評価する考古学的手法について観察した。この2書は、「流通」や「交易」といった用語をタイトルとしたものであり、通史的な状況を追うには最適であると判断したためである。考古学的手法として「物の動き」を把握するベースとなるのは、「型式学的検討（同時代性の確認）＋分布論」である。2書ともに、個々の研究者レベルで厳密な定義付けを行っている論文もあるが、全体として一定の現象に対する共通理解があって議論しているとはいえず、千差万別な解釈がなされていた。これは、「物の動き」を表現する用語をどう選択する考古学的基準が未だ確立されていないことを示唆している。

2 中世考古学における検討の手法（2）集落論

ここでは、中世でよく使われる「集落」「村落」「都市」といった、「人の居住」に対する考古学的基準を見た。これは、手法的には「遺構論（同時代性の確認）＋型式学的検討（同）＋分布論（空間認識）」である。この手法によって導き出される「人の居住」形態をどう分類するかは、やはり個々の研究者それぞれの感性に拠る部分が大きい。いうまでもなく、考古学的に「人の居住」形態をどのような概念で把握するかは、「物の動き」の把握以上に難しい、それでも、何らかの基準を示していないと、なかなか深化は図りにくい。その意味で、基準を模索しようと努力している数少ない研究者の活動は、その妥当性如何にかかわらず最大限評価されなければならないと思う。

3 文献史学と考古学の「相剋」

ここでは、地域史レベルでの問題を中心に据え、素材として伊勢国大湊に対する評価を取り上げた。文献史学側から提示されている大湊の評価は、太平洋海運という大きな枠組みで見れば妥当なのであろうが、地域史レベルで見ていくと過大評価と言わざるを得ない。もしもこの評価に、文献史料の有無が大きく左右しているのであれば、総体としての歴史叙述に対しては大きな弊害を産むことにもな

る。最も危惧されるのは、そういった見解を基礎として考古学資料を解釈していくことであり、それは「位相の無い定説」を産み続けることになる。その部分を補完できる可能性を考古学は秘めているはずである。

おわりに

総体としての歴史学のなかで、文献史料や考古資料は、それを構成する一資料としては同じ位相にあることをまず強調したい。そのうえで、それぞれの手法を吟味した研究がなされる必要がある。考古学的手法を用いる文献史学者、文献史料を用いる考古学者であることこそが、総体としての歴史を叙述するに当たって必要なことと認識している。冒頭の、「考古学者が必要とする文献史学研究」とは、基本的には考古学者が実施すべきものと個人的には考えている。

その際に、とくに考古学の側で重要なのは、立論の基礎となる概念の整理を通史的に行うことと考える。もしも、考古学的に観察される「物の移動」が、分析の結果は同じ現象と見なされるのに、弥生時代以前では「物々交換」とされ、中近世では「流通」とされるような状況が生じているとすれば、学問的には大きな問題であろう。考古学も、研究の個別分散化の進展で、対象とする時代以外の議論には疎遠となりがちであるが、それは何とかしなければならない。仕事上「好きな時代の遺跡」ばかり選べるはずのない（＝どんな時代にも首を突っ込まざるを得ない）埋蔵文化財行政に従事する研究者は、その深刻さを最もよく理解していると思われる。だからこそ、こういった問題に対し積極的に発言すべきだと思う。

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点を検討する視点（報告要旨）

矢田俊文(新潟大学人文学部)

はじめに

中世考古学、文献史学（日本中世史）、歴史地理学それぞれがもつ特質をさらに発展させることがまず重要である。その上で、学融合を目指す必要がある。

1. 学融合の試みについて

a 学融合を試みる必要のある遺跡

中世考古学と文献史学（日本中世史）の学融合を目ざすといってもすべてのことがらについて行なうことは現実的ではない。まず、墓地、経塚、居館・城などで、学融合の試みをする必要がある。

墓地遺跡では文字が書かれた遺物が出土する場合がある。文字が書かれていれば書風の検討によっておおよその年代がわかる可能性がある。また、年号が書かれた卒塔婆が出土する場合もある。新潟県白根市の浦廻遺跡では元応二年（1320）と書かれた卒塔婆が出土した。この遺跡は石塔・陶磁器が出土していないが多くの卒塔婆が出土した興味深い遺跡である。一つの基準となる遺跡であろう。このような遺跡は、考古学・文献史学双方の検討がなされるべき遺跡であると考ええる。

経塚には文字が書かれた経典が納められる。書風が検討できる遺跡であるから、これも考古学・文献史学双方の検討がなされるべき遺跡であろう。

しかし、経塚の研究は文献史学の側はあまり熱心でないように思われる。一方、考古学では経塚の研究は盛んである。けれども、考古学の側の経塚についての関心はもっぱら外容器にあるようである。そのため、外容器ほどには礫石経などに興味を示さないようである。

礫石経に注目すると、外容器の研究からはわからない経塚の歴史像が浮かび上がって来るのではな

だろうか。礫石経に注目すると、12 世紀後半を中心とした時期に石に経典を書写することが流行ったようである。

12 世紀前半から 13 世紀初頭の太物浦遺跡（兵庫県尼崎市）からは、経典が書写された約 1100 点の扁平な石が出土している。平清盛は太物浦遺跡とそれほど離れていない大輪田の泊（神戸市）の修築の際に一切経を書いた石を沈めて島を作らせている（平家物語）。平泉では、「如法経の石をば、結縁に持たせ給うべし」（原文カタカナ）と書かれた木簡が出土している。

12 世紀後半～13 世紀前半の広隆寺弁天島経塚（京都市）は経塚を作るために島が作られており、多量の礫石経が出土している。寺ノ上経塚（岩手県前沢町）では、12 世紀後半の渥美の壺の上に 10 個体以上の経典が書写されているかわらけが載せられる状態で出土している。このような事例をみると、12 世紀後半を中心とした時期に石に経典を書写することが流行ったと考えられるのではないだろうか。経塚は経典が書写された紙・石・かわらけを検討の中心に据えなければ解明できない遺跡である。

b 学融合のための研究方法について

学融合のためには、遺跡の報告書が作成される以前でのさまざまな分野の検討会が重要である。今回はその試みである。よって、成果を持ち寄って披露し、そこでえた情報を持ち帰る場所ではない。それぞれの学問がもつ長所を理解しあう場にしたい。中世考古学でも文献史学でもない学問が学融合ではなく、どちらかに学問的基盤をもち、その学問を発展させる研究をしながらも、他分野の学問の特徴を理解しその成果を吸収できる能力をみにつけることによって、自らの分野の研究をさらに発展させる。そういう研究会にしたい。

2. 奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点について

a 中世考古学・文献史学・歴史地理学それぞれの成果がある地点

下町・坊城遺跡 D 地点のすぐ近くには江上館（国史跡）・下町・坊城遺跡 A・B・C 地点があり発掘が行なわれ、考古学的な検討が行なわれている遺跡である。さらに、文献史学では、下町・坊城遺跡 D 地点は奥山荘中条にある遺跡で、中条家文書等があることから、文献の研究成果もある地点である。さらに、奥山荘波月条絵図があることから、歴史地理学の成果もある地点である。

b 奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点は茂連屋敷か

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点は奥山荘波月条絵図に描かれている茂連屋敷なのかどうか検討する必要がある。

c 絵図の描かれ方について

もし、奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点が茂連屋敷であるとするならば、波月条絵図の描かれ方の検討が必要である。

d 京都系づくねのかわらけと日本海側に所領をもつ地頭との関連について

奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点では、かわらけは京都系づくねのかわらけしか出土しない。奥山荘の地頭はなぜ鎌倉の影響は薄いのかについて、検討する必要がある。

e 11・12 世紀の遺構・遺物と城氏の関連について

奥山荘下町・坊城遺跡は 11・12 世紀代の居住区が存在する。奥山荘には地頭が補任される以前から領主の存在が確認できる。白河荘（新潟県笹神村・安田町・水原町等）を本拠としていた城氏の一族は、建仁元年（1201）4 月、城長茂の甥資盛と板額が鳥坂山（新潟県中条町）に蜂起しているので（吾妻鏡）、奥山荘にも拠点を持っていたことがわかる。また、阿賀野川水運により縄文時代より越後と深い関連をもつ会津地域にも城氏と関連する遺跡がある。12 世紀第 2 四半期を中心とする陣が峯遺

跡（福島県会津坂下町）も城氏に関連する居館であるとの伝承がある遺跡である。阿賀野川の最上流に位置する恵日寺遺跡（福島県会津磐梯町）も城氏と関連する伝承をもつ。恵日寺には中世の境内図が存在する。境内図には橋が描かれ、阿賀野川水運を恵日寺が掌握していたことがわかる。奥山荘下町・坊城遺跡は地頭の支配の問題だけではなく、奥山荘を越えた城氏の支配の問題の解明も迫られる。

〔参考文献〕

- 『笹神村史 資料編一 原始・古代・中世』笹神村、2003 年
『浦廻遺跡』新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団、2003 年
『福原京とその時代』神戸市教育委員会、神戸市埋蔵文化財センター、1996 年
入間田宣夫『都市平泉の遺産』山川出版社、2003 年
百瀬正恒「経塚出土陶磁器の特異性—関西の主要遺跡の分析から—」『日本貿易陶磁研究会 第 24 回研究集会資料集「経塚と陶磁器—その地域性」』2003 年
及川真紀「東北地方の経塚と陶磁器」『日本貿易陶磁研究会 第 24 回研究集会資料集「経塚と陶磁器—その地域性」』2003 年

奥山荘政所条遺跡群の展開—下町・坊城遺跡 D 地点の新知見を加えて—（報告要旨）

水澤幸一（新潟県中条町教育委員会主査）

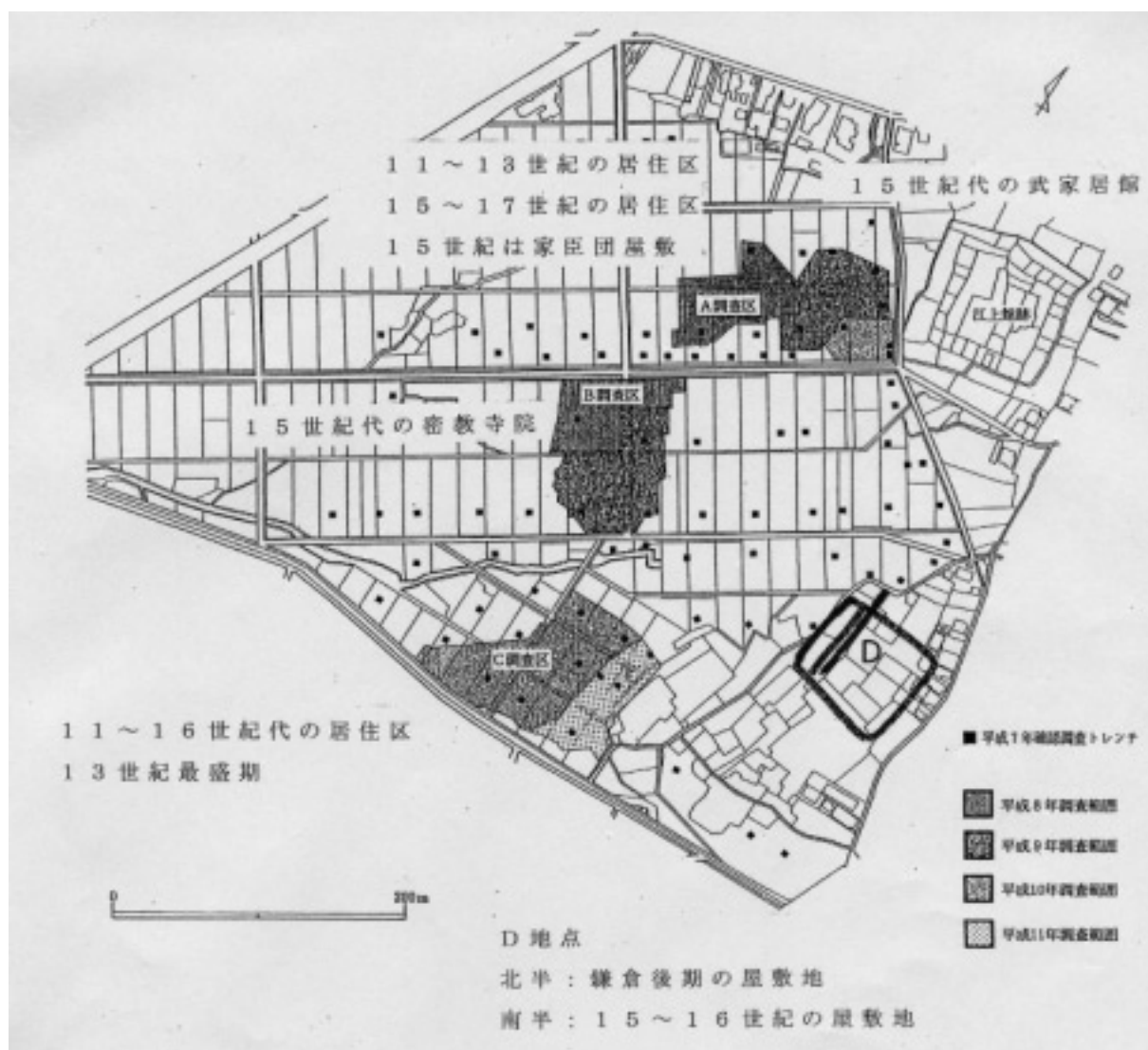
1 政所条遺跡群の概要

江上館は 15 世紀の武家居館であり、中条本家が居住者と考えられる。下町坊城 A 地点は、西側に 11 世紀頃からのものがみられ、15 世紀まで居住空間であった。15 世紀段階では、石組側の井戸がみられ、家臣団屋敷であったと考えられる。同 B 地点は、護摩を焚いた痕跡が認められ、15 世紀段階に密教寺院が存在していたことが判明している。同 C 地点は、12～16 世紀まで居住空間であった。13 世紀代のかかわりが大量に出土しており、D 地点が見つかるまでは C 地点が当時の中心地点と考えていた。発掘調査は、全体で平成 3 年～11 年まで行われ、現在は江上館が史跡公園としてオープンしている。それまでの調査成果は、『下町・坊城遺跡 V』（2001）にまとめているが、平成 15 年度に D 地点の鎌倉時代屋敷がみつかったため、改めて遺跡群の位置付けを考え直さねばならないこととなった。

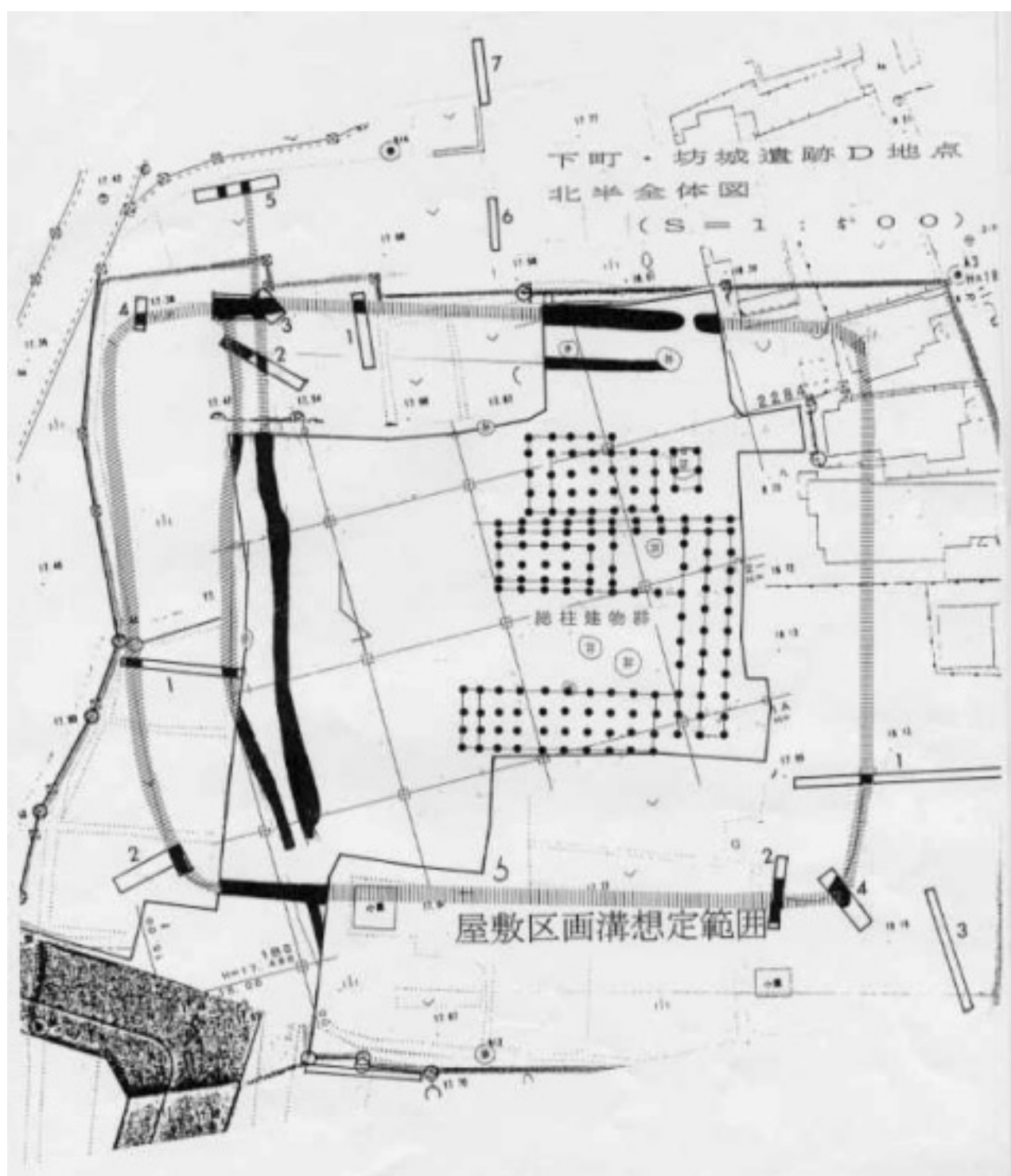
2 下町・坊城 D 地点北半（坊城館）の概要

平成 15 年度の発掘調査で、鎌倉時代の屋敷跡があたり、9 月～10 月の追加確認調査で区画溝の範囲を追跡したところ、南北 60m 強で東西 80m 弱の屋敷地であったことが判明した。ただし西辺は、数条の南北溝が存在しており、屋敷区画が動いている可能性がある。建物は東寄りに集中していて、同じ場所に何度も建て直されており、4～5 つの群を構成している。これらのほとんどが総柱建物であり、鎌倉後期のものである。したがって、波月条近傍絵図に描かれた領主屋敷に相当する建物と考えられる。詳細な遺構変遷については、来年度刊行予定の報告書で検討することとしたい。なお西側には遺構が少なく、広場的な空間であったと考えられる。

井戸は 8 基以上見つかったが、その中に石組み側を持つ井戸がある。北陸では基本的に 15 世紀代に普及し始めるが、ここでは 14 世紀前半代に現れていることが注目される。金沢でも近年、鎌倉以前に遡る例（大桑ジョウデン遺跡）がみつかり、古い時期から部分的な技術伝播があった



奥山荘政所条遺跡群



と考えられる。なお越後では、石組側井戸自体が非常に少なく、政所条遺跡群以外では、上越市域のいくつかの遺跡及び板倉町仲田遺跡が挙げられる程度である。

遺物は、館の北側を中心につくね成形のかわらけが大量に出土しており、全体の8割以上に及ぶと考えられる。青磁・白磁も多数出土しており、珠洲陶の他に笹神陶も出土している。長崎産の石鍋や東濃系山茶碗も数点出土しており、これは北東日本海沿岸地域の領主階級の遺跡から共通して出土する遺物といえる。

以上の発掘状況から、本屋敷は鎌倉後期の地頭屋敷ではないかと考えている。

3 遺跡群の変遷

D地点に鎌倉時代の屋敷が発見されたことによる拙稿（『城館と荘園・奥山荘の景観』『戦国時代の考古学』2003）の大きな訂正点は、「大道」の問題である。以前は大道を、江上館の北側から東へ延び、鳥坂城へと至る旧彦五郎街道に比定した。しかし、江上館の南方に鎌倉期の屋敷が見つかったことにより、その段階では石原館から南西方へ折れるルートが、大道であった可能性が高まったものと考えている。それはさらに、中条家が最も重要視した寺院である大輪寺の所在地問題にもかかわってくる。文献には大道の北に大輪寺が所在すると記されており、大道を上記のとおりにすると大輪寺の位置が現在の位置から動いていないという想定が可能となる。そしてそのように考えたとき、境内に多数現存している南北朝期を中心とした石造物群の存在を説明することが可能となろう。

以下、政所条遺跡群の変遷を説明する。

遺跡変遷2 11～12世紀

A地点では、川の周囲に小規模な建物が点在する。C地点では、北方に溝があり、その南方に建物が認められる。本来、溝の北方に中心があったと思われるが、近世の川によって壊されている。D地点でも、北方で遺物の出土が定量みられるようになる（次期も同じ）。

遺跡変遷3 13世紀前半

A地点は、前段階に同じ。B地点は、川の南北に小規模な建物群。北方には、道路と思われる並行溝が認められる。C地点では、川の東西に建物が多数建ち並び始める。特に西方で縦長の南北棟が並び、溝で画されているのが注目できる。また、埋没した川の北方の東方に溝が穿たれ、建物を復原できなかったが、遺物の分布状況から溝の西方に居住域が広がっていた可能性が高い。

遺跡変遷4 13世紀後半～14世紀前半

江上館は、後に館となる地点の中位に東西に川があり、南北に建物が展開している。A地点は、東方に溝に画された空間が認められ、調査区全域に建物が広がる。青磁劃花紋が鎬蓮弁紋より多いことから、部分的に前代に含まれるものがあるものと思われる。B地点は、ほとんど停滞している。C地点は、旧川の西方に遺跡が展開する。つくね成形土器が多数川跡から出土する。川の合流地点を押さえた立地で、中世前半期に最盛期を迎える。D地点は、溝に囲まれた屋敷地（坊城館）が営まれ、大型の総柱建物が複数配置される。北方を中心に大量のつくね成形土器が廃棄されている。最終段階では石組側をもつ井戸が伴う。地頭屋敷と考えられる。

遺跡変遷5 14世紀後半～15世紀初頭

江上館は、いまだ館の体をなしていない。A地点は、川がほとんど埋没し低地となっており、その東西に屋敷地が認められる。B地点も川はほとんど埋没し、その南方にいくつかの建物が建てられている。C地点は、やや北方に建物が集中するが、旧川の南方・東方にも居住域が広がる。D地点の様相は検討中。

遺跡変遷 6 15 世紀前葉（瀬戸後Ⅲ期）

江上館は、館の原形ができあがった時期である。西よりに以後館の廃絶時まで維持される水溜と南北方向の区画溝が穿たれる。これはおそらく、応永の大乱（1426 年）後の居館整備を意味するのであろう。したがって、本期以後この地点が中条の中心となる。A 地点には、溝に画された 30m×40m 程の屋敷地が 2 区画設けられる。館と方位は一致していないが、その後も一致することはないので、この地点にはそのような地割りがあったと考えられる。B 地点は、区画溝に囲まれた屋敷地が認められる。南方には、溝に囲まれた小規模な堂がつけられる。C 地点は、前代の居住域を踏襲して 5 箇所ほどのまとまりをなしている。東端に南北に道が走る。D 地点は、北方の屋敷地が廃絶し、その南方に溝に区画された屋敷地が営まれるようになる。

遺跡変遷 7 15 世紀中葉（瀬戸後Ⅳ古）

江上館に確実に堀・土塁が伴い、それが本期の内に大規模に拡張され、最終的な規模となっている。最盛期には、郭内が堀によって南北に仕切られ、南方が晴の空間、北方が日常空間と使い分けられている。現在、江上館は、この時点の姿で史跡整備を行っている。A 地点では、4 箇所以上の屋敷地が認められ、位置関係から上級家臣団の屋敷地と思われる。B 地点は、南方の 50m 四方の屋敷地に建物が集中する。出土遺物から、密教寺院と考えられる。館の整備と軌を一にすることから、館と密接な関係にある寺院と考えられる。また、北方西側に道路が認められる。C・D 地点は、前代の流れの内にある。

遺跡変遷 8 15 世紀後葉（瀬戸後Ⅳ新）

江上館は、最終段階である。建物は、いくらか残っていた程度となる。そして、本期を最後に、本拠は鳥坂の地へ移る。A 地点は、前代の屋敷割りを踏襲している。B 地点は、屋敷の区画が変わる。寺院は一部を残して、館とともに移ったと考えられる。C 地点は、居住域が南方に移る。細かい屋敷割りが認められる。特に南東隅の重複が激しい。

遺跡変遷 9 15 世紀末～16 世紀（瀬戸大窯）

B 地点は、小規模な建物が残る。ただし北方には、墓が認められ、16 世紀後半の紀年銘を記す墨書石が 8 点出土している。C 地点は、前代の屋敷割りを踏襲しており、館の移動後もあまり影響を受けなかったようである。D 地点は、最も南方に石組側をもつ井戸が認められる。

遺跡変遷 10 17 世紀

中条家の移封後の江戸時代になって、A 地点の東方にのみ、屋敷地が復活する。その後は、一帯が田地となっていったものと思われる。

以上のような変遷から、南方の坊城館より北方の江上館へと 15 世紀前葉に本拠地を移したことがわかるが、そのねらいは有力庶子家である羽黒家を牽制するとともに、もう一方の有力庶子家である内水面を押さえる砂丘側の領主築地家との連携強化という直接的な眼目が窺われ、きたるべき戦国期居城の鳥坂城への胎動を準備したものと評価できよう。

4 塩津潟の南北の遺跡群

塩津潟北方の政所条遺跡群に対し、潟南方の住吉遺跡・二ツ割遺跡（共に未報告）では、貿易陶磁が多数出土し、二ツ割ではかわらけも大量に出土した。ただ、政所条遺跡群で出土するかわらけがてづくね成形中心であるのに対し、二ツ割遺跡では 60%強がロクロ成形底部糸切、次いで底部篋切が 40%弱というコントラストは著しい。また、加地庄以南では底部篋切が主体であると考えられているのに対しても、糸切りの比率の高さは異常である。またこの底部糸切りかわらけは、鎌倉の当該期のかわらけに近いものが認められ、二ツ割遺跡は他の遺跡に比して鎌倉の影響が大きいと考えられよう。

このように、同時期の近接した地域であるにも関わらず、かわらけに違いが認められるのは、興味深いところである。

なお私見では、二ツ割遺跡は加地荘古河条の流通拠点にあたり、かわらけが多量に消費される都市的な場であったと考えている。そしてそれは、「かの古河条は、往古より後閑の条である」という地頭の申し立てが謂れ有ることとして荘園領主側の検注が却下されていること（『中条町史 80』）からも裏付けされよう。すなわち、「後閑」を「交閑」（1 往来、交通、2 売り買いすること『国語大辞典』）と理解することによって、潟へ流入する河口の潟端で交通・売買を差配する流通拠点遺跡という位置付けが可能ではないかと思われるのである。さらに興味深いことは、その古河条の地頭道信が中条家の茂連に嫁しているという事実であり、それは中条家と加地家が塩津潟の南北の流通を押さえるという戦略的提携に基づくものであったと考えるのは、いささか深読みすぎるであろうか。

5 報告後の討論から

高橋氏からは、北陸の領主が鎌倉ばかりではなく、京都との関係をも持っていたという示唆をいただいた。また、荘園の入口としての金山の位置づけについても、指摘があった。

青山氏からは、政所条遺跡群の立地が扇端にあたることから、水が湧き出すという湧水地点であったことが遺跡の存在に際して大きな部分を占めていたという指摘をうけた。

共々今後に生かしていきたい。

歴史地理学からみた波月条絵図とその周辺（報告要旨）

青山宏夫（国立歴史民俗博物館）

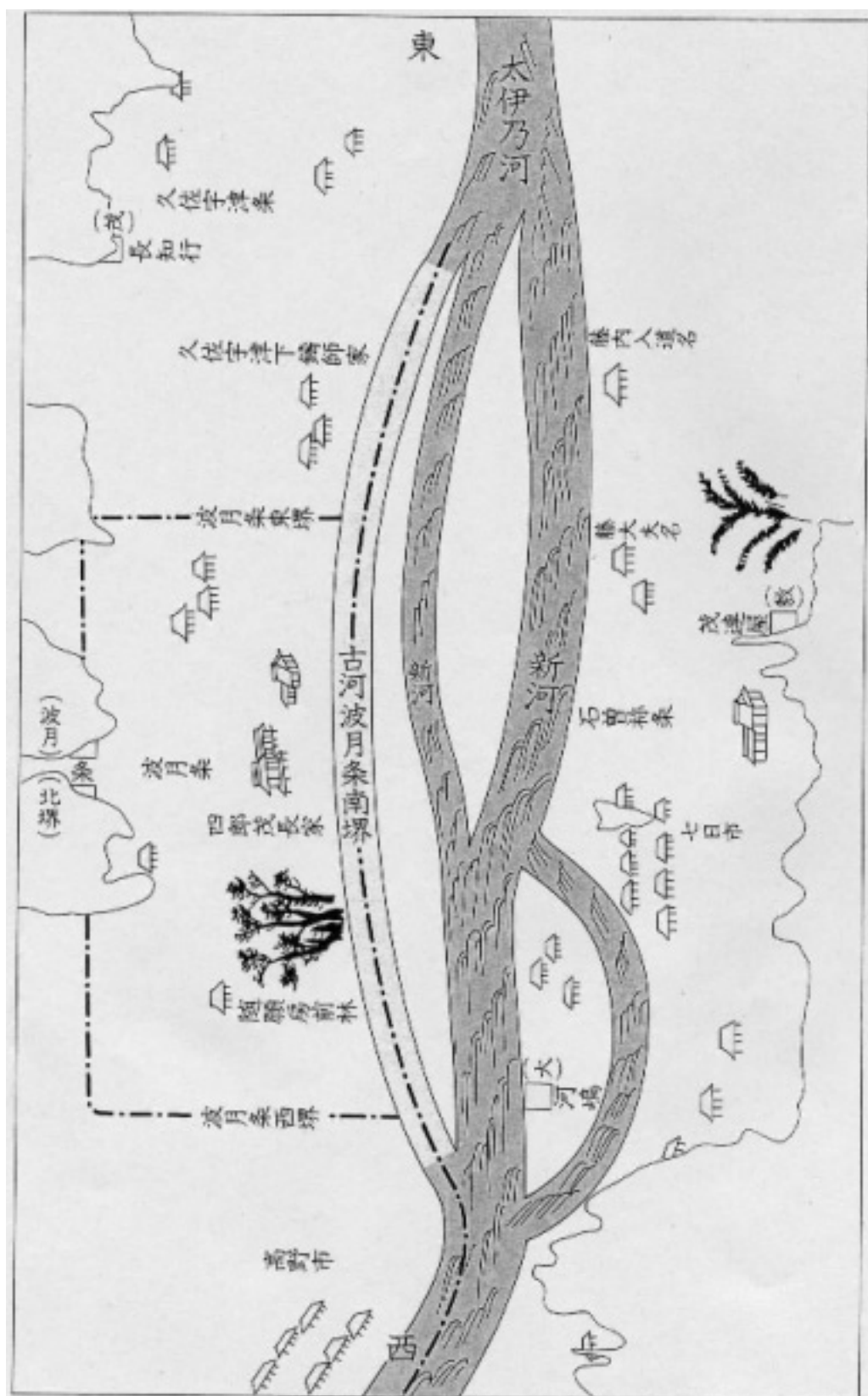
本報告では、最近発掘された奥山荘下町坊城遺跡D地点（以下、D地点とする）と波月条絵図との関連、とりわけ「茂連屋敷」との関連について検討する。

まず、この絵図における表現の特徴を指摘したうえで、現地比定に関する既往の研究成果を整理した。それによれば、この絵図の現地比定に関しては、いくつかに分流する「太伊乃河」（胎内川）の河道が推定されているにすぎず、点として確定された地物は皆無であるといわざるをえない。そうしたなかで、この絵図と同時代とされるD地点の発見は、波月条絵図や当時の奥山荘の景観の研究にとって、きわめて重要な発見となることはいままでもない。

しかし、D地点が絵図に描かれた「茂連屋敷」そのものであるか否かについては、結論を急ぐ必要はあるまい。現段階では、そう考えた場合の問題点をあえて指摘しておくことも意義があるだろう。

さて、これまでの研究によれば、この絵図の成立事情からみて、描かれた地物は河川にきわめて近い位置にあるものと考えられる。事実、たとえば、「七日市」については、水運との関係や河原への立地が想定できるほどに、河川の近くに描かれている。同様に、「茂連屋敷」も河川の近くに立地していたと考えられているが、その場合「茂連屋敷」と「七日市」の関連を考慮すればなおさらであろう。このようにみてくると、推定河道から約1km近く離れたD地点は、絵図の表現と成立事情からみれば、かぎり、「茂連屋敷」とするにはなお検討の余地があるように思う。

さらに、河道からの方向も問題になる。D地点は、現地比定されている河道、具体的には川中にある「□河嶋」（字ミロクイン付近）の南方に位置する。一方、「茂連屋敷」はその東南方に描かれている。絵図に描かれた位置関係からみれば、D地点を「茂連屋敷」と同一地点と考えるには無理があるといわなければならない。



奥山莊波月条繪圖（トレース図）

『中世荘園繪圖大成』（河出書房新社、1997）より

では、もしD地点が波月条絵図に描かれるとしたら、どこに描かれるであろうか。それは、いうまでもなく「□河嶋」の南方すなわち下方にほかならない。ところが、波月条絵図をよくみると、「□河嶋」の下方から左下方にかけては破損している。当初、絵図のこの部分に何が描かれていたか、あるいは描かれていないかは不明であるが、破損部分の周辺には数軒の在家（残画も含む）が認められ、ここには比較的多くの図像が配置されていたことが想定される。とすれば、こうした在家等の存在から考えて、その付近に地頭と同等のクラスの屋敷があった可能性も出てくる。

一方、絵図に描かれた位置関係のみからみた場合、「茂連屋敷」の位置としては、現在の中条町役場付近が有力となる。いま、1975年のカラー空中写真をみると、造成中の中条町役場用地の東に接して、帯状耕地が方形に取り囲んでいる地割があることに気づく。現在のところ、この付近には遺構は確認されていないが、中条町役場の西側では絵図と同時代にまで遡りうる遺物が検出されていることから（中条町教育委員会の水澤幸一氏のご教示による）、一つの可能性として指摘したい。なお、前稿（1999）において、「茂連屋敷」の東方に描かれた柳の大木を字差柳に比定したが、これと中条町役場付近との位置関係は絵図の表現と矛盾しない。また、河道との位置関係も同様である。

最後に、D地点の地理的な位置について付言しておく。D地点は、胎内川の形成する扇状地の扇端に位置し、その湧泉を源とする河川（坊城川）が流れ出して、柴橋へと向かっている。中世では、その先は塩津潟に注いでいた。とすれば、塩津潟の交通路としての意義に注目すると、この川のもつ交通路としての意義も小さくないことに気づく。このようにみえてくると、D地点は南に開かれた地点であったと考えられる。この点で、胎内川に近く、「七日市」とも関連しつつ北に開かれている「茂連屋敷」の地点とは、性格を異にしているようにもみえる。

ところで、坊城川をこのようにみると、柴橋の重要性がいつそう注目される。なぜなら、柴橋は、建治分与の際に唯一分割された村だからである。あえて一つの村が分割支配されたのは、その地点が両者にとって重要と認識されていたからにほかなるまい。前稿（2003）で指摘したように、柴橋は「しハ、しのわたとのをゝやなき」によって、茂連と義基とのあいだで上柴橋と「下柴橋」に分割されて支配されているのである。

[参考文献]

- 青山宏夫(1997) 奥山荘波月条近傍絵図、小山靖憲他編『中世荘園絵図大成』河出書房新社
青山宏夫(1999) 絵図が語る奥山荘の景観、田村裕・坂井秀弥編『中世の越後と佐渡』高志書院
青山宏夫(2003) 奥山荘の庄境について、石原潤編『農村空間の研究 上』大明堂

文献史料からみた奥山荘中条の政治・経済ネットワーク

－日本海交通と北越後の内水面交通に留意して－（報告要旨）

高橋一樹（国立歴史民俗博物館）

奥山荘の荘園領主は摂関家であり、11世紀後半には中世荘園として立荘されたものと推測される。鎌倉幕府の成立時には、三浦氏の一族である和田氏の庶流が地頭職を獲得し、戦国期まで領主として存続した。奥山荘に關係する文献史料は、この和田氏が伝えたものが多数を占め、荘園領主側の史料数を圧倒している。しかし、和田氏が上杉氏に従属して織豊期に会津、そして米沢へ移ったため、和田氏の史料は奥山荘の現地にはない。現在は米沢市上杉博物館および山形大学、そして東京の個人の

もとで保管されている。

奥山荘の研究はそうした中世武士団の文献史料をもちいた研究が多く、考古学の資料は皆無に近かった。かつて井上鋭夫氏は荘園の復元的研究で文献以外の資料にも目を向けられ、積極的にフィールドワークを行ったが、考古学的な成果はほとんど組み込まれていない。具体的な発掘成果をもとに考古学の立場から奥山荘の研究が著しく進展したのは、ここ十数年前からであり、水澤幸一氏によるところがきわめて大きい。つまり、奥山荘の研究は従来の文献史料を基軸としたものに、新しい考古学の成果をいかに組み込んでいくかが問われているのである。

さて、今回の検討対象である下町・坊城遺跡に直接関わる文献史料は、残念ながら1点も存在しない。しかし、下町・坊城遺跡が発見されたことによって、既知の史料を読み直し、同遺跡の成立や存続に関わるような史料を挙げることはできる。

まず地理的な問題として、奥山荘と加地荘の境界線が設定された塩津潟（紫雲寺潟）との関係がある。吾妻鏡によると、この潟の東湖岸に接する願文山において、承久の乱の最初に京都方の有力武将が挙兵し、鎌倉から進軍してきた軍勢に敗北したとある。また、地頭和田氏の伝えた史料をみても、願文山の足下で塩津潟に面している奥山荘の金山郷は、その領有をめぐり、ほぼ中世を通じて相論が展開している。これらの現象を理解するためには、北越後の内水面交通の動きを考えなければならない。

中世の北越後（新潟から出羽国境）では、砂丘の内側に多くの河川や潟湖が広がり、それを利用した交通体系が発達していたと考えられる。現在の新潟市に比定される国津の蒲原津、あるいは沼垂湊から、この河川と潟湖の内水面を使って塩津潟に到達することができ、金山郷は奥山荘におけるその窓口、領主として人やモノの動きをどうしても押さえておかなければならないポイントなのである。最近の発掘で発見された古代の木簡でも、国司（四等官制の最下位にあたる少目）の館が塩津潟に接して存在していたことが推測されており、塩津潟の政治的・経済的な重要性が確かめられている。同じく近年の発掘成果により、塩津潟はほぼ9～10世紀にかけて形成されたことがわかっており、古代から中世にかけて、この塩津潟を含み込んだ内水面の交通体系が発達し、それをめぐる支配者層の争いが中世を通じて文献史料にあらわれたと考えることができる。

下町・坊城遺跡は塩津潟に流れ込む河川に面しており、前述のような内水面を利用した交通体系と密接に関わっている。そこで、同遺跡が11世紀半ばから存続することと関わって注目されるのが、越後城氏の系図にみられる「浜」の地名である。京都の摂関家周辺と直接に結びついた軍事貴族である越後城氏は、遅くとも11世紀後半には阿賀野川の流域から北方に独自の勢力圏を築き（同じ阿賀野川流域の会津地域も勢力圏に入る）、越後国衙と対立関係にあったと考えられるが、その一族の者に「浜」姓を名乗る人物がいるのである。この「浜」は、15世紀初めの「花前介所領注文」に出てくる蒲原郡の「浜郷」と考えられる。花前介は在庁官人で、越後国衙の税所を掌握しており、その給田が浜郷に設定されていたのである。また、『鹿苑日録』によると、浜郷は越後守護上杉氏の被官を代官として、15世紀になっても京都の禅宗寺院へ年貢を納入していることがわかる。

中世の蒲原郡内に立地した浜郷の比定地は確定できないが、その文字通り日本海に面した地点で、おそらくは現在の新潟市付近に推定できよう。同様に加地荘も沼垂湊に倉敷地を設定していたと考えられる（備後国大田荘と瀬戸内海に面した倉敷地との関係を想起すべき）。つまり越後城氏は、白河荘や奥山荘といった荘園だけでなく、塩津潟などの潟湖や河川を通じて蒲原津と往来できる内水面交通にもとづいて、浜郷という日本海に面した場所に出口を持ち、この点でも在庁官人との競合関係にあったと考えられるのである。

下町・坊城遺跡が11世紀から成立するのは、このような越後城氏のと内水面交通の問題を抜きには考えられない。そして12世紀末の内乱で越後城氏が没落し、地頭職を獲得した和田氏も、塩津潟から河川を介して少し離れた場所に、いわゆる威信財をはじめとする物資を蓄え、集散を行えるような館を作ったのではないか。

文献史料にもとづく奥山荘の研究は、1980年代から新たな段階をむかえ、奥山荘の支配や在地勢力と鎌倉権力との密接な関係を追究してきた。このこと自体は大きな成果であるが、他方で現存する文献史料の内容に制約されて、京都との関係が等閑視されてきたのではないか。すでに田村裕氏は、このような反省から鎌倉期における和田氏と三浦氏一族とのつながりを示唆している。下町・坊城遺跡から出土した「かわらけ」の製法が京都系の手づくねで一貫している事実もふまえると、文献史料の再検討が必要なのではないか。

その際、奥山荘の年貢運上が地頭請となっても「京定」、つまり京都の枡を計量基準としていたり、13世紀後半の奥山荘内の所領相論で中条の和田茂連がながらく「在京」していた事実（これは京都御所護衛の大番役で在京していたとみる見解があるが、その根拠はなく私はとらない）なども、留意されてしかるべきである。

さらに、下町・坊城遺跡の立地する奥山荘中条の在地勢力（のちの中条氏）は、実際には京都と鎌倉の双方に繋がる顔を持っており、宝治合戦以後もかろうじて存続した三浦介やその一族と関係を維持しながら、幕府の滅亡、南北朝の内乱にいたったと考えるべき文献史料は少なくない（たとえば、鎌倉最末期の大塔宮令旨と関東御教書、ほぼ同時期の三浦和田氏文書目録にみえる奥山荘の「一庄勘定使」「多々良次郎入道々願」の存在、『鎌倉年代記裏書』にみえる北条時村暗殺事件の実行犯和田茂明の逮捕、三浦介入道への預け置きと茂明の逃亡、その後の三浦介と茂明子孫との密接な関係など）。

奥山荘とくに下町・坊城遺跡の場合は、文献史料を基軸とした歴史像に、考古学的視点を取り入れて再構成していくケースにあたる。しかし、ほかの事例では逆の方法やさらに異なる場合もありうるだろう。そういった様々な場合のケーススタディを積み重ねていくことが必要である。また、歴史資料における階層性の観点からすると、下町・坊城遺跡は奥山荘の研究の中核に位置してきた武士団の文献史料とほぼ重なっている。このような資料間の関係性を十分に考慮しながら、今後の研究を進める必要がある。

討論：奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点の検討と学融合

1. 奥山荘下町・坊城遺跡 D 地点の検討

まず水沢氏から、波月条絵図に描かれた茂連屋敷について、下町・坊城遺跡 D 地点は政所条あたりを考えているので、茂連屋敷そのものではないと考えるとの補足があった。

青山氏からは、波月条絵図は西南部分が消えている。絵図で政所条があるとすれば西南の部分にあるのではないかと、との発言があった。また、水沢氏からは赤川村は政所条に含まれる。下町・坊城遺跡は政所条に含まれていると考えていいのではないかと、との発言があった。

下町・坊城遺跡 D 地点の時期についての質問に対し、水沢氏からは、13世紀後半～14世紀のあたりに中心が来ると思う、との回答があった。

奥山荘の荘園経営のイメージについての質問に対し、高橋氏から、和田氏が入ってくる以前から、摂関家とのつながりがあり、そのつながりのなかに和田氏が介入して掌握しているにすぎない。あく

まで京とのつながりが前提となっている、と答えた。

高橋修氏（茨城大・文献史学）からは、武士の拠点となる屋敷、地域社会の拠点となる館の問題がある。少し広い領域を設定して館の問題を考えることが必要である。武蔵国熊谷氏の居館は、のちに鎌倉大道となる大道との関わりがある。そこでは宿町を含んでいて、開放されている空間を統治する領主としての役目が考えられる、との意見が出された。

本研究会資料集に総柱建物群としているが、たくさんある柱の中からこれだけを採用した根拠はなにか、他の考え方はないのかとの質問に対して、総柱建物群については、柱穴も大きく、間隔も一定していて誰が扱っても同じ図になる、と答えた。

2. 学融合をめぐる

青山氏は、波月条絵図の示す範囲は極めて狭い。狭くなるほど具体的に、いろいろな分野、角度からものを見ていく必要がある。多方面から検討していく必要がある、と発言した。

高橋氏は、文献史料が不足していて、考古学の知見が勝っている場合もある。また、反対の場合もある。様々なケーススタディを積み重ねていった上で、方法論をみがいていく必要があろう、と発言した。

水沢氏は、考古学は編年研究を続けていかなければならない。文献研究を考古学に取り入れるには考古学も文献を勉強する必要がある。文献側の話を聞けて今回はよい勉強になった、と発言した。

伊藤氏は、学融合の解釈とは、文献なり考古なりの研鑽をつむことがベースとなる。モノが出てくると、流通は分けて考えるべきである。モノが出土したのは、そこがモノの最終地点と考えるべきで、流通はその後から考えるべきであろう。京都系の技法については、伝播とはなんなのかを考えなければならない。伊勢あたりで出土するものと下町・坊城遺跡の京都系かわらけは似ている。人によって京都系の概念が違うので、まず認識の問題を考える必要がある、との発言があった。

（総合討論；文責・事務局）

考古学のための上野国長楽寺永祿日記解説 建盞・天目

矢田俊文

永祿8年（1565）1月13日

厩橋へ瑞子ヲ年甫之礼ニ遣ス、八木沼夫馬、中間弥藤三郎、暁、シタメ、ヲサセ、酒ヲケンサンニテ、二ノマセツル、弥藤三郎メニモ、一ノマス、

永祿8年（1565）1月22日

酒ヲカンシテ、テンモク一進返也、

永祿8年（1565）1月26日

カン酒、当盞五之上、天目ニ一、カンシテ茶トテ出進返也、

永祿8年（1565）3月12日

酒ヲテンモクニテ二進

【解説】厩橋（前橋市）へ新年の挨拶のために使いとして赴く長楽寺の僧瑞と中間弥藤三郎に「ケンサン」で酒を飲ませたことが記される。「ケンサン」は、建盞のことであろう。右の史料から、建盞を使って酒を飲んでいただことがわかる。また、天目で酒を飲んでいることがわかる。さらに、1月26日条には、天目で茶といって飲んでいる（細谷昌弘『『日記』にみる飲食器・贈答器』『長楽寺永禄日記』史料纂集、続郡書類従完成会、2003年）。永禄日記の建盞・天目の記事はこの4例のみで、いずれも茶ではなく酒を飲んでいる。天目はお茶を飲むモノとは知りながら、お酒を飲んでいるのである。上野国の禅宗寺院では、建盞・天目は酒を飲む時に使うモノであった。建盞・天目はお茶を飲む時に使うモノとは限らないのである。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山小屋

矢田俊文

永禄8年（1565）1月4日

無程、山へノホリ、小屋ニテ茶ヲノミ、

永禄8年（1565）1月9日

西（両カ）様共ニ、山之小屋ヨリ、マイラスヘキト、返来シテ、カヘシツル、

永禄8年（1565）3月18日

金山へ一札、同金筑へ一書越ス、存書記留守ナル間ト、カス、山之小屋ニ置カヘル也、

永禄8年（1565）3月25日

山之小屋へノホリ、外居一ツイニ入、坂中へ抹茶ヲソヘマイラス、（中略）山之小屋ニテメシヲ少用、非時ヲモ少用、寝也、

永禄8年（1565）7月28日

山之小屋ニテ、楊花ヲ茄子ヲ以、調一椀用、喫茶、

永禄8年（1565）8月10日

山之小屋へ登、

【解説】永禄日記にみえる「山」とは由良氏の城のある金山のことである。よって、「山之小屋へ登」（8月10日）とあることから、「山之小屋」すなわち山小屋は金山にある小屋のことである。永禄日記には見えないが、「根小屋」という語もある。天正8年（1580）4月22日と推定される上杉景勝書状（『新潟県史 資料編5 中世三』2843号）には、「其上今廿二早天、根小屋へ押寄、令放火、巢城計ニ成置候」とあり、城に関連する根小屋と呼ばれる施設があることが知られる。永禄日記にみるように、山小屋が城のある山に設けられた施設であることを考えれば、根小屋とは、城のある山の根に設けられた施設であると考えることができる。

山小屋という用語は永禄日記にだけに見えるのではない。たとえば、山小屋研究で有名な元龜3年（1572）8月10日と推定されている武田家印判状（『愛知県史 資料編11 織豊1』）にも「山小屋」

と見える。この武田家印判状では、「山小屋」がどのようなことに使用されたのかは明確にはできない。しかし、永禄日記では、山小屋が何に使用されているのかがわかる。3月18日条によると、永禄日記の筆者義哲は、金山（由良成繁）・金筑（金谷筑後守）宛に書いた手紙を渡すことができなかったので、山小屋に置いて帰ったとある。3月25日条では、義哲が山小屋で食事をしたことがわかる。また、7月28日条では、喫茶をしたことがわかる。このように、城に用件があつて上つてきた長楽寺の義哲にとって、山小屋は文書を置いて帰ることができるような施設であり、食事・喫茶ができる施設であつた。

山には小屋が一つだけあつたのではない。片桐昭彦氏が明らかにしているように、山には由良氏の家臣矢内修理亮の小屋もあつた（片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年）。

戦国期の城には、山や根に多くのさまざまな小屋と呼ばれる施設があつたのである。なお、義哲が使用した「山之小屋」については、赤澤春彦「戦国期長楽寺と寺僧」（『長楽寺永禄日記』史料纂集、続郡書類従完成会、2003年）が詳しい。参照されたい。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 蔵屋

片桐昭彦

永禄8年（1565）2月23日

正参・泉蔵司、大田蔵屋俵ツミナヲシニ行、大麦七十一、小麦去年之分十二・去々年分六、合十八、大豆一、モチ三、ウルシー、以上合俵カス九十四、タワラナトリカへ、下シキナドシカヘテヲクト云イキ、七郎太郎・小三郎・太郎四郎モ行、正参ハカヘリ此由申、泉蔵司滞留イタシツル、爰許ヘモ九十四之外、此日大麦五・大豆一ツケサスルト云コト也キ、

【解説】長楽寺の僧正参と泉蔵主が、七郎太郎・小三郎・太郎四郎を連れ、大田（太田市）の蔵屋へ俵を積み直しに行ったこと、そして、大麦・小麦・大豆・餅米・粳米合わせて94の俵を取り替え、下敷きなども替えたことが記される。この史料から、金山城下の太田の町に長楽寺が管理する蔵屋があり、穀物94俵（種用か食用かは不明）が貯蔵されていたことが分かる。そして、94俵以外に大麦5俵・大豆1俵を付け加えたことが記されることから、おそらく大田の町で調達し、不足分を補充していたことが分かる。長楽寺の管理する蔵屋は、大田の町のどこに位置していたかは不明であるが、少なくとも俵を100個分収納できる広さがあつたことが知られる。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭

片桐昭彦

永禄8年（1565）8月10日

山之小屋へ登、（中略）、則物本一皮籠晒、

永禄8年（1565）8月11日

山ニテ時ヲカサ二程用、天気ハシカハ、ナケレトモ、地之字箱之本ヲ晒、

永祿8年(1565)9月1日

登山ス、矢修庭ヲカリ、物本ヲ晒ス、

永祿8年(1565)9月19日

矢修小屋ニ画ヲサラシ、般若ヲ庭ニサラス、

【解説】これらの記事にはいずれも、金山の上へ登った義哲が、「山之小屋」に所有する物品を晒した(虫干しした)ことが記される。8月10日・11日には、「山之小屋」で、「一皮籠」・「地之字箱」に入った物本をそれぞれ晒したことが分かる。しかし、9月1日と19日には、由良氏の家臣矢修(矢内修理亮)の小屋と庭を借りて、物本や画・般若経を晒したことが分かる。この記事から、「山之小屋」は手狭であり、庭がなかった可能性の高いことがうかがえる。一方、金山の上にある矢修の「小屋」には、物本などを晒す場所を提供できるほどの広さと庭があったこと、そして、日当たりのよい場所にあったことがうかがえる。

考古学のための上野国長楽寺永祿日記解説 骨

前嶋 敏

永祿8年(1565)3月24日

廿四、早晨、地蔵諷経、朝ハ行水ヲシ、喫茶、時ヲ能用ツル、ヒルハ麦飯少用、其後饅ヲ一用、又湯ツケヲ一カサ程用、赤堀ヘ行、取骨以前ザウニアリ、ハシニテセヽリヲク、取骨過テ一飯アリ、カサニ半ボト用ツル、入夜帰ル、

【解説】3月23日に死去が知らされた赤堀御料人の葬儀にあたり、24日に取骨が行われたことが記される。これらから、赤堀御料人は火葬されたこと、また火葬から取骨までは長楽寺からやや北に位置する赤堀で行われたことなどがわかる。また、23日には頌が作成されており、塔婆がたてられた可能性もある(塔婆に関しては別に記す)。永祿日記の取骨に関する記事はこの1例のみである。前嶋敏「長楽寺の行事・仏事について」(『長楽寺永祿日記』史料纂集、続群書類従完成会、2003年)では、『吉事次第』によって取骨に関する手順もあわせて示している。なお、ここでは「ハシニテセヽリヲク」という記述について、取骨にひきつけて「収骨があり、箸にて「セヽリヲ」いた後に再び一飯があった」としたが、これについては「(雑煮を)箸でつついて置いた」等の解釈も可能である。

考古学のための上野国長楽寺永祿日記解説 塔婆

前嶋 敏

永祿8年(1565)2月3日

泉蔵司父三十三年忌之志一山供養、時ヲ能食、塔婆之頌曰、
三十三年今作昨 速過忌景忽帰源
看々自在即身仏 直向太虚空裡奔
施物一枝

永禄8年(1565)7月21日

桂岩禅芳禅师十三回忌、塔婆之頌、清風明月落梧時○岩桂吹香秋一枝○請看本来真面目○元斯好○今老禅师○無位上、

永禄8年(1565)8月18日

禅才塔婆ヲタノム、頌云、

秋去春来同一空 回頭七歳刹那中

天真自性試看取 夜々三星遶月宮

上ニ古人之句ヲ書、宮下筑後七年忌、携一枝、

九秋皎月当空照 一片白雲山上来

【解説】長楽寺で行われた年忌法要にあたって塔婆が製作され、そこに頌が記されていることが示される。この他に、3月23日条でも葬送儀礼にあたって頌が作成されている(骨の項参照)。塔婆に関する記事はこの3例のみであるが、これらから、長楽寺で年忌法要において製作される塔婆には頌が記されていることがわかる。

〔編集後記〕

矢田・伊藤・水沢・青山・高橋4氏の文章は、11月3日、新潟大学で開催された第1回中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究会(略称:中世考古学文献研究会)の報告要旨をそれぞれの方に執筆し直していただいたものです。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説のそれぞれの文章は、中世考古学文献研究会作業部会の成果です。長楽寺永禄日記は、上野国禅宗寺院長楽寺の僧義哲が永禄8年(1565)正月から9月まで書いた日記です。出土するであろう遺物・遺構を意識しながら文献史料を文献側の研究者が読み解くという試みです。ご意見をお寄せください。(Y)

発行	中世考古学文献研究会(文部科学省科研特定領域研究「中世考古学の総合的研究—学融合を目指した新領域の創生—」B:学融合方法研究部門B01学融合方法論研究(人文科学系)B01-1「中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究」グループ)
事務局	〒950-2181 新潟市五十嵐2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

中世考古学文献研究会会報

第2号

2004. 7. 29

考古学のための御伽草子・猿の草子解説 首都物資流通圏

矢田俊文

めでたしとて、やがて京、堺の町屋へ誂へける道具には、荷、長持、輿車、十二の手箱、角盥、半挿、櫛箱、渡金、槳子、金壺、硯箱、文台、筆台、懷紙紙、白粉包、畳紙、塗桶、貝桶、寄懸り、解櫛、鬢櫛、垢取櫛、毛拔、鉢に油桶、角笄や眉作り、嗽茶碗に盆、香炉、沈箱、爪切、雛、張子、源氏、狭衣、新古今、古今、万葉、伊勢物語。

さて又衣装の様々は、数を尽くして見えにけり。十二単に長かもじ、白練、精好、うすたてや、折紅梅に一交ぜ、縫物、薄絵、紅染の、唐織物に緯白や、白綾、唐綾、小格子に大格子なる織物は、十六変り、四つ変り、大身変りに紅筋、地薄、地白の染小袖、秋の野摺れる摺衣、段筋、紅筋、にらみあひ、ひじきりかねに大しづら、端紅のほかり金、朽葉、空色、柳色、山吹色や薄浅葱、玉虫色に桃の花、金欄、緞子、縫金は中々数も知らざりき。

(中略)

まづ十六日の座敷は表の主殿を飾り、三間の押板に、先年筑紫の大内殿より音信のためとて送られし牧溪の竜虎、中尊同筆の観音、花三瓶に三具足、違い棚には堆紅の盆、同香箱、屈輪の台に建蓋据へ、書院の飾りには筆荷、硯屏、筆濯ぎ、水入、花立、軸の物、硯に卦算とり添へて、柱飾りも様々也。

さて又美物は何々ぞ。上は兵庫、尼崎、下は越前敦賀の津、若狭は小浜の辺までも、飛脚を遣はして大鯛、小鯛、明石鯛、鮭、鱒、鯨、鮎の魚、伊勢鯉、伊勢蛸、近江鮎、海鼠、海鼠腸、螺、海月、栄螺、蛤、貝鮑、あから貝、田螺、烏貝、白魚、雑喉、若君の、頭堅かれ金頭、鱒、鱈、名吉、日に添へて、宝の数は鱒の魚、万代経たるだう亀の、甲を並べし細蟹や、ひふくの来る数々は、八目鰻に鯨の魚、雨には海老も飛魚や、めでたき王余魚、数の子の、齡は千代と聞こえつる、松浦鯛に蝦夷塩引、乾鮭、干鯛、鱈、鱈、鮓、 かべ、鵠、菱食、腹斑、青鷺、 鴨、小鴨、鳶、烏、ねぐら求む そふ片鶉、雀、ひへ鳥 千鳥、さへ小鳥に似たる迄、 精進の数々は、牛蒡 煎豆、座禅豆、海松布、なの 烏頭布、東山蕪、莖立、早蕨や、篠竹、淡竹、竹の子の、代々に久しき松茸や、平茸、栗茸、滑薄、調へ出し、盃を、今一つとぞ椎茸や、舞茸、紅茸、榎、胡桃、榛、石榴、有の実や、蜜柑、柑子、橘に、金柑、温州橘、梅法師、妙旦、なた柿、木練柿、谷の落椎、小栗や、白瓜、鴨瓜、烏瓜、たそがれ時の夕顔の、姫瓜にこそ古への光源氏の大將も、心を動かし給ひけり。

肴の数は何々ぞ。水織、羊羹、燕麦や、鼈羹、猪羹、つくね羹、砂糖饅頭、水花麵、食後、鶏卵、酒の名は、天野、島酒、白山酒、汲む手も匂ふ菊酒は、持ちながらこそ千代も経ん。かゝる色々求めつゝ、そのこしらへは様々なり。

(中略)

連歌過は、三献まいらせよ。磨付の座敷を飾り、天神の名号に三具足とりそへ、硯、文台は去年、浅井所より来り候梨子地の文台、又、奥の四畳半に茶の湯を仕、黒塗の台子に奈良風呂添へ、甌釜し合はせ、蓋置は火舎香炉、水指は抱桶、水こぼしには合子、絵は舜拳の花鳥、上下は金地の小紋の金欄、中は赤地の鳥襷、風帯、一文字まで結構を尽くせり。さがら天目を袋に入、黒台に据へ、茶は別儀を九十九に入、花は貨狄の船に生くべし。此九十九、貨狄は子細さまゞある道具也。

【解説】上に掲げた史料は御伽草子「猿の草子」の一部である。本史料の成立は、永禄4年(1561)～6年(1563)頃で、作者は、坂本の地に住し、日吉社に神官として奉仕しているような立場の人で、日吉社の歴史や人生の盛儀を子女にわかりやすく学ばせようとして作られたものと考えられている(沢井耐三校注「猿の草子」『室町物語集 上』(新日本古典文学大系))。

史料冒頭の「めでたし」以下は、結婚が決まったのでそのために調べようとした道具を記した記事である。「十六日の座敷」以下の記述は、結婚後めでたく子どもが生れたので、婿呼びを計画して十七献の準備をするため邸内を飾り、美物(海産物・鳥などの美味なもの)・肴を購入した記事である。この史料から当時の嫁入り道具、饗宴のための邸内の飾りと美物・肴・酒、連歌会・茶会において設えられるモノがどのようなものかがわかる。

本稿では、史料に記された地名について考えてみたい。まず、茶会において設えられるモノの中で唯一地名が記されるモノとして奈良風呂があることに注目したい。都市坂本の人々にとって、風呂といえば奈良風呂であったことがわかる。また、饗宴のために取り寄せられた美物のうち、地名がつけられた美物は、明石鯛、伊勢鯉、伊勢蛸、近江鮎、松浦鯛、蝦夷塩引、東山蕪であった。

さて、これらの美物はどこから入手したのであろうか。九州や北海道に出かけて鯛や塩引を手に入れたのであろうか。本史料では、これらの美物を「上は兵庫、尼崎、下は越前敦賀の津、若狭は小浜の辺までも、飛脚を遣はして」入手したとある。明石鯛・松浦鯛・蝦夷塩引は、兵庫・尼崎・敦賀・小浜よりも遠方の美物であるが、これらの美物は兵庫・尼崎・敦賀・小浜もしくはそれらの地域よりも近い地点で購入したのである。美物の購入範囲は、西は兵庫・尼崎、北は敦賀・小浜であったのである。

嫁入り道具は京・堺で調べたと記されている。都市近江坂本の富裕な人々が嫁入り道具や饗宴の美物を調達する範囲は、京をはじめ堺・兵庫・尼崎・小浜・敦賀であったことがわかる。この史料における買物の主体は京の隣の坂本の住人であったが、この史料から首都を中心とした物資の流通圏を考えると、西は堺・兵庫・尼崎、北は敦賀・小浜ととらえることができよう。

考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・祠堂

皆川義孝

文明18年(1486)2月25日

余此寓武之江戸城、々有丞相祠堂、栽柳挿松、不知幾数百株、

【解説】文明18年2月25日、万里集九は太田道灌から江戸城内に居を与えられ入城した。万里は、江戸城内に数多くの柳や松が植えてある丞相祠堂(菅原道真を祭る神社)を見た。この記事から江戸

城内に広大な境内の祠堂があったことが分かる。

考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・江戸城の城壁

皆川義孝

長享元年（1487）10月22日

控品河之岐軒、途中之濱而見六・七小舟品河之土、蓋為塗江戸之城壁也、

【解説】長享元年10月22日、万里集九は品川の医師を訪ねた帰り道、濱で六・七艘の小舟が品川の土を運んでいるのを見た。小舟が運ぶ品川の土は、江戸城の城壁を塗るための土であった。この記事から、江戸城の城壁は土壁で、それは品川から取り寄せていたこと、直接江戸城内まで土を乗せた小舟が乗り入れられる水路があったことが分かる。

考古学のための出土遺物文字解説 浦廻遺跡出土卒塔婆

前嶋 敏

浦廻遺跡は、新潟県白根市浦廻にある約 6800 m²の遺跡である。遺跡の西側には中ノ口川が流れており、発掘地点およびその周辺は水田であった。

遺跡の年代としては、それ以前の畝状遺構等も見られるが、遺物の出土した地点は卒塔婆に記された年代（後述）やC¹⁴年代測定の結果等によって13世紀後半～14世紀前半の遺跡と推定されている。2003年には新潟県埋蔵文化財調査報告書第126集『一般国道8号白根バイパス関係発掘調査報告書 浦廻遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査事業団、以下『報告書』と略す）が刊行され、発掘の成果が報告されている。

遺跡の性格については、「木簡等は原位置を保っていると考えられる」として葬送の場と考える説（田中一穂「浦廻遺跡」『木簡研究』15、2003年）と、「当時の河川洪水等によって他遺跡のものが押し流されて堆積した2次的遺跡」とみる説（戸根与八郎「一般国道白根バイパス関係発掘調査報告書（書評）」『新潟考古』25、2004年）がみられ、一定しているとは言い難い。ただし、出土状況をみる限り、ほとんど同じ場所から卒塔婆ばかりが出土し、それ以外の木簡がほとんどみられない点や、一括使用されたと考えられる卒塔婆が一括して出土している点等からみて2次的遺跡とは考え難い。

なお『報告書』では本遺跡について「村の祭祀場、もしくは祭祀具の廃棄場」と位置付け、中世民衆（村落構成員）の葬送関連遺跡という立場を取る。しかし、出土卒塔婆の書風等から考えても、14世紀段階における本遺跡にかかわる供養にはある程度の経費が想定される。「村落構成員」の墓制だとすれば、村落におけるどのような階層の墓制であるのか、またあるいは付近の館跡の有無等によって、「中世村落民衆の葬送」と位置付けを限定すべきであるのか、などの課題は残されるものと思われる。

出土遺物としては、土器、木製品、骨など2355点がみられるが、そのうち木製品が2081点をしめる。その中で卒塔婆と考えられる木簡は108点見られ、さらに文字（墨痕）のあるものは66点である。

以下、これらに記された文字について列挙し、若干の解説を付す。なお、／以下は裏面に記載され

ていることを意味する。『報告書』および論文には釈読および写真も掲載されているので、あわせて参照されたい。

①梵字（バン） [33 点]

・（多宝塔）梵字（バン） 是法住法位・世間相常住 南無地蔵大菩薩 / 梵字（バン） 南無阿弥陀佛 南無十王

- ・梵字（バン）南无阿弥他佛 / 梵字（バン）南无阿
- ・梵字（バン）南无阿弥他佛 (9 点)
- ・梵字（バン）南無阿弥陀佛 (2 点)
- ・梵字（バン）南無阿□□佛
- ・梵字（バン）南□□□□佛 (6 点)
- ・梵字（バン）南無□□□□
- ・梵字（バン）弥陀佛
- ・梵字（バン）南無 (2 点)
- ・梵字（バン）南
- ・梵字（バン）南無大日如来 (4 点)
- ・梵字（バン）梵字（バン） (2 点)
- ・梵字（バン）梵字（バン） 十二
- ・梵字（バン）（符籙） 急急如律令 出所

浦廻遺跡出土木簡においては梵字（バン＝大日如来）を用いている比率が高く、文字の記載された木簡の 50%を占める。なお、多宝塔の描かれた卒塔婆については、妙法蓮華經方便品第二に「是法住法位。世間相常住。於道場知已。導師方便説。」とあり、ここから引用したと考えられる。前掲田中論文では、本卒塔婆にみられる「南無十王」から、十王思想との関係について指摘している。

②梵字（ア） [1 点]

- ・梵字（ア） 急急如律令 / にし

浦廻遺跡中、梵字（ア＝大日如来）を用いた木簡はこの一点のみである。なお、裏面の墨書「にし」に関連することとして、神奈川県鎌倉市の小町一丁目一〇七番地点遺跡から「きた」や「みなミ」と墨書した呪符木簡が出土している（手塚直樹・田畑佐和子「小町一丁目一〇七番地点遺跡」『木簡研究』10、1988 年）。

③符籙 [6 点]

- ・（符籙）急急如律令 / □…□
- ・（符籙）急急如律令 □□
- ・（符籙）急急如律令 □
- ・（符籙）急急如律令 (2 点)
- ・（符籙） / （五芒星）

符籙記載面の裏面に記載が見られるものは 2 点のみである。うち 1 点は判読困難であるが、もう 1

点は五芒星が記されている。

④頭部に墨彩（以下▲） [9 点]

- ・ ▲南無 / 元応二年十月
- ・ ▲南無大日如来 (2 点)
- ・ ▲ (5 点)
- ・ ▲ / ▲

頭部の墨彩については、青森県浪岡城から出土した木簡（小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』、東京大学出版会、2001 年、207 頁）等、他の遺跡においても見ることができ、『餓鬼草紙』等の絵巻物に描かれる塔婆にもそうした表現が見られる。また、本遺跡では頭部を墨彩する卒塔婆に記載される文字には「南無大日如来」が多いことがわかる。また、「元応二年十月」と記された卒塔婆により、他の出土遺物のおよその年代が推定される。基準資料として重要である。



⑤「南無阿弥陀佛」、「南無大日如来」等 [7 点]

- ・ 南無阿弥陀佛 / 南無阿弥陀佛
- ・ 南無阿弥陀佛
- ・ 南無阿
- ・ 南
- ・ 南無大日如来
- ・ 南無大日

⑥その他

- ・ 軽於汝等汝等皆当作佛故四衆之中 / 瞋恚心不浄悪口罵詈言は無智比丘

妙法蓮華經常不経菩薩品第二十の文言で、「(而作是言。我不敢) 軽於汝等。汝等皆当作佛故。四衆之中。有生瞋恚。心不浄者。悪口罵詈言。は無智比丘。」という部分があり、この文言を引用したものと考えられる。なお、卒塔婆では上記引用のうち「有生」の文字が見られない。圭頭部は完形であり、木簡下部が破損しているところから、表面の下部に記されていたと思われる。

- ・ 又諸□…□受化易

妙法蓮華経從地涌出品第十五に「又諸衆生。受化易不。」とあり、この文言を引用したものと考えられる。

- ・ □…□住者□□ (有也カ)

何らかの経文からの引用と考えられるが、現時点では特定できていない。なお、無量義経十功德品第三では、「從何所來。去何所至。住何所住者。當善諦聽」とある。

(墨痕、あるいは判読の困難なものが他に 9 点見られる)

また、文字は記されていないが、
・(人面)、(五芒星)、□…□
という記号を示すものも見られる。

□…□ 数字分判読不能の文字有り

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山の小屋

片桐昭彦

永禄8年(1565) 1月4日
山へノホリ、茶ヲノミ、(後略)

永禄8年(1565) 2月9日
山へ登、(中略)、行水ヲシテ寝、

永禄8年(1565) 2月10日
山ニテ焼餅二ヶ用、実城内カタヘムギノ粉ホカイ一ニマツチャ、又熊寿殿、館林当年越年目出度トテ
■一双、串柿肴トシテ、存書記ヲ以テ申届、愚ハ長手へ下、

永禄8年(1565) 3月25日
山へ登、(中略)、山之小屋へノホリ、外居一ツイニ入、坂中へ抹茶ヲソヘマイラス、実城へモー書啓
シツル、(中略)、山之小屋ニテメシヲ少用、非時ヲモ少用、寝也、及暮、金筑・南幡・長谷豊・大新・
丸右、其後右衛門佐殿各へ酒ヲ進マイラス、当盞ニテ七杯ツヽノマル、

永禄8年(1565) 3月26日
小屋ニテ焼餅一半用、喫茶、伊徹相伴也、時ヲカサ二程用、実城へ出、(中略)、山ニテ湯ツケヲ能用
テ下、

永禄8年(1565) 6月3日
登山ス、於長手焼餅ヲ二三ヶ用、喫茶、小屋ニ登、碁子麵ヲ用、坂中へ下、(後略)、

永禄8年(1565) 6月4日
時ヲカサニ卒度弘蔵司相伴ニ用、其後ニ湯ニツケテメシヲ汁器一用ナリ、昼時分、右衛門佐殿・矢修・
根参・金筑被越、麦ヲ饗、其上三蔵、右・筑ハ白ニヨシ、小染付トリ合、七ツヽ酌シツル、及暮帰也、
麦ヲモホシイヲモ少ツヽ相伴ニ用、晚炊ヲハカサ一程モチユ、義陽・城チヨモ来リキ、寺之勤行ハ常
之如クナラン、

永禄8年(1565) 6月5日
焼餅イカニモ少ナルヲ両ヶ用、喫茶、時ヲカサニホト用、藤紀、南蛇井同心ニテ、道具・物本ナドサ

ラサセツル座敷へ被越キ、干飯ニテ酒ヲ当蓋五ツ、進メカヘシツル、ヤカテ愚モヒキノ粥ヲ汁器一用、令歸寺（後略）、

永禄8年（1565）7月28日

登山、長手ニテ焼餅少用、喫茶、山之小屋ニテ楊花ヲ茄子ヲ以調一椀用、喫茶、實城へ出、（中略）、申刻小屋ニ歸、非時ヲカサ二程用、高安若狹狂言歸ニコユヘキ由申程ニ、非時ヲ調置、饗シツル、高彦ハ小屋ニ留ル（後略）、

永禄8年（1565）7月29日

大ノ月ナル程ニ焼餅之用、喫茶、丸右侘言ニ局ヘ文ヲコシツル、心得返事アルヘキトノ挨拶也、実城へ以義陽、（中略）、カタリヲキ歸、長手ヘヨリ入麵ヲ一椀用歸、（中略）、山ニテ時ヲ小嶋・根岸肥・高彦・若狹・高子蔵司、一汁三菜之時也、相伴シテ用、丸右内カタヨリ饅ヲ信トシテコサレツル、時之上ニ出シ、進酒、各返也（後略）、

永禄8年（1565）8月10日

於長手暮子麵ヲ一椀アマリ用、山之小屋へ登、坂中へ以一札登段、旦那へ申届、懇ニ返事アリツル、則物本一皮籠晒、晚炊ヲハ卒度用寝、

永禄8年（1565）8月11日

山ニテ時ヲカサ二程用、天氣ハシカ■■ナケレトモ、地之字箱之本ヲ晒、ヒルハ楊花ヲ用、洞春相伴、觀蓮モ同座、（中略）、晚炊ヲハカサニホト用、（後略）、

永禄8年（1565）8月12日

カウノモノヲ用、喫茶、（中略）、長手へ下、時ヲカサ二程用、迎來間ヤカテカヘル、觀蓮ヲハ山へ登セ、八郎左衛門證人召連ノホルヲマタスルナリ（後略）、

永禄8年（1565）9月4日

登山ス、矢修庭ヲカリ、物本ヲ晒ス、其内ソト楊花ヲ一椀用、又粟粥ヲ一椀用、非時ヲモカサ二程用ツル、登儀実城へ以使申届、又夜中右衛門・藤紀ヲ以、（中略）何ニ可然ト挨拶申、兩人カヘシマイラス（後略）、

永禄8年（1565）9月5日

喫茶、時ヲイカニモコ、ロヨク用、道嚴相伴也、根三・金筑・下平方被來、酒ヲス、ム、ヒル湯ツケヲ汁器一用テ実城へ出、■ヲ一持參、悠々ト茶ヲノミ歸、非時ヲモ能用也、

永禄8年（1565）9月6日

時ヲ若狹相伴ニ能用、若狹ハツダケト昆布ヲ持參シツル、丸右侘言ニ文ヲシタ、メ、右衛門佐殿ヘマイラス、（中略）、長手へ下（後略）、

永禄8年（1565）9月7日

愚モ長手ニテ楊花ヲ一椀用、則登山ス（後略）、

永禄8年（1565）9月8日

焼餅一ケ用、喫茶、時ヲ能用、丸右内ヨリ雲門・栗為信コサレツル、一ケ用、長手へ下、則令歸寺（後略）、

永禄8年（1565）9月11日

（前略）、自山、存・佐モ来、

永禄8年（1565）9月18日

長手へノホル、（中略）、坂中へ一札ヲシタハメ、存子ニ遣也、カミ（由良成繁）へモ伝語申ツル、自旦那委返事アルホドニ、（中略）、登山ス、

永禄8年（1565）9月19日

茶子少用、喫茶、自実城使ヲタマワ程ニ出、（中略）、宿へカヘリ、時ヲ能用、矢修小屋ニ画ヲサラシ、般若ヲ庭ニサラス、カヘリ来テ、非時ヲ道巖相伴ニ能用、毛利・小嶋来ル、酒ヲ当盞ニ五ツハ進メツル（後略）、

永禄8年（1565）9月20日

時ヲコハロヨク道巖・弘蔵主相伴ニ能用、藤紀モ被越、酒ヲ三杯スハメマイラセツル、ヒルハ実城へ出、（中略）、非時若狭相ハンニテ能用、（中略）、月ヲ待マイラセ、悠々ト寝ツル（後略）、

永禄8年（1565）9月21日

茶ヲ一服喫ス、道巖・若狭相伴ニテ時ヲ能用、ヒルハ麦ヲ卒度道巖・如雲相伴ニ用、実城へ出シバラクフル、非時ヲハカサニー半程用（後略）、

永禄8年（1565）9月22日

時ヲ道巖相伴ニテ能用、金筑コヘラル、酒ヲ当盞ニ五ツスハム、又心月モ被越、酒ヲ三杯スハメマイラセツル、ヒルハキシメンヲ一ワン用、非時ヲハ道巖相伴ニテ能用（後略）、

永禄8年（1565）9月23日

一服喫、時ヲ能用、（中略）、右衛門佐殿ヲリヤル、酒ヲ当盞ニテ七スハム、半金筑モ来、三杯ノミ坂中へ被下、（中略）、湯ツケヲ二口三口用、帰、

【解説】以上に掲げた史料は、長楽寺の住持義哲が、西上野の戦国領主由良成繁の居城金山にある「山の小屋」において行動した記事である。前回の解説では、「山の小屋」には物本・一皮籠・画・般若経が保管されていたことを明らかにしており（片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭」『中世考古学文献研究会会報第1号、2003年』）、「山の小屋」には、物本・一皮籠・画・般若経を収納できるスペースがあったと言えよう。

義哲は、「山の小屋」において、伊徹（3月26日）、弘蔵司（6月4日・9月20日）、道巖（9月

5日・20日・21日・22日）・如雲（9月21日）などと相伴して食事をとっており、多くの寺僧が「山の小屋」への出入りしていたことがわかる。また、「山の小屋」には、存書記のように常駐して長楽寺（義哲）と由良氏を取り次ぐ者もいたことがわかっている（赤澤春彦「戦国期長楽寺と寺僧」『長楽寺永禄日記』解題、続群書類従完成会、2003年）。7月28日には、由良家中の高安彦右衛門が「山の小屋」に訪れ、その日は帰ることなく泊まっている。つまり、「山の小屋」とは、義哲一人が滞在できればよいような建物ではなかったのである。

また、義哲の「山の小屋」滞在中には来客も多く、3月25日には由良家中の金筑・南幡・長谷豊・大新・丸右・右衛門佐の六名、6月4日にも右衛門佐・矢修・根参・金筑の四名が一度に訪れており、義哲は食事や酒でもてなしている。7月29日には、小嶋・根岸肥・高彦・若狭・高子蔵司の五名が訪れ、一汁三菜でもてなして相伴している。したがって、「山の小屋」は、少なくとも五・六人程度の来客を一度にもてなし饗応できるくらいの広さがあったことが知られる。

6月5日には、藤紀が南蛇井とともに「山の小屋」を訪れたので、義哲は、「道具・物本ナドサラサセツル座敷」に通して、干飯を添えて出し酒をふるまっている。客間である「座敷」に道具や物本等を晒していたところに、藤紀と南蛇井がやってきたのであろう。前述の五・六人程度の来客を一度にもてなしたのもこの「座敷」であったと思われる。このことから、義哲や存書記等の寺僧がふだん居る部屋（居間）とは別に「座敷」があった可能性が高い。したがって「山の小屋」には、少なくとも居間と座敷という二つ以上の部屋があったことが考えられる。

「山の小屋」において義哲は、「焼餅」（2月10日、3月26日、6月3日・5日、7月28日・29日、9月8日）、「メシ」（3月25日）、「湯ツケ」（3月26日、6月4日、9月5日・23日）、「碁子麵」（6月3日、9月22日）、「麦」（6月4日、9月21日）、「ホシイ（干飯）」（6月4日・5日）、「ヒキノ粥」（6月5日）、「楊花」（7月28日、8月11日、9月4日）、「茄子」（7月28日）、「一汁三菜」（7月29日）、「饅」（7月29日）、「カウノモノ」（8月12日）、「粟粥」（9月4日）、「茶子」（9月19日）などを食べ、「茶」（1月4日、3月26日、6月5日、7月28日・29日、8月12日、9月4日・5日・8日・19日・21日・23日）や「酒」（3月25日、6月4日・5日、7月29日、9月5日・19日・20日・22日・23日）を飲んだりもてなしている。したがって、「山の小屋」には、これらの食材や酒等を保存する場所があったこと、そして、これらの食材を調理する場所があったことがわかる。とくに「一汁三菜」（汁一品、菜三品からなる日本料理の基本的な膳立て）を出していることなど考慮すると、「山の小屋」には、きちんと調理するための竈があった可能性が高いと言えよう。

また、義哲は、「山の小屋」で行水もしており（2月9日）、「山の小屋」あるいはその周りに、行水ができるほどの空間があったことがわかる。

以上のことから、「山の小屋」は、①義哲一人が滞在できればよいような建物ではなかったこと、②少なくとも居間と座敷の二つ以上の部屋があり、座敷は少なくとも五・六人程度の来客をもてなし饗応できるくらいの広さがあったこと、③食料や酒などを貯蔵する場所や調理できる場所があったことが明らかである。

山城の発掘の成果から籠城の実態を探ろうとした千田嘉博氏は、16世紀後半に機能した土豪層の山城（福島県の西方館）を取り上げ、主郭・副郭を囲む帯曲輪に設けられた小屋掛けの建物に注目する。そして、この簡便な小屋掛けの建物は、籠城に際して主たる戦闘力を構成した雑兵クラスの人びと、もしくは避難してともに戦うために城内に入った人びとが寝泊まりした臨時施設であり、煮炊きを行った痕跡がないことから、副郭にある建物を中心とした部分が、食料の保管や調理等の中核的機能を果たしていたとし、主郭・副郭とは同じ城とはいえ明確な階層性をもったとしている（同「戦国期城

郭の空間構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』108、2003 年）。

「小屋」と聞くと、千田氏の述べる、この帶曲輪の小屋掛け建物のような簡便な建物をイメージしがちである。しかし、同じ「小屋」であっても、「山の小屋」には、座敷もあり、食料の保管や調理する場所もあったのである。金山城内における由良家中矢内修理亮の屋敷も「小屋」と呼んでいたこと（片桐前掲解説）を考慮するならば、実城を支えて金山城の中核をなしていた建物群のこともそれぞれ「小屋」と呼んでいたと考えられる。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 中世鎌倉街道上道利根川渡河点・平塚

森田 真一

永禄8年（1565）1月16日

敵八木沼マテ来トモ、左衛門二郎当地ヨリモテシゲニ出合間、引除、

永禄8年（1565）2月20日

其時分敵十騎計乗籠、八木沼近辺迄来ツル、左衛門二郎早出合故、馬ヲトリテ行ヲ河端ニテワイヲトス、

永禄8年（1565）5月17日

愚申事ニハ、爰許瀬「アマタ御座候而、今朝モ平塚へ乗籠候條、河辺者ヲハサシヲカレ可然分申断、

永禄8年（1565）7月16日

麦之粉ニ抹茶ヲソヘ、真言院へ以瑞マイラス、然者カナサナヘ、深谷ニ移コスヘキ由承ホドニ、無用ト押ヘマイラス、

永禄8年（1565）7月17日

真言院武州へ同宿ヲコサシマスヲ、斎藤河端ニテヲサユルヲ、瑞ヲ遣則返也

永禄8年（1565）7月18日

真言、武州へコサシマス同宿斎藤タノミ、舟渡迄ヲクラスルナリ、

永禄8年（1565）8月19日

自院斎藤主税カ処へモ綿一把、茶ヲ添コサル、瑞ヲ為内者越ツル、コレハ過舟渡迄ヲクラルハ礼儀之心也、自境之便ニ旦那へ切紙ヲコス、様体ハ藤田新太郎方一昨十七関山へ着、深谷トノ有談合、当口へ可動トノ巷説也、又成田へ動アルヘキトモ申、両様共ニ申届、斎藤主税助日「瀬端へ打出、及其備儀ヲモ書中ニ書加也、

【解説】5月17日には、利根川に「瀬」(浅瀬カ)が多くあるために敵が利根川を越えて平塚(群馬県境町)へ侵入している(「乗籠」については、荒垣恒明「戦乱のなかの新田領」峰岸純夫校訂『長楽寺永禄日記』解説参照)。1月16日、2月20日には敵(北條方)が「八木沼マテ」「八木沼近辺迄」

侵入している。八木沼には助詞の「迄」が付され、また平塚と八木沼の位置関係から、敵は平塚を経由して八木沼まで侵入したと考えられる。

真言院主が深谷（埼玉県深谷市）経由で金鑽へ行くために（7月16日）、同宿を武蔵国へ越す時に「河端」で同宿が斎藤主税助によって押さえられた（7月17日）。そのため、院主は同宿を「舟渡」まで送らせるように斎藤へ依頼した（7月18日）。その後に院主も金澤（横浜市）へ向かった後に金鑽から帰宅したようであり（8月3・18日）、「舟渡」を過ぎるまで送ってくれた礼として斎藤へ綿や茶をよこしている（8月19日）。日記中には「河端」「瀬端」という用語が散見しており（2月19・20・23日、4月29日、7月17日、8月19・20日など）、同宿を押さえた斎藤主税助は「瀬端」において防備も行っている（8月19日）。このことから、「河端」「瀬端」とは世良田近辺の利根川沿岸で敵の侵入が想定される地点であり、先にみた平塚周辺であると考えられる。また、同宿が経由した深谷は、世良田・平塚から利根川を挟んで対岸に位置している。よって、7月18日にみえる「舟渡」は、武蔵国深谷もしくは平塚のいずれかの地点にあったと考えられよう。

長楽寺領である平塚と利根川を挟んで対岸の武蔵国との間には、中世鎌倉街道上道の一つが通じていた（群馬県歴史の道調査報告書『鎌倉街道』群馬県教育委員会、1983年）。近世には中山道の脇往還（北越街道）が平塚村と武蔵國中瀬村（埼玉県深谷市）の間に通じており、両村の間には船渡しがあった（『尾島町誌 通史編 上巻』尾島町、1993年）。日記中には平塚周辺の利根川の水量が少ない（3月5・7日など）という記述がみられる一方で、平塚もしくは武蔵国側に「舟渡」（7月18・19日）の存在も確認される。瀬と渡船とがセットである地点は、交通上では重要な渡河点になるという（斎藤慎一「鎌倉街道上道と北関東」（浅野春樹他編『中世東国の世界1 北関東』高志書院、2003年）。以上のことから、永禄8年（1565）の段階において、平塚は中世鎌倉街道上道の利根川渡河点の一つとして機能していたと考えられる。

史料紹介―大名家道具帳

原 直史

近世大名家に伝来した文書群には、道具帳と称される帳面がしばしば見出される。これは茶道具をはじめとした、大名家所蔵の道具類の目録である。従来も茶道史など文化史の分野では活用されてきた史料であるが、今回は考古学の研究にも参考となりうる物として、やや特殊な道具帳類を4点翻刻・紹介する。

史料1は旧徳島藩主蜂須賀家の文書群に含まれる道具帳で、現在は国立史料館に所蔵されている。「今度長崎ニ而相調申巻物并御道具之帳」という表題からも明らかなように、長崎での買い物の記録である点が、一般の道具帳類と異なる。前半が「巻物」すなわち反物類、後半が道具類の目録となっている。作成の寛永九年は西暦1632年にあたる。

本史料で注目される点は、染付茶碗などいくつかの道具に「但今渡り」という但し書きが付されていることである。唐船によって最近もたらされた物の意であろうが、こうした注記をことさらに付す必要はどこから生じるのであろうか。注記の無い物も輸入品とみられるが、「今渡り」の物といかなる流通上の差異があるものであろうか。こうして買物帳でもある本道具帳は、輸入陶磁器などの流通形態についての論点を提示してくれるのである。もとより本史料のみからはそれ以上の解決は得られないが、類似の史料を各大名家文書などから探し出すことは意味のあることではないか。

史料2～4は旧宇和島藩主伊達家の文書群に含まれる道具帳で、現在は財団法人宇和島伊達文化保存会が所蔵している（翻刻は国立史料館撮影の写真帳によった）。これは伊達家の道具ではなく、越後高田藩松平光長家の道具の目録である。周知のように松平光長はいわゆる越後騒動のために延宝9年（天和元年、1681年）に改易となった。この際に親類であった伊達遠江守（宗利・宇和島藩）と松平出羽守（綱近・出雲松江）が、事後の処理を命じられた。

各史料の末尾にみられるように、この両家では高田城在番となった溝口信濃守（宣広・越後新発田）・水野隼人正（忠直・信濃松本）の家来からこれらの道具類を引き継ぎ、一部を幕府へ返上した上で、松平光長の姪にあたる高松宮家の二宮に引き渡した。

この道具帳類で特徴的なのは、茶道具や刀剣などの優品・名物だけでなく、破損した物も含めた日用雑器までが書き上げられていること、さらにそれらが本丸広間の長持から始まり、本丸・二の丸・三の丸等々の数多くの蔵・櫓のうち、どこに保管されていたかが判明することである。まさに改易・城明け渡しという非常事態に際して切り取られた、その時点での城内の「モノ」の実態を示しているといえよう（なお甲冑の類がみられないことからわかるように、刀剣をのぞいた武具類はこれ以前に幕府によって接收されている）。また意外に多くの破損品が保管されていることが眼に付くが、廃棄されたとおもわれる土壙などからの出土遺物の性格とからめて、かかる道具類の破損から廃棄までのサイクルを考える際のひとつの論点を提示すると思われる。こうして改易に際して作られたこのような特殊な道具帳は、城内の「モノ」の性格を考えるうえでの好史料となると考えられる。

〔編集後記〕

矢田・皆川・前嶋・片桐・森田5氏の文章は、中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究会作業部会の成果です。会報1号では、文献解説は上野国長楽寺永禄日記の解説だけでしたが、今回は出土した文字資料など、さまざまな資料・文献の解説を文献史学の立場から行っています。

原氏の論文は、特定領域研究（2）「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」チームでの研究会（2004年6月25日、新潟大学人文学部）における報告です。

本号に掲載したものはすべて、出土するであろう遺物・遺構を意識しながら資料・文献を文献史学の研究者が読み解くという試みです。（Y）

発行	中世考古学文献研究会（文部科学省科研特定領域研究「中世考古学の総合的研究—学融合を目指した新領域の創生—」B：学融合方法研究部門B01学融合方法論研究（人文科学系）B01-1「中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究」グループ）
事務局	〒950-2181 新潟市五十嵐2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

湯次 貳
食次 貳
大湯次 壺

一 鉄行灯 拾七
一 盪 拾九盪
一 砂皿 四拾
一 鍔釜 貳
一 衣架 貳

右御道具相改不殘渡之候以上

溝口信濃守内

天和元辛酉年十月

速水一学 (印)

水野隼人正内

鈴木主馬 (印)

松平出羽守様御内

荏部九右衛門殿

岡野市右衛門殿

伊達遠江守様御内

荻原源太左衛門殿

佐久間磯右衛門殿

右帳面之諸道具水野隼人正家来

鈴木主馬溝口信濃守家来速水一学

改相渡候旨奥書判形有之候但

雜道具之内二者越後守家来書出候

帳面与少々過不足有之由候各

断二付加奥判者也

西

十月

滝十右衛門 (印)

杉五左衛門 (印)

本新五兵衛 (印)

桜藤兵衛 (印)

中長兵衛 (印)

蒔八郎左衛門 (印)
高善左衛門 (印)

松平出羽守殿内
荏部九右衛門殿
岡野市右衛門殿

伊達遠江守殿内
荻原源太左衛門殿
佐久間磯右衛門殿

右御帳面之御道具今度 出羽守様

遠江守様以御相談二宮様江被遣之候無相違

慥請取申候以上

高松殿二宮御方内

天和元辛酉十二月日

奥津市郎左衛門 (花押・印)
同 西尾 (印)

松平出羽守様御内

柳多四郎兵衛殿

伊達遠江守様御内

神尾外記殿

一	黒椀 坪平蓋共	貳拾具
一	黒塗重箱	四組
一	ため塗重箱	壺組
一	かなへ	五
一	小国小板紙	壺束
一	三丸九番改鉄釘鍔倉	三拾三端
一	布縁	貳拾五端
一	白布縁	
一	三丸十三番改作事鍔蔵	壺本
一	白檀木	
一	三丸追手多門渡り櫓之下東	貳百九拾三枚
一	備後表	廿貳円
一	内壺枚近江表	
一	荒川材木置場之後蟬しめ所	五拾八
一	砂鉢	拾壺疊半
一	疊	
一	大手門櫓之上東之方	貳
一	古燭台	百枚
一	古薄縁	三拾五人前
一	古塗膳	拾四枚
一	古塗丸盆	貳拾膳
一	古木具	貳
一	古手拭懸	拾五人前
一	古朱椀取集	本二つほ平蓋共
一	茶臼	壺柄
一	唐金之風呂	壺箱入
一	鉄風呂	壺
一	水指	壺
一	水翻	壺
一	風呂釜	壺
一	古硯箱	壺
一	盃	九
一	取集小砂鉢	三
一	古組入盆	五
一	風呂釜	壺
一	煎茶之碗	三
一	六尺取集屏風	壺双
一	廻り金押絵	
一	片々者すミ絵	
一	小屏風 無絵	壺双
一	古かな引焼 壺ツ者かわなし	貳
一	古かね蓑蕩盆	貳 火入たはこ入共
一	古火搔	壺
一	古釜	三 貳者無蓋
一	古二枚屏風取集	壺双
一	古秤	三箱 四百六十丁入
一	古衣架	壺
一	古平釜	三
一	三丸源松院屋鋪在之古道具	
一	砂鉢 大小	拾八
一	鍋 大小	拾八
一	五徳	五
一	家具	
一	内	
一	折敷	七枚
一	本椀	十五
一	平皿	四十七
一	坪皿	十九

柳多四郎兵衛殿
伊達遠江守様御内
神尾外記殿

4. 越後高田御城所々御道具帳

越後高田御城所々御道具帳

- 二丸武具倉一番改
- 床机 壺 箱入
- 一 朱 壺貫式百拾九匁三分 曲物二二入
- 一 細曳 式拾筋
- 二丸武具蔵二番改
- 一 洩紙 帳面之外 三拾枚
- 一 細曳 式拾筋
- 二丸武具蔵三番改
- 一 青貝刀懸 壺
- 二丸武具蔵五番改
- 一 細引 長持二竿共遣ス 式百八拾筋
- 本丸多門之内小屋道具
- 一 洩紙 外四百枚過共相渡之 四百枚
- 一 細引 外百筋過共相渡之 三百五拾筋
- 一 細縄 五百尋
- 三丸南之多門
- 一 刀筒 梨地御紋付 式

- 一 床机 式 内壺御紋付梨地
- 一 早懸挾箱 覆共 式
- 一 覺書 折本 式拾冊
- 一 細曳 百四筋
- 一 洩帛 四百拾九枚
- 一 色紙 壺箱
- 三丸六番改雜納戸
- 一 布 拾五端
- 一 厚紙 九束
- 一 吉野葛 七斗八升五合
- 一 木海月 壺斗五升
- 一 茶臼 壺柄
- 三丸七番改雜納戸
- 一 白苧 七貫目
- 一 鍋 大小 式拾式
- 一 大間鍋 拾七
- 一 砂皿 四百五拾
- 一 砂鉢 九
- 一 晒苧 五貫七百目
- 三丸八番改雜納戸
- 一 かたくり粉 五斗九升
- 一 蕨之粉 式斗九升式合
- 一 黒塗手之洗 式 湯次共
- 一 ため塗手水手洗 壺 柄指共
- 一 錫切立 拾
- 一 錫德利 五器
- 一 木綿 壺端壺丈
- 一 煎焼鍋 式
- 一 古折敷 式拾枚

一	たれ味噌桶	式
一	桶 大小色々	式拾四
一	半長持	式
一	水なかし 大小	三
一	膳台	四
一	とうこ	壹組
一	膳棚	式
一	三尺戸	壹枚
一	弁当棒	六本
一	古明箱 大小色々	惣数四拾壹
一	炭斗	式
一	瓶 大小	三
一	壺	式
一	まな板 大小	拾七
一	指舟	式
一	古丸盆 但こハれ物共	拾式枚
一	手樽	三
一	損シ鍋	式
一	炭をとし	壹
一	すり鉢	六
一	茶碗鉢 但われ鉢共	拾六
一	木鉢	壹
一	湯桶	壹
一	温飽板	壹枚
一	長持之棒	四本
一	以上	

右御道具相改不殘渡之候以上

溝口信濃守内

天和元辛酉年十月

速水一学 (印)

水野隼人正内

鈴木主馬 (印)

松平出羽守様御内

崔部九右衛門殿
 岡野市右衛門殿
 伊達遠江守様御内
 荻原源太左衛門殿
 佐久間磯右衛門殿
 右帳面之諸道具水野隼人正家来
 鈴木主馬溝口信濃守家来速水一学
 改相渡候旨奥書判形有之候但
 雜道具之内二者越後守家来書出候
 帳面与少し過不足有之由候各断二付
 加奥判者也

西

十月

滝十右衛門 (印)
 杉五左衛門 (印)
 本新五兵衛 (印)
 桜藤兵衛 (印)
 中長兵衛 (印)
 蒔八郎左衛門 (印)
 高善左衛門 (印)

松平出羽守殿内

崔部九右衛門殿

岡野市右衛門殿

伊達遠江守殿内

荻原源太左衛門殿

佐久間磯右衛門殿

右御帳面之御道具今度 出羽守様

遠江守様以御相談二宮様江被遣之候

無相違慥請取申候以上

高松殿二宮御方内

天和元辛酉十二月日

奥津市郎左衛門 (花押・印)

同 西尾 (印)

松平出羽守様御内

一	屏風箱	壺	一	本地たんす	貳
一	こハレ箱	壺	一	古台子 但はした物	三組
一	くすれ膳棚	壺	一	古風炉 外こくとく有	三
一	やふれ渋紙	壺ゆい	一	茶うす	壺から
一	同所十二番改円斎預り蔵	貳双	一	花瓶	壺
一	古白地貳枚絵屏風	貳双	一	すひつ 外ふち壺	貳
一	古貳枚金絵屏風	壺双	一	懸とうかい	貳拾
一	古絵六枚屏風	三双	一	古花桶	三
一	古屏風	片々	一	古きう台	壺
一	右黒塗蒔絵重箱	三組	一	うす板	壺枚
一	此内壺組ハレ外二黒塗蒔絵重箱壺重有	壺ツ	一	しよく台	三拾本
一	右黒塗蒔絵提重	壺ツ	一	袋行灯 但取集こハレ物	九
一	古丸盆 但かけ共	貳拾枚	一	かな行灯	三
一	古たはこ盆	貳枚	一	手燭 但こハレ物	貳
一	外はいふき一ツ火入一ツ有	壺	一	合羽入わく	三
一	赤かね口鍋	壺	一	古かさね箱	四
一	古ため塗ふち高	貳拾四	一	わたしかね 大小	三
一	古花毛氈	六枚	一	古炭斗 但こハレ物	九
一	右者半長持入	貳	一	三方足打 但こハレ物	四かゝけ
一	古手拭懸	三	一	取集雑桶	貳拾貳
一	赤かね古火かき	三	一	火鉢家	壺
一	ため塗古ちり取	三	一	こハレ打板	四枚
一	ちよく 内貳ツ者さら	物数拾三	一	戸棚	壺
一	壺ツ者ちやわん	壺	一	明長持	壺
一	ほうろく	壺	一	帳箱 内硯箱壺有	壺
一	そめ付小鉢	壺	一	こハレ挑灯	貳
一	右者半長持入	壺	一	壺	壺
一	塗はんぞう 湯桶共	三	一	明箱	物数百
一	赤かね手水手洗	壺	一	以上	
一	かね火鉢 内壺ツはんど	拾五	一	本丸台所雑部屋改帳	
一	こたつ櫓 内置こたつ壺	四	一	半切 大小色々	三拾四

3. 越後高田御本城雜藏道具帳

越後高田御本城雜藏道具帳

本丸雜藏一番改	七束八帖	同所三番改雜藏	貳本
帳紙	七 二家人	番刀 内六拾九腰	三本
箱挑灯	四斗五升	脇差 内六腰	貳本
木海月 九袋	拾五把	つはなし	貳拾壹枚
苧 中振	拾貳枚	馬皮 外毛皮壹枚有	五拾腰
かき紙	拾五枚	熊皮	八枚
薄縁	拾五枚	貳拾三枚	二長持入
こさ	壹本	羚羊皮	四枚
はき	一棹	古黒碗朱碗集物	一長持入
明長持	拾	湯次 内九ツ唐金之湯次	拾三 壹箱入
明箱 大小	壹	古湯次	拾 壹箱入
炭入		間鍋	三 壹箱入
同所二番改雜藏		古留塗湯桶	拾 壹箱入
紺木綿 下々古着	百三拾四	古食次 外古七ツ鉢一組有	貳拾壹 壹箱入
但三箱入		古貝桶	壹 箱入
たう紙	二緘	古膳 但取集物	四拾九膳
薄はり	一包	こはれ丸盆	拾七枚 一長持入
棒	三拾九本	板折敷	拾枚
熊手	拾本	胡椒壺	拾箱
手鋤	四丁	薬罐	壹
染革	貳枚	塩辛壺	貳
さらし苧	貳把卜遣残り	われ鍋	貳
ことく	壹	とく利	四
明箱 大小	拾三	鉢 但われ共	七
木綿紺之單羽織	拾七 壹箱入	古食櫃	壹
革下緒	百	古指躬皿	四拾四 壹箱入
古紙桐油	壹		

一 同水さし	壺	
一 青磁硯屏	壺	
一 印判文鎖	壺	
一 朱四角盆	壺	枚
一 高麗ひかわり茶碗	壺	
一 以上拾八色		
一 半長持二入分		
一 口宣箱		
一 徳川家系図箱二入		
一 以上式色		
外御内書十三通 公義江上ル		〔御内書十三通上ル〕 (下札)
嚴有院様御名乗字目録壺通		
一 青香葉茶壺	壺	
一 木曾葉茶壺	壺	
一 山名葉茶壺	壺	
一 れんけわう葉茶壺	壺	
一 但はこの銘なし		
一 きんまの手葉茶壺	壺	
一 但同断		
一 茶釜 但あられ	壺	
一 廿四孝之絵屏風	壺	
一 古法眼筆		
一 梅屋賛		
右御道具相改不殘渡之候以上		
溝口信濃守内		
天和元辛酉年十月		
速水一學 (印)		
水野隼人正内		
鈴木主馬 (印)		
松平出羽守様御内		
菅部九左衛門殿		
岡野市右衛門殿		
伊達遠江守様御内		

荻原源太左衛門殿	
佐久間磯右衛門殿	
右帳面之諸道具水野隼人正家来	
鈴木主馬溝口信濃守家来速水一学	
改相渡候旨奥書判形有之候我々	
立合相違無之付加奥判者也	
西	
十月	
滝十右衛門 (印)	
杉五左衛門 (印)	
本新五兵衛 (印)	
桜藤兵衛 (印)	
中長兵衛 (印)	
蒔八郎左衛門 (印)	
高善左衛門 (印)	
松平出羽守殿内	
菅部九右衛門殿	
岡野市右衛門殿	
伊達遠江守殿内	
荻原源太左衛門殿	
佐久間磯右衛門殿	
右御帳面之御道具今度 遠江守様	
出羽守様以御相談二宮様江被遣候且又	
別紙目録三冊添之被遣慥請取申候	
此御帳之内 御判物入箱三 公義江	
被差上候旨致承知候以上	
高松殿二宮御方内	
天和元辛酉十二月日	
奥津市郎左衛門 (花押・印)	
同	
西尾 (印)	
松平出羽守様御内	
柳多四郎兵衛殿	
伊達遠江守様御内	
神尾外記殿	

一 備前国景光脇指
 一 左文字脇指
 一 来国次脇指
 一 相州行光脇指
 一 肥州国資刀
 一 備前国宗吉太刀
 一 備中国貞次太刀
 一 相模国行光脇指
 一 無銘長谷部脇指
 一 無銘光包
 一 長谷部国信脇指
 一 信国銘折返シ
 一 磨上青江
 一 磨上保昌五郎
 一 磨上盛景刀
 一 磨上家助
 一 延寿国綱刀折返シ
 一 磨上青江
 一 入銘吉平中脇指
 一 宗吉刀
 一 兼安
 一 無銘末之三原
 一 安吉
 一 京物国永刀
 一 磨上木梨三原刀
 一 雲生刀
 一 景秀刀
 一 景光刀
 一 助宗刀
 一 兼光脇指
 一 備前助長刀
 一 尻懸刀

一 尻懸刀
 一 弘安刀
 一 三条吉家脇指
 一 備前国政光刀
 一 磨上法城寺中脇指
 右之分折紙有之道具無之由
 外 岡嶋壺岐遣物
 真綱刀
 倫光之折紙
 行平之折紙
 二字国俊之札
 右之分上包紙ニ書付有之而内ニ折紙札も
 無之勿論道具無之候以上
 以上刀脇指 七拾六腰
 内□□□

一 本丸矢倉之内ニ有之道具之覺
 一 三丸茶湯道具長持ニ入分之書付有
 一 青貝筆 一本
 一 堆朱六角重印籠 一組
 一 硯 一面
 一 きんかい 茶椀
 一 青磁ふた獅子香炉 壺
 一 随心院御門跡哥仙 一卷
 一 仙洞小色紙 懸物表具有
 一 高麗わりこうたい 茶椀壺
 一 新院勅筆 懸物表具有
 一 秀丸様御懷帑 掛物同断
 一 唐金牛之筆荷 壺箱入
 一 おらんたやき唐獅子
 一 唐金水次 壺
 一 高麗薄茶之碗 三ツ

一	則光 同	一	無銘刀	白さや金はゝき有
一	長谷部国重脇指 拵有小柄小刀共	一	無銘脇指	白さや木はゝき有
一	綱家脇指 同断	一	備前基光脇指	拵小柄小刀なし
一	無銘脇指 白さや	一	備前国宗刀	白さや金はゝき有
一	同磨上刀 拵有筭小柄小刀共	一	備前盛光脇指	拵有小柄小刀なし
一	無銘之刀 拵有目貫有筭小柄無之	一	加賀行光脇指	右同断
一	無銘脇指 拵有小柄小刀無之	一	真次脇指	白さや木はゝき有
一	同少刀 拵有筭小柄無之	一	宇津刀	拵有筭小柄小刀なし
一	金剛兵衛脇指 拵有小柄小刀無之	一	国光脇指	白さや金はゝき有
一	守行脇指 代銀拾枚之札有	一	磨上刀 石州物	代金壹枚五両之札有之
一	磨上脇指 拵有小柄小刀無之	一	来国宗脇指	拵有小柄小刀無之
一	恒弘刀 白さや 右同断	一	三原刀	但拵有鐔筭小柄小刀共二
一	順慶刀 拵有筭小柄小刀なし	一	吉岡一文字脇指	代金壹枚之札
一	正則脇指 拵金熨斗付小柄小刀無之	一	磨上ひかき刀	白さや木はゝき
一	無銘磨上刀 拵有筭小柄小刀共	一	包永刀	白さや金はゝき有
一	備前盛光少刀 拵有筭小柄小刀有	一	磨上ひかき刀	白さや 上はゝき金
一	信国脇指 拵有目貫小刀無之	一	無銘刀	下はゝき銀
一	国俊刀 拵有	一	無銘脇指	代銀拾枚之札有
一	新身刀 拵無之金釧有	一	但加賀行光	
一	無銘磨上之刀 拵有筭小柄小刀有	一	磨上無銘脇指	拵有鐔小柄小刀無之
一	目貫無之	一	以上廿式腰	
一	国信脇指 拵有小柄小刀無之	一	外	
一	以上刀脇指式拾六腰	一	刀掛箱道具一通り有之	
一	本丸廣間在之内刀脇指長持四番	一	折紙計有之道具無之分	
一	三条脇指 白さや金はゝき有	一	来国俊脇指	
一	藤嶋脇指 拵有小刀無之	一	二字国俊刀	
一	備前祐光刀 代金壹枚之札有	一	二字国俊刀	
一	但拵有鐔筭小柄小刀無之			

一	増田吉光脇差	同	一	但拵有小柄小刀共二	
一	二字国俊刀	拵有	一	金重刀 白さや	代金壹枚之札有之
一	道誉一文字刀	白さや	一	国行刀 拵有筭小柄なし	折紙無之
一	御書出入箱 公義江上	「御書出入箱 下札」	一	則房太刀 太刀拵有	右同断
一	宣旨入箱	式	一	長光長刀 さや有柄なし	折紙無之
一	御判物入箱 公義江上	御判持入箱	一	以上刀脇指長刀共拾八腰	
一	以上刀脇指拾腰		一	赤銅式足連獅子目貫	祐乗作
一	本丸廣間在之内刀脇指長持二番		一	同色絵樂阿弥目貫	同人作
一	来国次脇指	代金百枚之折帋有之	一	同虎目貫	同人作
一	但拵有小柄小刀目貫共二		一	金三足連獅子筭	栄乗作
一	左安吉脇指	代金拾五枚之折紙有之	一	同式足連獅子筭	祐乗作
一	但拵有小柄小刀共二		一	赤銅色絵虎筭	同人作
一	青江刀	代金拾枚之折紙有之	一	赤銅いたてん筭	作不知
一	但拵有筭小柄小刀共二		以上	目貫 三具	
一	高木貞宗刀	代金拾枚之折紙有	筭 四本		
一	但拵有筭小柄小刀共二		一	折紙計在之道具無之分	
一	三原正廣太刀	代同断	一	金獅子目貫	
一	但太刀拵有		一	色絵夕顔目貫	
一	三原刀	代金七枚之折紙有	一	同駕目貫筭小柄	
一	但拵有筭小柄小刀共二		一	同笹口目貫	
一	長谷部脇指白さや	代金五枚之折紙有	一	金色絵井筒藤之目貫	
一	志津脇指	代金貳枚五両之札有之	一	色絵海松貝目貫	
一	但拵有小柄小刀共二		一	金俱利迦羅龍小刀柄	
一	宇津脇指	代金壹枚五両之札有之	一	無銘真景脇指	
一	但拵有小柄小刀なし		一	右之分折紙札計有之而道具無之	
一	中嶋来脇指 白さや	右同断	一	本丸廣間有之内刀脇指長持三番	
一	辰房脇指 白さや	右同断	一	吉房刀 拵有筭小柄小刀共	
一	了戒脇指 拵有	右同断	一	磨上刀 白さや作不知	
一	備前国宗刀	右同断	一	包後脇指 拵有小柄小刀有目貫無之	
一	但拵有筭小柄小刀共		一	来国光脇指 拵有小柄小刀共	
一	宇津脇指	代金壹枚五両之札有之	一	月山脇指 同断	

一	鳩之香炉	壺
一	くりく食籠	一組
一	青磁下皿	壺
一	朱盆	壺枚
一	以上廿式色	
一	本丸廣間在之内土蔵二番長持	壺 上家有
一	源氏筥 梨地蒔絵	壺
一	但源氏一部筆者不知	
一	食籠 大小	式
一	大耳水指 但唐金	壺
一	青磁布袋香炉	壺
一	唐錫水次	壺
一	高麗茶碗	四
一	人形硯	一面
一	堆朱角食籠	一組
一	紅花盆	一枚
一	錦手六角鉢	壺
一	同食籠	一組
一	和漢朗詠集	筆者不知
一	鴈之硯	一面
一	かねの麒麟香炉	壺
一	東山殿写之硯箱	壺
一	尊円手本	一卷
一	うす板	一枚
一	南蛮水指	壺
一	たひひさんくりはち	壺
一	ふち赤之盆	壺枚
一	白川殿筆	三拾六人哥合
一	長恨哥	一卷
一	二条為氏筆卷物	
一	唐物挽溜	壺

一	以上廿四色	
一	本丸廣間在之内土蔵三番長持	
一	古田 添状二通并	三幅対 表具有之
一	外題二枚	
一	毛松虎之絵 添状三通	一幅 表具有之
一	蒔絵硯筥 西行	壺
一	新百人首	公代
一	近江八景 絵照高院	
一	哥寄合書	
一	以上拾五色	
一	入日記之外	
一	米元起絵	懸物 表具有
一	本丸廣間在之内土蔵四番長持	
一	櫛箱 小道具共二	
一	鷹之書物并麝香一箱梨地箱二入	壺枚
一	堆朱大盆	壺
一	竹之子 但青磁	花入壺
一	御内書入ル筥	壺
一	以上五色	
一	本丸廣間在之内刀脇指長持一番	
一	稻葉卿	白鞘
一	切込正宗	同
一	童子切刀 太刀拵一通有	
一	(江方) 伯耆国安綱作	
一	氏郷貞宗脇差	白さや
一	敦賀正宗刀	同
一	貞宗刀	白さや
一	吉光脇差	同

外覺書一通		堆朱布袋香合	壺
		同人形香合	壺
		いんたい布袋香合	壺
		青葉雁香合	壺
		薰物	二箱
		ろてい口	茶入壺
		若狹盆	壺枚
		堆朱軸	壺本
		以上式拾九色	
外筆者不知書物一冊			
本丸廣間在之内二番長持			
一	大海	茶入壺	
一	探幽 表具有	三幅対	
一	経筒	青磁花入壺	
一	うけ口	かね花入壺	
一	織部盆 添状有	壺枚	
一	唐金	花入	
一	嶋かんとく乃切壺		
一	もうるかんとくの切式		
一	いんきんのきれ 五		
此三色之きれ花入箱之内有之也			
一	飯銅	茶入壺	
一	丸壺	茶入壺	
一	大燈 添状五通并外題壺通	横懸物壺幅	
一	古法眼鷹絵 添状一通	一幅表具有	
一	古法眼 表具有	二幅対	
一	探幽 右同断	三幅対	
一	石室 右同断	懸物一幅	
一	井戸	茶碗壺	
是者従大御台様高田様へ被遣候由			
本丸廣間在之内土蔵一番長持入			
一	瀬戸水指	壺	
一	古備前水指	壺	
一	青磁口よせ小香炉	壺	
一	同硯屏 大小	式	
一	荷葉硯	一面	
一	天目台	三	
一	建蓋天目	式	
一	卓花入 但唐金	壺	
一	かね乃卓花入	壺	
一	かね乃かけ花入	壺	
一	青磁いかけ筆荷	壺	
一	唐金雨龍筆荷	壺	
一	文鎮	式	獅子人形
一	軸留	壺	
一	焼かち入 但やき物	壺	
一	唐墨	壺挺	
一	青磁蓮之茶台	壺	
一	同釣舟	壺	
瀬戸		茶碗壺	
井原		茶碗壺	
門跡		茶碗壺	
唐獅子香炉		壺	
茶酌 利休		三本	
折部			
しらぬ翁遠州		一卷	
古法眼和田合戦		七枚表具無之	
探幽絵		三	
茶入 古袋			
以上式拾式色			

1. 今度長崎ニ而相調申卷物并御道具之帳

今度長崎ニ而相調申卷物并御道具之帳
寛永九年正月十六日
村井三太夫
根津権右衛門尉

- 一 百三拾端ハ ひちりめん^{かん}
此代八貫八百四拾目壹端ニ付六拾八匁記但口錢共
- 一 貳百端ハ 白ちりめん
此代六貫四百三拾四匁壹端ニ付三拾貳匁分七リ^カン記
- 一 百五拾端ハ 白さあや
此代六貫百貳拾六匁四分五リ^ン壹端ニ付四拾目八分四リ^ン
- 一 百五卷ハ 白小りんす
此代五貫四百壹匁貳分壹端ニ付五拾壹匁四分四リ^ン記^カ
- 一 百卷ハ 黒しゆちん
此代八貫四百六拾目四分壹端ニ付八拾四匁六分余
- 一 百五拾五卷ハ 黒とんす
此代拾三貫九百貳拾六匁七分五リ^ン壹端ニ付八拾九匁八分四リ^ン
- 一 百六卷ハ おくしゆす
此代八貫五百八拾壹匁貳分壹端ニ付八拾目九分五リ^ン記^カ
- 一 六拾五卷ハ かんたう
此代三貫五百四拾三匁五分壹端ニ付五拾四匁五分貳リ^ン余
- 一 貳拾五卷ハ 色ノ小しゆちん
此代壹貫四百五拾七匁貳分五リ^ン壹端ニ付五拾八匁貳分九リ^ン
- 一 壹卷ハ 大びろうたう
此代四百三拾貳匁壹分五リ^ン 但色くろし
- 一 壹卷ハ こかべちよろ
此代九拾目 但色くろし
- 一 貳卷内 壹卷ハちや 金入ノ鋳子
壹卷ハこいもゑぎ
- 此代八百目

右物数惣合千四拾卷

此代銀六拾四貫九拾貳匁九分

以上

御道具之覺

- 一 壹ツ くり之御長箱長壹尺六寸八分端五寸八分高五寸七分
- 一 壹ツ 同御長箱長壹尺七寸五分端六寸五分高七寸貳分但貳重
- 一 壹ツ 同御ふんこ長壹尺六寸三分端壹尺壹寸貳分高三寸五分
- 一 壹ツ 同四角盆長七寸五分端六寸
- 一 壹ツ 同四角盆七寸貳分四方
- 一 壹ツ 同四角盆六寸貳分四方
- 一 壹ツ 同八角盆指渡シ五寸五分
- 一 壹ツ 同長盆長壹尺壹寸八分端四寸三分
- 一 壹ツ 同四角盆長九寸三分端七寸六分
- 一 壹ツ 同大盆指渡シ貳尺但ふちニやうあり
- 一 壹ツ 同大盆さしわたし壹尺五寸但ふち丸シ
- 一 壹ツ 同御印籠三寸八分四方高四寸五分但三重
- 一 壹ツ 同御印籠三寸八分四方高四寸五分但三重
- 一 壹ツ 同御香盆指渡シ八寸六分但なりききやう
- 一 壹本 同御筆の地く
- 一 壹本 ひいどろ御筆のちく
- 一 壹ツ 染付御茶碗吉文字但今渡り
- 一 五ツ 同御香箱色々但今渡り
- 一 壹ツ 同御硯水入但今渡り
- 一 貳ツ 同御鉢
- 一 壹ツ 同太鼓徳利但今渡り
- 一 壹ツ 同ちんこつほ
- 一 壹ツ 同御香炉但松竹梅 指渡シ貳寸四分半ひずミ
貳寸五分半高貳寸三分輪
かう台共二ひゝき貳つ有

中世考古学文献研究会会報

第3号

2004. 12. 2

考古学のための出土遺物文字解説 堅田B遺跡

前嶋 敏

堅田B遺跡は、石川県金沢市堅田町にある約 5200 m²の遺跡である。発掘地点およびその周辺は水田であった。遺跡の北側に位置する通称「堅田山」には堅田城跡があったとされているが、縄張り・遺構等は確認されなかったため、堅田城跡と遺跡はつながっていない、と解釈されている。遺跡の年代としては、建長3年(1251)と弘長3年(1263)の巻数板から、13世紀半ばにはすでに成立していたとされている(13世紀半ばに一度屋敷の拡張工事が行われ、西に広がっている。北も掘り返しがあったという)。そして、15世紀代の遺物も出土している点から、15世紀までの遺跡の存続が認められている。遺跡の性格については、多くの出土品等からも有力武士の居館跡と考えられている。向井裕知「中世居館とその周辺—金沢市堅田B遺跡と周辺遺跡の調査より—」(中世みちの研究会第7回研究集会『古代から中世へ』、2004年)においては、「荘官を管理していた人物」、「一定地域の流通や交通の統括者」を想定しており、うなずける点が多い。なお、これら遺跡発掘の成果は金沢市文化財紀要199『堅田B遺跡Ⅰ』(金沢市埋蔵文化財センター、2003年)および同紀要213『堅田B遺跡Ⅱ』(同、2004年)に詳しく記載されている。

遺跡からは2098点の遺物が出土している。その大半は土器、木製品であるが、そのうちに木簡類は41点、さらにそのうちで卒塔婆が26点、転読札等が3点見られる。その他の墨書木札等についても、烏帽子姿の描かれたもの等、興味深いものが多い。

卒塔婆等の出土位置は拡張工事以前の西堀(12点)、拡張後の西堀(2点)、北堀(12点)、がほとんどであり(井戸から1点、出土地不明の包含層から1点)、そのすべてが13世紀中頃～14世紀後半の遺物と考えられる。

なおこれら卒塔婆のうち、とくに拡張工事以前の西堀から出土したものについては、同じ地点から出土した巻数板との関連が注目されており、この地で修正会(巻数板吊りの一連の行事)が行われ、その場面で使用されたものであったことが推定されている。居館跡においてこのような遺物が出土し、13世紀中頃に修正会を行っていたことが推定できる点は大変注目できよう。

以下にそれら卒塔婆、転読札等29点のうち、文字の記された17点について紹介することとしたい。なお、先に触れた巻数板については、これまでも多くの先行研究があるが、卒塔婆との関連のみにとどめてここでは直接触れないこととしたい。

①南无大日如来・南無大日如来・南无〔9点〕

- ・南无大日如来(4点)
- ・南口(无力)(1点)

- ・南無大日如来（3点）
- ・南□（無力）（1点）

本遺跡出土の卒塔婆中、その占める率が最も高いものが「南无大日如来」であり、卒塔婆 26 点のうち、全体の約 35%を占める。また、「南无大日如来」と記されたものはすべて拡張以前の西堀から出土したものであり、「南無大日如来」と記されたものは拡張以後の西堀から出土している。さらに「南无大日如来」とされた 4 点は同筆と考えられ、また「南□（無力）」についてもその可能性がある。これもやはり拡張以前の西堀から出土したものであり、注目できよう。

②南無五代力菩薩・南無観世音菩薩〔2点〕

- ・南無五大力菩薩（1点）

五大力菩薩は、金剛吼、竜王吼、無畏十力吼、雷電吼、無量力吼（五菩薩）の総称。『仁王般若波羅蜜經』で国を守護する仏と説かれる。民間の信仰・盗難除など種々の厄難から護る仏としても信仰された。

- ・南無観世音菩薩（1点）

観世音菩薩は十三仏の百ヶ日導師。阿弥陀三尊では阿弥陀如来の脇侍としてもまつられる。後掲する『長楽寺永禄日記』によれば、修正会ではまず観音経が誦されている。五大力菩薩とあわせ、『報告書Ⅱ』の指摘にも見られるが、修正会との関連にも注目できよう。

③梵字（バン）〔3点〕

- ・梵字（バン）（2点）
- ・□（梵字（バン）カ）（1点）

梵字（バン）のみを記す卒塔婆は本遺跡においては 3 点のみである。なお（バン）は大日如来を示している。

④その他（転読札等）

- ・奉轉讀大般若波羅密多經一部六百卷（1点）
- ・奉轉讀大□若經所也（1点）
- ・尊勝陀羅尼□□ 康応（カ） 六月八日（1点）

なお永禄 8 年(1565)正月に上野国の長楽寺で修正会が行われている。『長楽寺永禄日記』にその内容が記されているので、これについてもあわせて触れておきたい。

（正月）朔日、

午刻鼓ヲ鳴シ、コレニテ勤行ヲイタス也、○先金剛經・心經三卷・消災呪ニテ日中之回向也、○二度目ニ觀音經・大悲呪・消災呪三返ニテ看經之回向也、○三度目三度目ガ修正也觀音經一卷・心經三卷・消災呪三返、次ニ（不動真言）ヲンタラタウカンマンノウマクーソワカ、次ケンバイ ヴ ソワカ、次（薬師小呪）ヲンコロ ヴ センダリマアツフキソワカ、次ニ南無般若十六善神、次ベイシユラマン（毘沙門天真言）ーソワカ、次ニボロヲン ヴ （一字金輪真言）回向ナシ、誦ステニテ畢、次放參ニ梭巖呪ヲヨミヲツテ各カヘラル、

(正月) 二日、
鼓ヲ鳴シ、修正ヲ如昨勤也、勤行之次第ハ朔ト同前也、

(正月) 三日、
太鼓ヲナラシ、修正ヲイタス、今日ハ満散也、

(正月) 八日、仙袂(せんべい) ニ三ケ用、喫茶、勤行之事、早晨、次、七日火徳、大悲呪・消災呪
ニテ回向、次修正、観音経、心経三卷、消災呪、唵タラタウーソワカ、ケンバイーソワカ、唵コ
ロコローソワカ、南無般若ー神、バイシユラーソワカ、ボロワン ヴ ヴ、座ヲ立、放参、梭
巖呪、消災呪回向、各被皈(帰)也、

本遺跡の時代より下る、しかも地域の異なる寺院の記録であるが、正月元日から三日、八日について
の勤行の内容が同様であること、また修正会では観音経一卷、心経三卷、消災呪三返、般若真言、
薬師小呪などを誦していたことなどがわかる。本遺跡出土巻数板に記された文字の全文については前
掲報告書に譲るが、そこに般若心経の全文が記されており、あわせて注目できるであろう。

考古学のための出土遺物文字解説 由比ヶ浜南遺跡

前嶋 敏

由比ヶ浜南遺跡は、神奈川県鎌倉市由比ガ浜にある 13 世紀前半から 18 世紀にいたる約 10,000 m²
の遺跡であり、とくに埋葬遺構が多数発見されている。発掘地点およびその周辺は海浜砂丘であり、
鎌倉の海岸線のほぼ中央に位置している。隣接する由比ヶ浜集団墓地の遺跡および由比ヶ浜南遺跡は、
これまでに数多くの発掘調査が行われており、全てをまとめた報告はなされていないものの、明らか
にされているところが多い。

遺跡全体は十一層に分かれるが、おおまかに下層から 13 世紀前半、13 世紀前半～14 世紀中頃、14
世紀～15 世紀後半、15 世紀後半、18 世紀以降の五段階に時期区分されるという。それぞれは埋め立
て前の海岸部、生活遺構群、埋葬遺構群、軽石層、火山灰層に区分される。なお、生活遺構群および
埋葬遺構群に多くの遺物が出土しているが、この両群の区別は必ずしも明確ではなく、時期的な前後
関係も曖昧である。また多くの建物址群については埋葬遺構との関係が注目されている。

なお、本遺跡の埋葬遺構については、墓地という概念ではなく、鎌倉で生じた遺体を埋葬あるいは
火葬する葬地であったと考えられているが、これら葬地の位置づけ等については今後も議論が必要で
あろう。

これら遺跡の発掘成果については、由比ヶ浜南遺跡発掘調査団『神奈川県・鎌倉市 由比ヶ浜南遺
跡』(全 4 分冊、2001 年 3 月～2002 年 3 月)に詳しい。なお、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡・由比ヶ浜
南遺跡の全容については、これまでも多数の研究がなされてきたが、ここでは同調査によって発掘
された 10,000 m²の由比ヶ浜南遺跡を解説の対象とし、それ以外をあわせた遺跡全体に関しては、今後
の課題としたい。

由比ヶ浜南遺跡から出土した遺物は多数あり、特に埋葬人骨が注目される。また出土遺物としては、
かわらけ、古銭等 3,326 点が見られ、木製卒塔婆について多く見ることはできないが、13 世紀前半～
14 世紀中頃の層(生活遺構群)から 6 点見られる。それ以外に人形などの形代と考えられる木製品が
20 点見られる。これらはすべて遺跡の中央を南北に流れる河川跡から出土している。なおこれら卒塔

婆のうち、文字の記載されているものは1点である。

さらに河川跡の東に、南北に 50m、東西に 40m の敷地をもつと見られる屋敷跡が検出されている。本遺跡にあっては広大な屋敷であるが、その建物の中央部、礎石のある辺りに板碑が1点検出されている。出土地からも、他の埋葬遺構と直接結びつけることは難しいが、注目できる資料であろう。

また、15世紀頃の層（軽石層）からは安山岩製五輪塔の空風輪2点が出土している。それぞれの四面には梵字が刻まれ、金泥を見ることができる。なお、この五輪塔に関しては、その他の埋葬遺構等との関連性を認めることが出来ず、前掲報告書においては、廃棄のために運び込まれたものと推定している。

以下、由比ヶ浜南遺跡で出土した、文字の記載された卒塔婆等4点について紹介したい。

①板碑〔1点〕

- ・梵字（キリーク）（蓮華座） 嘉元三年二月

緑泥片岩を用い、板状に成形されている。頭部は三角に尖っているが、二条線は見られない。また、黒色系漆の上に金箔が貼られている。板碑に金箔が残っている例については、千々和到『板碑とその時代』（平凡社、1988年）において多数紹介されており、金泥などで装飾された板碑がむしろ一般的であったことが指摘されている。

なお、紀年銘「嘉元三年二月」（1305年）からもこの周辺の年代をある程度推測することができ、基準資料として重要と考えられる。

②塔婆〔1点〕

- ・梵字（バン）南無大日如来 / 梵字（バン）南無大日如来 / 梵字（バン）南無大日如来

方柱状の塔婆の三面に文字が記されている。判読し難いが、四面目についても記載されていた可能性が高い。

③五輪塔（空風輪）〔2点〕

- ・梵字（キャ）梵字（カ） / 梵字（キヤク）梵字（カク） / 梵字（キャン）梵字（カン） / 梵字（キヤー）梵字（カー）
- ・梵字（キャ）梵字（カ） / 梵字（キヤク）梵字（カク） / 梵字（キャン）梵字（カン） / 梵字（キヤー）梵字（カー）

東（発心門）、北（涅槃門）、西（菩提門）、南（修行門）にそれぞれ対応した梵字が刻まれていたものと思われる。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋

片桐昭彦

A 永禄8年（1565）1月4日

一番鳥以前ヨリ各起、登山之用意イタサス、（中略）四番鳥之時分ウチ出、自山門本尊ヲヲガミ、ソノマヽ行、夜明、日之無出、大澤方へ行着、（中略）無程山へノホリ、小屋ニテ茶ヲノミ、金筑ニテ冷酒一献、二献目ニ椀麵ニテカン酒アリ、初献ヲハ内カタニノマセ、愚ノム、二献目ヲハ愚ノミ、金筑ヘサシツルトヲボユ、其後次第〃〃伴僧ニノマセラル、臈而実城ヘイヅ、イツモノコトク内カタニテ引

ワタシヲ出シ、土器杯ヲ同イタシ、五度之礼ニテ、内カタニノミ愚ヘサハル、愚杯ヲ内カタニノミ、岱子ニサハル、当年ハ岱子ニモ五度礼アリキ、伴僧ニ三度二度ノ礼ナリ、二献目ニ杯ヲ出シ、ザウニアリ、五度礼ヲ旦那ヘ申、愚シヤクニ立、酒ヲマイラセ、旦那ノシヤクニテ愚ノム、愚ガ杯ヲウケ、岱子ニ三度之礼ニテ旦那ノミ、岱ニサハル、又旦那ノミ、瑞・存ニノマセラル、存杯ヲ小座ヘト旦那ユワシマスヲ愚ウケトリ、小座ヘ三度ノ礼ニテ愚ノミ、小座ヘマイラス、ソノ杯ヲ又愚ノミツル、又旦那云イコトニ、六郎御酒ヲモコレニテ可申トテ、重別ニ杯ヲ出シ一献アリ、藤紀云イコトニ、ワザト愚シヤクニテ申可然ト被申程ニシヤクニ立、六郎殿ヘマイラス、六郎殿シヤクニテ愚ノミツル、此時岱ニモシキリニシイラレ、三杯ノミキ、実城ヲ立、十郎殿ヘ行、内カタニテ冷酒一献アリ、五度之礼ニテ内カタマツノミ、愚ニサハレツル、次第カ 伴僧ニサハル、伴僧吞アゲノ杯ヲ愚トリ、十郎殿ヘ礼ヲ三度申、愚先ノミ十郎殿ヘマイラセ、又、十郎殿之杯ヲ愚吞ツル、十郎殿ヘモ黄鸝ニ雲脚十袋、如例年梅殿ニ扇子一本マイラス、ソレヨリ右衛門佐殿ヘ二十疋・十袋、中書二十疋二十袋、ヲチ（落）合二十袋イタシ、丸橋右（丸橋右馬助）十疋・十袋、ソレヨリ開山ヘ参、別当ニ扇子一本・十袋ヲ持ツル、一、実城ヘ、如例年五十疋ニ茶廿袋・雲脚十袋ヲ重テ一ツニユイ合、二十疋御内方ヘ、三塔頭之三十疋酒代モ当年ハイタス、廳而イツモノコトク本尊ヘハツウトテ三十疋コナタヘイタサル、各茶ヲ出シ、酒代之事ハ別之注文ニアリ、山ヨリ吞嶺 御屋形、次ニ御入ヘ参ル、冷酒一献ニテ立、本尊ヘノハツウ一枝、大澤方ニテ一枝、何ヲモ行堂トル也、金龍寺ヘ参ス、茶子ニテ茶、土器ヲ先出、イヤヘヒマヲカハスルトテ土器ヲソノマハヲキ、ヌリモノハ杯ヲ出、ザウニノ上ニカン酒アリ、ソレ過テ椀メン・カン酒、瑞子・助右衛門尉ニハ椀ニテ一ノマセラレツル、中間トモマテ酒ヲ出シメシヲモテナシ、奔走ナリトモウス也、各大田ヘ礼ヲノベ、爰許ヘ戌刻ニカヘリツキ、（後略）

B 永禄8年（1565）2月9日

（前略）山ヘ登、此日左衛門二郎モ留守ニテ中嶋（境町）迄乗籠由、左衛門五郎（馬場カ）一札コシツル、

【解説】上に掲げた史料Aは、正月4日に上野国長楽寺の住持義哲が、旦那である由良成繁の居城金山城ヘ登り、成繁やその一族・家中それぞれのもとヘ年始の挨拶に赴いた際の記事である。義哲は、一番鳥の鳴く前に起きて支度をし、四番鳥の時分に寺を出発、夜明け前に世良田今井城主の大沢氏のところヘ年始の挨拶に行く。程なく金山を登り、自分の山の「小屋」で一服したあと、金筑（金谷筑後守）のところヘ挨拶に行き、金筑とその内方（妻）から酒（冷酒・燗酒）や椀麵を饗された。それからすぐに実城ヘ出て、まず成繁の内方に挨拶して酒・雑煮を饗され、次いで旦那（成繁）に挨拶して酒を饗され、小座と六郎（成繁の子国繁）にも挨拶して酒を飲みかわした。その後、実城を出て、十郎殿（横瀬新十郎か）のところヘ行き、十郎とその妻に挨拶をして酒をかわし、次いで、右衛門佐殿（横瀬新右衛門尉国広か）、中書（泉中務太輔）、ヲチ合（落合）、丸橋右（丸橋右馬助）それぞれのところヘ挨拶に行き、そこから開山ヘ参り別当に挨拶、そして「山」を出て、吞嶺御屋形（岩松守純か）と御入（坂中）にそれぞれ挨拶してから、金龍寺に参り、茶・酒・雑煮・椀麵・飯を饗されて、戌刻（午後8時ころ）に長楽寺ヘ帰ったことになる。

義哲はこのとき、由良家の主だった者たちのところヘ年始の挨拶に行ったが、「山」すなわち金山の上においては、実城以外に、金筑・十郎殿・右衛門佐殿・中書・ヲチ合・丸橋右のところヘそれぞれ挨拶に行っている。このことは、彼ら6名の住居が「山」にあったことを示している。つまり、他の家臣である矢内修理亮の屋敷「矢修小屋」と同じく（片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺

永禄日記解説 小屋・庭』『中世考古学文献研究会会報』第1号、2003年）、6名の「小屋」が「山」にあったのである。

次の史料Bは、2月9日に義哲は「山」に登ったが、その日に左衛門二郎（小此木）は中嶋（境町）まで出陣していて留守であったことを示している。このことから金山の上には、左衛門二郎の住居（小屋）があったことが知られる。

史料Aにみえる6名のうち、十郎殿・右衛門佐殿・中書は、いずれも由良成繁と血縁のある横瀬一族・一門であり、金筑は義哲と成繁との取り次ぎ役であり、落合・丸橋右馬助は由良氏の重臣である（『長楽寺永禄日記』用語解説、続群書類従完成会、2003年）。一方、史料Bの小此木左衛門二郎は、永禄4年（1561）初めころの『関東幕注文』（上杉家文書）に成繁の「同心」としてみえる。「同心」とは、本来は独立した領主層であるが、成繁のもとに軍事的に結集して従属した者を指すと考えられる。『関東幕注文』には、左衛門二郎と同じ「同心」の者が14名記されている。

以上の点から、由良氏の一門や重臣だけでなく、「同心」衆が居住するための「小屋」が、「山」（金山の上）にあったと考えられる。

そして注目されるのは、少なくとも金筑と十郎殿のところではそれぞれの内方（妻）とも挨拶していることである。つまり、金筑と十郎殿の「小屋」には内方も住んでいたのである。また、丸橋右馬助は、この年6月頃から長楽寺に在寺を願い出て長期滞在するが、そのあいだ右馬助の内方は金山城に居たことがうかがえるので（片桐昭彦「訴訟にみる長楽寺（義哲）と由良氏の関係」前掲『長楽寺永禄日記』解題）、おそらく内方は金山の上にある右馬助の「小屋」に住んでいたと思われる。

したがって、成繁への証人（人質）としての意味合いが大きいであろうが、いずれにせよ「山」にあった由良氏の一門や重臣の「小屋」には、それぞれの妻も居住していたのである。彼らの山の「小屋」には、少なくとも二人以上の者が居住できるスペースがあったことが明らかである。

また、金筑の「小屋」で酒（冷酒・燗酒）や碗麵、十郎殿の「小屋」で冷酒が饗されたように、それぞれの「小屋」には、義哲の「山の小屋」と同様（片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山の小屋」『中世考古学文献研究会会報』第2号、2004年）、食料や酒などを貯蔵する場所や調理できる場所だけでなく、客人を饗応するための座敷があった可能性が高い。

ところで、金筑は上田嶋城主、左衛門二郎は小此木郷の境城主、矢内氏は上江田城主といわれるように（『新田金山伝記』）、それぞれ自分の所領を持ち領内に城（屋敷）を持っていたと考えられる。実際に由良氏の「同心」である左衛門二郎は、ふだんは山の「小屋」ではなく境の城（屋敷）に居たとみられ（『長楽寺永禄日記』正月6日・4月29日条など）、頻繁に長楽寺の義哲のもとを訪れている。

したがって、「山」に自分の「小屋」があっても、それとは別に自分の領内に本来の屋敷を持っていたということになる。金山城内に「山の小屋」をもつ義哲にも、それとは別に本来住んでいる屋敷（長楽寺）があるのである。『長楽寺永禄日記』で使われる金山城内の「小屋」という語には、「本来住んでいる屋敷とは別の仮の住居」という意味合いがあるのではなかろうか。

そもそも「小屋」という語には、「④主な建物に付属して建てられた従者の住居。江戸時代では、藩主の藩邸内または城中にあった軽輩の住宅」という意味がある（『日本国語大辞典』）。山本博文氏は、近世の萩藩毛利家の「江戸麻布御屋敷土地割差図」（毛利家文庫、1770～1800年頃作成）を取り上げ、絵図では藩邸内の各長屋の一軒一軒を固屋（＝小屋）と称しており、狭い小部屋を連想しがちであるが、いまの3DKの公務員宿舎なみの広さはあるとしている（山本博文『江戸お留守居役の日記一寛

永期の萩藩邸』読売新聞社、1991 年)。近世では、藩邸内や城内における家臣や奉公人の居住する建物を「小屋（固屋）」と呼んでいたのである。

このような近世の藩邸内や城内における「小屋」の在り方は、金山の上に建てられた由良氏一門・重臣・同心衆の「小屋」や、義哲の「山の小屋」の在り方と同様ではなかろうか。すなわち、本来の屋敷を別にもつ者が、主人由良成繁の居城金山城内において、実城に属する形で建てられた住宅のことを「小屋」と呼んだと考えられる。つまり、「小屋」という語には、近世だけでなく少なくとも戦国期にはすでに、城内に建てられた家臣や従者の居住する建物という意味があったと言えよう。文献史料や絵図等に「小屋」と記載されているからといって、小屋掛けの簡便な小さな建物であったとは限らない。「小屋」といっても、座敷や庭を備え、食料の貯蔵・調理もできる金山城内の住宅なのである。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 鎌倉街道上道利根川渡河点・長井の渡

森田 真一

表1は、『永禄日記』において確認される、永禄8年の由良氏の出陣に関する記事をまとめたものである。永禄8年の時点では、由良氏は越後上杉氏に同調しており、甲斐の武田氏や小田原の後北条氏とは対立していた。表1から分かるように、永禄8年1月1日から9月30日の間に由良氏が出陣した場所（敵対した相手）を整理すると、由良氏の出陣は4回に大別できるようである。

1回目は、2月23日から3月2日にかけての那波陣（堀口、伊勢崎市）への出陣であり、敵対したのは武田氏である。由良氏は、武田晴信（信玄）が上州へ出張したために那波に出陣し（2月23日）、「南方（後北条氏）」が関宿への動きを見せたために帰城した（3月2日）。

2回目は、5月7日からおよそ5月25日にかけての出陣であり、敵対したのは後北条氏である。由良氏の元には、3月2日の段階で「南方（後北条氏）」が関宿へ動いているとの情報が寄せられている。これは、3月から5月にかけての後北条氏の関宿城攻撃に関するものである（佐藤博信「築田氏の研究」『古河公方足利氏の研究』校倉書房、1989年、初出1981年参照）。5月24日には後北条氏方は関宿から撤退しているようなので（5月25日）、由良氏も金山へ帰城したのであろう。

3回目は、7月21日から9月1日にかけての那波・厩橋（前橋市）方面への断続的な出陣であり、敵対したのは武田氏である。おそらく由良氏は7月20日に武田氏の「金敷平（箕郷町）」への出陣を知り、翌21日に那波陣へ出陣した。成繁は体調を崩して7月23日には金山へ戻るものの、8月16日には再び那波陣へ出陣した。そして、8月24日には厩橋へ駐留し、9月1日に雨の中を金山へ帰城している。成繁が帰城したのは、8月28日に金山へ「南方衆（後北条方）」の動きが伝わっており、それが厩橋の成繁の元に届いたからであろう。なお、1回目や3回目の出陣で敵対している武田軍の永禄8年の動向については、明確ではないようである（黒田基樹「武田氏の西上野経略と甘利氏」『戦国期東国の大名と国衆』岩田書院、2001年、初出1999年）。

4回目は、9月7日から9月26日（30日以降は日記が残存していないために不明）にかけての高林・矢嶋（太田市）方面への出陣であり、敵対したのは後北条氏である。9月6日に「敵（後北条氏）」の動きが長楽寺経由で金山へ伝えられ、翌7日に由良氏は出陣した。この出陣の顛末は、日記が途中で終わっているために分からない。

以上の4回の出陣から分かることは、由良氏が兵を動かしたのは武田氏や後北条氏への攻勢のためではなく、両者の動向に対処するためのものであったということであろう。例えば、1回目と3回目

の武田氏に対する出陣では、武田軍が「総社口（群馬町）」、もしくは「金敷平（箕郷町）」という金山からさして近くない地点に動いただけで、由良氏はとりあえず那波陣までは必ず軍勢を進めている。そして、1回目と3回目のいずれの行軍も、後北条氏方の動きが伝わると撤兵となっている。おそらく由良氏は、武田氏や後北条氏の主要な軍勢が出陣したという情報を手に入れると、機敏に対応して兵を動かさざるを得なかったのであろう。ということは、由良氏が兵を動かしていないにも関わらず後北条氏方の兵が長楽寺周辺などの新田領へ侵入していたとすると、その軍勢は由良氏の元にまでその情報が届かない程に小規模なものであった可能性が高かろう。

そこで、表2の平塚（群馬県境町）周辺の合戦に関する記事を見よう。平塚は長楽寺の所領であり長楽寺からほど近い距離に位置していることから、義哲は平塚に関する出来事を『永禄日記』にこまめに記していたと考えられる。既に指摘していたように、平塚は鎌倉街道上道の利根川渡河点の一つである中瀬の渡（埼玉県深谷市）の上野国側着岸地点として永禄8年の段階で機能していた（拙稿「鎌倉街道上道利根川渡河点・平塚」『中世考古学文献研究会会報』2号、2004年）。表2から、平塚を経て由良氏方もしくは後北条氏方が攻め入ったことが確認されるのは、1月7日・1月16日・2月20日・4月29日・5月17日である。この中の1月7日・1月16日・2月20日においては、表1からも分かるように由良氏自身は兵を動かしていない。1月7日では「廿騎計」、2月20日では「十騎計」の後北条氏方の騎馬が平塚から侵入し、1月16日では「何事」なく退散していった。したがって、これらの後北条氏方の軍事行動は散発的なものであったに違いない。残る4月29日と5月17日は、既述のように関宿合戦の時期に当たる。この頃には後北条氏方の主力は関宿へ向かっていた筈であり、由良氏の軍勢の多くも関宿へ出陣していたであろう。4月29日は、「当地」（世良田周辺）の足軽がおそらく偶発的に利根川の対岸に侵入し、無事に帰ってきたというものである。5月17日にも後北条氏方は平塚へ侵入してきたようであるが、それ以上の記述は確認されないことから平塚周辺では大きな被害を蒙らなかったのであろう。

このように、中瀬の渡を経由して行われる由良氏方・後北条氏方の軍事行動はいずれも突発的・偶発的なものが多く、その軍勢も小規模なものであったと推測されよう。7月24日に「此口」8月19日に「当口」（いずれもおそらく平塚経由）に後北条氏方が兵を動かすとの巷説はあるものの、結局のところ日記中に由良氏・後北条氏の双方のいずれもが平塚周辺に大軍を遣わしたという記述は見られない。このことから、平塚は利根川渡河点として軍事的にあまり重要ではなかったと考えられよう。

それでは、由良氏・後北条氏の双方がある一定規模の軍勢を結集させようとしたことが確認されるのは、利根川渡河点のいずれの地点であったのだろうか。2回目の関宿合戦に関わる出陣では確認できないものの、4回目の後北条氏の動きに対する出陣では由良氏は高林や矢嶋に兵を動かし、後北条氏方は「長井之南コエ塚ト云処へ」出陣し（9月15日）、「長井之筋ニテ鉄砲〔砲〕之ヲト〔音〕」が聞こえた（9月17日）。高林や矢嶋から南下をすると、利根川の渡河点である長井の渡が存在した。また、9月26日に成繁は「河辺」へ出馬している。義哲は平塚周辺の利根川岸を「瀬端」「河端」と記しているが、翌27日に成田（熊谷市）で鉄砲の音が聞こえたということ、また、26日以降には平塚周辺の「瀬端」「河端」で活躍していた「斎藤主税」などの動きが記されていないことから、この「河辺」とは長井の渡付近であろう。由良氏・後北条氏の両者は、利根川の渡河点である長井の渡を挟んで牽制し合っていたと考えられる。

鎌倉街道上道の村岡（熊谷市）から利根川を渡河して新田荘にいたるルートは、東日本の陸上交通における大動脈であったという。そして、このルートにおける利根川渡河点で最も著名なものは、北に金山城が立地する長井の渡であった（斎藤慎一「鎌倉街道上道と北関東」浅野春樹他編『中世東国

の世界1 北関東』高志書院、2003年）。なお、利根川を渡河して後の鎌倉街道上道は下野方面への接続が注目されているが、『永禄日記』中では厩橋への経路が示唆されている。義哲は、由良父子が高林へ出陣したことに賛意を表し、その理由を「太美（太田資正）・成左（成田左馬助氏長カ）厩橋（前橋市）マテノ首尾ヨカルヘキ」と記した（9月7日）。義哲は、8月25日に「氏康（北條）鉢形（寄居町）へ昨廿四被寄陣ト告来、信州へノ首尾ニ御嶽（神川町）へ河被進馬ト其聞アリツル」と同じように「首尾」を用いている。このことから、由良氏が長井の渡に程近い高林を押さえることは、太田氏・成田氏が厩橋の北条氏（きたじょう）と連携を図るために好都合であったのだろう。したがって、長井の渡の周辺を軍事的に掌握することは、下野方面のみではなく中毛地域（厩橋）への交通の連絡の上でも重要であったのだろう。

以上のことから、永禄八年の段階において、由良氏・後北条氏の双方にとって長井の渡は中瀬の渡よりも軍事的に重要な渡河点であったと考えられよう。

表1 由良氏の出陣地

日付	出陣地	記事	敵
2月23日	堀口	成繁（由良）者晴信（武田）上州江出張ニ附而父子堀口（伊勢崎市）へ出陣ナリ、	武田氏
2月25日	那波陣（堀口）	那波陣（伊勢崎市）為音信、山ヨリ手酒ヲ四タル（樽）、新三郎メニトリヨス、且那へノ文ヲ夜中岱子ニカゝスル、	
2月26日	那波陣（堀口）	那波陣へ助右衛門尉（飯田）遣也（中略）檀那父子晴信（武田）出張ニ付而、堀口へ出陣ニ候間、（中略）未刻、自那波陣実城・林伊（林伊賀守）・金筑（金谷筑後守）・藤紀（藤生紀伊守）返札帰着シツル、如書中者、昨廿五者三之宮（吉岡村）陣ヲ払、惣社口（群馬町）へ敵（武田方）相動ト委書シコス、	
2月29日	那波陣（堀口）	長嶋方ヨリ実城召之河原毛葉気ナル間、明後日ニ那波陣へ百性〔姓〕等同心可越分之返答也、	
3月2日	那波陣（堀口）	長嶋方ヨリ瀧河ヲ那ハ（波）陣へ平塚百性〔姓〕共同心ニテ可越分ニヨツテコス処ニ、（中略）周泉長手（太田市）ヨリ帰ニ自中途且那伝語アリツル、関宿（関宿町）へ南方（北條方）相動分夜中注進ニ附而帰城、	
5月7日	備場（関宿あたりか？）	金山ニ夜中鐘・螺〔法螺〕鳴ト告来間、無心元ニテの子ヲ山へ遣也、（中略）実城（由良成繁）ニハ中途へ打出サシマシ、留守ニ自六郎殿（由良国繁）返札アリキ、如書中者、以太美（太田美濃守資正）計策、岩付（岩槻市）へ夜中被打入由、実城自備場被申越候、可為悦喜段也、各承、喜不少、非時ヲハカサ（蓋）ニアマリ用、及晩太美（太田資正）岩付へ打入、令相違、成田（熊谷市）へノケラルト云説告来キ、朝ハ各喜、暮ニハ恐怖不斜、雖然堅固ニテ太美ノケラル、肝要也、	後北条氏
5月17日	関宿か？	梅源（梅澤源八郎）、斎弥来、関宿（関宿町）へノ陣触也、愚申事ニハ、爰許瀬リアマタ御座候而、今朝モ平塚へ乗籠候條、河辺者ヲハサシヲカレ可然分申断、	
5月25日	関宿か？	関宿敵昨廿四退散、ヲノ／＼当庄之人数打返也、左衛門二郎モ重今朝立、中途ヨリ	
7月21日	那波陣	実城（由良成繁）那波へ出陣之間、以飛脚申届、則返札アリツル、	武田氏
7月22日	那波陣	那波陣実城（由良成繁）へ瑞ヲ遣、	
7月23日	那波陣	金山（由良成繁）ニハ煩トテ此日那波ヨリ帰城也、	
7月29日	那波陣か？	六郎殿（由良国繁）山ニアル内帰陣也、目出度由遣存申届則帰也、（中略）帰陣ニ附而与三カタ（方）へモ重のヲコシツル、	
8月16日	那波陣	此日山（由良繁実）ニハ那波マデ出陣ナリ、	
8月17日	那波陣	那波陣へ飛脚ヲ遣也、	
8月18日	那波陣	那波陣へ助右衛門尉ヲ遣也、ニ（木＋垂）〔樽〕一双、為肴木淡（柿）一籠且那へ、小二（木＋垂）〔樽〕一金筑、同一藤紀へ被進、陣故返事ハナカリキ、	
8月19日	那波陣か？	自境（境町）之便ニ且那へ切紙ヲコス、様体ハ藤田新太郎（北條氏邦）方一昨十七関山（寄居町）へ着、深谷（上杉氏）トノ有談合、当口へ可動トノ巷説也、又成田（深谷市）へ動アルヘキトモ申、両様共ニ申届、	
8月20日	那波陣か？	実城之返札陣ヨリ今日来、左衛門二郎（小此木）・小二郎（南）、又当地足輕トモヲモ被帰也、	

8月23日	和田か？	自埴生（羽生市）関宿（関宿町）へ、南ニ動ト注進ニ附而、 和田 （高崎市）之陣俄ニ引ケル也トキコユ、	後北条氏
8月24日	厩橋	実城（由良成繁）ニハ 厩橋 内宿ニ今日モ陣トリト申来ル、	
8月25日	厩橋	厩橋陣 ヘモ飛脚ヲ遣也、山ヘモ新造ヘ一札ヲマイラス、河辺説ニ、氏康（北條）鉢形（寄居町）ヘ昨廿四被寄陣ト告来、信州ヘノ首尾ニ御嶽（神川町）ヘ河被進馬ト其聞アリツル、晩ニモ湯ツケ（漬）ヲ少用、入夜マヤ（ 厩 ） 橋陣 ヨリ返事帰着、如書中者、一昨廿四雨降、舟橋押切左右ニ候程、先ハ河内（利根川東北）ヘ諸勢ヲ可被入、北丹（北條丹後守高広）被申間、 厩橋 ヘ打返シ候、重明後日小幡谷（甘楽町）ヘ可動トノ文体也、	
9月7日	高林	実城ニハ父子 高林 ヘ打出サシマス、人数ヲハサシヲキ、先ハ父子共ニ被打返、（中略）自長手実城ヘ文ヲマイラス、今日出陣可然也、太美（太田資正）・成左（成田左馬助氏長カ） 厩橋 （前橋市）マテノ首尾ヨカルヘキト書加、其上敵モ荒河ヲコサヌコトモアルヘシ、タトイコストモ、此方先手ニ候ヘハ徳（直徳）処之ヨシ書コシマイラス、返事ハナカリキ、大小船引ツケ、河辺ニ小旗ヲ、各ヘ被仰付タテサセ、様ケ間敷ナサレ可然ト申コス也、此夜底ニ置シヲ取出不相換ナリ、	
9月9日	矢嶋	六郎殿（由良国繁）ハ此日ハ 矢嶋 ニ陣取トキコユ（抹消）、	
9月12日	高林か矢嶋か？	旦那（由良成繁）ハ此日ヨリ 陣 トリ也、	
9月14日	高林か矢嶋か？	実城 陣 ヘ烏子十枚、為信遣也、	
9月15日	高林か矢嶋か？	此日巳午間ニ南方衆（北条方）三相（御正、江南町）之陣ヲ掃、長井（妻沼町）之南コエ（肥）塚（熊谷市）ト云処ヘ、陣ヲヨスト、左衛門二郎（小此木）旦那 陣 ヨリ帰、路次ニテモノ語シツル、	
9月18日	矢嶋	旦那昨晚自 矢嶋 （太田）帰之由承程ニ、	
9月19日	矢嶋	実城父子、又 矢嶋陣 ヘコヘラル、	
9月21日	矢嶋か？	旦那父子共ニカヘリナリ、敵ハ成田（熊谷市）北河原迄ヤキ、正デン（聖天、聖天山長楽寺カ）ノ南堰宮ハツ、ケバ（磔場）ト云トコロニ陣トリ也、	
9月26日	河辺	敵ハ堰宮之陣ヲ掃、埴生（羽生、羽生市）（挿入、ヨリ）スカ山（須賀山、行田市）ヘサグルト申来ツル、旦那ハ此日モ 河辺 ヘ出馬トキコユ、	

表2 平塚周辺の合戦に関する記事

日付	記事
1月7日	過時分ニ西口ニカイ（貝）タチキ、各カケサスニ敵（北條方）廿騎計ノリ越、コナタヨリ早出合程、無別義テキ（敵）打返候也、
1月16日	敵（北條方）八木沼マテ来トモ、左衛門二郎（小此木）当地ヨリモテシゲ（手繁）ニ出合間、引除、左衛門二郎ハ瀬ヲ乗コン追共、互ニ無何事イツヨリモ味方ソロイヨクイツルト云ヘリ、
2月20日	其時分敵（北條方）十騎計乗籠、八木沼近辺迄来ツル、左衛門二郎（小此木）早出合故、馬ヲトリテ行ヲ河端ニテワイヲトス、
4月29日	帰ニ左衛門二郎処ヘ立ヨル、帰半途之時分、当地之足輕トモ河向コヘ、敵（北条方）ニシカリトメラルトノ由告来間、螺（法螺）ヲ立、門前之者共ヲ、河ハタ（端）ヘカケサスル、向ヘ乗越、人馬ヲトリ、無何事帰也、
5月17日	梅源・斎弥来、関宿（関宿町）ヘノ陣触也、愚申事ニハ、爰許瀬ハアマタ御座候而、今朝モ平塚ヘ乗籠候條、河辺者ヲハサシヲカレ可然分申断、

考古学のための梅花無尽蔵・蔭涼軒日録解説 犬追物

皆川義孝

A 「梅花無尽蔵」

文明 17 年（1485）9 月 8 日

尾之清洲城備後敏信第見犬追物、八日

犬已超縄箭各飛、長髯撿見有天機、勿論遠近疏南北、八以前三百疋時、

B 「蔭涼軒日録」

明応2年（1493）9月3日

或人謂予云、右京兆近来犬追物毎日有之、去月二十九日者蔭涼軒見撃犬、蓋輪次也、犬料三百匹相定、其余調齊、犬衆相集于蔭涼軒喫之、栗餅并樽三荷、河原者賜之、希有之事也、人皆讚歎云々、

【解説】犬追物は、室町・戦国期に各地の武士によって盛んに行われ、室町・戦国武士のステータスシンボルのひとつであったといわれる。ここでは、犬追物に関して出土するであろう遺構・遺物に関する資料を紹介する。

Aは、文明17年9月8日に万里集九が見た尾張の清洲城内織田敏信亭で行われた犬追物を見たときの記事である。なお、このときの清洲城主は尾張守護代の織田敏定で、敏信はその一族と思われる。

犬追物は現在断絶しているが、「犬の馬場」という地名や地割が各地に散見できる。近江では、「イノバンバ」と称した。

この記事には、「犬の馬場」の中心に設けられた大縄で造られた土俵の輪を犬が飛び出すと、それぞれの射手の矢が放たれること、長いひげをはやした織田敏信は、犬追物の成績を判定するのに、生まれつきの才能の持ち主で、すぐ矢のあたり位置の遠い、近い、犬を突き通しているか、判定できる人物であること、9月8日以前には300疋の犬追物が催されたことが、記されている。

犬追物の会場である「犬の馬場」が設営される場所は、①城・館の大手正面に近接した方形の空閑地、②河原や浜などの広大な土地の2つがあげられる（服部英雄「研究ノート 犬追物を演出した河原ノ者たち 一犬の馬場の背景―」（『史学雑誌』111-9、2002年）。また、犬の馬場の周囲は竹垣で囲まれていた。

次に、「犬の馬場」の広さであるが、越前朝倉氏の一乗谷遺跡の朝倉館西門前にあった犬の馬場、近江六角氏の観音寺城跡の「下御用屋敷」にあった「イノ馬場」の広さは、約50m四方の方形の地割であった（小島道裕「高島郡の平地城館跡について」『滋賀県中世城郭分布図』8、1992年）。

したがって、Aによれば清洲城内の敏信邸宅で犬追物が行われており、清洲城内に敏信の邸宅と約50mからなる方形の地割を持った「犬の馬場」が存在したことが想定される。このほか、「冷泉為広越後下向日記」によれば、延徳3年（1491）3月から4月に、越後府中に滞在した細川政元と歌人の冷泉為広は、4月6日から9日にかけて守護上杉房定の催した犬追物の稽古を行っている。政元と為広が滞在していたのは、守護所近くの至徳寺長松院であった（『上越市史』資料編3 古代・中世）。越後の守護所の周辺にも、約50m四方の「犬の馬場」が設営されていたことが想定される。また、連日行われていることから越後守護所の周辺にあった「犬の馬場」は恒常的な施設であったといえる。

「犬の馬場」の中心部には、ふとさ1尺8寸（54cm）の縄で、直径34尺の土俵が設営された（相撲の土俵の約2倍）。また、この土俵の中に砂がまかれた。なお、朝倉氏の事例であるが、永禄11年（1568）頃、一乗谷の「犬の馬場」の砂は、「屋形御用」として三国まで舟で搬送し、一乗谷の「犬の馬場」に敷かれていた（永禄11年4月「川舟座人申状」『福井県史』資料編8 中・近世6所収）。

犬追物で使用する犬は、河原者が集め、1日に朝と晩にわけ、1回に100～150匹を用いた。（前掲服部）。

Aでも、8日以前には300疋の犬が犬追物で使われている。また、「冷泉為広越後下向日記」によれば1日200疋の犬を使用している（『上越市史』資料編3 古代・中世）。

なお、犬追物で1度使用した犬は、かなりの怪我を負い、多くの犬は河原者によって処分された。なかには、犬追物の射手らにより、食べられた場合もあった。中世の日本人は、犬を薬と称して犬を

食べることが一般的であった。また、中世の町（鎌倉・博多）から解体された犬の骨、調理の痕跡のある骨が発掘されている（安楽勉「食用としての犬」『考古学ジャーナル』450・1999年等）

Bは、清洲城の例ではないが、明応2年9月3日に、京都の臨濟宗相国寺にあった蔭涼軒の記録である。この記事によれば、細川政元（右京兆）が毎日犬追物をしていたが、29日には蔭涼軒も犬追物を見物した。必要な犬は300疋と定められていたので、そのほかは調齋（調理）し、犬衆（射手）たちは蔭涼軒に集まり、これを食べたとある。さらに、これらの犬を集めた河原者（蔭涼軒配下の河原者か）に褒美として栗餅と酒たるが賜れている。

Aの記事でも、1日300疋以上の犬が使用されていたとあり、清洲城の犬追物で使用された犬の一部は、Bと同様に犬追物の後、参加者によって食べられていたことが想定される。

また、Bは本来、殺生禁断の場である京都の寺院内で犬食が行われていたことが分かる。したがって、清洲城の「犬の馬場」、京都の寺院、河原者の居住地などの周辺から食用や解体された犬の骨が発見されることが想定される。

考古学のための上杉氏関係文書解説 城郭「とぼり」

福原圭一

ここにあげた、天正10年4月9日付けの3通の書状※1は、当時、越中魚津城を守備していた中条景泰と蓼沼泰重が、越後に残してきた家族へあてたものである。魚津城は松倉城とともに上杉氏の越中支配の中心であった。天正10年、織田信長の東国侵攻がはじまると、魚津城も信長勢の攻撃をうけており、3通の書状はこの最中に書かれたものである。本稿では、これら一連の史料から魚津城の「とぼり」について検討したい。

① 中条景泰書状

こゝもとの事、さそやさそや御あんし候や、さりなからまつゝこゝろやすく御いり候、七日のはんニたてぬま方たんかう申、ひかしのまるとはりついていて申、したたかおしはらい申候、まちくちニハあへ二介もちくちにて候、それよりもついていて申、したたかおしはらい、いかにもいかにも、しやハせよく候、こゝもとけんこにかゝゑ申へく候間、御こゝろやすかるへく候、ミなミなまちまちにもなくおもひあい、よふかいにかゝゑ申候間、御こゝろやすかるへく候、一くろに御めおかけたまはるへく候、くハしくハ、こゝもとのやうすかのひきくに御たつね候へく候、恐々謹言、

返々、ミやはうへも申たく候へ共、ろしふちよふゆへ、おゝせ候て、たまはるへく候、又、はゝへ申たく候、よふかいのうちておい御さなく候、七日のはんついていて申候おり、たてぬまはうのもの二人はかりにて候、てきにハさいけんなきておいにて候、よふかいニかりそめにておい申候ものハ、いつれもいつれもあさてにて候、

四月九日

越前守（花押）

与きちとのへ

参

（『上越市史』2344）

② 中条景泰書状

わさと人して申あけ候、いまにいくるわもとられ申さす、いかにもいかにもけんこにかゝゑ申候、せ

つしや事、ひかしの**まるとはり**にたてぬまとのとねまり申候、あまりましかくよせ申候まゝ、大つゝ
おうち申、てつはうかすにてうたれ申、したたかとおくにねまり申候、六三ハたかなしくるわに、せ
つしやとうせんのうちくるわにねまり申候、六三もちくちのひくに、てつはうしゆ・やりもちハ申に
およはす、つき候てねまり申候間、せつしやもちくち**まるとはり**にて候まゝ、ついていて申、したた
かおいはらい申候、一夜□おはひきあけ申候、たかはしところへいて申候、くちおはうへたしゆ・あ
へとのもちくちに候、あへとのついていて申され、これもおしはらい申され候、こゝもといかにも
いかにもけんこにかゝゑ申へく候、いくたひ申候と、ミナミな喜四郎とのおはしめ、いつれもいつれ
もおもひあい、なに事もなに事もおや・こものさしすしたいにて候間、なに事もあしき事すこしもす
こしも御さなく候、いかんとも御申、くすりお御こし候へく候、たまの事ハ御ろしふちよふにて候間、
くすりはかり御申候て御こし候へく候、くすりもいまた御いり候、さりなから、さいけんなくいり申
候、又、一くろおしやよくよく御そたて候てくたされへく候、一くろまいり申候や、こゝもとの事、
いかにもいかにも御こゝろやすくおほしめしあるへく候、いかにもいかにもけんてうにかゝゑ申へく
候、うんおひらき、まいり御めにかけ候て、よろつ申あけへく候、なにさまなにさますきおミ申、お
いくつし申たく候へ共、いまたまかりならす候、かならずこゝもとの事御あんしあるましく候、くハ
しくハかさねて申へく候、めてたくかしく、

四月九日

与次（花押）

おはりこ

御申

（『上越市史』2345）

③ 蓼沼泰重書状

たより候間、ふミして申し候、日やせめ候へとも、いまニおち申さす候、それかしハなちうとの
と一つニ**いちのとはり**ニねまり申候、ついていてをしはらい申候か、こゝもにてをき申者二人てを
い申候、よの物ハけんこニ候、おはゝことも、与三・藤八郎けんこニ候や、与三ちきやうとり申さぬ
うちニしに申すへきこと、むねんニ候、しに候とも太郎さへとりたて候へは、かんやうニ候、このた
ひいかんともめてたくなり、御めにかけ申たく存候、恐々謹言、

返々、御こゝろやすくおほし召候へく候、以上、

かもん

四月九日

泰重（花押）

お二郎との

参

（『上越市史』2346）

①②の差出「越前守」と「与次」は中条景泰、③の差出人は蓼沼泰重である。

織田勢の攻撃に対し、魚津城に籠もった諸将は、それぞれ担当部署を決め、各自がそこを守るとい
う体制を取っていた（①「まちくちニハあへ二介（安部吉真）もちくち」、②「六三（寺嶋長資）ハた
かなしくるわ」「六三もちくち」）。中条景泰は、①「たてぬま方たんかう申、ひかしのまるとはりつ
いていて申」、②「せつしや事、ひかしのまるとはりにたてぬまとのとねまり申候」とあるように、蓼
沼泰重とともに「ひかしのまるとはり」を守備した。

寺嶋長資のいた「たかなしくるわ」のように、城内の空間にはそれぞれ呼び名がつけられていた。
中条らの守った「ひかしのまるとはり」も同様に位置づけられる場所であった。蓼沼泰重は「ひかし

のまるとはり」を、「いちのとはり」と呼んでいる。このことから「ひかしのまるとはり」は、魚津城の中心部、もしくは外縁部のどちらかに位置することが予想されるが、①「いまにいくるわもとられ申さす」という状況からすると、2人が守備していたのは城のもっとも外側であったと考えられる。

上杉氏関係の文書には、いわゆる「本丸」や「二の丸」という用例の「まる（丸）」という語は、管見のかぎりみられない。「たかなしくるわ」のように、「くるわ（曲輪）」を使用するのが一般的である。このことから2人の守った「ひかしのまるとはり」は「東の」＋「まるとはり」であり、それは魚津城のもっとも外側に位置していた空間であったと考えるのが妥当であろう。

天正11年に比定される卯月16日付の甘糟長重書状には、「仍城町表之御曲輪、今度致構を成就仕候、并林辺踞候西之円戸張、今日鋏立仕候、(『上越市史』2733※2)」とある。これは三条城の普請の様子を伝えたもので、この日「西之円戸張」の「鋏立」を行ったという。「鋏立」は普請開始に際し催される築城儀礼である※3。三条城にも「まるとはり（円戸張）」があったのである。

ところで、魚津城「ひかしのまるとはり」の「とはり」とはどのような施設なのであろうか。ために『日本国語大辞典』で「とばり」を引いてみると以下のように書かれている。

とばり【帳・帷】(「戸張」の意。「とはり」とも) ①室内や寝所・帳台・厨子・高御座(たかみくら)、また、外部との境などに垂らして、区切りや隔てとしたり、光をさえぎったりなどするための布。壁代(かべしろ)、几帳(きちょう)、のれんなど。②転じて、物を隔てて区切るもの、覆い隠してみえなくするもののたとえにいう。

1600年代はじめに刊行された『日甫辞書』で「とはり」を探すと、つぎのふたつの項目が見つかった。邦訳ではともに漢字の「帳」という文字があてられる。

a **Tofari** 偶像の前面とか、非常に高貴な方の御座所の前面とかに張る豪華な幕。

b **Tobari** 人を通さないように戸口に横様に座ること。 例 Tobariuo suru (帳をする)

aは『日本国語大辞典』の用例①に対応する。おそらく「Tofari」の聖なるものを隔てるという意味から派生して、『日本国語大辞典』の用例②が生まれ、さらに人の出入りを遮るということに限定された「Tobari」という語ができたと思われる。しかし、当時の発音ではfaとbaは違う音であるので、単純にはいえない。

これらを念頭に絵巻物をみていくと、まさにbの「人を通さないように戸口に横様に座る」ようすが描かれている。たとえば、『一遍聖絵』の筑前国のある武士の館では、楯をならべ、屋形に弓矢を備えた櫓門の左右に武士が3人座っている。傍らには主人の乗ってきた馬が繋がれていることから、右側の2人は侍者であると思われるが、向かって左の白い直垂に袴、革巻の太刀を履く男は「とばり」をしているのだろう。

また、『蒙古襲来絵詞』でも安達泰盛館の唐門には両側に座し談笑する武士3人が描かれている。『日本の絵巻13』では、この3人を「主人の供待ちに控えるのか※4」としているが、竹崎季長とその侍者の乗ってきた馬は堀の外で手綱を取る侍とともに描かれており、おそらく門の左右の人物も「とばり」をしていると考えられる。

このように「とばり」とは、「館の入口である門を守る行為」と定義できる。この語義から推測すると、史料①②③における「とはり」とは、城の入口を守備する空間であることが想定される。城郭研究でいう「虎口」や「馬出」がこれにあたるだろうか。

さて、魚津城の「ひかしのまるとはり」に話を戻したい。

「まるとはり」は「円（まる）」＋「とばり」であり、「円（まる）」は円形という「とばり」のかたちを示していると考えられる。「とばり」が「虎口」や「馬出」を指しているのであれば、まず思い浮

かぶのがいわゆる「丸馬出」である。「丸馬出」は、「虎口」の前面に三日月型の堀や土塁を設けた空間で、信濃や三河・駿河・遠江など中部地方の城郭にみられる遺構である。

「馬出」の語は、八巻孝夫氏によれば、寛永年間の『甲陽軍鑑』以後、軍学を中心とした史料に頻出するが、史料①②③と同時期では、後北条氏の文書にあるのが唯一であるという※5。戦国期の上杉氏が「馬出」を「とぼり」と呼んでいた可能性はあろう。

しかし、「丸馬出」にあたる遺構は、北信の海津・長沼の両城にある以外、越後や佐渡、越中など上杉氏分国では知られていない。管見の限り、魚津城の絵図や復元図にも「丸馬出」は確認できないのである。また、「円戸張」の鋳立てをおこなっていた三条城については、はっきりとした位置や縄張りとは現状ではまったくわからない状況である。魚津城「丸馬出」の「発見」は考古学に頼るしかないのである。

なお、「とぼり」については、「外郭の虎口」とする見解※6や、「戸張」と「外張」には概念の相違があり、前者は丸馬出的な施設を指し、後者は外郭施設を指す※7とみる論者もいる。また、史料にあらわれる城郭用語を広く検討した市村高男氏は「城門・木戸のような構造物を基本的内容としながらも、その実態はきわめて多用であり、それぞれの史料の中で最も妥当な意味・内容を解釈していく必要がある※8」と提案している。

本稿では、戦国期の「とぼり」文言をすべて検討したわけではないので、それぞれの可否を論ずることはできないが、ひとつの可能性として「丸馬出」をあげておきたい。

※1 『上越市史』別編2 上杉氏文書集二（上越市・2004年）の史料番号を掲げた。引用にあたっては、横書きのため文中の踊り字（〜：複数字の繰り返し記号）は繰り返す文字を続けて記した。

※2 『上越市史』は「諸土来状全」を底本とするが、ここでは花押影のある『歴代古案』巻13から引用した。

※3 福原圭一「武田氏の築城についての一考察」（『信濃』第45巻11号・1993年）

※4 日本の絵巻13『蒙古襲来絵詞』（中央公論社・1988年）

※5 八巻孝夫「馬出を考える ―その概念とことばの由来―」（『中世城郭研究』第3号・1989年）

※6 同前

※7 遠藤洋「戦国期越後上杉氏の城館と権力 ―上・中越地域から長野県北部地域を中心に―」（上越教育大学大学院修士論文・2004年）

※8 市村高男「中世史料に見える城郭用語」（龍ヶ崎市史 別編Ⅱ『龍ヶ崎の中世城館―城郭にみる龍ヶ崎のあゆみ―』龍ヶ崎市・1987年）

考古学のための上野国長楽寺永録日記解説 土器（杯）・ヌリモノ、杯・茶杯

伊藤啓雄

永禄8年（1565）1月1日

其後土器杯ヲ出シ、タコニ（蛸煮カ）ノスイモノ（吸物）ニテ冷酒ヲ出ス、（中略）ヌリモノ（塗物）ハ杯、ザウニ（雑煮）ヲ出シ、カン（爛）酒也、

永禄8年（1565）1月2日

座敷へ出、菓子ヲ用、茶ヲ喫シ、ヌリモノ（塗物）ハ杯ニテ、ザウニ（雑煮）ノ上、カン（爛）酒ヲ用、（中略）安生・甫・オ・勝一座ニテ茶子ヲ出シ、茶ヲ出、土器杯ヲ出、タコニ（蛸煮）ノ肴ニテ冷

酒、(中略)酒過テ二献目ニヌリモノ(塗物)ノ杯ヲ出ヌル、麵子ニテカン(爛)酒、

永祿8年(1565) 1月3日

ヌリモノ(塗物)ノ杯ヲ出シ、サウニ(雜煮)ヲ用、カン(爛)酒ヲノミ、各へ進ム、

永祿8年(1565) 1月4日

臈而実城(金山城本丸)へイヅ、イツモノコトク内カタ(方)ニテ引ワタシ(渡)ヲ出シ、土器杯ヲ同イタシ、五度之礼ニテ、内カタ(方)ニノミ愚へサハル、(中略)金龍寺(太田市)へ参ス、茶子ニテ茶、土器ヲ先出、イヤへヒマ(隙)ヲカハスルトテ土器ヲソノマハヲキ、ヌリモノ(塗物)ノ杯ヲ出、ザウニ(雜煮)ノ上ニカン(爛)酒アリ、

永祿8年(1565) 1月11日

其後恒例之吉書、座ニハ佐・岱・真・正興・普光・徳・孫五郎・九郎左衛門、茶子ヲ出、喫茶、土器杯ヲ出シ、タコニ(蛸煮)ノ肴ニテ冷酒一献、能端シヤク(酌)也、先膳ニ土器ヲニヲキ、栗ト柿ヲクム(組)、シヤクテウシ(酌提子)ヲモチ、土器ニ酒ヲツキ、ワラ(藁)ノミゴ(稗心)ニテ住持天神へ献ス、ソノ献スル酒ヲ銚子之内へ半分入、先住持ノミ、正興其外次第へニマラス、此一献過テ、土器之内之酒ヲ硯ニ入、墨ヲスリ、維那吉書ヲカキヨマル、(中略)茶子ニテ出レ茶、ヌリモノ(塗物)杯ヲ出、椀麵ニテカン(爛)酒ヲ五杯スハメカヘシマイラセツル、

永祿8年(1565) 1月30日

茶子茶礼、杯ヌリモノ(塗物)、肴ヲ出、カン(爛)酒一献、

永祿8年(1565) 2月2日

先茶子、茶杯ヲ出、芥子餅ニテカン(爛)酒、

【解説】『日記』において、「杯(盃)」の記載は多くみられるが、「一杯」などのような単位を示す場合ではなく、一般的な名詞として用いられている記事を集成し、該当したものを掲載した。「杯(盃)」とは、『日本国語大辞典』(第2版 小学館 2001年)によれば、「さか(酒)つき(杯)の意」であり、「①酒を入れて飲むのに用いる小さなうつわ。陶磁器、漆器、金属器、ガラス器などいろいろな種類がある。かわらけ。ちょこ。ちょく。(②～④などは略)」とある。つまり、杯とは酒を入れて飲む食膳具であるが、その種類は限られたものではない。『日記』においては、「土器」・「ヌリモノ(塗物)」・「杯」・「茶杯」の3種類が確認される。集成された記事について、杯の種類別に、杯で供されたもの(内容物)・ともに供されたもの(添物)がわかるように一覧表にまとめた。

まず、「ヌリモノハ杯」(1月1日・2日・3日・4日)・「ヌリモノ杯」(1月11日)・「杯ヌリモノ」(1月30日)とは、漆器の杯と考えられる。年頭の祝儀などが行われる1月において7例確認されるが、雑煮あるいは麵子・椀麵といった添物とともにすべて爛酒が出されている。また、「土器杯」(1月1日・2日・4日・11日)は素焼き(土師器)の杯と考えられるが、同じ期間に4例みられる。しかし、いずれも爛酒との記載はなく、うち3例(1月1日・2日・11日)は蛸煮を添物として冷酒が出されている。このように、長楽寺における年頭の祝儀では、土器杯ー冷酒ー蛸煮、塗物の杯ー爛酒ー雑煮・麵といった関係がみられるのであり、杯ー酒・肴の組合せが定められていた可能性がある(工

藤大輔『『日記』にみる贈答と儀礼』『長楽寺永祿日記』資料募集 続群書類従完成会 2003年、細谷昌弘『『日記』にみる飲食器・贈答器』同前所収)。

また、1月4日・11日における「土器」も「土器杯」と同じものと考えられる。このうち、11日の吉書の儀では直接の飲食はないが、「住持天神へ献ス」とあり、飲食のみならず、儀礼の際にも用いられていたことがわかる。

最後に、2月2日には「茶杯」とあり、爛酒が出されている。茶器である建盞・天目が飲酒の際にも使用されている事はすでに指摘されているが(細谷前掲、矢田俊文「考古学のための上野国長楽寺永祿日記解説 建盞・天目」『中世考古学文献研究会』第1号 2003年)、この記事もその1例と考えられる。

表 『永祿日記』にみられる杯と内容物・添物一覧表

月 日	土器杯		スリモノ、杯・スリモノ 杯・杯スリモノ		茶 杯		備 考
	内容物	添 物	内容物	添 物	内容物	添 物	
1月1日	冷酒	タコニノスイモノ	カン酒	ザウニ			
1月2日			カン酒	ザウニ			
	冷酒	タコニノ肴					三度礼
			カン酒	麵子			
1月3日			カン酒	サウニ			
1月4日	+						五度之礼
	+(土器)		カン酒	ザウニ			
1月11日	冷酒	タコニノ肴					
	酒(土器)						吉書
			カン酒	椀麵			
1月30日			カン酒	肴			
2月2日					カン酒	芥子餅	

※ 「+」は、内容物が特に記載されない事例を示す。

※※ 「土器杯」ではなく、「土器」と記載されている場合には、土器杯の内容物の欄に「(土器)」とした。

集散地を検討する視点－文献史学と中・近世考古学の融合のために－（報告要旨）

矢田俊文(新潟大学人文学部)

1. 中世考古学・文献史学（日本中世史）それぞれの研究の特徴

考古学と文献史学とは依拠する資料が異なることから研究の特徴がある。考古学・文献史学それぞれの研究の特徴を理解することなしに学融合は進まない。

文献資料は首都京都の資料が圧倒的に多いため研究の偏りが起こってくる。また、文献史学研究者が研究対象にする文書・日記は権力者の情報が圧倒的であり、日常品の研究が弱い。

文献史学では、武家文書・寺院文書の研究は進んでいるが商家文書の研究はない。それは、商家は盛衰がはげしく、家として長く存続しないため文書が伝来しにくいことに原因があると思われる。史料がなければ研究は進まない。

中世考古学の研究をみると、生産地・消費地の研究は強いが、集散地の研究はあまり強くないように思う。考古学においても、モノを流通させる中心人物が流通業者であるという認識を確立させればあらたな研究が生れてくるのではなかろうか。

2. 集散地遺跡研究の成果

中世考古学でも集散地の研究は始まっている。安濃津遺跡群（三重県津市、伊藤裕偉 1997・2001）・博多遺跡群（福岡県福岡市、大庭康時 2001）・元島遺跡（静岡県福田町、加藤理文 1999）などはその例である。これらの研究の共通点は、製品の未使用・破損状態によって物資流通の集散地を理解しようとしている点である。さまざまな遺構・遺物論によって、中世考古学で集散地の研究が進展することを期待する。

3. 集散地研究のむずかしさ

さきほど、考古学においても、モノを流通させる中心人物が流通業者であるという認識を確立させればあらたな研究が生れてくるのではないかと述べたが、認識があらたになればあらたな研究がただちに生まれるわけではない。集散地でのモノ研究は生産地・消費地とは違う独特の困難性がある。

商品は移動するものである。本日報告される松本城下の砥石問屋遺跡（竹内靖長 1999）の砥石も、火災で被熱していなければ問屋の敷地内に廃棄されず、商品として出荷され、遺跡内で発掘されることはなかった。本来、商品は集散地にはとどまらないモノである。モノという資料から集散地を明らかにする困難性は、商品というモノの特徴にある。そのような特徴をもった地点として集散地を理解しなければ、モノから集散地を明らかにすることはできない。

4. 近世集散地遺跡を議論する意義

以上述べてきたように、集散地研究はそれほど容易なものではない。しかし、物資流通研究は集散

地の研究なしには成り立たない。そこで、どのように考えても間違いなく集散地である遺跡の遺物・遺構のあり方を明確にすることは極めて重要なことである。文献からみても、遺物・遺跡からみても、間違いなく集散地遺跡である遺跡の検討は重要である。時代を越えて信州松本城下の砥石問屋遺跡などの近世集散地遺跡を理解することは、中世集散地研究にとって必要なことである。

[参考文献]

伊藤裕偉『安濃津』三重県埋蔵文化財センター、1997年

伊藤裕偉「中世における集散地遺跡の分析」『月刊考古学ジャーナル』478、2001年

大庭康時「北部九州と宋人」『西日本文化』368、西日本文化協会、2001年

加藤理文『元島遺跡1（遺物・考察編1－中世－）』静岡県埋蔵文化財調査研究所、1999年

竹内靖長「松本城下における砥石流通の一事例－松本城下町跡本町第4次発掘調査から－」『松本市史研究』9、1999年

矢田俊文「中世の物資流通研究と瀬戸内地域」『公開シンポジウム「中世瀬戸内の流通と交流」資料集』中央大学文学部日本史研究室、2004年

矢田俊文「文献史学における学融合の可能性」前川要編『中世総合資料学の可能性』新人物往来社、2004年

城下町松本の上州砥石問屋遺跡について（報告要旨）

竹内靖長（長野県松本市教育委員会）

1 松本城下町跡の概要

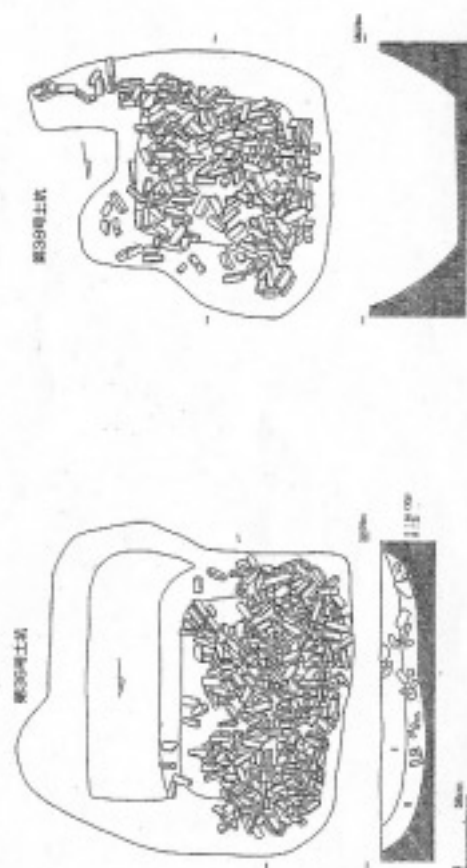
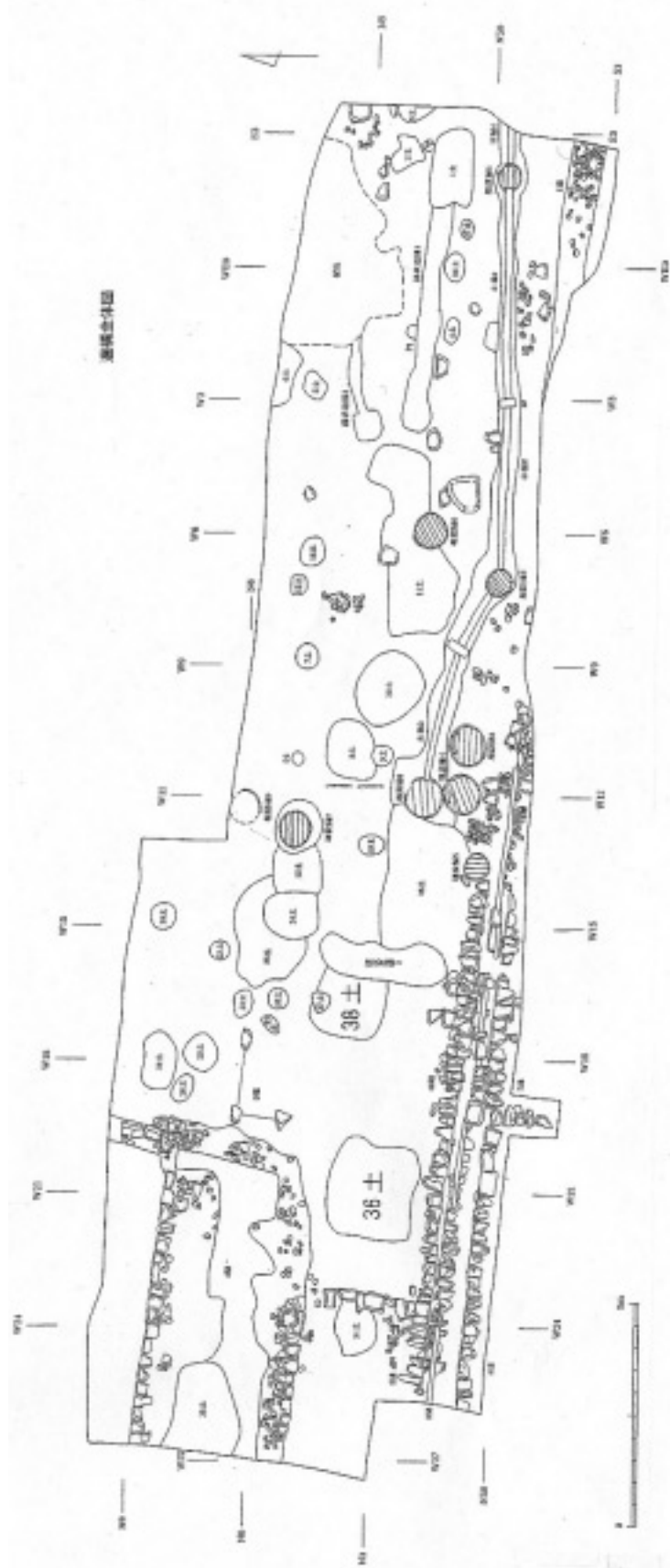
近世の松本城下町は、信濃国の商業活動の中心地であった。天保14（1843）年に著された『善光寺道名所図会』には、松本城下の賑わっていた様子が次のように書かれている。

「…城下の町広く大通り十三街、町数およそ四十八丁、商家軒を並べ当国第一の都会にて、信府と称す、相伝ふ牛馬の荷物一日に千駄附入りて、また千駄附送るとぞ、実に繁昌の地なり…」

平成9年、松本市教育委員会が市街地区画整理事業に伴って実施した松本城下町跡本町第4次調査では、4,859点もの未使用の上州産砥石が出土した。発掘調査の結果と文献史料の検討から、当時の砥石問屋跡と推定することができた。以下、集散地遺跡の様相を考える調査事例の一つとして報告する。

2 発掘調査の概要

発掘調査地は、松本城下町の中心的な町である本町に位置している。本町は、松本城下町を通過する北国往還西街道（通称：善光寺街道）沿いにあり、問屋が集まる商業活動の中心地であった。調査では、松本城下町が作られた16世紀後半から現代にいたる人為的な整地土層を9層確認した。このうち問屋跡は、近世整地層である第1検出面において発見された。検出された遺構は、建物跡10、水道遺構2条（竹管・木樋・集水枡）、埋設桶5基、溝状遺構3、土坑41である。出土遺物は、陶磁器（瀬戸・美濃系、肥前系、京・信楽系など）、金属製品（煙管、銭貨、簪など）、木製品（下駄、曲物、漆椀、箸、荷札木簡、人形代など）、石製品（砥石、石臼）である。この検出面は火災の痕跡が明確で、広範囲に被熱面が認められ、検出面直上には焼土・炭化物層が確認できた。さらに火災による被熱痕が著しい水道遺構の溜桶蓋裏面には、「文化二乙丑年六月吉辰…」という墨書が認められることと、出土した陶磁器の主体時期は18世紀後半～19世紀初頭であることから、文献に記録が残る文化5年



(1808)4月19日の本町生坂屋から出火した火災である可能性が濃厚となった。

この第1検出面で発見された遺構のうち、第36・38号土坑は非常に特異なものとして位置付けできる。土坑内からは、未使用の砥石が4,859点出土した。この砥石の特徴としては、器面全面に「ゴザ目」と呼ばれる櫛目状のタガネ痕がついていることが挙げられる。これは、製作工程の最終段階でつけられていたものである。出土した砥石は、すべて同材質で同じ特徴をもっていることから、同一産地のものである可能性が高い。これらは火災によってすべて被熱し、商品価値がなくなって一括廃棄されたものと推定できる。

3 文献史料の検討

このように多量の砥石が一時的に留め置かれていた町屋について、流通や職種などの手がかりを文献史料から得た。

第一の史料として、元禄10年頃に書かれた『松本市中記 諸職人丑年改』があげられる。これは、当時の城下町に住んでいた商工業者の職種と軒数を書き連ねたものである。元禄10年(1697)段階の商工業者総人数は、1,044人で、職種は99種を数える。この中に、「上野砥問屋 壱人」という記述が見られることから、上州(群馬県)産の砥石を扱う問屋がいたことがわかる。

第二の史料としては、『宝暦十三年五月 松本町中馬往来荷品書』である。宝暦13年(1763)の中馬による荷物の流通先と物品の一覧が読み取れる。この中に、飯田(長野県飯田市)行荷

「一 上野砥 式拾駄程 但 壱箇ニ付三拾挺入 式貫七八百目程 式拾挺入三貫七八百目程 八箇付壱駄」という記述がみられる。これにより、松本から飯田へ上州産砥石が多量に運ばれていたことがわかる。

これらの史料から、近世において信濃には上野産の砥石が多量に流通していた可能性が高くなった。

4 出土砥石の産地

本遺跡から出土した砥石は、飯島静夫氏(群馬地質研究会)や市川文三郎氏(南牧村民俗資料展示室室長)などからのご教示で、群馬県甘楽郡南牧村砥沢産の砥石である可能性が高いという結論をいただいた。砥沢産砥石は、江戸時代を通して幕府御用砥石として厚い保護を受け、他地域での新たな鉱山開発の申請に対して、その調査権と競合した場合の開発拒否権が与えられていた。

5 砥石の流通経路

砥沢産砥石は、御用砥として幕府へ納めるもののほか、江戸や各地の問屋を通して販売されていた。砥沢で産出された砥石は、まず下仁田の会所に送られ、順次富岡、藤岡へと馬を利用して運ばれた。その後は、本庄から中山道に入り陸路で江戸へ送る順路と、藤岡から河岸を経由して川舟で江戸深川へ送る方法があった。信濃への経路については、下仁田の原家文書に手がかりとなる記載がある。

『砥石出入並ニ諸勘定目録 文政五年下仁田会所 福田文右衛門』

下仁田からの送り先

「壱万八拾四籠 富岡送り

千式百籠 上田送り

百拾七籠 岩村田送り

三百四拾四籠 高崎送り

百六拾籠 前橋送り

八拾籠 町在小売」

富岡送りの砥石は、その後藤岡を経て江戸へ向かったものである。これが主要ルートであるのは、出荷量から見て間違いないが、その一方で上田送り(現・長野県上田市)、岩村田送り(現・長野県佐

久市)の砥石荷物は、富岡を経ず下仁田から陸路で直接信濃へ送られたものである。松本城下へも、上田・岩村田を経由して運ばれた可能性が高い。

6 長野県内の出土状況

近年、長野県内において発掘調査で砥沢産と考えられる砥石の出土例が増えている。飯田城下町遺跡(長野県飯田市)、松代城下町遺跡(長野県長野市)、松原遺跡(長野県長野市)、松本城下町跡(東町・博労町・六九地点など)で確認されている。特に飯田城下で発見されたことは、先に紹介した「宝暦十三年五月 松本町中馬往来荷品書」の松本から飯田へ砥石が送られている史料記述と発掘調査出土資料が一致する重要な事例である。

7 討論から

松本城下の調査において、これまでに出土した砥石の組成についての比較検討を示唆されたが、今後の課題としたい。確かに、出土資料のなかには京都産と考えられるものや、それ以外の産地のものも含まれている。宝暦十三年の中馬荷物の史料の中にも、名古屋からの戻り荷のなかに剃刀砥という項目がある。砥石も用途によって各産地のものを使い分けている可能性が高い。今後の検討課題としていきたい。

[参考文献]

竹内靖長「松本城下における砥石流通の一事例ー松本城下町跡本町第4次発掘調査からー」

『松本市史研究』第4号、1999年

中世砥石の流通について(報告要旨)

高桑弘美(財団法人山形県埋蔵文化財センター)

はじめに

「中世砥石の流通について」というテーマをいただいた。ここでは、砥石の流通についてどのように研究が進められているのかという点と、報告者が手がけている山形での状況について報告する。報告の対象とする時期は、中世～近世とさせていただく。

砥石は、焼物などと同様に遺跡に残りやすく、また、研ぐ道具という機能が明確な遺物の一つである。反面、形態変化が乏しく、変化する文様なども無い。研磨する際に摩耗し、消耗品的な性格を持ち、本来の寸法や形態が解らないものが多いのも特徴である。遺物個別としての研究が進まなかった理由がこの辺にあると思われる。

1 遺物「砥石」の研究史

遺跡から出土する砥石の研究が本格的に進められるようになるのは、1980年代末からになる。特に中世・近世の遺跡から出土した砥石に関しては、生産地の比定が盛んに行われ始める。砥石の生産地比定に際しては、考古・文献・民俗・地質学ほかの各学問の方法論が駆使され検討が行われている。

明治10年(1877)第1回内国勸業博覧会に出品された砥石の産地(松村1973)によると、170ヶ所以上の砥石産地が確認できるが、そこで切り出された砥石と出土資料の比較を軸に生産地の比定が行われた。遺跡から出土する砥石の生産地解明は、生産地から消費地への砥石の動き(流通)の解明へと進む。また、遺跡から出土する砥石は、手工業製品・商品として認識されるようになり、さらに、広域に流通する砥石とある地域に安定供給される砥石があることが明らかとなる。

鎌倉市内遺跡出土砥石については、杉山氏・汐見氏によって早くから研究が蓄積される(杉山1989・

汐見 1995・1999)。両氏は、広域に流通する砥石、特に、鳴滝砥石の特徴について、石材・寸法・切り出し方などを明らかにされる。鳴滝砥石は、京都市左京区北西部の愛宕山を中心とした一帯が産地とされる仕上げ砥（合わせ砥）である。確証はないものの、『延喜式』に記される「青砥」の可能性が指摘されている。また、建久10年（1199）の日付を持つ「砥石山由緒書」に、本間藤左衛門が、この周辺で良質の砥石を発見し、その功によって源頼朝から「日本砥石師棟梁」の称を受けたとされると記されることが知られる。現在も少量ながら採掘が行われているが、その品質の良さから、高価なブランド品となっている。出土資料としては、平安京9世紀末から10世紀頃の資料、遠隔地に流通したものとして平泉12世紀のかわらけと共伴した資料が古い時期のものとなる。一方、鳴滝砥石に関連した研究として、丹波・山城産砥石（鳴滝砥石）の流通をその一例にあげ、中世初期、京都には卓越した手工業生産技術とその集積があり、技術やそれを持つ工人が京都を発生源に全国的に展開したことを説明する田中学氏の論考（田中 2001）がある。

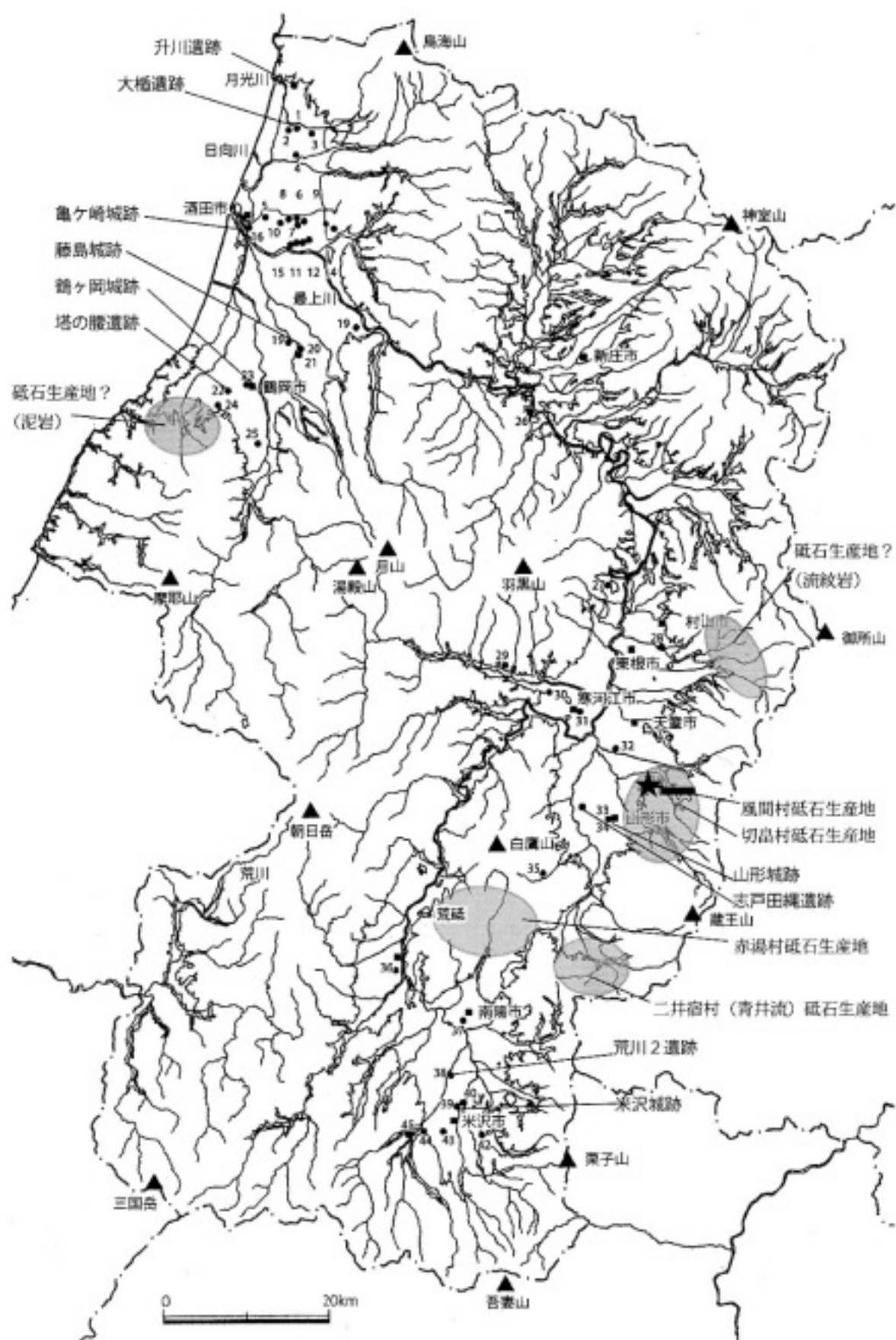
広域流通する砥石としては、鳴滝砥石の他に対馬・伊予・天草などを産地とする砥石があり、全国各地の遺跡から出土することが確認されている（汐見 1999）。また、東北・北陸の日本海側に安定供給される砥石があるとされ、その生産地を秋田周辺と推定し、出羽砥と呼称している（汐見 2001）。

群馬県産の砥石に関連した研究も盛んである。本研究会で報告されている竹内氏の松本城下町跡の論考（竹内 1998・1999）と、内田氏の東京都下宿内山遺跡の論考（内田 1990）がある。両論考共に、近世の砥石を対象としたものであるが、現在の遺物としての砥石研究では、基本文献の一つと言える。竹内氏の研究は、本誌掲載の竹内氏論考を参照願ひ、ここでは内田氏の論考を取り上げる。東京都下宿内山遺跡は、近世を中心とした遺跡群で、210000平方メートルが調査されている。内田氏は出土した500点（製品化された砥石のうち未使用は1点のみ）を超える砥石を素材にして、その資料的な価値を地域史のなかで再評価する試みが行われている。考古学的な検討としては、共伴遺物から砥石の年代を整理し、製品化される最終過程で付けられたと思われる工具痕の時代性を解明している。工具痕は、平タガネ痕→櫛歯タガネ痕→ノコギリ痕→丸ノコギリ痕（円盤鋸19世紀後半日本に導入後普及か？）の変遷が想定される。下宿内山遺跡の砥石の産地は、特徴的な工具痕櫛歯タガネ痕や石材から、江戸時代を通じて御用砥として幕府の保護を受けたとされる、群馬県甘楽郡南牧村砥沢が有力視される。砥沢砥は、文献史学の研究が蓄積されており、その成果を取り込みながら、さらに文献を駆使して、中仙道、利根川・江戸川の水陸両面からの流通経路、及び江戸砥石問屋を介して舟問屋へ、そして各地に運ばれたことを想定されている。これらの研究成果から、砥石問屋を介して各地の砥石が江戸にもたらされ、砥石に関連する産業が江戸時代においてかなりの規模になっていたことが解る。一方、江戸近郊では、専門問屋が育っておらず、荷物や商店名が、「荒物」「荒物商」という言葉に包括されており、砥石が表に出てこない状況にある。近世の文献においても、砥石に関連する記述を探し出すことが難しい状況が読み取れる。これは山形でも同じ状況にある。

中世・近世の遺跡から出土する砥石の個別研究が始まって間もないが、各地域での検討は進んでいる。出土砥石の生産地の推定が記入される報告書も徐々に増え、情報は蓄積され始めている。しかし、砥石の手工業製品・商品としての側面が強調されており、ものの動きの前段階として整理しなければならない用途・組成・年代観などの考古学的な基本情報については、今後さらに検討しなければならないと考えている。

2 山形県の状況

山形県内の遺跡からは、約650点の砥石が出土している。そのうち中世は200点、近世は100点程度の出土数である（時期不明に近世のものが多数含まれている可能性が高い）。山形県の中世・近世



遺跡の調査は、城館が多数を占め、集落や生産地はほとんど含まれていない。また、研磨痕があるものを砥石と呼称する傾向にあり、認定の問題が残るかもしれないが、遺跡から砥石の未使用品の出土は確認されていない。現時点では、砥石の生産地と消費地の間を考察できる場やものとしての資料は残念ながら検出されていない。生産地と消費地の間を考察できる場合は、消費地の中に埋もれている可能性、城館遺跡に付属する可能性というのも考えられるが、実証はできていない

広域流通品の一つ鳴滝砥石は、山形に 12 世紀段階、13 世紀段階には確実に入ってきていると思われる。これは全国的な動きに連動する。山形県内の砥石は、鳴滝砥石が搬入されたこの時期から、規格性のある板状の砥石が登場し、手工業製品としての砥石の普及が読み取れる（高桑 2002）。

一方、泥岩・流紋岩で方柱状の砥石が多数を占める。これらは、当地域に安定供給される砥石とみられる。薄く保持できずに厚めになる泥岩、垂直に柱を束ねたように割れる柱状節理が発達した流紋岩が特徴的である。これらの石材の分布について、地質学の成果から推定すると、山形県内の分布は限られる。また、表面露出や、浅い所にあるなど、その中でも砥石を切り出し搬出できる条件を考慮するとその範囲はさらに絞られることになる。現在のところ、5ヶ所の産地を推定できる。日本海側の庄内地方では、新潟県寄りの鶴岡市南方丘陵に泥岩の産地、内陸地方には流紋岩～石英安山岩の産地4ヶ所（風間村・切畠村、赤湯村、二井宿村、東根市東側丘陵）を推定している。風間村・切畠村、赤湯村、二井宿村は、明治 10 年（1877）第 1 回内国勧業博覧会に出品された砥石の産地（松村 1973）で把握されているものと一致する。赤湯村砥石産地とした範囲には荒砥という地名が残り注目される。今回推定した山形県内の 5ヶ所の砥石生産地は、中世・近世の主要な遺跡からおおよそ 20～30km 以内にある点と、主要な街道が近くにある点が共通する。

次に、5ヶ所の推定産地の中から、風間村について取り上げ、見ていく。風間村の砥石採掘所は、山形盆地の東部、奥羽山脈からのびる尾根上に位置する。現在、4 地点 5 カ所で採掘所が確認され、現地で碎石を採取することが可能である。しかし、詳しい調査などは、行われていない。この地域一帯は、火山噴火物を主とする新生代第三紀、2400 万年前の地質からなる。風間村の砥石採掘所では、柱状節理（マグマから火山岩になる際に、体積が減少するのに応じて形成される割れ目）が、非常に発達している。柱状節理によって同じ大きさに切り出しやすく、角柱の砥石を量産できるとみられる。風間村産の砥石は、青緑～淡褐色を呈し、珪化作用を受け均質で滑らかである。刀研ぎに優れ、別名「改正名倉砥石」とも呼ばれる。採掘所の一つ砥切山（砥石山）は、室町時代から採掘されていたとの言い伝えが地元に残る。風間村では、昭和 40 年代まで採掘は行われ、採掘に携わった地元の方に、話を聞くことができる。一方、文献では、明和 5 年（1786）『山形石ひろい』、元治元年（1864）『最上名所産名物番付』などで確認できる。

正保四年（1647）の出羽一國御絵図には、風間村の位置は、図中央、寺原の下にあり、村高 1207 石と記載されている。山形城からは、北東に約 6 Km 離れ、二口峠に至る街道沿いに位置する。宮城方面に抜ける二口峠は、山形側の入り口が山寺（立石寺）と高瀬の二つあることから二口と呼称されるが、風間村はその分岐地点にある。街道の分岐点の要衝ということから、砥切山（砥石山）頂上に風間館が営まれたとされる。現在は、砥切山採掘所直下を仙山線が通り、仙台に抜ける。また、仙山線北側を流れる高瀬川は、北西約 10Km で、河川交通の大動脈最上川と合流する。風間村は、日本海側へ、太平洋側へと、ものが動きやすい位置にあることが解る。

最上義光は、城下町の整備とともに、鍛冶町や銅町などの職人町を設け、鍛冶職人を積極的に保護している。城下町での砥石の消費と砥石生産は、密接に関係していたことが想像できる。山形市内には、現在も鍛造・鑄造の中小企業が多数残っている。打ち刃物職人に風間村の砥石について聞き取り

をしたところ、採掘が中止された昭和 40 年代まで、風間村産の砥石を使用していたとの回答を得た。風間村産の砥石は、打ち刃物職人にとって無くてはならない道具であり、小型のものは「荒物屋」から購入、大型で回転して使用するものは直接風間で入手したとのことである。その状況は、近世まで遡る可能性が考えられる。

風間村産の砥石と類似する砥石が中世・近世の遺跡から出土している（高桑 2002）。遺跡での出土状況を見ると、中世では遅くとも 15 世紀段階に、山形盆地を中心に分布し、近世には庄内地方まで広がることを確認している。内陸地方で推定した砥石産地 4 カ所の検討は、これからであるが、4 カ所の地質は、形成過程・年代が類似しており、石材を見分けることが極めて難しいと地質学側からの指摘を受けている。現段階では、内陸地方で推定した砥石産地 4 カ所の石材を一括りとし、砥石産地比定の細分は行わない方が良いと考えている。風間村産の砥石についても、山形県内陸地方の砥石産地の一つにとどめて、改めて出土状況を整理する必要が生じている。

おわりに

砥石は広域流通する砥石と、ある地域に安定供給される砥石があることが、先の研究で明らかにされたことを述べたが、山形県内では、地域に安定供給される砥石の産地の存在が明らかになってきている。それは、当地が搬入品と地元産の関係を探ることのできるフィールドになることを意味する。搬入品と地元産との関係を探ることは、どうしてもものが動くのかを解明する糸口になると考えられる。つまり、地域における流通のメカニズムを知ることになり、ものを動かす人の解明にたどり着くのではないかとの見通しを立てている。

集散地における『場』の構造—江戸・大坂の魚肥市場を例として—（報告要旨）

原 直史(新潟大学人文学部)

はじめに

このシンポジウムは砥石がメインであるが、報告者のこれまでの研究対象は干鰯・鰯粕など魚肥の流通で、直接それが遺物になるものではない。今回の報告は何か別の対象をというのではなく、今まで発表してきた研究の中から関係しそうなことを切り出して、若干の論点を提示できればと考えて行うものである。

1980 年代以降、江戸・京都・大坂の三都を中心として、都市社会史の研究が盛んになった。文献史学研究者が中心ではあるが、必ずしも文献史学だけで行っているのではなく、江戸遺跡の発掘等に伴う考古学の成果、建築史学などの成果を取り入れ、それらの専門家と共に、いわゆる学融合の中で展開してきたのである。

この間の近世都市社会史研究の中では、都市の空間構造を読み解いていくという方法が大きな位置を占めているが、これはこうした学融合の流れを如実に反映しているといえる。例えば、80 年代以降の都市社会史を主導してきた吉田伸之氏は、「社会＝空間構造」という非常に象徴的な造語を用いている。これは、社会構造が空間構造に反映されているという考え方に基づいている。

こうした研究の流れをふまえて、報告者も流通史研究のなかで、特に具体的な空間のあり方に注意をしてきた。以下ではそうした点を中心として紹介する。

1. 江戸干鰯問屋と干鰯場

江戸において、魚肥流通を担ったのは干鰯問屋である。江戸の干鰯問屋は 17 世紀中葉までには誕生している。図 1 を参考にすると、大川（現在の隅田川）の西側に新堀川・日本橋川が流れ込んでいるが、干鰯問屋はまずこれらの堀川沿いに誕生した。

ここで問題にしたいのは、江戸の干鰯問屋は最初ここに居を構えるが、その後、17 世紀末～18 世紀初頭にかけて、この隅田川を渡った東側の深川地域に次々と干鰯場を設定していくことについてである。

図 1 では、四角で囲んだ銚子場・永代場・元場・江川場という四つの干鰯場を図示してある。若干の変遷はあるが、18 世紀前期までにはこの 4 つに落ち着く形で、この地域に干鰯場というものを設定されていった。当初干鰯問屋たちは、隅田川の東側の堀川沿いに店を構え、店の前の河岸地で商売をしていたが、干鰯場設置以降、店はこの日本橋沿いに構えながら、実際の干鰯の取引はこの 4 つの干鰯場で行なうことになっていく。すなわち、店の位置と売買取引の場が分離するということになる。

これは「店と市との分離」といいうるものであるが、この分離をもたらした干鰯場設定の契機としては、ひとつの争論があった。これは干鰯問屋から干鰯を買う仲買と問屋との間で争われた争論であった。そして問屋側がそうした状況への対抗、対応として干鰯場を設定したのである。

この争論の争点として注目すべき点のひとつに、すべての荷物を河岸に並べることができなくなり、荷物は蔵や船に積んだままにしておいて見本だけで売買することになったが、その見本が正当にすべての荷を代表しているか否か、という点がある。この点を前提にして干鰯場は、すべての荷を並べて売買する一定の広さを持つ場として設定されることになった。

また、仲買との争論を経て成立した干鰯場であるので、それまでであった仲買がこの売買の場から排除されてしまう。その結果、これは江戸の干鰯市場の特徴であるが、仲買専門の業者が存在しなくなるのである。江戸の干鰯場における干鰯取引では、干鰯問屋の店の中が売り方と買い方という 2 つの擬似的な組織に分かれ、その売り方と買い方が干鰯場で立ち会って市売買をおこなう、という非常に特徴的な商売の仕方をするようになった。

こうして、この干鰯場を設置したことによって、江戸の干鰯問屋たちは、江戸における干鰯の流通をその干鰯場という場に強力に集中し、流通の主導権を一手に握ったのである。

ただし、あくまでも店は日本橋川沿いにあり、その店では取引先の商人たちとの代金のやり取りなどが行なわれると思われるが、商品が実際に取引される場所は違うし、物が置かれる場所も違うのである。

一方で表 1 では、近世後期～幕末にかけて、江戸の干鰯問屋が店を構える住所、すなわち居所が、次第に今度は隅田川を渡った東側の深川地域、つまり干鰯場のある地域に移転していくという傾向が見られる。この時期に至って、今度は店と市とが一体化していくということになる。

この深川移転の問題について、従来は、深川は水運の便も良く、近世後期に江戸の商品流通のひとつの中心地となっていくので、そうした流通拠点に店が移動した、と単純に考えられていた。しかし先程も述べた通り、17 世紀末～18 世紀初頭にすでに市売買の場所自体は移動しているのであり、そのことを無視した議論は成り立たない。ここでは分離していた店と市が一体化することの意味を考えなくてはいけないのである。この問題はとても難しく、報告者自身もこれまでの研究の中で十分な解答ができていないとはいえないが、少なくとも、この時期の株仲間の解散などに絡む新興流通勢力への対応と言うことはできよう。

このように江戸の干鰯流通においては、店と市が 17 世紀末～18 世紀初頭に分離をする。そして 19

世紀半ばにかけて、今度はまたそれが再統合する。この2度の大きな空間の移転を経ているのである。

次にこの干鰯場の具体的なあり方について見ていく。図2は、干鰯場のひとつ銚子場の図である。図の下が北となっているが、北側の小名木川から入堀が入っている。周りに土蔵が並んでいるが、その土蔵と入堀の間の空間が広く取られている。ここがすなわち荷を並べて市立てが行われる場所であり、すべての商品を明示して市にかけるといふ形を意識した空間構造と思われる。また一般的な魚市場とも異なる点として、この干鰯場は非常に閉鎖的であることがあげられる。周りが（図2では十分に表現し切れていないが）矢来などで囲われており、入堀に入ってくる所も、水門で閉じられるようになっている。まさにさきに述べた問屋が自分たち以外のものを排除して、ここで独占的に取引を行うという空間の特徴が構造によく表れている。

2. 大坂干鰯屋と靱永代浜

大坂においても干鰯市場は、やはり各所に移転している。図3でわかるように、当初は天満にあったと言われているが、豊臣期に北船場の本靱町付近に移っていく。この場所はすでに発掘調査も行われ、魚の名が記された木簡がたくさん出土したことで知られているので、考古学の研究者にも周知の地点であろう。これがさらに、17世紀前期に靱の地に移り、ここが後まで長く干鰯市場として存続することとなる。

その靱の地図が図4である。ここはいわば三重の同心円構造となっており、まず中心に永代浜という場所がある。江戸の干鰯場に相当する所で、若干の空間があり、入堀が入っており、市が開かれる。図5の『摂津名所図会』にはまさにその市のありさまが描かれている。その周囲に、海部堀川町・新天満町・新靱町という3つの町が存在する。この3つの町は靱三町と呼ばれ、古くからの由緒を持った問屋が集まっている。さらにその靱三町の周辺には、京町堀と阿波座堀、そして西横堀で囲まれる形で9つの町がある。ここには、仲買機能を主に担う干鰯屋達が居住している。こうした堀で外部と区画された三重の同心円的構造が、大坂の干鰯市場である靱の空間構造である。

荷を並べる揚場であり、取引の場、市場である永代浜が干鰯流通の中核となる点は、江戸の干鰯場と共通しているが、大坂ではこの段階では店もその周囲に集中しており、店と市の分離が17世紀末からみられた江戸とはその点が異なっている。しかしこの大坂についても、その後同様の事態が進行するのである。

18世紀後期より、それまで本州から九州にかけての魚肥を中心に扱っていた大坂の市場に、松前物が盛んに入荷してくるようになる。ところがこの松前物を大坂にもたらしたのはいわゆる北前船で、これを荷受けしたのは、東組松前問屋と呼ばれる、靱の干鰯屋たちとは異なる外部の商人たちであった。したがって、この松前物の取引は、それまでの魚肥の取引とは異なる形で行なわれた。例えば、売買は靱の干鰯屋たちが東組松前問屋から荷を買うという形で行われたが、その場所は靱の永代浜ではなく、木津川沿いなど、靱の島とは異なる地域に存在した「問屋蔵所」において行われた。

さらに表2あるいは図6・7を見ていただければわかるように、特に当初の東組松前問屋は、一例を除けばみな東横堀川に面した地域に店を構えており、靱の干鰯屋とはまったく異なる地域に展開している。すなわち、松前産の魚肥がもたらされたことによって、大坂においても、店と市との分離が生じたのである。

ところが、幕末の開港を契機として箱館産物会所が各地の流通拠点に置かれることとなり、江戸に続いて大坂でも箱館産物会所が置かれることになると、この松前産魚肥の取引も大きく変化を遂げた。そしてこの変化の過程で、次第に松前物の取引の場が靱に引き寄せられ、各所に散在していた松前問屋たちも、靱に移転してくるという状況が見られた。江戸で幕末に見られたのと同じく、店と市の一

体化、といえるような状況が、大坂でも生じているのである。

このように、問屋の店と、実際に物が集積され、取引される場合は、必ずしも常に一体としてあるのではなく、その歴史的なあるいは流通上の条件によって、分離したり一体化したりし得るのである。空間に着目して商品流通を考える上では、このことは銘記しておくべきことであろう。

3. 問屋の機能

史料1は、問屋を介した取引に典型的な仕切状で、Aが買仕切、Bが売仕切である。例えばBの売仕切において、差出人の雑賀屋藤助は紀州和歌山の問屋であり、宛所の住田屋権三は、江戸で買い付けた干鰯を売って回っている尾州廻船の船頭である。住田屋の船は、内海船として知られる買積船のひとつであるが、「本場」すなわち上総国の魚肥を江戸で買い付けて、雑賀屋を通じてこれを和歌山で売するという、買積経営の一環で作成されたのがこの文書である。

ここで重要なのは、「売仕切」という表題からもわかるように、この雑賀屋は、問屋として託された商品を売った、という報告を荷主である住田屋にしているのであるが、売った相手はこの文書に全く出てこない、という点である。

問屋の基本的な業態は、売買の仲介である。そして荷主にとっては、問屋がこのように間に入ることによって、商品がその先どこに売られるか問題でなくなるということを、この仕切状は表現している。それは逆の見方をすれば、荷主は商品がその先どこに売られるかわからないという状況に陥る、ということでもある。問屋が間に入ることによって、荷主はそれ以降の流通過程から分断されるともいえるし、ある意味では問屋を介することによって、より広いそれから先の流通過程にアクセスできるともいえる。こうした両面を、問屋の業態は本質的に持っているのである。

そう考えると、問屋という存在が流通の場に示す刻印というものを考える上でも、問屋はいわゆる単純な商人ではないということを念頭に置く必要があるだろう。産地から荷を仕入れて、それを他に売るとするのは、非常にプリミティブな商人の買い付けのイメージであるが、それだけでは、問屋というものの、特にこういった集散地の都市におけるあり方、ないしは問屋による強力な流通支配というものの意味合いが、わからなくなるのではないだろうか。

おわりに

問屋という業態の一群の集団が、集散地の都市において強力に行使した流通支配の力は、少なからず江戸の干鰯場のような空間の支配に基づいていた。そうであるならば、彼らの業態が都市の空間にもたらす刻印というものは、発掘の中でも遺構として検出できる可能性があるのではないか。あるいはそうした問屋関連遺構がありうるのではないかという論点は、歴史における流通の性格を考えていく上でも、念頭に置いておくべき点ではないだろうか。

[参考文献]

原 直史『日本近世の地域と流通』山川出版社、1996年a

原 直史「市場と問屋・仲買」斎藤善之編『新しい近世史3 市場と民間社会』新人物往来社、1996年b

原 直史「松前問屋」吉田伸之編『シリーズ日本の身分的周縁4 商いの場と社会』吉川弘文館、2000年

原 直史「箱館産物会所と大坂魚肥市場」塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』山川出版社、2001年

	元禄9~13 (1696~1700)	元禄4 (1759)	享和7 (1790)	文化10 (1813)	文政7 (1824)	天保4 (1833)	嘉永4 (1851)
兩子堤町	4	7	1	3	2	2	—
小堀町	2	9	2	2	2	2	—
堀江町	—	4	1	—	—	—	1
小堀町	—	3	—	—	—	—	2
本村木町	—	1	1	2	2	2	—
常盤町	—	2	—	—	—	—	—
日本橋山崎辺小計	6	25	5	7	6	6	2
北新堀町	1	3	—	3	3	3	—
兩新堀町	—	2	2	—	—	—	2
北新堀大川堀町	—	—	—	—	—	—	—
堀町	1	4	—	1	1	—	—
豊岸島新町	—	—	—	—	—	—	1**
豊岸島新町	—	—	—	—	—	—	1
川口町	—	—	—	—	—	—	1
富坂町	—	—	—	—	—	—	1
豊岸島・新堀山崎辺小計	2	11	2	4	4	3	0
本橋町	—	—	1	1	1	1	—
秋田側町小計	0	0	1	1	1	1	0
馬場町	—	1	—	—	—	—	—
村松町	—	1	—	—	—	—	—
秋町・堤町・堤辺小計	0	2	0	0	0	0	0
堀井町	—	2*	—	—	—	—	—
堀井大工町	—	2	2	1	1	1	1
平野町	—	—	1	1	1	1	—
延岡町	—	—	1	1	1	2	4
一色町	—	—	—	—	—	—	—
西永代町	—	—	1	—	1	1	—
通久町	—	—	—	—	—	—	—
村木町	—	—	—	—	—	—	—
伊賀町	—	—	—	—	—	—	—
堀山町	—	—	—	—	—	—	—
常盤町	—	—	—	—	—	—	—
永代寺門前町	—	—	—	—	—	—	—
源川地蔵小計	0	4	5	3	4	5	12
総計	31	43	13	15	15	15	13

注：享和7は堀井堤町のみの合計数の活用は堀井堤町の総数ではないことを示す。*：寛政10年
内、1名を含む。**：豊岸島町。

表1 江戸千鶴間屋仲問屋連地城図（原 1996 a より）

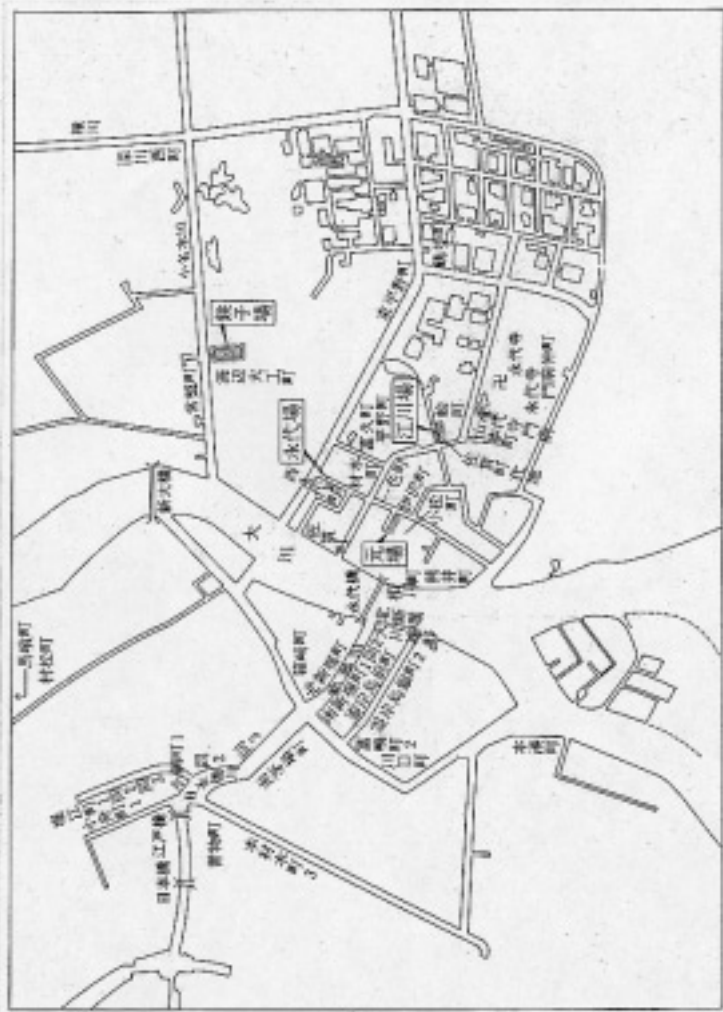


図1 江戸千鶴間屋仲問屋連地城図（原 1996 a より）



図4 葛の島 (原 1996b より)

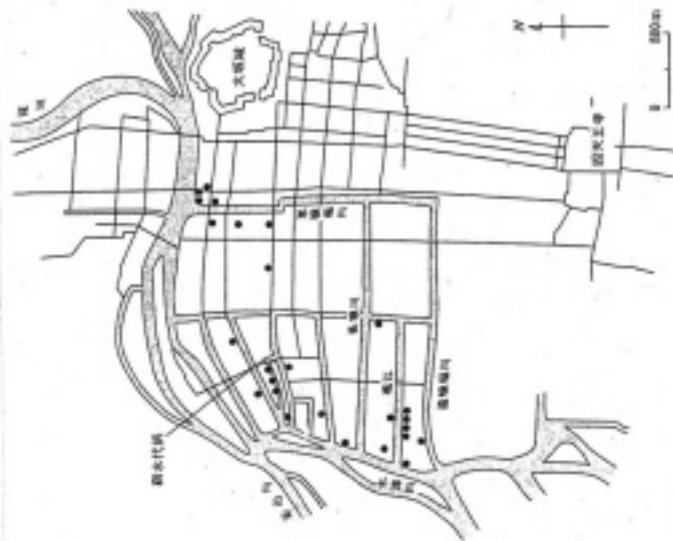


図6 東柏松の間川の分布 (原 2000 より)



図3 大塚の千鶴・塩魚市場 (原 1996b より)

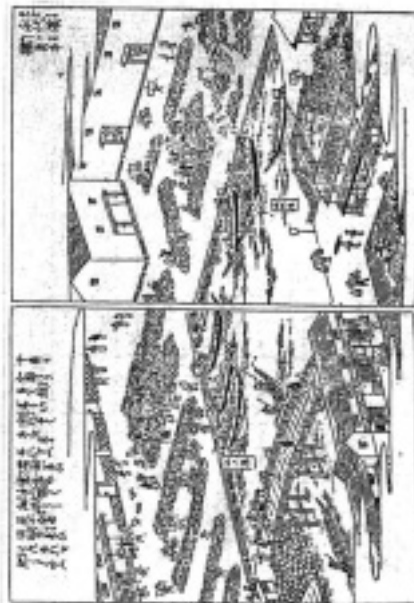


図5 永代川の図 (原 1996b より)

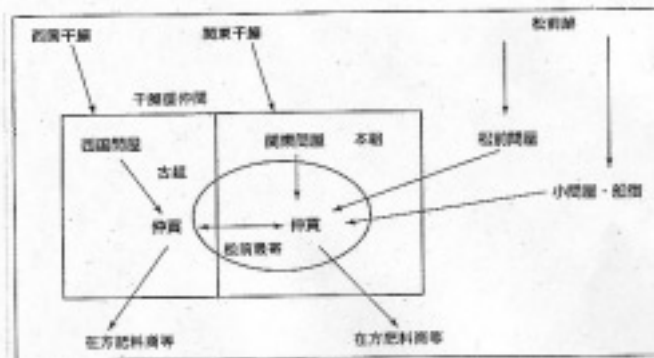


図7 肥料干肥による魚肥売買のモデル（化政期）（図3001より）

史料1 愛知県知事館南知事内書・内田佐七英文書（原、一九九六より）

A

買仕切
八分八リ
計一 三拾銀 代三拾四圓ト
九分六リ 五分九リ
計一 三拾銀 代三拾三圓五分
九分六リ 四角五分六リ
計一 四拾三圓 代四拾三圓也
〆百〇三圓
代〆百拾四圓五分
九角七分五リ
又
一 貳圓三分 口そん
十一角六分三リ
一 七角 かわ
十式角八分零リ
又〆金百拾二圓三分
六角七分九リ
若之通時度候、以上
来、
二月 久保五左衛門
住田屋三郎殿

（通書）
「三拾リ」

B

売仕切
一 本 拾銀五引 百〇八銀
一 同 百拾銀
〆貳百拾八銀
貳角五リ六リ
代金貳百七圓五分零リト
五角六分五リ
(中略)
〆貳百七拾銀
代金〆貳百四拾九圓
三分零リト
八角二分四リ
内
金三圓貳分三零リト 口そん
六分零リ
銀貳百貳拾目 右拾銀百銀分六六銀引
銀貳百七拾貳角 中仕
出し入ちん
小以〆四百九拾貳角
貳金拾圓貳分三零リト
九分
引〆金貳百四拾四圓
七角三零リト
七角二分四リ
若仕切金兩度し相済、此表出入無誤度候、以上
米四月十一日 住田屋三郎殿
住田屋三郎殿

（通書）
「三拾リ」

本報告では、特産品・交易品としての漆器、とくに岩手県中北部の二戸郡浄法寺町を中心に現在においても製作されている浄法寺漆器に注目し、文献史料による若干のあとづけを試みた。考古学においては、東日本を漆器食膳具経済圏と想定するなど、漆器に関する研究が進んでいるが、文献史学の側には、それらに見合う十分な蓄積がないのが現状である。今後、さらに文献史料を収集・検討することで、中世末から近世前期に至る漆器の生産と流通の状況を明らかにしていきたい。

さて、南北朝末の「庭訓往来」に、諸国特産物の一つとして「奥州金」「宇賀昆布」「夷鮭」とならんで「奥漆」があげられるなど、陸奥は古くから漆の産地として知られていた。浄法寺地域は現在においても国内第一の漆の生産地である。

また漆器は、アイヌ民族によって宝器・祭具として重要視されたので、対アイヌ交易の有力な物品であり、その中には浄法寺漆器が含まれていたと考えられる。

浄法寺塗の来歴については明確ではないが、神亀5年（728）に聖武天皇の勅命によって開山したという由緒を持つ天台寺（桂清水観音・桂泉観音）の僧侶が中世に什器を製作したのが始まりとも伝えられる。天台寺の寺宝の中には、寺号額や舞楽面など鎌倉～室町時代の漆塗りの製品が含まれており、すでに地元において漆製品の製造が行われていたことがうかがえる。

また盛岡藩の家老の公務日記である「雑書」には、寛永21年（1644）に秋田領境の鹿角の口留番所の留物として、「蠟漆・綿布・麻糸・鍬・馬・牛・無手形男女・紅花・紫・塩・熊之皮」とともに「薄（箔）付の器物」類があげられており、17世紀前半においてすでに金箔を施した箔製品の製造・移出が行われ、その販路として鹿角街道や米代川舟運を利用した、能代・秋田、及び津軽方面が漆器の販路として想定されていることがうかがえる。

さらに元和6（1620）年には、天台寺の祭礼に際して、漆器を販売したと推測される27軒の店が営業を行ったことが「雑書」から知られる。

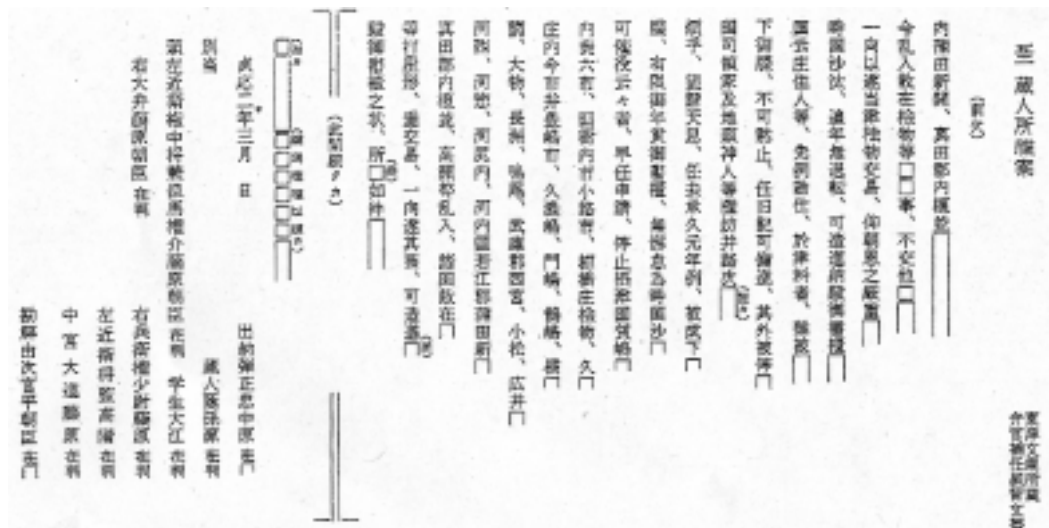
したがって、浄法寺地域では、中世末～近世初めにおいて、生漆の生産、木地の製作から、箔製品を含む漆器の製作とそれらの集荷、小売りを含む販売までもが行なわれていた。したがって、浄法寺地域は生産地であり、また集散地であり、消費地でもあったのである。

しかし、その後の盛岡藩の流通政策等によって、浄法寺漆器をめぐる生産と流通の体系は大きな変更を迫られることになっていくと見通される。

中世集散地（遺跡）における職人集団の社会構造（報告要旨）

仁木 宏（大阪市立大学大学院文学研究科）

本報告では、集散地を本拠地とする職人集団の社会構造を明らかにすることを目的とする。しかし、中世においては、本拠を京都以外に置く、そうした集団の組織形態については不明な点が多い。ここでは、摂津国河尻地域を本拠地の一つとする杢物師集団についての史料をもとに、彼らの集団の広がりとその意味を考察するにとどまることをあらかじめ断っておきたい。



この史料については、黒田俊雄（『伊丹市史』）、三浦圭一（『大阪府史』、『日本中世の地域と社会』）、網野善彦（『中世の非農業民と天皇』）などがとりあげているが、それぞれの解釈には微妙な差異があり、必ずしも定説を見ていない。

史料をみて最初に目につくのは、本文の後半に書き上げられている多くの地名である。まず、これらの地名の分布を確認しておきたい。

最初は、摂津国である。

賀嶋口内美六市 賀島（庄）は大阪市淀川区。同地で開かれた弥勒（みろく）市か。

国衙内市小路市 摂津国衙の正確な場所については不明であるが、現在の上町台地先端付近と考えられている。そうした「国衙」の領域内で、「市小路」とよばれる街路が通り、そこで市が開催されていることから、渡辺津にあたるものと推定される。渡辺津の場所については、近年の考古学的な成果に則し、現在の大川（淀川）から東横堀川が分流するあたり（大阪市中心部）に比定。

棕橋庄檢物 棕橋庄は豊中市南西に位置する荘園で、後述する「庄本」という地名は、この棕橋庄の中心地を示すと考えられている。ここだけ、「棕橋庄檢物」という表現になっていることは、棕橋庄がこの史料に現れる檢物師の本拠地であることの根拠になると従来、考えられてきた。また、前後が「市」であることから、この「檢物」も「檢物市」のことと考えてよいのではなかろうか。

久口庄内今市并豊嶋市 久代庄は川西市、豊嶋市は箕面市付近。棕橋庄から猪名川をさかのぼったところに位置し、京都と兵庫津を結ぶ西国街道からほど近い場所に開かれた市である。

久濃嶋・門嶋・鵜（かささぎ）嶋 現在のどこにあたるのか、比定することはできない。「嶋」地名であることから、賀嶋や棕橋に近い神崎川（三国川）下流域と推定されるが、豊嶋市と橘御園（後述）の間に記されるという位置関係からいえば、猪名川の中州（中島）であった可能性もある。

橘口園 橘御園は散在的な所領である。尼崎市から伊丹市、川西市、宝塚市まで、猪名川中流域の西岸に広がる。

大物・長洲 神崎川河口部の港津で、現在の尼崎市。神崎川・猪名川が排出した土砂の堆積作用の影響で、中世を通じて、河口部の主要港津は徐々に南へ移動していった。この頃は、長洲・大物が主要な港津であつたらしく、戦国期以降、中心都市として発展する尼崎は、文字通り、まだ砂堆の「崎」にすぎなかったのだろう。なお、大物遺跡からは、輸入陶磁器をはじめ、11～12世紀を中心とする大量の遺物が出土している。

鳴尾・小松 西宮市南部で、武庫川の河口部。

西宮 現在の西宮市の中心聚落。京都から西進してきた西国街道がはじめて海岸べりに出たところに位置する。西宮神社（西宮戎）の門前町として発展した港津。

広井口河西・河惣・河尻 広井（弘井）は西宮市。他は具体的な場所は不明だが、摂津国武庫郡に属するのではないか。だとすれば、この「河」は神崎川・猪名川水系ではなく武庫川、それも河口部あたりを表現していると考えたい。「河尻」といえば、普通、後述するように神崎川河口部をさすが、この「河尻」は武庫川の河口部の地名と推定。

ここで、大きく転じて河内国にいたる。

若江郡蒲田新口 東大阪市川俣（かわまた）か。大和川滞水域の岸辺に位置する新しい開発地の意であるなら、「新」の次の口は「開」であろうか。

真（茨）田郡内榎並・高瀬 榎並（大阪市城東区）は大和川、高瀬（守口市）は淀川にそれぞれ近いが、いずれもそれから一定の距離を置いて立地。近世の京街道沿いの聚落である。天王寺（大阪市天王寺区）から渡辺津に向かう熊野街道とは別に、上町台地上を北行し、台地先端部から東側へ降りて「鴨野渡」（大阪市城東区）で大和川を渡り、榎並・高瀬をつなぐ街道が発達していたことがわかる。京街道の前身といえるが、主要ルートは、近世のように淀川左岸の堤防上を京都に向かうのではなく、守口付近から淀川をさかのぼる川船に乗ったものと思われる。

もしこれらの地名を地図上に示してみるならば、棕橋から大物にかけての「河尻」地区が全体の中心に位置することがわかる。淀川本流は渡辺津の北側を流れていたが、当時、瀬戸内海と京都をむすぶ主要河川は神崎川であり、そのため「河尻」地区は、瀬戸内の海船と、遡上する川船の積み替え港が複数乱立する集散地であった。

この「河尻」地区を起点に、北の猪名川筋、西の武庫川河口部や西宮、東では淀川・大和川下流域に地名が広がっていたことになる。大阪湾や河川など、水のルート沿いに展開していることも明らかであろう。

では、この地名の広がりは何を意味するのだろうか。

史料3行目の「朝恩の嚴重を仰ぎ」や、4行目の「納殿に御書櫃を造進する」などの文言から、この桧物師が朝廷に隷属し、「時国沙汰」として、蔵人所納殿に御書櫃を造進していたことがわかる。そして、そうした貢納の義務を負うことと引き替えに、先述した地名の範囲を商圈として、独占的な販売権を保障されていたと考えられている。網野善彦によれば、ここに出てくる「時国」は清原時国という官人であり、これら桧物供御人の統括者であったという。

そして、5行目以降、商業活動のために往来する際、津料は支払うが、そうした商圈の地で国司・荘園領主・地頭・神人らが乱暴・乱入したりすること、また桧物師に対する路次における妨害などを停止して欲しいと朝廷に訴え出た。そして、この蔵人所牒によって、その特権が認められた、と考えられるのである。

ここで注目されるのが、残された史料の前半部分と、後半部分の対応関係である。

史料の前半では、「散在桧物（師）等」が「当津」で「桧物交易」を遂げるとあり、同じことが史料の最後では、「諸国散在（桧物師）等」が、屋形を打ち、交易を垂れて、「芸」を遂げると表現されている。屋形とは、この場合、「仮の建物」といった意味であろうから、桧物師たちが「当津」で「屋形」を建て、交易していることになる。「屋形」は桧物生産の工房であると同時に、製品を交易（販売）する場でもあったのだろう。

だとすれば、問題は「当津」とはどこか、ということになる。

先述のように「棕橋庄桧物市」と考えることができれば、棕橋庄ということになる。「河尻地区」が

中心的な位置を占めることから、もう少し広くとって、大物・長洲などもふくむ「河尻」地区という理解も可能だろう。

だが、賀嶋口美六市や国衙内市小路市も「交易」の場としては最適であろう。それ以外の地名の多くも「都市的な場」としての性格をもっていることは先に確認した。だとすれば、「当津」を一つ、または少数の港津にあえて限定しなくてもよいかもしれない。つまり、ここであげられた地のいずれでも桧物師が「屋形」を打ち、「交易」していたのではなかろうか。

黒田俊雄は、これらの地は桧物師が振り売りをする対象地だと推定した。また三浦圭一も、どこかに本拠を置く桧物師集団の商圈を示す範囲だと考えた。しかし、そうではなく、それぞれを本拠地とする散在桧物師たちがそこに一定度、定住していたのだろう。そうした彼らが地域的な結集を遂げ、清原時国を介して朝廷と結びつき、その保護を得ようとしたのではないか。

ただ、ここであげられた地名がすべて同じ性格の場であるわけではない。「河尻」地区が中心地であることは間違いないし、「棕橋庄桧物」（それが桧物市でなかったとしても）が、さらに焦点の地であることも否定できない。

ここで思い出されるのが、庄本遺跡の発掘調査の成果である。

橘田正徳（豊中市教育委員会）によれば、庄本遺跡は鎌倉時代前半に、一つのピークの時期を迎える。密集した建物群とその中に入りこむ小さな入り江が確認され、また輸入陶磁器や国内各地からの搬入品が発掘されている。

こうしたなかで、石鍋の再加工途中の遺物が多数見つかり、石鍋の再加工職人の集住地が発掘されたのではないかとされる点、注目される。橘田は、西国各地や周辺の村々からあつめてきた石鍋を、この地で再加工し、再び各地に出荷していたのではないかと、としている。

だとすれば、時期といい、商職人の居住形態といい、先に見た桧物師の場合とよく似ているといえるだろう。

こうして、桧物師をめぐる文献史料と、石鍋加工職人をめぐる庄本遺跡の考古学的な成果をつきあわせることによって、13世紀前半における集散地とそこを本拠とする商職人の一つのイメージが結ばれたのである。

討論：中・近世の集散地

最初に報告者から、補足説明があった。

浅倉氏は、浄法寺付近は現在の日本における生漆の生産量がいちばん多い地域で、最上級の漆が採れるということで文化財の修復にここの漆が使われる。浄法寺漆器の抜け荷の事例が一つあるので、御紹介したい。これも「雑書」だが、延宝3年（1675年）12月、鹿角・酒田・津軽へ抜け荷をしようとした男が見つかり、抜け荷の品物を置いて逃げたという記事があり、その製品は三ッ椀、これは庶民の日用品だと思うが、150人分ということである、と述べた。

竹内氏は、砥石が長野県にどのように来たかということも考えなければならないが、まず、砥沢では採掘をして製品としての成形を整えて、馬によって下仁田へ送られる。下仁田には砥石の会所があり、ここで出荷用に荷造りをする。そして、下仁田の原家文書に「砥石出入り並びに諸勘定目録」というものがあり、下仁田からどこへどのくらい送ったのかということが書いてある。これを見ると、1万84籠 富岡送りがあり、その次に、後、上田送り、岩村田送り、高崎送り、それから前橋送り、とそ

の他が地元で小売りをしたと書かれている。富岡へ送るものが、江戸への主要なものであり、そこで倉賀野河岸（高崎市）や川ルート、主要な船便で江戸へ送るが、下仁田から藤岡へ送る前に、下仁田の会所から直に信州の方に送られている便があるので、信州ルートは下仁田の会所から直に出荷・荷造りして、馬で山を越した上田・岩村田あたりに送られていたということがわかる、と述べた。

原氏は、江戸近辺で江戸と並んで魚肥、特に関東産の魚肥の集散地・中継流通地として主要なものに浦賀（神奈川県横須賀市）がある。なぜこれが重要かという、実は、この浦賀のほうが古いという由緒を持っているのだが、近世の中期には、完全に江戸が中心で、この浦賀はそれに従属する立場になる。その転機にはいろいろなきっかけがあるが、その一つとして江戸に干鰯場が作られていった時期に転機が一つある。それともう一つ、幕末になり、干鰯に限らずさまざまなものの従来の流通のルートが大きく変化をしていき、旧来の問屋商人による流通の独占は崩れていくが、その中で浦賀の地位が浮上してくる。そして、その浦賀が地位を浮上させるということにも、もちろん、いろいろな要因があるが、その一環として、浦賀は非常に遅く幕末近くの19世紀半ばになってから干鰯場を作る。すなわち、まさに問屋の下に強力に商品取引を集中させる空間を作り上げる時期が、江戸と浦賀とで1世紀以上時代が大きく異なるが、それぞれ作り上げた時期が、対抗勢力に対して自分が力をつけていく時期と重なるということで重要だと思っている、と述べた。

次に、報告者間での討論に入った。

私たちが発掘現場などで見る砥石はすでに使用されたモノである。砥沢の砥石は使用されたものであっても見てすぐに分かるのか、という質問に対し、竹内氏は、表面に最大の特徴であるゴザ目という櫛歯鑿状の模様があるので、それが付いているということで分かる。ただし、全面使われていた場合、今度は逆に、ぱっと見では分かりづらいということがある。もし、それがなければ、同定することは非常に難しく、地質学や化学的な根拠を用いなければならない。それから松本の城下から、使用した砥石が出土しているが、砥沢の石だけが流通したのかということとそうでもなく、京都産のような非常に上質な赤黄色っぽい石の仕上砥のようなものも入っている。それと、中馬の荷の中身の中に、逆に名古屋からの戻り荷の中に剃刀砥として砥石が来ているで、いちがいに全部、砥沢の砥石だけが流通していたわけでもない。他の産地の砥石も入ってきている、と述べた。

幕府御用砥石であれば、下仁田に会所があったとしても、直に江戸の問屋が押さえると思うのだが、その点についてどう考えるか。今日の話は生産地のそばの会所からどう動くかという話だが、江戸の御用砥石であれば、もう少しストレートに江戸に入ってくるのではないか、という質問に対し、原氏は、ストレートに江戸に来ていると思う。例えば、関東の清瀬・青梅・志木・八王子などに行くにしても、いったん、江戸に入ってそこから新河岸川流通を経て出ていっている、少なくとも関東への再流通に関して、江戸問屋は押さえているのだと思う、と述べた。

今回の報告を聞いて気になるのは権力との関係である。高桑氏は今までの山形県内の事例等で砥石問屋というようなものは出てこなくて、取り扱う者は荒物屋に過ぎないという話をされたが、砥石問屋というほどの専門問屋が立地するというのはどういった所なのか、また、松本城下町というもの、つまり、松本城を支配する権力のあり方と絡めてどうなのかということがすごく気になる。さらに、御用砥石ということも含めて、砥石はさまざまな刃物に使用されるが、刀剣の仕上げにももちろん使われるのであるから権力的な商品でもある。松本城下町にこの砥石問屋が立地する、たぶん砥石問屋という専門問屋が先ほどの話もあったように、どこにでもあるようなものではないと思うので、そのことについてどういう見通しを持っているのか、との質問に対し、竹内氏は、松本は地理的な要因で物資流通の中心地であったこと、それから信濃の中でも一応、旧国府があった場所で、その後、

近世には各藩あるが、いちばん中心的な存在であった場所であった。また、江戸時代に書かれた『善光寺道名所図会』には、「信濃第一の都会にて、・・・実に繁盛の地なり」と記されていて、松本城下は、信州の中では中心的な物資流通の中心地であった、と述べた。

周辺に鎌などの特産地はないか、また、そのこととの関係はないのか、との質問に対し、竹内氏は、松本城下には多くの鍛冶職人が住んでいて、鍛冶屋跡を何箇所も発掘している。場所は伊勢町をずっと行くと野麦街道が走っていて、松本城の西の玄関口に当たるが、ここに鍛冶屋が多く住んでいて、ここの調査をやった中でも、6箇所ほど鍛冶屋跡を調査しているので、もちろん城下の中にいる。伊勢町と本町のずっと右に行った調査地の右手の方の博労町でも鍛冶屋跡が出ていて、そこでも、砥沢産の砥石が出ています。鍛冶屋ではそういうものを使うのではないかと考えている、と述べた。

高桑氏の話の中で、わりと大きな流れの中で、中世・近世の遺跡の中でどのようなものが出てきているかということがあったが、砥石そのものだけを見たときに、時期的な変遷というかその遺物自身の形状や大きさ等はわかるか。それとも、それは単に出てきた遺構からいつのものというのが判断されているだけなのか、との質問に対し、高桑氏は、砥石自体は形態変化が乏しくて、どこにも変化するような文様等も付いていないのだが、自分の2002年の文献で山形県内から出土した砥石を古墳時代から近世まですべての時代が分かるもの、古墳時代から近世までの砥石で共伴関係によって確実に分かるものをすべて載せて、一度はやってみようということで、砥石を年代ごとに並べたことがあった。形については基本的に柱状・板状ということは変わらないが、鳴滝砥などの広域流通する砥石が入ってくると、山形県の出土資料の中にはそういった板状のものが一般的に増えるという形状変化が追えるものもある。但し、細かく遺物を見ていつ頃だというように決めるのは砥石自体では難しい。大きい流れはあるが、砥石自体だけでは難しい。但し、竹内氏も取り上げていた工具痕については、たぶん工具痕自体の変遷を追えるので、砥石の形態・法量ではなく、工具痕をきちんと追いかけていくと、砥石の年代を追えることが最終的にはできる可能性は高いと思う、と述べた。

鳴滝産の砥石は上物なので商人が絡まないはずがなく、それは誰かが商っているはずである。考古学では京都の商人が研究上で想定されているのか、また、風間砥石の話でも、その交通の便のよい所にあるという話だが、生産地であれば良い石があればよいわけで、別に交通の便の良い所でなくてもいいわけだから、交通の便の良い所にあるというのは、何らかのそれを出荷する場所があるから交通の便の良い所にあるのか、良いものだからそこが全部いい所になるのか、という質問に対し、高桑氏は、例えば風間砥石を挙げた場合に、これは聞き取り調査になるが、資料集図5「風間砥石採掘所位置図」の右側の写真を見ると、柱を束ねたような割れ方をしている。これは、柱状節理という割れ方だが、この柱状節理の状況が風間砥石の量産体制に対して、おそらく近世に爆発的に砥石の生産が可能になっただろうと思われる。地元の方の話だと、この状態でいったん下まで落として、近いところである程度に加工したということだったので、まず、作業ができる場所は意外と近くの平場というよりはきちんと作業場に持ち込んでいて、作業場に持ち込んでいったところで、自由に動けるようにするということがあったので、交通の便が良いと言うのは話が飛躍し過ぎていたのかもしれないが、山の手ですべて作業が完了するのではなく、切り出した状態でいったん下まで持ち出して、自由にできる大きさになった段階で流通し始めるという理解で説明したつもりである。京都の鳴滝産の砥石については、考古学の研究をしていて、いつも引っかかってくる分野であるが、人が動いたのか、モノが動いたのか、技術が動いたのか、ということにもかかわってくる内容になるが、単純に砥石ということだけで答えると、やはり、非常に商品価値があるものであるから、それを持ち歩いて商売をしたということを前提に砥石の研究者たちとは話をしている。ただ、それを実証できる材料はやはり考古学

の中ではなかなか難しい、と述べた。

問屋はいつからあるのか、との質問に対し、原氏は、「とい」・「といや」が文献上に出てくるのは中世の史料であるが、私が近世の研究の中で、これが典型的な問屋の業態だということを原理的に導きだしたのが先程の話だが、それが論理的にこれが原理的なものだからといって、歴史的にそれが中世の原初的な問屋の在り方かという、必ずしもそうではないようなので、その辺は自分としては分けて考えている。さきほど言っていたいわゆる強力に流通を支配していくような問屋のあり方は、やはり近世の17世紀に誕生してくるものではないかと考えている、と述べた。

モノの流通ということを考えた場合、考古学で考えると生産地と消費地でモノが出たということしかないのだが、それを結びつけるような非常に基本的な文献の事例を知りたい、との発言に対し、原氏は、本来、生産地ではその跡が遺構・遺物として残るし消費地でも勿論そうだが、集散地はモノがうまく流通すれば残らない。けれども、そうした中で、たぶん、明らかに見つかった松本の例は稀有な例だと思うが、大量のものが火災で廃棄されたということなので、やはり、そうしたことで遺跡として痕跡が残るということはあるが、私が今日話した魚肥などは江戸や大坂の市中で使われる物ではない。勿論、武家屋敷の中には畑があったりするから、そうした所で若干需要があるが、江戸の干鰯市場にしろ、大坂の干鰯市場にしろ、純粹にかなりの遠隔地からのモノを受けて、これを中継して出している。例えば、江戸の干鰯市場であれば、関東の房総から相模ぐらいにかけての地域が中心だが、そのくらいの所から集荷しこれを全国に売り出す中継点になる。江戸自体はその干鰯の少なくとも生産・消費には関わるものではない。大坂についても同じなので、だから、集散地ということを考える視点は、ある程度難しいが、例えば、砥石は松本城下でも需要があるからそうではあるが、しかし、私が見ていた全く純粋な集散地という所を考える視点として、ここで消費も生産もされないそのモノ自体にせよ、何らかの痕跡があるという視点がきっかけになるのかなあ、と今日のいろいろな話を聞きながら思ったのだが、松本にしても先程いったように、砥石問屋というような専門問屋があり、これほどの大量のモノが保管されていて火災によって廃棄されたというのは、どう考えても松本城下で必要なものがこの店に来ているのではない。文献的にもそこから先に飯田などに出ているというのが分かるので、まさに中継点としてここが砥石流通における一つの集散地として成り立っていると思う。そのことが遺構からも文献からも分かるし、ではそれは、松本というところにそういうものがあるのはなぜだろうということに、もっと大きく広げて繋がっていくのかなと思う、と述べた。

東北地方を考える上で漆器というものが非常に重要なのだが、浅倉氏の報告は、近世前期に限定したものであって、寺院があり、そこが生産地であり消費地であり、また集散地であると。それがさらに東北の文化ということに非常に関わる漆器ということについては、考古学ではかなり言われているとは思いますが、それが文献史学の側で言われたと思う。西日本でのイメージとは少し違うと思うが、東国において生産流通等々で寺院が果たす役割ということを、改めてクローズアップした報告であったと思うが、その辺りのことについて研究された結果について、今までのご自分の近世後期の研究との対比でなにかお話いただきたい、との発言があった。

浅倉氏は、寺が見世役の献上などとして流通に積極的に関わっているということは、少し驚きで、その寺の流通に果たす役割をもう少し意識してみないといけないと思う。17世紀後半になると、城下町盛岡の商人と浄法寺の地元の流通業者との間に対立が出てくるようになる。今日話した段階と違う段階になってきていて、盛岡の商人が浄法寺塗を独占したいという欲求を持ってくる中で、地元業者と対立が出てくる。そうすると寺の役割は逆に減退してくると思うが、それについてはもう少し意識して考えてみたい、と述べた。

浄法寺塗は、例えば、遠く江戸の方へ出荷しているということはあるのか、という質問に対し、浅倉氏は、近世になると南部藩の特産品として、特に箔製品、高級品がやはり領外輸出の目玉だったようだ。三ッ椀や庶民のものは北東北地方でたぶん使っていた日常的な器だと思う、と述べた。

竹内氏からは、松本で、会津塗の金箔を貼ったものが出土している。直には考えられないので、江戸などを介してだと思ったのだが、松本城下でもかなり各地の漆器が出ている。その中で高級品の大きな菓子鉢と考えられるもの、それも金箔を貼った結構いい物が出ている、との発言があった。

浅倉氏からは、信州であれば新潟のルートも一つ想定できると思うが、江戸時代において上越の山場の漆、生漆は新潟へ持って行くという話をよく聞く。それを会津まで持っていくのか、それとも新潟である程度、漆器の生産をするのか、そのことはまた、議論をしなければいけないと思うがどうか、との発言があった。

原氏は、幕末の新潟湊の史料によると、会津も含め周辺地域から新潟町に木地がきて、加工が新潟町で行われているという報告はある。安政期に箱館産物会所に絡んで幕府がいろんな湊の産物調査をするがそれに絡んでいる。それは何が注目されるかという、現在新潟では漆器は余りイメージがわからないが、むしろ会津塗が有名になっているから、漆器ではなく木地が出てきて新潟で加工するというのは何なのかというのがあるのだけれども、しかし、そういったことも報告されているというのは事実である。もう一つは会津藩の場合、かなりいろいろな産物政策を採って、江戸に出すものも勿論だが、江戸を介さないルート、いわゆる藩済交易を特に幕末にかけて模索していくので、そうした点からいろいろなルートから信州に入っているのかなと思う、と発言した。

竹内氏は、信州の場合、特に松本へ入るルートとしては北からの糸魚川などから入ってくる道もあるし、それから伊那を通る街道、木曾谷を通る街道、甲州の富士川の河岸などがあり、そこも一つの重要なルートになっている。近世の陶磁器の動きを見ると、長野県内で北と南で様相が違い、北は日本海系統で、九州からの製品がどんどん入ってきており、中世には、珠洲の製品がどんどん出てくるということがある。ところが松本までくると、初期のころから、例えば雑器はほとんど出てこなくて高級品のみで、ほとんどが瀬戸美濃産という状況なので、商品圏の境界がその辺にあったと考えている。松本の陶磁器でいくと唐津のものは出なくて、絵唐津や沓茶碗などの高級品だけがポツンポツンと入ってくる状況になる。陶磁器でいうとちょうど松本から北と南とで商品流通圏が長野県内で分かれていると考えられる。中世の鍋で内耳鍋という鍋があるが、内耳鍋は14世紀終りから出はじめて、15世紀には確実に出てくるが、その流通でいくと、まず北信濃の長野市周辺で内耳鍋が発生して、それがパッと広がるが、その後は各地で作りはじめて、非常に小地域で少しバラエティーの富んだ形で作られはじめる。長野県の埋蔵文化財センターで松本を掘ったときに、内耳がどのくらい流通しているのかー内耳は下に砂をひいて粘土を作るが、その砂が松本市のどこの河川で作られたのかということで一分析した結果がある。それを見ると、どんなに離れていても10kmを超えることはなかったという結果が出ている。なので10km以内での在地の生産で流通している、という発言があった。

矢田氏からは、仁木氏の報告は文献史学ではどうしても京都中心になるものを、河尻の周辺での小エリアとさらにそこを中心とした交易のエリアという同心円の二重構造ということで京都とは相対的に独立した商圈ということを言われたのは、一考古学では当たり前と言われる小地域というのが文献史学では言い難いことだと思うが、それを丹念に文献史学の側から検討された貴重な報告だと思う、との発言があった。

仁木氏は、従来の京都中心史観というようなものが強くて、大山崎の場合だと、流通の特権をバックアップしているのは幕府に間違いないと思うが、具体的に荳胡麻の油の生産から流通というのは全

部、大山崎が握っているという話だが、しかし、それに対抗した者は、実際、今、史料上潰されている相手で、奈良・摂津の方、天王寺の辺りの商人たちや職人たちがやっていることは地域の流通だろうと思う。史料としては勝った大山崎の史料しか残らないので、それが強かったように見えるが、実際、最終的には大山崎は特権をだんだん失って行って、15世紀後半から16世紀前半にかけて駄目になっていくが、その背景には当然、地域における独自の商圈の広がりがあったと思う。それを如何にして文献史学の立場から見ていくのか、これまでの史料の読み返しをすると可能なことなのかもしれないと思っている。勝った側というか京都中心の、どうしても史料はそこしか残ってこないで、それから直接、見えないところをどれだけ文献史の研究者として努力できればと思っている、との発言があった。

以上は、報告者間の討論である。以下は参加者も含めた討論である。

本町砥石問屋遺跡の一括廃棄土坑の中で出土した砥石についてだが、その上州産砥石ということで砥石の組み合わせの中に、仕上砥や中砥みたいな感じの石質の違いや鉱物的な違いは材質の部分で述べておられるようだが、それが実際の使われる段階での仕上砥あるいは中砥等に対応するのかどうか、また、上州産以外の砥石が混じっていたのかいなかったのか、との質問に対し、竹内氏は、出てきた砥石の中に他のものが混じっていたのかどうかということだが、他の砥石はなくてすべて上州産の砥石である。それから使うときの問題であるが、中砥であり仕上砥ではない。質は仕上げ砥としては少し悪いというものである、と述べた。

問屋なのかどうかということはやはり、非常にこの遺跡を性格付ける上で重要なことだと思うし、少なくとも、これだけ大量に出ているということは、松本城下だけでは消費しきれなく、他の地域の仲買人等が来て、それを仕入れに来る場所だったと思うので、そういう意味で集散地という、他のものが混じっていない上州産の砥石だけを扱っているということをもう少し強調すべきで、そして、その中の内訳みたいなもの、規格や質を細かく分析された方がよいのではないかと思います、という発言があった。

漆器についてだが、中世の遺跡等を調査していると、新潟県の各城館からかなり漆器の製品が出土している。漆器だけではなくて、その漆器の生産に関わる生漆を土器あるいは漆器の中に蓄える漆液容器、あるいは漆器を磨く砥石、あるいは、木器の粗型とって加工途中のものが出てくることが時々あるので、著名な漆器の産地として近世以降、名前が残っているものがたくさんあると思うが、新潟の場合であると、やはり越後国内に産地があったのではないかと想定できると思う。それで、製作工程を示すような資料が、新発田市では新発田城や館の中で漆液容器が出ているが、方形居館あるいはその周辺に展開する集落のようなところから、わりと出る傾向が強いという印象を受けていて、方形居館というと文献史学の方々のイメージだと消費地というイメージを強く持たれるのではないと思うが、実際、生産に関わる職人をその中にもしくはその近くに介在していたということを指摘できるのではないと思う。そのあたりは近世の場合とはかなり違うが、近世の新発田城からは漆器そのものは出ているが、それに伴う製作工程を示す資料は出ていないので、そのあたりに中世と近世の違いというのがあるいはあるのではないかと思いますとの発言があった。

矢田氏からは、漆器については考古学の方が遥かに進んでいると思う。大寺院は権力者であるから、大寺院が生産も消費もし、そこでさらに販売も行ふ。大寺院は商人を抱え込んでいる。そのミニチュア版は各地にかなりあるだろう。であるから、今日の浅倉報告の寺院を城館に置き換えれば、大体、同じ話になるのだろうと思う。関西では檜物座のように商売人がストレートに出てくるので、漆器の生産が東だということもあり、文献史学では余り研究がないと思う、と発言した。

原氏は、近世であるが、大坂に漆屋仲間という仲間があって、漆屋という商売が大坂で成り立っているが、これは何をやっているかという、いろいろな場所からのさまざまな質の生漆があるわけだが、これを多分、市中の塗屋の需要に応じてだと思いが、ブレンドして売っている。そうしたことが近世の大坂などでは商売として成り立つが、多分、そういうことは、中世の城館などでは塗りまで自分でやっていたという可能性もあって、そのような段階差があるのかなと思う。近世社会の中で、そうした分業が高度に進んだあり方を一方で対極して示すと、逆にそれ以前のあり方もよく見えるということになるのかなと、いま聞いて思った、との発言があった。

『長楽寺永禄日記』に「杯」という語が何箇所かに登場する。どういった時に使われたかという、熱燗は塗物の盃で出す、それから冷酒はかわらけの杯で出すというようなパターンが見えてくる。かわらけの方は普通の素焼きの皿だと思うが、塗物の盃とはおそらく漆器だろう。このことがどれだけ普遍的な話なのかに興味があるが、例えば、そういった使い分け、素焼きの土器や陶磁器や漆器などにおいて、冷酒や熱燗などで使い分けがあるが、そういう考古学でいう食膳具と一括している器の中で使い分けみたいなものがわかる文献の記述があれば、教えていただきたい、との質問があった。

中井淳史氏は、記憶ではかわらけのことを「杯」と記すような事例はほとんどなかった様な気がする。なので、「杯」という言葉が出てきた時は、おそらくかわらけ以外のもの、具体的には陶磁器である。『長楽寺永禄日記』ではたしか、陶磁器か何か、天目か建盞だったと思うが、そういう陶磁器のことを指していると思う。かわらけを杯として使うことはあるが、それを杯と呼ぶ事例は非常に少ない印象である。

竹内氏は、先ほど、1万84籠が会所から富岡に送られると言われたが、その他の内訳は史料には本来どれくらいと出ているのか、また、籠には何個か入っているのか、また、その遺跡で出土しているのは中砥ということだが、仕上げ砥は名古屋から剃刀砥が入って来ているが、剃刀や刀とかは仕上げ砥だから京都から他のものと一緒に入ってくるであろう。中砥でこの群馬県産以外のものは長野市内の遺跡で出ることか、出ているとするならどのくらいの比率で出ているのか、という質問に対し、竹内氏は、下仁田からの送り先とその中身、数量は、富岡送りは1万84籠、上田送りは1200籠、岩村田送りは117籠、高崎送りは344籠、前橋送りは160籠、地元の町で小売りしたものは80籠という数字が残されている。籠の中身について、下仁田に送る段階での数量は1籠どれくらい入っているか、大きさがいろいろあり、それによってもまた違ってくる。中馬の荷では、例えば1個につき30挺入っているものと20挺入っているものがある。その違いは大きさの違いであると考えている。『群馬県史』に出荷する時の荷の規格が少し載っていて、大きく分けると4種類の規格に分かれる。一応、全部、何寸何分というのが決まっていて、一番大きいのが、縦6寸3分、横1寸8分、高さ2寸5分というものである。その次に縦5寸2分、横5分、高さ1寸6分という規格のものがある。次が縦4寸3分、横7分、高さ1寸3分という規格で、一番小さいのはそれより小さいもので特に決まりがないと書かれている。松本の例をこれに当てはめると、縦5寸2分、横5分、高さ1寸6分と縦4寸3分、横7分、高さ1寸3分に当てはまる。数量でみると、小法量の方が多くて、縦4寸3分、横7分、高さ1寸3分のものが全体の数量の90.5%で、大法量に当たるのが9.5%という出土量の比率となっている、と述べた。

御用砥石ということはどういうことか。江戸に行く砥石以外はどういう扱いで、いろんな所に商品がばら撒かれていくのか、との質問については、竹内氏は、一応、商品としての管理・採掘の管理も全部、幕府からの派遣の役人がおり、砥石の鉾山の所にきちんと役人が張り付いているようである。朝、採掘に行く人全員の名前など、点呼をとって、夕方、いくつ掘ったということなど全部書き込ん

で、身体検査して出すという厳しい統制のもとに行われていたそうである。実際に掘っていたという人たちは当然、砥石を掘るときに水が出てきたり、岩場をくり抜いたりということもやるので、そういうことに非常に能力を持っている専門集団であったようである。その人たちは後に、実は、新田開発にもすごい力を貸していて、佐久の五郎兵衛新田という用水路を掘った新田開発があるが、そこへ南牧の砥石を掘った集団が技術供与をしているという文書も残されている。御用砥石は、一応、製品管理もしているし、監察もきちんと出して、どこへいくつ持って行くという出荷の管理もきちんとやっている。出張会所というようなものも、たくさん行くところには置いていて、きちんと監察があつてきちんとここまで来たかという、そこまできちんと商品管理をしているようである。砥沢砥以外の出土砥石については、数多く出土しているのでしっかりとした数字を出していないが、どうしてもそれ以外のもので産地がどこか分からないものがあり、それについても問題でどこから来ているのかということ、江戸後期には地元でも一部掘り出すことをやっているの、その材質と比べたりして在地産があるのかどうか、あるいは、他の産地があるのかどうかということなど、これからそれらをしようと思っている、と述べた。

近世と中世では砥石の幅は変わっていかないのか、という質問については、高桑氏は、砥石の寸法については、古墳時代は大・中・小という寸法に三分化するが、その三分化するものについては、そのまま近世まで三分化のままでいく。長さはその三分化したものの、それぞれの中で、若干変化するものがある。逆に厚さの部分で、中世の段階で扁平化するという変化は大きく捉えられるが、中世から近世へという中では今のところは捉えることはできていない、と述べた。

石鍋の再加工というのは、石鍋をぶっ壊して別の製品を作るということなのか、という質問について、仁木氏は、石鍋は破片が100点ぐらい出ているが、その破片は例えば錐状の工具で穿かれた直径1~2mmの穴を伴うもの、つまり、壊している途中のものとか、鋸状の刃物で切断された疵跡があるそういう石鍋が出ているようだ。つまり、壊している途中の過程である。その一方で、硯など再加工したものが一部出ている。しっかりと再加工したものは勿論、商品となって再流通しているから、余り出ていないようだが、そういうような遺物が出てきていることから石鍋の再加工工房というように発掘担当者は判断しているようである、と述べた。 (文責・事務局)

法会・神事における土師器の使用

中井淳史（京都大学研修員）

はじめに

私たち考古学者は、出土した器物をなんらかの名前や概念にむすびつけて考古資料として理解する。土器や鉄器、土師器や須恵器、そして碗や皿というように。この営みは、器物を既存の知識体系に位置づけて認識することにほかならない。「モノをして語らしめる」ということばは、日本考古学では一種の金言となっているが、モノの理解の第一歩が、すでに構築された既知の（考古学的）知識体系にあてはめる行為であることをまずはじめに確認しておこう。モノをあるがままではなく、考古資料へと転位させる営みとは一種の概念化の作業であり、研究や報告はこれなくしては成立しない。

身の深いかたちのものを碗と呼んだり、浅いものを皿と呼ぶことから想像できるように、この知識体系は、多分に現代の考古学者の文化背景や認識体系に依拠している。したがって、私たちは、ときにまったく未知の器物を「不明品」や単なる「土製品」などと報告するが¹、これはしばしば、出

土した器物を既存の知識体系に位置づけられなかったことを意味する。たとえば、私たちは縁をもち、身の浅いかたちの土師器を土師器「皿」と呼称するが、中世の史料を瞥見するかぎり、これを「皿」と呼称した事例はほとんどみられない[中井 2002]。おなじ土師器に対しても、現代の私たちと中世の人びととの認識には大きなひらきがあったのだ。つまり、私たちが依拠する文化背景や認識体系は、必ずしも中世の人びとのそれと一致するとはかぎらないということである。とするならば、このズレへの反省なき考古資料の解釈は、アナクロニズムにおちいる危険性を抱えていることになる。

本稿ではこのような問題意識にたって、中世の土師器の用途・機能の一端を史料から明らかにし、考古資料の解釈のひとつの参照軸を供することを目的とする。ただし、土師器の用途・機能といってもあまりに漠然とした課題なので、本稿では法会・神事における利用にしばって検討する。その際に、1)「赤土器」、「白土器」の使い分け、2)法会・神事の道具として土師器がどのように位置づけられるのか、の2点に注目する。1)に関していえば、これまで土師器の赤・白という2つの大きな色調の対比に何らかの宗教性、とくに白土器の「白色」という色調に（そこから感覚的に想起される）「清浄性」をみる意見が主流であった[藤原 1988 など]。これは枕草子の有名な一節ともあいまって、正面から論じられることなく暗黙知として受け入れられてきたが、立証された見解ではない。そこで、史料の検討を通じてこの見解の是非を吟味しつつ、法会・神事など宗教儀礼における土師器の位置づけを考察する。

なお、本文中でとりあげた史料のいくつかについては、稿末に一括して掲載した。あわせて参照されたい。

1. 法会・神事と土師器

1-1. 赤土器・白土器の使いわけ

白土器がその清浄性のゆえか、寺院や宮廷で特殊な用途に使われたとする見解はしばしば指摘されるところであるが[鋤柄 1988 など]、実際にみてゆくと、これを裏づけるものはおろか、赤土器・白土器の使いわけそのものに関する史料はとても少ない。

15 世紀における春日大社の神供には、明確な赤土器、白土器の使いわけが確認できる。「社頭神供 朝御供へ赤土器、夕御供へ白土器」(『大乘院寺社雑事記』文明 7 年 3 月 23 日条、史料 1)とあり、朝夕 2 回おこなわれる神饌の供献に使用する土器を、色調に応じて使いわけていた状況がわかる。ここで注意すべき点は、赤土器・白土器の双方が使用されていたことである。両者が使いわけられるのは供献の時期(朝か夕か)のみに関してであり、神事だから白土器を選択的に使用するといった意味での使いわけではなかったのである²。

このような用法は、ほかの史料でも確認できる。応仁元(1467)年の東寺八幡宮放生会をみてみよう(『東寺執行日記』)。まず神供である「放生会御供」には、「あかい口け」(赤土器であろう)170 枚が用意された。一方、神子への饗応に使用する土師器として「三度入」や「小かわらけ」、そして3 日間行われる参会者への饗応には、初献に「白カハラケ」、二献に「チウチウ」を使用していた(史料 2)。ここでは、神供に赤土器、饗応に白土器と使いわけていた。しかし、饗応においても赤土器と目される「小かわらけ」を使用していることに注意すれば、赤土器のみが神供として排他的に用いられたわけではない。さらに、大永 3(1523)年 11 月 11 日におこなわれた梶井門跡(彦胤親王)の灌頂(「妙法院聖教」、『大日本史料』第 9 編 21、史料 3)をみると、御佛供用の土器として、大壇・灌頂壇・護摩壇には合物や三度入が、「供養曼タラ」には白土器が使われていた³。僧侶が配置され、法会のなかでより中心的な役割を果たすのは壇と考えられるから、これも同様の事例とみることができよう。

つぎに、『三井続燈記』所収の灌頂に関する記録（『大日本史料』第5編13、史料4）をみてみたい。ここでは行事の一環であった「茶饗」において、土師器の使いわけが確認される。いずれも料理を盛る器であるが、大阿闍梨には白土器が、そのほかの讃衆・預・駄士・新阿闍梨には赤土器が宛てられたのである。大阿闍梨は灌頂を受ける人物、新阿闍梨は受ける人物である。讃衆らは儀式の運営に携わる立場であるから、この場合には参加者の身分に応じて使用する土器を区別しており、白土器を上位者の食器として位置づけていたことになる。

先にあげた梶井門跡の灌頂に関する史料には、燈明皿に関しても注目すべき記述がみられる（史料3）。大壇をはじめ門前、後戸、讃衆座に至るまで燈明皿として合物や三度入が用いられたのに対し、例外的に「面道六所」には白土器が使用された。つまり、通路に面した箇所には白土器が意図的に配置されていたのである。

このほか、延暦寺の七仏薬師法に際し、油を入れた「大白土器」に紙燭をさして燈明に用いた例（『門葉記』、暦仁元年11月29日）がみられるが、これは白土器をあえて選択した結果かはわからない。

1・2. 土師器の用途

ここで、赤土器・白土器という区別からいったん離れ、儀式における土師器一般の用途を確認しておきたい。ほとんどの史料は儀式に必要な道具のリストのなかに土師器を記すのみであって、用途までを詳細に記録した史料は決して多くはないが、乏しいながらも顕著な事例をとりあげる。

まず、石清水八幡宮の御香水進上の神事をみてみよう（『武家御社参記』、『石清水八幡宮叢書』4所収、史料5）。仕丁が漉した御香水を「土器三ニ可入」あるいは「三ヲカサ子テ、上ノ一に」入れ、角折敷に載せて運ぶ作法が記されている。御香水進上に関する別の史料によると、ここでは「ヘイカウ」が用いられたようだ（『年中用抄』、『石清水八幡宮叢書』4所収）。「ヘイカウ」とは、口径7.0cmを測り、底部が大きくくぼむ、いわゆる「へそ皿」をさす可能性が高い[中井2002]。これが御香水を入れる容器であった。

つぎに、文治4（1188）年12月9日に後白河法皇が六条殿へ移御した際におこなった安鎮法の史料をみる（『阿婆縛抄』）。9日に「道場莊嚴」をおこない、儀式の準備をすすめた。11日に鎮所の点定をおこなったあと、5日目、すなわち13日に「正鎮」の修法が開催された。闕伽・油器・香器といった修法の道具と汁・餅・菓子・飯などの供物の容器にはいずれも小土器を用い、灑水器には大土器を使用している（史料6）。壇は何度も設けられ、そのつど道具が用意されたが、この原則はつねに遵守されていた。

応安3（1370）年4月1日に宮中でおこなわれた如法佛眼法では、いくつかの壇の下に「酢土器」を据えた記述がある（『門葉記』、史料7）。これは法具のひとつである独鈷を置くためだという。「酢土器」の具体的な形状はわからない。酢を入れるのに都合がよい形状の土器があって、それが慣用的な名称として「酢土器」と呼ばれるようになったと推測されるが、おそらく独鈷を置くのに都合がよいという機能的な理由から選ばれたのであろう。

13世紀ごろの成立と考えられる『阿婆縛抄』や『覚禅鈔』は、法会の内容や先規を記した書物で、密教の諸法会について規式や所作、道具が克明に記されている。個々をみてゆくと記述に精粗があり、すべてにおいて土師器の用途を知るのは困難であるが、わかりやすい事例をいくつかみてゆこう。

『阿婆縛抄』では、曼荼羅供支度の道具として、「大春日器」、「春日器」がみえる（建長3年条）。前者は灯明器、後者は仏飯器に使用された。聖天供では仏供を盛るためにもっぱら「大小土器」が70枚程度用意された（寛元2年条）。一方、『覚禅鈔』にみえる事例としては、如法愛染王法の規式が注目される。人形（おそらく紙でつくったものと思われる）を入れる容器として、また人形を焼いたの

ち、その灰を「小土器」に入れ、さらにもう 1 枚をあわせ蓋として重ねたうえで封じている。また水天供では、青の生糸を索状に結び、小土器に入れたものを堂の荘厳に使用している。なお、これと同様の事例を、三摩耶戒儀（『阿婆縛抄』）などでもみることができる。ほかのものと組み合わせて、荘厳具の一種として用いることもあったようであるが、事例の少なさを考えると、どこまで一般的であったかはわからない。

以上、断片的な事例ばかりではあるが、土師器がおもに燈明皿や供物を入れる仏具に用いられていたことがおおそ確認できる。これまでみてきたのは京都や南都の史料であるが、このような用途がどの程度地域的な広がりをもっていたのであろうか。地方の史料をいくつかみるかぎり、名称の問題はともかくとしても、用途に大きなちがいはみとめられない。たとえば、13 世紀の相模でおこなわれた伝法灌頂でも燈油や燈芯に併記して「小土器」が記載されているし（『鎌倉遺文』18103 号）、16 世紀の大和金峯山寺でも、「壇餅」用として、すなわち仏供の容器として大小の土師器が使用されていた（「山上雑用明鏡」、『金峯山寺史料集成』所収）。上でしめした用途は京都の寺社にかぎられたものではなく、寺社ではごく一般的だったと考えられる。

以上、法会・神事における土師器の用途をみてきた。第一に検討した赤土器と白土器の使いわけについては、白土器が必ずしも特別視されていなかったことが明らかとなった。たしかに摂津勝尾寺のように「祝ノ時」に「白カワラケ」（白土器）を使用する事例もあるが（「食堂上葺用途算用状」、『箕面市史 史料編二』850 号）、ほとんどの事例では神仏に供える供物や燈明は必ずしも白土器でなければならないわけではなく、法会の種類や寺社によってまちまちであった。このほかの土師器についてはさらに史料が乏しくなるが、大小土器の使いわけをみると、こちらはむしろ機能的な側面が重視されたようだ。先にみた『阿婆縛抄』六条殿安鎮法では、灑水器のみに大土器が使用されていたが、これは灑水器に香水を入れ、散杖で水を払う修法の所作を思い起こせば、なぜ大土器を用いたかは容易に理解できるだろう⁴。

いずれの場合にしても特筆すべきは、法会・神事に使用する土器に何を使うかが厳密に決められていたことだ。赤土器や白土器といった色調の区別に特殊な意義を付与して使ったというよりは、あくまで先規にしたがうことが重要視されていたのである。そもそも白土器が出現していない時期（およそ 12 世紀以前）には、当然のことながら色調の区別が意識化されることはなかったわけである。このようなあり方が先規として形成されたからこそ、赤土器・白土器出現以後においても、土器の色調差に特殊な意義が与えられることがなかったのではないだろうか。

1-3. 法会・神事における土師器の位置

つぎに、少し視点を変えて、儀式全体のなかで土師器がどのような役割を有していたかを検討してみたい。検討した史料の大半は、儀式で使用する道具を書き出したものであり、そのなかでは土師器の員数が記載されるにすぎない。このような史料についてはこれまでのような検討は不可能である。しかしながら、具体的な用法までは把握できないものの、土師器を使用した儀式の種類や、そこで使用された道具を知ることはじゅうぶん可能である。儀器全体のなかでの土師器の位置づけを考察する。

このような観点から史料を整理したのが第 1 表である（以下、括弧内の数字は第 1 表の番号に対応する）。ただし、史料の制約もあって具体的な状況を知ることができたのはすべて法会関連のものとなった。

集成した史料は必要な道具を列挙したものがほとんどであり、儀礼のなかでも具体的にどの局面で使用されたかまで記すものは少ない。わかる範囲で「土師器の用途」欄に記したが、これらをみると「妙物器」（五香や五穀などを入れる器）に使用される例（7）、「花ワン」や「花サラ」に用いる例（15）

第1表 法会・神事の道具							
番号	場所	儀式名	使用される土師器	使用される道具(土師・陶磁器・金属器・木器)	土師器の用途	備考	典拠
1	室中	鎌倉御修法		大青磁器100、小青磁器18、青磁14			永久五年鎌倉御修法支度記(続群書類完成会)25下、永久五年鎌倉御修法支度記(続群書類完成会)25下、三寶院法道親私記(続群書類完成会)26上、752)
2	宮中	神皇御修法	土器大小1駄、高麗22	折衝、陶花瓶口、木桶、杓、黒紙、釜大小			後醍醐二年後七日御修法記(続群書類完成会)25下、721)
3	醍醐寺三寶院	極楽蓮華	大10・小150	桶、杓、打鼓、櫓	仏供		
4	宮中	後七日御修法	黒器2	金剛盤、舍利香2、金剛香、茶[土器]器1、金剛鉢鉢、金剛平鉢3、黒器多数、乳[土器]碗大小多数、湯水瓶、建香器、火香、花懸2、金銅器	仏供		
5	宮中	真道供	大220、小220	松檜、黒器、桶、杓、黒器、折鉢、石鉢	供一重	小土器は小春日器で代用することもある	門前記(大日本史料)4編補遺、建仁元3.8.5(系)
6	醍醐寺	七仏通御修法	大土器200、小土器30、八春日器	桶、杓、折鉢、長瓶、櫓			七條御修法支度記(大日本史料)4-15、永久3.1.22、五壇法記(大日本史料)5-31、建長元3.24(系)
7	院御所万重小路殿	五壇法(金剛夜叉法)	小土器5	銅鉢桶、打鼓、鉢蓋、長瓶、銅餅、火香、花懸3、[金器]、仏器大小、鉢油器、大小杓、油器、反撥、燄火鉢	妙物器		五壇法記(大日本史料)5-31、建長元3.24(系)
8	院御所万重小路殿	五壇法		長瓶、桶、日、杓、釜、鉢、煎鉢		内支度	五壇法記(大日本史料)5-31、建長元3.24(系)
9	十束院本坊	真道供	小土器	銅餅火香、建香器、湯水瓶	燈明、仏供		門前記(大日本史料)5-18、文和2.10.16(系)
10	土御門殿	御盛光御修法	黒器器165	銅餅神承桶、銅餅折敷、種代、紙革、地桶、反桶、平水桶、煎鉢、新釜、長瓶			門前記(大日本史料)5-22、建長元3.12(系)
11	室中	真道供	八春日、移物	筒白木、餅皮、銅餅桶、銅餅折敷、煎餅折敷、平流桶、長瓶、飯椀、足桶、ワサト、裏無、御平流桶、ツルヘ			門前記(大日本史料)5-25、建長2.5.8(系)
12	妙法院	灌頂	三度入23、合物20、白土器18	火鉢、桶、折敷、折蓋、飯椀、イワカスリコハチ	仏供、燈明		妙法院聖教(大日本史料)5-21、大永3.11.11(系)
13	醍醐寺		油瓦器大小	折敷、折蓋、水フルキ、鉢桶、水カキ	燈明	内道場支度注文	内道場支度注文(醍醐寺文書部、826号)
14	醍醐寺	慈恵会	五度入、三度入	花瓶、火香、花足、花籠、瓦籠、八足、[金器]、煎敷、平水桶、土火鉢5、折敷			大乗院寺社諸事記(文永3年12月20日書)
15	園城寺	平明	二ト入	五壇、香器	花ツル・花ツラ	諸壇作法	諸壇作法次第書(園城寺文書部、11号)
16	園城寺	灌頂	土器大中小	折鉢5、折敷5、煎加桶1、煎加桶蓋約2、釜桶1、桶3(大中小1、煎鉢3、煎敷3、火鉢1)			如意寺・解願寺灌頂本記(園城寺文書部、21号)
17	園城寺	灌頂	土器大中小	桶3、杓3、煎鉢3、煎桶杓			如意寺・解願寺灌頂本記(園城寺文書部、21号)
18	園城寺	灌頂	土器大中小	厚折敷5、桶、杓、火籠、煎鉢3、釜桶杓1			観心寺文書(大日本史料)5-30、諸器)
19	園城寺唐院	灌頂	土器大小300	油桶杓1、杓大小3、煎加桶1、厚折敷5、煎桶5			園城寺唐院灌頂法(園城寺文書部、244号)

凡例：土器、陶磁器、木器、金属器などについては、異数が記載されている場合にはこれを併記した。また、道具は省略した。
香、鉢、油、布など儀式で消費されると思われる物品はこれを省略した。
木器、金属器については、形や機軸のような特徴品や注記は記載せず、器器のみをあげた。
「黒器」、「煎加桶」などは、黒色土器・瓦器と密接な関係が[中井2002]。ここでは便宜上土師器の項に含めた。
[土器]、[金器]、[金器]は本来「文字」である。フォントにない文字のため、便宜上このように表記した。

をのぞけば、仏供を入れる容器や燈明皿にもっともよく使用されたことがわかる。

これは神事でも同様で、祇園社の「朔幣」では神供の容器として「土器」、土師器が使用された例⁵、春日社で「年御祓」の神供で「アカウラケ」(赤土器であろう)、「小祭」で「スゞキ」(スツキ=酢杯か)が使用されている例(『多聞院日記』永正2年正月条)をみても、神供の容器に土師器を使用することも多かったと判断できる。なお、第1表に収載しなかった寺社関連史料をみても、土師器は法会や神事にともなう饗宴にて酒盃や食器として利用されることが多い[中井2002]⁶。これらも考えあわせるならば、土師器のおおよその位置づけが可能であろう。饗宴の飲食器としての利用とあわせ、このような仏供(より限定すれば仏餉)や神供、燈明の容器が主たる用途であったのである。

では、土師器とそれ以外の容器類との使いわけはどうであろうか。この点に着目するのは、土師器以外の材質の製品の使用状況と比較することで、土師器の役割をより明瞭に理解できると考えるからである。法会・神事では多彩な道具が使用されたが、これらのうち明らかに消耗品であったり、調度品と考えられるもの以外を第1表の「使用される道具」欄に収載した。まず、五香や五穀を入れる器や灑水器などの修法具には金属(金銅)製品を用いていたことがわかる(4・7・9)。供花を入れる容器も同様であったと推測されるが、陶花瓶が使われた例(2)や土師器が使用された例(15)もある。さらに、このような金属製品、あるいは仏供を供する時に使ったと考えられる折敷も相当量が記載さ

れている。

法会・神事では水や火を用いるのが通例である。前者は、鬺伽水や仏具の洗浄などに使用するが、これらにはいずれも木製の桶や杓を用いている。また、香や護摩を焚くための道具としては、炉のほかに火舎（おそらく金銅製と思われるが、瓦質土器の出土例もある）や土火鉢（15世紀の大和という状況を考えれば、瓦質土器であろう）があった。

このほか、どのような局面で使用するかは明らかではないが、鍋や釜、「イリカワラ」や「スリコハチ」、「掬鉢」（すり鉢）も確認できる（2・8・10・12・16～18）。また、大小の青瓷を使う例もある（1）。青瓷は青磁をさすのか、あるいは緑釉陶器をさすのか[植崎 1967]、ここではどちらとも決めがたいが、いずれにせよ記載されている量を考えれば、仏供の容器や仏具（六器）として使用していたことはまちがいない。ただし、これらについてはどの史料にも記載される品目とはいえず、どこまで一般的に用いていたのかはわからない。

では、土師器とそれ以外の道具とのあいだに何らかの相関関係はみいだせないだろうか。そこで比較的大量の土師器が記載されている例（2・3・5・6・10・16～19）に注目すると、いずれも金属製の仏具（六器）の記載が欠如していることに気づく。これらの場合、土師器は仏供の容器に使用していただけではなく、金属製の仏具（六器）の代用でもあった可能性が高い。しかもこれらは、雨を請う神泉御修法や師弟相承の伝法灌頂など、必ずしも恒常的（定期的）におこなわれる法会ではないことが多い。さらに推測を重ねるならば、恒常的に開催される法会では金属製の仏具（六器）を使うのが規式であった一方、臨時の場合には必ずしも金属製品を使用するとはかぎらず、土師器で代用することもあったと考えられる⁷。

残存する史料は法会関連に偏っており、神事の実態の把握には問題をのこす結果となったが、土師器は原則的に燈明皿や仏供の容器といった用途に限定されていたことが明らかとなった。ただし、同一の場所で恒常的におこなわれる儀式ではなく、状況に応じて臨時に、かつ随所で開催される法会では、仏具（六器）をも土師器で代用していた可能性が高い。土師器を多く使用していたのは、むしろこれにともなう饗宴の場においてであった。

2. 宗教儀礼と土師器

2-1. 宗教儀礼における土師器の位置

さいごに、以上の成果、および旧稿で得た成果[中井 2002]をふまえつつ、宗教儀礼（ここでは法会や神事など、宗教的な性格をもつ儀礼全体をこう呼ぶ）における土師器の位置づけを論じてみたい。冒頭で述べた問題意識にたちかえるならば、最終的に結論を提示すべきは、土師器がはたして清浄性を有していたのかどうかである。この問題は、こうした観念を背景として、法会・神事において選択的に土師器が使用されたかどうかを考察することによって、ひとつの解答を提示できるであろう。

まずは、宗教儀礼で使われる道具全体のなかで、土師器がどのような位置をしめていたかをみる。結論から先に述べれば、土師器を選択的に使用していたとはいえない状況であり、また全体をみわたしても土師器が中心的な位置をしめていたと評価するのもむずかしい。

宗教儀礼、ここでは史料的な制約から法会を念頭におくが、さまざまな法会では数名の僧侶が参集してとりおこなわれた。そこで中心的な場となるのは本尊をめぐる空間（諸尊や曼荼羅などの前に設置される壇）であり、所作の中心となるのは、導師をはじめ参会した僧侶たちの行為であったことはいうまでもない。このような儀礼の中心で使用された道具が、第1表にしめた品々である。

表をみると、そこで使用された土師器の役割は非常に限定されていたことがわかる。基本的な用途は仏供の容器や燈明皿であり、所作にともなって用いられる仏具（たとえば、香水を散ずるときに使

う灑水器など)は金属器を用いることが通例であった。しかし、このような原則は寺院内部で先規にのっとり定期的に催される法会に通じるものであり、堂宇や住居の地鎮や落慶法要といった、通常とは異なる場で臨時に法会をおこなう際には仏具の一部を土師器で代用することがあった。このような使いわけの理由をここで明らかにすることは困難であるが⁸、土師器が儀器として特別視されていたわけではなかったことはまちがいない。金属製の仏具が定期的な法会のなかでくりかえし利用されるのに対し、土師器は仏供や燈明といった場で使用されており、いわば消耗品に近い役割が与えられていたのである⁹。

さまざまな器物が用いられた宗教儀礼のなかで、土師器がその周縁に位置していたと論ずるだけでは、土師器の性格を考える材料としては不十分である。副次的ではあっても使用されていた土師器に、ある種類をとくに使用する選択性の有無を整理しておかねばならない。以上の検討結果からは、この点についても否定的な結論を導き出せる。すなわち、土師器に関連するほかの史料を参照しても、特定の土師器が法会・神事に使用されたといった選択性を想定するのは困難である。

今回の成果としてむしろ注目すべきは、法会・神事にて使用される土師器が、饗宴用のそれに比べて種類が乏しかった点だ。これは 15 世紀以降の事例をみれば明白である。大永 3 (1523) 年の梶井門跡の灌頂 (史料 3) では、白土器と三度入・合 (間) 物の 3 種類が使用されていた。旧稿の成果に照らし合わせれば、おおよそ三度入は口径 9.0cm、合 (間) 物は口径 10.0~11.0cm となる [中井 2002]。白土器はこの時期にはほぼ消滅してしまうために比定はむずかしいが、その退化形態と考えられる資料をみれば口径 10.0cm、あるいは 7.0cm となろう。つまり 3 法量、もしくは 2 法量の土師器で構成されていたことになる。時期は確定しがたいが、おそらく 15~16 世紀と想定される醍醐寺の史料 (『内道場支度注文』、『醍醐寺文書』5、928 号) に至っては、「大小」すなわち 2 法量の「油瓦器」を燈明皿として使用していた。一方で、日常生活での饗応や法会・神事にともなう饗宴では、土師器の種類は対照的に多くなる。たとえば「祇園執行日記」応安 5 (1372) 年条 (『八坂神社記録』、史料 8) などには饗宴の飲食器に使用した例がみられるが、「二度入」から「五度入」、「中々」や「小かわらけ」など多彩な土師器、いいかえれば多法量の土師器が用意されていた。儀礼に参会する僧侶やその関係者への饗応での土師器の種類の多彩さに対し、神仏に饗応される供物の容器は、せいぜい大小 2 法量しかなかったのである。そしてこのあり方は、中世を通じて貫かれていた。

このような状況が成立した背景を探ることは、もはや私の力量を超える作業である。ただ、史料を概観した範囲でいくつか述べるならば、法会・神事の場合において大小 2 法量の土師器の使用が中世を通じておこなわれた要因として、やはり先規の重要性が鍵となるように思われる。儀礼で使う道具やその所作を記録する営みは、儀礼の内容を先規として固定化し、それが継続されることを期待して後世に保存する性質を帯びている。その点においてきわめて保守的な作業であったために、土師器の器種構成の変化にもかかわらず、大小 2 法量というあり方が存続したと思われる。なお、江戸時代の上野国の古刹長楽寺の史料には、法会の道具として「大土器」・「小土器」がある¹⁰。結局のところ、このようなあり方は中近世を通して継続していたと結論づけられる。このようなきわめて強い保守性こそが、法会・神事に使用される土師器の特質として指摘できるのである。

2・2. 土師器＝＜清浄なる器＞論のゆくえ

乏しい史料から判断するかぎり、特定の土師器が特定の場で選択的に使用するあり方は、宗教儀礼のなかにはみいだせないというのが結論である。土師器を＜清浄なる器＞ととらえる意見は私のみるところ、藤原良章氏の研究に淵源するが [藤原 1988]¹¹、管見のかぎりではこれを直接肯定するような中世の史料はみいだせなかった。もちろん、清浄性を正面に据えた議論をおこなうためにはまた別の

方法でアプローチする必要があることはいうまでもなく、今回の検討はこの点を直接論ずるには不十分であることは否定できない¹²。ただ確実にいえることは、たとえ土師器が「清浄なる器」と認識されていたとしても、それが土師器の使用、とりわけ何を使うかという人々の選択に対してほとんど影響をおよぼしていなかったことだ。

白土器に関していえば、むしろ法会・神事において使用される局面は決して多くはない。法会・神事における宗教的な意義（その内容は明らかにしがたいが）に基づいた要請として白土器が出現したのではないことは確実であるし、現在の私たちがイメージするほどには、中世の人々は赤／白の色調差に清浄性といった観念を反映させていなかった。白土器、すなわち灰白色系の土師器は 13 世紀に京都で出現し、14 世紀には南都でも出現する。それ以外の地域では、京都や南都のようなはっきりした赤・白の対比をみることはほとんどない。白土器が出現する現象は、この点をとってみても非常に興味深い問題だが¹³、その意義を解明するには白土器＝儀器という考えを安直に前提としていては不可能である。このような先入観を排除したうえで、資料の分布から検討しなおすことこそが、もっとも必要なのだ¹⁴。

おわりに―器物の歴史と場の歴史

「歴史時代の文化を研究対象とする考古学」[水野・小林編 1959:1040]というのが、歴史考古学のもっとも簡明な定義であろう。そして、考古学という学問は、「過去人類の物質遺物（に據り人類の過去）を研究するの學」[濱田 1922:11]と定義づけられたように、歴史学の一分科として成立した。したがって、歴史考古学における学際性とは、学問として語るべき領域が拡大していった結果ではなく、学としての定義が本来的に内包する必然といえる。

他分野との対峙や協業という点で、戦後の歴史考古学の重要な論点となったのが、都市・城館研究や流通論的研究である。ごく大づかみな把握が許されるなら、これらは「場の歴史」を志向した研究といえるかもしれない。前者の場合は、遺構の正確な位置づけを積み重ねて都市構造を復元するわけであるし、後者は、遺跡の性格や遺物の分布状況の検討から流通構造を解明する。いずれも共通するのは、考古学的成果を中心に周辺分野の成果や議論も加味して、当時の社会に成立していたさまざまな場＝時空間のせり出しを復元する姿勢だ。ここにおいて器物、すなわち考古資料は重要な基礎データであることはまちがいないが、究極的には都市構造なり流通構造を語るための材料と位置づけられる。

歴史考古学の学際性とは、決してそれだけに限定されるものではない。その可能性のひとつとして、本稿では器物がどのように用いられたのか、すなわち器物そのものへ目を向けた「器物の歴史」を意図した。冒頭にものべたように、これは考古資料の解釈を深化させるうえできわめて重要だと考えるからである。しかしながら、「器物の歴史」は文献史学の領域内でも位置づけがたい分野のせいか、これまでじゅうぶんに注目されてきたとはいえない。本稿の試みが、歴史考古学と周辺分野の協業可能性の広がりについてあらためて反省する機会となれば幸いである。

【引用・参考文献】

梅川光隆 2001『平安京の器 その様式と色彩の文化史』、京都、白沙堂、総 207 頁

鋤柄俊夫 1988「畿内における古代末から中世の土器―模倣系土器生産の展開―」（『中近世土器の基礎研究』IV、日本中世土器研究会、pp.11-85）

中井淳史 2002「土器の名前―中世土師器の器名考証試論―」（『日本史研究』483 号、日本史研究会、pp.1-36）

檜崎彰一 1967「彩釉陶器製作技法の伝播」（『名古屋大学文学部研究論集』44(史学 15)、名古屋大学文学部、pp.153-170）

濱田耕作 1922『通論考古學』、東京、大鏡閣、総 230 頁（図版 64 頁）

藤原良章 1988「中世の食器・考—かわらけ—ノート」（『列島の文化史』5、日本エディタースクール出版部、pp.59-94。

のち加筆して『中世の思惟とその社会』、吉川弘文館、1997、総 316 頁に所収）

水野清一・小林行雄編 1959『図解 考古学事典』、東京、東京創元社、総 1056 頁

脇田晴子 1997「文献からみた中世の土器と食事」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集、国立歴史民俗博物館、pp.473-496）

【注】

¹ 祭祀遺物や祭祀遺構という報告例も、ときには具体的な位置づけができなかった結果（もちろん、すべてではないが）ということがある。

² ただし、神事に使用する土器の種類は厳密に規定されていたようだ。これをとりちがえたことに端を発した相論が、『春日社司祐彌記』永正 5 年 9 月 11 日条などにみえる。

³ 史料の別の箇所には「雑花・盛花・雑香・油器」に「合物」、「三度入」、「白土器」が併記されており、これらの土師器が花や香の容器にも用いられたことがわかる。

⁴ 史料が成立した 12 世紀後半ごろの京都産土師器をみると、大土器はおよそ口径 14.0cm、小土器は口径 9.0cm に集中する[中井 2002]。

⁵ 『祇園執行日記』文和元（1353）年 5 月 1 日条。

⁶ 慶長 6（1601）年の紀伊青巖寺の史料（『高野山文書』6、1234 号）をみると、寺務を統括する検校が堂宇や院坊に対し、「土器代」として一定量の米を下行したと記されている。年末や月単位での下行があることをみれば、燈明や仏供としての使用が前提であったと推測することも可能である。明記されていなかったので第 1 表には収載しなかったが、このように仏供や燈明としての使用例は表にしめた以上に一般的であったとみるべきであろう。

⁷ このような推測をうらづける資料として、長法寺遺跡（京都府長岡京市）の例があげられる（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書 第 24 冊』、1990）。ここでは堂基壇から、六器を模倣した器形の瓦器ミニチュア品が大量に出土した。出土状況をみるかぎりでは、堂宇建設時の地鎮、あるいは鎮壇の儀礼にともなうものと考えられる。地鎮や鎮壇儀礼はおなじ場所で定期的に行われる性格の儀礼ではない。このような臨時の、かつ場所が定まらない儀礼では、金属製品ではなく土器を使用したと考えられる。

⁸ 平等院旧境内遺跡（京都府宇治市）多宝塔推定地第 2 次調査で検出された SX63 は、康平 4（1061）年に四条宮寛子によって建立された多宝塔の基壇直下に位置し、状況からみて多宝塔建立にともなう地鎮に使われたと考えられる（宇治市教育委員会『平等院旧境内多宝塔推定地第 2 次発掘調査概報』、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第 26 集、1995）。出土資料はすべて土師器であり、一部には燈明皿としての使用に由来すると思われるタール状の物質が付着していた。

⁹ ここで「消耗品」ということばを用いたが、だからといって土師器が使い捨ての品とする見解に与するわけではない。燈明皿と考えられる土師器資料のなかには、斑状に複数の煤（またはタール状の物質）が口縁部に付着するものが多くみられる。口縁部に付着する煤は灯心の痕跡と考えるが、これが複数あるということは、やはり複数回の使用があったと考えるべきである。したがって、「消耗品」といっても、1 度の法会ですぐに廃棄するようなものではなかったと考える。金属器のように長期にわたる使用は材質的にみてももちろん困難であろうが、それでもなお数度にわたって使用されるのが普通であったということである。

¹⁰ 『群馬県史 資料編 5 中世 1』（群馬県、1978、総 1075 頁）所収の「蓮華院流灌頂私記」（同 16 号、慶安 4(1651)年奥書）、「灌頂秘要私記」（同 17 号、慶安 4 年奥書）など。同様の史料として中世に成立した「灌頂秘要記」（同 18 号、天文 15(1546)年奥書）、「瑜祇灌頂口決鈔」（同 21 号、文永 2(1265)年奥書）があり、その内容はこれらと類似する。これら中世成立の史料が先規となって、近世においても遵守された状況をみてとることができる。

¹¹ 藤原氏は、「かわらけ」を「きよし」とみる『枕草子』の記述を引用してこの見解を提示している。本章では平安時代の状況をほとんど検討できなかったが、この「きよし」とする清少納言の観念（これ自体が清少納言個人の感覚であったのか、それとも平安時代の貴族たち通有の感覚であったのかもまた、検討に値する）は中世に受け継がれるものではなかったように思われる。

¹² 脇田晴子氏は、中世の食事のあり方を検討するなかで、土師器の清浄性に対して否定的な意見を表明している[脇田 1997]。本稿の視点とは異なるためにじゅうぶんな吟味はできなかったが、結論としては私も同意見である。

¹³ 京都では 16 世紀になると、淡褐色系の土師器が主体となり、赤白の対比が不明瞭になってゆく。史料にみえる白土器も、16 世紀初頭を最後にみられなくなる[中井 2002]。このような動向は、土師器を使用する場において、色調の相違や対比を反映させる必要性がなくなったことを意味する。

¹⁴ 白土器の出現意義を考えるには、この分布の特殊性が鍵になると思われるが、具体的な検討は今後の課題としておきたい。なお、近年、梅川光隆氏は平安京で用いられた土器・陶磁器の色彩に着目し、その文化的意義を追求した論著を上梓している[梅川 2001]。氏の論点は土器・陶磁器の色彩にとどまらず、器名考証や価格、用例まで多岐にわたっているが、本稿でとりあげた赤土器・白土器に関してみると、氏は赤土器の色彩を「土の本来の性」をあらわしたものととらえ、「血・炎の色彩でもあり、激しさ・生命力を伴う色彩」と述べている。宴会で赤土器が使用されることは、こうした色彩のイメージをふまえ、「お互いの絆の再構築はもとより、大地の恵みを神の手から人の手に強引に取り込もうとする思念の表象だとしている[ibid.:17-18]。一方、白土器については（ただし、氏は白瓷なども含めて「白」の意義

を考察しているが)、通説と同様、「清浄性」と評価する[ibid.:19-34]。赤土器や白土器も含め、当時の使用法がわかる例を博搜した点は高く評価すべきであるが、氏の結論は結局のところ印象論の域を出るものではなく、論著のなかであげた豊富な用例もその実証に成功しているとはいえない。

引用史料 (抄)

凡例 ・本文中で引用・言及した史料の一部を掲載した。

- ・土器の用例を示すことが目的であるので、全文を掲載せず、適宜省略した。また、一部新字にあらためるなど、必要に応じて改変を加えた。
- ・括弧書きで級数を落として記載した箇所は、史料の割注部分である。

史料 1 一西京瓦器座衆申間事、別当方加催促者也、社頭神供朝御供ハ赤土器、夕御供へ白土器云々、白土器料所神人取納之、座衆ニ下行之云々、両堂・南円堂油器同白土器献之、如此訴訟ハ白・赤申合

(『大乘院寺社雑事記』文明7年3月23日条)

史料 2 御子方三献十五人分下行、(てうし送之、両座同之、)

いもかん	十五人分 (はち入之)	こふのり十五人分 (はち入之)
大豆はけ	十五人分 (はちニ入之)	うすおしき十五文三 (さかつきおしき)
やうの物	十五	小かわらけ卅
はし	十五前	枝大豆十五 (一文宛にし、タハネテ出之)
三ト入	三	酒 (略)
散米三合 (白米、坊用升、) 各以此方使、宮へ送之、 (中略)		

一、三ヶ日酒肴等事 (略)

初献 (イモ タウフ ムスヒコフ) 白カハラケ
二献 (カラサケノアエマセ、チウチウカワラケニ入テ引也)
三献菓子三 (コフカキナハウ) (略)

(『東寺執行日記』応仁元年)

史料 3 一汁 大壇十六坏 (合物)、灌頂壇四坏 (三度入)、護摩壇四坏 (三度入、生カウ三ヘキ充可置之)
一供養曼タラ 餅四坏 (坏別五充、白土器)、木菓四坏 (坏別柑子五充、白土器)、汁四坏 (白土器)
一燈明方 大壇四燈 (合物)、護摩壇二燈 (三ト入)、灌頂壇二燈 (三ト入)、門前一燈 (三ト入)、
後戸一燈 (三ト入)、閼伽棚一燈 (三ト入)、讃衆座五燈 (三ト入)、面道六所 (白土器)、三戒一燈 (ヲリウトニ入、三ト入)、高塔臺二本 (三ト入)、
内外両夜四十七燈

脂燭一折敷 (イカニモフトクシテ、七八ツカナカケニ置テ、有職ニ可進、夜出御ニ入也、有職指合時、行事僧役也)

(『妙法院聖教』、第二十七箱第五十五括)

史料4

一加茶饗事 (仁治記録)

御灌頂当日夕面々送遣之、

大阿闍梨御分 (略)

已上御菜廿四坏 (加御汁物定、皆白土器) (略)

讃衆十人分、菜百八十坏 (一人別十八種、々別五合、加汁定、用途九斗、已上赤土器)

従僧四人分、菜五十二坏 (一人別十三種、々別、同加汁定)

預二人分、菜十八坏 (人別九種、々別同、加汁定、用途九升、土器同前)

駟士二人分、菜十二坏 (人別六種、々別同前、用途六升、土器同前)

新阿闍梨分、菜廿坏 (種別同前、加汁定、用途一斗、五器同前)

将一比丘分、菜十三坏 (種別同前、加汁定、用途六升五合) (略)

(『三井統燈記』)

史料5

仕丁御土器^并酌請取而、御参之時入於水而、渡于御師之先達 (于時富繁)、先達取而渡于殿上人、殿上人取而被進上之、御土器如元取下了^{享徳二六十三記ニ所見}

私云、仕丁水コシヲ以テ水ヲコシテ、土器三ニ可入歟、又三ヲカサ子テ、上ノ一ニ可入歟、角ノ折敷ニ載テ、御師ノ先達ニ可渡歟、

(「武家御社参記」、長禄2年3月27日)

史料6

調入受地支物 (略)

闕伽一前 (小土器)、灑水器一口 (大土器加散杖)、五穀飯二坏 (小土器)、(中略) 汁、餅、菓子等各二坏 (小土器)、(略) 小土器三 (油器二塗香一) (後略)

(『阿婆縛抄』、文治4年12月19日)

史料7

一 七曜壇事

大壇左方寄東立之闕伽一前、燈臺二本立之、左脇机立之、銀錢九十置之、蠟燭仏供上指之、壇下酢土器一置之、独鉢為置之、銀錢主上御年三十三置之、

一 十二天壇事

西北角立之、其様如曜壇、蠟燭十五本立之、銀錢脇机十四本置之、塗香器壇下ニ置之、酢土器一同置之、為居獨古也歟、

(『門葉記』 応安3年4月1日)

史料8

一、鷹司殿へ参、御茶酒隨身、代八十文、於四條富少路誂之、御茶子一合 (扇破子、ケムミアラ、タカサ四寸於鷹司殿絵誂申之)、色々十二種入之、御酒一筒 (嚴淨房、筒二十提入)、菓子十合 (サムアシノ外居楯、ロー尺一寸、西大門代二十文)、素酸 (二百五十文)、毛立一 (アフラタウフ、ノイモ、フ) ヲリヒツニ入、兎一 (百卅文)、鯛一カケ (三百十文)、大タコー (百廿五文)、エヒ十 (百廿五文)、ワサヒ一連 (十五文)、ミソ (五十文)、薪 (七十文)、ツイカサネ十前 (六十文)、^{エカク}五ト入五、三ト入^{カス}廿、二ト入^{カス}三十、白カハラケ二十、チウチウ二十、カクノヲシキ二十枚、ヒロオシキ十枚、ウスオミキ百枚、白ハシ二十前、アカハシ五十文、シホ五文、アカヒツ二合 (近藤夫二人、宮籠二人)、筒持 (一人是ノ仕丁)、大概二貫三百文歟、

(『祇園執行日記』 応安5年12月13日条)

はじめに～問題の所在～

「流通」や「交易」に関することは、出土した遺物を起点に考察を行う考古学にとって、比較的取っ付きやすい課題である。どのような考古学的課題であれ、「モノの動き」に全く触れないまま叙述することはほとんど無いといってよい。「モノの動き」は、考古学の基幹を担う重要な構成要素であることは間違いない。

手法的に、考古資料の型式学的検討と分布論から、ある特定の生産地（ないしは系統）の製品が他地域等に移動したことを証明することは可能である。しかし、分布の提示をすることのみで、「流通・交易」といった行為を証明したことにはならない。行為に関する考古学的方法論は、残念ながら未だに確立しているとはいえないのである。

例えば、中世後期の土器分布と戦国大名との関係を指摘する研究がある。大名の影響領域（≡領国）とそこへの分布からそういった認識が提示されている場合が多い。しかし、その具体的な関係まで踏み込んだ研究は極めて少ない。簡単に考えただけでも、拡張が常である大名「版図」との関係、大名の流通政策との関係、中世後期以前の土器分布との違い、などがある。そもそもこれが「流通」という概念で表現できるものかどうかという根源的な問題もある。

さらに、実はこれが最も危惧されることであるが、一旦「大名と土器分布には関連がある」といった指摘がなされると、それが先に掲げたような課題を解明しているかどうかにかかわらず、「大名と土器分布には関連がある」ということばのみが一人歩きをする、という現象である。これに限らず、このような状況はけっこう多く観察でき、何かそれがすでに証明済みのような雰囲気を作ってしまう場面も見受けられる。

上記のような課題については、考古学的手法のみを用いて解明することは当然難しく、それこそ「学融合」的な考察が必要となる。しかし、その課題に対し、考古学的に何が分かっているのか、何が分かっているのかの整理はできるし、次のステップとしてはどういったものがあるのか、といった展望の提示は可能である。

近年、流通をテーマとしたシンポジウムも各地で実施され、多くの成果を挙げている。しかし、シンポの最後に実施される討論の場で、盛り上がった議論を見聞することはほとんど無い。この要因のひとつが、互いの依拠する方法論が整理されていないことにありと思われる。個別研究の進展と平行して、方法論の整理を行う必要性を強く感じている。

ここで見ようとしている「集散地遺跡」についてもそうである。今のところ個人的にも模索中という段階であり、明確な回答を持ち合わせているわけではないが、整理のためにも見ておこうと思う。

1 「集散地遺跡」論の位相

「集散地遺跡」ということばは、矢田俊文氏によって提示されたものである（矢田「中世水運と物資流通システム」『日本史研究』448 1999年）。それは、大局的にいえば、物資が「生産→消費」という流れを示すなかで、その中間を司る存在（＝商人）の意義を重視し、その存在を示唆する遺跡についての呼称とするものとして提示されたと認識している。考古学では「流通拠点」という表現もなされており、これを用いている橋本久和氏は、「集散地遺跡」に近い概念としている（橋本「土器が語る中世の流通」『中世西日本の流通と交通』高志書院 2004年）。

これらの見解に従えば、生産地と消費地との間に位置するような遺跡が存在することについては、

基本的な認識として文献史学・考古学を通じて存在すると見なされる。では、そのような認識はどのようになされているのかをまずは見ておこう。

a 生産地から流通を考える方法

生産地の分析から流通に迫る研究としては、吉岡康暢氏による珠洲系陶器類に関する長年の研究がある（吉岡『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994 年）。また、藤澤良祐氏は瀬戸産陶器類に関する分析を行っている。ここでは藤澤氏の研究を見る。

藤澤良祐氏の流通に関する問題が端的にまとめられているのが「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994 年）である。藤澤氏の研究は、土器に対する型式学的検討とその分布の検証を徹底的に行うものである。そこでは、中世前期の東海系無釉陶器（山茶碗）は「流通」と認識しており、その搬出には陸運のほか、海運も重視している。その担い手は「生産者自身が山茶碗の運搬と販売に直接従事していた可能性は極めて高い（p132）」とする。しかし、なぜ生産者と販売者とが同一視できるのかが明確にされていない。なお、同氏の「瀬戸・美濃大窯の生産と流通」（『戦国時代の考古学』高志書院 1993 年）でも「山茶碗の流通については生産者自身の振り売りと考えている（p397）」としているが、瀬戸・美濃大窯製品に関しては、山田商人が主役としている（p396）。

藤澤氏の研究では、中世前期と後期とを同じく「流通」としながらも、そこに段階差をするものである。しかし、その認識根拠は明確にはされていない。文献史料の比較的多い中世後期の状況をもって、前期にまで敷衍することに対する忌避なのであろうか。藤澤氏の考古学的分析方法は明快であるが、概念提示に関する詰めが必要である。

b 「流通拠点」を把握する方法

この研究方法は、橋本久和が積極的に取り組んでいるものである。この方法が提示される前の研究として、橋本氏は「中世成立期の土器相～畿内を中心として～」（『日本史研究』330 1990 年）を公表している。そこでは、瓦器は振り売りとしている。この背景には、「七十一番職人歌合」などの文献史料による影響が見られる。

その後橋本氏の流通に関する研究を、端的にまとめられている「土器が語る中世の流通」（前掲）から伺うと、「他地域から搬入された非広域流通品」によって、港や流通拠点を見いだそうとする手法であり、とくに、和泉型瓦器碗の存在に注目している。

橋本氏と同様な見解を示す研究に、飯村均氏の「東国の街道と流通拠点」（前掲『中世西日本の流通と交通』）や浅野晴樹氏の「北関東における陶磁器流通と遺跡」（『中世東国の世界 1 北関東』高志書院 2003 年）がある。これらの研究に共通するのは、少量かつ特徴的な出土遺物（飯村氏は、「本来広域流通しない在地土器・陶器や陶磁器以外の遺物」とする）に注目し、そのような遺物を出土する遺跡を「流通拠点」に相当する場として把握するものである。

この方法に含まれる研究は、他にもいくつかの事例がある。山茶碗の窯道具である蓋（＝普通の遺跡では出土しない）に注目して分析した小野木学氏の視角（小野木「岐阜県における山茶碗分布と流通」（『美濃の考古学』第6号 2003 年）や、岡田章一・長谷川真氏による、別地域を主な分布範囲とする複数の土製煮炊具が継続的に見られることから、流通拠点として兵庫津を評価したもの（岡田・長谷川「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003 年）などがある。

この方法は、出土した場の特性として考える際には有効な視点と考えられる。特徴的な土器の型式学的検討がなされていれば、その土器に不慣れな場合でも認識・識別が可能であるという利点があり、

その意味では、全国的に敷衍できる手法といえる。

課題としては、その遺物の稀少性や、本来広域流通しないことを何によって証明するのか、という問題がある。橋本氏の研究によると、和泉型瓦器碗の出土遺跡は瀬戸内から九州各地にかけて、100地点を越える遺跡があるという（同氏「考古学による中世流通史研究の成果と課題」『中世瀬戸内の流通と交流』資料集 広島県立博物館 2004年）。「瓦器は非広域流通品である」という前提を取り外せば、この遺跡数は稀少性を示すものとは言い難い。さらに、流通に「権力」の関与を想定するのであれば、一定地域の拠点ともなり得るような場や、それこそ「都市」と認識したくなるような場であっても、いわゆる稀少品が出土する可能性は高くなる。これらの、いわば「大消費地」と「流通拠点」との違いが、何らかの表現で提示可能かどうかの検討が必要と考える。

c 「モノ」の属性から流通を考える方法

「モノ」に認められる属性から、そのモノが出土した場の特性を評価する方法である。筆者や大庭康時氏の研究（大庭「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』448 1999年）がある。筆者は安濃津遺跡群における山茶碗類に未使用品・破損品が多く含まれることから、知多・猿投産陶器碗類に関して、安濃津の集荷地機能を想定した。また、近隣の里前遺跡・川北城跡の陶器碗の状況から、「集荷地」（安濃津）から搬送される「二次的集積地」の存在を考察した（伊藤「安濃津に関する基礎検討」『安濃津』三重県埋蔵文化財センター 1997年、同「安濃津の成立とその中世的展開」（前掲『日本史研究』448）。また、柴田圭子氏は、海運と海賊衆との関係も考慮しながら、備前焼播鉢の未使用製品が大量に出土した見近島城跡を「何らかの流通拠点」と評価しているのも、この観点に近いものである（柴田「中部瀬戸内の流通と交通」前掲『中世西日本の流通と交通』）。また、前述した小野木氏の検討にも未使用製品に関する視座が盛り込まれている。

この方法は、モノが持つ後発的属性（未使用・破損など）から見たものであり、その遺跡に対する評価を行う上では重要な観点と認識している。また、流通に関する問題に、型式学・分布論以外の観点を提示できるものとして今後さらに深化させる必要もあると考えている。

ただし、課題も多い。まず、未使用品・破損品が出土するといっても、モノは消費地に向けて流れるものである。したがって、そういったモノが出土する遺跡を消費地とは別個に評価するのであれば、なぜそこに未使用品が多数含まれるのかを説明する必要がある。また、破損品としか見えないものも、実際に消費地（としか考えられないような場）で出土している例もある。さらに、全ての遺物に関して具体的に示すことができる手法ではない。

d 文献史料を相互的に用いる方法

主に近世の状況から検討を試みたものにこの方法が見られる。長谷川真氏は、近世三田焼状況を検討するなかで、流通への関与を大都市商人の商業エリアとの関係で考察している（長谷川「三田焼と兵庫のやきもの」『市史研究さんだ』第7号 兵庫県三田市 2004年）。つまり、製品の良し悪しではなく、商人の商業エリアがいかなるものかによってその流通圏が決定されるという視角である。岡佳子氏による織部の分析（岡「洛中三条界限と桃山茶陶ー瀬戸物屋から唐物屋へー」『三条界限のやきもの屋』土岐市美濃陶磁歴史館 2001年）も、商人による注文生産を指摘している。これらの検討は、商品とその流通が持つ意味に迫る検討であり、今後の事例増加と検討の深化が楽しみなものである。

この方法による課題は、文献史料で示し得る事例があまり存在しないことと、注文生産ではないものに対する評価としてはどうなるのか、また、この事例をどの程度敷衍できるかどうかである。

e 「集散地遺跡論」の位相

以上、代表的な観点をかいつまんで見てきた。これらの観点にはそれぞれの長所・短所があり、相

互的な検討を行う必要があることは言うまでもない。上述した観点以外にもいくつかの観点が提示できる可能性は高い。例えば、記号墨書土器の分析は、流通の具体的な問題に踏み越える可能性を持つと考えている。考古学的な流通論を展開するためには、ひとつの事象を少なくとも複数の観点から検討を行っていく必要があると考えている。

2 概念としての「集散地」に関して

a 「集散されるモノ」と「場」の関係

前項で見た研究視角は、大きく分けて2つの立脚点があることに気付く。ひとつは、モノそのものに対する検討を基本とするもので、もうひとつは、遺跡すなわち「場」に関する議論を中心とするものである。前項の a・c・d は前者に、b は後者に主な立脚点を置いたものとなっている。

さて、「集散地」は、場を示すことばである。「〇〇遺跡」といった場合も、場を示している。したがって、「集散地遺跡」という概念はそのまま適用できるように見える。しかしその前に、物資の「集散」とはいかなる状況を指しているのかを検討する必要がある。概念的であるが、認識の前提となるので少し触れてみる。

<特定物資の集散> ある場所 X は、物資 a の「集散地」という用語で表現できる場合がある。しかしそこは、物資 b に対しては「消費地」としての属性のみを有しているという場合がある。全ての物資が「集散」される場所というのは現実的に考えるににくいので、「集散地」というのは、ある特定の物資について見た表現とするべきなのであろう。

<都市と集散> つぎに、消費地との関係である。場所 X は物資 a の集散地であるとともに、その最大消費地である場合がある。この場合、場所 X を「集散地」とそのまま表現するのは適切ではなくなる。

最大消費地と「集散地」とが重なる場として想起されるのが「都市」である。宇野隆夫氏は、「都市は地域の物資集散地であり、また広域の物流の結節点となる」(宇野隆夫「西洋流通史の考古学的研究」『古代文化』48-10 1996 年 第9図解説文) という。宇野氏の指摘は、「都市」を中心とした流通の一面を的確に表現したものであるが、先に示したように、「都市」は最大の消費地ともなり得る。

「都市」というマクロなレベルで見ると、二重の属性があるということになる。ただしこの場合も、先に見た岡氏の検討からすれば、「都市」の一角に「集散地」を抱えているということになる。とすれば、「〇〇遺跡=集散地遺跡」という図式は、場合によっては成立しないことになる。

<集散とモノ> 「集散」という語そのものには、その場での消費は前提とされていない。その語には、そこを起点・交点として物資が動くこと、すなわち、物資は他所で消費されるという前提が含まれている。常に「集散地」である場所とは、「その場に物資が止まることが無い場」となる。岡氏が分析した「京都三条のやきもの屋」や、「市庭」などがこれに該当する。したがって、「集散地」という「場」におけるその行為の痕跡(=遺跡)を把握することは、極めて困難である。

「集散」と「モノ」と「場」に関する問題をいくつか掲げた。他にもまだまだ課題があるように思われるが、「集散」に関しては、「場」と「モノ」の議論をひとまず切り離して考えることも、とくに考古学の方面から検討を加える場合には必要であると考えられる。

b 松本城下町の砥石に関して

具体的な例として、竹内靖長氏が検討された近世松本城下町の砥石流通を見る(竹内「松本城下における砥石流通の一事例」『松本市史研究』第9号 松本市文書館 1999 年)。竹内氏は発掘調査事例から、信濃松本城下町に「上野砥」を扱う問屋の存在を考古資料から裏付けられた。出土の状況から、上野砥は半完成状態で松本に搬送され、そこを起点として松本城下町およびその近郊に流通したもの

と考えられる。松本城下町で確認された上野砦の集積遺構は、生産地から消費地へと向かう物流の中継的な状況を明確に示すものである。上野砦を扱う問屋の存在は文献史料にも見え、問屋を起点に物が動くことを明確に示す事例として、考古学的にも極めて重要な事例といえる。

ではこの事例はどう評価できるであろうか。松本の上野砦問屋が、生産地と消費地との間に存在することは間違いない。その意味では「集散地遺跡（この場合、「集散地点」となるが）」と認識できる。しかしその位相は、流通の発端（集荷）から末端（消費直前）までの振幅があり、流動的である。松本の上野砦問屋に集められた上野砦が複数生産地からのものか、複数商人が関与しているのかどうか、この上野砦問屋からさらなる卸売りや小売りがあるのか、松本城下町を中心にどの程度のエリアに流通していたものなのかなど、多くの課題が残されている。

松本城下町の上野砦問屋の事例を見てきたが、これはその他の考古資料から分析される場合も基本的に同じである。「集散地」の検討は、単独の遺跡やモノから出発する。しかしその後は、より広範囲な地域や遺跡群との関係を見ていくことで本来の意味を見いだせるのではないだろうか。

おわりに

考古資料や遺跡を素材とした流通の研究は、分布論という点では考古学の成立と同じぐらいの長い歴史を持つが、その方法論に関する検討はあまり深化していないのが現状だと思われる。色々な方法論を模索しつつ、概念整理が必要である。「集散地遺跡」も概念のひとつである。そういった概念の妥当性も含め、真摯な議論がなされる必要があろう。今回の「学融合」を目指した総合研究は、まさにうってつけの場と認識している。

さいごに、歴史地理学で提示されている視角を紹介しておきたい。藤田裕嗣氏は近江五箇商人に関する文献を検討する中で、流通に関するいくつかのパターンを見いだしている（藤田「流通システムからみた中世農村における市場の機能」『人文地理』38-4 1986年）。モノの動きには、おそらくは藤田氏が提示したような複雑なあり方を内包しているのであろうが、考古学的に観察できるのは、そのモノが最終的に遺棄された状況でしかない。藤田氏が提示したような研究に対して、考古学からいかなる回答が可能なのか、「学融合」という場であるからこそ、そういった問題にも無関心ではいられないと認識している。

歴史地理学における資料と資料批判

堀 健彦（新潟大学人文学部）

はじめに

明治期以来、過去の景観や形態を比定・復原することは、歴史地理学にとって、重要な使命の一つとして存在してきた。このような認識は、歴史地理学者のみならず、隣接する科学、例えば文献史学者や考古学者からも度々、期待とともに示されるものであり、他方、歴史地理学にとっても隣接科学に伍して自らの地歩を固める上で重要な主張でもあった。もともと、現在の歴史地理学は、欧米の歴史地理学の影響を受けつつ、より多様な関心を抱くようになっており、必ずしも景観や形態復原にのみ専心している訳ではない。また、隣接科学も1980年代以降、歴史地理学の関心と方法論を摂取して、自ら景観や形態の復原を重視した研究を行ってきており、学問間の垣根は低くなる傾向にある。

しかしながら、それにもかかわらず、景観・形態の復原は、歴史地理学にとって中心的な関心のひとつであり、地名、地図（地形図、地籍図、絵図など）、資料写真、空中写真、文献資料、発掘データ、

地形、地割、民俗、伝承などといった、歴史地理学がかつて使用してきた景観・形態復原の手がかりとなる諸資料の中の幾つかについては、その性格と取り扱いについて、未だ一日の長が存在するものもあると思われる。

ここでは、そのうちの幾つかについて、簡単に見通しを述べ、中世考古学における学融合へ進む上での注意すべき点を示して行きたい。

1 地籍図

明治初期に全国的に作成された地籍図とは、地割形態と小字地名、地目が記載された資料である。地籍図の中世考古学における利用法の一例として、例えば、中世城館を比定・復原する際に、堀跡の形の地割や、城に関連するような小字地名、堀の部分が水田であるのに対して城部分が畑であるといった地目の違いが、重要な手がかりとなる。このような視角と手法は、現在では、歴史地理学が独占するものではなく、広く考古学や文献史学の研究者にも馴染みのものであろう。

ただし、注意しておきたいのは、地籍図に掲載されている小字地名は、明治期に多くあった呼称から、地籍図作成者が採用したものに過ぎない。通称地名と呼ばれる、公式に採用された地名以外の、その土地に住む人々によって語り継がれてきた地名については、近年の中世荘園の精緻な調査において記録収集の対象となっているが、それらは、地籍図に採用されなかった地名である。さらに、小字地名の範囲も明治期の地籍図作成にあたって公的に確定されたものに過ぎず、江戸期の検地帳に同じ小字地名が見えても範囲・面積が大きく異なることは珍しくない。最後に、地目であるが、これは土地利用と混同しないよう注意する必要がある。明治政府が税金賦課のために作成した地籍図に記載された地目は、税金の額を設定するために設定していく必要があったものに過ぎない。すなわち、実態としての土地利用と地目は一致するケースもあれば、異なるケースもあり、単純に同一視するには問題がある。

地籍図は、第二次大戦後の空中写真しかない日本の大半の地域において、広面積をカバーする資料であり、貴重なものであるが、資料の性格を十分に踏まえた上で使用する必要がある。

2 検地帳

検地帳も小字地名や地目の情報を含む資料である。検地帳も税賦課のための資料であり、取り扱いにおいて地籍図とは類似する。検地帳はすべての地域で残存している訳ではないが、中世考古学の発掘調査等では、近代の地籍図よりも、より中世に近いことから考えても、もっと注目されてしかるべき資料であると言えよう。

3 地誌

近世後期には、名所案内・紀行文の域を超えた、本格的な地理書というべきような地誌が日本各地で作成されている。例えば、文化6年(1809)の『新編会津風土記』は藩の面目を賭けて為政者が作成した地誌の例であり、寺泊の医師である丸山元純が宝暦6年(1756)に編述した『越後名寄』は個人の篤学者による地誌の例である。

このような地誌には、旧跡についての様々な情報が書き記されている。なかんずく『新編会津風土記』は中世城館についての記載が極めて詳細になされており、価値が高い。ただし、その記述内容の位置づけにはいささか注意が必要である。

第一に、『新編会津風土記』のような著作は、地域に存在していた資料や伝承をまとめた報告書という位置づけを行うよりも、一步、踏み込んで、江戸期の考証学に立脚し、旧跡についての作成者の見解に基づいて情報を提示した、現代で言うところの歴史地理学的な成果として位置づける方が相応しい。それゆえ、『新編会津風土記』の内容を吟味する際は、研究論文に対するのと同様の吟味が必要

であろう。

第二に、伝承が創造された可能性についても注意しておきたい。会津藩は、寛文6年(1666)の『会津風土記』など、度々、領内において修史事業を行っており、歴史に対しての意識が極めて高い地域であった。そのような歴史意識の高まりは、遺跡の保護という点で大きな寄与があったと考えられる一方、自分たちの住む地域について、過去にあった出来事のうち、名誉となる事柄を中心とした過去の顕彰とさらには過去の創造へと進む可能性を孕む。例えば会津であれば、蘆名氏や伊達氏といった郷土の誉れとなりうるような事柄に、本来は無関係の事柄も関連づけられて語られることも起こりうるということに十分留意しておく必要がある。

おわりに

以上、覚え書きのごとく、気づく点を書き留めてみた。これ以外にも、例えば、明治期の地形図をそのまま利用して、古い時代について議論する傾向についても、同様の資料批判が必要であると言えるが、今回の議論で不十分であった点も含めて、他日、論じたい。

[編集後記]

矢田・竹内・高桑・原・浅倉・仁木氏の文章は、11月3日、新潟大学で開催された第2回中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究会(略称:中世考古学文献研究会)の報告要旨をそれぞれの方に執筆し直していただいたものです。中井・伊藤・堀氏の文章は寄稿いただいたものです。

第3回中世考古学文献研究会も本年の11月3日に新潟大学で開催する予定です。テーマは、「中世前期阿賀野川流域(新潟県・福島県)の領主と城館」(仮題)でおこなおうと考えています。

発行	中世考古学文献研究会(文部科学省科研特定領域研究「中世考古学の総合的研究—学融合を目指した新領域の創生—」B:学融合方法研究部門B01学融合方法論研究(人文科学系) B01-1「中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究」グループ)
事務局	〒950-2181 新潟市五十嵐2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

会津盆地の歴史地理環境—会津と越後のつながりに注目して—（報告要旨）

堀 健彦（新潟大学人文学部）

1 阿賀川沿いの交通路復原に向けて

会津と越後を結ぶ河川である阿賀川（新潟県域では阿賀野川）沿いで、城氏に関連すると考えられる12世紀後半の遺構が阿賀野市の大坪遺跡、会津坂下町の陣ヶ峰城跡で検出されている。このことは城氏が阿賀川の水運を掌握し、会津から越後、越後から会津へのモノとヒトの動きを掌握していた可能性を想起させる。しかしながら、阿賀川は、慶長16年に起きた地震により滝が形成されるなど、現状や明治期の旧版地形図の状況を単純に12世紀代に遡及させて考えることは出来ない。それでは、12世紀後半段階の状況を復原していくためにはどのような手続きが必要なのであろうか。

2 会津盆地内での河道変化の把握

その際、会津盆地内の阿賀川と、喜多方市慶徳町山崎より下流の山間地部分の阿賀川とを区別して考えていきたい¹⁾。前者においては、阿賀川を含めて、多数の河川が緩扇状地を成しつつ自由蛇行していたのであり、洪水による河道の移動・変化に注意を払う必要がある。中世の会津盆地が何度も洪水に見舞われていたことは、『塔寺八幡宮長帳』の裏書等からみて間違いない。しかし、『塔寺八幡宮長帳』のような史料では、具体的にいつの洪水でどのように河道が変化したかと言うことを知ることは出来ないため、地形観察等を含めた歴史地理的な研究に基づく復原が必要となる。その際、先行する向井吉重の『会津旧事雑考』の中世における阿賀川の河道変化についての復原図は、古い痕跡が多く残存している状態での考察として大いに参照すべき成果であるが、あくまで歴史地理的な研究成果としてとらえるべきであり、向井の復原結果自体を無批判に事実とすることは危険である。それゆえ、河道変遷については、歴史史料と先人の観察や考察の成果、自然地理的な知見、発掘調査で判明した河川遺構などをつきあわせて、地道に総合化して復原していく他はない。

3 山間部における阿賀川と河道閉塞

対して、阿賀川が山間地を流れる部分については、どうであろうか。こちらについては、地震に留意したい。かつて、寒川は、慶長地震の震源を会津盆地西縁の断層帯の活動に求め、盆地を流れる諸河川が収束する山崎付近にて、下流側が相対的に上昇する形で断層が生じたため、河川の水が横溢し、山崎新湖と呼ばれた湖が形成されたと考えた。しかしながら、寒川の見解を検証する形で行われた地質調査では、慶長地震の際に当該の断層が活動した痕跡は認められないとの見解に至っている。それゆえ、山崎新湖や利田の滝の形成は、地すべり・山崩れなどの土砂災害による河道閉塞のため、生じたものであったと考えるのが妥当である。地震に関連する考古学の成果に目を転じると、西会津町の羽黒山館跡の発掘調査では、地すべり痕跡の認められる井戸が検出されており、地震との関係が想定されている。また、盆地部でも、地割れや噴砂などが複数の遺跡で検出されており、慶長地震との関係が示唆されている。しかし、12世後半以降、現在までに会津地方に影響を与えた地震は慶長地震だけではなかった。佐藤らの報告にあるように、昭和39年の栗島沖を震源とする新潟地震でも会津盆

地で噴砂や液状化といった現象が発生しており、震源が比較的遠いものであっても会津や会津・越後間の地域に影響を与えることがあった。また、歴史史料でも、『塔寺八幡宮長帳』の裏書²⁾によるならば、何度かの地震の記録が残されており、慶長地震以外に会津・越後間の地域に影響を与えた地震が存在した可能性も想定しておく必要がある。よって、地震痕跡の検出、即、慶長地震によるものとするには慎重である必要がある。

さらに、阿賀川が山間部を流れる地帯は、西会津町の滝坂地区が有名であるが、地質的に地すべりが起こりやすい地域となっている。また、山間地部分の阿賀川は穿入蛇行となっており、河道の変化は起こり難いものの、下刻作用が激しく、川幅は比較的狭く両側に山が迫り、氾濫原の形成が弱いという地形の特徴を持っている。このような深鍋型の川の断面に加え、蛇行のために川水の勢いが弱められることも併せて考えるならば、極めて河道閉塞が起こりやすい条件をもった地域であると結論できる。そのような観点に立った上で近世に編纂された地誌である『新編会津風土記』の記述をみるならば、阿賀川の難所とされる銚子の口の地点についても河道閉塞を伺わせるような記述があることは興味深く思える。また、山都町の和尚山と高寺山の間で川をせき止めて付近一体を湖にしてしまうというような類の伝承も同様に河道閉塞に関連すると解釈することも可能である。

よって、河川交通路にしても陸上交通路にしても、慶長地震の影響は大きかったことは間違いないとは言え、慶長地震直前の状態を復原して 12 世紀後半段階のものとするのは妥当ではない。水陸路とも地すべり・山崩れで閉塞してはまた改修を繰り返して使われたであろうと考えておきたい。

このように考えていくと、中世後期段階の会津・越後間の交通状況を物語る貴重な史料である、「永禄六年北国下り遣足帳」の記述も、単純に、12 世紀後半段階に遡及させることは出来ない。ただし、黒川（現会津若松市）から越後に向かうにあたり、柳津に出ていること、柳津で只見川を舟で渡り、いわゆる「別れの茶屋」の地点で近世の越後街道へと出ていることに注意したい。慶長地震の影響で越後街道が会津坂下越えの道へと変化する以前は、勝負沢越えの道が越後街道であったと言われているが³⁾、黒川から柳津に抜けるのに勝負沢越えをする必然性は無く、会津盆地西縁の山地を越える路は、近世以前の段階でも複数、存在していたことが明らかである⁴⁾。

4 会津と城氏

城氏が、阿賀川沿いの水運と陸運を扼する地点を掌握していたことは、大坪遺跡や陣ヶ峰城跡、寿永元年に城氏が源氏を呪詛し籠もったとされる赤谷（現新発田市）などの立地から推定することが可能である。しかし、これは、城氏がこのルートを伝って越後から会津、ないしは会津から越後へと進出したことを証明するものとは言えない。あくまで、交通の要衝を押さえるという城氏権力の存在形態を示すのみである。

そのように考えていくと、主要なものだけでも、魚沼と奥会津を結ぶルート（六十里越）、南蒲原と奥会津を結ぶルート（八十里越）などの越後と会津とを結ぶ交通路、奥会津から日光方面に抜けるルート、猪苗代湖を抜けて東山道へと連続していくルートなどを、城氏はどのように掌握していたのか、ということについても把握した上で、阿賀川沿いのルートの果たした役割を位置付けていくことが必要であると言えよう。

〔参考文献〕

柳田誠「阿賀野川中流域の地形発達史」地理学評論 52 1979

『「歴史の道」調査報告書 越後街道 若松～鳥井峠』福島県教育委員会 1984

寒川 旭「慶長 16 年（1611 年）会津地震による地変と地震断層」地震 40-2 1987

佐藤敏宏・八島隆一・小河靖男・小林昭二「会津盆地西縁における新潟地震による地震災害」福島大

学教育学部論集 理科報告 49 1992

寒川 旭「大豆田B遺跡で検出された地震跡」『会津坂下町文化財調査報告書 24 若宮地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会 1992

山本光正・小島道裕「永禄六年北国下り遣足帳」国立歴史民俗博物館研究報告 39 1992

『新潟県歴史の道調査報告書 11 会津街道・米沢街道』新潟県教育委員会 1997

『会津盆地西縁断層帯に関する調査成果報告書(概要版)』福島県 2003

坂内三彦「『会津旧事雑考』天文五年六月廿八日条の検証」会津若松市史研究 7 2005

『西会津町史 別巻 3 考古資料』西会津町 2005

堀 健彦「歴史地理学における資料と資料批判」中世考古学文献研究会会報 4 2005

- 1) 阿賀野川が蒲原平野に出ると、再び自由蛇行域となるが、ここでは考察の対象とはしない。
- 2) 厳密な史料批判が必要なことは言うまでもない。例えば、裏書の明応7年の箇所「大地震アリ」という記述は、会津地方のものではなく、東海道を大きな影響を与えた明応地震のことを指すと考えるべきである。
- 3) 塔寺八幡宮の存在からみて、慶長地震以後の越後街道とされた会津坂下経由の道も、近世以前から存在したと考えられよう。勝負沢越えから坂下経由に街道が変化したと言われるのは、勝負沢越えが土砂災害で閉塞したため通行不能になった以外に、会津若松城下から越後方面に抜けるルートとしての利便性が、坂下経由の道のほうが高かった等の理由が想定される。
- 4) 城氏の八館・二十八館の伝承との関連が想起されるが、検証が必要である。

中世初頭の会津（会津盆地西北部を中心に）（報告要旨）

吉田 博行（会津坂下町教育委員会）

はじめに

近年会津地方では、中世初頭と考えられる遺跡の調査例が増加したことや保存を目的とする陣が峯城跡の範囲内容確認調査を実施したことにより、これまで不鮮明だった中世初頭の様相が明らかになりつつある。これらの調査において、会津坂下町域では拠点遺跡が南部の大江古屋敷遺跡から北部の陣が峯城跡へ移動していくことが判明した。ここでは、なぜ拠点遺跡が南部から北部に移動し、12世紀前半に陣が峯城跡や薬王寺遺跡のような園池を伴う寺院が出現したか考えてみたい。

大江郷の拠点遺跡

会津坂下町域には約260ヶ所から遺跡が確認されており、平安時代と考えられる遺跡はこのうち約半分の130ヶ所を数える。これらは8世紀や9世紀前葉の遺跡が意外と少なく、その大半は9世紀から10世紀前半の遺跡が占めていた。そして、9世紀前半には大江古屋敷遺跡のような掘立柱建物跡のみから構成される拠点的な遺跡が出現する（吉田：1990）。この大江古屋敷遺跡は、会津坂下町大字大沖に存在する大江集落西側一帯に広がる遺跡である。この大江集落付近は、近世から『倭名類聚鈔』の会津郡大江郷に比定されていた場所でもある。遺跡の立地は、出鶴沼川が形成した南北方向に細長い河岸段丘上であり、遺跡の南側には大きな区画溝が東西に掘られている。遺構の変遷は、9世紀前半に企画性を持つ口型配置で倉庫を含む掘立柱建物跡群が構築され、9世紀後半に中心建物のSB03B（2×6間）がSB03A（3×7間）に建て替えられる。延暦14年（795）には郷ないし数郷ごとに正倉院を置く政策がとられ、大江古屋敷遺跡に見られる倉は、郷倉や借倉の機能を持っていたと考えるべきであろう。

また、この時期の大江郷域には須恵器を生産した萩ノ窪窯跡（吉田：2000）、土師器を生産した中平遺跡、仲丸製鉄遺跡のような生産遺跡が現れ、9世紀前半とは異なる生産体制が大江郷内で確立されていったようである。そして、大江郷域に会津郡と関連をもつ大戸古窯跡群産の須恵器の流入量が著しく減少している。このことは会津郡衙の機能が縮小・衰退していったことにも関連するのではないか（荒木：2000）。

10世紀代になると掘立柱建物群は遺跡の北側に移動し、中心建物はS B 02（4×7間）の総柱建物から、床張りの掘立柱建物跡であるS B 01（2×5間四面廂に濡縁）に建て替えられている。この建物の東側に穿たれた土坑群内からは、使用頻度の非常に少ない多量の赤焼土器や黒色土器、越州系青磁などが出土しており、ここにおいて儀式や饗宴などが執り行われていたことが想定された。

このことは、「10世紀に入ると国司の権限が強くなり、これまでの郡司は没落していき、出挙や営田で新たに力を強めた豪族が在庁官人となり国衙の行政にかかわる一方、郡司識、郷司識に補任されて郡・郷の徴税を請負、やがてそれを相伝の私領として世襲的に支配するようになった」（網野：1986）とする説とほぼ一致する。

この時期に上宇内村に現存する国重要文化財の薬師如来坐像は10世紀代に造像されたといわれ、これは、湯川村の国宝勝常寺薬師如来坐像をモデルにしたと考えられている。そして、このような仏像の造像を成し遂げれば、当然仏像を安置するお堂も造らなければならず、このお堂の維持、管理や毎年の供養などを考えればかなりの費用となることから、相当の有力者でなければ不可能であるという（若林：2004）。この仏像の造像には、大江郷の拠点遺跡に住した富豪層が関与していたと考えられた。

蜷河荘の拠点遺跡

このような大江古屋敷遺跡も10世紀中頃を頂点に消滅してしまう。10世紀後半以降になると会津地方でも土器が、木器や金属器に変化して遺跡からの出土数が激減する。このため、これ以降の時期を考古学的に検証することは大変難しくなる。しかし、木器や金属器に変化しても土器が完全に消滅してしまうわけではなく、土師質土器（赤焼土器）として主に儀式や饗宴などに用いられて残存していく（山中：2004）。

この土器は10世紀後半代になると下政所集落東側の北遠面遺跡（吉田：1992）、さらに11世紀中頃には下政所集落南側の宮ノ北遺跡（和田：1993）から出土するようになる。この調査により会津坂下町内における平安時代の拠点遺跡は消滅することなく、町の北部へ移動して存続していくことが考古学的に確認された。

特に宮ノ北遺跡は、方形の溝で区画された内外から、四面廂を持つ掘立柱建物や倉庫と考えられる大型の総柱建物などが検出され、これらは多量に出土した赤焼土器からほぼ11世紀中頃の建物と考えられた。このような11世紀代の特殊な用途の赤焼土器が多量に出土する遺跡は、現在のところ大江郷域において本遺跡しか存在しない。また、宮ノ北遺跡に程近い中政所集落の県指定重要文化財の定徳寺薬師如来は11世紀後半の在地の造像で、一木造ながら穏やかで優雅な定朝様の作風を受け継いでいる。このことは、11世紀半ばに新たな仏像様式の定朝様が京都において確立すると同時に、この仏像様式が会津地方へも流入したことを示している。そして、会津の定朝様は、他地域を経由したものではなく直接京都から影響を受けて造像されたものという（若林：2004）。

この11世紀代の会津坂下町域は『近衛家所領目録』にある摂関家領である蜷河荘と考えられており、この宮ノ北遺跡が蜷河荘における最初の拠点遺跡だったと考えられる。また、この政所という地名の起こりは、この拠点遺跡に因んで付けられたとも考えられる。

11世紀後半には、東北地方において前九年・後三年合戦が勃発している。大石氏はこの合戦の産

物として東北地方の摂関家領が立荘されていったと考えられたが、「会津地方の摂関家領は、安倍・清原と源頼義・義家の対立に収斂されるような矛盾の産物として説明しきことは難しい」とされ、この合戦と蜷河荘の立荘との関連には否定的である（大石：1986）。

この蜷河荘は、『近衛家所領目録』に冷泉宮領とあり、僖子内親王の所領であることが明らかである（義江：1967）。しかし、この僖子内親王が遠隔地である陸奥国の会津郡大江郷を知るはずもなく、そのような彼女に大江郷の在地領主が直接寄進を申し出て立荘したとも考えられない。他の事例からも荘園の立荘には、国内で強力な権力を持つ受領が関与していることが多いことから、蜷河荘の立荘にも当時の陸奥国受領であった源頼義が関与して行われたことは確実であろう（吉田：2001）。

ただ、この立荘が源頼義を介したにせよ在地領主からの寄進なのか、はたまた中央主導だったのかは文献資料が存在せず定かではない。隣接する南会津地域に存在した勸学院領の長江荘も比較的早くから立荘されており、これらの荘園は中央主導で立荘されたのではないかと考えられる。

この源頼義は、僖子内親王の父である小一条院（敦明親王）の判官代を勤めた間柄で、藤原道長は東宮を辞退した小一条院に対して圧遇をもって接したという人間関係が浮かび上がるが、やはりこれは摂関家が考えた荘園整理令などを乗り切るため女院領を利用した可能性がある。中村五郎氏は、中央主導によりこの荘園が初めから藤原師道に伝領されることを見通して立荘されたと考えた（中村：2000）。

このように立荘が中央主導であったとしても、なぜ早い段階に会津地方の荘園が立荘されたかという疑問が残る。そこには、この時期から物流のルートが大きく変化した可能性が考えられ、日本海側ルートを介した流通が活発化したためと考えられる。会津坂下町においても 10 世紀までの拠点遺跡である大江古屋敷遺跡は、旧越後街道から離れた宮川の支流である出鶴沼川東岸に立地していた。しかし、新たな拠点遺跡である宮ノ北遺跡は、旧越後街道沿いの阿賀川に近い旧宮川東岸に立地していることから越後方面への交通を強く意識したものと考えられる。

すなわち、この時代に勃発した前九年の合戦により北への物流が活発化したことで、京都において北陸に接する会津の存在が再び見直されたことから、陸奥国の要として比較的早い段階に蜷河荘や長江荘が立荘されたのではないかと考えられる。

陣が峯城跡の築造

このように蜷河荘の拠点遺跡は宮ノ北遺跡から始まったと考えられるが、これ以降の時期になると出土土器の減少によりいっそう不明瞭となってしまう。

そのようななか宇内集落に存在する陣が峯城跡において、12 世紀の貿易陶磁器や国産陶器、土器がまとまって採集され、越後城氏の伝説をもつことからにわかに色めき立った。

陣が峯城跡は、会津盆地が一望できる越後街道の勝負沢峠出入り口部分の段丘崖上に立地する。平面形はほぼ五角形を呈し、周囲に二重堀が巡る館跡である。範囲内容確認調査の結果、大型掘立柱建物跡と多量の貿易陶磁器（中国産白磁・青磁・青白磁、高麗青磁）、国産陶器（須恵器系・常滑・渥美）、青銅製品（和鏡・鍾）、鉄製馬具・武具、木製品などと大量の炭化米・豆・蕎麦などが出土した。これらの遺物はすべて 12 世紀代におさまるものであった。すなわち、この城館遺跡も蜷河荘における拠点遺跡の一つと考えられた。

12 世紀初頭の蜷河荘は、『近衛家所領目録』によるとすでに僖子内親王から藤原師実の妻である麗子に伝領されたが、永久二年（1114）四月に死去したことで、六月には孫にあたる藤原忠実へ伝領されている。この藤原忠実は白河院と間隙が生じ政権の座から転落したことにより人事権を喪失し、受領をはじめとする中・下貴族、武士などの離反を招いて儀式にも費用面などで支障をきたす事態に陥った。こうした事態を打開するため、分割された摂関家領荘園の統合や、地方豪族と提携して拡大・

新設することで、摂関家の経済基盤の建て直しを図った（元木：2000）。

このような時期に陣が峯城跡は構築されている。ここからは度量衡を管理したことを示す青銅製錘や松鶴文方形鏡、高麗青磁などが出土している。このような特殊な遺物が出土する背景にはやはり京都との関係が考えられ、そこには荘園領主である藤原忠実があるのだろう。元木氏は、摂関家の経済基盤は家司の財力に依存するのではなく荘園中心に変容した結果、政所の組織が拡充され、家司の下で実務を担当した六位程度の官人である下家司が活躍するようになり、摂関家家政機関の中心として大きな役割を果たしたことを指摘している（元木：2000）。

薬王寺遺跡は遺構や出土遺物からⅠ～Ⅴ期の遺構の変遷が確認され、これらの時期はⅠa・b期が12世紀前半から中頃、Ⅱa期が12世紀後半、Ⅱb期が12世紀末から13世紀前半、Ⅲ期が13世紀後半から14世紀、Ⅳ期が16世紀から17世紀、Ⅴ期が18世紀である。特にⅠa期の遺構には廊を持つ五間四面の大型建物と池跡遺構が検出された。これらは遺構の重複関係や出土遺物から12世紀でも前半代に比定され、その性格は寺院の可能性が考えられた。

薬王寺遺跡Ⅰa期の建物は、規模は異なるが古絵図に見られる京都府法金剛院（小松：1998）や神奈川県称名寺（神奈川県立金沢文庫：2002）のようなものと考えられ、検出された池跡遺構は山麓から流れ出る湧水を一度貯水池に溜めてから遣水で池に流していたことが確認されている。このような造園技術は在地では到底不可能であり、やはり京都から技術者を招来しなければできないものと考えられる。さらに遺物も貿易陶磁の中国産白磁壺や碗皿、国産陶器の常滑産大甕などが出土しており、陣が峯城跡の出土遺物と比較しても遜色のないものであった。すなわち、この寺院を建立し維持管理できた人物は陣が峯城跡を築造した主の可能性が考えられた。

雷神山経塚は陣が峯城跡西側の標高約300mの山頂に所在する。本経塚はここに築かれた全長47mの雷神山古墳（前方後円墳）の後円部を利用して構築されている。『新編会津風土記』南宇内村の項には、「○経塚 村西九町二十間余山上にあり、高六間周三十間、高寺の僧徒一石一字の経文を埋めし所といふ」とある。会津坂下町史に戦後ここから金属製の経筒が発掘されたという。昭和56年に高校教師がこの古墳を発掘し、積石遺構内から12世紀前半の渥美産と考えられる灰釉壺1と短刀2を掘り出した。これらは未報告のため詳細については全く不明であるが、この積石遺構が経塚遺構本体だったと考えられる。

舟渡（雲雀）城跡は、只見川が形成した見晴らしの良好な河岸段丘上に立地する。『新編会津風土記』には、「○館跡 村の辰己の方にあり、相傳て雲雀城の跡と稱す」とある。

城跡は只見川に面する南側が大きく侵食され、当時の平面形とは異なっている。西側は比高差約10mの段丘崖となり、北側から東側にかけてL字状の堀が巡る。土塁は部分的に北側にのみ認められる。堀跡は断面形がV字状を呈する薬研堀で幅は約12m、平場からの深さは約7mであった。堆積土内には再度掘り直した新しい2号堀跡の存在が認められた。遺物は平場のトレンチから14～15世紀の青磁碗が1点出土しているが、これは新しい2号堀跡の時期の遺物と考えられた。

本館跡からは12世紀代の遺物が出土していないが、自然地形を最大限に利用していることから陣が峯城跡の築造方法と著しく類似している。今後の調査に委ねられよう。

寿永・治承の内乱以降の様相

保元の乱(1156年)勃発後、藤原忠道が各地の荘園を伝領した時に公卿以外の預所は全て解任され、武士を始めとする荘園支配の暴力装置が解体してしまった（元木：2000）。そして、陣が峯城跡も12世紀後半代に突然消滅してしまうことが確認されている。陣が峯城跡の調査はまだ完全に終了とていないので結論を出すわけにはいかないが、多量の炭化材とともに鉄族が出土していることから戦火に遭遇した可能性は否めない。『恵隆寺縁起』には、助職（城四郎長茂）が木曾義仲を征討するに當って、

兵を四郡に徴したが、独り恵隆寺のみは之に応じなかったので、助職、乗丹房等は大いに怒り、兵を出して勝負沢、陣ヶ峯等を攻めてこれを滅ぼし、堂塔は勿論、寺領を略取したとある（眞田：1922）。これは、あくまで伝承の域を出るものではないが、攻め滅ぼされたとすれば養和元年（1181）であろう。このことは保元の乱以降、摂関家の荘園支配に対する弱体化が地方にまで波及したことで、蜷河荘も周辺勢力から侵略を受けたのではないかと考える。『会津鑑』に陣が峯城跡に程近い長井村の極楽寺は「寿永元壬寅年永茂建ッ或云安元元乙未年建ッ」とあり、伝承では城四郎長茂が建てた寺となっている。この頃には越後城氏が蜷河荘内に侵攻したいと考えられる。

また、藤原忠道の死後、藤原基実の平清盛の娘である盛子を正室に迎えて、摂関家は平氏一門との提携を深めていくという状況に変化していった。平家一門である越後城氏が越境して陸奥国の会津蜷河荘に侵攻してきても、平家と縁組した摂関家としては何ら問題としなかったのではないかと。また、会津はこの頃になると城氏と関係のあると伝わる乗丹房率いる慧日寺の支配下にあり（高橋：1967）、摂関家が弱体化し、平家が盛行していく時期とほぼ重なるようである。

薬王寺遺跡においても、ちょうどⅡ a 期の12世紀後半に大型建物や池跡の機能が停止しており、陣が峯城跡と同じ盛衰状況を辿っている。前述のとおり薬王寺遺跡の建立には、陣が峯城跡の主が関わっていた可能性が強く考えられ、この庇護を失ったことで維持が不可能になったものと考えられる。

前述のように会津まで勢力範囲を伸ばしていた越後城氏は、横田河原（長野市篠ノ井）の合戦に敗退した後陰りが見え始める。城四郎長茂は、『平家物語』『源平盛衰記』などによると木曾義仲追討のため会津四郡等の兵を率いて横田河原で戦ったが惨敗した。その後は『玉葉』によると「然間、本国在庁官人己下、為遂宿意、欲凌礫助元之間、欲引籠藍津之城之处、秀平遣郎従、欲押領。」とあり、越後に戻ろうとしたが在庁官人の反乱に遭い、会津に逃れようとしたが藤原秀衡が郎従を派遣して会津を押領したので、ここからも逃れたということである。すなわち、この時期会津における越後城氏の勢力が弱体化したことで、奥州藤原氏の勢力が会津にまで及ぶようになったと考えられる。

『会津鑑』に薬王寺は、「建久六乙卯年田尻大和建ッ」と記載されている。この建久六年（1195）は、前述の遺構変遷においてⅡ b 期に相当し、既にⅠ期に構築された大型建物や池跡は消滅している。このことから、田尻大和が建てた建物はS B 0 6ではないかと想定される。田尻大和は安倍正任の後胤とも記されている。古川利意氏はこのような安倍氏関連の伝承を山都町史において越後城氏に結び付けて考察されている（古川：1989）。しかし、越後城氏は前述した『玉葉』から考えても既に会津から退去しているはずであり、藤原秀衡が会津に派遣した郎従の一人と考えたほうがよさそうである。中尊寺金色堂の棟木墨書銘には安倍氏の銘が認められ、12世紀代になっても安倍氏一族は奥州藤原氏と婚姻関係を結んでいた。この安倍氏一族の田尻氏は、文治五年（1189）に奥州藤原氏が滅亡した後もここを離れず会津に土着したのではないかと考える。

薬王寺遺跡のⅢ期になると一間四面堂が建てられ、柱穴からは大きく面取りした八角柱材（円柱の基礎部分か）が検出されている。この柱材の放射性炭素年代測定結果からは、A D 1020～1210 という年代が得られ、Ⅰ期建てられた大型建物の古材を再利用した可能性が強く考えられた。また、現在の薬王寺には、慶派の作風をもつ13世紀中頃の阿弥陀如来坐像が安置されており、本来この仏像はS B 09に安置されていたものではないかと想定される。

現在の薬王寺が再興されたのは天正十二年であり、『会津鑑』の「天正十二甲申五月二日（1584）稲川庄薬師堂修復傍日 別当宥覚阿闍梨 檀那 黒川刑部左衛門 長谷川孫左衛門 田尻和泉」という記述から確認される。薬王寺遺跡からは、Ⅳ期の遺構・遺物が検出されており、この記述とほぼ符合する。この再興した三人の人物は、前述した田尻大和の後胤であることから、安倍正任の末裔になる。

地元には、杉の仁王様と塔寺の仁王様が大ゲンカをして杉の仁王様が勝ち、このケンカ以降杉村と塔寺村には何百年にもわたって縁談がなくなったという。塔寺の心清水八幡宮は、源頼義が山城国岩清水から勧請した縁起を持ち、杉の薬王寺は頼義に打たれた安倍氏一族の末裔の田尻大和が建てたと伝わるからではないのかと思われる。

参考・引用文献

- | | | |
|-------|------|--|
| 眞田市郎 | 1922 | 「越後城氏と會津に就いて」『岩磐史談』第四号 岩磐郷土研究会 |
| 花見朔巳 | 1960 | 『新編会津風土記』雄山閣 |
| 義江彰夫 | 1967 | 「撰関家領の相続研究序説」『史學雑誌』史學會 |
| 福山敏男 | 1976 | 「概説－平安時代の建築について－」『文化財講座 日本の建築 2』
古代Ⅱ・中世Ⅰ 文化庁 |
| 高橋富雄 | 1967 | 「第二章奈良・平安時代の社会と文化」『会津若松市史』第1巻 会津若松市 |
| 大石直正 | 1986 | 「奥羽の莊園と前九年・後三年合戦」『東北学院大学論集』第17集
東北学院大学文経法学会 |
| 吉田博行他 | 1989 | 『大江古屋敷遺跡』 会津坂下町教育委員会 |
| 吉田博行 | 1992 | 「北遠面遺跡」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会 |
| 古川利意 | 1989 | 「第二章古代」『山都町史』第1巻 山都町 |
| 和田聡他 | 1993 | 「宮ノ北遺跡」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会 |
| 吉田博行 | 2001 | 『舟渡（雲雀）城跡』 会津坂下町教育委員会 |
| 中村五郎 | 2000 | 「藍津之城考」『福島史学研究』第71号 福島史学会 |
| 元木泰雄 | 2000 | 『藤原忠実』 吉川弘文館 |
| 若林 繁 | 2003 | 「会津の平安時代の仏像－勝常時から新宮熊野神社の仏像－」『文化財シンポジウム「会津地方の平安時代」報告書』 会津坂下町教育委員会 |
| 山中雄志 | 2004 | 「会津地方西半域における平安時代の土器の移り変わり」『文化財シンポジウム「会津地方の平安時代」報告書』 会津坂下町教育委員会 |
| 吉田博行 | 2004 | 「大江郷から蜷河荘まで（会津坂下町の平安時代）」『文化財シンポジウム「会津地方の平安時代」報告書』会津坂下町教育委員会 |
| 飯村 均 | 2004 | 「十二世紀、列島史の中の「会津」」『文化財シンポジウム「会津地方の平安時代」報告書』会津坂下町教育委員会 |
| 菅原祥夫 | 2000 | 「郡衙周辺からみた陸奥南部の変化」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 |
| 吉田博行 | 2000 | 「萩ノ窪窯跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会 |
| 網野善彦 | 1986 | 「武士の登場」『日本の歴史』中世Ⅰ 朝日新聞社 |
| 小松武彦 | 1998 | 「法金剛院庭園遺跡」『日本庭園学会誌』特集：浄土庭園 日本庭園学会 |

1 遺跡の位置・立地

陣が峯城跡は福島県河沼郡会津坂下町宇内字五目・樋ノ口甲に所在する。遺跡は福島県の西側を占める会津盆地西縁山地の扇状地上に立地し、東側は越後へと流れる阿賀川の支流宮川（鶴沼川）の侵食で高低差約 15m の崖地となっている。また、遺跡の南側は旧越後街道勝負沢峠の出入り口にあたり、慶長地震まで越後へと向かう本道であった。

規模は東側を除く三方に二重の堀を巡らし、東西約 110m、南北約 140m の平場と西側に付属する平場などから構成される。平成 14 年から 3 ヶ年にわたって保存目的の内容確認調査を実施し、報告書が刊行された（註 1）。この城跡は江戸時代の地誌『新編会津風土記』には「米の焼たるが炭の如く今猶出づ（中略）西北に二重の空堀ありて今に歴然たり」と記載されており（註 2）、古くから知られた存在であった。また、中村五郎氏は九条兼実の『玉葉』治承五年七月一日条に記載されている「藍津之城」を本遺跡に比定している（註 3）。なお、遺跡の所在する会津坂下町周辺は蜷河荘と呼ばれる摂関家領で、現在でも政所の地名が残存している（註 4）。

2 主な遺構

これまで発見された遺構数は掘立柱建物跡 5 棟、溝状遺構 6 条、土坑 37 基、ピット（小穴）199 基を数え、この他堀や土塁状の盛土が確認されている。3 年度通算の調査面積は 1,770 m² で、これは遺跡全体の約 5 % に該当する。

平場内で遺構が比較的多く検出されたのは 1 号平場北側の D・I・Q トレンチである。これより南側のトレンチは整地層と考えられる硬化面のみで、遺構は希薄であったことから、広場的な空間を想定している。D・I・Q トレンチでは、重複する掘立柱建物跡が 4 棟ほど確認された。これら建物跡はその重複関係から東西棟で真北方向の建物から南北棟で東傾する建物に変遷すると考えられた。また、5 号建物跡は焼失家屋と考えられる建物で、内部より漆器の椀・挽物の身と蓋や炭化米・豆などが出土し、厨・倉庫状遺構と考えられる。中にはおにぎり状の包飯や椀に盛られたものも存在しており、最終的に火災にあって廃絶したものと推測される。

また、平場の東端部には溝状遺構（1 号溝跡）が確認された。本溝内からは白磁・中世陶器・かわらけ・炭化物・炭化米などが多く出土し、遺跡の廃絶にともなうものと判断される。特に古段階の常滑大甕が良好な状態で出土した。なお、本年度調査区（平場 1 の北東コーナー付近）でも同一と考えられる溝が確認されており、平場の西側を除いた三方に巡っていたと推定している。

堀は現況地形から推測すると会津盆地西縁山地によって形成された沢を最大限利用し、北堀付近は土砂の侵食作用によって小扇状地的な地形となる。また堀のめぐらない東側も現況で 20m ほどの比高が認められ、これも旧宮川（鶴沼川）や阿賀川によって侵食を受けた結果の地形と推測される。本遺跡の選地や堀の掘削に際してはもともとの自然地形を最大限に利用し、結果堀や平場が不整形になった

ものと考えられる。

このうち調査の実施した西側内堀の底面からは鉄鏃などとともに非常に多くの飛礫が出土した。これは東側の土塁側が多く、西側に移行するにしたがって少なくなることから、土塁近くの戦闘の際に用いたものと考えられた。土塁は現況で南側が高く、北に移行するにしたがって低くなる。ただし西堀は逆に北に移行するにしたがって深くなるので、平場・土塁からの比高はそれほど変わらない。また、現状では西堀の一部のみの確認で、他方位の堀からは確認されない。これは堀の深さが最も浅く、木橋などで虎口としていたからと考えている。

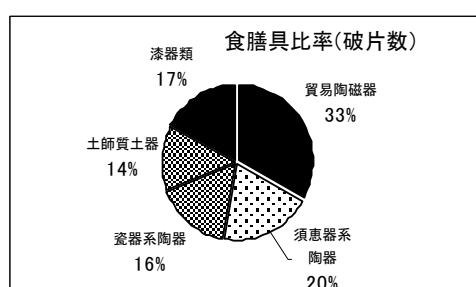
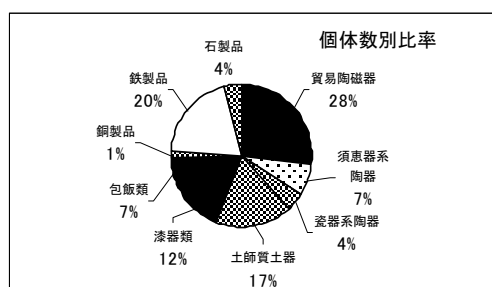
3 遺跡の特徴と問題点

(1) 土器の年代

本遺跡出土の土器・陶磁器は 11 世紀後半～12 世紀前半を中心とした年代観を示すものが多く、一部 12 世紀中～後半のものが数個体認められる（註5）。かつ、白磁に後発する龍泉窯系青磁碗が 1 点のみの出土で、12 世紀前半～中ごろのものが主体を占めると推定されよう。また、その組成であるが、皿碗に加えて、四耳壺や水注などいわゆる袋物も多い。出土例が少ない高麗青磁など他の陶磁器類や東海系陶器などの出土を勘案すると、相当な求心力を持った領主と考えるのが妥当であろう。

この貿易陶磁器の搬入ルートは遺跡が日本海側につながる河川近くに立地することに加えて、旧越後街道の会津盆地における西側の出入り口で陸運・水運双方の要所であったことなどを加味すると、水澤氏が指摘する通り博多から日本海を經由して搬入された可能性が高い（註6）。ただし、国産陶器のうち瓷器系（東海系）は地勢的な面や越後での出土例が非常に少ない事実を考慮すると、平泉などと同様太平洋側からの搬入と考えられる。

国産陶器類は須恵器系中世陶器が量的に卓越するものの、瓷器系（東海系）陶器も一定量認められる。会津地方は地勢的に日本海側に近く、中世においては須恵器系中世陶器が卓越する地域として知られていたが、初源期の常滑大甕を含めた瓷器系陶器を受容していたことが明らかとなった。会津地方における 12 世紀の瓷器系陶器の出土事例は雷神山経塚で渥美灰釉壺（註7）、薬王寺遺跡で常滑大甕（註8）などが認められ、現在までのところ本遺跡の所在する会津坂下町域に限定される。これに対して、東北最古の大治五（1130）年銘を有する喜多方市松野千光寺経塚では須恵器系が卓越し、瓷器系は 13 世紀になって導入される（註9）。この 12 世紀における須恵器系陶器の卓越は会津盆地の他地域でも同様の傾向が看取され、当町域が地勢的に近い日本海側からはもちろん、太平洋側に属する東海地域



遺物グラフ

左：個体数比率

右：食膳具破片数

からも一定量搬入されている事実はすくなくとも会津盆地内では異色である。また、時期的には双方が 12 世紀台の所産であるのは共通するが、瓷器系が 12 世紀中葉にそのピークを迎えるのに対して、須恵器系は 12 世紀中葉～後半で、若干の時期差が認められる。また、須恵器系の産地が明らかにしえなかったが、その胎土や地勢的な面から会津及び越後などで生産された可能性が高い（ただし、概期の窯跡は現在までのところ発見されていない）。

（２）遺構・遺物の特徴

本遺跡における遺構・遺物の特徴は以下の通りである。

- ①旧越後街道に接し、会津地方西側の出入り口部に相当。北側には越後へ流れる阿賀川が位置する。
- ②東側を除いて二重の堀をめぐらし、東側は会津盆地北部を一望できる立地。内部に不整形の平場がある。また、平場内外に土塁が一部のみ認められ、全周はしない。
- ③平場の中には掘立柱建物跡などが存在し、基本的にプライマリーな状態で残存。
- ④白磁など貿易陶磁器が多く出土し、その他の国産陶器やかわけなども12世紀代で収束される。
- ⑤戦闘にともなう火災があったものと考えられ、鉄鏃や消失家屋、炭化米類が多く出土する。
- ⑥棹秤の錘など権衡資料が含まれ、度量衡の管理を行っていたと考えられる。
- ⑦漆器製作に用いた鉋や鋸などが出土。

このうち①・②などいけば防御施設は本遺跡の特徴である。この自然地形を利用した二重堀は少なくとも西日本では管見に触れず、文治五年奥州合戦で藤原泰衡と源頼朝が覇権を競った阿津賀志山の二重堀（註 10）や奥州藤原氏の中心地である柳之御所遺跡（註 11）、奥州藤原氏以前の前九年・後三年合戦で滅んだ安倍・清原氏関連遺跡の秋田県大鳥井山（註 12）、岩手県稲荷町遺跡（註 13）など北日本の諸例にその系譜をひくことができると考えられる。

この中で時代的・形態的に最も類似するのが柳之御所遺跡である。北側に北上川、南側に猫間が淵跡と呼ばれる沢の中間に位置し、部分的に二重堀が確認されている。また、土塁の存在などは明らかではないが、内部の平場が単郭で掘立柱建物を主体とするなどその形態や時期もほぼ共通する。この堀は大鳥井山や稲荷町遺跡など安倍・清原氏関連遺跡にその系譜を求める向きがあり（註 14）、本遺跡も同様な思惟によるものと考えられる。ただし、北東北の環壕・防御性集落に関して堀に防御性ないし権威の象徴といった議論があるように（註 15）、本遺跡でも堀の目的はにわかに判断できないだろう。筆者は構築された時期的な政治的動向や越後街道に近い立地などを勘案すると、一概に防御目的に構築されたものではないと考えている。同様に、同形態の堀は現状で最も南端である点が注意される（註 16）。

③から⑦は平場内の遺構やその出土遺物の特徴であるが、まず③・④は 12 世紀に限定される遺構・遺物群は全国的に稀有な存在であり、今後の基準資料になりうるであろう。12 世紀、特にその前半代は特に歴史的には多くの事象が認められるものの、考古学的・遺物的には少ない。また、あっても後世の遺構などで遺物と遺構のセット関係が不明瞭になる例が大半の中で、本遺跡はほぼプライマリーな状態で遺存されていた。一例をあげると、建物域のみ柱状高台の土師質土器や白磁四耳壺、錘・和鏡

など貴重な遺物が集中するのに対して、1号溝跡からは白磁類が少なく、土師質土器の小皿や坏類、中世陶器類、同様に厨状の5号建物跡からは漆器類、穀物類が多く出土し、場の使い分けがなされていた。⑤は火災ゆえに通常では残らない漆器や炭化米類が良好に残存していた。また、鉄鍬類が平場の全体で13本（1点あたり136㎡）出土し、ここで戦闘が行なわれていたことの証左となろう。⑦からは鍛冶工房や木器製作など職能集団の存在が示唆される。ただし、これらはその層位や位置関係などから創建当初からのものではなく、後の段階（4号建物の時期）のものと考えられる。

（3）陣が峯城跡の史的意義

陣が峯城跡に関する文献資料は非常に少ない。同時代性で言えば『玉葉』のみ散見されるが、「藍津之城」の具体的な記事がない嫌いがある。仮に本遺跡が「藍津之城」としても、玉葉の記事は治承五（養和元・1181）年であり、出土遺物とは若干のタイムラグが生じる。同時に、地元で本遺跡を「ジョウノシロ（城の城か）」と呼称しているなど、越後城氏との関連性も示唆されるが、城氏が慧日寺と結託して会津に進出するのは早くとも12世紀後半で（註17）、出土遺物からすると近世の書物類に城氏が本城を構築したとする記事は矛盾する。文献資料に乏しいものの、本遺跡は摂関家領蜷河荘の中心域として成立、その後城氏の会津進出で破城し、使われなくなった可能性が高い。仮に城氏がその後に使ったとしても、非常に短期間であったと考えざるをえない。なお、成立年代不詳の『惠隆寺縁起』によれば、城長茂が横田河原における木曾義仲追討の際、惠隆寺がこれに応じず、陣が峯城を攻め滅ぼしたとあり（註18）、これを信ずれば城氏による支配以前に存在していたことになる（ただし、陣が峯城という名称を用いていることから、縁起の成立は近世以降と考えざるを得ない）。次に、当該期における越後の遺跡は少ないが、大坪遺跡や山木戸遺跡（註19）、至徳寺遺跡（註20）などの比較では、貿易陶磁器や土師質土器などの様相はほぼ共通するものの、国産陶器はほぼ須恵器系のみで、本遺跡とは異なり瓷器系が皆無に近い（註21）。なお、平泉との比較では貿易陶磁器の組成や土師質土器の器形など異なる点が多い（註22）。とりわけいわゆる京都系のでづくねかわらけが12世紀中葉に導入される平泉とは異なり、会津では12世紀後半～末にごく少量が出土するのみで、この点でも越後の様相と共通する。

以上、本遺跡は12世紀代で収束する全国的にまれな遺跡で、特に12世紀前半代の様相が明らかになった点で今後の基準となる遺跡との評価ができよう。また、小野氏の言う「北の世界の積極的な意識」（註23）の堀といった圍繞施設の内部に西方志向の遺構・遺物など非常に特徴的な様相を示すことが明らかとなった。しかしながらその出自や背景などは不明な点がまだまだ多く、今後に期待するところが大である。

註1 会津坂下町教育委員会『陣が峯城跡』2005年

註2 花見朔巳校訂『新編会津風土記』雄山閣、1932年

註3 中村五郎『「藍津之城」考一蜷河荘と城氏』『福島史学研究』第71号、2000年

註4 政所集落に所在する宮ノ北遺跡では11世紀代の土師質土器などが出土している。蜷河荘の立荘は大石氏によれば11世紀前半とされ、成立期の中心地と考えられる。

会津坂下町教育委員会「宮ノ北遺跡（第2次調査）」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』、1994年

大石直正「陸奥国の荘園と公領」『東北文化研究所紀要』第22号、東北学院大学東北文化研究所、1990年

註5 貿易陶磁器は山本信夫氏の分類と年代観に準拠する。

- 太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』、2000 年
- 註 6 水澤幸一 「中世日本海域物流から見た地域性・境界性」『日本海域歴史大系』第 3 巻、清文堂出版、2005 年
- 註 7 会津坂下町教育委員会『駒壇経塚』1996 年に実測図が掲載されている
- 註 8 会津坂下町教育委員会『薬王寺遺跡』2004 年
- 註 9 喜多方市教育委員会『松野千光寺経塚』1999 年
- 註 10 田中正能「厚樫山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県教育委員会、1975 年
日下部善己ほか「二十堀跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告』福島県教育委員会、1980 年
- 註 11 三浦謙一・松本建速『柳之御所跡』、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1994 年
- 註 12 横手市教育委員会『大鳥井山』I～V、1978～82 年
- 註 13 室野秀文「厨川の中世初期居館—稲荷町遺跡の性格—」『岩手考古学』第 7 号、1995 年
- 註 14 大平 聡「堀の系譜」『城と館を掘る・読む』山川出版社、1994 年
- 註 15 工藤清泰「環壕集落とは何か」『平泉の世界』高志書院、2002 年
小口雅史「古代北日本の『防御性集落』」『歴史評論』657、2005 年
- 註 16 飯村 均「十二世紀、列島史の中の『会津』」『文化財シンポジウム「会津地方の平安時代」報告書』会津坂下町教育委員会、2004 年
- 註 17 『異本塔寺長帳』には承安 2（1172）年に城氏が慧日寺の乗丹坊に小川荘を寄進したとある。
- 註 18 眞田市郎「越後城氏と会津について」『岩磐史談』第 4 号、1922 年
吉田博行「蛭河荘について」『船渡（雲雀）城跡』会津坂下町教育委員会、2001 年
- 註 19 新潟市教育委員会 『山木戸遺跡』2004 年
- 註 20 水澤幸一・鶴巻康志「至徳寺遺跡」『上越市史資料叢書 8 考古一中・近世資料』2003 年
- 註 21 先に触れた新潟市山木戸遺跡で常滑甕が 1 点出土しているが、客体的な存在である。また、時期的にも山木戸例が中野 2 型式（12 世紀後半）で、本遺跡例が先行する。
- 註 22 平泉遺跡群の貿易陶磁器との比較を試みると、化粧土を施した広東系の磁器が多い点や、四耳壺や水注なども形式的に古相を示すなどの特徴が挙げられる。
吉田博行・五十嵐和博「福島県陣が峯城跡出土の土器・陶磁器」『日本貿易陶磁研究会第 26 回研究集会資料集』2005 年
- 註 23 小野正敏「中世武士の館・その建物系譜と景観」『中世の系譜』高志書院、2004 年



調査地点（1～3次 S=1/2000）



縄張り図（S=1/3000）



遺構概念図 (S=1/2000)



陣が基城跡



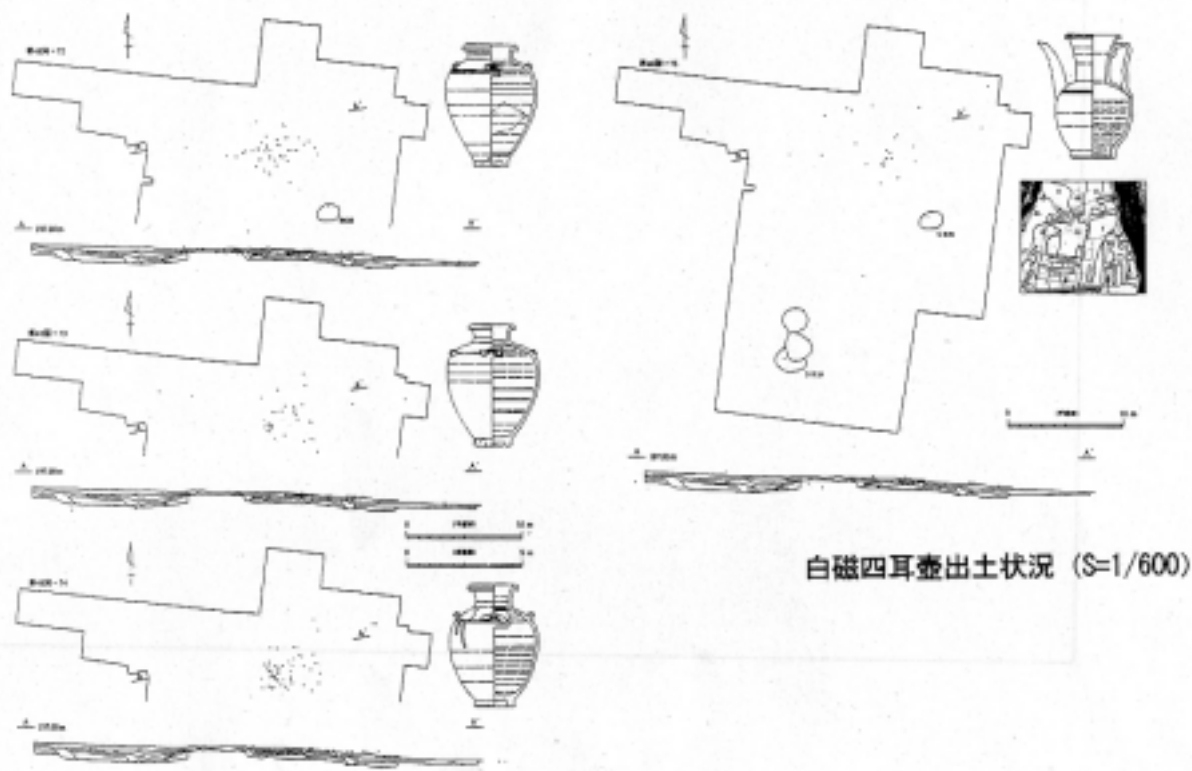
秋田・大島井山
(飯村：2001)



岩手・柳之御所
(八木：2002)



堀の類例と比較 (S=1/6000)



1 遺跡の立地と概要

遺跡は阿賀野川右岸の標高約 13m の自然堤防上に立地する。東方の五頭山麓の近くに位置し、これと遺跡を結ぶ直線上の西方に弥彦山が見える。発掘調査は国道 49 号安田バイパスの建設工事に伴い、平成 16 年 5 月～12 月に（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が行った。調査面積は 10,000 m² である。その結果、平安時代末頃～鎌倉時代（11～12 世紀）を中心とする大規模な遺跡であることが分かった。

遺跡が所在する寺社地区は古くから神社仏閣が多く、明治時代の絵図には調査範囲内に大山祇神社が示されている。大坪遺跡の東側に隣接する上野林丘陵上には、平安時代の竪穴住居が検出された横峯 B 遺跡や古代の鉄滓やふいご羽口が出土した小山崎遺跡がある。また、大坪遺跡から北東約 700m に 12 世紀後半に位置付けられる横峯経塚群（出土品一括は県指定文化財）がある。

2 検出した遺構

遺構の主体である掘立柱建物は 54 棟検出した（図 1）。このうち中世初期に所属する可能性のあるものは 50 棟である。これらの建物型式の内訳は総柱建物 40 棟、梁間一間型建物 10 棟である。総柱建物では四面庇付が 9 棟、一～三面庇付が 14 棟、平面形が L 字形で六面に庇が付くものが 1 棟である。また、梁間一間型建物では、庇が付くものは 3 棟である。柱間は梁間が 1～4 間、桁行が 2～7 間のものがある。面積は 7～168 m² まであり、100 m² を超えるものは 4 棟（SB4・5・7・11）である。このうち、SB4・5 は隣接して検出され、両者とも大形の柱穴をもっており、中心的な建物であったと考えられる。このほか、木棺墓 3 基・火葬墓ないし火葬場 1 基、竪穴状遺構 6 基、井戸 24 基、土坑 95 基、ピット 2,587 基、溝 195 条を検出した。

遺構は東西に伸びる自然流路を境として南北に集中域が分かれることから、調査区を北地区と南地区に便宜的に区分する。北地区では中心的な建物 SB4・5 が注目される。SB4 は東西に長い四面庇付総柱建物である。梁間は 4 間（8.56m）×桁行は 5 間（14.2m）、柱間は梁間が 2.1～2.24m（7 尺）、桁行は 3m（10 尺）である。柱穴は柱痕とその周囲を築き固めた痕跡が明瞭に認められ、柱の直径は 20～25 cm 程度と推定される。SB4 の北側には長さ 20m の L 字形の回廊状施設が付属し、さらにこの東端に 2 間×2 間の掘立柱建物 SB8 も位置しており、同時期の可能性がある。SB4 の南側に隣接する SB5 は梁間 4 間（9.4m）、桁行 5 間（12.8m）の三面庇付梁間一間型建物である。SB7 は平面形が L 字形の総柱建物で、梁間 4 間（6.4～6.7m）、桁行 7 間（15.3m～16.2m）である。

また、SB4・5 に隣接して木棺墓 2 基が検出された。このうち SX453 は平面形が 2.4×8.3m の長方形を呈し、内部に 1.8×0.77m の木棺の痕跡が確認された（図 2）。棺外の南東隅から 12 世紀後半とみられる漆器有台稜椀が出土した。SX453 は SB5 を掘り込む溝 SD673 を掘り込んでおり、これより新しい。他の木棺墓からも漆器皿・小皿が出土した。中世のものとみられる井戸は 13 基で、3 か所にまとまって検出された。いずれも素掘りで、出土遺物は少ない。

南地区では掘立柱建物 16 棟のほか、13 世紀後半～14 世紀とみられる 1 辺 1.8～2.6m の方形ないし長方形の竪穴状遺構 6 基を検出した。また、19・20 B・C グリッドからは 30 基の土坑が集中して検出された。このうち、銭貨 7 枚（1 枚は開元通寶）が出土した土坑墓がある。また、1.2×0.8m の長方形の火葬墓ないし火葬場 1 基は中世以降であり、詳細時期は不明である。この他の掘立柱建物 2 棟と土坑の多くは近世以降である。

調査区東側には南北約 300m にわたり幅 3.3m、深さ 1m の溝 SD1 を検出した。溝内部から出土した橋脚状の木柱根は、年代測定で 1160AD～1220AD の較正歴年代が得られた。この溝は明治期の土地更正図中にある溝と合致し、中世から近代にわたり長らく使用されていたことが明らかとなった。

遺構の前後関係から分かる遺構変遷は (1 段階) SB5 → (2 段階) SD673 → (3 段階) SB11・12、SX453・456、SE1788 の 3 段階が認められる。出土遺物などから、1 段階は後述する 1 期、2 段階も 1 期の可能性がある。3 段階は 2～3 期である。

掘立柱建物の主軸方位について見ることにする。長軸方向は南北に長いものを南北棟、東西に長いものを東西棟とする。南北棟では SB5 を基準とする西偏 6° 付近の一群を南北棟①と、これよりやや西側に傾く SB7 を基準とする西偏 10° 付近の一群を南北棟②に分類できる。また、東西棟では SB4 を基準とする東偏 86° 付近の一群を東西棟①と、SB4 と重複する SB19 や SB38 などやや西側に傾く東偏 80° 付近の一群を東西棟②と分類できる。これらは出土遺物などから、南北棟①の一部が後述する 1 期に、南北棟②と東西棟①の一部が 2 期に、東西棟②の一部が 3 期に位置付けられる可能性がある。また、東西棟①は南北棟①とほぼ直行し、東西棟②も南北棟②とほぼ直行しており、それぞれが時間的に近接していた可能性がある。

3 出土遺物

中世の遺物は、土師器を中心として、珠洲焼 (珠洲系陶器) などの国内産陶磁器と白磁・青磁などの輸入陶磁器がある。主体時期は 11～12 世紀の中世初期であり、13～16 世紀のものはわずかに過ぎない。ここでは、11～12 世紀の土器についてみることにする (図 3)。

はじめに土器の共伴関係について確認する。遺構からまともに出土したものは少ない中で、最も良好な一括資料が出土したのは SD3538 - 3・4 層である。ロクロ成形底部糸切の土師器皿・小皿 (1～4) と有台皿 (5) が認められる。皿は深い身ものが主体であり、器壁が厚く、口径は 12～14 cm ほどである。また、小皿は器高 3 cm と高い。これらは胎土に金雲母を多量に含み、器面がやや粗い点で他の土師器と区別される。形態や組成の特徴は、11 世紀初頭に位置付けられる上越市一之口遺跡東地区 (鈴木俊成ほか 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 60 集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団) の SD1' 出土土師器に類似するが、黒色土器が認められないことなどから、これに後続する 11 世紀中葉に所属する可能性があらう。

次に SD1 - 7c 層出土土器についてみる。土師器皿 (6・7) は口径 15～16 cm ほどの底部が総高台のもの占められ、SD3538 出土と類似するものは認められない。また、柱状高台の皿 (10) もある。これらに (山本信夫 2000『太宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編一』大宰府市教育委員会) の C 期 (11 世紀後半～12 世紀前半) に位置付けられる白磁碗 IV 類 (14) が伴う。こうした様相からこの土器群は 11 世紀末葉～12 世紀初頭に位置付けられよう。

最後に SE1997 - 17・19 層では少量ながら珠洲系陶器 I 期の播鉢と C 期の白磁皿 IV - 1a 類 (12) が出土した。これより上位の 7 層から器高 2.3 cm の土師器小皿が出土した。これらは 12 世紀後半～末葉に収まるものと考ええる。

木棺墓 SK453 から出土した稜碗は、輪高台で口縁部がやや外反するものである。胎内市下町・坊城遺跡 C 地点 (水澤幸一 2001『下町・坊城遺跡 V』中条町教育委員会) に類例があり、12 世紀後半～13 世紀初頭に収まるものと考えられる。このほかの木棺墓出土漆器もこれと同様の時期かやや下る可能性があらう。したがって、木棺墓は 12 世紀後半以降に構築された可能性が高く、その中でも SX456 に後出的要素が強い。

以上の遺構出土遺物から、11 世紀中葉～12 世紀末葉の遺物が確認できた。遺物包含層出土のなかにも前述の特徴を示す土師器があるほか、白磁は 11 世紀後半～12 世紀後半（C・D 期）に位置付けられるものが総数 179 片出土しており、前述した遺構の示す時期幅が遺跡の主要時期と考える。さらに、高麗青磁の梅瓶（16）は象嵌技法が用いられることから、（降矢哲男 2002「韓半島産陶磁の流通—高麗時代の青磁を中心に—」『貿易陶磁研究』第 22 号 日本貿易陶磁研究会）のⅡ期 12 世紀前半～13 世紀中葉に位置付けられよう。以上から、遺跡の時期を便宜的に、1 期—11 世紀中葉、2 期—11 世紀後半～12 世紀前半、3 期—12 世紀中葉～12 世紀末葉の 3 期に区分することとする。なお、掘立柱建物から出土した柱根の年代測定では SB6 が 11 世紀中葉～12 世紀初頭、SB7 が 11 世紀末葉～12 世紀中葉、SB38 が 12 世紀初頭～13 世紀初頭との結果が得られ、土器の主要時期と調和的である。

一方、13 世紀初頭に位置付けられるてづくねの土師器小皿は 1 点のみであり、15 世紀代と見られるものもごくわずかである。珠洲焼・珠洲系陶器もⅡ～Ⅵ期のものが若干ある程度である。したがって、集落は 12 世紀末葉ないし 13 世紀初頭に急速に衰退したものと考えられる。

4 木棺墓について

さて、大坪遺跡の大きな特徴として木棺墓 3 基が検出されたことである。SK453・456 は SB4・5 に、SK2732 は SB34 の西側にそれぞれ隣接する。こうした墓の在り方は、当時、畿内を中心とする西日本に分布する屋敷墓と共通する。橘田正徳によると、大坪遺跡のように家屋の側に 1～2 基の墓を作るものは 11 世紀後半に成立する屋敷墓 1 類となり、2 基目の墓が作られる場合は別の建物に接して作られることが多いとされる（橘田正徳 2003『お墓が語る中世の家と社会—曲川遺跡木棺墓とその周辺—』）。SK453・456 の構築時期は 3 期であるが、出土漆器から SK456 のほうが新しいものと推測した。SK453 の長軸方位は西偏 2° であり、SB5 の主軸方位や SB4 の短軸方位とほぼ同じである。一方、SK456 は SB28 の主軸方位や SB19 の短軸方位とほぼ共通する。したがって、SK456 は掘立柱建物の中でも新しい時期のものを含む南北棟②・東西棟②と関連が深いものと推定される。また、SK453 は時期的に近い SB4 と関連する可能性がある。SK2732 は長軸方位が西偏 28° で、南北棟②の一群に近いと言え、3 期に SB34 などの建物に伴うように構築されたものであろう。

東日本における屋敷墓は、13 世紀前半に宮城県王ノ壇遺跡まで分布するようになるが、関東では確認できず、波及経路は不明とされる（橘田正徳 2004「中世前期の墓制—墓地・屋敷墓からみた中世前期の家・集落・社会—」『考古学が語る「中世墓地物語」』大谷女子大学）。一方、島田美佐子による集成（島田美佐子 1994「第Ⅳ章 5 墓」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）を見ると、富山・石川県内だけで 12 世紀後半～13 世紀前半の屋敷墓の可能性のあるものは少なくとも 20 基あり、大坪遺跡の屋敷墓の成立は北陸からの影響を考慮する必要があるだろう。

5 中世集落の位置付けまとめ

大坪遺跡の中世初期の集落は、11 世紀中葉から始まり、12 世紀末葉に衰退するものと推定される。多数検出された掘立柱建物は面積 100 m²を超える中心的な建物を含み、配置の規則性がある程度認められた。また、屋敷墓と考えられる木棺墓も存在し、副葬された漆器類はこの時期でも上質なものであることが科学分析により明らかになった。

大坪遺跡は寺社集落がある自然堤防の東端に位置し、遺跡と上野林丘陵との間に後背湿地が広がる。自然堤防の西側に沿うように旧河道が認められる。この近くにある福隆寺の縁起によれば、「阿賀野川

は、此南大門の前を流れけるに、会津より上下の舟は、今の杉に舟をつなぎ、観音堂に参りけると。」とあり、かつてこの旧河道は阿賀野川の一部であったと見られる。また、大坪遺跡の北 1.5 km に位置する堀越館跡もこの旧河道沿いにあり、調査報告によればこの河道は中世の阿賀野川の河道と推定されている（小田由美子ほか 2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 99 集 堀越館跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）。大坪遺跡は日本海と会津盆地を結ぶ阿賀野川のほぼ中間地点に位置し、河川交通の要衝であった可能性がある。

このほか、遺跡内を蛇行する SD673 も注目に値する。中心的な建物である SB4 の手前で折れ曲がっており、その角に泥の沈殿槽と見られる土坑が付随する。このように帯水により水を浄化する導水施設は、平城京や平安京の庭園跡などに見られる（奈良国立文化財研究所 1986『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』、（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002『平安京右京三条二坊十五・十六町一「齋宮」の邸宅跡一』）。大坪遺跡に園池があったかは不明であるが、今後の調査により検討する必要がある。

出土遺物では、多数の白磁と高麗青磁といった当時入手が困難であった輸入陶磁器が特徴的である。口禿以前の白磁点数は 179 片であるが、県内では上越市至徳寺遺跡の 524 片、中条町政所条遺跡群の 184 片があり（笹澤正史・水澤幸一 2001「伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半を中心として～」『上越市史研究』第 6 号 上越市）、これに次いで多いと言える。また、高麗青磁については、東北地方で 12 世紀前半～13 世紀中葉のものが出土した遺跡は岩手県柳之御所跡、宮城県熊野堂大館跡の 2 か所のみであり（降矢哲男 2002「韓半島産陶磁の流通－高麗時代の青磁を中心に－」『貿易陶磁研究』第 22 号 日本貿易陶磁研究会）、阿賀野川上流の阿賀川沿いに位置する福島県陣が峯城跡で出土した初期高麗青磁（吉田博行 2004「陣が峯城跡の調査成果」『日本考古学』第 18 号 日本考古学協会）を入れても 3 遺跡に過ぎない。しかも、これらは城館跡と推定される遺跡に限定される。

これらの特徴から、大坪遺跡は有力者の居館跡の可能性が高いと考える。その有力者の候補として挙げられるのは、当時、阿賀北地域に勢力を誇っていたとされる平家の越後城氏である。県内では城氏との関係を明確に示す遺跡は発見されておらず、大坪遺跡においても城氏との関連を示す資料はない。ここで注目されるのは、大坪遺跡の東 700m の上野林丘陵上にある横峯経塚（川上貞雄 1979『上野林丘陵埋蔵文化財発掘報告書 I 横峯経塚群』安田町教育委員会）である。1 号経塚からは陶製経筒や短刀のほか、「仁安□年カ」の墨書が認められる和鏡が出土し、12 世紀後半のものと推定されている。また、これより新しく 12 世紀末葉のものとみられる 2 号経塚では、和鏡・青白磁合子・短刀などが出土したほか、多数の礫の中から墨書が認められるものが 10 個あった。このひとつに「長茂」と読めるものがあり、城長茂ではないかと考えられている。城長茂は「玉葉」治承五年（1181 年）において「白川御館」と呼ばれていたとあり、現在の阿賀野市の範囲と推定される白河荘を拠点としていたと推定される。横峯経塚は大坪遺跡 3 期に並行し、両者が同時に存在していた可能性が高く、経塚の造営に大坪遺跡が関係していた可能性がある。こうした居館と経塚との関係は、奥州藤原氏の柳之御所跡と金鶏山との位置関係にも類似しており、注目される。

以上から、城氏と大坪遺跡の盛衰が一致し、地理的にも符合することは、両者の関連性を認める根拠と成り得る可能性が高い。いずれにしろ、阿賀北地域における城氏の時代の大規模な遺構を伴う遺跡は大坪遺跡が初例であり、その意義は大きい。今後のさらなる調査によって、遺跡の性格が明らかになることを期待したい。

図引用文献

荒川隆史 2005「阿賀野市大坪遺跡の調査」『新潟県考古学会第 17 回大会 研究発表要旨』新潟県考古学会

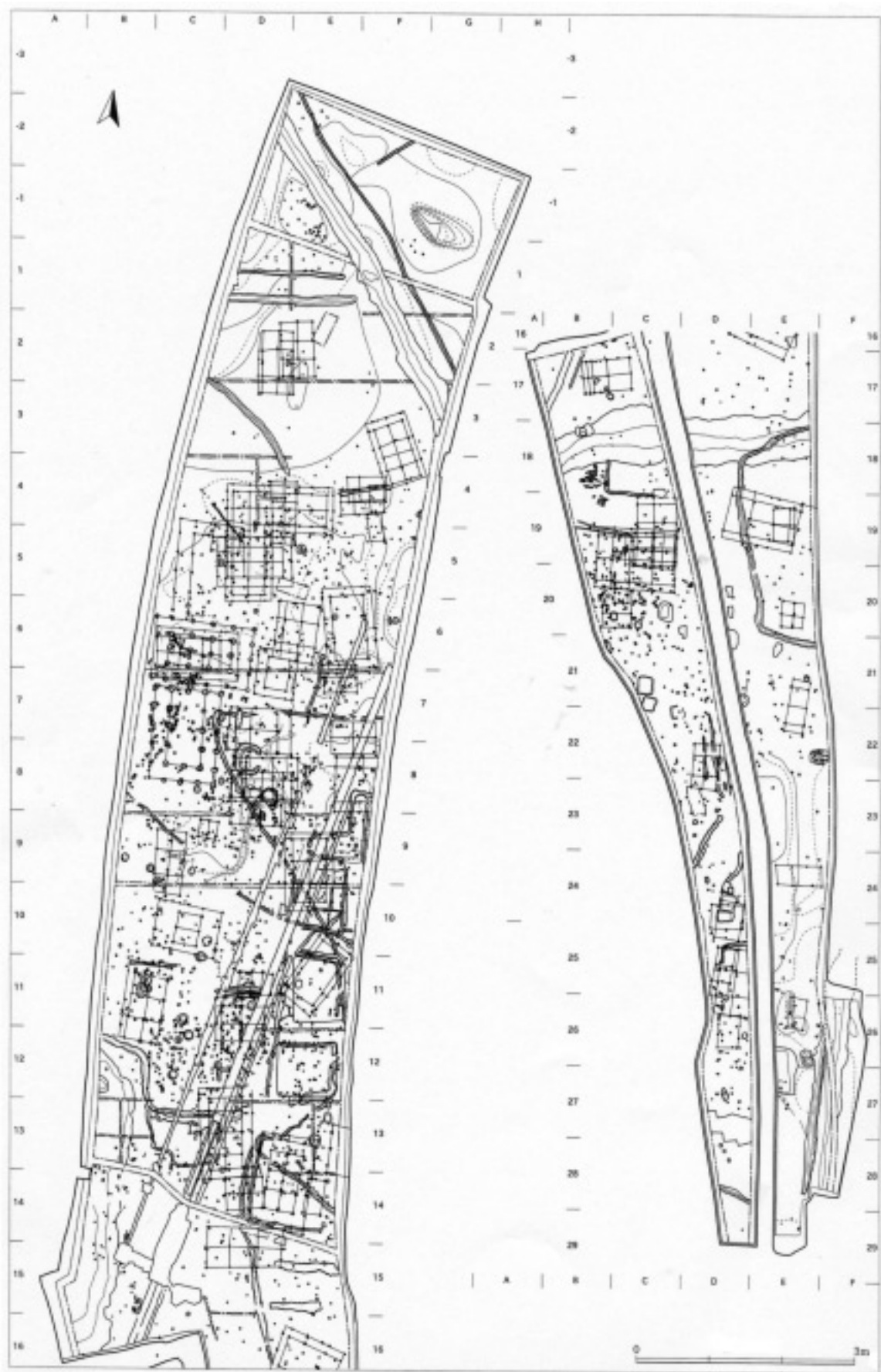


図1 大坪遺跡遺構全体図（荒川 2005 より）

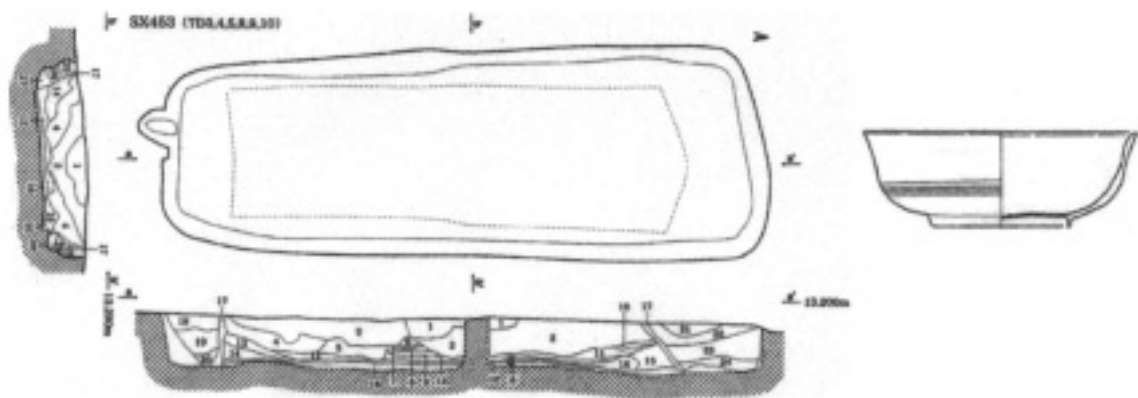


図2 木棺墓 (1:30) と出土した漆器皿 (1:4) (荒川 2005 より)

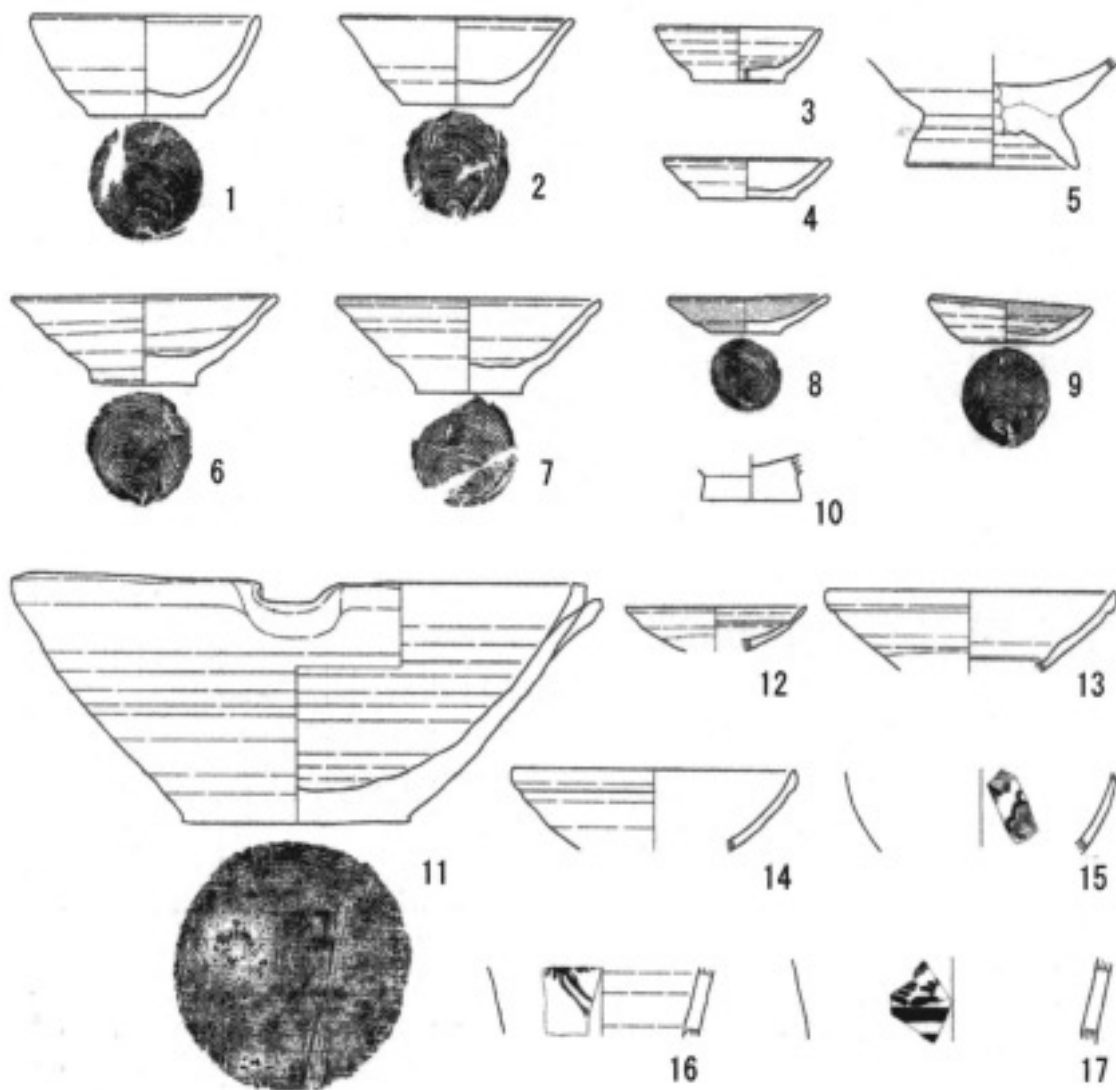


図3 出土土器 (1～10:土師器, 11:珠洲系陶器, 12～14:白磁, 15:青白磁, 16:高麗青磁, 17:磁州窯白地鉄絵, 1:4)

(荒川 2005 より)

はじめに

今回のシンポジウム「中世前期阿賀野川流域（新潟県・福島県）の領主と城館」でもっとも重視される「領主」は、城氏である。従来、「越後城氏」と称されてきた、この武士団については、11世紀の東国で「並ぶものなき兵」と称された鎮守府將軍・平維茂(桓武平氏庶流)を祖とし、その子息繁成の秋田城介の官歴から城氏を名乗り、12世紀を通じて越後国の阿賀野川以北（阿賀北）に盤拠した、と理解されてきた。さらにその評価をめぐるのは、越後阿賀北に林立した「寄進地系荘園」の「開発領主」という位置づけが一般的であったが、近年では院権力の対北方政策から意図的に配置された軍事貴族という理解まで、大きく様変わりしている。

しかし、上に述べた城氏をめぐる歴史像は、城氏の関連史料から厳密に抽出されたものではなく、そもそも中世成立期における城氏の権力基盤を越後阿賀北に限定しうるか否かも、決して自明のことではない。本報告で「越後城氏」ではなく城氏と呼ぶ所以である。また最近では、城氏を名乗る繁成流のみならず、維茂の子息たちの諸流が京都と越後・信濃などで提携しながら活動していたとみる立場から、これらを「越後平氏」と総称する研究もみられる。その適否はひとまず措くとしても、中央権門との結びつきや都鄙間にまたがる一族間の連携、それに国郡をこえた地域社会における活動実態とその背後にある交通形態を視野に入れつつ、数少ない城氏の関連史料の読み直しを通じた基礎作業があらためて求められているといえよう。

本報告はこのような課題意識のもとで、11～12世紀における城氏の権力構造を文献史学の立場から解明することを目的に、①関東・南奥羽・越後の政治・流通・宗教拠点、②摂関家との密接な関係、③中世荘園制の形成、以上3つの視角から考察を進める。

1. 11世紀の城氏権力

11世紀の平維茂（維良）に関しては、摂関家の藤原道長に従属しつつ、上総・下総・常陸・下野・陸奥（南域）・越後に所領や活動拠点をもち、それらが繁貞（帯刀流）や繁成（城氏流）といった子息たちに継承されていたことが、『御堂関白記』『小右記』『権記』『春記』『今昔物語集』『玉葉』などから指摘されている[野口 94・田村 04]。そして、繁成の孫永基が12世紀初頭の検非違使庁下文に「越後国住人」として登場し、永基の孫で12世紀末の治承・寿永の内乱で活躍する資永（助永）も「越後国住人」あるいは「白川御館」（越後国白河荘か）として史料上に表現され、その子息らが13世紀初頭に越後国奥山荘の鳥坂山で滅亡することから、永基以降の城氏はおもに越後阿賀北の枠組みから捉えられてきた。

しかし、永基らが「越後国住人」と表現され、その子孫の足跡が現存する史料上で越後阿賀北に色濃く見出されるからといって、永基以降の系統を越後阿賀北の地域権力に限定して理解するのは、現在の研究レベルからすると早計であろう。事実、永基の孫にあたる平（城）助永は、12世紀前葉から中葉にかけて摂関家に従属し同家と関係の深い徳大寺家に仕えた検非違使平助永と同一人物であるとみなされるようになった[松井 96]。さらに11世紀から12世紀への過渡期にあたる永基の段階にさかのぼって考えてみると、前述した検非違使庁下文の内容からつぎのような解釈を導き出すことができる。

12世紀初頭における同下文の主題は、白河院と摂関家の藤原忠実との確執を背景とした、いわゆる

偽源義親事件のひとつ[高橋昌 84]である。陸奥国から越後国の「永基之所」へ入った源義親を名乗る浮浪法師の捕縛命令を平（城）永基が無視したため、怒った白河院の厳命が下った。すでに指摘されるように、浮浪法師の移動ルートは陸奥国会津～阿賀野川流域～越後と考えられるが[松井 96]、肝心の会津（阿賀野川上流）は偽義親出現の黒幕といわれた藤原忠実の領有する蜷河荘[川端 00]の荘域にあたる。前述のように、永基の曾祖父・祖父は摂関家に従属していたことが史料上明らかであり、その永基自身が 12 世紀初頭の院権力を相対化する政治的態度をみせた事実を重ね合わせると、永基も摂関家・藤原忠実に従属し、会津から阿賀野川を介した北越後へのルートに強固な基盤を築いていたとみられる。

さらに、永基の孫で助永の弟にあたる助職（長茂）が木曾義仲と激突した信濃・横田河原合戦の敗北後、逃走先として目指したのが「藍津之城」であった事実も想起すれば、摂関家と結びつく城氏は、12 世紀を通じて会津の摂関家領蜷河荘にも権力基盤を有していたと考えてよい。会津が下野の日光などをはじめ北関東の各地とつながる古代以来の交通の要衝であり、11 世紀後半に下総国府を襲撃した平維茂が越後へ逃走したルートでも会津が重視される状況を勘案すると、会津と城氏との関係は維茂段階の 11 世紀にまでさかのぼり、蜷河荘の立荘に城氏が一定の役割をはたしたとする推定さえ可能といえる。ここに、12 世紀前半を最盛期とする陣が峰城跡遺跡と城氏権力との関係が、あらためてクローズアップされることになるだろう。

2. 城氏と中世越後縦貫ルート

陸奥国会津は阿賀野川を介して日本海と結びつくとともに、東山道ルートとは異なる南奥羽の窓口でもある。12 世紀の城氏が平維茂以来、この会津を重視しつづけたとすると、その先にある日本海沿岸や奥羽との関係が意識的に問われなければならない。

まず、阿賀野川ルートから考えてみよう。すでにふれたように、従来の研究では、会津から越後に入った阿賀野川流域、なかでも阿賀北地域の諸荘園と城氏との関係が注目されてきた。しかし、越後国内における城氏の所領は、阿賀野川流域や阿賀北にとどまっていたわけではない。

従来まったく注目されてこなかったが、城氏の一族に「浜」姓を名乗る者がいる。「桓武平氏諸流系図」にみえる浜次郎繁頼、『延慶本平家物語』第三本「城四郎与木曾合戦事」で横田河原にむかう城氏軍の「千隈超」（信濃川）ルートの大將としてみえる「浜ノ小平太」などである。この「浜」姓は、越後国濱郷（現在の新潟県新潟市角見浜付近）を所領としたことにもとづく名乗りと考えられる。

阿賀野川から離れた西蒲原の日本海沿岸に位置する濱郷は、越後国衙の有勢在庁で居多社神主を兼帯する花前介の応永十八年（1411）所領目録に免田所在地として所見し、15 世紀後半には越後守護上杉氏の被官長尾氏が代官として年貢を請け負う京都以言院の所領として『鹿苑日録』に登場する。その一方で、越後一宮弥彦社を中核とした弥彦荘の下条にも包摂されていたと考えられることから、中世成立期以来の荘園・国領両属地であった可能性が高い。また、南北朝期の熊野社関係史料によると、熊野御師の引率する旦那の妙生寺が濱郷に所在したことも知られる[宮家 92]。

いま、この中世越後における熊野御師の活動形態に着目すると、未紹介史料の畠中文書（市沢哲氏のご教示により東京大学史料編纂所影写本で確認）に含まれる 14 世紀の旦那売券にあげられた旦那の所在地が、妻有荘～波多岐荘～紙屋荘～志度野岐荘～大面荘～奥山荘金山郷という経路で分布していることが注目される。このルートは、信濃川を下って河口を共有する阿賀野川、そして加治川から紫雲寺潟（塩津潟）にいたる「潟湖河川交通」を明らかに利用している。中世段階における信濃川の本流であった現在の西川に接する濱郷も、この南越後から北越後へと縦断する重要ルート上に位置づ

けることができる。有勢在庁花前介の免田が設定されていたのも、濱郷がそうした信濃川中心の中世越後縦貫ルート上における日本海との接点＝港津でもあったからと考えられる（濱郷比定地の周囲には、会津との関係が指摘される越後最北の前方後円墳菖蒲塚古墳や、12世紀後半の経塚、古代の小泊窯産陶器から中世の陶磁器・渡来銭が採集されている銭原遺跡などが存在する）。

城氏がこの濱郷に所領を得て一族の名乗りとした背景には、濱郷を包摂する弥彦荘の領家である徳大寺家への奉仕関係[松井 96・田村 04]があったと推測される。そして、治承・寿永内乱時に前述した「浜ノ小平太」を大将とする信濃川ルートの進軍が選択されたことをふまえると、城氏は前述した会津からの阿賀野川ルートのみならず、その河口部で接続する信濃川ルートや北越後の加治川～紫雲寺湯（塩津湯）ルートといった、「潟湖河川交通」に依拠した権力配置を有していたと考えるべきである。

城氏による濱郷の領有事実の解明は、まさにその意味でも、また従来のような阿賀北の領主的位置づけを相対化する意味でも、きわめて重要である。それと同時に、濱郷も含めた上記の「潟湖河川交通」が中世の熊野信仰との関わりで把握されることも非常に興味深い点であり、やはり熊野信仰と強い関係をもつ城氏の活動との重なりが注目される場所である。次節ではこの論点にもとづき視野を南奥羽に拡大してみよう。

3. 奥羽と城氏

城氏と奥羽との関係については、前述のように鎮守府將軍平維茂の庶子である繁成が秋田城介に補任されたことをはじめ、12世紀の半ばから後半にかけて活動する平（城）助永の母を將軍三郎清原武衡の女子と伝える『吾妻鏡』の記事、そして横田河原の合戦に際して城助職が出羽にも兵の動員を行い、敗走先が出羽の金沢であったとする『延慶本平家物語』や『源平盛衰記』の叙述などが、これまで断片的にあげられてきたに過ぎない。しかし、本報告では、これまで述べてきた陸奥国会津とつながる越後国内の「潟湖河川交通」、とりわけ城氏の所領であった濱郷と熊野信仰をめぐる交通形態を絡めて、奥羽と城氏の間をものかた素材として名取新宮寺一切経に注目したい。

名取新宮寺に伝来する中世成立期以来の一切経の多くが、出羽国寒河江の慈恩寺から請来されたものであることはよく知られている[平川 80]。なかでも 12 世紀前葉の書写奥書をもち他の經典とは紙質等の点で群を抜く「大方広仏華嚴經」は、「大治四年二月十五日 弥彦御庄下条／願主僧俊嚴」（巻第十九）などのように、越後国弥彦荘下条の僧侶が書写に関わった重要な事実を伝えながら、その歴史的背景がまったく説明されてこなかった。

しかし、すでに述べたように、12 世紀初頭から城氏は弥彦荘下条に包摂される濱郷を所領としており、摂関家に従属して藤原忠実の領有する会津の蜷河荘にも拠点をもつと考えられることに加え、慈恩寺の立地する出羽・寒河江荘がやはり藤原忠実の領有する中世荘園であった事実を総合すると、焦点の經典の書写およびその移動の背後には、摂関家と連携した城氏とその権力配置、そしてかれらと熊野信仰との関わりが、くっきりと浮かび上がってくる。

『吾妻鏡』が伝えるように、治承・寿永の内乱で鎌倉方に捕縛された城長茂（助職）は、源頼朝の帰依厚い熊野尊南坊僧都定任とやはり師檀関係を結んでいた。一度は幕府に帰順した長茂が再び離反し、幕府軍に殺害されたのが「吉野の奥」であったことも想起される。また、「白川御館」と称されたという長茂が荘園経営にも関与した白河荘の荘域には、きわめて濃密に熊野信仰の痕跡が確認されており、長茂の倒幕行動に同調して一族が立て籠もった鳥坂山のある奥山荘も同様である。

これら北越後のみならず、城氏の一族といわれ治承・寿永の内乱で名を馳せる乗湛坊の掌握した恵日寺のある陸奥国会津を中継点として、陸奥喜多方・新宮熊野社～出羽寒河江・慈恩寺～陸奥名取・

新宮寺といった、北越後～南奥羽の熊野信仰の拠点をつなぐ交通体系の重要性を強調したい。それは、出羽庄内から越後岩船にいたる日本海沿岸の羽越越えルートとは異なっており、北越後や南陸奥との接続方法にあらわれる出羽南部の地域構造を反映していると考えられる。

今後は、この内陸部における奥羽越ルートと摂関家領荘園の配置[入間田 82・伊藤 90]や城氏の活動との関係究明が課題となるだけでなく、『源平盛衰記』の叙述する城氏と出羽金沢とのつながり、あるいは中世前期から史料的に見出される慈恩寺や立石寺と下野・上野との密接な交流[菅田 98・斎藤 02・伊藤 05]も、このルートの北・南それぞれの延長線上に理解することができよう。その先には、平維茂が確立していた 11 世紀段階の当該地域をめぐる交通形態の具体相、ひいては平泉藤原氏権力との競合関係もみえてくるに違いない。

おわりに

本報告では、わずかな新事実と新史料を議論に組み込みことにより、限られた既知の城氏関係史料を読みかえて、城氏をめぐる歴史像の再構成を試みた。そこで浮かび上がってきたのは、これまでの数郡～数荘レベルの土地支配に立脚した広域的領主のイメージとは大きく異なり、数カ国に点在する政治・流通・宗教拠点とそのルート上にいわば「吸着」する、城氏権力のあり方であった。もちろん、そのような権力配置が摂関家との提携関係にもとづき中世荘園の立荘を実現させ、その経営への参加を通じて城氏の在地支配が深化するようなケースも想定される。越後阿賀北の奥山荘や白河荘、さらに陸奥会津の蜷河荘は、その具体例とみるべきものである。

しかし、城氏のような中世成立期の権力は、数郡～一国レベルの面的な地域領主に押しとどめることはできず、京都との都鄙間のもとより、一国レベルをこえた広地域間の交通体系との点的な関わりが、同様な権力との競合関係を視野に入れてもっと分析される必要がある。問題は、そうした城氏のような権力をどのように概念化するか、にある。その際には、量的制約の大きい当該期の文献史料のみならず、多地域間の比較を含めた即物的な分析を可能とする考古学をはじめ、歴史地理学や宗教学などとの協業が不可欠であることはいうまでもない。本報告はそのための文献史学側からの問題提起を意図している。

【引用・参考文献】

- 伊藤清郎1990「出羽国」（網野善彦他編『講座日本荘園史』5、吉川弘文館）
伊藤清郎2005「出羽三山と海・川・道」（矢田俊文・工藤清泰編『日本海域歴史大系』第
三卷中世篇、清文堂出版）
入間田宣夫1982「出羽国の荘園」（『山形県史』通史編第一巻）
川合 康2004「治承・寿永の内乱と地域社会」『鎌倉幕府成立史の研究』（校倉書房）
川端 新2000「摂関家領荘園群の形成と伝領」（『荘園制成立史の研究』思文閣出版）
斎藤 仁2002「中世成立期の出羽国」（伊藤清郎・山口博之編『中世出羽の領主と城館』
高志書院）
須藤 聡2002「北関東の武士団」（『古代文化』54）
高橋一樹2004『中世荘園制と鎌倉幕府』（塙書房）
高橋一樹2005「文献史料からみた奥山荘中条の政治・経済ネットワーク」（矢田俊文・竹
内靖長・水澤幸一編『中世の城館と集散地』高志書院）
高橋昌明1984『清盛以前』（平凡社）

田村 裕2004「城氏一族の展開」（『中条町史』通史編）
平川 南1980『名取新宮寺一切経』「考察」（東北歴史資料館）
野口 実1994「平維茂と平維良」（『中世東国武士団の研究』高科書店）
菅田慶信1998「立石寺創建神話の謎を解く」（『山形県の歴史』山川出版社）
松井 茂1996「越後平氏と平助永」（羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』吉川弘文館）
水澤幸一2005「潟街道の遺跡群」（小林昌二編『古代の越後と佐渡』高志書院）
宮家 準1992『熊野修験』吉川弘文館
矢田俊文2004「沼垂津・蒲原津・新潟湊と本願寺教団免状」（小林昌二編『前近代の潟湖
河川交通と遺跡立地の地域史的研究』科研費報告書）

田川氏の存在空間（報告要旨）

山口博之（山形県埋蔵文化財センター）

平安時代末から鎌倉時代にかけての政変のなかで東北地方はおおきな変革を余儀なくされる。すなわち平泉藤原氏の勢力の解体と源頼朝を頂点とする鎌倉幕府の政治権力の侵入である。この事態は政治史だけ動きにとどまらない。この時期を画期として物資の流通や宗教や信仰などの実態もおおきな変革をむかえることとなる。

最初に平泉藤原氏と山形県との関係をみてみよう。平泉藤原氏は初代清衡（きよひら）、二代基衡（もとひら）、三代秀衡（ひでひら）、四代泰衡（やすひら）、の四代にわたって栄え、約百年間にわたって現在の岩手県平泉町を中心としながらも、中央にまでその影響力を及ぼした。

ここ出羽国においても平泉藤原氏の支配のようすがうかがわれる。平安時代の末のころ摂関家の所領である摂関家領は全国各地に置かれていた。藤原頼長の時代に東北地方にある摂関家領のうち、遊佐荘、屋代荘、大曾根荘、本吉荘、高鞍荘の年貢について藤原頼長はもっと増やそうと考えた。このときに地元の年貢徴収の責任者として交渉にあたったのが、平泉藤原氏の二代藤原基衡である。その交渉のようすは藤原頼長の日記「台記」の仁平三年（1153）九月一四日条にくわしい。最初の増額要求に対して強硬をもって聞こえた頼長が下回る数字で妥協したことは、この時期に平泉藤原の勢力はもはやゆるぎないものとなっており、摂関家領の所有者である頼長も、現地の実質的な管理者である基衡にたいして妥協せざるをえない状況が存在していたことを示している。

なぜ藤原基衡はこのような交渉の当事者になり得たのであろうか、藤原基衡はその当時出羽国の押領使（おうりょうし）という、出羽国内の治安や警察の責任者としての地位を与えられていた。このことから平泉藤原氏の勢力は陸奥国のみならず、出羽国まで及んでいたことが分かる。その勢力範囲も日本海側にそって越後国の米山よりも北、越後城氏の支配地までにもその勢力は及んでいた（入間田宣夫1992『慈恩寺と毛越寺』西村山地域史の研究第十号）。このようなことからすればここ田川は平泉藤原氏の勢力下にあったことがわかる。平安時代末から勢力を伸ばしたとおもわれる田川太郎一族の系譜もこのような勢力地図の一環に組み込まれていたであろう。

平泉藤原氏の拠点の一つとなった『柳之御所』は北上川の改修工事にもなって緊急発掘を実施されていたが、十二世紀を中心とするおびただしい遺物が出土し。従来は中尊寺や毛越寺など寺院に残された仏像やその他の遺物で、断片的にしかわからなかった、平泉藤原氏の生活の実態について新たな視点を提供することとなった。

『柳之御所』は東北地方全体を統括する役所と考えられ、吾妻鏡に登場する『平泉館（ひらいずみのたち）』と推定されている。発掘された遺跡からは、建物の跡や、井戸、庭園跡、さまざまな木製品、珠洲（石川県）や渥美（愛知県）からもたらされた陶器、遠く中国からもたらされた白磁や青磁などの磁器、そしてかわらけとよばれる素焼きの皿などがある。折敷（おしき）には寝殿造りの建物が墨書されていた。このことから、寝殿造りの建物が柳之御所にはあったことが推定されている。

とくにかわらけは何トンという膨大な数量が検出された。個数にすれば10万枚以上にも達するという。かわらけは皿形の土器であるが儀式に使用され、一度使用されたのちは廃棄され二度と使用されることはない。かわらけの大量廃棄ということは京都などの中央の様相とおなじ生活をおくっていたためであるとおもわれる。ここ田川でも田川小学校所蔵品のなかには一二世紀代のかわらけが数点ある。庄内地方にもかわらけを使用しつつ儀式を行う生活が中世にあったのである。

次に田川地区の地理的位置に注目しつつなぜこの地に田川氏が拠点を構えたのかについて考えてみたい。平泉にもたらされた陶磁器類は太平洋を交通の媒介とし、北上川をさかのぼって内陸の平泉の地にもたらされたものと考えられている。一方、日本海側の物資の流通をささえる日本海側から平泉へというルートもあった。田川地区は越後から出羽国へと抜けるその結節点に位置し、庄内地方の玄関口ともいえる交通の要衝である。交通の要衝とはとりも直さず政治的な勢力の占めるところとなり物流の拠点ともなり得る。田川地区とはこういった地域性をもつと考えられる。

平泉藤原氏の日本海側の支配の状況を示すものとして、いくつかの文献が残っている。大石直正氏（大石 1993『地域性と交通』日本通史第七巻）によれば、14世紀の平泉の中尊寺領が最上川下流と秋田県雄物川の河口近くに残り、これは平泉と日本海を結ぶルートであったことを想定できるという。嘉暦二年（1327）三月日の中尊寺衆徒等謹解（『山形県史古代中世史料1、539項』）では、中尊寺領が羽州狩川に見える。『義経記』は中世の説話であり史料の信頼にはかけるところがあるが、この中で語られる源義経主従の逃避行のルートもまた田川→最上→栗原と語られ、最上川の流域が重要な交通路となっていたことを伺わせる。

平泉藤原氏はこれらの海上そして陸上のルートを押さえることによって、博多や中部地方の陶器生産地と密接に結び付くことができた。さらにこの活動は北方へも伸びていた。さきにあげた史料のうち大曾根荘の年貢には『水豹の皮（アザラシの皮）』が含まれる。大曾根荘は山形市大曾根が遺称地と考えられ、内陸の地でありここでアザラシがとれることはない。これは平泉藤原氏が北方との交易の中で得たものなのであろう。この一例からもわかるように、平泉藤原氏は北方との交易も活発に展開していたものなのであろう。

源頼朝は文治五年（1189）七月十九日に軍勢を起こし、平泉藤原氏の滅亡を図った。全軍は二十八万四千。大手軍、東海道・北陸道の三方面軍に分け、頼朝は軍を進めた。これを迎え撃つ陸奥・出羽の軍勢は17万と伝えられる。陸奥に入り八月十日に奥羽合戦の明暗を分ける阿津賀志山の戦いがあった。この戦いに勝利した頼朝は八月二十二日一気に平泉へと侵入する。安津賀志山戦いの十二日後のことである。

ここ出羽国でも八月十三日に日本海側の趨勢を決する戦いが行われた。吾妻鏡に「（文治五年八月）一三日 庚子 比企藤四郎（能員）・宇佐美平次（實政）等、出羽国に打ち入る。泰衡が郎従田川太郎行文・秋田三郎致文等を梟首すと云々。」と記されている。頼朝の北陸道方面軍である比企藤能員と宇佐美實政等の軍勢が越後方面から侵入し、これを藤原泰衡の家臣である田川太郎行文と秋田三郎致文等との軍勢が迎え撃った。吾妻鏡の記述からすれば合戦の場所は念珠ヶ関であると思われる。この結果田川・秋田の軍は敗れ、両将は梟首（さらしくび）にされた。日本海側でも敗戦することによりこ

こに平泉藤原氏の滅亡は決定的となっていく。

田川氏をどうとえたらよいか、その出自や平泉藤原氏との関係は、文献に登場する一部を除いていまだ不明の部分がある。平安時代末以降国衙機能が衰退しそのなかで登場する在地の豪族であることは間違いないであろう。伊藤清郎氏(伊藤 1992『羽州金峰三山をめぐる歴史と信仰-摩耶山を中心に-』)は田川氏の性格について、公領田川郡の郡司クラスの有力豪族であって、しかも平泉の藤原氏の郎従であろうと考察している。田川氏の居館は現在田川小学校やコミュニティーセンターのある箇所と推定される。『鶴岡市田川地区の城と館』(田川郷土史研究会 1994)によれば、田川館は大山川の右岸の微高地に営まれた遺跡であり、東西80m東西200mを測り、大正時代までは高さ2m幅二、八mの土塁が残っていたという。字限り図を検討すると、五十m四方の掘り跡らしい方形の区画を見いだすことができ、方形の館の存在も伺えるとされる。ここは縄文時代後期～晩期に営まれた高田A遺跡として発掘調査がなされている。この地区一帯に綿密な調査が行われれば、田川氏の居住地としての痕跡が発見されるものと思われる。

田川氏は少なくとも、一族墓を構えるような一族の構成をもっていたらしい。田川氏の一族墓と考えられ墓地が田川小学校の向かい側の丘陵地帯にあり、七日台墳墓群と呼ばれている。七日台墳墓群については、すでに川崎利夫が詳細な考察をおこなっている(川崎 1962「山形県鶴岡市田川七日台の墳墓群について」歴史考古8など)。田川氏の館跡と伝えられる地区を見下ろす小高い丘の上に11基の積石塚があり、それぞれから骨蔵器が発見されている。骨蔵器の種類は陶器あるいは石製であるが、ほぼ12世紀～13世紀頃のものと考えられる。集石墓の大きさは異同があるが型式は方形で同一であり、田川氏の館跡とつたえる地区を見下ろす位置にあることなどから、田川氏の一族の墓地として営まれたものであろう。またここには五輪塔・板碑・無縫塔などはない。集石墓のみの構成となっている。

興味深いことに田川氏の滅亡とともに七日台墳墓群の造営は衰退していくと思われる。13世紀後半までは造営は続くものの、五輪塔・板碑・無縫塔の造営はなされず集石墓の型式のみで連続する。あらたなる墓地制度あるいは供養の方式はとっていないようであるかわって七日台墳墓群の向かいやや左側の蓮華寺地区に新たに墓地が営まれるようになる。この墓地には五輪塔そして板碑がある。2メートルに近い巨大な五輪塔には田川太郎墓という伝承が残り、平安時代から鎌倉時代にかけての古い様相を残している。田川太郎墓と伝える五輪塔は古い様相を持つが、ほかの多くの板碑や五輪塔は鎌倉時代以降の新しい様相を持つ。

これらの事実を整理すれば、七日台墳墓群→蓮華寺地区墓地という流れが浮かび上がってくる。

この墓地の造営箇所の移動と、それぞれに造営される型式の変化からなにを読み取れるだろうか。この事実はいくつかのことを表していると考えられるが、一つの考え方として、平泉藤原氏の滅亡に伴いそれまで在地に勢力を有していた田川氏の勢力が駆逐され、新たに鎌倉幕府と関係する勢力が田川地区に発展していくことによって、墓地が置換され新たに構築されていくことを表していると考えたい。新たに入ってきた勢力はそれまでの在地勢力の霊魂が拠る場所を避け新たに墓地あるいは供養の場を点定したと考えられる。

発行 中世考古学文献研究会(文部科学省科研特定領域研究「中世考古学の総合的研究-学融合を目指した新領域研究-」B:学融合方法研究部門 B01 学融合方法論研究(人文科学系)) B01-1「中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究」グループ)
事務局 〒950-2181 新潟市五十嵐 2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵

矢田 俊文（新潟大学人文学部）

表1 慶長11年（1606）甲州八田家道具等収蔵施設一覧

表2 元和2年（1616）駿府城道具等収蔵施設一覧

表3 天和元年（1681）越後高田城道具等収蔵施設一覧

【解説】八田家は戦国期より蔵を有することが確認できる地域の有力者（1）で、甲州の平地に複郭の城をもつ（萩原三雄 1994・1995）。駿府は徳川家康の城である。越後高田城は松平光長の城である。表1～3とも、史料は道具帳で、それを道具が収納されている施設ごとに分類して表にした。表1、2は、それに記されるモノについてはすでに考察が行われている（関口欣也 1982、秋山 敬 1987、徳川義宣 1992、萩原三雄 1994・1995）。しかし、モノが収納される施設については検討が加えられていない。このような道具帳については、さらにモノそのものの研究が行われる必要があるが、同時にモノが収められる施設の研究も行われる必要がある。

今回紹介した表1～3からはさまざまなことがわかるが、例えば次のようなことが指摘できる。駿府城の「御さうし（草子）蔵」（表2-4）には歌書・物語本・謡本、「二ノ丸紙綿紅入御蔵」（表2-16）には、綿・紅・紙、高田城の本丸雑蔵五番改炭蔵（表3-10）が収納されている。よって収められているモノと蔵の名称は対応するようにも思える。しかし、八田家の「ふんこ（文庫）」（表1-4）には、古具足・甲・面頬などの武具も収納されている。文庫といえば、書籍等を収納しているように思いがちであるが、表1をみるかぎりそうではないことがわかる。

駿府城の天守には「穴蔵」（表2-6）があり、そこには反物が収められている。天守の「穴蔵」は、文字どおり蔵としてつかわれていたことがわかる。高田城の「本丸矢倉」（表3-5）には、高麗薄茶碗・朱四角盆などが収められていた。「矢倉」も文字どおり蔵として使用されていたことがわかる。おなじく高田城の三ノ丸南之多門（櫓）（表3-21）には、渋紙・色紙が収められていた。多門櫓も蔵であったことがわかる。

城郭遺構である大内氏館（山口県山口市）・感状山城（兵庫県相生市）・置塩城（兵庫県夢前町）・御着城（兵庫県姫路市）・枝吉城（兵庫県神戸市）・端谷城（兵庫県神戸市）伊丹城（兵庫県伊丹市）・高屋城（大阪府羽曳野市）・若江城（大阪府東大阪市）では、埴列建物が検出されている（置塩城跡調査委員会 2002、神戸市教育委員会 2005）。この埴列建物は、城の蔵の可能性が高い。

城の蔵以外でも、草戸千軒、京都、堺、摂津平野で埴列建物が検出されている（大阪市文化財協会 1999、鈴木康之 2001・2005、續伸一郎 2001、山本雅和 2002、広島県立歴史博物館 2004、国立歴史民俗博物館 2005）。城以外で埴列建物が検出されるのは集散地である。この草戸千軒、京都、堺、

摂津平野の埴列建物も蔵の可能性が高い。文献史学においても集散地における蔵の研究をすすめる必要がある。

〔註〕

- (1) 八田氏の城がある地点とは離れているが、(天正9年)4月1日末木家重讓状・天正15年3月2日願念等扱宗裁定手形(ともに「八田家文書」『山梨県史 資料編4 中世1 県内文書』所収)によると、八田氏は等々力に「蔵」を持っていたことがわかる。平山優氏は、等々力は甲州街道に面した交通の要所にあたっているところであるとする(平山 優 1990)。

〔参考文献〕

- 秋山 敬 1987 「中世の社会と文化」『石和町誌』第1巻 自然編・歴史編
大阪市文化財協会 1999 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1996年度—』
置塩城跡調査委員会 2002 『置塩城跡総合調査報告書』夢前町教育委員会
神戸市教育委員会 2005 『端谷城跡—平成17年度現地説明会資料—』
国立歴史民俗博物館 2005 『東アジア中世海道』国立歴史民俗博物館
関口欣也 1982 『山梨県の民家』山梨県教育委員会
鈴木康之 2001 「中世の町における建物復原をめぐって—広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』(1998年度～2000年度科学研究費補助金〈基盤研究A〔1〕〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄)
鈴木康之 2005 「草戸千軒をめぐる流通と交流」柴垣勇夫『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房
續伸一郎 2001 「中世の町における建物復原をめぐって—広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』(1998年度～2000年度科学研究費補助金〈基盤研究A〔1〕〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄)
徳川義宣 1992 「徳川家康の遺産」『家康の遺産—駿府御分物』徳川美術館・徳川博物館
萩原三雄 1994 「家財目録等に見る中世城館の一樣相—甲州八田家家財目録から—」植松又次先生頌寿記念論文集刊行会編『甲斐中世史と仏教美術』名著出版
萩原三雄 1995 「財産目録からみた陶磁器の所有—甲州八田家家財目録を中心に—」『貿易陶磁研究』15号
原 直史 2005 「史料紹介 大名家道具帳」矢田俊文・竹内靖長・水沢幸一編『中世の城館と集散地』高志書院
平山 優 1990 「戦国末期に甲斐国における在地秩序について」『武田氏研究』6号
広島県立歴史博物館ほか 2004 『津々浦々をめぐる—中世瀬戸内の流通と交流』
山本雅和 2002 「中世京都のクラについて」『研究紀要』8号、京都市埋蔵文化財研究所

〔付記〕 端谷城跡については、中井淳史氏にご教示いただいた。

表1 慶長11年(1606) 甲州八田家道具等収蔵施設一覧

	収蔵施設名	収蔵品名
1	さかへや〔酒部屋〕の道具	大こが〔桶〕(23), 半切(23), 酒ふね(1つ), つかいたる〔遣樽〕(5ぐ), かめ〔甕〕(2つ), 小桶(8つ), やな〔築〕(4つ), つかいたる(2く), すき(1丁), みのゝ(3つ), あふらかミ〔油紙〕, ふるあおり〔古障泥〕(2くち), からふと(1つ)
2	中のみそ〔味噌〕くら	みそ桶(2つ), ぬかみそ(1桶), すたて〔簀立〕(2升ほど), しほ〔塩〕(3升ほど), たをし物(4つ), かま(大小2つ), なべ(大小5つ), すつほ(2つ)
3	西の蔵ニ入物	七拾五俵(麦2斗入), 六かます〔呎〕(小麦1斗3升入), もちもミ〔餅糰〕(5俵), 壺斗三升ほど(つきむき〔春麦〕), めんほう〔面頬〕(2つ), かふと〔兜〕(1つ), なへかね〔鍋鉄〕(300めほど), かのつの(6つ), もろめのおもて(10状), ふるしりかい(1くち), ふのり〔布海苔〕(小俵、1つ), こが(7つ), まんくわ〔馬鋤〕(2丁)
4	ふんこ〔文庫〕の内ニ有之分	くつわ〔轡〕(7くち), しほて〔四方手〕(3つ), のくつ〔野沓〕(3つ), 古具足(1両), 手かい〔蓋〕(1くち), はいたて〔脛楯〕(1口), 甲(1はね), めんほう〔面頬〕(1つ), はさミ箱(1つ), そへかたな(3こし), そへ鑑(3本), かたな箱(1つ), もめんわた(1つ), もめんあわせ(1つ), もめんひとへもの(1つ), もめんたちつけ〔裁着〕(1つ), 木綿のかるさん〔軽衫〕(1つ), 古のかわたち付(1つ), からかわこ〔皮籠〕(1つ), きりの箱(1つ), ごめんかわ〔御免革〕(7まい), 茶かま(1つ), 折敷(九まい), まけ盆(10まい), とくり(6つ), そめ付のはち(2つ), おしき(10まい), おしき(かいしゅ〔皆朱〕10まい), さねもめん(5斤), おしき(10まい), 折敷(10まい), 古すゝの鉢(1つ), あかねのはち(1つ), おしき(10枚), 古切付(4口), つちはち(1つ), さけ食籠(1つ), おしき(9まい), おしき(10まい), 椀(四つわん、10具), きつたて〔切立〕(2つ), 椀(四つわん、10具), 白きく皿(10まい), おしき(12枚), 手しほさら(33枚), まなはし〔真魚箸〕(2せん), 茶わん(1つ), 盆(5まい), 青茶碗のはち(1つ), 丸盆(6まい), 鉄のくさり(3筋), 桐の小箱(1つ), じうのさいらう〔重の菜籠〕(10), とのゐのごき(10具), 重のさいらう(10), 盆のたをし物入箱(1つ), 古ほご入ルかわこ〔皮籠〕(1つ), いまやき茶くり(2つ), 錫(1対), 土すさら(80), 古のしほて(7口), 四つ椀(10具), 同わん(10具), 三人前へんとう〔弁当〕(1つ), 土てんもく(10), 青皿(9つ), 酢皿(20), つちとくり(2つ), 染付の鉢(2つ), やくわん〔薬缶〕(4つ), 茶釜のふた(4つ), 酢皿(大小、33), 茶碗(1つ), 土てんもく(3つ), そめつけ(8つ), 同小皿(17), 木綿布(2端), ぬりかけ御手箱(1つ), あさ(300目), ごま(1升), えんしやう(500め), 古しほて(3口),

	<p> そへ脇さし(2 つ), 長みの鍬(1 っ), やくわん(1 っ), とのゐの ごき(10 具), おしき(10 まい), 今やきつほ(1 っ), 四寸皿(3 っ), いとめ〔糸目〕(3 っ), そめ付皿(10), おしき(5 まい), 四 っわん(5 具), おしき(1 枚), 皮かはこ(1 っ), あかねもめん(2 っ), 麻はかま(1 具), 白あやのきる物(1 っ), かうしま〔格縞〕 のきる物(1 っ), 古の紬のきる物(1 っ), 古のつむきのきる物(1 っ), 古の木綿かたひら(1 っ), 紬のひとへ物(1 っ), 古の枕(2 っ), 匂ひ袋(1 っ), 皮かわご(1 っ), 古のとうきぬ(1 まき), 同 きれ(1 っ), もちのかたきぬ〔緞の肩衣〕(1 っ), 紅(200 め), 文箱(1 っ), かわきぬ(1 っ), かうしまのひとへ物(1 っ), 古の かたきぬ(1 っ), ふるのもんちや〔紋紗〕ときめ(1 っ), さいミ 〔細布〕(1 端), もめん布(1 端), 皮かわこ(1 っ), 古の具足(1 っ), 手かい〔蓋〕(1 口), はいたて〔脛楯〕(1 口), 小はた筒(1 分), 古錫(1 対), 四寸皿(20), 四寸皿(12), ぬり手桶(2 っ), 四ツ 椀(10 具), ぬり鉢(2 っ), まけ食籠(1 っ), ぢやうき(5 ツわ ん, 10 具), 白つほさら(10), 食籠(1 っ), へんとうわん〔弁当椀〕 (12), そへ鍬(大小, 3 本), おしき(20 まい), 錫のきつたて(2 っ), まんくわのこ(7 っ), 丸盆(10 まい), 同盆(10 まい), 折敷 (10 まい), おしき(10 まい), ぬりひさけ〔塗提子〕(2 っ), 小食 籠(1 っ), しうはこ〔重箱〕(1 っ), 湯つき(2 っ), 鉄炮の薬筒(1 っ), かうろの家(2 っ), ほかい〔行器〕(1 っ), てんもく(1 っ), 白皿(10), ぬりひさけ(2 っ), かななべ(1 っ), しうはこ(1 っ), 茶わん(2 っ), てんもく(3 っ), ゆとう〔湯桶〕(2 っ), ほかい(1 っ), ぢやうぎの家(1 っ), ゆとう(1 っ), なつめ〔棗〕(1 っ), こうらいござ〔高麗御座〕(1 まい), 錫のきつたて(2 っ), あを しやくし〔杓子〕(3 本), じうはこ(1 っ), そめ付(9 まい), ぢや うきの家(1 っ), かうがい〔筭〕(しゃくどう〔赤銅〕, 3 本), 染付皿(24 まい), とのゐのごき(9 具), すゝのさけつき(1 っ), そめつけ(13), 今やきつほ(1 っ), つゝらほん(10 まい), 小食籠 (1 っ), ぢやうし〔銚子〕(1 っ), いとめ皿(10), 染付(20), いと め(15), ひさけ(1 っ), しうはこ(小, 1 っ), きつたて(1 っ), 茶 へんとう(1 っ), 今やきつほ(1 っ), 硯箱(1 っ), しうのさいら う(10), かう盆(1 っ), 茶うす(1 っ), めしつき(2 っ), 水こほし (1 っ), ゆとう(1 っ), とくり(1 っ), 小折敷(10 まい), 重かうは こ(6 っ), 木すさら(20), 土のやき物(2 っ), 鋤(1 丁), 鍬(1 く), すり鉢(1 っ), とくり(1 っ), 茶かま(1 っ), しんちうの鉢(1 っ), つちすさら(10), てんもく(11), ふたおり(1 っ), 鉄炮(4 挺), まさかり〔鉞〕(1 丁), 鞍かさ(8 口), 鎧(5 口), </p>
--	--

注) 1: 「八田家文書」『山梨県史 資料編 4 中世 1 県内文書』により作成。2: 道具名は史料の通り

表2 元和2年(1616)駿府城道具等収蔵施設一覧

	収蔵施設名	収蔵品名
1	一之蔵之分	鏡・碁盤・将棋盤
2	一之蔵之前分	調度・白粉・紅・文房具・日常身辺道具
3	一之蔵にて割の御薬種	薬種・墨・象牙・しやぼん
4	御天主にしのかなか蔵	反物
5	御殿守南のかなか蔵	絲
6	御天守穴蔵	反物
7	穴蔵二階あかき箱	反物
8	おもて御納戸	綿・鉄炮道具・紙・敷物・銅地金
9	御さうし蔵	歌書・物語本・謡本・手本・史書等
10	御本丸そうし蔵の下	陶磁器・食籠・徳利等振舞道具
11	御座の間御なんとの御ふく	小袖・袷・長持・皮つづら
12	内藤主馬預り蔵之分	皮革・敷物・馬具・碁将棋道具・小間物・能装束・能面
13	穴蔵内藤主馬あつまり分	裂地・皮革・鷹道具・小柄・小刀・足袋・履物・薬種道具・香道具・茶道具
14	穴蔵上之白箱	反物・香木
15	穴蔵取次之櫛下御道具	薬種道具
16	二ノ丸紙綿紅入御蔵	綿・紅・蠟燭・紙・呉須
17	未申二階之御蔵	綿・糸・反物・敷物・香木
18	御てんしゅ取つきのした蔵	反物・蚊帳・七宝鉢
19	御本丸ひつしさる三かいの前 けつしよ物	小袖・夜具・袷・単・羽織・反物
20	一のくら次 けつしよ蔵	反物・燭台等
21	御本丸南之長蔵おさい預り分 ひつしさる三かいの下蔵分	鉢・鍋・反物
22	御本丸南之長蔵おさい預り分 ひつしさる三かいの下蔵之分	敷物・日常身辺道具・調度
23	御天守之かみ蔵分 御本丸かみ蔵三つ分 御そうし蔵之かみ分 御本丸かみくら三つの分	紙類・鼓皮・簾

注) 1:「水戸家本 駿府御分物帳」(徳川 1992) により作成。2:道具名は史料の通りではなく、徳川 1992 の分類による名称である。

表3 天和元年（1681）越後高田城道具等収蔵施設一覧

	蔵名	収蔵品名
1	本丸広間在之内土蔵一番長持入	瀬戸水指(1), 古備前水指(1), 青磁口よせ小香炉(1), 同硯屏(大小, 2), 荷葉硯(1 面), 天目台(3), 建盞天目(2), 卓花入(唐金, 1), かね乃卓花入(1), かね乃かけ花入(1), 青磁いかけ筆荷(1), 唐金雨龍筆荷(1), 文鎮(2), 軸留(1), 焼かち入(やき物, 1), 唐墨(1 挺), 青磁蓮之茶台(1), 同釣舟(1), 鳩之香炉(1), くりく食籠(1 組), 青磁下皿(1), 朱盆(1 枚)
2	本丸広間在之内土蔵二番長持	源氏筥(梨地蒔絵, 1), 食籠(大小, 2), 大耳水指(唐金, 1), 青磁布袋香炉(1), 唐錫水次(1), 高麗茶碗(4), 人形硯(1 面), 堆朱角食籠(1 組), 紅花盆(1 枚), 錦手六角鉢(1), 同食籠(1 組), 和漢朗詠集, 鴈之硯(1 面), かねの麒麟香炉(1), 東山殿写之硯箱(1), 尊円手本(1 巻), うす板(1 枚), 南蛮水指(1), たひひさんくりはち(1), ふち赤之盆(1 枚), 白川殿筆 三拾六人歌合, 長恨歌(1 巻), 二条為氏筆巻物, 唐物挽溜(1)
3	本丸広間在之内土蔵三番長持	古田(3 幅対), 毛松虎之絵(1 幅), 蒔絵硯筥(1), 新百人首, 近江八景
4	本丸広間在之内土蔵四番長持	櫛箱, 鷹之書物并麝香(梨地箱ニ入, 1 箱), 堆朱大盆(1 枚), 竹之子(青磁, 花入 1), 御内書入ル筥(1)
5	本丸矢倉之内ニ有之道具之覚	青貝筆(1 本), 堆朱六角重印籠(1 組), 硯(1 面), きんかい(茶碗), 青磁ふた獅子香炉(1), 随心院御門跡歌仙(1 巻), 仙洞小色紙, 高麗わりこうたい(茶碗, 1), 新院勅筆, 秀丸様御懷帋, 唐金牛之筆荷(1 箱入), 唐金水次(1), 高麗薄茶之碗(3 ツ), 同水さし(1), 青磁硯屏(1), 印判文鎮(1), 朱四角盆(1 枚), 高麗ひかわり茶碗(1)
6	本丸雑蔵一番改	帳紙(7 束 8 帖), 箱挑灯(7), 木海月(9 袋, 4 斗 5 升), 苧 中振(15 把), かき紙(12 枚), 薄縁(15 枚), こさ(15 枚), はき(1 本), 明長持(1 棹), 明箱(大小, 10), 炭入(1)
7	同所二番改雑蔵	紺木綿(134), たう紙(2 緘), 薄はり(1 包), 棒(39 本), 熊手(10 本), 手鋤(4 丁), 染革(2 枚), さらし苧(2 把), ことく(1), 明箱大小(13), 木綿紺之単羽織(17), 革下緒(100), 古紙桐油(1), 長持之棒(2 本), 挟箱之棒(3 本), 古棕櫚箒(2 本), いため皮(21 枚)
8	同所三番改雑蔵	番刀(152 腰), 脇差(50), 馬皮(8 枚), 熊皮(23 枚), 羚羊皮(4 枚), 古黒椀朱椀集物(1 長持入), 湯次(13), 古湯次(10), 間鍋(3), 古留塗湯桶(10), 古食次(21), 古貝桶(1), 古膳(49 膳), こはれ丸盆(17 枚), 板折敷(10 枚), 胡椒壺(10 箱), 薬罐(1), 塩辛壺(2), われ鍋(2), とく利(4), 鉢(7), 古食櫃(1), 古指躬皿(44), 集鱈皿(47), 集さしミ皿(34), 集ちよく(241), 染付茶碗(73), 鱈皿集物(80), 取集鱈皿(108), 集茶碗(57), こはれ挑灯(6), 明箱(22), 黒椀(80 人前), 黒本膳(80 人前), 黒二ノ膳(140 人前), 古朱椀膳共(100 人前), 黒吸物椀(40 人前), 黒二ノ椀(39 人前), 集黒椀色々(1 箱入), 朱盃(100), 長持棒(3 本), 炭(2 箱入)

9	同所四番改炭蔵	炭(20 俵), 引あみ(1 箱), 明箱(2), 長持棒(1 本)
10	同所五番改炭蔵	炭(3 俵)
11	同所六番改仕込蔵	味噌桶(13), 桐長持身計(1)
12	同所七番改ぬかミぞ蔵	古桶(63), 古瓶(9), 釜(1 口), 臼(1 から), 置いろり(1), そは切板(1 枚)
13	同所八番改つきや	から臼(4 から), 薪(少), 半切(2), 指せいろ(1), 石うす(1 から), 温鈍板(1 枚), 明長持(1), 明箱(4 ツ), 釣瓶(2), 雑道具(1)
14	同所拾壹番改不明多門	台(2), 桶(5), 屏風箱(1), こはれ箱(1), くすれ膳棚(1), やふれ渋紙(1 ゆい),
15	同所十二番改円斎預り蔵	古白地式枚絵屏風(2 双), 古式枚金絵屏風(1 双), 古絵六枚屏風(3 双), 古屏風(片々), 右黒塗蒔絵重箱(3 組), 右黒塗蒔絵提重(1 ツ), 古丸盆(20 枚), 古たはこ盆(2 枚), 赤かね口鍋(1), 古ため塗ふち高(24), 古花毛氈(6), 古手拭懸(2), 赤かね古火かき(3), ため塗古ちり取(3), ちよく(13), ほうろく(1), そめ付小鉢(1), 塗はんぞう(3), 赤かね手水手洗(1), かね火鉢(15), こたつ櫓(4), 木地たんす(2), 古台子(3 組), 古風炉(3), 茶うす(1 から), 花瓶(1), すひつ(2), 懸とうかい(20), 古花桶(3), 古きう台(1), うす板(1 枚), しよく台(30 本), 袋行灯(9), かな行灯(3), 手燭(2), 合羽入わく(3), 古かさね箱(4), わたしかね(大小, 3), 古炭斗(9), 三方足打(4 かゝけ), 取集雑桶(22), 火鉢家(1), こはれ打板(4 枚), 戸棚(1), 明長持(1), 帳箱(1), こはれ挑灯(2), 壺(1), 明箱(100)
16	二丸武具倉一番改	床机(1), 朱(壹貫貳百拾九匁三分), 細曳(20 筋)
17	二丸武具蔵二番改	渋紙(30 枚), 細曳(20 筋)
18	二丸武具蔵三番改	青貝刀懸(1)
19	二丸武具蔵五番改	細引(280 筋)
20	本丸多門之内小屋道具	渋紙(400 枚), 細引(350 筋), 細縄(500 尋)
21	三丸南之多門	刀筒(2), 床机(2), 早懸挟箱(2), 覚書(20 冊), 細曳(104 筋), 渋帗(419 枚), 色紙(1 箱)
22	三丸六番改雑納戸	布(15 端), 厚紙(9 束), 吉野葛(7 斗 8 升 5 合), 木海月(1 斗 5 升), 茶臼(1 柄)
23	三丸七番改雑納戸	白苧(7 貫目), 鍋(大小, 22), 大間鍋(17), 砂皿(450), 砂鉢(9), 晒苧(5 貫 700 目)
24	三丸八番改雑納戸	かたくり粉(5 斗 9 升), 蔵之粉(2 斗 9 升 2 合), 黒塗手之洗(2), ため塗手水手洗(1), 錫切立(10), 錫徳利(5 器), 木綿(1 端 1 丈), 煎焼鍋(2), 古折敷(20 枚), 黒椀(20 具), 黒塗重箱(4 組), ため塗重箱(1 組), かなへ(5), 小国小板紙(1 束)
25	三丸九番改鉄釘鋳倉	布縁(33 端), 白布縁(25 端)

26	三丸十三番改作事録蔵	白檀木(1本)
27	三丸追手多門渡り櫓之下東	備後表(293枚)
28	大手門櫓之上東之方	古燭台(2), 古薄縁(100枚), 古塗膳(35人前), 古塗丸盆(14枚), 古木具(20膳), 古手拭懸(2), 古朱椀取集(15人前), 茶臼(1柄), 唐金之風呂(1), 鉄風呂(1), 水指(1), 水翻(1), 風呂釜(1), 古硯箱(1), 盃(9), 取集小砂鉢(3), 古組入盆(5), 風呂釜(1), 煎茶之碗(3), 六尺取集屏風(1双), 小屏風(1双), 古かな引焼(2), 古かね菰蕩盆(2), 古火搔(1), 古釜(3), 古二枚屏風取集(1双), 古秤(3箱), 古衣架(1), 古平釜(3)

注) 1: 原 2005 により作成。2: 道具名は史料の通り

文書・記録からみた五十子（いかつこ）陣

森田真一(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

「太田道灌状」(『北区史 資料編古代中世2』中世記録48号)

道灌如申者、五十子御陣事者及三十年、被立 天子御旗候之处、

道灌者其儘成田張陣、榛沢へ御着奉待請候、雖然可被立 御旗地無之候由御内談候之处、道灌如申者、鉢形要害可然存候

『梅花無尽蔵』(『五山文学新集』六巻、926頁)

康正乙亥騷屑以来二十有余霜、高揚帝旗、陣武之五十子、禍自戯下起、公之父耶道真、倡将師屯兵於上陽赤城之麓河北矣、

【解説】五十子陣は、享徳3年(1454)12月に東国で勃発した享徳の乱において、古河公方方に対抗するために上杉氏方(京方)が構築した陣所である。近年、五十子周辺の発掘調査が進んだことにより、西五十子台遺跡、東五十子城跡遺跡、西五十子大塚遺跡(『本庄市史 資料編』本庄市、1976年。東五十子城跡遺跡については、『東五十子城跡遺跡』本庄市遺跡調査会、2004年も刊行されている)、六反田遺跡(『六反田』岡部町六反田遺跡調査会、1981年)、東五十子・川原町遺跡(『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会、2002年)、東五十子赤坂遺跡(『東五十子赤坂遺跡』本庄市遺跡調査会、2004年)、東本庄遺跡(『東本庄』本庄市教育委員会、2004年)などが五十子陣に関する遺跡であることが明らかになってきた。その分布は、およそ東西2km弱、南北1km強の広範囲にわたっている。したがって、従来の多くの研究のように陣の中心部のみを考えるのでは、不十分になりつつあるといえよう。その点、文献史料に基づいて陣の広域性を考察した研究も現れている(松岡進「戦国初期東国における陣と城館」『戦国史研究』50号、2005年、峰岸純夫「享徳の乱における城郭と陣所」千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』高志書院、2005年)。また、出土遺物に関しても、かわらけを上杉氏の支配地域と結びつけて分類する試みも行われている(田中信「山内上杉氏の土器(かわらけ)」とは」埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』高志書院、2005年、太田博之「五十子陣」研究ノート『群馬考古学手帳』15号、2005年)。ただ、これまでの発掘調査報告書では、多くの出土遺物の所属

時期について「15世紀代」「15世紀後半代」という時間幅のあるものが多い。よって、陣の構築から廃絶までの期間が出土遺物の年代観とある程度の相関関係にあるとするならば、文献史料からその期間を明らかにすることも有効であると考えられよう。以下では、五十子陣の構築から廃絶までの期間を文書・記録によって確定していきたい。

まず、五十子陣が構築された時期について。文明12年(1480)作成と考えられている「太田道灌状」には、「道灌申す如くは、五十子御陣の事は、三十年に及び、天子の御旗を立てられ候の処」とある(以下の「太田道灌状」の読み下しは、前島康彦「太田道灌状について」同氏著『太田氏の研究』名著出版、1975年参照)。このことから、五十子陣に錦御旗が立てられてから文明12年の時点で30年を経過したとあるので、陣は享徳の乱初期に構築されたことになる(久保田順一「享徳の乱と上杉・長尾氏」『群馬県史 通史編3 中世』第五章第三節一、群馬県、1989年)。では、享徳の乱が勃発した享徳3年(1454)12月以降のどの時点で、陣は構築されたのだろうか。

『梅花無尽蔵』第六には、「康正乙亥の騷屑以来二十有余霜、高く帝旗を揚げ、武の五十子に陣す。禍、戯下より起る。公の爺、道真、将師に倡へ、兵を上陽、赤城の麓、河北に屯す」(読み下しは、市木武雄『梅花無尽蔵注釈』第四卷、続群書類従完成会、1994年)とある。該当箇所「五十子」に続群書類従本では「イサラコ」と書き入れがあるのに対して、五山文学新集本ではこの書き入れがない。これまでの研究ではこの「イサラコ」の記載を尊重されて、これを現東京都港区高輪台上の伊皿子に比定している(前掲市木著書)。そして、文中の「康正乙亥の騷屑以来二十有余霜」を康正元年(1455)から18年後の文明5年(1473)に比定し、該当箇所は文明5年11月の五十子での戦いに関する記述であると解釈されている。しかしながら、該当箇所の後半部分に「禍、戯下より起る。公の爺、道真、将師に倡へ、兵を上陽、赤城の麓、河北に屯す」とある。「禍、戯下より起る」は、文明8年(1476)6月に上杉氏方の内部で起った長尾景春の乱の勃発に関するものであろう。そして、道灌の父道真が「上陽赤城」(上野国赤城山)の麓の「河北」(利根川の北側)に駐屯したというのは、翌文明9年1月に上杉氏方が五十子陣から上野国に撤退したことに關するものであろう。それは、「此上の世上如何とも計り難く存じ候、先ず河北へ取り除き候」「太田道真入道篠輿乗り行く」(『松陰私語』第五)、「既に屋形と老父御一所候の上は、何方へ御陣を移され候と雖も、障申すべからざる旨様々申し候の間、襲い奉らざるに依り、御無為利根河を御越し、河内へ御移り候」(「太田道灌状」)。という記載とも合致している(文明9年1月の上杉氏方の五十子から上野国への撤退に関しては、井田晃作「武士の城山を中心とした松陰私語の抄訳」『境町歴史資料』65号、1966年参照)。以上から、『梅花無尽蔵』該当箇所「五十子」を本稿で考察の対象としている現埼玉県本庄市の「いかつこ」とみてよかろう。

よって、『梅花無尽蔵』においては、康正元年(1455)から太田道灌は五十子に在陣していたと記されていたことになる。早くに『自治資料 埼玉県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯(埼玉県、1933年)で指摘されているように、史料的に問題はあがあるが『南方紀伝』においても康正元年(1455)に「上杉武州五十子に陣す」とある。では、近年の研究では陣の構築時期をいつ頃であると考えているのだろうか。

一つの見解では、康正2年(1456)9月の武蔵国岡部原合戦(埼玉県岡部町)を契機として、長禄3年(1459)中頃には陣は機能していたとする(佐藤博信「享徳の大乱の諸段階」同氏著『中世東国の支配構造』思文閣出版、1989年、初出1986年など)。さらに、この見解を踏まえた上で、長禄2年(1458)と考えられる9月8日付の長尾昌賢(景仲)書状に基づいて上杉氏方(京方)が利根川の新田庄対岸に集結していたとして、長禄2年(1458)9月以前に陣は構築されていたとする見解が出されている(家永遵嗣「足利義政の東国政策と応仁・文明の乱」同氏著『室町幕府將軍権力の研究』第二部第一章、217頁、東京大学日本史学研究室、1995年)。したがって、これらの研究成果を整理

すると、陣の構築時期は康正2年(1456)9月以降から長禄2年(1458)9月以前の間としていることになる。たしかに古河公方方と上杉氏方の動きからみると、陣構築の契機は古河公方方が武蔵国の奥深くにまで侵攻してきた康正2年(1456)9月の岡部原合戦が適切であるようにも考えられる。ただ、既述のように『梅花无尽蔵』の記述も考慮すると、康正元年(1455)に五十子で何らかの動きのあった可能性も考えておきたい。以上から、陣構築の時期は康正元年(1455)頃から長禄2年(1458)9月以前となろう。

次に、五十子陣が廃絶された時期について。文明8年(1476)6月に上杉氏方の内部で長尾景春が反乱を起こしており、翌文明9年(1477)1月に上杉氏方は五十子から撤退している。太田道灌の活躍で同年4月に上杉氏方はいったん五十子に戻るが、同年7月に古河公方足利成氏がこの争いに介入した結果、上杉氏方は再び五十子陣を追われている。翌文明10年(1478)正月に古河公方方と上杉氏方は和睦し、扇谷上杉定正は同月24日に河越に移っている。そして、同年7月に関東管領の上杉顕定は鉢形へ移るが、「太田道灌状」には「道灌は其儘成田張陣、榛沢へ御着待ち請け奉り候、然りと雖も御旗を立てらるべき地之なく候由御内談候の処、道灌申す如くは、鉢形の要害然るべく存じ候」とある。榛沢は『松陰私語』第二に「五十子近辺、榛沢・小波瀬・阿波瀬・牧西・堀田・瀧瀬・手斗河原ニ取陣」とあるので、五十子陣の近辺かあるいは陣に含まれたこともあったであろう。したがって、古河公方方との和睦の後に関東管領上杉氏は五十子近辺もしくは陣そのものに戻ろうとしたが、結局は鉢形に移ったとなる。『鎌倉大草紙』にも「顕定ハ鉢形の城に天子の御旗を立られ」とある。これらのことについて、文明10年(1478)7月頃から鉢形が関東管領上杉顕定の居城になったという指摘が既にあるように(黒田基樹「太田道灌と江戸地域」同氏著『扇谷上杉氏と太田道灌』岩田書院、2004年、初出1996年)、これ以降、五十子が上杉氏方の陣として機能していたことを史料上では確認できない。よって、上杉氏方が五十子に在陣していたことの確認できる時期の下限は、文明9年(1477)7月頃となろう。なお、『戦国遺文 後北条氏編』の索引をみる限り、これ以降に五十子が陣あるいは城郭として機能していたことを示す文書をうかがうことはできない。

以上から、陣は康正元年(1455)頃から長禄2年(1458)9月以前の間に構築され、文明9年(1477)7月頃に廃絶したと考えられる。つまり、それは概ね15世紀の第3四半期に属する。よって、出土遺物の年代観もこれと大きく隔たらないと想定されよう。なお、五十子陣に関係すると考えられる東五十子遺跡について、出土陶磁器からその存続期間を15世紀の第2四半期から第3四半期と推測する見解が最近出されている(浅野晴樹「戦国期城館の年代観」埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』高志書院、2005年)。

中世考古学のための本願寺天文日記解説 町屋

片桐昭彦(中央大学文学部)

ここで取り上げるのは、大坂本願寺10世の証如(1516~54)が記した『天文日記』である。『天文日記』には、16世紀第2・4半期の全国の門徒の動きだけでなく、大坂をとりまく畿内周辺の政治動向や貿易・流通を知ることのできる当該期の重要史料である。

今回は、この日記に描かれる町人の住む町屋を取り上げる。『天文日記』を使い、大坂の寺内町の空間構造・構成や共同体の在り方について考察した研究は数多くみられ(伊藤毅1984、仁木宏1994a・1994b・1997、藤田1996、天野1996など)、六つの大きなマチの区画があったことは明らかにされているが、一軒一軒の町屋の実態については不明な部分が多い。

A 天文5年（1536）4月26日条

同日

寺内町人就跡職譲不譲との儀訴訟候、一方ハひものや町又四郎、又一方ハ北町屋与三郎并源六也、此跡職といふハ、衛門四郎跡之儀也、又四郎ハ衛門四郎むすめと夫婦ニなりむこなり、又与三郎と源六とは衛門四郎弟共也、此儀ハ先年衛門四郎冠落大事に煩候時、衛門四郎申事ニハ、又四郎事、むすめと於無別儀者、又四郎ニ跡を可譲候、むすめ相のき候やうなる事候ハハ、不可有其儀と申譲状出候て、又四郎夫婦ハはや本の屋ニをき候へ共、冠落取なをし候間、又四郎夫婦をハ奥ニ座敷をつくり置、又衛門四郎ハ本家候つる処に、去年六月廿日ニ衛門四郎打死候事候、又四郎ニ譲候段無紛候よし又四郎申候、又与三郎・源六ハ与三郎ニ譲たるよし申候、譲状事候敷と相尋候へハ、譲ハなく候と申候、又四郎譲あると申ハ謀書にて候と申成候、五月二日ニ又四郎方へ譲無紛よし申出候、

この史料Aは、寺内の新屋敷檜物屋町の又四郎と北町屋の与三郎・源六が、衛門四郎の跡職をめぐって訴訟をおこしたという記事である。又四郎は衛門四郎の娘婿にあたり、与三郎・源六は衛門四郎の弟たちである。先年、衛門四郎は、重い病気になった時、又四郎が娘と添い遂げたならば跡職を又四郎に譲るとして譲状を書き、又四郎夫婦を「本の屋」に置いた。しかし、病気が治ったため、「奥」に「座敷」を造って又四郎夫婦を置き、自分は「本家」にもどったが、去年6月20日に討死したために跡職をめぐって相論となったところ、本願寺の証如は、又四郎への譲状（5月2日付）は紛れないと裁決したという内容である。

ここで注目したいのは衛門四郎が、「奥」に「座敷」を造って娘夫婦を置いたことである。つまり、「去年」の天文4年（1535）、大坂寺内新屋敷の檜物屋町の衛門四郎の家には「奥」に座敷を造ることのできる空間があったことがわかる。また「奥」に対して存在する「本の屋（本家）」は、通りのオモテに面していた可能性が高い。この衛門四郎の家は、当該期の都市に一般にみられるような、間口が狭く奥行が長い町屋であったのだろうか。

B 天文6年（1537）9月12日条

一、今朝榎並包安兄弟二、新屋敷西地面・奥へ十間ツ、百坪やり候、

史料Bは、証如が、榎並の包安兄弟に寺内の新屋敷の地を与えた記事である。証如が与えた地は、「面・奥へ十間ツ、百坪」、すなわち面（オモテ）の長さ十間、奥行きが十間の百坪の地であった。つまり、天文6年（1537）の大坂寺内のマチ新屋敷には、短冊形ではなく十間四方の正方形の区画があったことがわかる。史料Aでみた新屋敷にある檜物屋町の衛門四郎の家も、短冊形の町屋であったかどうか検討の余地があると言えよう。

C 天文5年（1536）5月2日条

同日

先日之寺内檜物屋又四郎と又一方与三郎并源六双方申事、只今相済候、其子細者、又四郎方ニハ譲状在之、与三郎・源六方ニハ譲状無之、然者又四郎方へ譲無紛之由申出候処ニ、与三郎・源六是へ來、上野部屋にて種々の悪言を言候、剩御堂出て、参詣の衆ニ愚身非公事相扱候由、各ニ申聞、与三郎腹をきり候へく候、不然者構の堀をこえ候て出候ハハ、可後悔よし申候、此申事ハ与三郎申事候、源六申事にハ此等事相果ましき事候よし申、兩人宿所へ帰候、其時上野部屋ニ不居候よし候、上野申間、

さやうのものを手のはしニしてハにて候程ニ、廻調略搦捕へきよし申付候間、藤井（雑言ヲはき候時藤井上野部屋にて聞候）宿所へ彼与三郎喚寄、只今申たる事御耳へ入、さやうの事候ハ、証文を出し候へ、以其上可被仰付よし申候処ニ、証跡無之候、只兄の申置たるとほりを申たる事候とて脇さしをぬき門口出候処ヲ、村瀬勘八走寄右の腕ヲ打落候処ニ、立なほり勘八可打切と仕候処ヲ、小松原より候て又切付候処ニ、又清水切付則奥候、其以後、又源六処へ差懸候処に、町人の宿へ片衣一ツにて走入、二階へあかりて居たる間、其宿へ是の衆行、二階ニ麦をかりて置たる中ニかゝみ居たる処ヲ、清水麦共入のけて、彼源六居たる処を麦こしニ二刀つき、則生滅也、

史料Cの記事は、史料Aで敗訴した与三郎と源六が、上野（証如の側近下間頼慶）の部屋に来て種々の「悪言」「雑言」を吐いたため、兩人を成敗した時の様子を詳しく具体的に描いた記事である。証如から「調略を廻らし搦め捕る」よう命じられた内衆の藤井は、自身の宿所へ与三郎を召喚したが、脇差を抜いて逃げようとしたため、追跡した村瀬勘八・清水らが討ちとった。さらに彼らは、源六の居所におもむくと、源六は「町人の宿」へ片衣一つで逃げ込み二階へ上がったため、追跡し、源六が二階に麦を茹けて置いてある所にかがみ込んでいたので、清水が麦ごしに源六を刀で二度突いて殺したと記している。

ここで注目したいのは、源六が逃げ込んだ「町人の宿」に二階があったことである。この「宿」とは、旅宿や宿屋のことではなく、家や住居のことを指すと考えられる（1）。大坂寺内の町屋に二階建ての建物があったということになる。この記事を取り上げた仁木宏氏は、「当時、京都においてもそれほど一般的ではなかった二階屋がすでに大坂でみられる」と述べているが（仁木 1994a）、もう少しこのことを積極的に評価できないだろうか。

この記事で証如は、人名や成敗する場面を事細かに描写している。しかしながら、この二階屋の町人の名を記していないし、二階建てであることを特筆してはいない。つまり、証如も知らないような無名の町人の「宿」が二階であったということ、そして、証如にとって二階建ての町屋はめずらしくもない当たり前のものであったと言えよう。したがって、天文5年（1536）の大坂の寺内町には二階建ての町屋が数多くみられた可能性が高い。

従来の研究では、首都京都の町屋の在り方を基準にして周辺の都市の町屋を位置づけることが多かった。たとえば、二階屋の町屋について言えば、16世紀初めころの京都を描いたとされる旧町田家本の「洛中洛外図屏風」（国立歴史民俗博物館所蔵）には、わずか三例（上京の立売町、室町後町、下京の四条に各一例ずつ）見られるのみであり、16世紀半ばころの景観年代と推定される上杉家本「洛中洛外図屏風」（米沢市所蔵）にはわずか一例であり、市中の町屋の大半が二階屋を占めるように描かれる洛中洛外図屏風は、近世初頭（17世紀初頃）以降とされる（川上 1978、高橋 1980）。この洛中洛外屏風に描かれる様子にしたがって、京都における二階屋建物の町屋の増加にともなうようにして、近世初頭にかけて周辺の畿内都市の町屋にも二階屋が増えていったとする認識が無批判のうちに受け入れられている。

しかし、史料Cでみたように、16世紀第2・4半期の大坂の寺内町には二階屋建物の町屋が数多く存在した可能性が高い。また、大永5年（1525）正月吉日付で常楽寺の僧天満が、堺北庄の風呂屋敷の町人たちに出した禁制で「面に二階を作る」ことを禁じているが（「菅原神社文書」）、このことは、このころにはオモテに二階屋を建てることを違法としなければならないほど二階屋の町屋が増えていたこと、そして、オモテではなくウラ・奥であれば二階屋をつくることを認めていたことがわかる。このように、16世紀の前半には既に、京都の町屋とは異なり、堺や大坂寺内町には

二階屋の町屋が数多くみられたことになる。

首都京都の町屋は、公家・寺社・武家など諸権門が集中していたために、上掲の常楽寺のように二階屋築造を規制したかもしれないし、都市共同体の組織が強力であったために町人同士で規制していた可能性もあろう。いっぽう、堺や大坂寺内町は、京都に比べて諸権門からの規制が弱かったために、町人たちは自身の富を大いに表現できる場を与えられていたと言えないだろうか。もちろん都市としての人口・家屋の稠密の度合いや共同体の組織の様相などについては、首都京都を基準にみていく必要はあるだろう。しかし、町屋一軒一軒の建造物そのものの造りや規模については、堺や大坂寺内町のような新興商人などが集まりやすい周辺都市のほうが豪華であった可能性が高く、京都の町屋を基準とせず、偏った先入観をもつことなく、あらためて独自に調査し都市像を考察していく必要あると言えよう。

注

(1)『天文日記』には、上野（下間頼慶）の住居を「上野宿」（天文6年正月7日条等）と記すなど、家や住まいのことを「宿」と記すことが多く見られる。

【参考文献】

- ・天野太郎「大坂石山本願寺寺内町プランの復元に関する研究」（『人文地理』48-2、1996年）
- ・伊藤毅「摂津石山本願寺寺内町の構成」（初出1984年、のち同『近世大坂成立史論』生活史研究所、1987年所収）
- ・川上貢「上杉家蔵洛中洛外図屏風と京の町家」（初出1978年、のち同『日本建築史論考』1998年）
- ・高橋康夫「戦国時代の京の都市構造一町組をめぐる一」（初出1980年、のち同『京都中世都市史研究』思文閣、1983年所収）
- ・仁木宏「大坂石山寺内町の復元的考察」（中部よし子編『大坂と周辺諸都市の研究』清文堂、1994年所収）a
- ・仁木宏「大坂石山寺内町の空間構造」（初出1994年、のち『寺内町の研究 第2巻 寺内町の系譜』法蔵館、1998年所収）b
- ・仁木宏「寺内町における寺院と都市民一大坂石山を事例に」（『講座 蓮如 第3巻』法蔵館、1997年所収）
- ・藤田実「大坂石山本願寺寺内の町割」（『大坂の歴史』47、1996年）

考古学のための梅花無尽蔵解説 椰子椀・中国産陶磁器

皆川義孝（駒沢大学禅文化歴史博物館大学史資料室）

A 文明17年（1485）9月14日

浜名浦十四日、借舟四艘、度此浦、余所駕之舟、其漏甚、以同行忠公腰間之椰子取水、葦林有大鷺昨雨吹残、浦尚深、漏船有水、借椰斟、棹郎指点、新晴外、大鷺巍然立葦林、有鷺、見人不飛

B 延徳4年（1492）正月15日以前

檐頭喝早茶、店主頗如有待也、余章云、茗椀鷓鴣班、今攀其例
花片未飛、無醜枝、檐頭北苑、喝春來、鷓鴣班新様、饒州椀、茶店、主人今待誰

C 明応 2 年 (1493) 年正月 5 日

啜鷗鳩碗、五日

饒州茶碗、鷗鳩紋、添得、蒼梧日暮雲、一啜、睫梢無睡色、案頭、楚些、読湘君

今回は、「梅花無尽蔵」に登場する 15 世紀の禅僧が使用した碗や美濃周辺（現岐阜県）にあった茶店で使用されていた中国産陶磁器について紹介する。

A は、文明 17 年 9 月 14 日に万里集九が美濃国鵜沼から江戸への旅の途中、駿河国（現静岡県）の浜名湖を舟で渡ったときの記事である。この記事によれば、この日万里一行は 4 艘の舟を借用し浜名湖を渡るが、万里の乗船した舟は水漏れがひどい舟であった。この舟に乗船していた従者の禅僧忠公が腰につけていた椰子の実でできた碗で舟の水を汲み出している。この記事から、この当時の禅僧が椰子の実の碗を使用していたことがわかる。

B は、延徳 4 年 1 月 15 日以前に鵜沼にあった茶店で新茶を飲む場面の記事である。この記事によれば、茶店の店主が「お茶を飲むには鷗鳩斑のある茶碗がよい」と語ったことをうけて、万里が「店主は軒先の北側にある庭園で新茶をのませようと誰かを待っている。その茶碗は中国饒州産の茶碗で、新しい鷗鳩斑があり、大変美しい」との漢詩を作っている。

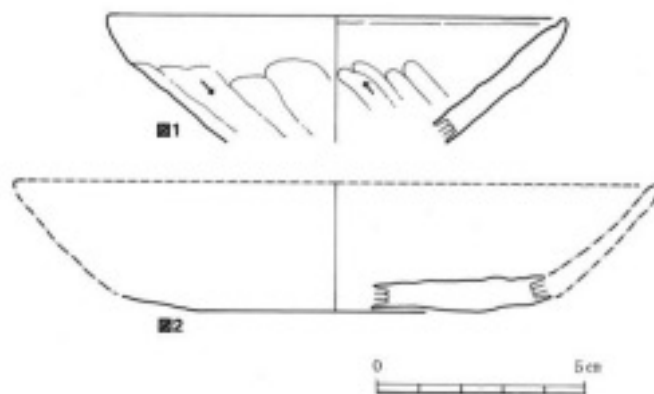
C は、明応 2 年 1 月 5 日に万里が中国饒州産の鷗鳩斑のある茶碗で茶を飲む記事である。この記事に書かれた漢詩によれば、万里が茶を飲むのに使用した茶碗には鷗鳩斑があり、中国湖西省の山である蒼梧にかかる雲の絵付けがあったことがわかる。

中国饒州産の茶碗は、足利将軍に仕える阿弥衆が編纂した『君台観左右帳記』の江戸期の写本ではあるが、文明 8 年 (1476) 3 月 12 日に能阿弥が大内左京大夫に与えたとの奥書がある「慶応美本」(慶応大学美学研究室本)によれば、「饒州磁 薄く白々として、内に細やかに花鳥の紋ありて、内外透通るを、にようしうわんといふ」とある(矢野環『君台観左右帳記の総合研究』所収写真、勉誠出版、1999 年)。この記事より、中国饒州産の茶碗は薄く白い茶碗で、内側に花鳥の絵付けのある茶碗と認識されていたといえる。したがって、B・C の記事に登場する中国饒州産の茶碗も白い茶碗で、茶碗の内側に蒼梧にかかる雲などの絵付けが施されていたことが想定される。

2004年10月23日の新潟県中越地震により、古志郡司長尾氏の居城、栖吉城跡（長岡市栖吉町）にも甚大な被害が生じた。一方、雪解け後の2005年5月25日の調査で、重要なデータを得ることができたため、ここに報告し、多角的な研究視点が創造されることを期待する。

図3では斜面崩壊・開口亀裂が生じた箇所、図1・2では「主郭」北側の斜面崩壊部（図3B）で採集した土師質土器皿（15世紀後半）2個体を図示した。なお、図3Aでも瀬戸美濃焼天目茶碗（16世紀）・唐津焼碗（近世）の細片を採集することができた。栖吉城跡で採集された遺物の初例である。図2の平底の底部切り離しは「ヘラ切り」で、城下の集落遺跡で確認されている「回転糸切り」と異なる初例。天目茶碗は、城下の集落遺跡では出土例が少ない国産品である。

その他、①「主郭」の開口亀裂で生じた断面土層の観察結果から、推定遺物包含層は、現地表面の約30cm下に約5cmあること、②「第三郭」土塁部の石垣の石材が、「詰ノ城」南東斜面崩壊部で確認した地山基盤層に含まれる礫と同質の安山岩であることを、成果として得ることができた。



世良田諏訪下遺跡は、群馬県太田市（旧尾島町）世良田にある約 250,000 m²の遺跡である。発掘地点およびその周辺は大間々扇状地の末端にあり、西に早川、北に石田川、南には利根川が流れている（図1）。遺跡周辺には古墳時代後期から平安時代にかけて営まれたムラの遺構が多数検出されている



図1 遺跡位置図（『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会、1998 年より転載）、1 が世良田諏訪下遺跡、7 が長楽寺、8・9 が世良田東照宮のある位置

る。また遺跡の西側には長楽寺およびその門前の世良田宿や、徳川氏にかかる遺跡も発掘されている。

本遺跡は新田荘域の中でも新田義重義状（史料纂集『長楽寺文書』122 号文書）にみる「こかんのかうかう」（空閑の郷々）の一部で、12 世紀に大規模開発が行われた地に比定されている。こうした立地条件から、遺跡周辺は河川交通の要衝として物資の集散地付近であったと考えられている。

さらに山本隆志「鎌倉後期における地方門前宿市の発展 ―上野国世良田を中心に―」（『歴史人類』17、1989 年）では、世良田宿は長楽寺支配下であって十三世紀半ばに成立したと考えられること、またその中で市が形成されており、有徳人が多数いたことなどが指摘されており、本遺跡付近は中世においても発展した地域であったといえる。

本遺跡は 5 世紀後半頃から 19 世紀までの遺物・遺構が認められ、時代的にも広範囲であるが、中世に関するの遺構・遺物の性格としては私的な館跡とされており、立地条件からも居館跡、とくに方形館の初現的形態と考えられている。

ただし、本稿が対象とする卒塔婆はすべて遺跡のやや東南に位置する溝状遺構（C-21 地点）から検出されており（図 2）、居館跡との関わりは必ずしも明確ではない。また、この遺構は出土陶器の時代から 14 世紀前半と判断されており、卒塔婆の書体等からも 14 世紀前半と考えることに問題はないと

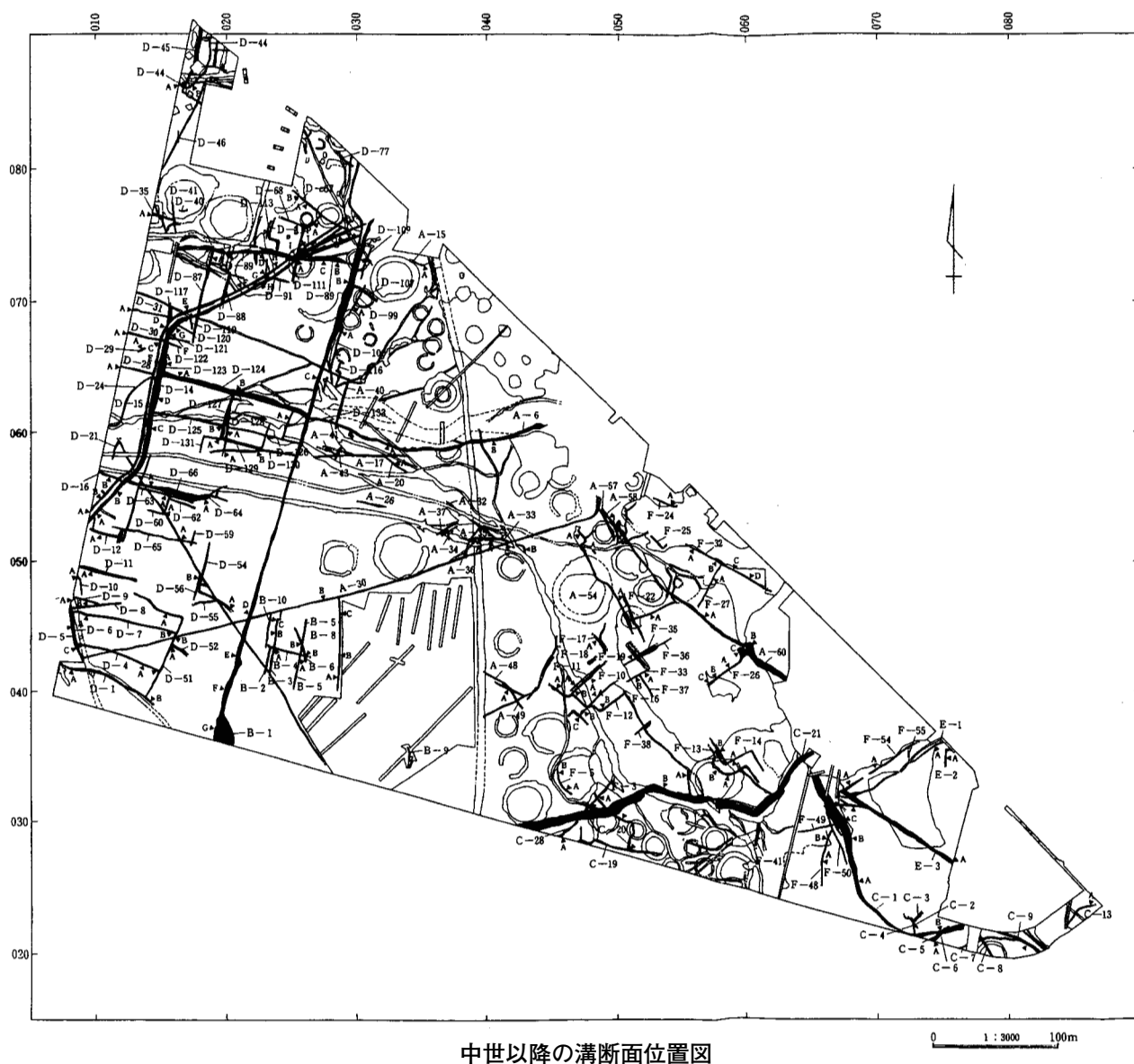


図 2 世良田諏訪下遺跡中世以降の溝断面位置図（『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会、1998 年より転載）、遺跡東南部のやや蛇行している溝が C-21

思われる。

C-21 遺構については、その西側延長線上に世良田宿の中心部がある点から、西の早川口を取水口として世良田宿を通り、石田川に水を落とす運河的役割を持っていたとする指摘（須永光一「世良田諏訪下遺跡」(『発掘速報展'96』図録、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財発掘調査センター、1996年)）がある。卒塔婆は溝内で点々と出土しているという状況であり、運河的な流路に流されたものと判断できるであろう。

また山本前掲論文では、世良田宿住人は武士的外観をした俗人で、集団を形成して法会を営んでいた、とする。これらを重視すれば、出土卒塔婆についても、こうした宗教的行事に関するものと位置づけて、世良田宿住人による祭事、あるいは長楽寺の行事等に関わって使用され、廃棄されたものという可能性を考えるべきであるかもしれない(図3)。なお長楽寺の行事については、前嶋「長楽寺の行事・仏事について」(史料纂集『長楽寺永禄日記』、2003年)等を参照いただきたい。

これら遺跡発掘の成果は群馬県尾島町埋蔵文化財発掘調査報告書13『世良田諏訪下遺跡・歌舞伎遺跡』(尾島町教育委員会、1998年)に詳しく記載されている。また、三浦京子「世良田諏訪下遺跡」(『木簡研究』15、1993年)、前掲群馬県立歴史博物館展覧会『発掘速報展'96』図録にもこれら遺物に関する詳しい記述がなされている。

遺跡からは2819点の遺物が出土しており(うち中世以降の遺物が1677点)、古墳時代の埴輪等については県指定文化財に指定されている。これら出土遺物のうち、C-21遺構から出土した木製品は510点あり、そのうち文字の記された卒塔婆は265点見られる。そこで、これらについて紹介することと

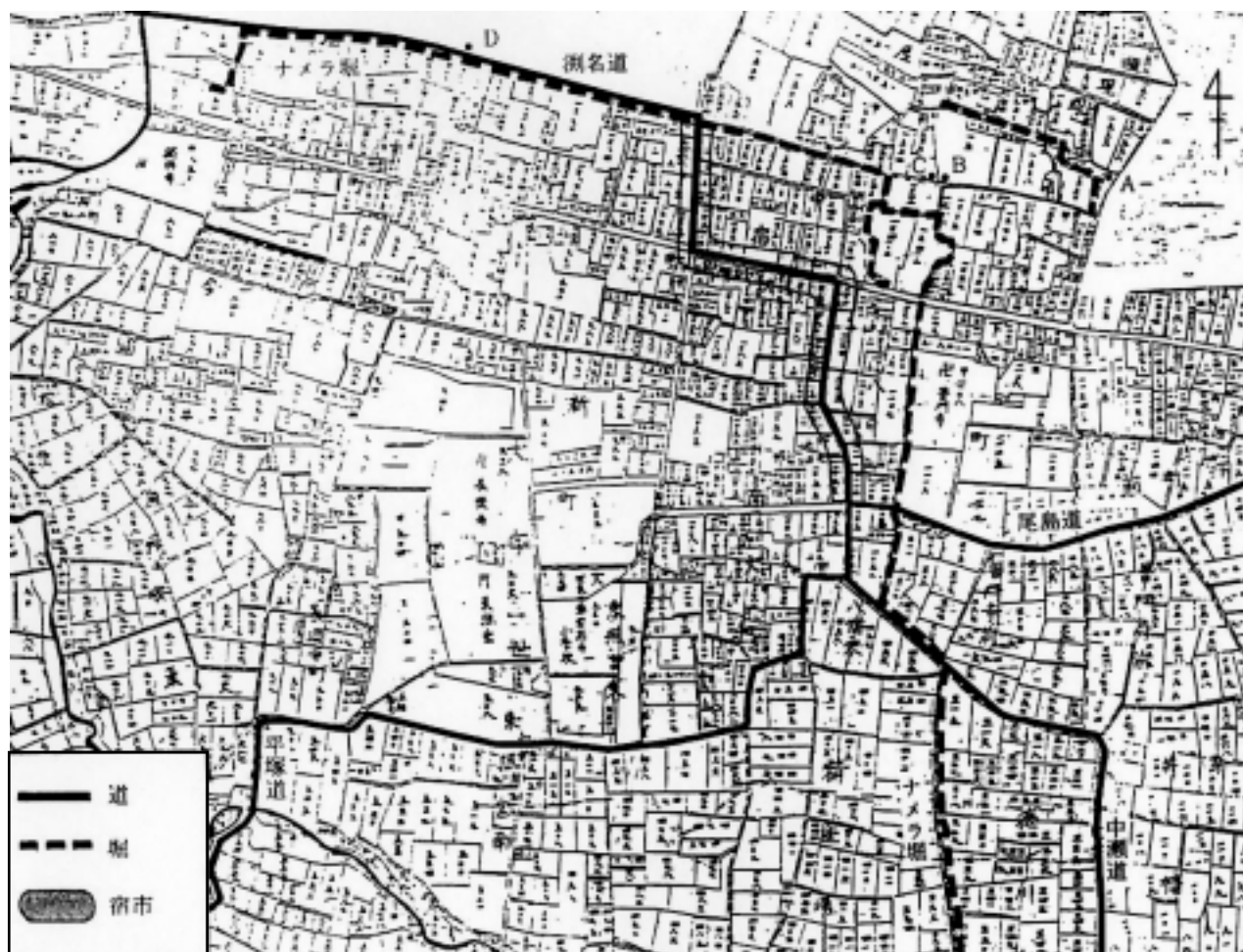


図3 世良田宿市復元図(山本隆志「鎌倉後期における地方門前宿市の発展―上野国世良田を中心に―」『歴史人類』17、1989年より転載)

したい。なお、文字の記されていないもののうち、形状等からも卒塔婆と判断できるものも多数見られるが、これについてはここでは除外する。

なお、本稿では判読できないかあるいは破損等によって文字が欠損しているかについて問わず、判読した文字のみで類別しているので、留意されたい（判読できない文字については*で記した）。

①「南無大日如来」・「南无大日如来」（106 点）

「南無大日如来」（16 点）、「南无大日如来」（8 点）

「南無大」（2 点）、「南無大日」（3 点）、「南無大日如」（2 点）、「無大日如来・无大日如来」（各 2 点）、

「大日如来」（4 点）、「日如来」（1 点）、「如来」（4 点）、「来」（3 点）

「南無大日如来 ***」（2 点）、「南无大日如来 ***」（1 点）

「南 如来」（1 点）

バン（梵字）南無大日如来（25 点）、南无大日如来（12 点）

バン（梵字）南無大日如来***（1 点）、南无大日如来（1 点）

バン（梵字）南無大日（1 点）、南无大（1 点）、南无 如来（1 点）、如来（1 点）

キャ（梵字）南無大日如来（10 点）・南无大日如来（2 点）

キヤク（梵字）南無大日如来（1 点）

キリーク（梵字）南無大日如来（カ）（1 点）

ア（梵字）南無大日如来 ***（1 点）・南无大日如来（1 点）

キリーク（梵字）バン（梵字）南无大日如来（1 点）

不明（梵字）南無大日如来（1 点）

（頭部墨彩）南無大日如来（1 点）

・バン（梵字） 不明（梵字）

・バン（梵字）南無大日如来 （1 点）

本遺跡出土卒塔婆のうち、その大半を占めるのが「南無大日如来」と記すものであり、文字を判読できるもののうち、47.5%がこの部類に含まれる。

また、この中でも梵字を併せて記すものが多いが、各所で多数見られる「バン」以外に「キャ」や「キリーク」などを記したものも複数見られる。

なお、頭部に墨彩を施した卒塔婆も 1 点であるがここに見ることができる。新潟県新潟市（旧白根市）浦廻遺跡出土卒塔婆と同様、注目すべきであろう。

②「南無阿弥陀仏」・「南无阿弥陀仏」（16 点）

「南無阿弥」（1 点）、「無阿弥陀」（1 点）、「阿弥陀」（1 点）、「陀仏」（1 点）、「仏」（1 点）

バン（梵字）南無阿弥陀仏（3 点）

バン（梵字）南無阿（1 点）、南无阿（2 点）

キャ（梵字）南無阿弥陀仏（1 点）

キリーク（梵字）南無阿弥陀仏（1 点）

・南無阿弥陀仏

・南無阿弥陀 (1 点)

・バン (梵字) 南无

・南无阿 (1 点)

・バン (梵字) 南無阿弥陀

・南无阿弥陀 (1 点)

「南無阿弥陀仏」と記された卒塔婆は本遺跡中には多く見ることができないが、両面に「南無阿弥陀仏」と記したものなどは注目できよう。さきの「南無大日如来」では、両面に記したものは 106 点中 1 点にすぎないが、「南無阿弥陀仏」では 16 点のうちに 3 点の卒塔婆を見ることができる。

③「南無妙法蓮華経」(3 点)

バン (梵字) 南無妙法蓮華経 (2 点)

南無妙法蓮華経 *** (1 点)

「南無妙法蓮華経」と記した卒塔婆に梵字を付す事例は本遺跡中ではほとんど見られない。その意味でも本卒塔婆の位置づけは重要であろう。

④「南無」「南无」(14 点)

南 (1 点)

南無 (3 点)

南无 (3 点)

バン (梵字) 南 ** (2 点)

バン (梵字) 南無 ** (2 点)

バン (梵字) 南无 (1 点)

キャ (梵字) 南无 (1 点)

・*南*

・*** (1 点)

⑤梵字のみ(84 点)

○1 字 (19 点)

バン (14 点)

キャ (2 点)

ラ (3 点)

○2 字(25 点)

バン バン (9 点)

バン ア (2 点)

バン ラ (4 点)

バン *	(3 点)
* バン	(1 点)
ウン ラ	(1 点)
ウン *	(1 点)
カン *	(3 点)
* カ	(1 点)

○3字(24 点)

バン ラ カ	(6 点)
バン バン バン	(1 点)
バン バン カ	(1 点)
バン キリーク *	(1 点)
バン バク *	(1 点)
バン カ *	(1 点)
バン * *	(3 点)
キャ カ ラ	(1 点)
キリーク サ サク	(1 点)
キリーク バン ラ	(1 点)
キリーク * *	(1 点)
ウー * *	(1 点)
カン * *	(1 点)
キャ * *	(1 点)
* ウン カン	(1 点)
* サ サク	(1 点)
* バン ラ	(1 点)

○4字(7 点)

バン キリーク サ サク	(2 点)
バン キリーク アーク サク	(1 点)
バン * * *	(2 点)
キャ カ ラ *	(1 点)
キャ カ * *	(1 点)

○5字(6 点)

バン カ ラ バン *	(1 点)
キャ カ ラ バ ア	(1 点)
キャ カ ラ * *	(2 点)
キャ カ * * *	(1 点)
キリーク サ サク * *	(1 点)

○その他(4 点)

バン (その他不明) (1 点)

・バン バン

・バン バン (1 点)

・バン キリーク サ サク

・バン キリーク サ サク (2 点)

本遺跡出土卒塔婆では、多様な梵字が用いられており、注目される。その中でも「キリーク サ サク (阿弥陀三尊)」の上にバン (大日如来) を付すものや、塔婆で一般的に用いられる「キャ カ ラ バ ア」(塔婆種子、表〔発心門〕) と考えられる卒塔婆は複数に見ることができる。また、この中には刷毛書きをしたものも複数見られることも注目すべきであろう。

⑥墨痕等文字の記された跡は見られるものの、判読不能 42 点

本遺跡出土卒塔婆においては、判読できる文字においては、ほとんど「南無大日如来」「南無阿弥陀仏」等であり、経典を引用したようなものは一点も見あたらなかった。類似した形態でかつ同じ書体の卒塔婆も認められる。溝状遺構から点々と出土したため、一括では出土しておらず断定はできないが、こうした諸点からは一括して使用されていた可能性も考えられよう。

発行 中世考古学文献研究会 (文部科学省科研特定領域研究「中世考古学の総合的研究-学融合を目指した新領域研究-」B:学融合方法研究部門 B01 学融合方法論研究 (人文科学系)) B01-1「中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究」グループ)

事務局 〒950-2181 新潟市五十嵐 2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

土蔵・埴列建物研究の意義—学融合研究の視点から—

矢田俊文（新潟大学人文学部）

1 文献にみえる蔵

(1) 室町期京都の土倉と建物研究

文献史学の立場から建物としての土蔵の歴史について論じた研究に桑山浩然氏の土倉研究がある（桑山浩然 2006）。桑山氏の土蔵の歴史の説明は、以下のようなものである。

平安期には蔵書家を以て世に聞えた藤原頼長が特に造らせた書庫があるが、屋根は瓦葺、四方は板で囲い、その上に石灰を塗り、戸には更に剥落しないように蠣殻を塗る程度のものであった。当時の倉庫は災害に対しては無力なもので、このような倉庫建築に一時期を画したのは商人であった。その時期は恐らく平安末から鎌倉期にかけてであろう。

この時期は、まだ後代の土蔵造のように堅固な構造のものとは思えないが、少なくとも、板倉よりは火災にも盗難にも強かったであろう土倉によって、商人はその財産を保護した。

南北朝期に入ると、財産保管の良い手段を持たない公家や庶民は、自己の財産をこの土蔵に預けることを始める。南北朝初期の紛失状には、そのような状況がはっきりうかがわれ、更に、物品だけでなく、金銭の保管をも依頼するようになる。

桑山氏の説明を要約すれば以上のようなものとなる。桑山氏は、南北朝期以降、商人が堅固な土蔵を造り公家・庶民の財産を保管するようになったことと、この時期、商人である土倉が成立したことを同時期のこととして考えようとしている。

(2) 塗籠と倉

財産の保管機能をもつ建物は、倉とのみ呼ばれていたのではない。塗籠と呼ばれる建物もあった。

a 寛元4年（1246）11月日仁和寺用途支配状（1）

「自御倉沙汰」「自御塗籠沙汰」

b 嘉元3年（1304）9月13日越前国坂北荘年貢課役注進状（2）

「北御倉」「御塗籠」

a・bの倉・塗籠はともに年貢の収納場所を示している。a・bを見ると、倉と塗籠が同様の機能を持っていたこと、そして倉と塗籠はそれぞれ別の用語で表現されていたことがわかる。

c 「尋尊大僧正記」明応8年（1499）4月8日条（3）

一、興舜寺主青侍入道〈源光〉在所先日入小恣（盗）人、釜内之サラシ布數十反取之、方々挑方可如何哉之由、衆中辺披露、種々及評定、所詮挑手共令同道可出集会所、可有■文旨一決

了、ヌリコメニ置分之布ハ無相違之間、主方ニ可渡之云々、彼源光八十四五老者也、一段不便之間、可及此成敗歟」(注) ■は、口+告。

c は、盗人が入りサラシ布敷 10 反を盗んでいったが、「ヌリコメ」に置かれていた布は無事であったとある。盗難からまぬがれた「ヌリコメ」は、蔵と考えて間違いないだろう。また、「ヌリコメ」の蔵なのであるから、「ヌリコメ」は壁に塗り込まれた土蔵であったと考えてよからう。

d 「反古裏書」(4)

然トモ今度永禄七年ノ火難、法安寺焼失、退転ニ及フヘカリケレトモ、御宥免ノ芳恵、諸僧モ仰宗アルヘキ事ナルヲヤ、彼寺ノ御本寺薬師如来ハ年序ヲ経トイヘトモ開帳ノ義ナシ、コノ度ノ炎上ニ真像出現シタマフ、脇士四天マテ皆土仏ニテ在ス、若土仏ナラスハ争カ形像アヒノコルヘキヤ、本尊ノ面白ハアサヤカニ顕レ玉フ、ヌリコメノ内ニ安置アリト云々、ヤカテヌリコメニマタオサメ奉侍ル

同史料は永禄 11 年(1568)に蓮如四男蓮誓の子顕誓によって著述されたもので、法安寺は大坂本願寺の近くにある寺院である。d から、法安寺の本尊は開帳が行われず、「ヌリコメ」に安置されていたことがわかる。d の記事から、「ヌリコメ」が火事に強い建物であったことがわかる。火事に強い建物であるから、「ヌリコメ」は塗籠が施された土蔵であったと考えてよからう。

以上のことから、中世の塗籠と呼ばれた建物は倉と同じ機能を持ち、さらに火事や盗難に強く、壁に塗籠が施された土蔵であったと考えることができる。

(3) シロの蔵

次にシロの蔵について考える。e～f はシロの蔵が記される文書である。

e (元亀 3 年, 1572) 5 月 24 日直江景綱・山吉豊守宛鯉坂長実書状 (5)

「已前御蔵衆迄申候鉄砲之玉葉」

e から、越後上杉家では、御蔵衆が鉄砲の玉葉を管理していたことがわかる。このことから、鉄砲の玉葉は蔵に収納されていたと考えて間違いないだろう。

f 天正 6 年(1578) 5 月 5 日とめ張宛河隅忠清・飯田長家連署状 (6)

「とそう(土蔵)一紙」

f から、上杉家の土蔵には黄金が収められていることがわかる。

g 天文 13 年(1544) 閏 11 月 18 日恵良若狭守ほか六名宛大友義鑑書状 (7)

「土蔵之材木」

g は、豊後大友氏が土蔵建築用材木の調達を玖珠郡の家臣衆に命じたものである(鹿毛敏夫 2006)。e・f は上杉謙信・景勝と関わる文書、g は大友氏と関わる文書なので、ここに現れる蔵・土蔵はシロの蔵と考えてよからう。また、鉄砲の玉葉を保管している場所は、櫓(矢倉)である可能性もある。鉄砲の玉葉を保管するのであるからその蔵は土蔵の可能性が高い。e・f・g から、戦国期権力は、土蔵を作り、鉄砲の玉葉や黄金を収納していたことが確認できる。

2 考古学の成果と問題点

(1) 埴列建物研究の現段階

城郭遺構である大内氏館(山口県山口市)・感状山城(兵庫県相生市)・置塩城(兵庫県夢前町)・御着城(兵庫県姫路市)・枝吉城(兵庫県神戸市)・端谷城(兵庫県神戸市)伊丹城(兵庫県伊丹市)・高

屋城（大阪府羽曳野市）・若江城（大阪府東大阪市）では、塙列建物が検出されている（置塩城跡調査委員会 2002、神戸市教育委員会 2005）。この塙列建物は、城の蔵の可能性が高い。

城の蔵以外でも、草戸千軒、京都、堺、摂津平野で塙列建物が検出されている（大阪市文化財協会 1999、鈴木康之 2001・2005、續伸一郎 2001・2004・2005、土井和幸 2002、小谷正樹 2005、堺市博物館 2006、山本雅和 2002、広島県立歴史博物館 2004、国立歴史民俗博物館 2005）。城以外で塙列建物が検出される地点は集散地である。この草戸千軒、京都、堺、摂津平野の塙列建物も土蔵の可能性が高い。

大内氏関連町並遺跡でも塙列建物が出土している。大内氏館だけではなく、町でも土蔵が作られていた（8）。

3 土蔵・塙列建物研究の課題

(1) 土蔵と櫓（矢倉）

すでに私は、近世初期道具帳の検討から、シロの櫓（矢倉）には、武具だけではなくさまざまなものを収納していることを明らかにしている（矢田俊文 2006）。近世初期の櫓は土蔵としての役割をはたしていた。土蔵と櫓を区別して研究をしない方がいいのではなかろうか。大内氏館のように平地のシロにも土蔵はあった。上記の塙列建物である櫓は土蔵と同様の機能を持つものとして議論すべきであろう。

(2) 中世前期の倉・塗籠と中世後期の土蔵

先に紹介したように、桑山氏は、中世前期の蔵は、財産保管機能を果たすには十分なものではなく、南北朝期頃から、商人によって堅固な土蔵造りが完成し、火災・盗難から守られる建物が出来上がったとする。果たして、それは考古学・建築史研究の側から考えると正しい理解であろうか。

桑山氏は、藤原頼長が特に造らせた書庫の屋根は瓦葺、四方は板で囲い、その上に石灰を塗り、戸には更に剥落しないように蠣殻を塗る程度のものであったとするが果たしてそうなのか。考古学・建築史研究の理解とそれは合致する理解なのであろうか。これらの課題は文献史学だけでは明らかにできない課題である。

(3) 西日本の土蔵（塙列建物）と東日本の土蔵

今日紹介した考古学の事例をみると、東日本では現時点では塙列建物の報告例がない。これは何を意味するのであろうか。今日紹介した史料 e・f は東日本の土蔵の文献事例である 16 世紀後半の文書ではあるが、東日本のシロに土蔵があったことがわかる史料である（9）。東日本に土蔵造りの建物がなかったとは考えにくい。現在西日本で出土している土蔵は、塙列建物のなかから選択された遺跡である。東日本で塙列建物が出土しないことと土蔵が存在しないことは同じ問題ではない。中世東日本の土蔵の問題は独自に考えなければならない課題である。

注

(1) 仁和寺文書『鎌倉遺文』6766 号

(2) 東山御文庫記録『福井県史資料編 2 中世』

(3) 『大乘院寺社雑事記』。片桐昭彦氏のご教示による。

(4) 『真宗史料集成』第 2 巻。片桐昭彦氏のご教示による。

- (5) 上杉家文書『上越市史 別編 1 上杉氏文書集一』1101 号
- (6) 伊佐早文書『上越市史 別編 2 上杉氏文書集二』1495 号
- (7) 大友文書録『増補訂正編年大友史料』18
- (8) 大内氏関連町並遺跡・大内氏館の埴列建物については、古賀信幸氏のご教示による。
- (9) 皆川義孝氏は、長享元年（1487）10 月 22 日、江戸城の城壁を塗るための土が品川から小舟で運ばれたことを明らかにしている（皆川義孝 2004）。

（参考文献）

- 伊藤ていじ 1980, 「都市の蔵」川添登編『蔵』文藝春秋
- 太田静六 1959, 「文倉と防火対策」『日本建築学会論文報告集』63
- 大阪市文化財協会 1999 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告一1996 年度一』
- 置塩城跡調査委員会 2002 『置塩城跡総合調査報告書』夢前町教育委員会
- 鹿毛敏夫 2006, 『戦国大名の外交と都市・流通』思文閣出版
- 桑山浩然 2006, 『室町幕府の政治と経済』吉川弘文館
- 神戸市教育委員会 2005, 『端谷城跡ー平成 17 年度現地説明会資料ー』
- 国立歴史民俗博物館 2005, 『東アジア中世海道』国立歴史民俗博物館
- 小谷正樹 2005, 「埴列建物の基礎を発見!ー焼けた柱がそのままー」『堺埋蔵文化財だより』18
- 堺市博物館 2006, 『茶道具拝見ー出土品から見た堺の茶の湯ー』
- 鈴木康之 2001, 「中世の町における建物復原をめぐってー広島県草戸千軒町遺跡の出土資料からー」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』（1998 年度ー2000 年度科学研究費補助金〈基盤研究 A [1]〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄）
- 鈴木康之 2005, 「草戸千軒をめぐる流通と交流」柴垣勇夫『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房
- 土山健史 1992, 「埴列建物について」『関西近世考古学研究』3
- 續伸一郎 2001, 「堺の町と町家」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』（1998 年度ー2000 年度科学研究費補助金〈基盤研究 A [1]〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄）
- 續伸一郎 2004, 「堺環濠都市遺跡-SKT263 地点-立会調査報告」『堺埋蔵文化財だより』17
- 續伸一郎 2005, 「堺環濠都市遺跡-SKT263 地点-立会調査報告Ⅱ」『堺埋蔵文化財だより』18
- 土井和幸 2002, 「会合衆の会所跡か?ー堺環濠都市遺跡 263 地点の調査成果ー」『堺埋蔵文化財だより』16
- 広島県立歴史博物館ほか 2004, 『津々浦々をめぐるー中世瀬戸内の流通と交流』
- 皆川義孝 2004, 「中世考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・江戸城の城壁」『中世考古学文献研究会会報』2
- 矢田俊文 2006, 「考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵」『中世考古学文献研究会会報』6
- 山上雅弘 2005, 「関西周辺の戦国末期城館における建築技術動向」『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会
- 山田幸一 1981, 『壁』法政大学出版局
- 山田幸一 1985, 『物語ものの建築史 日本壁のはなし』鹿島出版社
- 山本雅和 2002, 「中世京都のクラについて」『研究紀要』8, 京都市埋蔵文化財研究所
- 夢前町教育委員会 2006, 『播磨置塩城跡発掘調査報告書』

1 草戸千軒町遺跡について

草戸千軒町遺跡は、広島県福山市草戸町に所在する中世の集落遺跡である。1920年代から30年代にかけて実施された芦田川の改修工事の際にその存在が明らかになり、1961年に最初の発掘調査が実施された。その後、芦田川の河川整備事業の一環として、遺跡の存在する芦田川中州を掘削する計画が当時の建設省により策定され、そのための事前発掘が1994まで行われた。

発掘調査終了後、遺跡包蔵中州の大部分は掘削されたため、現在では現地で遺構等を目にすることはできない。ただ、集落の範囲は中州の外にも及んでおり、未調査の河川高水敷や堤防の下、あるいは堤防外側の市街地に遺構が残されている可能性は高い。また、遺跡西側の丘陵裾にある明王院は、中世には常福寺と呼ばれた西大寺流律宗の寺院であり、現存する国宝の本堂・五重塔はそれぞれ元応三年（1321）・貞和四年（1348）に建立されたもので、のちに「草戸千軒」⁽¹⁾と呼ばれることになる集落とも密接な関係があったと考えられる。

30年以上にわたる発掘調査の成果は、5冊からなる報告書にまとめられているほか〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1993・1994・1995a・1995b・1996〕、その概要を紹介した刊行物も出版されているので〔松下編 1994、岩本 2000〕、ここで詳しくは述べない。本稿の内容に関わる点について若干触れるならば、13世紀中頃に成立して16世紀初頭まで存続した集落であること、その間の変遷が表1のように大きくは7段階で把握でき、14世紀後半を中心に集落が停滞、あるいは衰退した時期のあることなどが明らかになっている。また、この集落が芦田川の河口近くに位置する港湾集落として福山湾岸から芦田川中・下流域の地域経済拠点の役割を果たし、備後南部の陸上・河川交通を瀬戸内海航路に結びつける結節点であったこと、備後の要港である鞆と結びつくことによってその役割を果たすことが可能になったことなども明らかになったが、これらの論点については別稿にもまとめている〔鈴木 2005〕。

2 草戸千軒の倉庫建築

地域経済拠点としての集落の役割を考える上で重要な遺構の一つが、倉庫建築の遺構である。出土木簡の分析などから、この集落では活発な商品・金融取引が行われていたと同時に、これらの事業を展開する人々が食品加工や味噌の醸造などに関わった可能性も指摘されている〔広島県立歴史博物館編 2000〕。商品・銭・文書などの保管、あるいは食品加工や醸造のために、こうした倉庫建築が用意されていたことが想定できる。

これまでの分析から、遺跡内にいくつかの倉庫建築の可能性のある建物跡が存在することが指摘されているが、その中でも比較的残りが良く、建物の構造や機能などを考える手がかりが残されている二つの事例を、ここでは紹介する。

(a) SB4445・4444

【場所】

まず一つは、遺跡南部の短冊形地割が展開する区域で検出された2棟の掘立柱建物跡である（図1）。この区域

表1 草戸千軒町遺跡の時期区分

時期		暦年代
Ⅰ期前半		13世紀中頃
Ⅰ期後半		13世紀後半
Ⅱ期前半		14世紀初頭
Ⅱ期後半	古段階	14世紀前半
	新段階	
	最新段階	
Ⅲ期		15世紀前半
Ⅳ期前半		15世紀後半
Ⅳ期後半	古段階	15世紀末
	新段階	16世紀初頭

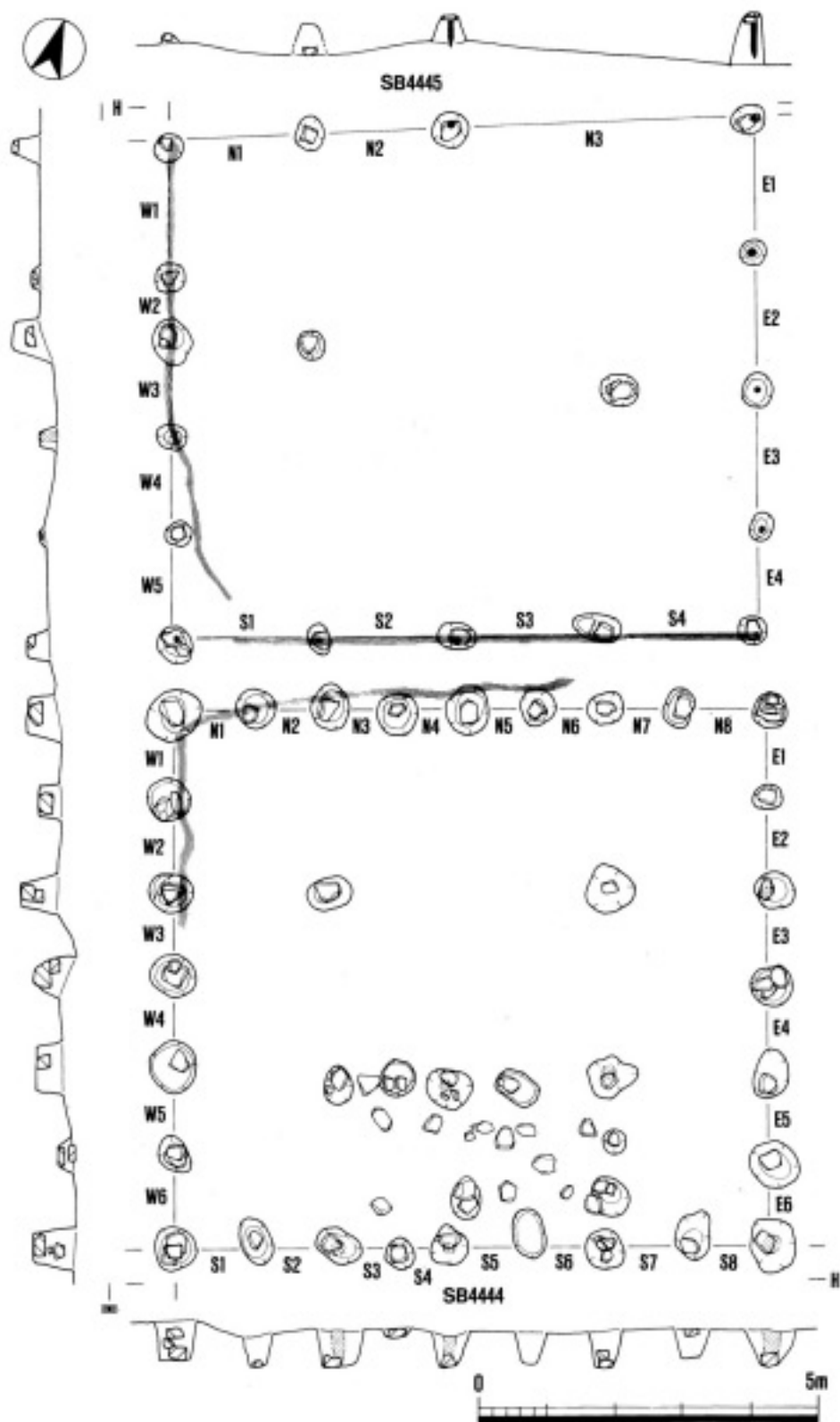


图2 SB4445·4444 平面图

表2 SG4415 出土土器・陶磁器の比率

器種	SG4415(Ⅱ後古)		SK3600(Ⅱ後古)		SD3190(Ⅱ前)		SK1300(Ⅱ後新)	
	重量(kg)	重量比(%)	重量(kg)	重量比(%)	重量(kg)	重量比(%)	重量(kg)	重量比(%)
土師質土器 椀杯皿	32.62	18.8	77.54	65.7	365.90	79.2	1257.91	89.3
土師質土器 鍋釜	0.60	0.3	2.34	2.0	17.52	3.8	45.82	3.3
土師質土器 かまど	0.28	0.2	0.14	0.1	6.56	1.4	1.92	0.1
備前焼 壺甕	115.72	66.8	27.60	23.4	12.78	2.8	61.88	4.4
備前焼 播鉢	5.04	2.9	3.28	2.8	3.16	0.7	17.86	1.3
常滑焼 壺甕	7.46	4.3	3.86	3.3	17.66	3.8	15.74	1.1
常滑焼 播鉢	0.00	0.0	0.00	0.0	2.30	0.5	0.00	0.0
亀山焼 壺甕	0.36	0.2	0.62	0.5	14.68	3.2	1.72	0.1
亀山焼 播鉢	0.00	0.0	0.04	0.0	0.10	0.0	0.82	0.1
亀山焼 鍋釜	0.02	0.0	0.00	0.0	0.00	0.0	0.00	0.0
東播系須恵器 壺甕	0.34	0.2	0.01	0.0	0.12	0.0	0.14	0.0
東播系須恵器 播鉢	2.34	1.4	0.49	0.4	7.56	1.6	2.00	0.1
瓦器火鉢類	2.58	1.5	0.20	0.2	11.98	2.6	2.08	0.1
瀬戸焼	0.54	0.3	0.00	0.0	0.08	0.0	0.06	0.0
輸入陶磁器	5.42	3.1	0.06	0.1	1.40	0.3	0.62	0.0
その他	0.00	0.0	1.76	1.5	0.30	0.1	0.24	0.0
合計	173.32	100.0	117.94	100.0	462.10	100.0	1408.81	100.0

受けた壁土塊が出土しているが、細片が多く、下地の構造までは復元できていない。

【関連遺物】

隣接する池状遺構 SG4415 から出土した遺物の多くは、これらの建物に保管されていた物資であったと考えられ、この倉庫の機能を考える上での重要な手がかりとなる。表2には、SG4415 出土遺物の大部分を占める土器・陶磁器類の重量比を示した。参考のために、Ⅱ期前半から後半（14世紀前半頃）にかけてのその他の代表的な遺構での比率も示した。SG4415 出土遺物の特異な点は、通常の遺構で大部分を占める土師質土器の出土比率が極めて少なく、それに代わって備前焼の甕が大半を占めていることにある。また、輸入陶磁器の比率も通常の遺構では1%に満たないが、ここでは3%を超えており、青白磁水注、白磁四耳壺などの優品も含まれている。さらに、同一の器種で完形に復元できるものが複数個体存在していることも特徴の一つである。たとえば、東播系須恵器の播鉢、備前焼の小壺、瀬戸焼の灰釉卸皿などは、同一器種・型式の個体が2～3個体出土している。

多数を占める備前焼の甕については、倉庫における貯蔵・保管容器として利用された可能性が高い。甕の体部外面には部分的に漆を塗ったものが多く、内容物が浸出するのを防ぐ目的があったのではないと思われる。内側ではなく、外側に漆が塗られていることから、埋甕としてではなく、床上に置いた状態でこれらの甕が利用されていたと考えられる。

一方、複数個体が存在する播鉢・小壺・卸皿などについては、商品として倉庫に保管されていた可能性も考えられないではないが、播鉢には使用痕が認められる個体も多く、什器として所有されていた陶磁器がセットの状態でも保管されていたことを想定すべきであろう。

【時期】

SB4445・4444の廃絶時期は、SG4415出土遺物に含まれる土師質土器の型式からⅡ期後半古段階に位置づけられる。また、建物の位置する短冊形の区画はⅡ期後半古段階になって急速に開発が進むことから、成立時期についても同様に、Ⅱ期前半古段階と考えることができる。暦年代については未だ不確定な要素を残すものの、1320年代頃を想定している。

(b) SB1781

【場所】

もう一つの事例は、集落の中心部に存在する礎石建物跡・SB1781である。この建物は、「中心区画」と呼ばれる集落経営において中心的な役割を果たしたと考えられる区域に位置している。この区域の東側には、南北方向に入り込む掘割があり、集落の流通機能に深く関与した場所と考えられている(図5)。

【規模・構造】

SB1781はⅡ期後半に埋め立てられた大規模な池状遺構・SG1791(東西約31m・南北約15m)の上に存在する掘立柱建物である。建物の部分をさらにSG1790として掘り返したのち、人頭大の礫を敷き詰めている(図4)。このSG1790が、建物の基礎を固めるための掘込地業に相当する。建物は、東西4間・南北3間、東西棟の総柱建物である(図6)。建物は焼失したものと考えられ、検出面には黒色の灰層が広がっていた。また、建物跡を中心に壁土塊・生子瓦が大量に出土しており、この建物は土壁をもち、その上に生子瓦を貼った、いわゆる土蔵に復元できる。

壁土塊は、厚さ10cmを超えるものがほとんどである(図7)。当遺跡からは、割板を格子状に組んだ木舞の痕跡をもつ壁土が多く出土しているが、この建物跡から出土する壁土には格子状の木舞は観察できず、確認できる痕跡は板状の痕跡をもつものがほとんどである。そのため、この建物は板壁の上に壁土を塗った、いわゆる木摺下地の土壁であったと考えられる。また、壁土には筋状の繊維痕を多く残しているが、これとは別に長く直線的な繊維圧痕もが確認でき、これらは下地に壁土を貼り付けるための下げ苅の痕跡とも考えられる。また、壁土表面に、漆喰かと思われる白色の上塗りが確認できるものも少数存在する。

一方の生子瓦は一辺30.3cm、厚さ2.3cmほどの正方形の瓦で、四隅近くには焼成前の穿孔をもつものが多い(図8)。ただ、全ての個体に穿孔があるわけではなく、穿孔の確認できないものや、穿孔があっても貫通していない例などもある。この正方形の瓦の寸法や形態は、現在でも土蔵の生子壁



図3 SB1781 全景(南から)



図4 SG1790 全景(東から)



図5 SB1781 周辺遺構平面図 (左が北)

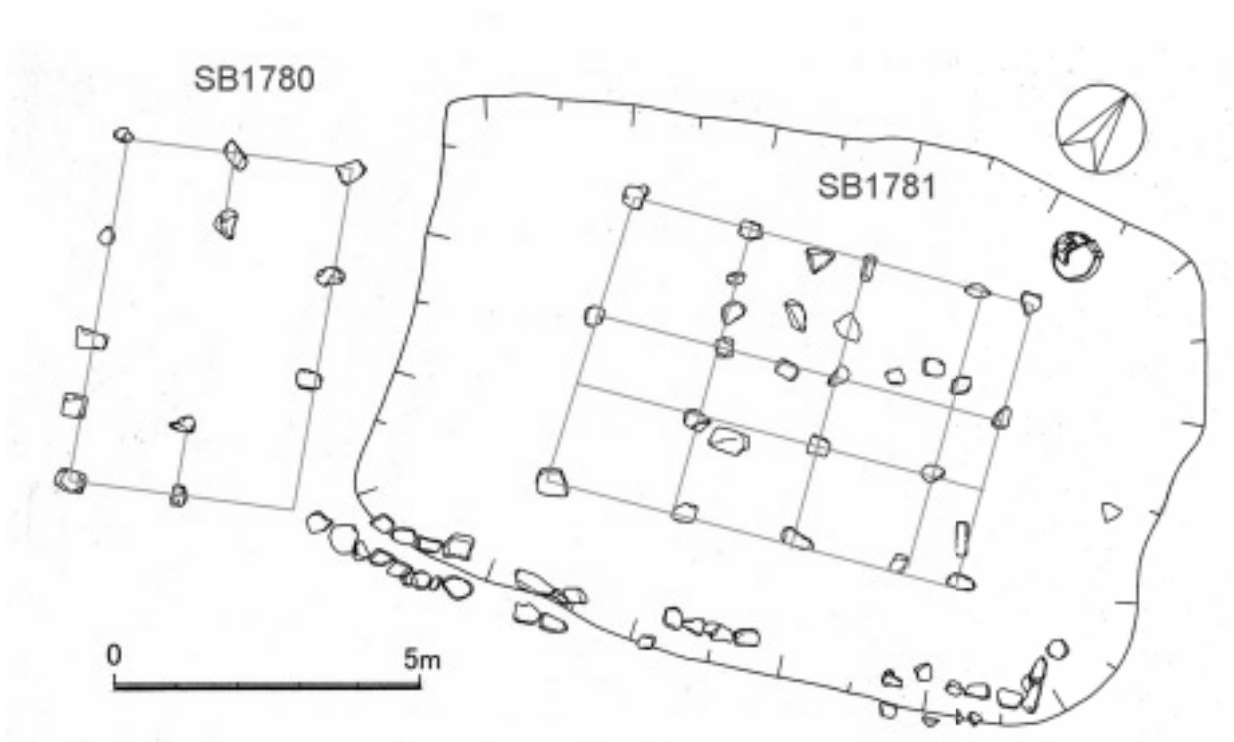


図6 SB1780・1781 平面図

に使われる生子瓦にきわめて近く、それらと同様に土壁の表面に貼られていたと考えられる。四隅の穿孔は、釘によって壁に固定するためのものと考えられ、同様の生子瓦は現在でも鞆（広島県福山市）で使われていることが確認できる（図10）。ただ、出土した生子瓦の表面には漆喰の痕跡が確認できず、近世以降の生子壁のように漆喰を蒲鉾状に高く盛っていたかどうかは明らかでない。また、SB1781周辺から出土している瓦には、丸・平瓦をはじめとする屋根瓦はほとんど含まれておらず、屋根は瓦葺きでなかったと判断できる。

また、建物跡に隣接して常滑焼の埋甕遺構・SX1783が存在し（常滑甕の型式は6型式・13世紀後半）、甕の内部からは生子瓦の破片も出土していることから、建物に付随して埋設され、建物とともに廃絶されたものと考えられる。

【関連遺物】

建物跡の検出面からは若干の土師質土器、中国産の天目碗・茶入、瀬戸灰釉卸皿・仏花瓶といった土器・陶磁器類のほか、多数の銭貨や鉄釘などが出土している。これらの遺物には建物に保管されていたものや、建物の部材として使用されていたものが含まれていると思われるが、後述するように、掘込地業であるSG1790の埋土内の遺物との峻別が十分にできておらず、建物の内容物については今後更に検討を進める必要がある。

【時期】

この建物の成立・廃絶時期については、それを明示する確実な資料がなく、状況証拠から判断するしかない。

まず、建物跡の検出面で出土した土師質土器はIV期前半のものであることや、隣接する掘割がIV期前半に大規模に埋め戻されており、建物がこれらと同時期に廃絶された可能性を考慮すれば、建物が廃絶した時期はIV期前半と考えられる。

一方、成立時期について確実なことは、建物跡の下層にある池状遺構 SG1791 にはII期後半新段階

(1330年代か?)に位置づけられる土師質土器が大量に埋められており、建物の成立時期がこれより新しいことである。また、このSG1791がいったん埋められたのち、SB1781の掘込地業として掘られたSG1790からはⅡ期後半最新段階(1340年代か?)の土師質土器が出土していることから、Ⅱ期後半最新段階にSG1791が掘り返された可能性が考えられる。しかし、この集落ではⅡ期後半新段階に多くの施設が廃絶されたあと、14世紀後半を中心に停滞期、あるいは衰退期を迎え、新たな施設がほとんど構築されなくなっている。そして、Ⅲ期(15世紀前半)になって再び開発が進められており〔鈴木 2004〕、Ⅱ期後半最新段階になって新たに嚴重な基礎をもつ建物が建設された可能性は考えにくい。集落の再開発が始まるⅢ期以降に成立した建物が、Ⅳ期前半の火災によって廃絶したと解釈するのが合理的である。

ただ、掘込地業であるSG1790の埋土からは、前述のようにⅡ期後半最新段階の土器を中心にⅡ期後半新段階の土器が出土するのみで、SB1781がⅢ期に建てられたことを具体的に示す資料は明らかにできていない。古い資料が埋土に含まれるのは、建物の地業工事を行った際に、池状遺構SG1791に含まれていた古い時期の遺物が混入したと解釈することも可能であるが、新しい資料が全く含まれないことをどのように解釈するかは、未解決の問題として残されている。

また、SG1790・1791の堆積状況を再検討したところ、池状遺構SG1791が掘り返されたのは、ここで取り上げた倉庫建築SB1781の地業工事に伴うものが初めてではなく、それ以前にも掘り返されている可能性が明らかになった(図9)。おそらく、SB1781の西に隣接するSB1780を建設する際にも、地盤を安定させる目的で一度掘り返されているらしく、その際にSB1781のある場所にも、これに先行する建物が存在したと思われる。

報告書では、SB1781とSB1780は同時に存在した建物と解釈されているが、図6のように両建物の方向は異なっており、SB1781の雨落溝がSB1780の東南隅を切るような状況が確認できることからSB1781の方が新しいと考えるのが妥当で、SG1790・1791の堆積状況もそのことを示している。



図7 SB1781 周辺出土土壁土塊

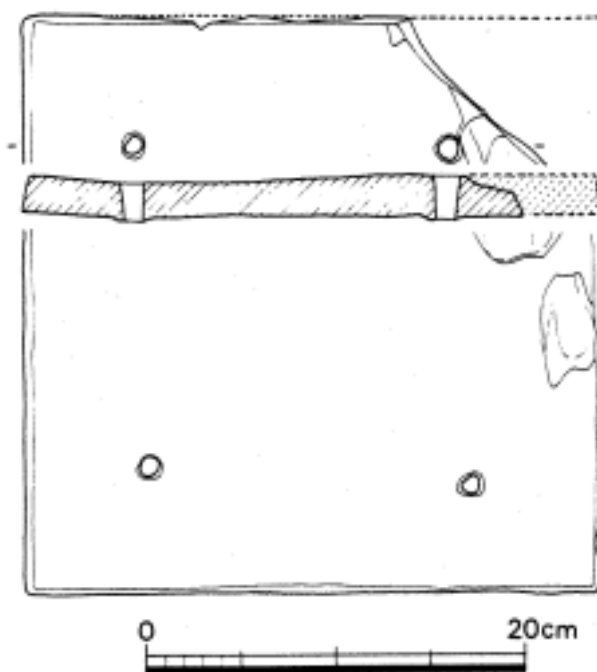


図8 SB1781 周辺出土生子瓦

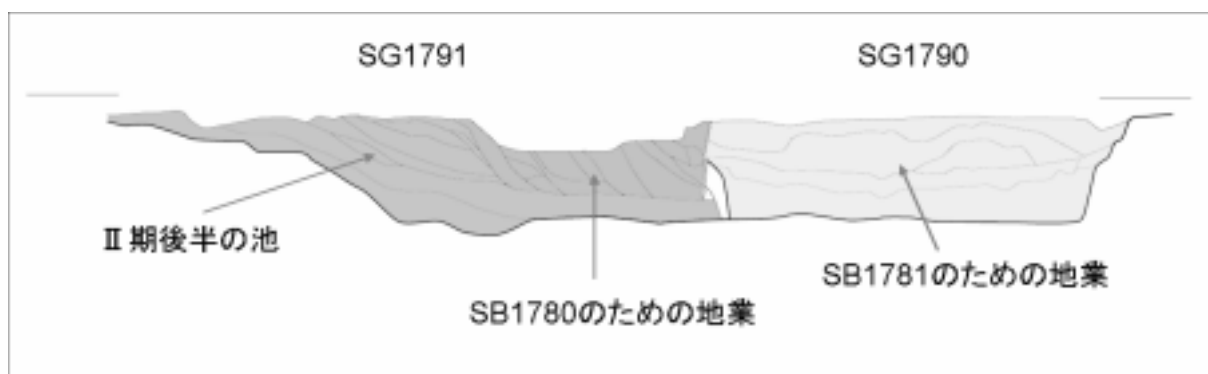


図9 SG1790・1791の堆積状況模式図

3 草戸千軒における倉庫建築の特徴

以上に概略を紹介したように、草戸千軒町遺跡ではⅡ期後半古段階には掘立柱建物の倉庫、Ⅲ期からⅣ期前半には礎石建物の倉庫が確認できる。いずれも地上式の建物で、鎌倉などで確認されている方形堅穴建物のような地下式の建物は確認できない。このような倉庫建築の構造には、集落の性格や地域性が関係している可能性もあるが、それ以外に、芦田川河口に形成された三角州上に位置し、地下水位が高いという集落の立地が影響している可能性も考慮する必要があるだろう。この集落では、地面を掘り込めばすぐにシルト質の土層に達し、水も湧きやすいため、地下式の建物は適さなかったと考えられる。

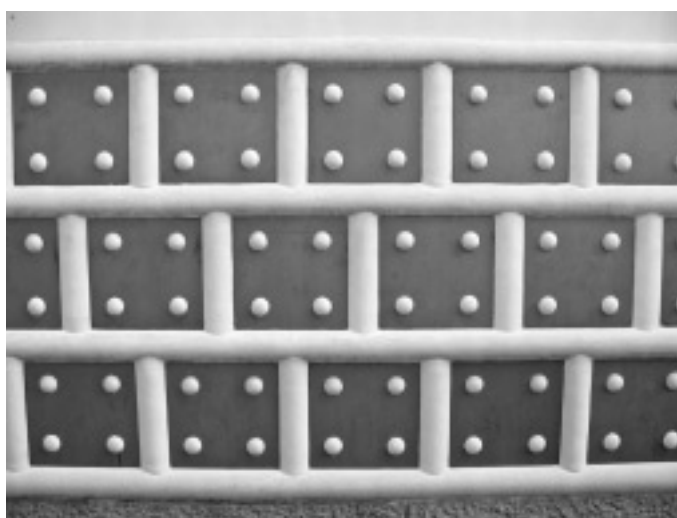


図10 軀における生子瓦の使用法

ここで紹介したわずかな例のみで、この集落における倉庫建築の変遷を十分に論ずることはできないが、SB4444などの例からは、土壁をもつ倉庫が鎌倉時代末期には存在していたことがわかる。ただ、この段階では掘立柱建物で、土壁もその他の建物に比べて特別に厚いものではなかったようである。ところが、15世紀に入ると丁寧な地業を施した礎石建物の倉庫が登場している。土壁も通常の格子状の木舞をもつものより厚く造られ、部分的であったかもわからないが、表面には生子瓦が貼り付けられていた。SB1781周辺以外でも、Ⅲ期からⅣ期にかけての遺構からは生子瓦が若干量出土する例があり、15世紀代には集落内で生子瓦を用いる建物が複数存在していた可能性が考えられる。周知のように、こうした生子瓦は近世以降現代まで引き継がれる土蔵を構成する重要な要素であり、その出自や、戦国期以降の展開を明らかにすることが今後の課題である。

また、SB4444とSB1781は掘立柱建物と礎石建物という違いがあるが、両者の平面には共通点も認められる。それは、SB4444内部の南側中央部分（東から2・3間目）と、SB1781の北側中央部分（東から3間目）にいくつかの扁平な礫が集中していることである。これらの礫の一部は、束柱の礎石として床板を支える役割を果たしたと考えられ、建物の中でもこの部分がとくに重要な役割を果たし、より堅固に造られていたことになる。

4 倉庫建築に関与した人々

ここで紹介したような倉庫建築を建設した主体としてまず考えられるのは、集落に存在したことが想定されている商人・金融業者たちである。とくに、集落の中央近くに位置する「中心区画」と呼ばれる区域では、商品・金融取引を記した木簡がまとまって出する遺構が存在することから、この区域が商人・金融業者たちの活動拠点だったと考えられる。したがって、この「中心区画」に位置するSB1781はそうした人々にとって重要な保管施設の役割を果たしていたに違いない。かつて石井進は、「中心区画」に隣接する掘割SD510から出土した木簡(図11)の「いまくらとの(今倉殿)」という記載に注目し、この集落を拠点に活動する土倉および倉庫建築が存在する可能性を指摘した〔石井 1986〕。以前にも記したように〔鈴木 2005〕、今倉殿という土倉がこの集落に存在し、倉庫を構えたとすれば、その最有力候補として挙げられるのがSB1781なのである。

近年所在が確認され、現在広島県立歴史博物館に寄託されている『渡邊氏先祖覚書』によれば〔田口 1984、小林 2001〕、SB1781が構築されたⅢ期という時期は、京都の悲田院から備後に下向した備後渡邊氏初代の渡邊高が、「長和寺家分」の年貢を五十貫文で請け負うとともに、備後守護山名氏の守護代であった犬橋満泰と被官契約を結び、備後南部における支配を確立し始める段階に相当する。また、SB1781や隣接する掘割が多量の木簡とともに廃絶されるⅣ期前半は、山名是豊に従って応仁文明の乱を戦った備後渡邊氏第三代の渡邊家が、是豊の没落によって「草土」「国留」「上下」「市村宇山」「長和寺家半済」といった所領をすべて失う時期に相当する⁽²⁾。SB1781の成立と廃絶は、こうした渡邊氏の動向と結びつけて理解することができ、渡邊氏の所領経営に関与した商人・金融業者が関与していた可能性が高い。

一方のSB4445・4444については、周辺にまとまった木簡の出土する遺構が存在せず、SB1781と同様の視点からその建設主体を復元することはできない。ただ、前述のように隣接するSG4415から備前焼の甕が多数出土していることから、何かが貯蔵・保管されていた可能性が高い。これらの建物が廃絶した次の段階であるⅡ期後半新段階には、「中心区画」に位置する廃棄土坑SK1300から豆や麦を原料とする味噌の醸造に関する木簡が出土しており、SB4445・4444の建設主体が食品加工や醸造に関与していた可能性も検討してみなければならない。

5 おわりに

以上、草戸千軒町遺跡における倉庫建築の事例をいくつか紹介し、地域の経済拠点としての集落の性格との関係について検討してみた。考古学を専攻する筆者にとっては、建物の上部構造の復元は容易ではないが、こうした資料を各地の遺跡での事例と比較検討することにより、不明な点の多い中世の倉庫建築の実態が次第に明らかになっていくものと思われる。この報告が、古代から中世、そして近世へといたる倉庫建築の系譜と、その変遷過程を明らかにするための一助になれば幸いである。



図11 「いまくらとの」木簡

【註】

(1)「草戸千軒」という集落の名称は、集落の存在が伝説化した近世の段階に成立したもので、中世には「草津」「草井地」「草出」「草出津」「草土」などと呼ばれていたことが確認できている〔鈴木 2005〕。

(2)『渡邊氏先祖覚書』から明らかになる備後渡邊氏の動向と、草戸千軒の集落の変遷過程との関連については、別の機会に検討したい。

【引用文献】

- 石井進 1986「木簡から見た中世都市「草戸千軒」」『国史学』第130号、国史学会、pp.1-29
- 岩本正二 2000『草戸千軒（吉備考古ライブラリィ・6）』吉備人出版
- 小林定市 2001「渡邊氏の先祖覚書と長和庄支配構造」『福山城博物館友の会だより』No.31、福山城博物館友の会、pp.6-13
- 鈴木康之 2001「中世の町における建物復元をめぐって—広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究（1998年度～2000年度科学研究費補助金研究成果報告書）』（研究代表者 玉井哲雄）、pp.140-153
- 鈴木康之 2004「南北朝期の『草戸千軒』—14世紀後半における集落の衰退について—」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会、pp.937-954
- 鈴木康之 2005「草戸千軒をめぐる流通と交流」『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房、pp.119-157
- 田口義之 1984「渡邊先祖覚書」『山城志』第7集、備陽史探訪の会、pp.28-34
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995a『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995b『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県教育委員会
- 広島県立歴史博物館編 1999『草戸木簡集成1（草戸千軒町遺跡調査研究報告3）』広島県立歴史博物館
- 広島県立歴史博物館編 2000『草戸木簡集成2（草戸千軒町遺跡調査研究報告4）』広島県立歴史博物館
- 広島県立歴史博物館編 2004『草戸木簡集成3（草戸千軒町遺跡調査研究報告6）』広島県立歴史博物館
- 松下正司編 1994『埋もれた港町 草戸千軒・鞆・尾道（よみがえる中世8）』平凡社

堺環濠都市遺跡の蔵遺構―塼列建物の検討―（報告要旨）

續 伸一郎（堺市教育委員会）

1、はじめに

近年、中世水運や物流システムに関して「集荷地遺跡」「集散地遺跡」という概念が提示され、生産と流通と言う二元論以外に、集荷・選別・出荷する場（物資の集散地）という三元論で考える必要性が提唱されている。矢田俊文氏は、この「集散地遺跡とは、生産品の集荷・選別・出荷を行う人間がその地において活動していれば成立する遺跡であり、全国的・広域的な流通圏をもつ土器・陶磁器でなくても存在する」という〔矢田 1999〕。

このような視点で中世前期を代表する港湾都市である博多遺跡群を分析された大庭康時氏は、1、貿易陶磁器の高い比率、2、「綱」銘墨書の大量出土、3、貿易陶磁器の一括大量廃棄遺構の存在、4、貿易船のコンテナとしてもたらされた大型容器の出土（具体的には陶器の壺・甕類）により、博多が住蕃貿易であった証拠とされる。そして、博多は居住する宋商人が多数存在する都市であり、「集散地遺跡」という表現こそ博多遺跡群の本質をついていると言う〔大庭 2004〕。また、博多遺跡群で確認されるハマなどの窯道具が付着した陶磁器や溶着した青白磁合子などや破損した不良品を大量一括廃棄などから「これらの出土遺物は、中国陶磁器が、商品化された後に運ばれたものではなく、博多に荷揚げされ博多綱首の蔵に収まった後に手を加えられて商品となったことを示している」〔大庭 1999〕とされる。

では、中世後期を代表する港湾都市とされる堺環濠都市遺跡ではどうであったのか？時代差があり貿易形態が異なるので、博多遺跡群とは単純に比較検討はできないが、堺環濠都市遺跡では博多と同様に貿易陶磁器の占める高い比率とコンテナとしての大型容器（壺・甕類）の出土は検証されるが、貿易陶磁器の破損や火災による不良品の大量廃棄の出土例は現時点では確認されていない。おそらく、堺では博多のような陶磁器の大規模な「選別」行為は行われていないと考えられる。〔續 2006〕

ただ、博多との大きな相違点として物資の貯蔵施設である蔵遺構が多数確認されている。その遺構の多くは、「塼列建物」である¹⁾。

堺環濠都市遺跡では、塼列建物とは建物平面プラン外周を塼（長さ約 27.0～29.0cm×23.0cm 厚さ 2.0cm～2.3cm）で囲った建物跡を総称して呼んでいる。塼は 1/3 程度を地表面上に露出させ、下段の 1～3 枚を縦積みで土中に埋没させる。この塼は、基礎と土壁の立ち上がり部分を雨風・動物などから守り、床下防火の用途として採用されたと考えられている。つまり、塼が無くとも建物構造状の問題はないと考えられる。この建築意匠は堺を中心として独自に普及・発達したと思われ、堺以外では草戸千軒町遺跡・平野環濠都市遺跡・京都などの都市遺跡、城館遺跡で同様の建物が確認されているという〔矢田 2006〕。ところで、塼列建物ではなく「塼貼（瓦貼）建物」と呼んだ方が構造を良く表すという意見〔山本 2002〕もあるが、近世の土蔵のように壁に生子瓦（塼）を貼り付けてはいないのでこの名称も的確な表現ではないと思われる。塼列建物が必ずしも適切な表現とは思わないが、使い慣れた用語として使用することとする。

2、堺環濠都市遺跡の塼列建物について

全ての塼列建物が蔵ではなく、各種の用途で塼を使用する建物遺構も検出されている。

ここでは、蔵遺構と考えられる塙列建物について述べることにする。

さて、蔵遺構と考えられる塙列建物の床面内部は、黄褐色粘土などで丁寧に貼床されて塙に沿って「ロ」字状に連続して大型の礎石を配し、この上に土台となる角材を置き、それに柱・大壁を取り付けて立ち上げている。中には角材を用いず礎石から柱・大壁を立ち上げる場合もあるし、半裁した瓦と粘土を交互に積み上げた土塙状の基礎をもつものなどある。この建物は、寺社建築のように柱・束で軸組を造るのではなく四周の壁土で自立する構造であったと考えられ、近世の土蔵と同様の基礎構造をもっていた。そのため、建物中央部に小屋組・梁を支える柱は設けられていない。入口は妻入りが多く、その部分は「凸」状に出っ張っている。床は土間もしくは転根太の場合が多いが、貼床下及び床面には湿気除けの貝が充填される例や中央部に砂を充填した土坑をもつ例もある。壁は一般の住居のような竹木舞を使用せず、柱を建物外面に露出しない大壁造りで、「板木舞」²⁾と呼ばれる壁貫に用いて荒壁を充填して約 20～30cm 程度の厚さの壁に仕上げている。また、近世の土蔵のように壁の外面に漆喰を塗布した例は確認されていない。そして、塙列建物への本瓦の使用は、慶長期以降と考えられる。

応仁・文明の乱後の文明八年（一四七六）、文明十五年（一四八三）、明応二年（一四九三）、永正三年（一五〇六）、永正十七年（一五二〇）の連続五次におよぶ遣明船は大内船を除いて堺が発着港となった。この遣明船派遣と呼応するように、十五世紀後半頃に表通りに面した礎石建物の奥に突如として塙列建物が登場する〔續 1993〕。遣明船の利益は大きく、これに琉球渡航や国内流通による貿易を合わせると莫大な利益があったと思われる。

塙列建物の中には、交易により各地域から運ばれた多量の陶磁器などの交易品が貯蔵されていたことが発掘調査から確認されている。初期の塙列建物は、床面積や礎石規模の小さい例が多い。SKT230 地点では十五世紀第 4 四半期～十六世紀第 1 四半期頃に存在した塙列建物を確認している。妻側に入口を持ち間口 2.3m、奥行き 3.5m 以上を測り、火災により廃絶している。中国製青磁碗・赤絵碗・タイメノイ窯系四耳壺などが出土している〔堺市教委 1991〕。この塙列建物は、堺商人の経済力を象徴するものであった。十六世紀中頃までは数軒単位で一棟の塙列建物を所有するだけだったが、十六世紀末頃には一軒で三～五棟の塙列建物を所有するようになり、堺商人の経済活動や町の発展・都市化と共に軒数や建物規模が増大する傾向が認められる〔續 1993〕。しかし、遣明船は利益も大きいが高リスクも大きかったと思われる。天文二十年（一五五一）の大内氏滅亡によって日明貿易が途絶えるとこれに参画していた初期の貿易商人が姿を消して行く。彼らに替わって台頭するのは新興の天王寺屋（津田）宗及や今井宗久などの納屋衆と呼ばれた問屋層だった。発掘調査によると、特に十六世紀末から十七世紀初頭には朱印船貿易等による東南アジア・朝鮮・中国陶磁器の出土量が倍増している。中国陶磁では、景德鎮窯系以外に粗製品とされる福建省漳州窯系の染付が増加する。また、朝鮮（李朝）陶磁の出土量も増えて、碗皿類以外に大型の盤や貯蔵器（甕・瓶）の出土量も増加する傾向が認められる。なかでも、壺・甕（貯蔵具）は内容物と共に容器として搬入された結果と考えられる。

この時期の塙列建物は、床面積が増大して多様な用途の蔵が出現している。SKT750 では、間口 5.5m、奥行 8.5m を測る甕蔵が確認されている。建物中央部を周囲より約 60cm くぼめて、焼失後に大半の甕は抜き取られていたが備前の甕を推定 20～30 個近く置いていたと思われる〔堺市教委 2001〕。SKT573 では間口 3.1m、奥行 4.3m、2.0m×0.3m 長方形に張り出した入口をもち、床面が周囲より約 70cm 下がる半地下構造の塙列建物が確認された。床下には貝殻を 5～8cm の厚さで敷き、その上に壁土を塗布した後に寺院の土間のように塙を丁寧に敷き並べていた。また、ここでは十六世紀中頃から後半にかけて間口 3.6m 奥行 4.6m 以上を測る大型の塙列建物が登場している〔堺市教委 1998〕。最近、発掘調査された SKT874 では、慶長二十年（一六一五）被災面で備前甕を 10 個程度納めた甕蔵一棟・埋甕

遺構一箇所を確認している〔堺市教委 2005〕。

そして、慶長年間頃になると建物の床下面が地表面より約 30cm 程度掘り下げた半地下構造の塙列建物が登場する。現在まで出土件数は約十例と少ないが、この建物は従来のそれと比較して本瓦葺・転根太・壁土も厚く高価な収納物が多い点が指摘でき、工法的には近世城郭建築の技法伝搬により構築された三階倉である可能性が高いと考えられる〔續 2001〕。建物内から豪華な茶陶などが出土しており、会合衆クラスの豪商が所有していたと推測される。また、この時期に茶の湯に使用する炉壇を置くために塙列建物の中央部付近の床下地面を約 30cm 程度掘りくぼめた蔵座敷も登場している。

この塙列建物は慶長二十年（1615）大坂夏の陣前に豊臣方の放火被災後に復興された近世都市では採用されず、中世都市と盛衰を共にしている。

ところで、この塙列建物のルーツは未だ明確になっていない。土蔵は古くから存在したが、これに塙を使用し始めたのは堺が最初だと思われる。また、塙列建物が登場するのと同時期に井戸枠に専用の塙（平瓦を厚くしたようなもの）を積み上げた井戸が登場する。これらの専用塙は、瓦職人などの専門工人により都市用に製作されていたと推測される。

3、他遺跡の塙列建物について

前述したように、塙列建物は堺以外の都市遺跡では京都〔山本 2002〕や大阪市平野環濠都市遺跡（HN84-13・HN85-7・HN96-13）〔大阪市文協 1999〕。兵庫津遺跡からは、十五世紀後半～十六世紀にかけての時期に大型の礎石を用いた蔵と考えられる建物が検出されている〔内藤 2001〕が、塙は用いていないので土壁ではなく板壁であった可能性もある。また、畿内の城館で同様の建物が確認され十六世紀末に城郭の主郭櫓建築に構造が採用された例もあるという〔山上 2006〕。表 1 のように城郭に用いられた塙列建物は、堺環濠都市遺跡のそれよりも床面積や規模が大きいものも多い。大内氏館跡のⅡC 地区で検出された塙列建物は、平面長方形で中央部平入側に 0.45m×2.4m の張出をもち、黄色粘質土を貼床としている。基壇のある建物と考えられている。下層に遺構が存在していることから比較的新しい時期のものとされる〔山口市教委 1987〕。館廃絶後に建立された瑞雲山龍福寺に関連する建物の可能性が高いと考えられる。第 13 次調査では中島をもつ池泉庭園の北側に湯屋ないし台所と想定されている石組竈の西側、日常的な「ケ」の空間で塙列建物を検出している〔山口市 2000・北島 2006〕。大内義興から義隆時代の十五世紀末～十六世紀初頭から十六世紀中葉頃に存続したと考えられている。堺環濠都市遺跡に初出した時期とほぼ同時期に作られていることから遣明船派遣を通じた大内氏と堺商人との深い関連性が伺われる。城館ではないが、和歌山県根来寺坊院跡からも湯屋遺構に伴い検出されている〔岩出町教委 2004〕。ここでは浴室内の玉石と竈の防水のために塙を使用したと考えられている。高屋城跡は河内守護畠山氏の居城で天正三年（一五七五）に織田信長に攻められ落城している。上級武士の住居跡とされる第Ⅱ郭で検出されている〔大阪府教委 1981, 羽曳野市教委 1994・2003〕。礎石配置等から堺環濠都市遺跡と類似する蔵遺構と考えられ、また焼土層で覆われている場合が多く天正三年落城時に廃絶したと思われる。

また、堺環濠都市遺跡では検出例のない床面に礫石を敷き詰める例（置塩城・端谷城）もある。置塩城では、本丸と考えられる第一郭に塙列建物が検出されている〔夢前町教委 2006〕。塙列建物外周に盛土された周堤が廻る。堺環濠都市遺跡では例の少ない平入りで建物中央部に柱礎石が認められる事などから、大壁形式の城郭建築（矢倉）と想定され建物の壁基礎養生のために塙が採用されたと考えられる。興味深いのは塙列建物床面が周堤により竪穴住居址のように下がっていることである。近世城郭の天守石垣下の穴蔵との類似性が考えられる。

城郭名	所在地	規模	城の時期	備考
大内氏館	山口県山口市	10.5m×6.6m	1551年廃城	S61年調査
		2.6m×0.7m以上	15世紀末～16世紀初頭～16世紀中葉	H4年調査第13次
感状山城	兵庫県相生市矢野町	6.91m×8.0m	1577年落城	
置塩城	兵庫県姫路市夢前町	10m×4.2m	1581年廃城	
御着城	兵庫県姫路市御国野町	4.6m×5.25～5.45m	1519年～天文年間	
枝吉城	神戸市西区枝吉	詳細不明	15世紀中頃～1588年	S42年調査
伊丹城	兵庫県伊丹市伊丹	4.4m×3.6m以上	1583年廃城	
高屋城	大阪府羽曳野市古市	4.5m×3.1m以上	1479年～1575年落城	S59年市調査
		3.8m×3.8m		H5年市調査93-2区
		4.3m×3.8m		同上
		3.3m×1.5m以上		H14年市調01-7区
		6.2m×5.5m以上		S56年府調80-2区 二時期あり
若江城	大阪府東大阪市	5.4m×1.5m以上	1370年～1581年	周辺から小札出土
端谷城	神戸市西区榎谷町	6m×9.5m	1580年廃城か?	胴丸・甲が十個以上か?
根来寺	和歌山県岩出町	6.2m×6.6m	1585年焼失	湯屋の三方を囲う

表1 埴列建物検出遺跡（城郭関係）〔神戸市教委 2005〕に転載・加筆

4. さいごに

沖に停泊した船舶から堺の町を眺めときに蔵が林立する姿は、堺のランドマークであったと思われる。この蔵であった埴列建物は、堺と各地域間の「交易」の活発さを物語ると同時に、堺商人がもつ富の象徴でもあった。

ところで、堺では基本的に貯蔵施設は地上に作られ、京都や他都市で多数確認されている土坑内部に壁状に石を積んだ地下式収蔵施設＝穴蔵〔山本 2002〕は検出していない。埴列建物は当初から土壁・大壁の蔵形式で登場しており、火災・津波などの災害に遭って建替えられてもやはり地上に建てられている。この背景には、宣教師の報告文にあるような堺の「平和領域性」が影響していると思われる。応仁・文明の乱後京都への求心的流通が減退した反面、鉄砲・硝石などの軍需物資・木綿・高級衣料・貿易品・茶陶などの陶磁器などが、いずれも戦国大名や家臣団の必需品として畿内から地方に向かって恒常的に流れており、自治都市堺の繁栄はこの遠心的流通構造とそれを利用した武器・貿易商人であった堺商人の活動に支えられたものであったという〔桜井 2002〕。言い換えると、十六世紀中頃以降には戦乱の及ばない自治都市であった堺の町全体が、全国の戦国大名にとって必需品が収納された「蔵」＝ストックヤードとして機能していたのかもしれない。

十七世紀後半に書かれた井原西鶴の『日本永代蔵』には、「この（堺）津は長者のかくれ里、根のしれぬ大金持その数しらず、ことさら名物の諸道具・唐物・唐織、先祖より五代買置きして内蔵におさめ置く人あり、また寛永年中より年々取り込み金銀、今は一度に出さぬ人もあり」とある。堺商人にとっては、蔵遺構である埴列建物に象徴されるような「貯蔵」こそが、重要だったとも考えられる。

堺が「集散地遺跡」であるなら、集荷・貯蔵・出荷を行う場であったと言えるのではないだろうか。

[註]

1) 埤列建物のすべてが蔵遺構ではない。堺環濠都市遺跡では、16世紀後半頃からは簡易な建物や蔵座敷にも使用される場合が認められる。埤の使用の有無ではなく建物本体の礎石配置や基礎地業、敷地配置等により蔵遺構か否かは判断されるべきだと思われる。

2) 関西大学工学部教授 故 山田幸一氏の御教示による。

[参考文献]

伊丹市文化財保存協会 1979 年『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ』

岩出町教育委員会 2004 年「根来寺坊院跡出土の湯屋遺構」『根来寺坊院跡発掘調査現地説明会資料』

(財) 大阪市文化財協会 1987 年『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

(財) 大阪市文化財協会 1999 年「平野環濠都市遺跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996 年度-』

大阪府教育委員会 1981 年『高屋城跡発掘調査概要・Ⅶ-羽曳野市古市 5 ～ 7 丁目所在-』

大庭康時 1999 年「集散地遺跡としての博多」『日本史研究第 448 号』 日本史研究会

大庭康時 2004 年「国際都市博多 大唐人街」『第 4 5 回歴博フォーラム中世の湊町—行き交う人々と商品—』

国立歴史民俗博物館

北島大輔 2006 年「大内氏館の変遷—池泉庭園周辺の調査成果を中心に—」『山口市埋蔵文化財年報 5 —平成 16 年度—』山口市教育委員会

神戸市教育委員会『端谷城跡—平成 1 7 年度現地説明会資料—』2005 年

堺市教育委員会 1989 年「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-SKT 1 1 2 地点-」『堺市文化財調査報告第 4 1 集』

堺市教育委員会 1990 年「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-SKT 8 2 地点-」『堺市文化財調査報告第 3 2 集』

堺市教育委員会 1991 年「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-SKT 2 3 0 地点-」『堺市文化財調査概要報告第 1 4 冊』

堺市教育委員会 1991 年「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT 3 9」『堺市文化財調査概要報告第 15 冊』

堺市教育委員会 1997 年「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-SKT 3 8 0 地点-」『堺市文化財調査概要報告第 6 1 冊』

堺市教育委員会 1998 年「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT 5 7 3」『堺市文化財調査概要報告第 7 5 冊』

堺市教育委員会 2002 年「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-SKT 7 8 7 地点」『堺市文化財調査概要報告第 9 8 冊』

堺市教育委員会 2004 年「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT 2 6 3」『堺市文化財調査概要報告第 103 冊』

堺市教育委員会 2005 年「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT874・SKT900」『堺市文化財調査概要報告第 109 冊』

堺市教育委員会 2005 年「埤列建物の基礎を発見!」『堺埋蔵文化財だより第 18 号』

堺市教育委員会 2006 年「堺環濠都市遺跡発掘調査報告-SKT 9 2 5」『堺市文化財調査概要報告第 110 冊』

桜井英治 2002 年「Ⅱ 商人の登場 2 章中世・近世の商人」『新体系日本史 1 2 流通経済史』 山川出版社

續 伸一郎 1993 年「中世都市 堺—都市空間とその構造—」『中世都市研究 1 都市空間』 新人物往来社

續 伸一郎 1999 年「収納する場としての蔵—堺環濠都市遺跡の事例を中心として—」『地方史研究 2 8 1 第 49 巻 第 5 号』地方史研究協議会

續 伸一郎 2001 年「2、堺の町と町屋」『考古学発掘資料による建物の復元方法に関する基盤的研究 1998 年度～2000 年度科学研究費補助金研究成果報告書』研究代表者 玉井哲雄

續 伸一郎 2003 年「戦国の自治都市 堺」『戦国時代の考古学』 高志書院

續 伸一郎 2006 年「中世 堺商人の世界—発掘調査成果からみた堺—」『沈没船と湊町—東アジアの中世交流史—』 高志書院

内藤俊哉 2001 年「3、兵庫津の町並の変遷-兵庫津遺跡第 15 次調査の成果から-」『考古学発掘資料による建物の復元方法に関する基盤的研究 1998 年度～2000 年度科学研究費補助金研究成果報告書』研究代表者 玉井哲雄

羽曳野市教育委員会 1994 年「高屋城跡 93-2 区」『古市遺跡群 X V』

羽曳野市教育委員会 2003 年「高屋城跡」『古市遺跡群 X X IV』

(財) 東大阪市文化財協会 1988 年『若江遺跡第 27 次発掘調査報告』

姫路市教育委員会 1981 年『御着城跡発掘調査概報』

埋蔵文化財研究会・(財) 大阪市文化財協会『中世末から近世のまち・むらと都市』第 27 回埋蔵文化財研究集会資料集

矢田俊文 1999 年「中世水運と物資流通システム」『日本史研究第 448 号』 日本史研究会

矢田俊文 2006 年「考古学のための文書解題 近世初期の城の蔵」『中世考古学文献研究会会報第 6 号』 中世考古学文献研究会

山上雅弘 2006 年「第 5 章 調査の総括」『播磨置塩城跡発掘調査報告書』 兵庫県飾磨郡夢前町教育委員会

山口市教育委員会 1987 年『大内氏館跡Ⅶ 大内氏遺跡発掘調査概報Ⅶ・概要』

山口市教育委員会 2000 年『大内氏館跡Ⅹ（遺構編） 大内氏遺跡発掘調査報告ⅩⅣ』

山本雅和 2002 年「中世京都のクラについて」『研究紀要第 8 号』（財）京都市埋蔵文化財研究所

夢前町教育委員会 2006 年『播磨置塩城跡発掘調査報告書』

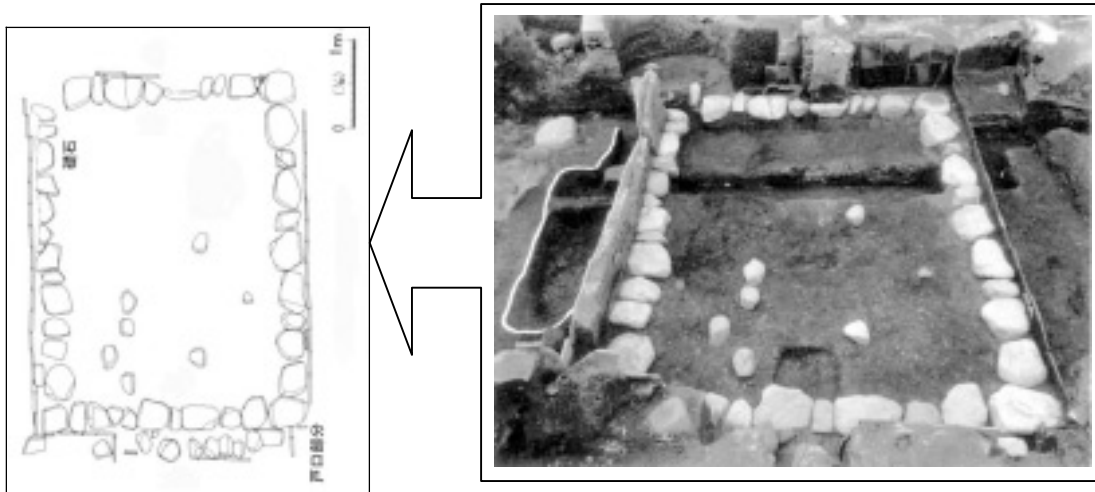


図 1 蔵遺構と考えられる塼列建物の基礎構造 (SKT573)

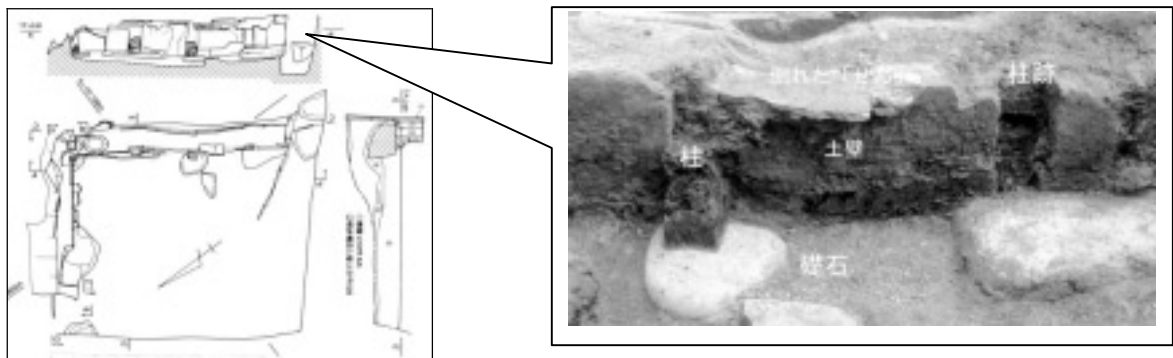


図 2 塼列建物の大壁構造 (SKT900)

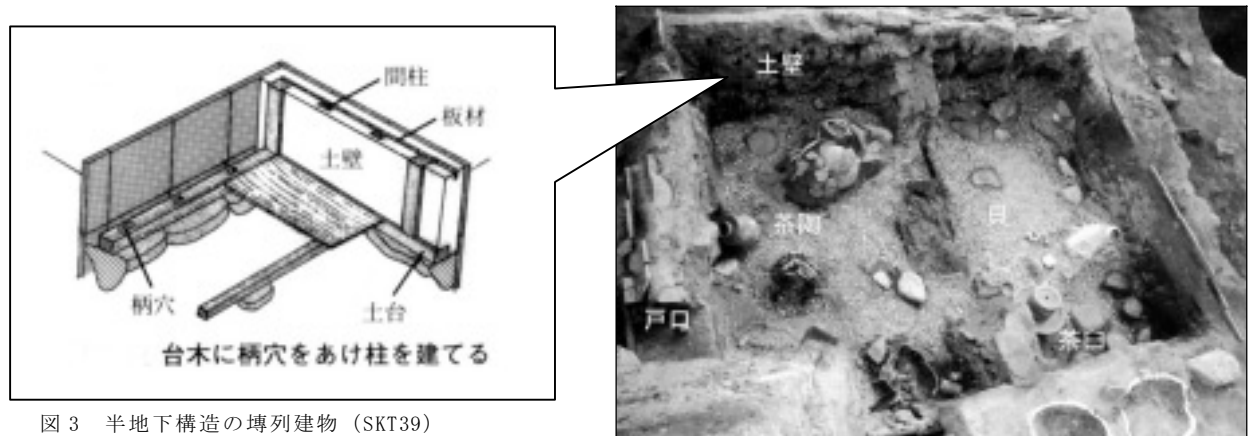


図 3 半地下構造の塼列建物 (SKT39)

はじめに

中世前期の蔵について文献史学では、これまで文書管理の場としての文庫、王権の象徴として多様な物品が納められた宝蔵、金融業者としての土倉（中世史料で蔵と倉は区別して使用されていないが、ここでは原史料の表現ではなく建物としてのドゾウを土蔵、金融業者としてのドソウを土倉と便宜使い分けしておく）、荘園制的都市構造と倉といった観点から検討されてきた。

考古学の立場からは山本雅和氏が京都のクラについて整理しており、平安後期の鳥羽殿勝光明院経蔵を初見として、基壇・床あり・板壁土塗もしくは土壁・瓦葺もしくは塗籠屋根・周囲に堀や溝を特徴とする石積地業総柱建物が検出され、これが鎌倉期以降に有力商工業者にも普及したとする。その一方で考古学的にはクラと認定するのが困難な土間・板壁・板葺きの側柱掘立柱建物のなかにクラが含まれており、土取穴の検出から室町期にそれが土壁に移行するという。またいわゆる塙列建物（山本氏は塙貼建物とする）は京都では桃山期にないと出現しないとしている。さらに建築史の山田幸一氏が土壁の成立という観点から、文献史料の検討も行っている。

小稿では、「集散地のクラ」という観点から、荘園制的都市構造の検討から受領のクラに注目した戸田芳実氏の研究を継承し、その展開として土蔵の成立について見通してみたい。そして金融業者としての土倉の機能についても若干の検討を行いたい。

一、院政期のクラ

戸田芳実氏は、『中右記』康和4年（1102）3月28日条にみえる、大宮権大夫藤原季仲に同宿する院近臣で近江守藤原隆時の「江州五倉」の焼亡記事から、「京内の倉庫群の敷地が借地または重層的所有の形態でも成立しうる」と指摘している。これは蔵の管理者と土地所有者の相違を指摘したものとして大変重要で、後述するように土倉の経営形態にも反映していると思われる。

当該期の蔵の立地場所として史料に目につくのが堀川である。これは水運の便を考慮したもので、同じく散見される堀川の受領宅も同様の意味があったものと思われ、堀川沿いに受領らの蔵が並ぶ光景が想定される。ただし史料の多くは焼亡記事であり、その耐火性には問題があったと思われ、山本氏のいう板壁の側柱掘立柱建物が相当するだろう。そのことは当該期の人々も当然承知しており、戸田氏も取り上げている筑後前司仲能が仁和寺に卜した7字の蔵（5字は衣食・家具、2字は珍宝が納められていた）は「火難」を避ける目的で建てられたものだった。このように京外の寺院に借地して設けられた蔵相当施設については、珍皇寺にも天永3年（1112）段階で築垣内に20・外に27の名前を冠した「堂」があり、戸田氏はこれを富人の経営基地と評価している。そこでは「堂」の設立と存続のために寺家への献納物と公事役負担が要求されていた点も興味深い。

またこれらが「堂」と呼ばれていた点にも注意される。堂に納められていた米穀・魚類が追捕されたという記事もあり、それが蔵として利用されていたことがわかる。建築様式は不明であるが、一般の邸宅とは異なる表現で、土壁が用いられていた可能性もあろう。「堂」は宿泊施設としても利用されているが、その多義的な機能の一つに貯蔵があったと考えられる。

二、土蔵の成立

よく知られているように、藤原頼長は礎石・板塀石灰塗り・瓦葺きの文倉を造り、周囲にも緩衝施設・堀を配置するなど万全の火災対策を行った。この12世紀半ば段階ではあまり一般的ではなかったようだが、承久の乱後になると貴族邸の土蔵を盗賊が穿って銭・砂金などが盗まれたというように、貴族邸には土蔵が建築されるようになる。また七条大路をはさんだ地域で火災が発生したことを記録

した史料には、ここには土蔵が多数立地しており海内の財貨が集まっていると記される。14 世紀前半成立の『春日権現縁起絵』には、京内の火災で焼け残った土蔵が描かれており、密集した都市域での財産保管のために土蔵が活用されるようになったことがわかる（まだ金融業者ではない）。

売券にも土蔵が屋とともに記されることがあり、土地のみの売買価格の倍程度の値が付けられている。規模は3間が多く、屋があり後園をはさんで土蔵が立地していた状況が、文書や説話集などから復原することができる。屋根は「カワラクラ」が特記されていることから、通常は『春日権現縁起絵』にもみられるように、塗籠であった可能性が高い。

応永 12 年(1405)に山科教言が新邸に文庫を建設しており、その状況が詳細に日記に記されている。それによるとまず番匠大工が参入して地形を定め木組みを建設し、次いで河原者が参入して壁塗りの基礎を行い、戸石が用意され、番匠が竹で木舞を組み、壁塗が下地・内部の白壁・白壁のカノコ斑・扉塗りに従事して、数ヶ月おいて壁塗が上壁を塗り仕上げている。左官工程が河原者と壁塗の分業で行われているのは、現在でも同様のようで基礎技術は完成していたと考えられる。室町期には土蔵への立てこもり事件も起こっており、ある程度の密閉性も達成されていたと思われる。なお壁塗りに河原者が携わっているのは、河原の土が利用されたためかもしれない。

ところで教言の文庫には特に文書を納めたという記事が見られず、後に盗人により「銭以下色々物」が盗まれており、一般の土蔵と利用形態は変わらなかったことがわかる。貴族邸の土蔵は文庫と称されていた可能性があり、注意が必要である。

三、土蔵と文書・銭

鎌倉後期の京都では土蔵に文書が預けられていたが、火災や追捕で紛失したため紛失状が立てられた例が散見する。中にはそれが質と明記される場合もあり、土蔵に預けるという機能を介して金融活動が行われていたことがわかる。「つちくら」とともに「なうせんほんり」（納銭本利）3230 貫文が譲与されたという文書や、土蔵に「入銭」があり結解が行われているという文書から、土蔵に銭が預けられていたことがわかり、それをもとにして金融業者としての土倉が成立したのだろう。

正和 4 年(1315)には日吉神輿造替のために、神人沙汰として土倉 280 に各 750 疋、疋沙汰として土倉 55 に各 1000 疋が賦課されており、金融業者としての土倉が多数存在していたことが知られる。元弘から建武・南北朝内乱を通じて、軍勢による土蔵の組織的追捕が多数見られ、富が集積した場と認識されていたことがわかる。それにもかかわらず土倉の経営規模は拡大したようで、応安 4 年(1371)には御讓国料として洛中所々土倉に各 20 貫文が、御即位用途として 3000 疋が各土倉から借用されており、賦課は数倍にふくれあがっていることが知られる。

四、土倉の経営形態

鎌倉期の土倉の経営形態を示した史料として、感神院領の文書が権利所有者に無断で経観房という土倉に質入れされ、質流れとなり「土倉寄合衆」によって文書が誓智に配分され、それを譲られた超舜が所領を違乱したという事件（『鎌倉遺文』12970）がよく知られている。ここに登場する土倉寄合衆について、下坂守氏はこれまで理解されていたような土倉の同業組合ではなく、経観房という実務主体（蔵預）に出資している銭主であるとした。桜井英治氏は近著でそれを継承して、こうした土倉の経営形態を複数の金融業者が出資した複合型と概念づけている。確かに経営形態だけを取りだしてみればそのような評価もできるが、むしろ戸田氏のいう「重層的所有」の展開過程とみたほうが前代とのつながりが理解されるのではないか。

その点で注目されるのが社内土倉と呼ばれる存在である。祇園社も「社家神供所」とされる土倉を持っていたことがわかるが、今熊野社は多数の社内土倉を抱えていたことが知られ興味深い。社領備

前国万寿本庄の鳥羽土倉が興行され年役は社内各層で配分されており、元阿弥土倉は社領の地利から神供料を納入しており、椿蔵・越前坊は料足寄進により諸役が免除されている。また天王寺蔵の継承権をめぐって麴屋・今蔵が相論となり質物出入りが禁止されたが、装束を取り出さないと七夕神事が遂行できないとのことで、幕府奉行人の立ち会いの下で取り出して利平を計算したが、社家公人の內衣などの「散在質物」は「注文」に載せられておらず、相論決着まで先送りされている。ここから天王寺蔵は社人たちの小口金融として機能していたことがわかる。

この事例から考えると、先の感神院領をめぐる相論に登場する経観房以下も、独立した金融業者というより、感神院関係者とみたほうがより実態に近いのではないか。また天王寺蔵の相論は幕府法廷に持ち込まれており、土倉役が賦課されていなかったとは思えない。それにもかかわらず土倉が今熊野社に所属した（洛中土倉の多くが山徒であった）ことの意味も、経営の重層的形態（建前としての神物の運用）と関わって議論されるべきではないか。金融業者が土倉と呼ばれている意味も、私に土倉を構えることが非難され、貴族邸の土蔵があえて文庫と呼ばている形跡があることからみて、土倉の有するある種の公的な性格を反映している可能性があるだろう。

むすびにかえて

文献史料から建物としての土蔵の成立について検討し立地環境にも論究するとともに、預ける行為および重層的所有という観点から金融業者としての土倉の成立について見通してみた。土蔵の構造・立地および町屋の形態について売券などから実態を復原していくことで、考古学・建築史学などとの議論をより深められるのではないか。

参考文献

桜井英治『破産者たちの中世』山川出版社、2005年

下坂守「中世土倉論」（『中世寺院社会の研究』思文閣出版、2001年、初出1978年）

戸田芳実「王朝都市と荘園体制」（『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、1991年、初出1976年）

山田幸一『壁』法政大学出版局、1981年

山本雅和「中世京都のクラについて」（『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』8、2002年）

1. はじめに

白い漆喰塗の土壁、瓦葺屋根といった特徴的な外観を備える土蔵は、今日においても経済的繁栄の象徴としてとらえられており、近代初頭にいたるまで建築されてきた江戸を模したとされる土蔵造の店舗が見世蔵として各地に残されている。

近世江戸での土蔵の普及は明暦の大火を契機として耐火性能をもって奨励されたとして知られているが、土蔵造の成立時期に関して確かなこと明らかではない。従来から『春日権現験記絵』^{注1)}に描かれる火災を逃れた漆喰塗の建物が土蔵につながるとされ、土蔵の起源が14世紀ごろに遡るとみられているものの、同時期の成立年代であるとされる現存事例は知られていない。

しかし、近年の発掘調査成果から火災を受けた厚い土壁や地下構造を伴う遺構が報告され、土蔵につながる建築技術の成立が中世に遡る可能性が指摘されている。都市的な発展をとげた地域である草戸千軒町遺跡や堺環濠都市遺跡にみられる事例を手がかりとして、現存する近世土蔵造との関係を見直す事で土蔵の成立過程を明らかにすることを試みる。

2. 近世江戸にみられる土蔵の実態

2-1. 近世江戸の土蔵と地業

近世江戸の土蔵の実態については、江戸に現存している事例は知られておらず、絵画史料に描かれた表現や幕末から明治初頭にかけて撮影された写真などを参照することとなる。日本橋繁盛絵巻『熙代勝覧』^{注2)}に描かれた瓦屋根を連ねた店構えは当時の繁栄する江戸の景観をよく伝えているとされている。しかし、絵画や写真には詳細な構造が表現されているとは限らない。

また、川越や佐原等の江戸周辺部に残された土蔵造町屋や武家屋敷に残る土蔵など、現存する土蔵も多く知られている。これらは江戸からの影響が強かったとされてはいるものの、江戸市街地の中心部である地域に実在した土蔵との直接的な因果を求めることは難しい側面もある。

江戸前島と呼ばれた本来の陸地と武蔵野台地、本郷台地など自然堤防を除く江戸の大部分は古利根川の沖積平野(低湿地)と埋立地から成り立っている。このため地下水位が高く地盤が非常に脆弱であった。土蔵など重量のある建物が倒壊しないためには自重で沈みこまないように、また全体が均一に沈みこむよう不等沈下を防ぐための工夫が必要とされた。このような地盤改良は地業(ちぎょう)と総称される。地行の文字を当てることもある。近世江戸の土蔵の上部構造は失われているが、発掘調査により報告される地業から多くの土蔵が実在していたものと推測されている。

地業には貝殻地業/牡蠣殻地業、蠟燭地業、樽地業、算盤(そろばん)地業/筏(いかだ)地業などの名称が知られており、単独で用いられるかまたはこれらを組み合わせて用いられたとみられる。算盤地業/筏地業では比較的短い丸太や丸太を半割や四割にしたものを用いる算盤木を枕木状に密に並べており、算盤木の下に規則正しく並ぶ杭を伴う事例もみられる。

蠟燭地業の実例としては昇覚寺鐘楼の地業が挙げられる^{注3)}。蠟燭石と呼ばれる短い角柱状の石材を並べる工法であり、石材の下部にも他の地業が用いられ、単独で成立するものではなかったと考えられる。算盤地業/筏地業として報告されているなかには建築当初は上部に蠟燭地業を伴っていたとし

ても後に失われることも考えられる。

算盤木の上には長い材が渡される事例が多く、この部材名称は発掘調査報告書によって捨土台、算盤板など異なる名称が用いられている。米屋田中家文書にみられる地業に関する記述では「捨土台」と記され、幅の広い材が用いられていたと考えられる絵図が添えられている。日本橋一丁目遺跡では幅の狭い材が数本用いられる事例もみられ、これが工法として区別されていたかどうか、名称が区別されていたかは不明である。

蠟燭地業における蠟燭石に換えて伏せた樽や桶に石や砂を詰めたものを用いたとされるものが樽地業/桶地業として知られている。樽や桶は他の出土例から不要品の再利用であったとも考えられている。貝殻地業/牡蠣殻地業は地盤改良材としてカキ、場所によってはアサリ、ハマグリ等の貝殻を埋込んだものであり構造物を伴わない^{注4)}。米屋田中家文書にはこれらの他に「松白玉地業」が記されており、多様な手法が存在していたことが伺える。

2-2. 江戸日本橋地区の土蔵

江戸日本橋地区とは、江戸時代からの交通起点である日本橋を中心に南に向かって日本橋通から中橋広小路町に交差し、北に向かって室町通りから本町通に交差する大通りを軸に東西の堀までの範囲を指す。通りに面して見世蔵が建ち並ぶ、近世江戸の繁栄の中心的地域といえよう。

近代測量技術をもとに作成された地図のなかでも、明治19年の内務省地理局編纂五千分の一地図と参謀本部陸軍部測量局による五千分一東京図測量原図を用いている^{注5)}。内務省の地図には明治前半での敷地境界が示されており、沽券図などとの部分的な比較から江戸の状況をよく残していると考えられる。一方の陸軍部の地図では木造とそれ以外の建物が区別されており、同時期の都市の様相を知ることがかりとなるが敷地境界が不明である。これらふたつの地図を重ねあわせることで、各敷地内での建物の配置を知ることができると考えられる。さらに明治期の木造以外建物分布図と現在の地形図を比較し国土地理院発行の『一万分の一地形図 日本橋』から2m毎の等高線を採取したものと重ねて作成した明治期日本橋地区の木造以外建物の分布を図1に示す。

日本橋本町通に面して比較的規模の小さい木造以外建物が連続している様子がわかるほか、地図に示した範囲全体において、敷地奥にも規模の小さい木造以外建物がまんべんなく分布している様子がみられる。

堀に沿った旧来の蔵地には、さらに規模の大きい木造以外建物が分布しており煉瓦造であることが示されている建物も含まれている。しかし明治期のはじめに煉瓦造の規模の小さい建物がこれほどに普及していたと考えるのは難しいであろう。それでは、こうした木造以外建物がどのような建物であったのかを明らかにしてゆきたい。

江戸日本橋地区での発掘調査成果のなかでも日本橋一丁目遺跡は、日本橋に近接する日本橋万町に位置し、土蔵の地業と考えられる遺構が数多く報告されていることから、江戸の中心市街地における敷地と建物の関係をよく示している事例といえる。日本橋一丁目遺跡にみられる土蔵基礎と対応する土蔵が建てられていた年代を正確に把握することは困難であるが、敷地境界が近代にいたるまでおおむね継続されており、土蔵基礎もほぼ同じ位置に重ねられている事例がみられることから、異なる生活面の土蔵基礎を全て同一平面上に示し、現在の都市計画図と明治期の木造以外建物の分布図との比較を図2^{注6)}に示すとおり一致する部分がみられる。

日本橋周辺の土蔵の実態に関わる史料としては日本橋川瀬石町に位置した米屋田中家に絵図、建絵、仕様書などを含む一連の文書が残されている^{注7)}。慶応二年の大火により大きく損傷を受けた米屋はそ

の後巨費を投じて屋敷を再建しており、再建時の詳細な仕様書と工程が記されている。指図などにみられる敷地内の土蔵配置と明治期の木造以外建物の分布図の比較を図3^{注38)}に示すが、木造以外建物と指図での土蔵の位置はよく対応しているとみられる。

発掘調査による土蔵基礎の位置および現存したことが確からしい土蔵の位置との対応関係が認められることから、明治期の実測図から作成した木造以外建物分布図にみられる木造以外建物の多くは土蔵であると考えてよいだろう。したがって、近世末の江戸中心地では比較的規模の小さい土蔵が非常に広く普及しており、土蔵が近世都市江戸の繁栄を象徴していたことは確かであるといえる。



図1 明治期日本橋地区の木造以外建物分布図

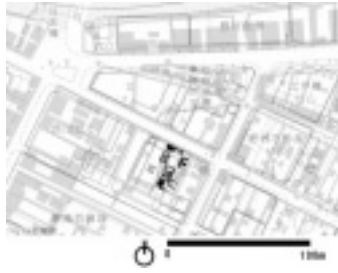


図2 日本橋一丁目遺跡と土蔵基礎遺構



図3 日本橋川瀬石町米屋田中家土蔵と
明治期の木造以外建物分布図

2-3. 近世土蔵造の特徴

近世江戸の市街地に広く普及していた土蔵の下部構造は地業として発掘されるが、上部構造がどのような形態的特徴を備えていたものかを検討したい。日本橋一丁目遺跡の発掘調査成果報告書には、日本橋周辺に実在したと考えられる土蔵の事例として米屋田中家文書に示された土蔵のなかでも敷地内で最も規模が大きい南三間四間見世土蔵の復元図が模式的に示されている（図4^{注9)}）。復元図には壁や屋根の構造の一部が示されており、近世土蔵造として普及していたと考えられる工法に依って復原されているものである。なかでも、屋根にみられる地棟と合掌と呼ばれる部材を用いた登梁構造が特徴として挙げられている。



図4 日本橋川瀬石町米屋田中家南見世土蔵復元構造図

地棟は民家にみられる牛梁に相当する部材とみられ、米屋田中家文書では調達部材のなかに名称が断面図を添えて記録されている。19世紀初頭の『家舶心得集 今西氏家舶縄墨私記・乾』^{注10)}に示される土蔵の構造図にも地棟と合掌の部材名称がみられるほか、米屋田中家南見世蔵と規模も類似している現存の伊能忠敬旧宅の土蔵にも地棟と合掌に相当する部材を用いる構造がみられる^{注11)}など、土蔵の屋根構造として広く普及していたことがうかがわれる。地棟と合掌を用いる構造は置屋根の事例であっても用いられており、合掌の上に漆喰が塗られた部分が天井となり、合掌と同様の構造の屋根が置かれる。

また、米屋田中家文書には壁の仕様に関しても半間間隔の柱の間を竹と荒縄を用いる小舞で覆い壁土を重ねる工程や、壁土の剥落を防ぐ目的で用いられる下げ緒の形状などに関する図解が詳細に記さ

れている。川越に現存する見世蔵である大澤家住宅の修理報告書にも、壁土や漆喰をよく付着させるため部材に縄を巻く様子が報告されている^{注12)}。竹等を用いる小舞や下げ緒が使用される厚い土壁と漆喰塗の仕上げを伴うことも、近世土蔵造には欠かすことのできない要素であったと考えられる。

さらに、近世土蔵造は耐火性能の面からも瓦葺屋根を備えることを大きな特徴としていたとみてよいだろう。したがって、近世末までに普及していた土蔵として完成された形態を近世土蔵造として位置づけるならば、まずは地盤改良のための地業を備えることが条件となりそうである。さらに、間隔の狭い柱の間に小舞を伴う厚い土壁が用いられていること、上部建物構造として地棟と合掌を用いる登梁構造の屋根または天井を備えること、瓦葺屋根であることを挙げることができそうである。

3. 中世末から近世初頭の土蔵

3-1. 洛中洛外図屏風に描かれた町家と土蔵

近世土蔵造として完成される以前の土蔵が、どのような成立過程をたどってきたのかを明らかにするにあたり、中世末から近世初頭の都市にみられる建築の変遷に着目してゆくこととする。17世紀に遡るとされる町家など都市の現存建物は限られており、当初のままの姿を残しているものはごくわずかである。現存する建物も改造や修復を経ており、復元修理を受けた場合であっても必ずしも建築当初の姿をそのまま示しているものではない。

そこで、中世末から近世初頭の京都を描く洛中洛外図屏風諸本に現存していない形態の町家の史料として着目してみたい。洛中洛外図屏風に描かれた建築のなかでも、画面の面積の多くを占めているものはランドマークとして突出した建物ではなく、一般の都市住民のための町家である。

従来は製作年代が比較的古い一群である第一定型諸本^{注13)}の史料価値が認められ重視されてきたが、左隻に二条城を描く近世以降の製作とされる第二定型諸本の建築表現は論じられることが少ない。第二定型諸本のなかでも、特に林原本は屋根の材質から窓、格子にいたるまでさまざまな表現を用いて町屋を描き分けており、背景の一部として画一的に並べられているのではなく都市景観の一部として十分に意識されていたと考えるべきである。

林原本の町家と土蔵に関して、まず屋根の表現に着目する。町家の屋根の表現は板葺に石置、柿葺、板葺、瓦葺、茅葺に大別される。また、棟の上は茅葺で下半分が板葺に石置と屋根材が混在する屋根や、細かい板葺とみられる表現など特徴的な少数の事例など多彩な屋根が描き分けられている。図5^{注14)}に林原本右隻の屋根材表現の内容を示す。

絵空事ともいわれるように絵画史料の描写が実態を写したものであるという確証はないが、何らかの事実や実態をもとにして描かれているとすれば、描かれているこれらの部材は富裕の印としての序列を表していると見る事ができる。

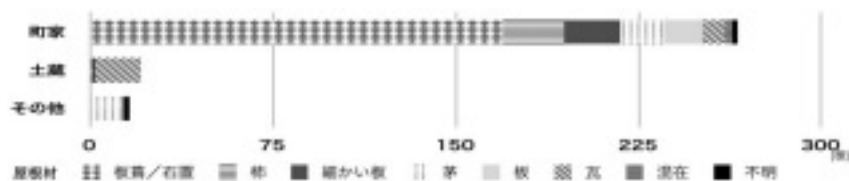


図5 洛中洛外図林原本右隻の町家と土蔵の屋根材表現

より複雑で丁寧に描かれ、事例の少ない表現を富裕の印、数多く描かれる表現を標準ととらえると、屋根材であれば最も多く描かれる板葺に石置が標準と考えられる。柿葺はより富裕であり、描かれる事例が最も少ない瓦葺が最も富裕であると仮定することができる。多様な表現がみられる二階の有無や格子窓、出梁造にも富裕の印としての意味があると考えられる。

第二定型諸本は左隻に徳川の二条城を描き、右隻に豊臣の大仏殿と豊国廟を描くことから左右の隻を対立関係とする見解もあり^{注15)}、林原本の町家表現についても左右の隻を比較する視点から各隻を代表する町家に着目してみたい。

林原本右隻の町家で最も富裕の印を備えていると考えられる町家として第二扇の町家を挙げる事ができる。この町家は六条三筋町に面しており、屋根は瓦葺で二階があり出梁造である。間口は隣接する町家と比較して広く描かれ、周辺を行き交う人も多く非常に賑やかな場所として描かれていることから^{注16)}、右隻を代表する町家と考える事で分析の手がかりとしたい(図6^{注17)})。同様に左隻からは、第五扇に描かれた瓦葺屋根で規模の大きい町家を左隻を代表する町家として着目する(図7^{注18)})。



図6 洛中洛外図林原本 右隻



図7 洛中洛外図林原本 左隻

各隻を代表する町家の屋根はウダツを伴わず比較的緩い勾配に描かれているが、実際にはどのような構造であったと考えられるだろうか。建築年代が17世紀中頃と考えられ、林原本に描かれた町家の屋根構造の実態に近い事例といえる角屋(京都市西新町)では、建築当初から同位置にあったと考えられる網代之間の断面に地棟と登梁の構造がみられる(図8^{注19)})。現存する三階蔵の事例として天和年間(1681-1683)の建築とされる旧西川家住宅の土蔵を挙げることができるが、ここでも屋根構造には地棟と合掌が用いられている(図9^{注20)})。

そこで町家の妻側の表現に着目し第一定型を含めて諸本を比較したところ、上杉本では棟木の表現はみられるが地棟の表現はみられない。しかし、勝興寺本の町家には地棟とみられる部材が数多く描かれている。林原本の左隻を代表する町家にも地棟とみられる表現が妻側に描かれるほか、いくつかの三階蔵の妻側にも地棟の表現がみられる。

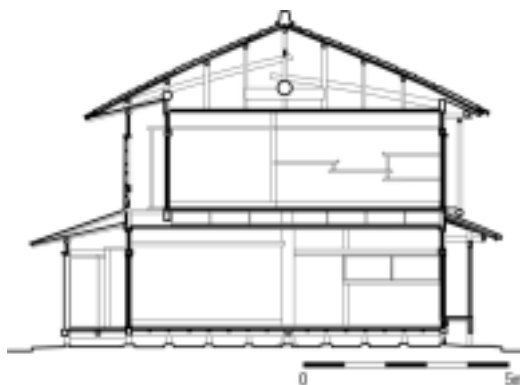


図8 角屋網代之間断面図

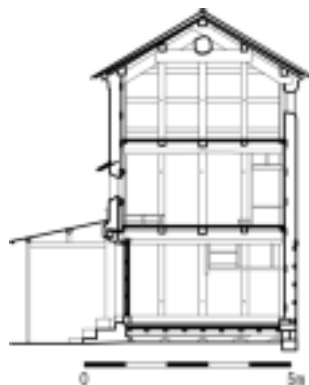


図9 旧西川家土蔵断面図

これらの表現が実際の町家や土蔵を写生したものではないことには注意を要するが、勝興寺本から林原本の景観年代に相当する17世紀前半までの町家と土蔵の屋根構造は、近世土蔵造を特徴づける屋根構造と類似していたと考えることができる^{注21)}。

また、林原本での三階蔵の屋根を子細に見てゆくと明らかに瓦ではない表現が認められる。吉田兼見『兼見卿記』^{注22)}には天正19(1591)年11月小18日庚辰に二階蔵屋根の造作に檜師が三人来たこと、23日に屋根が出来たとの記述がみられる。前後に瓦葺にかかわる造作の記述はみられない。町家に付属する土蔵ではないとはいえ、同時期の土蔵の屋根が瓦で葺かれると定まったものではなかったことがいえる。屋根材などに町家と土蔵を区別できる外観上の特徴が成立する以前は、町屋と土蔵が描き分けられない可能性も考えられる^{注23)}。

そこで『春日権現験記絵』^{注24)}の周辺に着目すると土蔵とみられる建物の周辺を囲むように焼け跡が広がっている。この土蔵は屋根まで漆喰の状態で描かれており、置屋根であったか覆屋の内にあったか^{注25)}が不明であるほか敷地境界も不明であるが、隣家との位置関係や燻っている部材からは土蔵が敷地の中心部に建てられていたことや、周辺を家屋に囲まれていたであろうことが推測できる。

元禄10(1697)年の壺吉家住宅指図には「三階」と記された土蔵がみられ、通りに面してはおらず周辺を家屋に囲まれている^{注26)}。主屋より階高が低いならば土蔵につながる内蔵が存在していたとしても描かれることはない。このような土蔵と主屋の位置関係を図10^{注27)}に模式的に示す。左側から、階高の低い内包、上部の表出、敷地奥に独立した状態を示している。内蔵がどのような形成過程をたどったものであるのかは不明な点が多いが、堀内明博氏によれば長岡京における発掘成果からは主屋もしくはクラではない居住用の建物内部の一部分がクラとして使用されてきた可能性が指摘されている^{注28)}。また、近世江戸の発掘史料に多くみられる穴蔵^{注29)}は、主屋内の床下に設けられた内包される収蔵設備であるが、同氏により京都における発掘史料にみられる方形土壇の一部は穴蔵同様の地下収蔵設備であった可能性が指摘されている^{注30)}。建物内部に貯蔵空間が存在する形態は、近世までに普及していたと推測することができる。

三階蔵が内蔵に由来すると考えるならば、左隻を代表する町家こそ内包されていた土蔵が表出した姿とみることができる。二階屋根の一部が望楼であるとも考えることもできるが、望楼の表現は別にあることや他の独立した三階蔵と窓の表現が共通していること、瓦葺の屋根の表現などから土蔵の上部だけが表出していると考えてよいだろう。この観点で勝興寺本を見直すと同様に突出した三階の表現が認められる(図11^{注31)})。

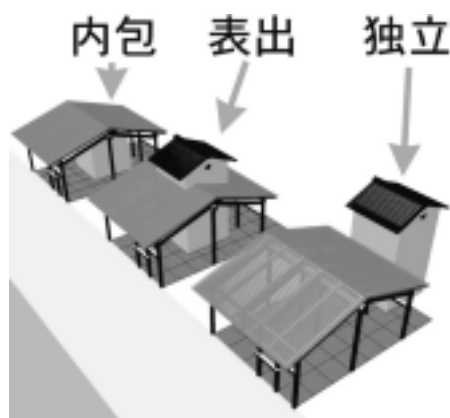


図10 主屋と土蔵の位置関係模式図



図11 洛中洛外図勝興寺本 町家

①地棟 ②板葺石置屋根 ③瓦葺屋根 ④ウダツ ⑤柿葺屋根 ⑥土間

主屋と一体化した土蔵の現存事例として、北海道函館市に現存する土蔵を挙げることができる。土蔵は二階建てであるが、屋内の廊下から各階毎にアクセスする造りで、土蔵の一階と二階は土蔵内部では連続していない(図12^{注32)})。屋根は主屋から連続しており、外観からは一体の建物である。建築年代は棟札から明治34(1901)年とみられ、二階ファサードの窓枠などに洋風の外観を備える和洋折衷様式ではあるが、当初は中庭を備えるなど平面形態に近世までの町家との関連がみられることから、土蔵を内包する形態も近代以前から継承されてきたと考えることができる^{注33)}。



図12 内包される土蔵現存事例の断面略図

3-2. 都市の三階蔵と近世城郭の櫓

第二定型洛中洛外図の左隻には近世都市の象徴といえる城郭建築が描かれており、三階蔵は近世城郭と同時期に都市に出現しているとみられる。耐火性能を持つ漆喰の壁、瓦屋根という近世土蔵造の形態的特徴は、近世城郭の櫓と共通しているといえるが、土蔵と櫓に関して成立時期や内部構造の比較は乏しい。洛中洛外図諸本の比較からは、同時代の町家と土蔵が屋根構造において類似であることがいえ、近世初頭における建物の比較には屋根構造への着目が有効と考えられる。慶長13-14(1608-1609)年ごろの建築とされる^{注34)}姫路城大天守には、地棟と登梁に相当すると考えられる構造がみられる(図13^{注35)})ほか、妻側に装飾的な地棟を見せる土蔵や町家と類似の構造を持つ事例としては熊本城監物櫓を挙げることができる(図14^{注36)})。熊本城監物櫓は元禄2(1689)年ごろに記録にあらわれるとされ^{注37)}、旧西川家土蔵とほぼ同時期の建築と考えてよさそうである。

三階蔵の成立過程から物資貯蔵建物のクラは建物の一部である蔵(内蔵)と、独立した建物の倉に分類することができる。また、住居であるイエのなかで、町家の特徴は通りに面した店を備える点にあるといえる。近世城郭の櫓に町家と土蔵に共通する屋根構造がみられることから、シロを含めた建物形態の相互関係を土蔵の形成と分化の系統として図15^{注38)}に示す。

従来から近世城郭と土蔵には漆喰塗の普及という共通点から左官技術の面で影響関係が指摘されている^{注39)}ほか、近世城郭の最も象徴的な多層の櫓が天守(天守閣)として発展した時期が16世紀後半とされることから^{注40)}天守と三階蔵の成立時期はほぼ同時期といえる。

草戸千軒町遺跡から報告されている厚い土壁を伴う土蔵につながると考えられている建物の成立は16世紀以前に遡ることが示されている^{注41)}。土蔵につながる事例として最も古い年代に存続していたと考えられる建物が都市的な発展のみられた草戸千軒町遺跡で成立していたとすれば、都市における三階蔵につながる建物の成立は城郭の櫓ならびに天守の成立に先行する可能性が推測できる。したがって、三階蔵と天守の成立過程に関しては相互の影響関係を推測し比較する必要があるといえる。

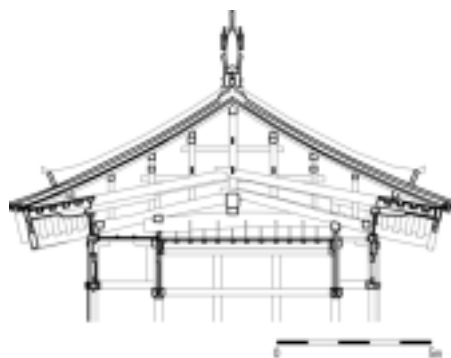


図13 姫路城 大天守最上層部分断面図



図 1 6 草戸千軒町遺跡前土蔵段階建物平面図

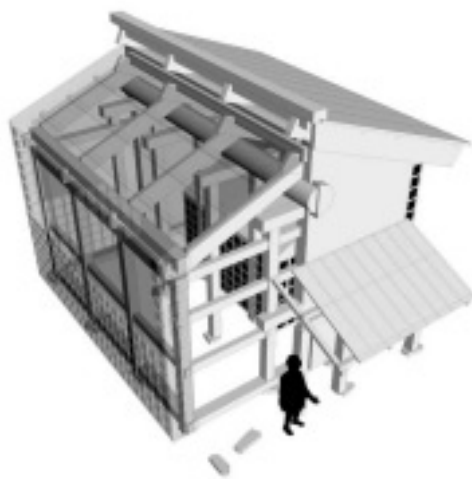


図 1 7 前土蔵段建物模式的復元図

4-2. 堺環濠都市遺跡にみられるセン列^{注45)} 建物

近世初頭の堺は商業地として経済的に繁栄したことが知られており、堺環濠都市遺跡群では 15 世紀後半ごろから、25cm から 30cm 四方で厚さ約 2.5cm の平たい瓦状の材が建物周辺の地盤に垂直に並ぶセン列建物^{注46)}が出現している。セン列は 2 段から 3 段が多く、礎石は周辺の生活面から一段低い位置にあるため、セン列は地下構造とみられる。耐火性能を目的とした海鼠瓦とは異なり地盤改良のために用いられた地業と位置づけることもできそうである。

堺のせん列建物は敷地内の奥に独立している事例が多いことから土蔵とされ、茶道具や陶磁器および炉壇を伴う事例がみられることから茶事を行う蔵座敷とも考えられている。

SKT772 地点のセン列建物(SS201)は敷地内の奥に独立している比較的規模の小さい建物であることから土蔵とされ、焼土層にあることから 1615 年の戦乱で焼失したとされる^{注47)}。外周部には半間間隔の柱間に竹を用いる小舞が残存しており近世土蔵造と類似する構造であったと考えられる。上部建物構造に関しては不明であるが、平面全体に根太が並べられていたとみられ、内部に柱を伴わない比較的規模の小さい近世土蔵造建物と上部建物構造も類似していることが推測できる。

4-3. 中世末から近世初頭の城郭にみられるセン列建物

せん列建物は堺環濠都市遺跡に土蔵として多数報告されているほか、中世末の城郭建築などに名称は異なるが存在が知られている^{注48)}。近年、城郭の天守台に相当する位置にせん列建物を伴う置塩城や端谷城などの事例が報告され、中世末の城郭建築に都市や寺院と共通する技術的背景が存在したことが山上雅弘氏により指摘されている^{注49)}。

置塩城は播磨守護赤松氏の後期居城として知られ、16世紀後半に大規模な屋敷群が構築されており、セン列建物は城郭全体を代表する象徴的な建物であったと考えられている^{注50)}。端谷城も赤松氏に関係が深い16世紀後半の衣笠載景(のりかげ)の居城とされる。端谷城跡のセン列建物は本丸の北西部の物見台に位置し、建物西側に10領ほどを推定できる甲部品が認められている^{注51)}。建物西側床面には転ばし根太の間に石が詰められていたものとされ、近世土蔵造の地業との関連が推測できる。甲冑が発見された西側半分にのみ石敷と根太がみられることから、土蔵が建物内部の施設に由来することと関連する可能性も考えられる。また、東側に並ぶ礎石配置は草戸千軒町遺跡の前土蔵段階建物同様に、棟持柱ではなく地棟を伴う屋根構造を推測できる^{注52)}。

4-4. セン列建物の分布と城郭建築の転換

播磨周辺および近畿地方一帯から城郭にセン列建物を伴う事例が報告されているほか、大内氏館や京都市内、さらに根来寺などセン列建物の報告は都市や城郭に留まらない。しかし、堺環濠都市遺跡の事例では1615年の焼土層以降はセン列建物が急速に衰退したと考えられている。セン列建物が普及していた年代を都市や建築に生じた変化と比較する目的で、近畿地方周辺の主な城郭とセン列建物を伴う事例の分布図を作成し、主な城郭の年代と対照したものを図18^{注53)}に示す。

まず、1600年前後を境界として近世城郭とそれ以前の城郭が断絶している様子が明瞭に現れていることに着目できる^{注54)}。セン列建物を伴う事例の多くが近世城郭の発展する17世紀初頭には廃絶するか衰退しており、近世都市へは引き継がれていないことが推測できる。一方で、近世城郭の端緒とされる安土城はセン列建物が普及していた時期に建築されていることがわかる。

同様に16世紀末から17世紀初頭は、洛中洛外図諸本の表現に大きな変化が認められる第一定型諸本の景観年代と第二定型諸本の景観年代の間の期間にも相当する。第一定型諸本には近世城郭である二条城が描かれないほか、土蔵と考えられる独立した建物の表現も知られていないが、第二定型諸本には林原本をはじめとして多くの土蔵が描かれている。セン列建物の発展、近世城郭の成立、土蔵の普及に伴う都市と建築の大きな変容はほぼ同時期に生じているととらえてよさそうである^{注55)}。

城郭のセン列建物も上部構造を伴う現存事例は知られていないが、洛中洛外図屏風林原本に描かれる三階蔵を内包する町屋同様に現存の知られていない多様な建築形態が存在していた可能性が推測できる。近世土蔵造の成立過程には、失われた建築形態の多様性と相互の影響関係が介在していたと考えられる⁵⁶⁾。

5. 近世土蔵造の成立と東アジア

洛中洛外図諸本の比較から、17 世紀までのほぼ同時期に成立した近世都市を代表する建物である土蔵、町家、近世城郭の櫓は、屋根構造が地棟と合掌を用いた登梁構造である点が共通しているといえる。また、土蔵につながる三階蔵は建物内部から発展したと考えられ、土蔵の分離独立と経済的繁栄や権力の所在を示す象徴性の強い形態の完成が都市の区画された敷地内での建物構成を決定する強い要因となったと考えられる。三階蔵の出現が近世京都における都市空間の変容を促したとみることができ、近世城下町の成立と土蔵の普及には強い影響関係を推測することができる。

土蔵につながると考えられる技術は草戸千軒町遺跡の事例から遅くとも 15 世紀後半までには成立していたとみられることから、都市の土蔵の発達には城郭の櫓に先行していると推測できる。都市の土蔵と中世末の城郭の象徴的建物に共通して用いられるセン列建物の存在は、近世城下町の構成要素である町屋と土蔵および近世城郭の櫓における相互の影響関係を明らかにするうえで大きな意味を持つと考えられる。

近世城郭の成立背景に関しては従来から石垣の普及の面から朝鮮半島との影響関係が指摘されているほか、城郭の石垣として最も古い年代の建造とされる観音寺城の石垣は寺院の石垣と関連することが指摘されている^{注57)}。琉球最古の王陵とされる浦添ようどれでは 15 世紀ごろまでに改修された石垣が報告されており^{注58)}、王陵内に現存する石棺には同時期の日本の仏教建築との強い影響関係を推測することができる特徴がみられる^{注59)}。直接的な影響関係を指摘することに困難はあるが、土蔵の起源を明らかにするに際して、地理的には中世琉球を含む広い範囲での比較が必要であるといえ、建築形態の面から町屋および民家と城郭建築の関係に加えて従来は城郭建築とは異なる背景のもとに成立普及したとされる寺院建築との関係も検討すべきであると考えられる。

注1) 小松成美他編 『続日本絵巻大成 15 春日権現験記絵 下』 (中央公論社、1987. 7)

注2) ベルリン東洋美術館所蔵 東京都江戸東京博物館編 『大江戸八百八町展 江戸開府 400 年・開館 10 周年記念』 (東京都江戸東京博物館、2003. 2)

注3) 昇覚寺鐘楼保存修理工事報告書編集委員会編 『昇覚寺鐘楼修理保存・発掘調査報告：江戸川区指定有形文化財』 (昇覚寺鐘楼保存修理委員会、1985. 11)

注4) 牡蠣殻地業や貝殻地業、炭を敷き詰めるといった地業は除湿を目的としているとされることがある。構造を伴う地業と併用される事例もみられる。

注5) 日本地図センター 『復刻 参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図』 (1984. 10)

地図資料編纂会編 『江戸-東京市街地図集成：1657(明暦3)年～1895(明治28)年 5 千分の1』 (柏書房、1988. 11)

『国土地理院 1 万分 1 地形図 日本橋』 (1998)

小規模な土蔵の分布状況を把握することが目的であるため、本図の作成にあたっては現在の地形図による敷地境界との比較は十分に行っていない。

注6) 高屋麻里子・横田佳代子・玉井哲雄 「日本橋一丁目遺跡の発掘遺構 江戸日本橋地区の土蔵に関する研究 その1」 日本建築学会大会学術講演梗概集 pp. 459-460 (日本建築学会、2003. 9) より

注7) 江戸東京博物館所蔵

注8) 「日本橋一丁目遺跡の発掘遺構 江戸日本橋地区の土蔵に関する研究 その1」、前掲より

注9) 玉井哲雄 「発掘遺構土蔵の復元的考察」 『東京都中央区日本橋一丁目遺跡-中央区日本橋一丁目 4 番及び 6 番土地開発事業に伴う緊急発掘調査報告書』 (日本橋一丁目遺跡調査会、2003. 5) 指図によれば手前側の小屋は便所、雪隠および控室であり、見世蔵の入口は引戸となっている。

- 注10) 生活史研究所編 『家舶心得集 今西氏家舶繩墨私記・乾』 (生活史研究所、1985)
- 注11) 文化財建造物保存技術協会編 『史跡伊能忠敬旧宅(土蔵)修理工事報告書』 (佐原市教育委員会、1985. 10)
- 注12) 文化財建造物保存技術協会編 『重要文化財大沢家住宅保存修理工事報告書』 (大沢東洋、1992. 12)
- 注13) 洛中洛外図諸本は近世以前の制作とされ上京と下京を左右の隻に描く歴博甲本(町田本)、上杉本、東博模本などを含む第一定型と、近世以降の制作とされる第二定型に分類される。
- 注14) 拙稿 「洛中洛外図屏風に描かれた町屋と土蔵の変遷」 日本建築学会計画系論文集 No. 609, pp. 1547-1552 (日本建築学会、2006. 9) 「その他」には百姓家などを含む。「細かい板」は土葺葺と考えられるが検討を要する。町家にみられる茅葺は瓦葺とほぼ同数であるが、主に画面周辺部に分布している。土蔵には「細かい板」と「柿(コケラ)」が1棟づつみられる。なお、コケラはフォントの問題からPCの環境によって柿(カキ)の字が表示されるが本来の字形は異なる。
- 注15) 狩野博幸 「洛中洛外図」と風俗画 『洛中洛外図 都の形象-洛中洛外の世界-』 京都国立博物館編 (淡交社、1997. 9)
- 注16) 六条三筋町は現在の西新町(島原)に移転する以前の遊郭地として知られている。右隻を代表する町家とした建物が遊郭建築である可能性は高いが、林原本で経済的繁栄が描かれている町家の多くが遊興施設と考えられる表現を伴う。町家の営業内容と建築形態の関係を検討する必要はあるが、ここでは類型表現のひとつとして扱う。
- 注17) 京都国立博物館編 『洛中洛外図 都の形象-洛中洛外の世界-』 (淡交社、1997. 9) より作製。
- 注18) 同上
- 注19) 京都府教育委員会編 『重要文化財角屋修理工事報告書』 (京都府教育委員会、1971. 10) より作製。
- 注20) 滋賀県教育委員会編 『重要文化財 旧西川家(主屋・土蔵)修理工事報告書』 (滋賀県教育委員会、1988. 6) より作製。 建絵の地棟を受ける部材には「鳥斗受」の記述がみられ、部材名称には一考を要する。
- 注21) 黒田日出男 『洛中洛外図を読む-人々のく姿の変貌- 絵画ものがたり日本列島に生きた人々たち5』 (岩波書店、2000. 11)
- 藤岡通夫 『京都御所「改訂」』 (中央公論美術出版、1987. 10)
- 景観年代について、上杉本は天文16(1547)年から永禄6(1563)年ごろとし、勝興寺本を慶長13から14(1608-1609)年ごろとした。林原本については内裏前の行列を徳川和子入内行列とみることから景観年代を元和6(1620)年ごろとする黒田日出男氏の説に従っている。
- 注22) 吉田兼見 『兼見卿記』 東京大学史料編纂所蔵の謄写本による。
- 注23) 17世紀前半の段階で土蔵と町家が屋根構造において未だ独自の形態に分化していないならば、より以前の時点ではその描かれた屋根だけでは建物の種類を特定することが難しい形態であった可能性が考えられる。
- 注24) 『続日本絵巻大成 15 春日権現験記絵 下』、前掲書
- 注25) 『春日権現験記絵』の土蔵が建物内部とする指摘は既出である。
- 注26) 伊藤鄭爾 『中世住居史 封建住居の成立〔第二版〕』 (東京大学出版会、1991.)
- 注27) 拙稿 「町家と土蔵の変遷-林原本『洛中洛外図屏風』の画像史料研究プラットフォームによる詳細閲覧より-」 『2002-2004 年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究代表者黒田日出男 第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究 研究成果報告書』 (2005. 3)
- 注28) 堀内明博 「長岡京出土の特殊建物遺構に関する2・3の覚え書き-所謂甕据付掘立建物の類型別分析について-」 『長岡京古文化論叢 II』 中山修一先生喜寿記念事業会編 (三星出版、1992. 7) 用途をクラと限定できない建物内に貯蔵用とみられるカメを据えた痕跡がみられる事例が報告されている。
- 注29) 古泉 弘 『江戸を掘る 近世都市考古学への招待』 (柏書房、1983. 9) 都立一橋高等学校遺跡にみられる穴蔵は地下水位の高い江戸に対応する目的で木製であるとされ、防水の工夫が施されている状態が報告されている。江戸における穴蔵は土蔵と同様に貯蔵施設として広く普及していたとされる。
- 注30) 堀内明博 「穴蔵に関する遺構群をめぐって-中世から近世にいたる京都検出の地下式土坑群の類型化と変遷-」 関西近世

考古学研究 III (関西近世考古学研究会、1992. 12)

注31) 注16)、前掲書より作成

注32) 千葉大学建築史研究室実測調査 (2003 年 6 月 22 日) による。

注33) 續伸一郎氏より、堺環濠都市遺跡において SKT701、SKT787 など二棟のセン列建物が連続すると考えられる事例がみられることをご指摘いただいた。敷地内での土蔵位置の変遷を明らかにするうえで貴重な事例と考えられる。

注34) 太田博太郎編 『日本建築史基礎史料集成 15 城郭 II』 (中央公論美術出版社、1982. 7) より作製。

注35) 同上

注36) 太田博太郎編 『日本建築史基礎史料集成 14 城郭 I』 (中央公論美術出版社、1978. 7) より作製。

注37) 同上

注38) 高橋康夫 『京町家・千年のあゆみ 都にいきづく住まいの原型』 (学芸出版社、2001. 6)

伊藤鄭爾 『日本の倉』 (淡交社、1973. 4)

図の水平方向は時間軸を示し、垂直方向は相対的な機能の位置付けを示す。三階蔵はイエに近く、土蔵は独立したクラに近いとする。

注39) 谷直樹 「京の町並」 『近世風俗図譜 3 洛中洛外 (一)』 (小学館、1983. 4)

注40) 城戸 久 『日本城郭史研究叢書 6 名古屋城と天守建築』 (名著出版、1981. 8)

注41) 鈴木康之 「中世の町における建物復原をめぐって - 広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から」 『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究 研究成果報告書 研究代表者 玉井哲雄』 (2001. 3)

注42) 棟持柱の使用により、屋根の中心となる棟を直接柱で支えるために建物規模が棟持柱の高さに制限されるほか、建物内部の特に階上の屋根下空間の利用も制限される。近世土蔵造の二階や中世京都の町屋などにみられる厨子二階では、登梁構造により屋根下 (小屋裏) 空間が広く利用されていたと考えられる。

注43) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書 V』 (広島県教育委員会、1996) スケールの位置と図版の方向を模式的復元図に合わせて変更している。

注44) 拙稿 「近世土蔵造の成立と普及」 日本建築学会大会学術講演梗概集 pp. 311-312 (日本建築学会、2006. 9)

注45) 「セン」は中国では焼成煉瓦を指し、土偏または石偏に専の字が用いられる。多くは土偏の字が用いられるが史料により異なる。本稿では土偏のセンを表示できない PC 環境で作成しているため仮名表記で統一している。

注46) 續伸一郎 「堺の町と町屋」 『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究 研究成果報告書 研究代表者 玉井哲雄』 (2001. 3)

堺市埋蔵文化財センター編 『堺市文化財調査概要報告 第102冊』 (堺市教育委員会、2004. 2) ほか
堺環濠都市遺跡群では多数の土蔵から大量の上質な貿易陶磁器などが報告されている。

注47) 堺市埋蔵文化財センター編 『堺市文化財調査概要報告 第95冊』 (堺市教育委員会、2001. 12)

注48) 土山健史 「セン列建物について」 『関西近世考古学研究 III』 (関西近世考古学研究会、1992. 12) 土山氏の「土」は「土の右上に点」の字。

注49) 山上雅弘 「関西周辺の戦国末期城館における建築技術動向」 『森宏之君追悼城郭論集』 (織豊期城郭研究会、2005. 7)

注50) 山上雅弘 「守護の城、置塩城跡の発掘調査成果について」 『日本考古学』 (日本考古学協会、2005. 5)

注51) 神戸市教育委員会編 『端谷城跡 - 平成 17 年度 現地説明会資料 -』 (神戸市教育委員会、2005)

黒田恭正 「神戸市端谷城跡の発掘調査」 城郭談話会発表資料 (2006. 3)

端谷城のセン列建物の状況に関しては黒田恭正氏のご教示による。

注52) 地下構造としてのセン列だけでなく上部建物構造が都市の町家や土蔵と共通する可能性が考えられる事例であり、今後の調査報告が待たれる。

- 注53) 『国土地理院 1:1,000,000 日本-II』 (国土地理院、1993.8) より分布図を作成。
- 相生市教育委員会 『感状山城跡 —第一次発掘調査概報—』 (感状山城跡調査委員会、1986.3)
- 相生市教育委員会 『感状山城跡 —第二次発掘調査概報—』 (感状山城跡調査委員会、1987.3)
- 相生市教育委員会 『感状山城跡 —第三次発掘調査概報—』 (感状山城跡調査委員会、1988.3)
- 大阪府教育委員会編 『高屋城址発掘調査概要 VI』 (大阪府教育委員会、1980.3)
- 置塩城跡調査委員会編 『夢前町文化財調査報告集第6集 置塩城跡総合調査報告書』 (夢前町教育委員会、2002.3)
- 鹿児島県教育委員会・沖縄県教育委員会編 『都道府県別 日本の中世城館調査報告書集成 第21巻 九州地方の中世城館<2> 鹿児島 沖縄』 (東洋書林、2002.8)
- 同志社大学歴史資料館編 『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書 —室町殿と近世西立売町の調査—』 (同志社大学歴史資料館、2005.3)
- 羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群 VI 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 10』 (羽曳野市教育委員会、1985.3) 高屋城のセン列建物は「セン貼建物」として報告されている。
- 羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群 X 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 18』 (羽曳野市教育委員会、1989.3)
- 羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群 XV 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 30』 (羽曳野市教育委員会、1994.3)
- 兵庫県教育委員会・和歌山県教育委員会編 『都道府県別 日本の中世城館調査報告書集成 第15巻 近畿地方の中世城館<4> 兵庫 和歌山』 (東洋書林、2003.4)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第二五巻 滋賀県の地名』 (平凡社、1991.2)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第二七巻 京都市の地名』 (平凡社、1979.9)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第二八巻I 大阪府の地名 オンデマンド版』 (平凡社、2001.7)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第二八巻II 大阪府の地名 オンデマンド版』 (平凡社、2001.7)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第二九巻I 兵庫県の地名』 (平凡社、1999.10)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第二九巻II 兵庫県の地名』 (平凡社、1999.1)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第三一巻 和歌山県の地名』 (平凡社、1983.2)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第三六巻 山口県の地名』 (平凡社、1980.2)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第四四巻 熊本県の地名』 (平凡社、1985.2)
- 平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第四五巻 大分県の地名』 (平凡社、1995.2)
- 村田修三編 『図説 中世城郭事典 第三巻』 (新人物往来社、1988.7)
- 山口市教育委員会文化財保護課編 『山口市埋蔵文化財年報 1 —平成 12 年度版—』 (山口市教育委員会文化財保護課、2002.3)
- 山口市教育委員会文化財保護課編 『山口市埋蔵文化財調査報告第 58 集 大内氏館跡 X 大内氏遺跡発掘調査報告 X IV』 (山口市教育委員会文化財保護課、2000.7)
- セン列建物を伴う事例については注 47)、注 48) 前掲資料による。図 18 では城郭などの存続が明瞭でない期間や廃城後の存続は破線で示している。実線表示であっても築城年代について明瞭ではない事例も含む。
- 注54) 千田嘉博・矢田俊文編 『能登七尾城と加賀金沢城 —中世の城・まち・むら—』 (新人物往来社、2006.3) 戦国期までの城郭の変遷と近世城郭への移行の大きな流れとの関連が推測できる。一国一城令による廃城が大きな要因とされるが、播磨周辺の事例では近世に存続している城郭の多くが一国一城令以前に新たに築城されており、中世から引継がれている城郭ではないと考えられる。近世城郭と近世土蔵造が完成する過程との関係を明らかにすることは今後の課題である。
- 注55) 同様の断絶は中世琉球では三山統一にともなう浦添グスクから首里城への政治拠点の移動にもみることができる。中世琉球との比較はグスクとの関係も含めて今後の課題である。

注56) 広島県埋蔵文化財調査センター編 『薬師城跡』 (広島県埋蔵文化財調査センター、1996. 3)

鈴木康之氏からご教示頂いた。報告書では馬小屋ではないかとされているが、城郭の主要な位置にありセン列は伴わないが床面に転ばし根太が用いられていたと考えられ、部材の間を石で埋めている事例が報告されている。セン列建物にも同様の床面を持つ事例がみられることから何らかの関連がある可能性を御示唆いただいた。近世土蔵造の特徴として地業を伴うことが挙げられることから、内部床面の構造も比較する必要がある。

注57) 千田嘉博・小島道弘 『歴博フォーラム 天下統一と城』 (塙書房、2002. 3)

注58) 浦添市教育委員会編 『浦添市文化財調査研究報告書；第32集 浦添ようどれ. 1(石積遺構編) 史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告』 (浦添市教育委員会、2001. 3)

注59) 拙稿 「浦添ようどれの石棺にみられる建築表現と王陵の変遷」 日本建築学会計画系論文集 NO. 600 pp. 191-196 (日本建築学会、2006. 2)

五十子陣は、享徳3年（1454）12月に東国で勃発した享徳の乱において、古河公方方に対抗するために上杉氏方（京方）が構築した陣である。所在地は、現在の埼玉県本庄市東五十子・西五十子近辺であり、おおよそ上武国境に位置している。前回の報告では、文書・記録に基づいて、五十子陣の機能していた時期を概ね15世紀の第3四半期であると論じた〔森田 2006a〕。今回の報告では、1 陣の規模・2 在陣した領主・3 陣の大局的な構成・4 陣の内部構造・5 陣に集結した人々、について論じる。

1 陣の規模

〔史料1〕「松陰私語」第一（『群馬県史 資料編5 中世1』798頁下段～799頁上段）

先年武州五十子陣諸家退陣之砌、当方山内エ被仰届子細之一儀有之、然ヲ明純為御覚悟、当方之無首尾出来故也、明応三年（ママ）正月十八日寅一点也、諸家各払陣、寔動天地焼虚空為体、其
余煙三日迄ニ不相止、天下無双之動揺也、

〔史料2〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編5 中世1』820頁上段）

戦陣四方ニ打廻而不及眼力ニ、野獸逃走而迷地、群鳥翔飛而倦雲ニ、加之烟塵乱而昼昏、烽火上而夜光、寔鬪靜堅固之堺也、陣壘之形勢者八陣払口鳥雲合天、目下ニ見之不知其限、

〔史料3〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編5 中世1』820頁下段）

五十子陣之事、官（管）領上杉 天子之御旗依申請旗本也、当方者京都公方之御旗本也、桃井讃岐守・上杉上条・八条・同治部少輔・同形（刑）部少輔・上杉扇谷・武上相之衆・上杉庁鼻和・都合七千余騎、五十子近辺榛沢・小波瀬・阿波瀬・牧西・堀田・瀧瀬・手斗河原ニ取陣、戴星ヲ負月ヲ、手斗河原日々打出々々相動、雖然隔大河間其動不輟、京都方・関東方終日見合々々入馬誠勝劣未定之大陣也、

五十子陣に関係すると考えられる遺跡は、北東端の東五十子城跡遺跡から南西端の東本庄遺跡まで2.5km、本庄台地東南方の六反田遺跡を含めると南北にも約1.0kmの範囲に分布している〔太田 2005〕。

〔史料1〕では、上杉氏方が陣から撤退した文明9年（1477）1月の状況について、撤退の際に放火した煙が三日間止まなかったと記されている。松陰の記載に誇張はあろうが、陣の規模が相当に大きかったことは窺い知れる。

〔史料2〕は、文明4年（1472）に上杉氏方に対して利根川北岸に布陣した、古河公方方の陣容についての記載である。これによると、古河公方方の陣はその範囲が確認できない程広い。また、軍勢の活動のために「烟塵（煙や塵）」が乱れて昼でも暗く、陣内を照らす「烽火（のろし）」によって夜は明るく、陣は八陣から構成されていたという。松陰の文飾については考慮する必要があるものの、陣中において土煙の立っていた様子や夜も明かりがともされていた状況は、五十子陣においても同様であつたろう。

また、〔史料3〕は逆に同時期の上杉氏方の陣容についての記載である。古河公方方が利根川北岸に布陣したのに対して、上杉氏方は榛沢・小波瀬・阿波瀬・牧西・堀田・瀧瀬・手斗河原に布陣した（後掲の地図参照）。文献史学の側ではこれらの地域も五十子陣の一部と認識しており〔峰岸 2005 など〕、今後、この範囲においても陣に関する遺跡を確認できるかもしれない。

2 在陣した領主

五十子陣には、上杉氏方である山内上杉氏（上野・武蔵・伊豆守護、関東管領）や越後上杉氏（越後守護）、扇谷上杉氏（相模守護）の統率する軍勢が主に在陣していた（後述）。それぞれの軍勢には、守護分国内に拠点のある領主が多数動員されていたと推測される。しかしながら、文書・記録によって、それらの全体像を把握することは困難である。したがって、ここでは五十子に在陣していた軍勢の全体像を推論するために、享徳の乱の諸合戦で活動していたことが将軍の御内書などによって確認できる領主を列挙したい。

御内書などによって確認できる合戦とは、長禄3年（1459）10月の武州太田荘合戦、上州羽継原・海老瀬口合戦、応仁2年（1468）上州綱取原合戦等である。この史料によって確認される領主は、あくまでも上記の合戦に参加していた。しかしながら、それらの領主を統率していた関東管領上杉氏以下の主要な武将は〔史料3〕にもあるように、五十子陣に在陣していたことが多かったと考えられる。そのため、彼らも同様に在陣していたと推測されよう。なお、この御内書などから上杉氏方に動員されていた領主を列挙することは〔峰岸 1989〕によって既になされており、ここではその成果を若干修正して示した。

〔上杉氏一門〕

○関東管領（山内）・扇谷・越後・上条・八条など

〔長尾氏一門〕

○越後守護代・上田・総社・白井・足利など

〔越後国〕

○毛利安田・中条・色部・本庄・飯沼・石川・三儲

〔上野国〕

○大類・後閑・尻高・神保・高山・浦野・沼田・小幡・長野・善・岩松

〔武蔵国〕

○豊島・大石・浅羽・太田・高埴

〔その他および不明〕

○小山・二階堂・渡辺・芳賀・野沢・伊南・行方・池田・吉沢・中山など

以上のように、越後・上野・武蔵などから広範に領主の動員されていたことが確認できる。では、このような広域からの領主（軍勢）の集結と出土遺物との相関関係は、どのようなものであろうか。陣関係遺跡から多量に出土しているかわらけを例にとると、越後では京都系の手づくねかわらけが出土しているが、五十子陣に関する遺跡から出土しているかわらけはすべてロクロ成形であるという〔太田 2005〕。そして、陣において出土するかわらけの多くは、山内上杉氏・越後上杉氏の分国範囲内に多く出土するとされる「山内上杉氏のかわらけ」とされる〔田中 2005〕。上野及び武蔵で出土する「山内上杉氏のかわらけ」の生産地が〔田中 2005〕の推測の通りに、上野国南西部から武蔵国北部あたりであれば当然かもしれないが、越後勢は陣中に手づくねかわらけを持ち込まなかったことになろう。

3 陣の大局的な構成

〔史料4〕「松陰私語」第五（『群馬県史 資料編5 中世1』839頁上段）

因之翌年正月十八日、五十子諸将退陣、越州陣者白井張陣、山内者阿内二張陣、河越ハ細井口ニ張陣、

〔史料5〕「松陰私語」第五（『群馬県史 資料編5 中世1』840頁上段）

為愚僧使山内・典厩・河越両三所へ被越、

〔史料6〕「松陰私語」第五（『群馬県史 資料編5 中世1』840頁下段）

三大将へ被申合子細申届、只今打帰也、

〔史料7〕「香蔵院珎祐記録」長禄4年（1460）12月条（『神道大系 鶴岡』187頁）

一社家ニハ上州五十子ヨリ今月十五日御上アリ、両上杉同越後大将ニモ御対面悉在之テ御上在之、

〔史料8〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編5 中世1』818頁上段）

惣兵談於此儀者大切也、不廻日時、向彼口可有進発治定、其時之惣大将者源慶院殿也、為御代官御息男兵庫頭殿・桃井讃岐守・上杉治部少輔・同名刑部少輔・武州之成田以下為先、当方二千五百余騎、向児玉塚発向、

文明9年（1477）1月、前年6月に起こった長尾景春の乱のため、上杉氏方は五十子陣から撤退した。その際、越後勢は白井（群馬県渋川市）、山内上杉氏勢は阿内（群馬県前橋市南部）、扇谷上杉氏勢は細井（群馬県前橋市北部）へ進んだ〔史料4〕。その他に新田岩松氏が金山城（群馬県太田市）へ移ったこと等が確認できるものの、上杉氏方の主力は大きくこの3方面に分かれて進軍したと考えられる。これらの軍勢には2で確認したように、それぞれの守護分国内の在地領主が広範に動員されていたと考えられる。

五十子陣からの撤退後、岩松氏は自身の軍事行動をどのようにとるべきなのか上杉氏方の意向をうかがうために、松陰を使者として赴かせた。その際に松陰は「山内・典厩・河越両三所」に行ったと記しており〔史料5〕、この「山内（上杉顕定）」・「典厩（上杉定昌）」・「河越（上杉定正）」を「三大将」とも表現している〔史料6〕。

以上のように五十子陣からの撤退後、同陣に滞在していた上杉氏方は大きく3軍勢に分かれて行動していた。そして、このような軍勢の編制のあり方は撤退の際だけのことでなく、五十子に在陣中からある程度これに準じていたのではないかと推測されよう。

やや遡る長禄4年（1460）12月、前年4月に鎌倉の鶴岡八幡宮若宮別当に還補された弘尊は、還補の謝意を兼ねて五十子に赴いた〔佐藤1989〕。そこで弘尊が対面したのは、「両上杉」である山内上杉房顕と扇谷上杉持朝、そして「越後大将」である越後守護上杉房定であった〔史料7〕。前月にも弘尊は「五十子」と「河越（埼玉県川越市）」を訪れ、前年（1459）11月には持朝は「河越」に陣を取っていたとある（「香蔵院珎祐記録」）。したがって、持朝（「河越」）は常に五十子に在陣していたわけではなく、河越陣と五十子陣との間で行き来があったのだろう。

また、越後上杉氏に関しても「白井勢」（「正木文書」『群馬県史 資料編5 中世1』309頁）と表記され、文明13年（1481）夏頃の成立と推定されている「（初編）老葉」には、「上杉典厩（定昌）の陣所、上野国白井にて」とある。この「（初編）老葉」の句については〔両角1981〕に言及があり、文明13年（1481）夏以前の句であることから、定昌は享徳の乱の最中に白井で連歌会を張行していたことになる（都鄙合体は文明14年）。また、五十子からの撤退後、上杉氏方は広馬場（群馬県榛東村）に陣を張っていた。「太田道灌状」によると、そこでは国分（群馬県高崎市）に移って敵方を後方から攻め立てることが検討されたが、「越後衆」は白井を後方とする合戦でなければ同意できないと反対している。以上のように、越後勢にとって白井は重要な拠点であり、白井と五十子陣との間で行き来があったのだろう。ただ、五十子に在陣している時には、「両上杉同越後大将」と表現されるように、この三者が陣の中心的な立場にあったことは間違いない。そして、これは先に確認した撤退時の軍勢編制とも共通することから、この三者の人的構成が五十子陣内の軍勢のあり様にも反映されていたと

考えられる。

ところで、これまでの研究によって、五十子には京都幕府や将軍との直接的な結び付きを背景として、京都から下ってきた武将の在陣していたことが指摘されている〔家永 1995 など〕。〔史料3〕には文明4年（1472）の時点で五十子陣を構成していた主要な武将が列挙されており、そこには詳細の不明な人物もいるものの、京都の八条上杉家（「八条」）や扇谷上杉氏の系統で京都とのつながりの深い上杉朝昌（「同刑部少輔」）、堀越公方の側近として京都から伊豆へ下っていた犬懸上杉氏の系統である上杉政憲（「同治部少輔」）などが確認できる〔家永 1995・黒田 2004・湯山 1989・森田 2004〕。いずれの人物も京都幕府との結び付きが確認されている。

では、これらの人物の率いていた軍勢の規模は、どの程度のものであったのだろうか。寛正6年（1465）から文正元年（1466）にかけて、上杉政憲率いる堀越公方府の軍勢は世田谷吉良成高・今川小鹿範満・宅間上杉憲能らを「同心」させて五十子で軍事活動していた〔家永 1995〕。これら扇谷上杉氏と関係の深い諸将をまとめ上げる政憲の卓越した立場は認められるものの、京都下りの奉行人の多い堀越公方府の軍勢自体がそれほど大規模であったとは考え難い。また、上杉朝昌は上杉氏方の五十子陣からの撤退後、先にみた3軍勢とは別に三浦介らとともに江戸城に在城していた〔黒田 2004〕。そして、後の文明9年（1477）4月13日、道灌はこの江戸城から豊島氏などに討って出て、大きな戦果を挙げている。したがって、江戸城に拠っていた朝昌の旗頭としての政治的位置は軽視できないものの、主力はやはり道灌の軍勢であったのだろう。

さらに、この政憲や朝昌、桃井讃岐守は文明3年（1471）の児玉塚（栃木県大平町）への進攻で行動をともにしている〔峰岸 2005〕。この時には、佐野氏以下の面々が裏切るといふ巷説が流れ、それにより岩松氏の他に桃井氏以下の朝昌や政憲が本陣五十子から出陣した〔史料8〕。上杉氏方の主力は先遣部隊の長尾景信・同景春・同忠景や上・武の一揆であっただろうが、「於此儀者大切也」という状況の時には、陣内で有力な上杉氏一門らが出兵したのである。また、京都から下ってきたと考えられる八条上杉氏の場合、将軍から発給された御内書に「房定注進到来」と記されていることが確認できる。よって、八条家の軍事活動は、越後守護上杉房定の注進によって将軍へと伝達されていたことになる。八条家の越後における政治的地位の高さは認められるものの〔森田 2004〕、関東での軍事活動では越後守護の率いる軍勢と一体となって行動することが多かったと推測される。

このように、京都との結び付きから関東へ下ってきた武将の場合、陣における地位は高かったようであるが、必ずしも軍勢の規模は大きくなかったようである。したがって、越後守護職や上野守護職といった公権力に基づいて在地の領主を広範に動員した上記の3軍勢の規模に比べると、彼ら京都下りの武将の率いる軍勢の規模が特段に大きかったとは認め難い。彼らの政治的地位の高さを考慮に入れる必要はあるものの、統率された軍勢の規模を上記3軍勢のいずれかと同等程度であると考えする必要はなからう。

以上から、五十子陣を大局的に捉えると、陣は山内上杉氏・越後上杉氏・扇谷上杉氏のそれぞれによって統率された、大きく3軍勢によって構成されていたと考えられる。

4 陣の内部構造

〔史料9〕「松陰私語」第五（『群馬県史 資料編5 中世1』839頁下段）

其後越州典厩へ参処ニ有陣払、典厩者飯沼次郎左衛門陣所へ被移、愚僧懸而対面アリ、

文明9年（1477）1月、上杉氏方の主力は五十子陣から上野国へ撤退した。3で確認したように、この時に松陰は越後上杉定昌のもとにも赴いていた。〔史料9〕によると、松陰が「典厩（定昌）」の

もとへ赴いたところ、定昌は既に陣払いをしており、「飯沼次郎左衛門」の陣所へ移っていた。この「飯沼次郎左衛門」とは飯沼輔泰のことであり、五十子陣における定昌の近臣であった〔森田 2006b〕。輔泰は阿賀北の黒川氏からの書状を定昌に対して「披露」していたように、定昌の取次役を果たしていた。上杉氏方の五十子陣からの撤退という非常事態であったために、定昌は信頼のできる近臣の輔泰の陣所へ移ったと考えられる。ということは、五十子陣の機能していた平常時においては、定昌の近臣の飯沼輔泰であっても、陣所は定昌とはそれぞれ別々であったということになる。

では、五十子陣の内部構造一般はどのようなものであったのだろうか。松岡進氏は、「松陰私語」等の記載から、五十子を含めた陣一般を以下のように説明している〔松岡 2005〕。

陣所が統一的プランに沿って密集的に配置されるのではなく、「切所」をいくつも挟んで個々に造作された陣所群の疎集ともいべき景観をなしていたのがうかがわれる。

考古学の成果によると、五十子陣に関連する遺構は、溝、方形竪穴状遺構、井戸、土坑にほぼ限定されるという〔太田 2005〕。溝についてみると、区画を目的とする直線的な溝が各所で確認でき、遺跡が異なり距離を隔てていても、およそその溝の主軸方向を共通させている場合があるという。このことから、太田博之氏は以下のように述べる〔太田 2005〕。

「陣」の設営にあたり、広範囲を対象とした一定の設計規格が存在したか、特定の方位に対する本源的な指向性が広く定着していた可能性を示すものであろう。

3において考察したように、五十子陣の軍勢は大きく越後上杉氏・山内上杉氏・扇谷上杉氏の3軍勢によって構成されていたと考えられる。このような大局的な構成が陣の遺構に反映されるのか、松岡氏の指摘するように陣の統一的プランを特段には重視する必要はないか、あるいは太田氏の指摘するように一定の設計規格の可能性を考えるべきか、今後の課題となろう。

5 陣に集結した人々

陣では合戦に参加した戦闘員のみではなく、合戦とは直接関係のない非戦闘員なども認められる。この点については、文献史学・考古学の双方から既に指摘がある。

文献史学の佐藤博信氏は、五十子陣について以下のように述べる〔佐藤 1988〕。

五十子陣は、諸将のみならず僧侶・神人・文人・商人などの交錯するひとつの空間的世界でもあったのである。

考古学の太田博之氏は、五十子陣について以下のように述べる〔太田 2002〕。

これらすべての遺跡が軍事的色彩の濃い遺構のみによって構成されているわけではなく、実際には町屋や屋敷さらに寺院などを包摂する複合的な様相を認めることができる。

両者の五十子陣に対する認識は極めて近いものがある。そこで、以下では文書・記録に基づいて、陣に集結した人々の実態をより具体的に明らかにしたい。

①僧侶・神官

〔史料 10〕「善照寺文書」〔『新潟県史 資料編 5 中世三』2395 号〕

寛正式年〈辛巳〉八月九日、於武蔵国五十子御陣、彼御判頂戴申〔 〕也、御判 上杉房定、裏判千坂之対馬守○〈定高〉殿、飯沼□□門尉○〈頼泰〉殿□□奥之裏判、石川遠江守○〈乾柢〉殿御判

〔史料 11〕「鑿阿寺文書」〔『栃木県史 史料編 中世一』〕133 号

当陣祈祷事、自屋形被申候、別而御懇祈、御為公私可為簡要候、於本意之上者、新寄進之事、内々相心得可申由候、恐々謹言、

四月十五日

右衛門尉景春（花押）

謹上 鑊阿寺供僧御中

〔史料 12〕「鑊阿寺文書」（『栃木県史 史料編 中世一』）413 号

祈祷之事被申候処、一衆御同心、被修不動護摩供百座候、仍卷数給候、令披露候処、祝著之由候、
於本意上、新寄進之事被相定候、弥御祈念尤候、恐々謹言、

四月廿八日

右衛門尉景春（花押）

謹上 不動院

3において考察したように、長禄4年（1460）12月、前年4月に鎌倉の鶴岡八幡宮若宮別当に還補された弘尊は、還補の謝意を兼ねて五十子に赴いた〔史料7〕。また、その他にも同宮では伊豆の堀越公方関与の武蔵関戸（現在の東京都府中市と多摩市の接する地域）を回復するために、上杉氏の推挙状を得ようと五十子陣を訪れている〔山田 1995〕。推挙状などの文書を得るために、神官（僧侶）は五十子陣を訪れていた。

〔史料 10〕は越後国善照寺（刈羽郡刈羽村）の増琬が文明5年（1473）の時点で、寛正2年（1461）8月の出来事を記した覚書である。ここからは、寛正2年8月に五十子陣において、増琬が裏判に千坂定高・飯沼頼泰、奥の裏判に石川乾柢のそれぞれの花押のある越後守護上杉房定の判物を頂戴したと読める。越後の寺僧が判物を得るために五十子陣を訪れるということは、当時、一般的に行われていたのではないか。越後上杉氏・山内上杉氏・扇谷上杉氏のそれぞれの分国内に所在するこの他の寺社の僧侶や神官も、推挙状や判物を得るために五十子陣を訪れていたに違いない。

〔史料 11〕は、年次は未詳ながら、「当陣祈祷事」が簡要であることを長尾景春が鑊阿寺供僧に宛てた書状である。『群馬県史 資料編 7 中世 3』1753号では、「屋形」を上杉顕定に比定し、この書状の年次を文明8年（1476）6月勃発の長尾景春の乱以前のもものと推測している。景春の名乗りと景春の乱以降に景春が「屋形」と呼称する人物は想定し難いことから、『群馬県史』の推測通り、本史料の年次は景春の乱以前であろう。したがって、「当陣」とは五十子陣である可能性が高い。同様に〔史料 12〕も、『群馬県史』では長尾景春の乱以前のもものと推測している。〔史料 11〕にある「新寄進之事」が〔史料 12〕にも記されているので、これらの史料は一連のものであろう。

さて、〔史料 12〕によると、景春は鑊阿寺から受け取った卷数を主人へ「披露」したとある。この両史料が一連のものであるならば、景春が披露した相手とは〔史料 11〕の「屋形」すなわち上杉顕定のこととなろう。鑊阿寺の僧侶は長尾景春のもとへ顕定への卷数を持ち込み、それを景春は顕定へ「披露」していたのであった。そして、この他にも鑊阿寺文書には卷数に関する史料が多く残存しているように、鑊阿寺も含めた他の寺院からの卷数の授受も五十子陣中において行われていたと推測される。すなわち、在陣中の武将が戦勝祈願のために寺院へ卷数を依頼し、それを寺院の側が陣へ持ち込んだことも多々あったと考えられる。文書獲得のためだけではなく、祈祷という行為を通じて、僧侶や神官は五十子陣を訪れていたのである。

②文人

〔史料 13〕「萱草」（金子金治郎・伊地知鉄男編『宗祇句集』角川書店、1977、25頁）

長尾左衛門尉はしめて参会の時、九月尽に

秋をせけ花は老せぬ菊の水

〔史料 14〕「長六文」（奥田勲他校注・訳『連歌論集・能楽論集・俳諧論』新編日本古典文学全集、小学館、2001）

於武州五十子之陣所宗祇在判

長尾孫六殿進覧候 宗祇在判

〔史料 15〕「萱草」（金子金治郎・伊地知鉄男編『宗祇句集』角川書店、1977、35 頁）

武蔵五十子といへる所にて千句に

きえなはきえねかゝる罪科

文正元年（1466）9 月頃、連歌師の宗祇は五十子陣を訪れた。そして、山内上杉氏家宰の白井長尾景信の主催による連歌会が催され、宗祇は出座している〔史料 13〕。この句は「老葉」にも再録されており、そちらの詞書では「長尾左衛門尉のもとへ始て罷侍し時、九月尽に」とあるので〔両角 1981〕、この連歌会は五十子陣の中の長尾景信の陣所で行われたのであろう。

翌 10 月、宗祇は長尾孫六に対して連歌論書『長六文』を贈った〔史料 14〕。さらに、翌応仁元年（1467）3 月、宗祇は長尾孫四郎に対して連歌論書『吾妻問答（角田川）』を贈っている。また、年次は未詳であるが、「萱草」によって五十子で千句の行われていたことが認められる〔史料 15〕。江戸千句・河越千句と同じように、五十子においても千句が興行されていた。東国における政治的・文化的な中心地の一つとして、五十子陣は機能していたのである。

③商人 長尾景春の乱によって「五十子陣下へ出入ノ諸商人之往復通路ヲ指塞」がれ、「糧道」を絶たれたこともあって、上杉氏方は陣から撤退した（「松陰私語」第五『群馬県史 資料編 5 中世 1』838 頁下段）。この記載についてはこれまでの研究でも取り上げられており〔松岡 2005 など〕、五十子陣は交通の要衝に位置し、商人が出入りしていた。

④足弱・降人・夫・雑人

〔史料 16〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編 5 中世 1』824 頁下段）

所詮其方并宗稟足弱等五十子御陣下へ進上

〔史料 17〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編 5 中世 1』824 頁下段～835 頁上段）

国繁宗稟入道之足弱以下幼稚・幼若之子葉孫枝、悉ク以乗馬輦輿ヲ、五十子陣下当方金井伊賀守陣所被送着、

〔史料 18〕『親元日記』寛正 6 年（1465）10 月 12 日条

態令啓候、抑今度自五十子勢仕御敵数輩令降参候、目出候、

〔史料 19〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編 5 中世 1』818 頁上段）

武上之諸一揆以下、并当陣引率五千余騎下野国児玉塚ニ張陣、東方ノ降人以下都合七千余騎張陣、

〔史料 20〕「松陰私語」第二（『群馬県史 資料編 5 中世 1』820 頁下段）

自遠国当陣下往復之勢衆・夫・雑人等討留、

〔史料 16〕は、岩松氏が上杉氏方を裏切るとの噂が五十子陣に広まったため、岩松氏の重臣である横瀬氏の「足弱」を五十子陣下に差し出すことに関するものである〔峰岸 2005〕。〔史料 17〕にあるように、翌朝には「足弱以下幼稚・幼若之子葉孫枝」が五十子陣下の金井伊賀守の陣所に送られている。「足弱」とは足の丈夫でない老人・女・子供であり、「幼稚・幼若之子葉孫枝」も子供のことを指そうから、〔峰岸 2005〕の述べるように、これは岩松氏方から陣へ差し出された人質のことであろう。五十子陣の機能していた期間を考えると、このような人質の指し出しは岩松氏だけのことでなく、その他の領主も行っていた可能性があろう。陣の構成員として、このような非戦闘員も五十子には在陣していた。

〔史料 18〕では「御敵数輩」が「降参せしめ」とあり、〔史料 19〕には上杉氏方の軍勢に「東方ノ降人」の含まれていたことが記されている。降人とは、「降参した人」という意味であるから、〔史料 18・19〕の「降参せしめた」輩や降人とは古河公方方の軍勢であらう。〔史料 19〕の「東方ノ降人」

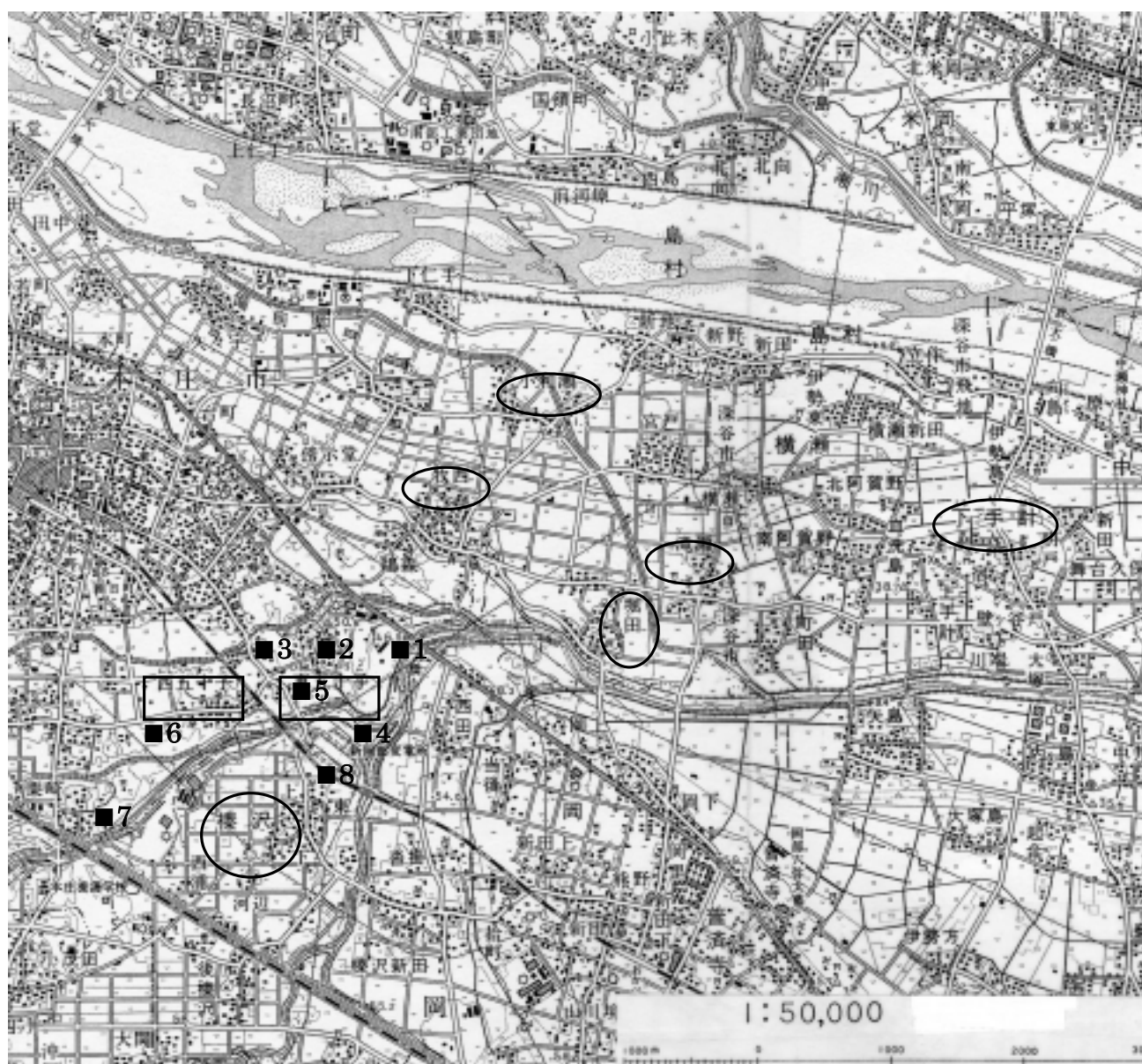
は、この頃に上杉氏方となった小山氏と考えられている〔峰岸 2005〕。小山氏の場合、上杉氏方を下野へ招き入れていることから、必ずしも五十子に在陣していたとは限らない。しかしながら、〔史料 18〕や「太田道灌状」にも降人の記載が認められることから、五十子へ降人が在陣したこともあったであろう。このように、上杉氏方の陣である五十子には、敵方である降参した古河公方方の軍勢も滞在していた。

〔史料 20〕は、利根川北岸に布陣した古河公方方に対する、金山在城の岩松氏方の攻撃に関する記述である。これによると、岩松氏は遠国から金山陣下を往復する軍勢・夫・雑人らを討ち留めている〔峰岸 2005〕。この記載は五十子陣下の状況ではないけれども、合戦に主体的に関与した「勢衆」の他に、主に労役に携わっていたであろう「夫」や雑兵と思われる「雑人」も認められる。このような状況を、五十子陣下においても同様に想定してよいであろう。

以上で確認した人々の多くは、積極的に合戦に関与したとは考え難いことから、陣での滞在期間は長くはなかったと推測される。したがって、彼らの生活痕跡を遺構なり遺物として確認することは難しいのかもしれない。しかしながら、五十子陣における多様な人的構成を把握する上で、文書・記録によってその実態を検出することは不可欠であると考ええる。

〔参考文献〕

- 家永遵嗣 1995 『室町幕府將軍権力の研究』（東京大学日本史学研究室）
- 太田博之 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 太田博之 2005 「「五十子陣」研究ノート」（『群馬考古学手帳』15号）
- 金子金治郎他 1977 『宗祇句集』（角川書店）
- 黒田基樹 2004 『扇谷上杉氏と太田道灌』（岩田書院）
- 佐藤博信 1988 「上杉氏と五十子陣」（『新編埼玉県史 通史編2 中世』第三章第一節二（二）、埼玉県）
- 佐藤博信 1989 「雪下殿に関する考察」（同氏著『古河公方足利氏の研究』校倉書房、初出 1988）
- 田中 信 2005 「「山内上杉氏の土器（かわらけ）」とは」（藤木久志監修 埼玉県立歴史資料館編集『戦国の城』高志書院）
- 松岡 進 2005 「戦国初期東国における陣と城館」（『戦国史研究』50号）
- 峰岸純夫 1989 「東国における十五世紀後半の内乱の意義」（同氏著『中世の東国』、東京大学出版会、初出 1963）
- 峰岸純夫 2005 「享徳の乱における城郭と陣所」（千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』高志書院）
- 森田真一 2004 「上杉房能の政治」（『上越市史 通史編2 中世』第三部第一章第四節、上越市）
- 森田真一 2006a 「文書・記録からみた五十子陣」（『中世考古学文献研究会会報』6号）
- 森田真一 2006b 「上杉定昌と飯沼次郎左衛門尉」（平成十六年度～平成十七年度科学研究費補助金研究成果報告書『室町・戦国・近世初期の上杉氏史料の帰納的研究』研究代表者 矢田俊文、新潟大学人文学部）
- 両角倉一 1981 「宗祇の東国下向（その1）」（『山梨県立女子短期大学紀要』14号）
- 山田邦明 1995 「享徳の乱と鶴岡八幡宮」（同氏著『鎌倉府と関東』校倉書房、初出 1989）
- 湯山 学 1989 「八条上杉氏」（オメガ社編『地方別 日本の名族』四、新人物往来社）



1.五十子城跡遺跡 2.東五十子赤坂遺跡 3.西五十子大塚遺跡 4.東五十子遺跡 5.西五十子台遺跡
6.西五十子古墳群 7.東本庄遺跡 8.六反田遺跡 1 : 50,000 深谷・高崎使用

はじめに

本報告のテーマは、中世における死体遺棄状況を示す墓地遺跡等に鑑み、発掘成果との連携を意識して、文献史料によってそれと考えられる事例を示し、「遺棄葬」を検討することである。本報告では、中世において「死体をどこか別の場所に移動させるのみか、あるいはそのまま放置する死体処理」を行った事例を対象として、その状況検出を行うこととする。なお、本報告が対象とする死体処理方法が、火葬や土葬といった他の方法と大きく異なる点の一つには、物理的には遺体を隠さない、とするところにあるものと思われるので、そうした点についても注意しておきたい。

中世、とくに前期における死体の遺棄に関しては多くの先行研究があるが、その中で「墳墓遺跡及び葬送墓制研究の観点からみた中世」（研究代表者：狭川真一（元興寺文化財研究所））においては、「遺棄葬」をテーマとしたシンポジウムを開催し、中世における死体遺棄状況を「遺棄葬」として、考古学的な出土状況、形質人類学による出土人骨分析、絵画資料、文献史料などの側面から検討している⁽¹⁾。しかし、とくに遺跡などにあらわれる痕跡のみによって死体の遺棄に至る過程までを検証することは困難と考えられる。「遺棄葬」を葬送全体の中でどのように位置づけるのか、ということは大きい問題と思われるので、ここではどのような状況から死体の遺棄というかたちに至るのかを含め、「遺棄葬」のあり方について検討することとしたい。

1、死体遺棄状況の検討

①疫病等による大量死の発生

中世において死体が遺棄される事例については、文献史料を確認する限りでも、さまざまな場合が見られる。さらに、そこに至る経緯もさまざまである。そこで、これらの事例からいくつかを抽出してみることにしたい。

まず、大量の死者が発生することによって、その死体が遺棄されることになったという事例として、史料1を見てみたい。

【史料1】『本朝世紀』正暦五年条より抜粋（『国史大系』『本朝世紀』）

（四月廿七日）

（前略）天皇我詔旨^{良万止}。掛畏^支某太神乃^尔広前^尔恐^み恐^み申賜へと申^久。㉞今年春より遠近に有疫癘之聞^り。仍可攘除此患之由。祈祷之誠。睿年日久^之。而今外国京畿之間。病死之輩道路相枕セリ。門々戸々^{尔毛}挙首^天病伏^{世利と}聞食^天。是則人主乃薄徳^{尔天}。人民^毛有此患^{利と}歎患^{こと}無限。

（後略）

（四月廿八日）

今日臨時御読経始日也。依疫癘之猶未止。以卅口僧於清涼殿五箇日所被修也。

（五月）

三日甲寅。㉞京中堀水溢。檢非違使等召仰看督長等搔流京中死人。然而河水也。未剋。権中納言源伊陟卿。藤原道頼卿。参議藤原懷忠卿参陣。即皆山陵使也。山科使伊陟卿。柏原後山科道頼卿。後田邑村上懷忠卿也。是皆被祈申疫癘事也。

（中略）

七日戊午。午後。右大臣。権大納言道長卿。同伊周卿。権中納言藤原公季卿。源時中卿。同伊陟卿。参議藤原懷忠卿参著左近陣座。今日臨時御読経結願也。又被定以今月十五日於八省大極殿立百高座。可被読講仁王經之事。是即依前天文博士正五位上安倍朝臣晴明勘申所被修也。又去三月以後依疫癘病死之輩不知幾千。雖種々祈祷似無其応。〔c〕路頭死人伏骸連々也。

(中略)

十日辛酉。午後。権大納言藤原伊周卿。中納言同頭光卿参著左仗座。被定以今月廿日可被遣伊勢。石清水。賀茂下上。松尾。大神。祇園等社臨時奉幣使。是則為被祈疫癘也。又此日。從太宰府言上解文四枚。其中一枚。去年中冬以後至于今日。疫癘已発。府中不静。又以官国人民皆欲夭亡。而其 弥倍。病患未止。〔d〕遠近路辺。死人満塞。一枚。

史料1のうち下線部(a)から、正暦5年(994)に疫病が流行しており、京中で大量死が発生したことがわかる。そして下線部(b)では、その死体を検非違使等が看督長に命じて堀に流している。すなわち、死体を堀に流すことで処理していたということになり、ここではそれによって堀水が溢れている状況が描かれている。またさらに下線部(c)(d)においては、路頭に死体が満ちていることが記されており、こうした状況が何ヶ月も続いていたことがわかる。

また、史料2においても、同様の情景が描かれている。

【史料2】『百鍊鈔』正暦五年今年条(『国史大系』「百鍊鈔」)

四五六七月之間殊盛。死者過半。五位已上六十余人也。道路置死骸。

下線部から、この時期には道路に死骸を置く、あるいは放置する状況が続いていたことがわかる。

②社会的・経済的事由のある場合

前項においては、疫病による大量死によって、大量の死体遺棄が行われた事例をあげた。大量死の発生する事由は疫病の流行に限らず飢饉などの事例も見られ、またそれによる死体遺棄はさまざまな場合に発生することが考えられるが、ここでは中世前期の京都では死体が道中に溢れるほど放置される状況があり得た、ということを指摘するのみにしたい。そして、一般的に路頭に死体が放置される状況が考えられる事例について、史料3を見てみたい。

【史料3】『今昔物語集』卷三十一 尾張守[]於鳥部野出人語第三十

(『国史大系』「今昔物語集」本朝)

今昔。尾張ノ守[]ノ[]ト云フ人有ケル。其ノ[]ニテ有ケル女有ケリ。歌読ノ内ニテ。心バヘナドモ糸可咲クテ。男ナドモ不為デナム有ケル。尾張ノ守此レヲ哀テ。国ニ郡ナド預ケテ有ケレバ。便リ有テナム有ケル。子ニ三人有ケルハ母ニモ不似ズ極タル不覺ノ者ニテ有ケレバ。皆外ノ国ヘ迷ヒ失ニケリ。其ノ母ハ年老テ衰ケレバ。尼ニ成テケルニ。後ニハ尾張ノ守モ不問ズ成ニケリ。畢ニハ兄也ケル者ニ懸リテ過ケル間ニ。難堪キ事多カリケレドモ。本ヨリ有職ナル者ニテ。弊キ事ヲバ不為ズシテ。尚身ヲ持上テ心ヲ造テ過シケル程ニ。身ニ病付ニケリ。日来ヲ経ルマヽニ病ノ筈ニ沈ムデ気色不覺ニ見エケレバ。兄有テ家ニテハ不殺ト思テ家ヲ出シケレバ。其レヲモ我レヲバ為ル様有ラムト思テ。昔ノ共達ニテ有ケル者ノ清水ノ辺ニ有ケルガ許ニ。其レヲ打憑ムデ車ニ乗テ行タリケルニ。憑テ行タル所ニモ思ヒ返シテ。此ニテハ否不殺ト云ケレバ何ガセムトテ鳥部野ニ行テ。浄ゲナル高麗端ノ畳ヲ敷テ其レニ下居ケレバ。極ク和キ哀レ也ケル人ニテ。ノ影ニ隠レテ引疏テゾ畳ニ居タリケル。(後略)

史料3は物語資料であるが、『今昔物語集』にも最終的には死体遺棄ともみえる光景になる、ととれる状況が記されている。物語としては、ある女性が死に向かっていくにあたり、誰も葬送等を引き

受けてくれないので、鳥辺野にいて畳の上に座った、という構成になっている。そして下線部において、鳥辺野に行き、高麗縁の畳を敷いて、の影で身ずまいをただしてその上に座った、という状況が示されている。⁽²⁾ この女性は最終的にはこの畳の上で死んでいくことを覚悟しており、この状態のまま死んでいくと想定される。すなわち、このかたちで出土すれば、河原に遺棄された死体と何らかわらない状況で理解されると思われる。また、死後遺体を葬る人がいない場合、これが放置されることもこうした状況から考えることは可能であろう。史料3の状況を死体遺棄と呼ぶか否かは別の問題とも思われるが、中世前期においては、大量死のような死体を処理しきれない状態になるような場合でなくとも、死体を放置する状況が通常の場合に見られたことについては示されているものと思われる。そして、史料3の女性については、尾張守の妻か妹か娘か、と記されているので、いずれにしてもこの女性は尾張守の関係者と思われるが、これを庶民層まで広げて考えれば、遺棄される死体が現出する事態は珍しくなかったことが想定される。また、同時にこの史料3においては、この時期にはすでに鳥辺野が死体放置の場所として認識されていたことも示しているといえよう。

なお、こうした死体放置という事象について、勝田至氏は、五体不具穢の発生件数から分析している。⁽³⁾ 勝田氏は、五体不具穢が1220年頃を境に激減することについて、犬が啗える死体そのものが京中から一掃されたことを示しているのではないかと、という推定を行い、このことが共同墓地の成立とかかわりがあるのではないかと、としている。こうした事例についての検討は重ねられるべきであろう。

③墓所掟と遺棄葬

ここまでの事例においては、そのまま路辺や河原に放置されたり、または畳の上にそのまま座したりとする状況から、「遺棄」として検討を加えた。しかし、『餓鬼草子』第四段「疾行餓鬼」⁽⁴⁾を見ると、筵の上に死体が置かれているという場面のほかにも、たとえば棺に入れられたまま墓域に置かれ、埋められていないという場面もある。『餓鬼草子』の場面全体の位置づけの問題はともあれ、中世前期においてはこのような事例も想定できる。これらは、死体の処理としての葬送や遺棄にもさまざまな場合があることを示しているものと思われる。

そこで、これまでに比べて時代はやや下るが、中世後期の墓所の掟を示したものとして、史料4をあげておきたい。

【史料4】摂津尼崎墓所掟（大覚寺文書）（『中世政治社会思想』下）

定 於尼崎墓所条々事

一 火屋 荒牆 四方幕 内地付一端充聖方へ取之。

引馬 導師分迄 龕 蓋、是を不可取。

一 火屋 荒牆 幕 方者不定。地付一端如前。 龕
於此分者、参百文可取之。 収骨者廿文。

一 あらかき こし
於此分者、十疋可収之。 収骨者十文。
新興作る時、不可違乱。

一 定興、付、桶二入土葬同之。 於此分者、五十文可取之

一 筵二入、付、無縁取捨。 於此分者、拾文。

一 少愛者十文。

此外雖為一事、不可違乱也。

一 石塔并塔婆等ちり失る時者、ひしり方より可弁之。各々墓所をあらたむる時、不可有違乱者也。

右、於此旨者、為地下可制敗口也。

天文元年〈壬／辰〉十一月卅日 菩提寺〈在／判〉

史料4は天文元年（1532）のもので、葬送のあり方について、葬法について料金による階梯があることを示している。その中の傍線部から、その葬法のなかで筵に入れる（無縁（の者）は取り捨てる）、というものもあることがわかる。

史料4は、「聖方」と呼ばれる葬送の現場を担当する人々と「菩提寺」の関係の問題などの研究素材ともなる史料として知られるが、ここで指摘すべき点としては、まず葬送に費用がかかっており、それは葬送を担当する「聖方」が受け取っている、ということであろう。そして、その中でもっとも安価なものの一つとして、「筵に入れる」という葬法がある、ということである。すなわち、筵に入れるという葬法が、火葬・土葬につながる遺体を葬る方法の一つとして認識されていたことになる。すなわち、死体を人の目に触れないように処理する方法以外のあり方が、中世後期においても認められていたことを示すものとしても考えられる。

なお「聖方」の解釈については、細川涼一氏や高田陽介氏が、葬送の現場作業を受け持つ集団を想定しており、⁽⁵⁾ これらの見解に従うべきであろうと思われる。

2、遺棄された死体への認識

わずかな事例紹介ではあるが、前章では、基本的には中世前期を中心として、通常のあり方として死者が放置される状況があり得ていた可能性が高いことについて示してきた。次に本章では、遺棄された死体に対する人々の対処について触れておきたい。

【史料5】 日蓮書状（『鎌倉遺文』17、12983号）

種種物送給候畢、山中のすま思遣せ給て、雪の中ふみ分て御訪候事、御志定て法華經十羅刹も知食候覧、さては涅槃經云、人命不停、過於山水、今日雖存、明日難保文、摩耶經云、譬如旃陀羅駟羊、至屠家人名亦如是、歩歩近死地文、法華經云、三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏等云云、此等の經文は、我等か慈父大覺世尊、末代の凡夫をいさめ給、いとけなき子ともをさし驚かし給へる經文也、雖然、須臾も驚く心なく、刹那も道心を發さず、野辺に捨られなは、一夜の中にはたかになるへき身をかさらんかために、いとまを入れ、衣を重んとはけむ、命終なは三日の内に、水と成て流れ、塵と成りて地とましわり、煙と成りて天にのほり、あともみへすなるへき身を養はんとて、多の財をたくはふ、此ことはりは事ふり候ぬ、（後略）

建治四年〈戊／寅〉二月十三日

日蓮（花押）

松野殿 御返事

史料5は日蓮書状であるが、下線部を見ると、野辺に棄てられた死体は通常一夜で身ぐるみはがされていた状況があった、ということがわかる。すなわち死者の着ていた衣服等を誰かが身ぐるみはいでいた、といいかえられ、遺棄された死体に付属していたものは持ち去られる対象となっていたことが知られよう。

なお前にも挙げた勝田至氏は、死体を運搬する役割であった非人層には葬送の得分権があり、葬送に関わる職掌を行ったときに発生する料金のほか、死体から身ぐるみはぐ権利も有していた、という指摘をしている。⁽⁶⁾ 遺棄された死体はこのように取り扱われることもあった。これが一般的に行われ

ていたとすれば、遺棄された死体という状況からは遺物が残りにくいということになる。

また、死体はどこに遺棄されるのか、ということについても触れておく。前に挙げた史料3では京都では鳥辺野ということになるが、やはり鳥辺野や蓮台野といったエリアである場合が多いようである。そこで史料6を見てみたい。

【史料6】『明月記』嘉禄元年五月廿八日条（国書刊行会『明月記』二）

廿八日、（中略）去比送蓮台野死人、一日之内六十四人云々、

嘉禄元年（1225）には、ある一日のうちで蓮台野に死体が64体も送られた、という記述があり、13世紀前半には蓮台野に死体を送られていたことがわかる。これは多く遺棄された死体と考えられよう。なお、鳥辺野には皇室の墓もあり、また貴族の火葬もなされている。さらに蓮台野は船岡山の近くで、そこには近衛天皇の陵墓もある。すなわち、放置される場合も埋葬される場合も同じエリアに葬られている場合があった、ということがいえよう。

そこで史料3に戻れば、尾張守のところにいる女性が影で高麗縁の畳を敷き、身ずまいをただしている、とする場面については、塚の影で身繕いをしたと解釈できる。したがって、同一のエリアに放置また埋葬される状況が、12世紀頃には想定されるものとも考えられよう。

3、死体遺棄と「遺棄葬」について－むすびにかえて－

これまで、死体が遺棄されるという状況に関して、多くの場合があり、そのことがとくに中世前期においては一般的であったであろうことを示してきた。先にこれまでの流れをまとめておきたい。

①中世前期、死体の放置状況は珍しいことではなく、疫病や飢饉の発生など、事情によっては死体が京都中に散乱することもあった。

②これらはそのまま放置され、あるいは川に流されるなどしていたが、次第に貴族も葬地とする鳥辺野などといったエリアに搬送されるようになった。

③火葬、土葬、放置された死体は同一エリアに葬られた。

同一のエリアで遺棄と埋葬が行われていることは、これまで各地での考古学的な発掘成果からも考えられる。また狭川真一氏は、絵画資料によって死体遺棄状況を復元し、「遺棄葬」と認められる発掘状況を想定する試みを行った。⁽⁷⁾ そうした遺跡の検討によっても、中世の「遺棄葬」状況は解明されていくのではなかろうか。

上記のように死体遺棄の状況が中世前期において一般に見られるということについては、多くの先行研究が指摘してきたとおりであろう。山田邦和氏は「都市の道路に死体や白骨が放置されているという状況は、望ましいものではなかったにせよ決して異常なものではなかったということになる。現在のわれわれの目から見ると異様に思えるそうした光景も、古代・中世の都市民にとってはごくあたりまえの情景にすぎなかったのではなかろうか」とする。⁽⁸⁾ これらの状況は都市のみに限ったことではないと思われ、葬送全体にとって大きな位置を占めていたものと思う。

しかし、これらの死体遺棄状況を「遺棄葬」という概念でひとくくりにして検討すべきか否か、という点についてはさまざまな見解があるように思う。ここまで見てきたように、そこには多様な状況が見られるので、今後検討にあたっては、ある程度区分した議論が必要ではなかろうか。勝田至氏は、遺体を地上に置くだけの葬法（風葬）が中世民衆の間では通常であり、葬送に参加すべきか否かは死者との血縁関係によって区別された、とする。⁽⁹⁾ すなわち、現象面はほぼ同様であるとしても、それと死体遺棄は区別されることになる。

また、葬送における「死者を葬る」という観点からすると、史料3のように、自らが葬地に赴く場合を「遺棄葬」と位置づけることにも疑問があり、これも事例としては区別して考える必要があろう。

このように、それぞれの事例を区分し検討していくことが、「遺棄葬」をあらためて検討することにつながるものと思われる。ここではむしろ多様な「遺棄葬」や死体遺棄の状況がとくに中世前期においては通常であった、ということを示してきた。さらにこうした多様な状況を検出し、「遺棄葬」状況を総合的に明らかにしていくことも同時に必要であろうと思われる。

なお、山田邦和氏は、平安京内において人骨の近辺から供養木簡や卒塔婆が出土している事例から、遺棄された死体に対してなんらかの霊魂供養が施されていたことを推測する。⁽¹⁰⁾ こうした供養のあり方が、「遺棄葬」とどのような関係にあるのか、ということについても検討を深めていく必要がある。

発掘された遺跡における判断も含め、死体遺棄や「遺棄葬」の問題は議論の余地が多く残されていると思われる。そして、そこに学際・学融合の可能性があるのでないかと思う。

- (1) 先行研究としては圭室諦成『葬式仏教』(大法輪閣、1976年)をはじめとして、多くが挙げられると思われるが、とくに勝田至『日本中世の墓と葬送』(吉川弘文館、2006年)が近年の成果として重要なものと思われる。なお、同著において多くの先行研究が挙げられているので、あわせて参照されたい。また「第1回 中世墓を考える会」(2006年7月1日、於：あすなら(奈良市男女共同参画センター))において、「遺棄葬」をテーマとしたシンポジウムが行われている。
- (2) なお については、塚・墓のことであろう、という日本古典文学大系本『今昔物語集』(岩波書店、1963年)の解釈に従う。
- (3) 勝田至『死者たちの中世』、吉川弘文館、2003年。
- (4) 小松茂美編『日本の絵巻』7、中央公論社、1987年。
- (5) 細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、1987年)では、顕密僧の葬送の現場を担当する「斎戒衆」を想定し、高田陽介「尼崎の墓所掟をめぐって」(『遙かなる中世』11、1990年)は「墓地での葬送業務を受け持つ三昧聖を指すことはまず間違いあるまい」とする。
- (6) 勝田至前掲注3。
- (7) 狭川真一「絵画にみえる遺棄葬と中世墓」(前掲注1シンポジウム報告)
- (8) 山田邦和「京都の都市空間と墓地」『日本史研究』409、1996年。
- (9) 勝田至「中世民衆の葬制と死穢—特に死体遺棄について—」『史林』70-3、1986年。
- (10) 山田邦和前掲注8。

[追記]

2006年11月3日に行われた「第4回中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究会」での報告時には多くの方々からのご指摘を賜ったが、あまり今回の執筆にいかすことはできなかった。ご指摘くださった皆様には深くお詫び申し上げ、今後の検討課題とさせていただきます。

戦国期城下町の二元的性格については、小島道裕の論が通説の地位を占める。小島によれば、城下凝集域は給人居住域であり、大名の主従制・イエ支配の原理が圧倒的な力をふるう。それに対して周縁の市町には、中世の都市的な場に特徴的な「楽」の原理が作用しているという。

しかし、城下凝集域が主従制の空間であることは、それそのものとして実証されているであろうか。私見によれば、それは、周縁が「楽」であるとするのと対比的に示されているだけである。では、周縁の市町が「楽」の空間であることは実証されているか。小島は、近江石寺、美濃加納でその実証を試みている。

本報告は、このうち、近江石寺の事例で、周縁の市町が「楽」の空間であると実証されているかどうかを検証する。小島自身、「城下の楽市場の存在をもっとも確実に指摘できるのは、楽市の初見として知られている六角氏の石寺である。」と述べている。

対象となるのは、次の二通の『今堀日吉神社文書』である。

α 紙商買（売）のこと、石寺新市の儀は、楽市たるの条、是非に及ぶべからず、濃州ならびに当国中の儀、座人の外商買せしむにおいては、見相（合い）に荷物押し置き、注進いたすべし、一段仰せ付けらるべく候よしなり、よって執達くだんの如し、

天文十八年十二月十一日

（能寺）忠行 在判

（後藤）高雄 在判

枝村

惣中

β 書跡（ママ）

石寺において保内町仰せ付けらるるについて、保内の諸商人は、保内町において□□売買いたすべし、万一この旨相違の輩これあらば、衆中として罪科に処すべきものなり、よって執達くだんの如し、

年号日付

α は、紙商売をめぐって当時、保内商人と相論中であった枝村の商人集団が与えられた特権を示すもので、保内方がその敵方の証拠書類を入手したのであろう。案文ではあるが、疑わしい点はない。

β は、おそらく保内商人団内部で作成されたもので、文書様式におかしい点があることから、このままの形式・内容の文書が実際に発給されたとは考えられない文書である。

小島は、**α** をもとに、六角氏によって「石寺新市」が楽市とされているとする。しかし、「市」が城下全体を指すはずがないので、これは、城下の一構成要素である石寺新市という市場を楽市と規定したものだとする。そして、石寺は戦国期城下町の通例として分散的な構造をとっていたはずで、石寺集落の外部に石寺新市をさがすべきであるという。

その上で、大字東老蘇の小字上菜野の中にある「保内町」という小分け地名に注目し、この東老蘇の「保内町」が**β** の「保内町」である。**β** で「保内町」を仰せつけられたというのは新たな市立てによるもので、それは**α** の「石寺新市」の市立てのことだろうとする。そして、東老蘇の付近が石寺新市で、保内町（保内商人の売買の場）はその中の一部分だと結論する。

その結果、小島は、観音寺山麓には、六角氏館を中心とする武家地区と直属商工業者等の町屋地区が広がり、一方、東老蘇には石寺新市が立てられ、そこが「楽市」と規定されて売買の場とされた、とするのである。

まず、確実に指摘できるのは、この事例では、観音寺山麓に「直属商工業者の町屋地区」が広がっていたことは実証されていないことである。それが「直属商工業者」のものであるとするのは、東老蘇の楽市との対比によって理論的に導かれたものである。次に、楽市である「石寺新市」に、特定の特権的商人集団の町（売買の場）である「保内町」が立地したとすることの矛盾が指摘できる。小島のいう「楽」の性格と、ここでいう「保内町」のあり方（その場での売買が強制されている）は両立しえないだろう。

第三に、古代の街道集落（宿）である老蘇（東老蘇）のことを「石寺」と呼んだ（混同した）事例は、管見のかぎり他に見られない。 β が古文書としてかなり疑わしい文書であることにも注意を払えば、 β の内容が本当に実現したかどうかは確定できない。東老蘇に「保内町」という地名が残っているので、そこに「保内町」が設けられたことは間違いないだろうが、それが β が示すように「石寺」と認識される空間内であったかどうか。すなわち、 β とは異なって、実際には石寺ではなく、老蘇（東老蘇）に「保内町」が設定されたのではなかろうか。少なくとも、その可能性があることだけは、ここで確認しておきたい。

ところで、小島は α を、「（基本的には枝村が他者を排除できる）紙商売であるが、石寺新市は楽市なので、（枝村であっても他者を排除できないのは）いたしかたない」と解釈している。「石寺新市」という new town（石寺と対比して新しい町場）が、石寺集落（観音寺山麓）の外部に物理的存在である市町として存在しているとする。そして、そこは、紙以外の他の商品についても専売権が否定されるような独立した場であると考えている。

だが、 α は、以下のようにも解釈できる。「（基本的には枝村が他者を排除できる）紙商売であるが、石寺新市は楽市なので、（枝村であっても他者を排除できないのは）いたしかたない」。すなわち、「石寺新市」とは、石寺に立てられた、紙を取引するための new market（新設の市）とするのである。だとすれば、その場を石寺集落から離れた外部に求める必要はない。また、この新市は紙だけを扱う市の可能性もあるのである。

以上の二つは、文書解釈上は同等の可能性をもつと考える。そこで、新市についての類例を集めることで、どちらの解釈が蓋然性が高いか調べてみた。

14世紀（1例のみ）から16世紀まで、管見に入った「新市」「新町」「新宿」の事例、11件についてみたところ、1570年代半ばまでの「新市」「新町」はおおむね new market の意であるのに対し、1570年代半ば以降、とりわけ後北条氏領国に現れる「新宿」は new town を指す。十分な分析は他日を期さざるをえないが、1560年代までの畿内・近国の「新市」は基本的に new market であるといえそうである。

なかでも、石寺と時代的、地域的に一番近く参考になるのが、天文11年(1542)の山城国乙訓郡物集女の場合である。京都の塩合物西座商人が幕府に訴えた訴状には、「西岡物集目（女）に新市を立て、塩合物、非分の族、ほしいままに商買（売）いたすこと、言語道断の子細に候」とある（『別本賦引付』4）。おそらく物集女集落の周縁部（離れた別の集落ではない）に、塩合物（だけ）をあつかう市が新たに開かれたのだろう。

α もこれと同じ状況を示しているのではないだろうか。

もちろん、このことはまだ十分に証明できていない。しかし、同様に、「石寺集落とは別に、石寺新市と称する別の町が東老蘇にあったこと」も十分証明されていないことになるだろう。

筆者のように考えた場合、では何故、石寺新市は「楽市」となったのか。それは、小島もいうように「新市」（new market. 新設の市）だったからだろう。主従制の場と二元的に対置される場だったから楽市とされたと考える必要は必ずしもないのである。まして、石寺集落が武家地区と直属商工業

者等の町屋地区からなることは証明されていない。すなわち、戦国期城下町が二元的な構造であることは確かであるとしても、それぞれが主従制の場と「楽」の場であることは、石寺においては証明されていないのである。

そもそも戦国期城下町の地理的二元性については、すでに早く歴史地理学研究者（松本豊寿・小林健太郎）が明らかにしている。彼らは、それを給人居住域と城下市町と表現したが、小島はそれを継承し、主従制、「楽」の原理から説明したのである。だが、この原理の部分が十分実証できているかについては疑問が残る。

たとえば、地理的二元性は、旧仏教系都市（平泉寺・根来）や寺内町（大坂・摂津富田）などでも確認できる。一方、近世都市が一般に二元的でないこともまちがいないが、都市内部に市庭空間を維持する近世都市もある。だとすれば、二元から一元へ、という変化を、主従制と「楽」の対峙関係といういわばイデオロギーの論理から解くのではなく、市場、都市内常設店舗、振り売りなど、商業の実態、その段階的変化の視点からも解明する必要があるのではなかろうか。

「楽」という概念に、反武家・反世俗というイデオロギー的意味を注入したのは網野善彦であろうが、「楽」には売買制限なし、諸役免除という意味があることを佐々木銀弥は明らかにしている。この佐々木説によるならば、戦国期の城下凝集域における商業が「楽」であつてもよいのではないか。極論すれば、越前一乗谷朝倉氏城下町（平井・川合殿地区）で発掘された、武家屋敷の前に並ぶ町屋が「楽」売りではいけないのだろうか。

「楽」「楽市」については、この20年間余り、通説と考えられてきた考え方をそろそろ見直すべき時期にさしかかっているだろう。

《参考文献》

- 小島道裕『城と城下』（新人物往来社、1997年）
- 小島道裕『戦国・織豊期の都市と地域』（青史出版、2005年）
- 仁木 宏『戦国時代、村と町のかたち』（山川出版社、2004年）
- 佐々木銀弥『日本中世の都市と法』（吉川弘文館、1994年）

近世寺院の漆器生産と流通

浅倉有子（上越教育大学）

筆者は、前稿において、中世の浄法寺地域（現岩手県二戸市と中心とした地域）で天台寺を中心に行われていた漆器（浄法寺漆器）の生産と流通体制が、幕藩体制の成立後盛岡藩によって再編成される道筋を示し、またそれにもかかわらず、近世を通して天台寺が浄法寺漆器の生産と流通に一定の影響力を保持し続けたことを論じた(1)。

本報告においては、近世において浄法寺を始めとする漆器の主要な移出先であつたと考えられる蝦夷地における流通の状況について、とくにアイヌ民族との関わりを重視して、場所請負商人関係史料によって検討する。

アイヌ民族が用いた漆器には、台盃、椀、行器、耳盥、提・鴨々といった酒器など多様なものが含まれる。アイヌ民族は、これらの漆器を宝器・祭具として重要視したので、漆器は対アイヌ交易の有力な物品であつた。浄法寺産の箔椀は17世紀のアイヌ墓から副葬品として出土しており(2)、当該期

のアイヌ社会への浸透と威信財としての活用のされ方を確認することができる。場所請負制の展開以降は、これらの漆器は主に場所請負商人によって蝦夷地へもたらされたと考えられる。近世の蝦夷地は、漆器の一大消費地であった。

ヨイチ場所などを請負った林家は、場所の請負を開始するにあたって、「蝦夷一ツ椀 五百」・「行器 取合 拾荷」（北海道立図書館所蔵・林家文書）と大量の漆器を仕入れている。しかも「蝦夷一ツ椀」と表記されているように、当所からアイヌを対象とした商品として仕入れていたことがわかる。このような大量の漆器は、浄法寺の他に、会津若松・京都といった本州の生産地で製作されたものと考えられる。近江八幡出身の場所請負商人・西川家の文書（滋賀大学経済学部資料館所蔵）からは、浄法寺漆器を指す「南部三ツ椀」の他に、「日野椀」・「仙北椀」・「藤嶋椀」・「山田膳」などという生産地を付した商品がみえる。各生産地では漆器が大量に生産されたと考えられるが、それ故に顔料であり幕府の統制品であった朱が不足し、琉球経由で密輸された朱が大量に用いられることになった(3)。そのような意味で、漆器はまた日本列島の南と北とをつなぐ商品でもあった。

林家がエトモ・ホロベツのアイヌに売却する値段を定めた文書には、「一、台盃 壺組ニ付 貳百五拾文」、「鴨々 大 貳百五拾文」、「行器 上品 貳拾五貫文」、「南部壺ツ椀 百文」などという記載がある。秋野茂樹氏の研究(4)によれば、毎年秋に漁場労働が終了するにあたって、賃金の清算が行われ、アイヌたちは熊送り儀礼を実施するために必要な酒・麴・漆器類を購入するという。しかし、乙名層と一般のアイヌの賃金には大きな格差があり、高額の賃金を得る乙名層との間の階層差が助長された。乙名たちは、儀礼の場で高価な行器・盥などを陳列することが可能であり、儀礼の場が乙名層の経済力や権威の誇示の場となっていくという。このように、場所請負制によって、アイヌの有形・無形文化も大きく変変化することになった。

さらにオムシャ・ウイマムなどの儀礼の場において、漆器がアイヌに渡されることがあった。慶応3年6月にヨイチ場所のアイヌを対象とした御目見得儀礼の際には、惣乙名イタキサに陣羽織や煙草と共に台盃1組が与えられた（林家文書）。御目見得儀礼の際に漆器を与えられる機会も乙名層の方がより多かったものと考えられる。

蝦夷地における漆器の流通について、今後さらに考察を深めていくことを課題としたい。

- (1) 拙稿「浄法寺漆器の生産と流通」（矢田俊文他編『中世の城館と集散地—中世考古学と集散地』、高志書院、2005年）。
- (2) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第26集『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』（1986年）他。
- (3) 拙稿「天保期における抜荷問題と新潟・蝦夷地」（菊池勇夫他編『近世地域史フォーラム1 列島史の南と北』吉川弘文館、2006年）。
- (4) 「アイヌの礼送り儀礼と場所請負制」（『近世地域史フォーラム1 列島史の南と北』、前出）。

発行 中世考古学文献研究会（文部科学省科研特定領域研究「中世考古学の総合的研究- 学融合を目指す新領域創成- 」B:学融合方法研究部門 B01 学融合方法論研究（人文科学系））B01-1「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」グループ）
事務局 〒950—2181 新潟市五十嵐 2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

地震被害と摂津天王寺西浦・遠江中部低地

矢田俊文(新潟大学 人文社会・教育科学系)

はじめに

本稿の目的は、地震による津波や地盤の隆起・沈降を分析の要素に入れることにより、低地における中世の生業・物資流通のあり方を考えることにある。

分析の対象地域は、1361年の地震被害にあった摂津天王寺西浦と1707年宝永地震で地盤が隆起したことが明らかな遠江中部低地である。

1. 1361年の地震被害と摂津天王寺西浦

(1) 1361年の地震被害

康安元年6月24日(西暦1361年8月3日)に巨大地震が起こっている。この地震の震源地は北緯33.0度、東経135.0度で、マグニチュード8.0〜8.5と推定されている。『後愚昧記』によると、康安元年6月21日酉の時に地震が起こった。翌22日卯の時に地震が起こった。23日も地震が起こっているが21、22日ほどではなかった。24日暁寅の時にまた大地震が起こったとある。

たしかな史料である『後愚昧記』『忠光卿記』『後深心院関白記』からわかることは、1361年の地震は、6月21日夕酉の時、24日暁寅の時、7月4日申の時に大揺れの地震が起こったこと、京都では被害はなく、摂津の天王寺と紀伊の熊野三山が被害を受けたということである。

1361年の地震をマグニチュード8.0〜8.5とする『理科年表』は、地震被害について、「摂津天王寺の金堂転倒し、圧死者五、その他、諸寺諸堂に被害が多かった。津波で摂津・阿波・土佐に被害、特に阿波の雪(由岐)湊で流失一七〇〇戸、流死六〇余」と記している。「摂津天王寺の金堂転倒し、圧死者五」という記事の根拠は『後愚昧記』の記事である。「津波で摂津・阿波・土佐に被害、特に阿波の雪(由岐)湊で流失一七〇〇戸、流死六〇余」という記事は、1361年地震のもっとも信頼すべき史料『後愚昧記』『忠光卿記』『後深心院関白記』には現れない。「津波で摂津・阿波・土佐に被害、特に阿波の雪(由岐)湊で流失一七〇〇戸、流死六〇余」という記事は、文芸史料である『太平記』に記される。

では、摂津の津波について考えよう⁽¹⁾。『太平記』巻36(日本古典文学大系)には、次のように記されている。

(史料1)

(康安元年)

七月二十四日には、摂津国難波浦の澳数百町、半時許乾あがりて、無量の魚共、沙の上に吻ける程に、傍の浦の海人共、網を巻、釣を捨て、我れ劣じと拾ける処に、またにわかには大山のごとくなる潮満ち来り、漫々たる海になりければ、数百人の海人共、独りも生きて帰るはなかりけり。また阿波鳴戸にわかには潮去て陸となる。(下略)

史料1にみえる「七月二十四日」は、地震が起こった「六月二十四日」の誤りであろう。この記事によると、24日、摂津難波浦の沖数百町が半時ほど干上がり、大量の魚等が砂の上ではねていたのに、周辺の浦の海人が拾いにいったところ、また突然大山のような波がやってきて、海になってしまったので、数百人の海人は一人も生きて帰るものはいなかったとある。いちど波が引いて再び波がやってきて多くの死者を出したことが記されている。『理科年表』の「津波で摂津に被害」という記事とこの『太平記』の記事は同じである。

津波で摂津に被害があったという記事は『太平記』みえるだけではない。大和法隆寺の記録『嘉元記』⁽²⁾にも見える。『嘉元記』の1361年地震の記事をみてみよう。

(史料2)

(康安元年六月)

廿四日卯時、大地震在之、當寺ニハ御塔九輪之上火災一折燃テ、下モヘハオチス、金堂東間ノ佛壇下モヘクツレオツ、東大門北脇築地少破落、
傳法堂、辰巳角カヘ、南ヘ落破、
薬師寺金堂ノ二階カタフキ破、御塔、一基ハ九輪落ヌ、一基ハ大ニユカム、中門、廻廊悉顛倒、同西院顛倒、此外諸堂破損云々、
招提寺塔九輪大破損、西廻廊皆顛倒、渡廊悉破畢、
天王寺金堂破レ倒レヌ、又安居殿御所西浦マテシホミチテ、其間ノ在家人民多以損失云々、
熊野山ノ山路并山河等、多以破損、或説ニハ湯ノ峯ノ湯止テ不出云々、

史料2の記事によると、24日卯時に地震が起こり、法隆寺では棟の九輪がもえ、金堂の仏壇が崩れおち、東大門の築地が崩れ落ち、伝法堂の壁が落ちた。薬師寺金堂の2階が傾き、2つある塔のうち1つの九輪が落ち、もう1つの塔は大きく歪み、中門・廻廊・西院が倒れた。唐招提寺では塔の九輪が大きく破損し西廻廊が倒れ、渡廊もすべて破れた。摂津の天王寺では金堂が倒れ、安居殿御所西浦まで潮が満ちて、住民が多く損失した。紀伊の熊野山の山道・山河等の多くが破損し、湯峰温泉の湯が止まったとある。

法隆寺・薬師寺・唐招提寺・摂津安居殿御所西浦・湯峰温泉など記事は、京都の貴族の日記『後愚昧記』『忠光卿記』『後深心院関白記』には見えない。『嘉元記』は、『後愚昧記』『忠光卿記』『後深心院関白記』が知らせる情報よりはるかに多くのことを知らせてくれる。

では、さまざまな情報を示す『嘉元記』はいかなる史料なのであろうか。『嘉元記』は、嘉元3年(1305)から貞治3年(1364)までの60年間の法隆寺を中心とした主要なできごとが年代順に編纂されている。法隆寺の代々の寺僧が書きついだ日記・引付等を貞治3年頃に編纂したものと考えられている⁽³⁾。『嘉元記』は地震が起こった1361年もしくは翌年に記されたものではないが、1361年とそれほど遠い時

期に編纂されたものではないので、同時代史料の文書・日記に次ぐ信頼さるべき史料と考えてよからう。

(2) 天王寺西浦とハマグリ

さて、史料2に見える天王寺安居殿とはどういう施設なのであろうか。安居殿は弘安8年(1285)10月の亀山上皇の四天王寺参詣記事にみえる。

(史料3)

事了御幸安井殿、今日下官持御剣、於安井殿有御会

(『実躬卿記』弘安8年(1285)10月16日条)

(史料4)

於西門駕御々輿、幸安井殿(中略)今日可幸長柄浜云々

(『実躬卿記』弘安8年(1285)10月22日条)

弘安8年(1285)10月16日条の記事によると、上皇は安井殿に行き宴会が行われていることがわかる。さらに、同月22日条の記事によると、長柄浜に行くため、西門で輿に乗り、安井殿に行ったことがわかる。安井殿は弘安8年(1285)の時点では、天王寺西門の外にある宴会等を行なうことのできる施設であったことがわかる。

天王寺は上町台地上にある。上町台地の西端は急激な崖面になっていて比高差が10メートルある(松尾信裕 2006)。この台地上にある天王寺西門を出てまっすぐ西の今宮に向かうと逢坂という坂があり、崖面を下る急峻な坂となっている。その途中に安井天神がある。この安井天神が四天王寺安井殿の旧跡である(原田伴彦ほか1980)。

以上のことから、四天王寺安井殿は四天王寺の西門を出て崖面を下る逢坂の途中にあったと考えていいであろう。では、『嘉元記』の記事「安居殿御所西浦」の「西浦」とはどの地域のことを示しているのだろうか。

天仁2年(1109)11月8日、藤原宗忠は熊野参詣の帰路、住吉辺りで昼休みをしたのち、陸路で「浜路」を通って、「天王寺西海辺」を過ぎ、船で京に帰るため窪津に着いている(『中右記』天仁2年11月8日条)。康治2年(1143)10月22日、四天王寺を参詣した藤原頼長は、四天王寺西門を出て、馬に乗り、「西浜」に出て海を見ている(『台記』康治2年10月22日条)。このように、四天王寺西門を出て坂を下ると、そこは「西海辺」「西浜」と呼ばれる地域であった。となると、『嘉元記』の「安居殿御所西浦」という記事も、四天王寺西門を出て坂の途中にある安居殿の西方地域にある「西浦」と理解するべきであろう。四天王寺の西門の坂を下ると、「西海辺」「西浜」「西浦」などと呼ばれる地域が広がっていたのである。

現在の四天王寺の西門の坂を下っても浜も海もない。しかし、中世は豊かな海産物を生産する海と浜があった。図1の摂津慶長国絵図をみるとわかるが、天王寺の西門の坂を下りきった地点から700メートルのところに今宮戎神社がある。今宮には海老・ガザメ・貝・蛤を京都に直送して販売する商人がいた(春田直紀 1997)。今宮周辺で収穫された貝類・甲殻類を販売する商人が中世今宮には集住していたのである。

四天王寺の付近にも蛤商人がいた。四天王寺の西側に伶人町遺跡があるが、この遺跡では鎌倉期から室町期の井戸やごみ穴が多数発掘されていて、その中には大量のハマグリ貝を投棄した大型のごみ

穴が見つかった。出土したハマグリは一般家庭で消費する量ではなく、ハマグリは採取・販売を専業とする集団がいたと考えられている（西近畿文化財研究所 2005、松尾信裕 2006）

四天王寺の西門の坂下には「西海辺」「西浜」「西浦」などと呼ばれるハマグリ等を収穫する地域が存在した。さらに、四天王寺の近くの今宮や西門その地域にはハマグリを集荷し販売する商人もいたのである。

『嘉元記』に、「安居殿御所西浦マテシホミチテ、其間ノ在家人民多以損失云々」とある。この記事の津波の被害を受けた「安居殿御所西浦」をどの地域であるのかを特定するのは難しい。四天王寺西門を出て坂の途中にある安居殿の西方地域に「西浦」があったことは間違いないが、どの辺りを示しているのかは不明である。すでに見たように、四天王寺西門を出て坂の西方に広がる地域が「西海辺」「西浜」と呼ばれていたことから考えると、四天王寺西門を出て坂の途中にある安居殿の西方地域に広がる地域全域を「西浦」と考えた方がよさそうである。

では、『嘉元記』に記載される津波被害によって被害を受けた「在家人民」とはどこの住民であろうか。『嘉元記』には多くの在家住民が被害を受けたとある。四天王寺西門を出て坂の西方の「西海辺」「西浜」と呼ばれていた地域には、ハマグリ等貝類、甲殻類を採取・販売する集落（今宮）があった。また、四天王寺西門前には「浜市」という市があったと考えられている（大澤研一 2006）。「浜市」という名は、15 世紀後半の「天王寺執行政所引付」(4) に、「一、浜市公事物」とみえる。伶人町遺跡の発掘で、この地が商品としてのハマグリの集散地として位置づけられることから、考古学ではこの遺跡を四天王寺の「浜市」と関連づけて考えようとしている。先の「天王寺執行政所引付」には「一、浜市公事物」としてハマグリは見えないことから、ハマグリの集散地伶人町遺跡は「浜市」には含まれないといえるかも知れない。しかし、15 世紀後半の「天王寺執行政所引付」にみえる「浜市」は四天王寺西門の坂の下西浜地域も含む広範囲の地域のことをいうのであるとしたら、ハマグリの集散地伶人町遺跡も広義の「浜市」に含まれると考えてもいいかも知れない。また、ハマグリの販売権は今宮が握っているため、四天王寺の西方の坂にあるハマグリの集散地伶人町遺跡も今宮商人が把握しているとも考えられる。

『沙石集』（新編日本古典文学全集）には、次のような天王寺と蛤の関係を示す話が収められている。

（史料 5）

近比、高野に南証房の検校覚海と云ふ、密宗の明匠ありけり。先生の事を知らんと思ひて大師に祈念しけるほどに、示現に蒙りけるは、七生より以後の事を示すべしとて、始めには天王寺の西の海の蛤にてありしが、自然に波に打ち寄せられてありしを、幼き者のこれを取り手て、金堂の前にして遊ぶほどに、舍利散敷の声を聞く故に、犬に生れて、（下略）

上記の沙石集の記事によると、高野山金剛峰寺の検校覚海という僧が、自分の前世のことが知りたくて、弘法大師に祈念した。大師の示現によると、覚海は七生の昔、蛤であった。天王寺の西の海にあった蛤を、子供が拾って金堂の前に持って行った。金堂の前で遊んでいて、舍利散敷の声を聞いたので犬に生れたとある。

『沙石集』の著者無住が執筆を始めたのは弘安 2 年（1279）である。上記には天王寺の西の海とあるだけで、具体的な地名は記されていないが、この記事から 13 世紀後半、天王寺の西の海はハマグリの産地として知られていたこと、蛤は天王寺と深く結びつけて考えられていたことは明らかである。

従来、ハマグリは今宮という販売人が集まる地点だけで考えられていた。しかし、天王寺に隣接す

る怜人町遺跡がハマグリの集散地であること、13世紀後半、天王寺と蛤が深く関連づけて広められていたことを考えれば、今宮とハマグリを関連づけるよりも、天王寺とハマグリの関係を中心に理解する中で、今宮も位置づけるべきではなかろうか。

四天王寺西門から今宮戎神社まで1キロメートルしか離れていない。また、摂津慶長国絵図（図1）をみればわかるように、四天王寺と今宮とは直線の道で結ばれていた。四天王寺西門から逢坂を下るとそこに今宮がある。四天王寺と今宮は一体のものとして考える必要があろう。



図1 摂津慶長国絵図（天王寺中心）

2. 1707年地震以前の絵図と遠江中部低地

2では、1707年の宝永地震によって地盤が隆起した遠江中部低地の湊のありようについて検討する。まず、検討を行う文書（史料6～9）を掲げる。

（史料6）

- a 一、当国横砂御城西、山名郡浅羽之庄三拾余郷、壹万余石之在所、東ハ御城後之山より、北ハ往還通袋井宿之西芝ヶ原之峠迄山林続キ、西ハ太田川・諸井河之落合川通堤、南ハ海、是又、潮請之大堤之内ニ而、地窪成場所ニ御座候所ニ、跡々横須賀と湊御座候、即満水仕候而度水干方能御座候処ニ、三十六年已前、宝永四丁亥年十月四日、駿遠両国大地震にて、往還通宿々迄悉潰、翌子年、御救として右宿場へ坪割を以、金子被為下置普請仕候、其節、別而海辺通強くゆり上ヶ、横須か湊干潟之平地と成候ニ付、其砌、横須賀御城主西尾隠岐守様大分之御物入を以、湊為御堀被遊候得共、川通之押水無御座故、風雨之節ハ浪高ク湊口を砂にて折埋メ、日和能節ハ西風強ク砂吹上ヶ、湊成就不仕候ニ付、浅羽之庄悉ク水怒涛ノ場所罷成、別而十余ヶ年以来洪水滋く、満水之節ハ南西大堤之内、潮水のこたく溢々と水湛え、十日或ハ十余日ニ及水引兼、作毛悉く皆無と罷成候義及数度、先年迄横須賀ニ湊御座候節ハ、纔々半里計者水吐キ候処ニ、遥之福湊及式里ニ西江漸々水引候ニ付、不及了簡、追日百性方随分折難儀仕候、右之場御領知被遊候得ハ、作毛皆無之年ハ御年貢不納而已か、剩外村之御物成米之内を御はぶき、猶夫食等被下置、度々御救被下候様承候、然時節、百性方年来之難儀御明慮被遊可被為下置候、村方ニ度至極難儀ニ奉存候、度々相談仕、只今迄有来候水吐キ、東ハ横須賀之近所米子橋八艘、西ハ湊村之八艘計ニ而水引兼候ニ付、外ニ而堤場所を見立、水干方色々了簡仕候得共、御地頭様方御入合之地ニ而、

百性方相談不熟所々御地頭様方御役人中ニ茂、第一御為之筋并百性方御憐愍身以重キ御事ニ御座候得共、水干方の目当テ其一円出来不仕、不心成年月を歴候、別而御役人様方ニハ、対御地領知行御入合之義者、隣郷之百性相談を以、御願申上候而茂、御互ニ御聞合を以、双方障り無之故ニ而被仰付、万端御遠慮ニ遊候御掟等承候、何様之御了簡御座候とても御入相之地ハ思召之俣ニハ難被遊御事と承候、何れニ茂御入合之場所御下知無之而ハ、湊成就不仕御事与承候、右之村々御救と被思召、湊開水被為仰付、御憐愍被為下置候得ハ、畢竟、御領知被候御様方御為可有宜筋与乍恐奉存候御事、

b 一、上代ニハ諸井川ハ横須賀湊へ落、大田川三栗谷十七郷之村中カを通り、福田村より廿余丁計西、鮫嶋と申在所江川水落、則彼所を鮫嶋湊与申ならはし候所ニ、満水之節ハ見付宿之北、上原向笠原之厚水、中泉之東、今之浦へ怒涛、殊に天竜川を仕懸候、勾坂郷中之大井は又鮫嶋村江落込、太田川と山方ヨリ之押水口三栗谷ハ悉ク怒涛リ場所ニ御座候ニ、水怒涛を免除様ニ御救被遊被為下置趣ハ、先年、伊奈備前守様御賢慮之御慈悲を以、三栗谷拾七郷之村頭、稗原と申在所之上ニ而太田川之河口を大堤ニ而築立被仰付、四・五丁東南之方へ新川を堀り、稗原村はつれの東ニ而諸井川与両川一所ニ落合、最前の如く横須賀湊へ計水落候ては、水吐キ口宜からす由、是節福田迄、先年より有来候井通り悪川吐御座候を、広く掘割新川ニ被仰付、両川拾丁計の内を一所に流、又横須賀・福田東西之湊江水吐キ候処、横須賀先御城主本多越前守様御代、浅羽庄領内ニ御座候而、川通戸場野村堤の外ニ代官衆より大キ成ル川除被仰付候ニ付、段々与川水西江付、福田湊へ計水落、戸場野村川下、其中之村与申在所古川通ニ新田出キ仕候、其節横須賀ニ而名高キ郡代、水城平右衛門殿被仰付候ハ、しかと相談を不逐して如此なる水除可成筋与殊之外後悔被致候由に今申伝候、然共、大地震以前に横須賀江大船出入仕候得共、曾而障りと不罷成候処ニ、地震已後干渴と成り何□□□□川通押水絶候ゆへ、湊成就不仕候ニ付、水城氏出語思ひ当り候とて、水怒涛場所百性方旦暮残念かり申儀ニ御座候、只今、福田湊江計水落、横須賀湊潰レ候事下少力のたとへに申候とて裏店借シて表屋とらるゝと屋らん諸国の廻船方ハ勿論、浅羽の庄難儀至極の筋と罷成候御事

c 一、遠江海辺の旧跡袖師之浦、横須賀当国無双之湊与申伝候処ニ、湊塞、諸国之廻船難儀仕候筋ハ、西ハ勢州鳥羽之湊与三州之旛頭郡吉良之庄与相对而、尾州名古屋、勢州桑名迄廿余里西北へ相継候内灘ニ御座候、東ハ豆州下田迄遠州御前崎と差向イ、駿州沼津迄登北へ引込候入海ニ御座候、遠州ハ殊之外南江出張り候国ニ而御座候而、海上之見渡、勢州鳥羽訶乗の両湊与豆州下田与遠州横須賀鼎のことく相連リ候を以て、鳥羽より下田迄の海上道法りを却テ遠江灘七十五里与申ならはし候様ニ伝承候、惣而東海・南海之船路を乗候事、春夏ハ沖を乗り候とて、登目の及さる程遠く渡り、秋冬ハ地□□□候とて、磯際半里一里の内を近く乗候作法と承候、春夏の湿気は究て南風の物ニ御座候得ハ、沖を乗り不申候而ハ差当之湊へ入悪く、海上の働き難成、秋冬の嵐ハ帆不定、大キ成嵐ハ大概北風の物ニ御座候へ者、地を近く乗り不申候而ハ南江も吹難ニ連、是又、郷ニ不及ものと承候、遠江荒井より欠塚迄五里の間ニ湊無御座候、欠塚湊ハ天竜川長洲の押出シニ而、洲先キ壱里も海中江高ク湿気の節、廻船入候便ニ不宜、欠塚より半里東福田湊、是又、平ラ付ケの場所ニ御座候、福田より式里東よこすか、是より国安村江式里、此浦ニ浅根と申岩御座候而難所与承候、国安より白羽村へ式里、駒形岩沖中□□□□出張り候場所、白羽より一里東地頭形村、此所三崎之岩海中江出張候難所御座候、白輪と地頭方之間二ツ谷村、諸国廻船難風ニ逢候節、駒形三崎之難所を乗り抜、二ツ谷村へ船を入候得共、此所ニ東西へ流候尾高と申岩御座候而、度々破船仕候様ニ承候、地頭方より二里東、相良、是より一里東、川崎、扱横須賀湊之

儀ハ鳥羽・下田之真中と申伝候、殊ニ荒磯依り拾丁余北江引込、御城追手の前、広小路中土井と申所迄、古ハ潮満テ大船出入仕、当国無双之湊と申伝候証拠ハ、惣而当国今切之湊依り大井川迄の間、海部却て平場之村続キニ而、風雨之節何方と申目当テ難成場所ニ御座候、横須賀湊の儀ハ、御城一段高く、後ニ山林御座候而、何程之風雨ニ而も沖中迄見渡シ廻船方助与成候を以テ宜湊と申伝候、先年ハ諸国之廻船湿気に逢候節ハ、数百艘入込候而茂せまからず、日和を見合出船仕候湊と承候、惣而大切成御城米を初寒廻を第一と仕、廻船方、秋冬ハ地を乗申候故、他国の灘ニハ冬の破船稀成ル事ニ御座候得共、遠江灘刎荷破船共に夏冬の差別無御座候難所多キ処ニ宜無御座故、無理成日和在も乗候故と奉存候、廻船方御救而已ニ茂あらず、御城下町人所持之只と拾余艘ニ御座候由、海辺の津において式里遠方御他領福田湊ニ船カケ遊置候事中々不自由成ル義御座候、先規之通湊成就仕候ハ、浅羽之庄ハ勿論、横須賀最寄城東郡之内廻船等津出し筋可宜と奉存候御事

- 一、川筋真一文字ニ行当候南ニ大嶋・雁代と申在所ニケ村御座候、先年横須・福田両湊江水吐キ候節ハ、中嶋のこつく成場所与承候、彼大嶋村と中野村の間を通りよこすカ江流候、川口塞り候事及九拾年ニ候由、殊ニ大嶋村より福田湊江半里計ニ而水引立能、福田川口ハ次第ニ広く罷成、横須賀江之古川通、纔ニ溝川の様ニ罷成候て、殊ニ横須賀迄川筋壱里半之場所ニ候由、然共只今も福田湊より差潮ニハ大嶋迄川上ヘ満テ、よこすカヘの古川迄汐の満干仕候て、よこすカノ近所迄昔の川通広く御座候他、大嶋南川口広ク堀開キ横須賀湊被仰付候共、川水十分ニ落不申とてても、満水の時節両湊、東西ヘ押水強御座候て両湊依り不斷潮の満干行通湊成就可仕と奉存候御事

(元文4年〈1739〉11月26日横須賀湊開水についての注進書、『浅羽町史』資料編2 近世、1996、浅羽町)

(史料7)

乍恐御訴詔申上候

- 一、今野浦池ヲ、見付衆新田ニ可仕旨、御訴詔申上候ニ付、右之池、新田ニ罷成候而茂、何之差障り茂無之候哉と御尋被成候御事
- 一、今野浦池之義者、御ぞんし之通り、御厨之内、南輪分高三千石余之田地江、前々より用水取来申候ニ付、日照之時ハ、今野浦より半里程川下ニ而井をせぎ、用水取申候、其時、見付衆、今野浦川通り少しつゝ御座候新田共、水いかり申候与我まゝ申候、若今野浦新田ニつき、弥新田水いかり申候与我尽申、井せき申時之障ニ罷成候者、右三千石余之本田、日損可仕と存、迷惑ニ奉存候あいだ、前々之通、被為仰付可被下候御事
- 一、今野浦池、新田ニ罷成、堤をつき、かつ狭く罷成候者、大風雨之時、塩押込候時分者、拙者共西囲堤切レ、高三千石余之田畑・百姓居屋敷・御公儀様御蔵屋鋪迄茂、塩入可申候間、前々之通、池ニ而罷有候様ニ被為仰付可被下候、池にて罷有候へ者、今野浦悪路、かつひろく御座候ヘハ、塩指込自由ニ而、右囲ひ堤、破損不仕候吉之段々、御前様御存知之通、少も偽不申上候御事
- 一、中島湊切之ふさがり、其節何程御人足被仰付候而茂、大雨降候而かさより押水無之候へ者あき不申候、此押水之儀ハ、見付北西東、向笠原・賀茂原より、谷水今野浦江一面ニ押出シ、水かさみ申候ニ付、その押水ニ而湊明申候、新田ニ罷成、せハミ申候而、堤なども掛申候者、押水之障りに罷成、湊あき申間鋪候、左候ハ御厨中高五千石余水入損いたし、迷惑可仕候事
- 右御尋御座候間、以来之ため御断申上候、仍而如件

寛文三年
卯ノ六月

西之嶋村

仁兵へ
彦馬
万丞

五十子

太郎兵衛
次郎右衛門
五郎兵衛

下太村

久太夫
三郎兵衛

中しま

八兵衛
惣太夫

(寛文3年〈1663〉6月今之浦池新田開発願につき訴訟、『磐田市史』史料編2近世、磐田市、1991年、磐田市教育委員会所蔵)

(史料8)

乍恐書付を以御訴詔申上候

一、浜部村前浜通ニ、広野長貳百七拾間、横百六拾間之所、同村源右衛門、拾六年以前巳之年、松平市右衛門様御代官所之節、御請負仕、塩浜ニ取立、壹ケ年ニ野米貳石三斗、塩三斗五升入五拾表ツヽ、年々上納仕来申候、福田村湊より潮之指引を以、塩浜取立申候所ニ、近年ハ五百間余、右之湊、東へ寄、海遠ク罷成候ニ付、潮之指引悪敷罷成、悪水計余候故、段々泥土を置、地高ニ罷成、一両年者塩焼申儀、曾而不罷成、塩浜潰申候間、右之所新田畑ニ開発仕度、惣百性奉願候、勿論新田成就不仕候内者、跡々之通、野米貳石三斗、塩五拾表ツヽ年々差上可申候、新田成就仕、立毛御見分之上、御取ケ被仰付候ハヽ、野米・塩御年貢共ニ御赦免可被下候、若新田相続不仕、御所務上り不申候ハヽ、野米・塩御年貢跡々之通、後々迄年々指上ケ可申候間、奉願候通、被仰付被下候ハヽ難有可奉存候、已上

元禄五年申十二月

遠州浜部村庄屋

弥七郎

同村源右衛門弟

美濃部五右衛門様

左五兵衛

同村組頭

甚太郎

同村百姓代

六右衛門

(元禄5年〈1692〉12月新田開発願、『磐田市史』史料編2近世磐田市、1991年川嶋重蔵氏所蔵文書)

(史料9)

乍恐口上書を以申上候

一、浜部村前広野、昨年ハ上大原・下大原村付之馬草場ニ而、右両村より野米貳石三斗宛、上納仕候所ニ、去ル貳拾貳年以前巳ノ年、浜部村源右衛門塩浜ニ見立、野米貳石三斗并塩五拾俵宛、年々御上納仕候筈ニ御請申、只今迄御定之通、御上納仕来り申候所ニ、右場所、中嶋湊遠ク罷成、潮ノ指引無御座、八年以前より塩浜荒レ申候ニ付、右請負源右衛門身体潰シ江戸へ罷下り申候、拙者共証人ニ相立迷惑仕、新田ニ取立、塩御年貢之足ニも仕度奉存、七年以前申ノ年美濃部五右衛門様へ御願申上候所ニ、御江戸へ至、得御下知相叶申候故、六年以前酉ノ春より、手前入用を以、堤堰樋等仕立申候へ共、年々風波ニ而堤打崩シ、新田ニも成就不仕荒地ニ罷成候所ニ、野米并大分之塩御年貢弁へ指上、百性身体つぶし迷惑仕候間、当春より御訴詔申上候通、右塩御年貢ハ御赦免被遊被下候様ニ、御慈悲之御意奉仰候、以上

元禄十一年寅六月五日

遠州山名郡浜部村

庄屋 弥七郎

(元禄 11 年〈1799〉6 月塩年貢御赦免願、『磐田市史』史料編 2 近世磐田市、1991 年、川嶋重蔵氏所蔵文書)

史料 6 は、元文 4 年（1739）横須賀湊開水についての注進書である。史料 6b には、かつて諸井川は横須賀湊へ落ちていたとある。また、太田川は三栗谷 17 ヶ郷の中を通り、鮫島という所に水が落ち、このところを鮫島湊といったとある。三栗谷 17 ヶ郷とは、中世の鎌田御厨地域の近世的呼称である。

鮫島という地名は、現在、福田・中島の西方にあり、図 2 と図 4 の内水面にある地点なので、湊があってもおかしくはないが、現時点では鮫島湊という呼称は史料 6 でしかみつかっていない。史料 6 は、宝永地震が起こった 1707 年より約 30 年後に作成された史料なので、鮫島湊が 1707 年以前に現在の鮫島（図 3）かその付近に存在したかどうかは不明である。

図 3 をみると、諸井川（現原野谷川）と太田川は合流して福田湊^⑤に流れ落ちている。史料 6b によると、諸井川と太田川が合流したのは、近世初頭のことであるという。また「伊奈備前」が三栗谷 17 ヶ郷の稗原のはずれの東で、諸井川と太田川を合流させたとある。「伊奈備前」は、慶長期に河川改修等で活躍した伊奈備前守忠次のことである。現在の太田川下流右岸河川敷には元島遺跡がある。元島遺跡は遺物等の状況から太田川の流路が変更したため、17 世紀初頭、住民が移転を余儀なくされたことにより廃絶したものと理解されている（加藤 1999, 加藤他 2002）。元島遺跡の遺物の出土状況から、17 世紀初頭に諸井川（現原野谷川）と太田川が合流して、現在の太田川の流路になったことは間違いなからう。

史料 6a には、宝永 4 年（1707）10 月 4 日に駿河国・遠江国に大地震が起こったとある。この地震は宝永地震と呼ばれ、マグニチュード 8.6 と推定されている巨大地震である。また、翌子年に、海辺通りが強く揺り上げ、横須賀湊は干潟の平地になったとある。また、史料 6b には、大地震以前は横須賀に大船が出入りしていたとある。6c には、志摩国鳥羽と伊豆国下田の真ん中にあり、横須賀城の大手の前、広小路中土井というところまで、潮が満ちると大船が出入りする遠江国無双の湊であったとある。この記事は信頼できる記事であろうか。このことについて、1707 年以前に作成されたことが明確な絵図から考えてみよう。

になる。

図2の横須賀城をみると、西と南は潟であったことがわかる。さらに、1707年以前の17世紀末に作成された図4をみると、天竜川の河口に位置する掛塚湊から東方に向かって低地に内水面が存在したことがわかる。1707年以前に作成された図2と図4は同様の地形を描いている。

これらのことから、1707以前、横須賀がかつて湊として機能していたと考えて間違いなかろう。よって、史料6の横須賀湊の記述はそれほどまちがいが書かれている史料と考えなくてもよいと考えられる。

次に、図4(7)にみえる「中島湊」について検討しよう。この地点付近には、1707年の宝永地震後に発展した福田湊があるので(史料6, 図3)、図4の「中島湊」は福田湊のことと考えられていた。しかし、寛文3年(1663)の史料7には「中島湊」の既述が見えるので、図4に見える「中島湊」はやはり中島湊である。

史料7には、「福田村湊」が近年、500間余、東へ移動したとある。また、史料8には中島湊とみえる。この中島湊と史料7の「福田村湊」は同じ湊のことであろう。地形図(図3)には、中島の東に福田があるので、中島湊が500間程、東に移動したと考えることができる。中島湊が東に移動した湊がのちに福田湊と呼ばれるようになったのであろう。であるから、図4に見える「中島湊」は中島湊であって福田湊ではない。17世紀末まで遠江中部低地には中島湊という湊があったのである。

この地域では1498年(明応7年8月25日)にマグニチュード8.2～8.4と推定される巨大地震が起こっている(明応地震)。この地震による地盤の隆起・沈降の問題を抜いて、当地域の地形を考えるわけにはいかない。図2と図4に描かれた1707年以前の地形と1498年以前の地形はことなるであろう。しかし、1707年以前の地形を復元することは、1498年以前の地域を理解するための大きな素材となる。遠江中部低地には池田荘がある。池田荘の西南の隅には年貢等の物資集積地である倉所があり、そこは川匂荘の東の端でもあった(石上英一 1994)。また、南は中島、北は鎌田・貝塚とする大の浦を囲む地域に伊勢神宮領の鎌田御厨があった。12世紀後半の給主度会為康の母は鎌倉遊女であり、鎌田御厨に水上交通の拠点の津があったことが推定されている(石上英一 1994)。本稿で述べたように、近世の御厨17ヶ郷地域には中島湊があった。図4の中島湊がそのまま鎌田御厨の水上交通の拠点かどうかは明確ではないが、中島湊周辺(8)に鎌田御厨の水上交通の拠点があったと考えていいのではないかと。

以上みてきたことから、1707年以前の文献・絵図の検討は、太平洋と遠江国を結ぶ中世の物資集散地の研究につながるのである。



図4 浜松青山藩川東領分絵図
(17世紀末、浜松市博物館蔵)

おわりに

以上、1361年の地震被害にあった摂津天王寺西浦と1707年宝永地震で地盤が隆起したことが明らかな遠江中部低地の生業・物資流通のあり方を検討してきた。

以下、検討の結果をまとめておきたい。

1. 従来、ハマグリは今宮という販売人が集まる地点だけで考えられていたが、天王寺に隣接する怜人町遺跡が蛤の集散地であること、13世紀後半、天王寺と蛤が深く関連づけて広められていたことを考えれば、今宮と蛤を関連づけるよりも、天王寺と蛤の関係を中心に理解する中で、今宮も位置づけるべきである。また、四天王寺と今宮は一体のものとして考える必要がある。
2. 1707年宝永地震以前の史料・絵図を検討した結果、横須賀湊⁽⁹⁾・中島湊を中世遠江中部低地の中心的湊として考えることができる。

(注)

- (1) 1361年の地震被害を受けた由岐湊については、以前検討したことがある（矢田俊文1998）。
- (2) 鵜叢刊第三
- (3) 荻野三七彦「嘉元記解題」『嘉元記』鵜叢刊第三
- (4) 『四天王寺古文書』第一巻
- (5) 1889年4月16日に東海道線が全通し、中泉駅が物資輸送の拠点となる以前は、福田港がこの地域の海上輸送の拠点であった（足立洋一郎2002）。
- (6) 『静岡県史』資料編9近世1、別冊付録、1992年
- (7) 図4について、斎藤新氏は、元禄12年（1699）に、浜松藩主大中瀬村・小中瀬村などを新たに領有するに伴って作成した17世紀末の絵図であるとする（斎藤 新2007）。
- (8) 南出真助氏は、鎌田御厨成立当初から漁撈集団活動が見られ、彼らは中島付近に居住し、伊勢との連絡、貢納物の漕送に関与していたとする（南出真助1979）。なお、南出氏は中島付近を近世の海岸線とするが、図2.4を見ればわかるように、それは誤りである。
- (9) 図3の雁代の東、前川流域にある湊地域が、中世史料に記載される浅羽湊と推定されている（有光友学1996、加藤理文1999、2002）。今回は、1707年以前の史料・絵図を遡及させて中世の湊を推定するという方法を取り中世史料に記載される湊との関係の検討は行っていない。この浅羽湊と横須賀湊との関係については改めて検討したい。

(参考文献)

- 足立洋一郎「福田港と回漕業の展開」『福田町の歴史』福田町、2002年
- 有光友学「戦国前期遠駿地方における水運」『横浜国立大学人文紀要 第一類 哲学・社会科学』42、1996年
- 石上英一「池田荘」『静岡県史』通史編I原始・古代、静岡県、1994年
- 石上英一「神戸と御厨」『静岡県史』通史編I原始・古代、静岡県、1994年
- 大村拓生「平安時代の摂津国衙・住吉社・渡辺党」栄原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006
- 大澤研一「中世大坂の道と津」『大阪市立博物館研究紀要』33号、2001年

大澤研一「中世上町台地の宗教的様相」 栄原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006 年

大阪市『新修 大阪市史』第2巻、1988 年

大阪市文化財協会『大坂城下町跡』Ⅱ、2004 年

加藤理文『元島遺跡Ⅰ（遺物・考察編1-中世-）』静岡県埋蔵文化財調査研究所、1999 年

加藤理文・森田香司「中世」『福田町の歴史』福田町、2002 年

斎藤 新「竜洋地域の古絵図」竜洋町史編さん委員会編『竜洋町史』資料編Ⅰ原始・古代・中世・近世、磐田市、2007 年

豊田武『座の研究 豊田武著作集』第1巻、吉川弘文館、1982 年

西近畿文化財研究所『伶人町遺跡現地説明会資料』2005 年

原田伴彦・矢守一彦・矢内昭『大阪古地図物語』毎日新聞社、1980 年、矢内昭執筆部分

春田直紀「漁業と水運の地域的展開- 今宮魚貝商人の京都進出-」『大阪府漁業史』大阪府漁業史編さん協議会、1997 年

松尾信裕「上町台地周辺の中世集落」 栄原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006 年

松尾信裕「四天王寺門前町のにぎわい」『大阪日日新聞』2006 年6月22日付「おおさか考古学百景」第7部(3)

南出真助「中世伊勢神宮領荘園の年貢輸送-三河・遠江を事例として-」『人文地理』31-3、1979 年

矢田俊文「明応地震と太平洋海運」『民衆史研究』55 号、1998 年

安濃津を襲った近世以前の地震・津波災害で、最も有名なものは、近世地誌でも語られる明応年間のものであろう。けれども、東海・東南海域では、地震とそれに続く津波が、周期性をもちつつ発生している。そのうち、信頼できる同時代資料に安濃津が地震と津波の被害を受けたことが記されているのは、嘉保3年（1096）地震についてである。

【資料1】

「後聞、伊勢国阿乃津民戸、地震之間為大波浪多以被損云々、凡諸国有如此事、近代以来地震未有如此例也」

藤原宗忠の日記である『中右記』嘉保3年12月9日条の裏書の記載である。「後聞」とあるように、情報が京都の貴族の耳に入るまで、タイムラグが存在していた。けれども戸田芳実氏が指摘するように、京都以外の地方の被害として、藤原宗忠が記すのは、近江勢多橋の破損と安濃津の大津波だけであり、「中央貴族からみた東国交通の要港としての重要性を物語っている」と考えて良いだろう。

『理科年表』では嘉保地震の推定規模はM8クラスとされており、明応地震と遜色ない。嘉保地震によるものと推測される津波堆積物も各所で検出されている。

このように、東海・東南海沿いの低地での人間活動を考える上で、災害が与えた影響は少なからぬものがあつた。一方で、真目賀嶋・今嶋などが再び陸化した背景には、人間による積極的な再開発があつたのも事実である。

それでは、安濃津では、如何なる状況が想定できるだろうか。嘉保地震の20年余り後の、永久6年（1118）には、安濃津の住人の積極的な活動が、信頼できる資料¹で確認できることからみて、安濃津は、地震・津波によって景観的な変化を蒙った可能性はあるものの、拠点としての重要性を減じていないと結論できる。

この点について、本報告では、安濃津の後背地である安濃郡の一地域である村主にかかわる資料に注目しながら確認していきたい。

【資料2】

進上

紙式帖員百枚

右一日仰事候、相構所令進上候也、大夫祐殿被仰称、件官物未進并粮米者、以今明之内可沙汰之由、所被仰候也、不知他人、且偏随仰不可申左右之由、所承候也、其中於粮米者、安野村主辺に進上可申也と所仰口候、次稲木大夫沙汰ハ彼目代時、可令沙汰候也、御京上ハ何日許乎敷、可仰候御、頼季恐謹言、

二月五日

検非違使物部（花押） 状

進上 相模御庄主御中 ²

年欠であるが、東寺領の大国荘関係の文書に度々登場する物部頼季や稲木大夫（荒木田延能）といった人物名が見えるので、11世紀後半の文書と考えられる。

神郡検非違使であった物部頼季が、相模御庄主に対して、未進官物と糧米について弁解していること、紙を2帖（1帖＝100枚）贈ったことが分かる。

本報告では、糧米を安野村主辺に進上することが、大夫祐殿から指示されたことに注目したい。大夫祐殿とは、神祇官の第三等官の地位にあった人物であると考えられる。相模御庄主については、現段階では未詳である。

安野は安濃と解することができよう。村主は、安濃郡の和名抄郷として村主郷があり、現在の津市安濃に遺称地が存在する。この地は、安濃川に沿った場所であった。

安濃郡は、京都から琵琶湖南、鈴鹿峠を経て尾張に向かう東海道の本道からは外れるが、志摩国へと延びる支道上に位置していた。伊勢神宮への交通路でもあり、斎王や勅使も使用する官道であった。また、鈴鹿郡から安濃郡に出ると、そこからは平野が広がり、安濃川沿いに伊勢湾へと抜けることも容易であった。海との接点に安濃津が存在していた。

それゆえ、物部頼季も、安濃川水運か、安濃川に沿った陸路を使用して糧米を輸送した可能性が考えられる。さらに安濃津が、重要な経由地として機能していたことも十分に想定できよう。

安濃郡の村主については、平松令三氏が、安濃郡の四天王寺に伝来した薬師如来坐像に納められていた結縁者に見える「勝」姓のゆかりの地として示唆していることに留意したい。

薬師如来坐像の胎内から発見された文書によれば、承保4年（1077）に薬師如来坐像が製作されたこと、「物部」姓、「勝」姓や「大中臣」姓の人々などが結縁者となっていたことが知られる。

胎内から発見された四天王寺領田畠の坪付文書によれば、寺領は、膝下である1条から5条と、安濃郡西部の19～23条に集中しつつも、郡内の広い範囲に渡って散在していることが分かる。このような寺領の分布を解釈するには、安濃川沿いの交通路とそれに関わる人々の結集を想定するのが自然であろう。

四天王寺は、安濃郡と菟芸郡の境にのびる丘陵地が伊勢湾を臨む突端上に立地している。

四天王寺境内からは、奈良時代の瓦が出土している。寺の裏山にある鳥居古墳の発掘では、奈良期の押出仏も出土している。これらの事実から、少なくとも奈良時期以降、かなりの規模を誇る寺院が存在したことが分かる。

四天王寺の眼下では、現在も安濃川と志登茂川が合流し、伊勢湾に注いでいる。安濃川と志登茂川の河口は、正保国絵図でも、藤潟同様に、低湿地として描かれている。

このような状況からみて、四天王寺は河川交通と海上交通の結節点となりうる、港湾空間を押さえる場所に立地していた寺院であると考えることができ、村主の地は、安濃川を介して、四天王寺膝下の空間、さらには太平洋海運と結びついていたと考えることができよう。

【資料3】

□□□船日記

□□□御厨船

□□□清追捕□船 水手九人

□□新別当分船 水手十六人

□艘清四郎船 水手六人

□艘備後船 水手六人

一艘伴栄船 水手八人

一艘同住高太船 水手九人

一艘三川検校船 水手七人

一艘伴別当船 水手□人

一艘中太船 水手六人

一艘坂允船 蘭萱黙

□□麻浜檢校船 水手八人	一艘田散供船 水手八人
□□使三郎船 水手八人	一艘三郎別当船 水手八人
一艘六世大中太船 水手 ^五 六人	一艘伊別当船 水手八人
伴追捕使船 水手八人	一艘伊太郎船 水手四人
□艘藤七船 □□□□	一艘新使船 水手八人
□倭仗船 水手四人	一艘弥中太船 細船
□艘高三郎船 水手八人	二艘新刀禰 □ 一艘細細 中
□艘高別当船 水手八人	一艘諸司太郎船 伊勢守 兵糧米積 水手八人
□□中太船 水手六人	一艘甲斐中太船 水手六人
□□伸三郎船 ^(ツ) 六人	一艘新使船 水手十人
□□新司□郎船 八人	一艘村主船 十八人

(下略)

嘉保地震から90年ほど後の、治承5年(1181)に平家に動員された船を書き上げた「太神宮司庁出船注文」³と称される文書中には、「村主船」という記載が見える⁴。

資料3として掲げた名称不明の御厨は最大の船数を出しており、稲本氏は安濃津御厨と推定している。これに従うならば、「村主船」という記載は、本報告で注目した安濃津の後背地にある村主に関係しよう。「村主船」は、水手18人を擁する最大級の船であり、村主を冠した人々が、広範囲での交通に関与していたと想定することも可能であろう。

そのように考えるならば、嘉保地震直後とも言える、康和4年(1102)の皇太神宮神主等注進状案⁵にみえる「遠江国鎌田御厨惣檢校村主永吉」という人物の存在も、安濃津ないしはその後背地である安濃郡で読み解くことが出来る可能性を指摘しておきたい。鎌田御厨は、現在の静岡県磐田市にあった神宮御厨である。嘉保地震の20年あまり後の、永久6年(1118)に、鎌田神人が前遠江守源基俊と郎従を訴えていたところに、さらに安濃津神人が突然、同じ前遠江守とその郎従を訴えたことが、『中右記』に記されている。これは、先に述べた地震後の安濃津の積極的な活動を示す資料である。そして、その安濃津神人の活動の一端に村主を冠した人々が連なっていたと解するのが、本報告での見解である。

嘉保地震によって、安濃津およびその後背地である安濃郡、さらにはそれに関与していた人々も大きな被害を受けたと考えられる。けれども、地震後も、村主も含めた、京都と東国、京都と神宮とを結ぶ交通の要衝としての安濃郡、安濃津の重要性に変化はなく、またその背後にある社会構造も維持されていたと結論できる。けれども、景観の変化は別問題である。この点については、本報告で注目した、四天王寺膝下の空間の位置付けも含めて、今後の課題としたい⁶。

【主要参考文献】

- 伊藤裕偉『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院 2007
 伊藤裕偉・藤田達生編『都市をつなぐ—中世都市研究13—』新人物往来社 2007
 稲本紀昭『日本三津に関する史料の研究』津市 1989
 棚橋光男『中世成立期の法と国家』塙書房 1983

津市教育委員会『津市仏像悉皆調査 津市の仏像』津市教育委員会 2004
戸田芳実『歴史と古道一歩いて学ぶ中世史一』人文書院 1992
平松令三「三重の中世文化について」『三重—その歴史と交流—』雄山閣出版 1989
矢田俊文『日本中世戦国期の地域と民衆』清文堂 2002
綿貫友子『中世東国の太平洋海運』東京大学出版会 1998

¹ 『中右記』永久6年3月29日条

² 太神宮検非違使物部頼季書状 東寺百合文書な(平1241)

³ 書陵部所藏壬生文書(平3956)

⁴ 同資料の船の持ち主は、輩行名や官職名、備後や三川(三河)甲斐といった地域名のほか、村主や坂、伴などの姓を冠して区別されていると思われる。さらに区別する場合、伴別当、伴身補使、伴三郎のように、姓+官職or輩行名となっていると考えられる。このような名は、『兵範記』仁安3年(1168)1月4日条に記された、「津納所預字鬻高太」や、「近隣往反之身」である「字若太」と類似しており、興味深い。

⁵ 光明寺古文書(平1509)

⁶ 現在、提示されている安濃津の景観復原案では、時期による変遷を論じる段階まで至っていない。発掘調査された面積も小さいこともあり、変遷を描くための情報が圧倒的に不足している状況にあるためであろう。本報告では、四天王寺膝下の空間を解くことが、時期による変遷を組み込んだ安濃津の景観復原案を構築する上で、一つの手がかりとなると考えるに留め、今後の検討に備えたい。

はじめに

中世集落遺跡を発掘調査すると、断層・噴砂・洪水層・焼土層などが確認される場合がある。これらは、当時に発生した災害（天災・人災を含め）の痕跡として貴重なデータであることに間違いない。

しかし、これらを基に、考古学的に何かを発言するのはかなりの困難を伴う。まず、災害の痕跡が確認されたとしても、それによって「真空パック」された状態で発掘調査に至る例はほとんど期待できない（だからこそ、数少ない事例が大きなニュースとして世間を席捲することになる）。とくに、現在市街地化している場所の発掘調査では、かつての災害後に何度かの「開発」があるのが普通で、災害時の状況そのものを観察することすら難しい。つまり、災害があったであろうことは確認できたとしても、その実態にまで言及することは、考古学的には極めて困難なのである。

また、災害発生後に人々がいかなる対応を行ったのかを見ることも、かなりの困難を伴う。災害発生の直後に復興がなされた場合、災害の痕跡が地表面から除去される状況も充分想定できる。そうなれば、考古学的データとしての災害痕跡は、ほとんど観察できないということにもなる。

このように、考古学的に災害を考えることは、極めて困難というのが実態である。しかし、考古学における今後の検討課題として、充分認識しておく必要があると思う。

以上のことから小稿は、考古学的に災害を考えるさいに必要な事象を、発掘調査事例や地形環境に関する検討から問題提起する場とする。そのなかで、中世の人々が「防災」も含め、いかなる対応を行ったのか（行おうとしたのか）に注目したいと思う。

1 地震津波に関する考古学的課題

地震津波に関する素材として、ここでは安濃津遺跡群（津市柳山津興字松村地点）に見られる状況を検討する。

a 考古学的整理

ここで見る調査区は、3,700 m²を対象にしたものである。調査区は、現在確認できる津市街地部の砂堆（浜堤帯）では、海側から3条目にあたる。現地表面の標高およそ 2.8mで、現在の海岸線からは約 700m内陸にあたる。

中世以前 調査で確認された遺構の初現は、古墳時代前期（4世紀）である。古墳時代後期から奈良時代の遺物も少量あるが、遺構としては確認されていない。

中世前期 13世紀前葉になると、遺構が確認できるようになる。13世紀後葉がひとつのピークとなっている。出土遺物は多いが、遺構はそれほど明確ではない。13世紀末から14世紀代では、遺物は確認できるものの、遺構は少ない（不明確）である。

中世後期 15世紀前半には、遺構・遺物が再度増加する傾向にある。15世紀中葉から後葉にかけての時期が、当調査地で確認された遺構・遺物の最大ピークである。その後、遺構と遺物は急激に少なくなる。16世紀代の遺物は極めて少量で、遺構も明確ではない。

近世 16世紀以降、17世紀代の遺構・遺物もほとんど見られない。当地で新たに遺構・遺物の増加

が見られるのは、18 世紀から 19 世紀代にかけてである。詳細な調査は実施していないが、18 世紀代以降は複数の遺構面が存在したと考えられる。

遺跡としての画期 遺跡としての安濃津遺跡群が大きく展開するのは中世前期（13 世紀代）であり、15 世紀代にも大きな展開が見られる。その間、14 世紀代、および 16～17 世紀代の空白期をはさみ、18 世紀代に改めて展開している。

なお、これはあくまでも調査地 1 地点の状況であり、安濃津遺跡群全体の動向ではないことを強調しておきたい。調査地点が異なれば、異なった展開が確認できる可能性を多分に含んでいるのである。

b 遺構面と土地区画の関係

中世前期と後期の遺構面は、標高約 1.5～1.8m である。ほぼ同一面で確認できる。しかし、両者に見られる遺構の軸線は大きく異なっているといえる（図 1-1・2）。遺構面が同一とはいえ、中世前期と後期とでは、土地区画に関する「指針」が異なっているといえる。

一方、中世後期の遺構面上には、50～60 cm の砂が堆積している（以下、「褐色砂層」とする）。近世遺構面は、この褐色砂層上に形成される（標高約 2.0～2.5m）ことになるが、中世後期と近世の遺構軸線はほぼ共通している（図 1-2・3）。褐色砂層が形成される前後における遺構面は、主軸方位の一致が見られる。図 1-1～3 には、明治後期頃の地積図を表現している。中世後期の遺構面（当然ながら褐色砂層以前）は、明治期の地積図に示された状況とも概ね符合しているといえる。

以上のことから、土地区画の状況に関しては、「中世のなかで断絶があり、中世後期から近世にかけては連続性がある」という状況といえる。



図 1-1 安濃津遺跡群（中世前期）



図 1-2 安濃津遺跡群（中世後期）



図 1-3 安濃津遺跡群（近世）

c 褐色砂層の評価

ここで、中世の遺構面を覆う褐色砂層について見ておく。

褐色砂層は、北壁部では3層、西壁では2層に区分できる(図2)。土(シルト質)を含まない均

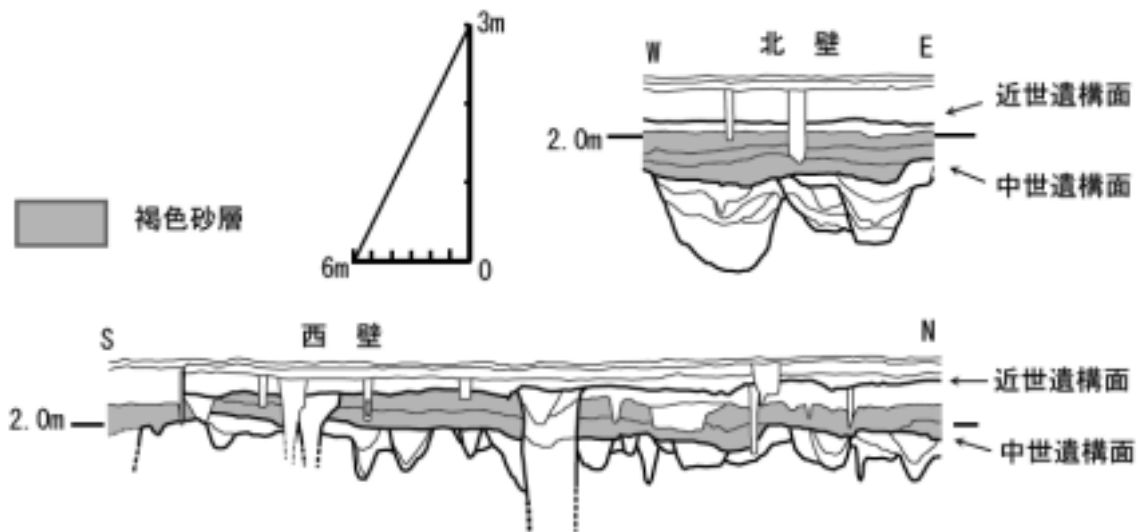


図2 安濃津遺跡群調査区土層

質な砂(中～細砂)で、「河成砂」のような粗さは無い。素直に見れば「海成砂」である。均質な砂を人為的に運んだ可能性はゼロではないが、少し考えにくい。

褐色砂層内には近世の遺物も少量含まれている。ただし、意識的な調査を実施していないため、この遺物が褐色砂層の上層部にあたるのか、それとも下層部であったのかまでは確認していない。

以上の状況から、調査で確認された褐色砂層は自然堆積層と考えられ、その厚さからは広義の洪水層にあたる可能性が高いと考えられる。均質な中～細砂であることから、上流部から押し流されてきた土砂ではなく、海成砂と考えられる。以上により、褐色砂層は津波によって形成された層である可能性が高いと考えられる。なお、中世後期の遺構埋土には、流入した砂層の見られるものはあるが、際だった特徴は見られない。遺構埋土から洪水を考えるのは、今後の検討課題である。

さて、中世後期(15世紀代)の遺構面を覆い、18世紀頃の遺構がその上に展開するという条件を地震津波に求めるとすれば、その候補は、明応地震(1498年)および宝永地震(1707年)の2件が思い浮かぶ。明応地震の津波は、安濃津付近で3～5m、熊野灘で4～5mとされる(飯田1981)。それに対し、宝永地震の津波は、津付近は3～4m(飯田1981)ないしは5m以下(行谷・都司2005)とされている。津波の規模としては、両者に大きな差は見られない。これらの震災規模と当調査区の褐色砂層とがどう結び付くのかは今後の課題であるが、可能性として考慮する必要がある。

d 安濃津における災害の克服

褐色砂層が明応および宝永地震に伴って形成されたと見た場合、以下のような傾向を見ることができる。

まず、遺構の展開に関してである。遺跡として見られる16世紀初頭から18世紀初頭頃までの空白期は、この震災との絡みで見れば、明応地震直後の復旧を示す痕跡は見られない一方、宝永地震以後は当地で急速な土地利用が開始される、ということができる。つまり、中世後期には災害によって集落地形成が途絶えるが、近世中期には災害を契機とした開発が進展する、ということができる。褐色

砂層の上部には一部に整地層が見られるので、当地を集落として利用するための地業が実施されたと考えられる。

褐色砂層を挟みながらも、中世後期と近世の土地区画方向が一致することについては、街道（伊勢街道）の主軸や津城下町に関する地割りなどが、中世後期の土地区画方向を踏襲していたため、大局で一致していたと推測される。

災害に対する克服という観点で見ると、16世紀代には実施されなかったものが、18世紀代には実施された、と見られる。これは、中世と近世との社会体制上の違いが背景にあると考えられるが、詳細は今後の課題である。

以上、安濃津遺跡群の発掘調査結果から、津波による洪水層の可能性のある堆積土の存在を指摘した。しかし、数多くの課題と問題点があることを言わざるを得ない。

まず、発掘調査地点が1ヶ所のみであるため、比較検討を行う素材が無いということである。ここでは、地震津波によって形成された可能性を提示したものの、あくまでも可能性に止まる。土層として、例えば「飛び砂」で形成された層とどう違うのか、といった根本的な検討課題がある。また、津波による土砂堆積とはどういったものか（津波で平地にどの程度の土砂が堆積するのか）についても、未だ全く事例が積み上げられていないのではないだろうか。これらは、筆者の能力不足による問題かも知れないが、今後、発掘調査を実施するにあたって、意識的に観察する必要を強く感じている。

2 災害への対処～砂堆と河口の関係～

a 砂堆と河口部の関係

海岸部に形成される平野は、その土地の自然環境に大きく影響されていると見るべきである。つまり、平野を形成する「河川・土砂（丘陵）・海」という構成要素は同じであっても、それぞれの力学的関係は、地域によって異なっていると考えるのが適切であろう。

伊勢湾沿岸部に見られる河口部の特徴を見よう。図3は、明治25年前後に作成された地図（帝国陸軍陸地測量部）で、伊勢湾西岸北部の朝明川河口部（現在の三重郡川越町・桑名市付近）である。ここでは、伊勢湾に突き出すような三角州が形成され、三角州から南北に砂州の延びていることが観察できる。また河口は、自らが形成した三角州や砂州を迂回するように蛇行して海へと至っていることがわかる。河口は1ヶ所ではなく、砂堆の影響により、2ヶ所となっていることも観察できる。

海岸部に砂堆を形成するのは、潮流のほか、沿岸流の影響も含まれている。これを踏まえて朝明川河口部を見ると、概して河川から



図3 朝明川河口部（明治24年）
（旧大日本帝国陸軍陸地測量部『桑名』より）

の土砂供給（河川力）が潮流・沿岸流（海岸力）に比較して強いため、海側に突き出たような三角州を形成すると見られる。

ここで見られる「河川力＞海岸力」という関係は、朝明川のみならず伊勢湾西岸部で基本的に見られる形態と考えられる。最も典型的なのは雲出川や宮川で、河口部に巨大な三角州を形成している。これに比べて鈴鹿川や櫛田川では、それほど大きな三角州は形成されていない。これは、比較的広い平野部を形成する鈴鹿川・櫛田川の河口部は移動の幅が大きいのに対し、雲出川・宮川河口部では丘陵部と河口との距離が短く、河口部の位置に移動幅が少なかったことに起因するかと考えられる。当地における砂堆あるいは潟湖は、このような関係のもと形成されていると考えられるが、河川の規模によっても当然違いが生じるはずである。

このような状況を基本に置くと、伊勢湾西岸部では砂堆を直線的に貫いて河口部を有する場がいくつか認められる。これは、通常では考えられない景観であり、何らかの人為的な河川改修工事が伴っているものと考えられる。

さて、伊勢湾西岸部において、中世における河口部の状況を直接示す史料は無い。ここでは、江戸期の絵図（正保国絵図ほか）および19世紀代の地形図を観察することや、現地の残された地名などから推測していきたい。

b 事例；安濃津

安濃津は、雲出川とその北岸に形成された潟湖、および北部に位置する安濃川によって形成されている。潟湖の北岸にあたる津市垂水地区付近に「入江」、柳山津興地区には「馬池」といった地名が見られ、潟湖がこの位置まで及んでいたことを示している。また、現在の津市古川は、地名が示すようにかつての河川がこの位置を通っていたものと考えられる。

安濃津近隣で注目できるのは、岩田川の状態である。岩田川は安濃川の一支流と位置づけられるもので、現在は安濃川からは独立し、安濃川が形成した平野部の南辺低丘陵部を水源とする小河川である。

このような状況にもかかわらず、岩田川河口部は実態とはかけ離れたほどの巨大な河口部を形成している。河口部は、津市岩田から津城にかけての砂堆（幅約200m）を横断し、さらに柳山津興から続く砂堆の北部を開削している。当地に形成された砂堆の状況を見る限り、仮に安濃川と岩田川が一体となっていた場合で



図4 安濃川河口部
(旧大日本帝国陸軍陸地測量部『津』『矢野村』より)

あっても、砂堆を直線的に横断する河道を自然に形成することは不可能と考えられる。

岩田川の改修には、近世（織豊期）における津城と城下町建設が深く関わっていると考えられ、これらの造成に伴って、岩田・安濃津の砂堆を横断する河道が形成されたものと考えられる。

なお、岩田川の河川改修に関する史料は今のところ管見に及ばない。さらに調査を進める必要がある。

c 事例；別保

別保は、現在の津市河芸町大別保・中別保に所在する。旧菟芸郡内を水源地とする中ノ川の河口部には潟湖があり、別保はこの潟湖南部の砂堆上に相当する。この潟湖は現在存在していないが、周辺

には「内浜田」「鳥浜」「浜郷」といった小字が見られる（図5）。

別保が乗る砂堆は、安濃津の北にあたる白塚から延びる全長約9km、最大幅約800mの大規模なものである。この砂堆を横断する河川が、別保集落付近を流れる田中川である。

田中川は、別保西部の低丘陵部を水源地とする小規模河川で、水量は少ない。明治年間の地形図では、大別保の北部に河口がある。

田中川の河口部に三角

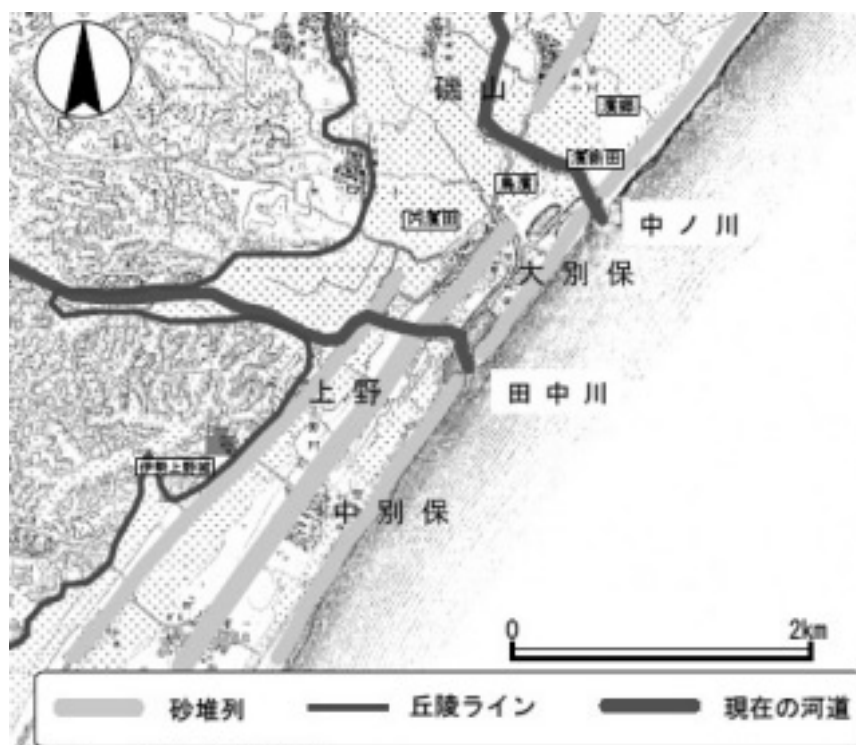


図5 別保付近（旧大帝国陸軍陸地測量部『白子町』より）

州は形成されておらず、海岸線もこの河川によって変形した様子も無い。自然の河口ではないことを物語っている。

田中川が本来の河口としていたのは、地形条件から見て、上記した中ノ川河口部に形成されていた潟湖であったと推測できる。それが、何らかの目的によって砂堆を横断して河口を形成するように改修されたと考えられる。

d 事例；大淀

大淀は、現在の多気郡明和町東大淀および伊勢市大淀町に相当する。大淀の砂堆は、村松（伊勢市村松町）から続く長大なもので、最大6条、延長約5kmである。

大淀で伊勢湾へと注ぐ河川は大堀川である。この河川は、南部の低丘陵部を水源とするもので、水量は多くない。大淀付近の地形を見ると、弧状に形成された砂堆の中央部分にあたり、陸地側からの水量が最も少ない位置であるといえる。砂堆も、横断している大堀川を挟んで一定の連続性があるので、現在の大堀川河口部が既存の砂堆を横断して形成されたことは明らかである。そして、上記の状況を踏まえれば、大堀川河口部は人為的砂堆を貫通する河川改修工事によって形成されたものと考えられるのが妥当である。

大堀川の旧流路は、砂堆を北西に迂回して伊勢湾へと至っていたものと考えられる。「大堀」の名が示すように、現在の大淀地区にある河口は、人為的な河川改修による河口部と考えられる。

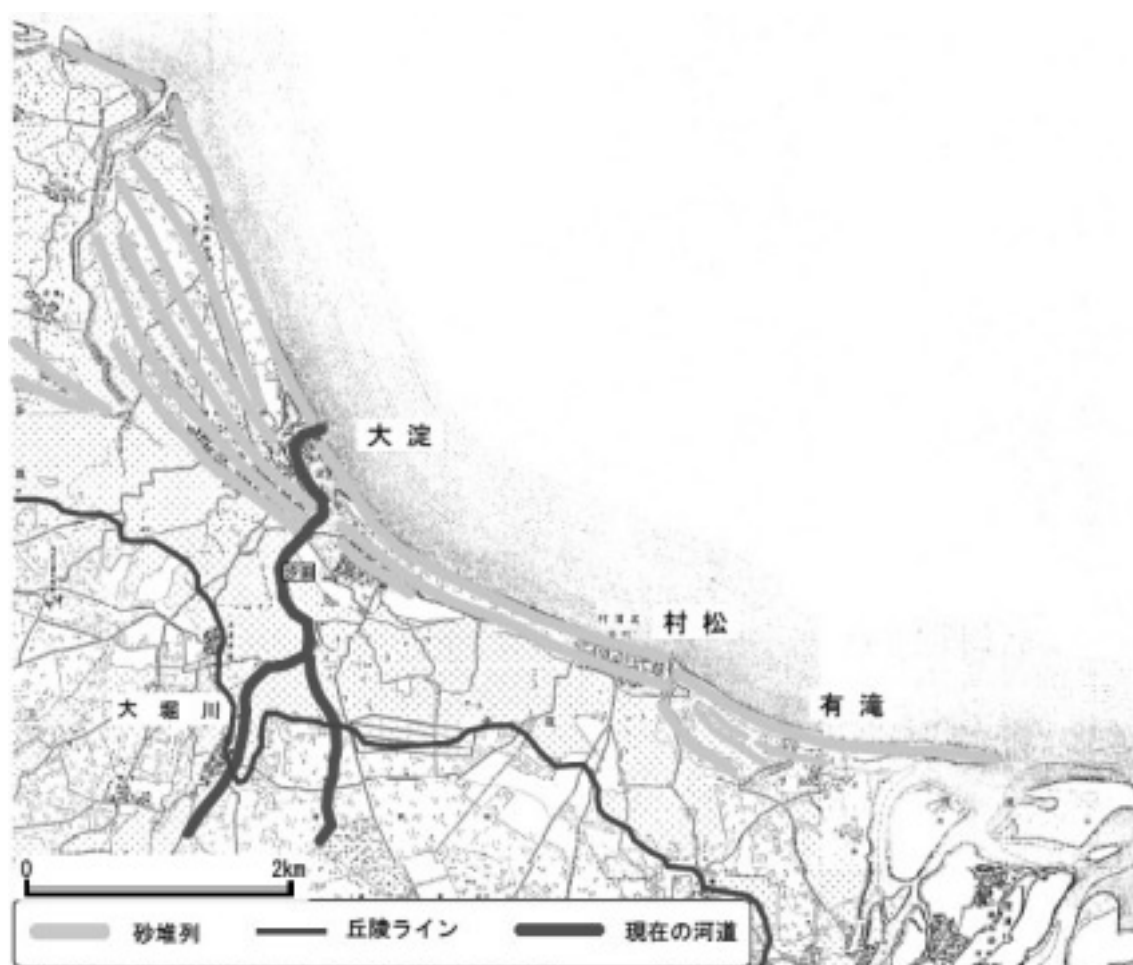


図6 大淀付近（旧大日本帝国陸軍陸地測量部『大淀村』『有滝』『山田』より）

e 河川改修の意味と今後の課題

ここでは、人為的な河川改修と考えられる事例を3例見てきた。これらの河川改修については、おそらく次のような意義があったと考えられる。

まず、河口部を直線的にする効果である。河口部で砂堆を迂回するように流れる状態は滞水を引き起こすとともに、集中豪雨などによる上流部からの災害では、流路の正面となる居住域を直撃する可能性が高い。河道の直線化は、海岸部の居住環境を安定させるために必要な改修工事であったと推定される。

この改修時期であるが、明確な史料が無いため、今のところ不明とせざるを得ない。津城下町を例にとれば、町場の危機管理が発生した段階にそれを求められるであろうから、近世初期以降の造作ではないかと考えられる。しかし、中世後期の段階に改修工事が行われていなかったとは断定できない。河川改修（砂堆横断）工事がどの段階と特定できるのかは今後の大きな課題である。

3 河川と自然堤防～木曽三川河口部の輪中～

a 輪中の成立

防災に関する一事例として、輪中についても概観しておく。

輪中は、木曽三川（揖斐川・長良川・木曽川）が注ぐ伊勢湾北端部に形成された特徴的な形態である。自然堆積を利用するとはいえ、その活用には人為的な維持管理が極めて大きいものである。

東大寺領美濃国大井荘や茜部荘では、鎌倉期より治水・築堤の記載が見られる（『東大寺文書』）。そのため、やや内陸の地では、中世前期には輪中の初現的形態が形成されていたと考えられる。木曽三川河口部にあたる長島付近の輪中がどの段階で形成されたのかは明確には言えないが、長島城や願

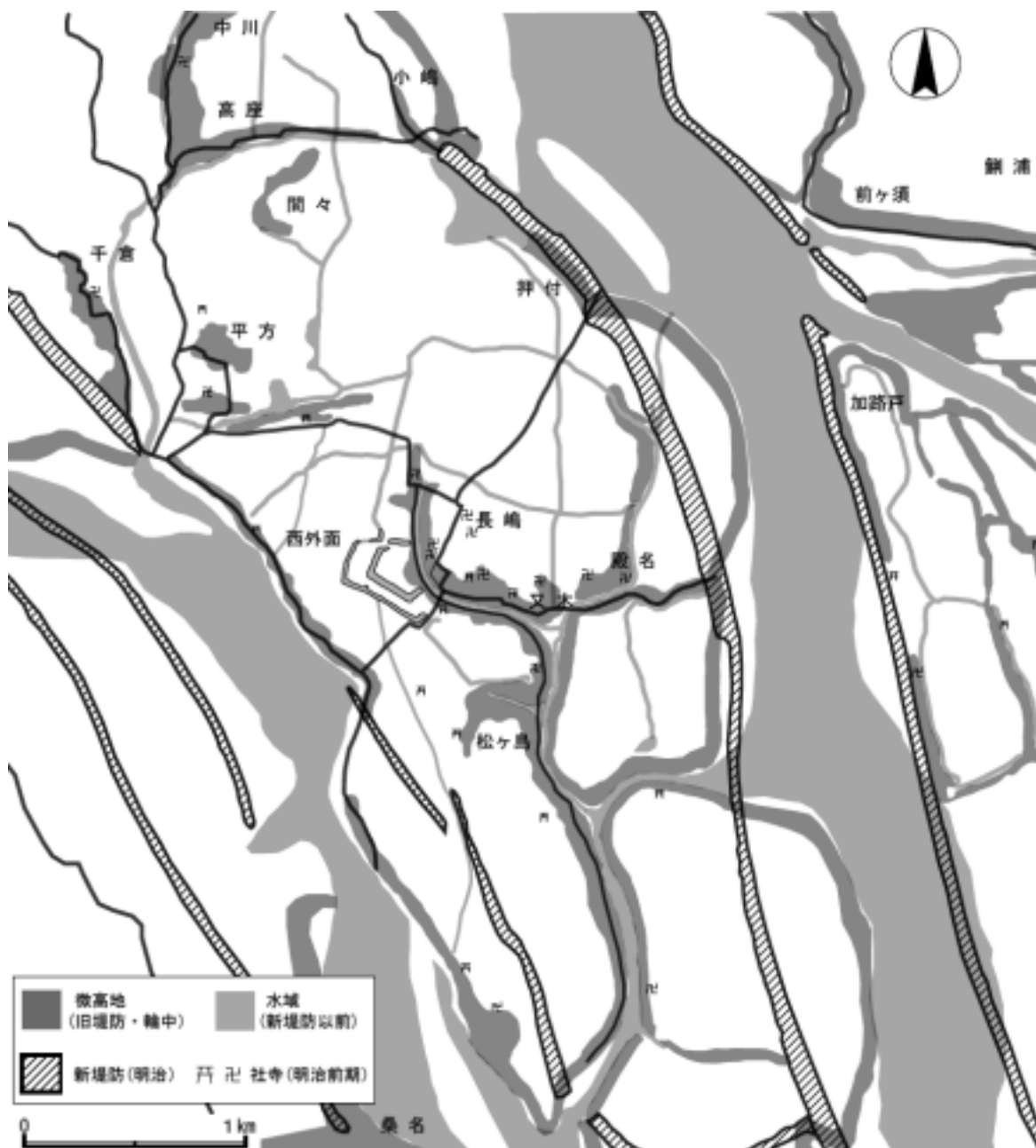


図7 長島付近の輪中堰堤（『三重県桑名郡全図』明治26年、旧大日本帝国陸地測量部地形図『深谷村』『蟹江町』『木曽河口』『桑名』明治44年を合成）

証寺の存在を考えると、中世後期までにはある程度整備されていた可能性が考えられる。少なくとも織豊後期に整備される長島城（桑名市長島町）の段階までには、かなりの整備が進行していたと考えられる。

b 『証如上人日記（天文日記）』に見える「築堤」

輪中に関する記事の可能性のある史料に『証如上人日記』（『石山本願寺日記』上巻、清文堂、1984年復刻版再刊）がある。ここには、次のような記載が見られる。

〔史料1〕

勢州中嶋ノ新三郎と申者、先寄進之代とて百疋候、此儀近年水入候て不作候を、堤をつき、去年分如此百疋上候（後略） *天文5年2月9日条

〔史料2〕

廿五日 非時頭料、伊勢直参拾貫文来、当年も又水損之間不足之由、申候（後略）

* 天文11年12月25日条

史料1に見える「中島」は、長島そのものか、あるいはやや上流にあたる在所と推定される。「堤」は輪中堰堤の可能性が考えられるが、明確ではない。史料2でも「水損」が触れられているが、輪中と直接関係するかどうかは不明である。

以上のように、同時代史料で長島付近の輪中について語ったものは少ない。

c 織豊期の動向

長島城は、織豊後期の造成とされており、輪中の旧堰堤に取り付くように位置している（図7）。城下町は、旧堰堤上に展開しているものと考えられる。旧堰堤の外縁には水路が確認できるので、長島城が利用した旧輪中は、南北約1km、東西約1kmの不整形を呈していたと考えられる。このことから、長島城が接する輪中堰堤は、織豊期段階以前に造成されていたものと考えられる。とすれば、織豊期以前の長島近隣は、直径1km程度の輪中がいくつか並び立つ景観を呈していたのではないかと考えられる。

d 近世～近代の築堤

中世以前の輪中景観は、その後に実施された治水工事により、地形そのものが大きく改変されている。薩摩義士で著名な近世の宝暦治水（1754～55）では、木曾三川を分離するための長大な堰堤が造成された。その結果、旧輪中堰堤は、新輪中内に取り込まれたり、あるいは除去されるなどしている。明治前期に河川改修工事を主導したオランダ人技師、ヨハネス・デレーケによって、より一層精度の高い木曾三川分流工事が計画され、大規模な改修工事が実施された。その結果、治水そのものは格段に進化したものの、旧輪中の景観は大きく変化することとなった。そして、20世紀半ばの伊勢湾台風後に実施された防災対策により、今の景観が形成されている。

e 輪中研究の課題

中世に限定しても、伊勢湾沿岸部における桑名・長島などの位置づけにあたっては、輪中の検討は避けて通れない。しかし、上記した条件もあり、未だ目立った進展が無いのが実情である。

なかでも、現在は集落地となっている旧輪中堰堤の造成時期を把握することが急務である。このためには、旧輪中堰堤の発掘調査の進展が切に望まれるところである。

おわりに

以上、考古学データや地形的な特徴から、中世の災害およびそれへの対処として検討できそうな事

例の紹介と課題を提示してきた。推測と課題の羅列に終始する一文となり、まとめにはならないが、いくつかの傾向を指摘しておきたい。

これまで見てきた事例から、あえて指摘できるとすれば、予防措置としての対応は、中世段階にはあまり存在しないのではないかという点である。安濃津遺跡群で確認された「褐色砂層」が災害に係する土層とすれば、この上面に中世後期段階の遺構が見られないことは重要である。災害が発生したら（発生前に）、当然「逃げる」のであるが、中世の人々が即座にこの地の復興を行った形跡は見られない。総体的に言えば、自然環境の特性を最大限に活用するのが中世までの特徴といえるが、その裏返しで、災害に対しては基本的に「対処療法的」、あるいは「なすがまま」の対応しか行わなかったのではないだろうか。

この意識に変化が生まれるのが、おおそ織豊期以降ではないかと考えられる。砂堆を横断する河川改修は、未然に災害を防ぐための「開発」と見ることもできる。このような「防災意識」あるいは積極的に自然に関わろうとする「意識」を議論するためには、中世以降の状況に関するデータ整理がかなり役立つと考えられる。複眼的な資料分析と意識が必要といえる。

災害に関する考古学的データを収集するには、そもそもかなり限界がある。冒頭に述べたように、同時代の人々による災害への対処と比例して、その痕跡は考古学データから消失する。この状況下でデータを収集しようとするれば、発掘調査前からかなりの意識を持つ必要がある。その意識を持つためには、まずは広く情報共有することが必要となろう。

引用文献

- ・ 秋山恒士・山田清(1936)『輪中聚落地誌』（日本農村問題研究所、巖松堂書店）
- ・ 伊藤重伸(1974)『長島町誌』上巻（長島町教育委員会）
- ・ 安藤萬壽男編(1970)『輪中—その展開と構造—』（古今書院）
- ・ 飯田汲事(1981)『愛知県被害津波史』（愛知県防災会議地震部会）
- ・ 西羽晃(1991)「長島城」（『底本三重県の城』郷土出版社）
- ・ 三重県埋蔵文化財センター(1997)『安濃津』
- ・ 新鹿津波調査会(2004)『新鹿の津波』（熊野市教育委員会）
- ・ 行谷佑一・都司嘉宣(2005)「宝永(1707)・安政東海(1854)地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布」（『歴史地震』第20号）
- ・ 伊藤裕偉(2007)『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』（岩田書院）

向井裕知（金沢市埋蔵文化財センター）

1. はじめに

加賀において遺跡で確認できる災害痕跡には、地震による墳砂痕、洪水による土砂堆積痕、砂丘形成による砂堆積痕、火災による被熱遺物の片付け痕などがある。しかしながら、加賀の中世という地域と時期を限定すると、砂丘形成による災害のみとなる。そこで、沿岸地帯における遺跡の立地環境とその盛衰が砂丘形成から推測される気候環境とどのような関係にあるのかを確認してみたい。

対象とする地域は、金沢平野の犀川・大野川河口、河北潟周辺である。当地は近年区画整理などによる大規模な発掘調査が実施されており、古代における港湾関連遺跡等の様相が明らかになっている。まず、河北潟の湖面や河川流路などの旧地形を復元し、次に古代遺跡の動向及び中世への展開を確認する。そして、飛砂によって被覆された遺跡の廃絶年代から導き出される砂丘の移動・形成年代とそこから推測される気候環境と遺跡の動向について考えてみたい。

なお、シンポジウムでの討論において多くのご批判、ご教示を得ており、内容の一部訂正等を行っているため、当日の発表内容とは必ずしも一致していないことをお断りしておく。

2. 旧地形の復元

遺跡の立地環境を考える上では旧地形の復元が重要と考える。現在の河北潟は大規模な干拓によって、その大部分が水田となっているが、本来は北陸最大の潟湖であった。また、犀川や大野川についても現在の流路に至るまでには大きな変遷を経ている。それらの旧地形復元のための素材としては近世絵図及び微地形観察の成果（石川県教委他 2006・斎藤 1970・出越 2003）を用いた。

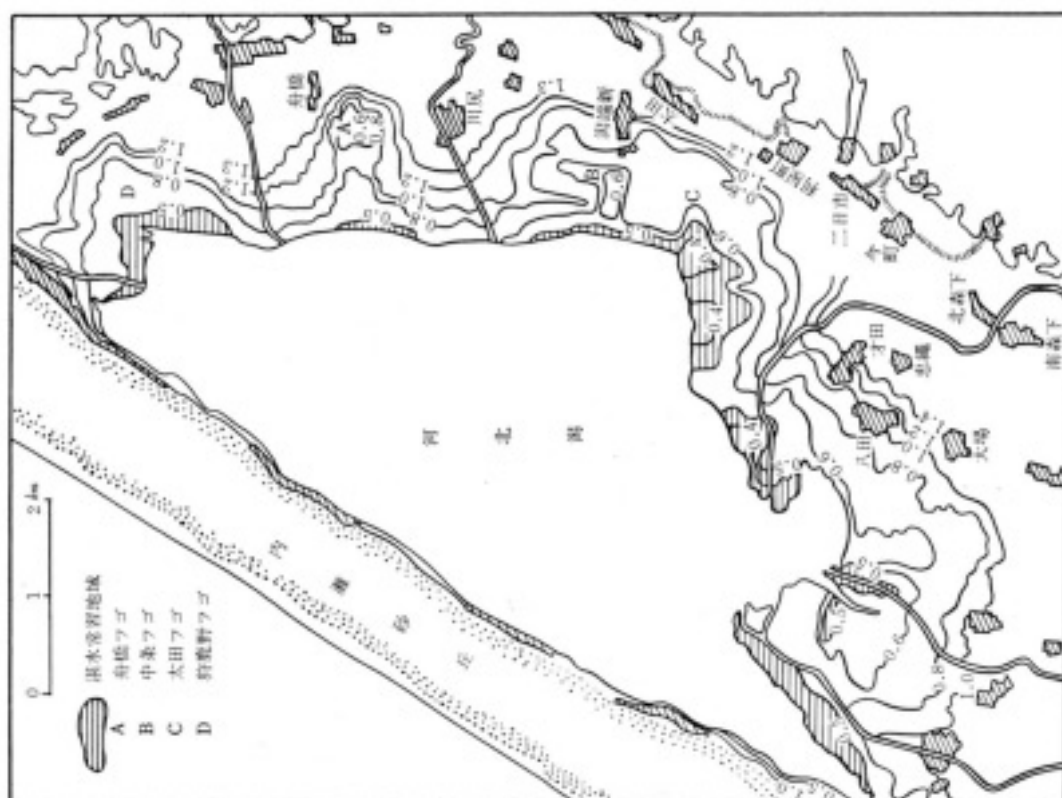


第1図 賀州河北郡図籍(元文河北郡図・1737年)

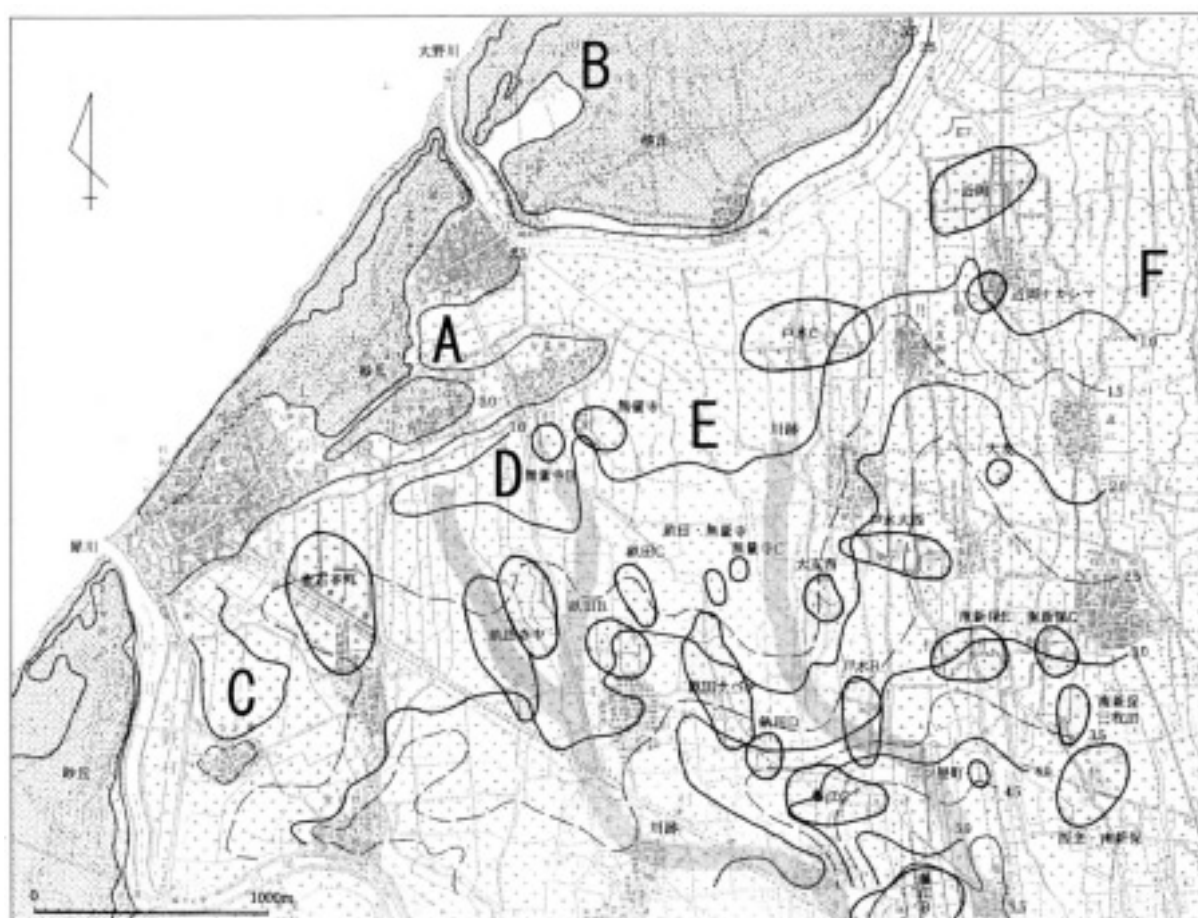
まず河北潟の水面域については、近世絵図から複数のフゴ（不湖）の存在が確認できる（第1図）。河北潟に流れ込む河川は河口部にデルタを形成しているが、そのデルタ間の窪地状地形をフゴといい、湖面の上昇時には水面化していた。このフゴについては精密水準測量を用いた微地形観察の成果においても、その等高線によって存在を確認できる（第2図）。同様にその等高線によって、明治45年段階の汀線よりも広い水域の広がりも想定することが可能である。なお、潟の水位は潮位と降水量の影響が大きく、降水量については、春・秋の梅雨及び冬季の11～1月が最も多く、春の4・5月は少ない（出越 2003）。

大野川や犀川の流域及びその周辺の旧地形については、昭和50年代から60年代の金沢市都市計画国土基本図（縮尺1/2500）を用いて算出した水田面の標高データによる推定等高線から、旧地形を復元した研究がある（石川県教委他 2006）。また犀川の下流域については明治時代の地籍図や発掘調査成果から推定した箇所も含んでいる。

犀川・大野川周辺の旧微地形については、クリークや谷地形、旧河川・小河川が想定可能であり、第3図ではA～Fの低地が想定されている。特に普正寺遺跡が隣接する低地Cは入江状の地形を呈していた可能性が考えられている。



第2図 河北河沿岸の地形〔斎藤1970より転載〕



第3図 金沢西部の微地形と遺跡分布〔石川県教委2006より転載〕

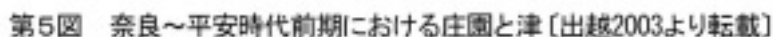


第4図 古代・中世河北潟の湖面と主要な水面の推定範囲

3. 古代・中世遺跡の動向（第5～10図）

飛鳥時代（7世紀）になると、金石本町遺跡が新たに機能を始める。本遺跡は犀川河口付近の沖積地に立地する弥生時代中期から近世の遺跡である。主体は飛鳥時代から始まり、8世紀前半に盛期を迎えるが、10世紀には廃絶する。墨書土器約300点、木簡4点が確認されており、8世紀前半では梁行3間、桁行9間の該期では金沢最大の大型掘立柱建物がある。加賀立国後（823年）には大型建物はみられないが、規則的な建物群の配置や倉庫建物、大型井戸などから官衙機能は存続しているとされる。本遺跡はその立地や検出遺構、出土遺物から、加賀郡津関連官衙遺跡と想定されている。

9世紀に入ると戸水C遺跡で活動が活発になり、大形建物群や「津」墨書土器が出土している。周辺に位置する戸水大西遺跡や畝田ナベタ遺跡、大友西遺跡など多くの遺跡が確認でき、加賀立国後の戸水C遺跡については、「加賀国府津」もしくは「加賀国津」として評価されている。中国・渤海産と考えられている青銅製巡方が出土する畝田ナベタ遺跡や「宿家」墨書土器が出土する戸水大西遺跡は



その出土品や検出遺構から官衙関連遺跡と評価されている。大友西遺跡は「伯庄」墨書土器を伴う臨海型の庄園と考えられている（第5図）。

以上の遺跡は10世紀には概ね終息するが、戸水C遺跡や畝田・寺中遺跡、大友西遺跡などでは11・12世紀も存続している。特に戸水C遺跡と大友西遺跡では白磁が大量に出土しており、拠点的な遺跡といえよう。戸水C遺跡では遺構の詳細が不明であるが、立地や白磁の大量移入から港湾関連遺跡と考えている。大友西遺跡では11世紀後半から12世紀後半にかけての溝で囲繞された屋敷地などを検出している。

畝田・寺中遺跡では11世紀から16世紀頃の遺構・遺物が確認されているが、12世紀から遺構が目立つようになり、その主体は12世紀後半～14世紀頃である。遺跡は方二町×一町半程度の堀で囲まれた空間の中央東より縦断する道路状遺構が認められ、その両脇に掘立柱建物や井戸が並んでいる。また、堀の外に該当する地点にも掘立柱建物等の中世遺構は広がっている。第6図は石川県調査分の報告書に掲載された中世遺構概念図に金沢市調査分を合成して堀と道路状遺構のみ太線を引いたものである。図上に示された遺構が全て同時期ではないので注意が必要だが、堀の出土遺物は12世紀後半から14世紀代、道路状遺構は東側の溝1aが12世紀後半から14世紀前半で主体は12世紀後半から13世紀前半、西側の溝4bは12世紀後半から14世紀代で主体は12世紀末～13世紀代であり概ね一致している。なお、周辺には「堀ノ内」や「ナナオサ」という小字名が確認できる（大徳公民館1970）。

13世紀には多くの遺跡で活動がみられる。藤江C遺跡では13世紀から14世紀前半の集落を確認しており、廃絶後の15世紀には墓群が形成される。集落は東西に延びる道路状遺構に沿って区画を伴った屋敷地が7単位検出されている（第8図）。

南新保北遺跡では13～14世紀の遺構・遺物がみついている。調査範囲が限られているために集落構造の詳細は不明であるが、幅広の溝であるSD03の西側に井戸やピットなどがみついている。SD03出土の土師器は14世紀代の年代が考えられ、古瀬戸の鳥形水滴という稀少品が共伴している。また、井戸SK10からは商売の銭の出納に関わる付札木簡が出土しており、単なる一般集落とは考えがたい。本木簡の年代については、共伴遺物は無いが、遺跡の存続年代から13～14世紀代の所産と考えられる（第7図）。

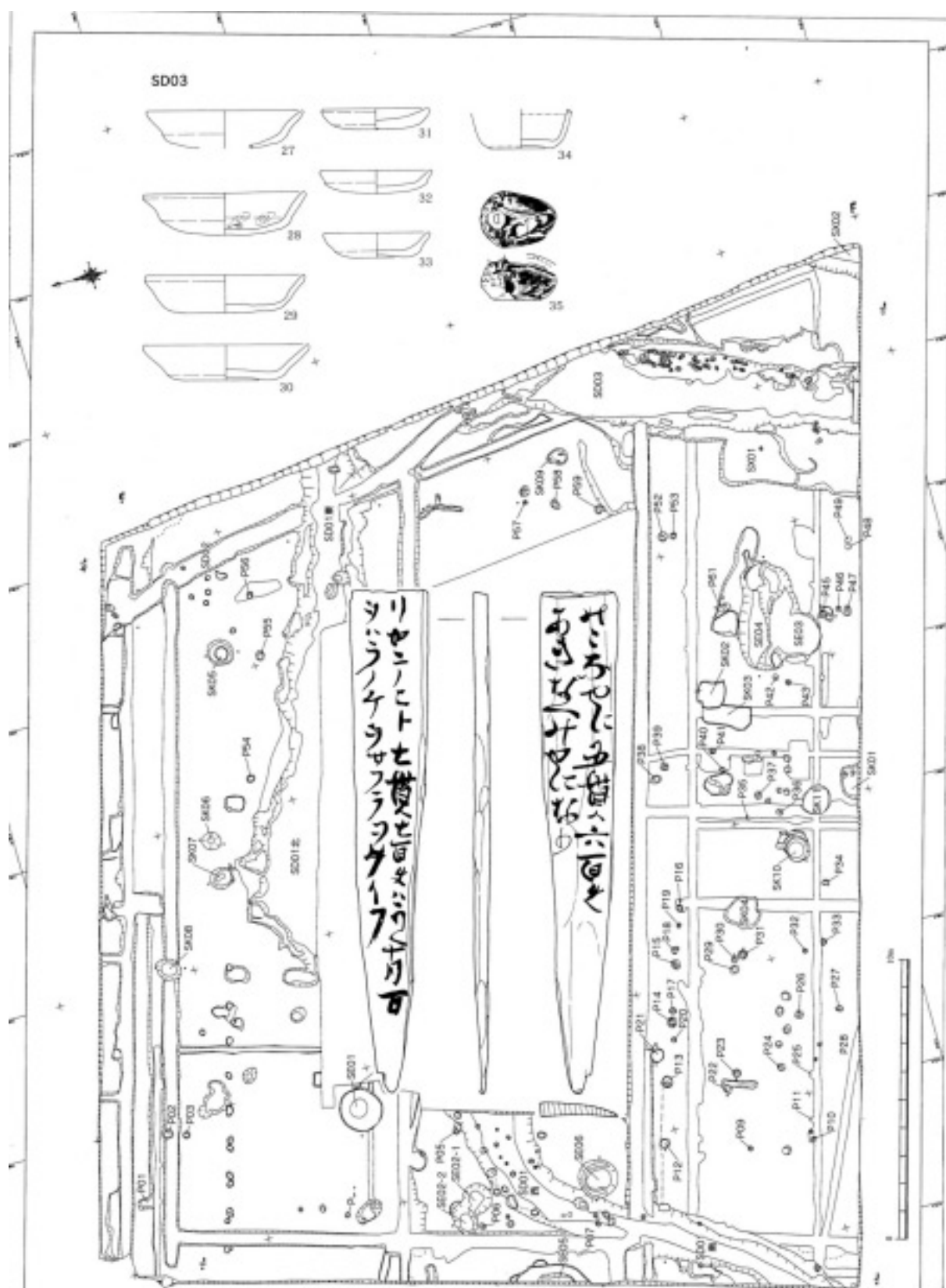
14世紀代は近岡遺跡や藤江C遺跡、南新保北遺跡などで遺跡が衰退する一方、普正寺遺跡や戸水C遺跡などいくつかの遺跡が出現もしくは復興する。普正寺遺跡は犀川河口部に位置する港湾関連遺跡であり、14世紀後半から15世紀中頃まで営まれていたが、遺跡出現時からの飛砂現象によって15世紀中頃に埋没するまでに3層の堆積砂による遺構面が形成された（第9図）。これらの遺跡は15世紀代には廃絶する。16世紀代の遺跡はほとんど確認できていないが、これは現在の集落域に移転しているためと予想している。

以上、金沢平野北西部における遺跡の変遷については、8世紀後半から9世紀代にかけてが1つのピークとなる。これらの遺跡も10世紀になると多くが廃絶し、遺跡の空白期となる。このような空白状況は古墳時代中・後期の5・6世紀にもみられる現象である。11世紀から12世紀にかけて徐々に遺跡数が増加し、13世紀代には定量存在する。14世紀にはいると、当該時期を境に廃絶もしくは開始する遺跡が増加する。15世紀代で概ね遺跡としての集落跡などは確認できなくなるが、これは現在の集落が立地する場所で居住域が営まれているからであろう。

なお、戸水C遺跡や畝田・寺中遺跡といった古代の津機能を持っていた遺跡では中世期に再び拠点



第6図 畀田・寺中遺跡の中世遺構概念図〔石川県教委2006・金沢市2006より作成〕



第7図 南新保北遺跡遺構全体図・遺物図〔金沢市2006より作成〕



的な遺跡が営まれている。畝田・寺中遺跡では前述のとおり方二町×一町半程度の堀で囲まれた中に中軸街路と隣接する建物などが展開する都市的な遺跡がみつまっている。

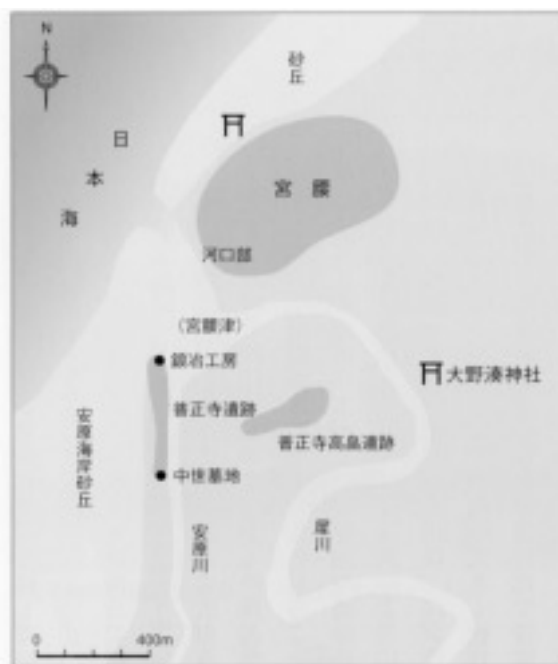
4. 砂丘の移動と気候変動

加賀及び能登も含めて古代以降の砂丘移動が確認できる時期は9世紀末から10世紀と14世紀後半から16世紀後半である(第11図)。

10 世紀頃の大規模砂丘移動がみられるのは能登の羽咋市寺家遺跡や富来砂丘である。14 世紀後半から 16 世紀では、加賀の金沢市普正寺遺跡や能登の羽咋市寺家遺跡、輪島市（旧門前町）道下元町遺跡である。普正寺遺跡では 14 世紀後半から 15 世紀中頃にかけて砂丘移動によって砂が堆積し続けているが、

15 世紀中頃の移動規模が特におおきかったようで、その段階で営みは終わられている。この砂丘の移動については文献でも確認できる。この他、日本海側の青森県十三湊遺跡や秋田県後城遺跡においても 15 世紀頃の飛砂によって遺跡が廃絶している。

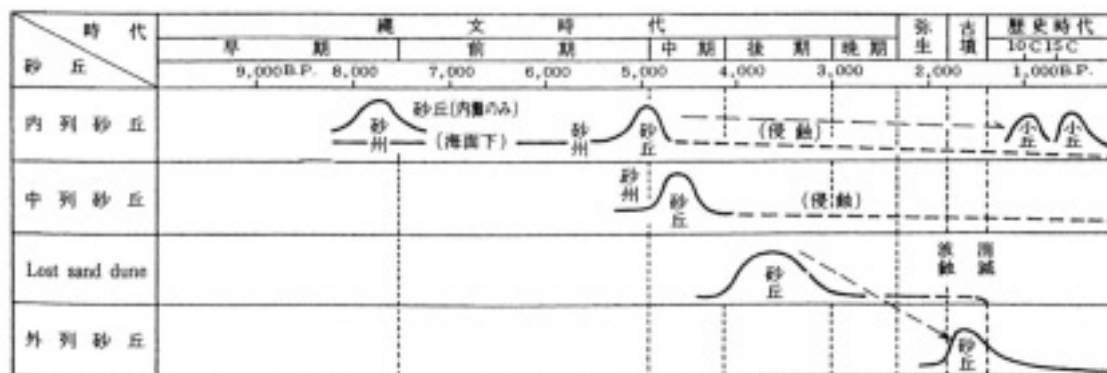
海岸砂丘は強い季節風により海岸の砂が内陸側に運ばれることで形成されるが、そこには強い季節風の他に砂の供給量が多いことが前提となる。砂の供給量が増すのは河川によって運ばれた砂が海退現象によって陸化した場合、または河川からの土砂流入量が増し、河口部付近に堆積して陸化した場合などが考えられる。



第9図 普正寺遺跡地形復元図〔金沢市2004より転載〕

遺 跡 名	7c	8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c
近 岡										
近 岡 テ ラ ダ										
近 岡 ナ カ シ マ										
戸 水 C										
桂 町										
普 正 寺										
佐 奇 森										
畝 田										
畝 田 ・ 寺 中										
畝 田 ・ 無 量 寺										
無 量 寺										
畝 田 ナ ベ タ										
金 石 本 町										
戸 水 大 西										
大 友 西										
戸 水 B										
藤 江 B										
藤 江 C										
二 ツ 屋										
南 新 保 北										
南 新 保 C										
南 新 保 E										
西 念 ・ 南 新 保										
千 木 ヤ シ キ ダ										
中 屋 サ ワ 遺 跡										
木 越 光 琳 寺										
大 場 遺 跡										
梅 田 B										
観 法 寺 谷 遺 跡										
堅 田 B										
河 原 市										
北 中 条										
加 茂 ・ 加 茂 廃 寺										

図 10 主要遺跡消長図



第11図 完新世における海岸砂丘の形成史 (藤・小嶋1989より転載)

寺家遺跡における 10 世紀頃の砂丘移動については、寺家遺跡の立地が内陸よりの内列砂丘上や中列砂丘の内側に分布することから、海退による移動ではそこまで内陸に砂は飛ばないと推定され、海進による移動が飛砂の原因とする研究がある (藤・小嶋 1989)。

15 世紀前後の砂丘移動については、局地的な移動とみる見解もあるが、先に述べたように日本海域に広く確認できるので、海水準の変動が砂の供給量増加の主要因ということであれば、特定地域における地盤の隆起や沈降に起因する海進・海退現象ではなく、気候の変化による同現象に起因するものと考えられる。

これらのことから、両時期の砂丘移動は少なからず気候の変化が関係しているものと考えられる。

5. 遺跡の動向にみる画期と気候変動の関係

古代から中世における遺跡の盛衰や砂丘移動から推定される気候変動については先に述べたが、ここでは遺跡の動向と気候変動との関係についてみていきたい。シンポジウムでは砂丘の移動から推定される海進・海退現象 (藤・小嶋 1989) やそこから推定される気候変動と古代遺跡の動向を論じた先行研究 (出越 2003) を元に、中世についてもその関連性を指摘したが、根拠としたフェアブリッジ海水準曲線などについては、日本において適用可能かどうかという検証が不足しており、安易に用いることはできないとの指摘があった。ここでは前述の砂丘移動から推定可能な現象についてのみ考えてみたい。

まず、10 世紀頃については遺跡の空白期である。当該期は遺物が確認できても、遺構は認識できないといった遺跡がみられ、全体的に低調である。気候の変化が立地に影響を与えているのかもしれない。ただし、どの程度の階層までを遺跡として認識できるのかといった問題が残る。例えば 9 世紀代の遺跡ではそのほとんどが官衙関連とされるものか荘園 (荘所) 遺跡である。10 世紀においては、そういった遺構・遺物共に遺跡として認識しやすい格の高い遺跡が衰退することが遺跡の空白期を招いている可能性も考えられる。加賀においては、一般集落と呼べるような古代遺跡があまりみつかっておらず、遺跡として見出しにくい可能性がある。

15 世紀前後については、14 世紀代と 15 世紀後半に遺跡の廃絶・出現が顕著になる。何らかの原因によって集落を移動する必要性があったのだろう。遺構の変化をみると、加賀においては 14 世紀代に掘立柱建物において総柱式から側柱式への移行がみられ、同時に柱間距離は短くなる。また柱材も芯去り材を用いた針葉樹から芯持ち材の広葉樹を採用するようになる (向井 2004)。このような採用樹種の変化は新潟県における漆器生産においても同様という※。柱材や漆器材の変化は森林開発の

進行^{*}が原因で、従来の樹種を採取することが困難であった可能性が考えられ、山林開発による木材の枯渇化が推定される。これは山間部からの土砂流出量の増加を招き、結果として飛砂現象の増大を引き起こした可能性も考えられる。

以上、砂丘が大きく移動する時期においては、遺跡にも変化はみられる。ただし、先に述べたように、気候変動との関連性については十分に説明できない。集落等の移動には様々な要因があると思うが、気候の変化やそれに伴う自然災害が大きく影響を及ぼす場合もあるだろう。このような集落移動や具体的な遺構の変化が起こる要因について様々な角度から検討を深めることで、低地に限らず遺跡と自然との関わりについて、その実態に迫ることができるものとする。

註

※シンポジウムでの水澤幸一氏のご発言による。

－引用・参考文献－

- 石川県教育委員会他 2002 『藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ』
石川県教育委員会他 2006 『畝田西遺跡群Ⅴ』、『同Ⅵ』
石川県立埋蔵文化財センター 1984 『普正寺遺跡』
石川考古学研究会編 1970 『普正寺』
景山和也 2004 「北加賀の古代遺跡1－金沢市の行った調査から－」『石川考古学研究会々誌第47号』石川考古学研究会
金沢市教育委員会 2000 『戸水大西遺跡Ⅰ』
金沢市 1999 『金沢市史 資料編19 考古』
金沢市 2002 『大友西遺跡Ⅱ』
金沢市 2004 『金沢市史 通史編1 原始・古代・中世』
金沢市 2006 『木曳野遺跡群Ⅰ』
金沢市 2007 『南新保北遺跡』
斎藤晃吉 1970 「河北潟々縁開墾史」『石川県宇ノ気町史』
大徳公民館 1970 『大徳郷土史』
出越茂和 2003 「内水面と古代水上交通」『大友西遺跡Ⅲ』金沢市
藤則雄・小嶋芳孝 1989 「寺家遺跡の平安時代中期の砂丘形成とその意義」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会
峰岸純夫 2001 『中世 災害・戦乱の社会史』吉川弘文館
向井裕知 2004 「加賀・能登（石川県）の様相」『掘立柱建物から礎石建物へ』北陸中世考古学研究会
和田龍介 2004 「北加賀の古代遺跡2－県の行った調査から－」『石川考古学研究会々誌第47号』石川考古学研究会

1. 遺跡はなぜ埋もれているのかー残らなかった遺跡と残った原因

遺跡は、埋もれているから残っているのであり、それが埋蔵文化財の謂いである。その原因として、洪水による水成り、飛砂による砂成などが主な要因として考えられ、ときには地震による沈下や火山灰などによって埋没することもある。それが極端な場合は、土石流に押し流されて遺跡として存在していない場合もあるが、基本的に生活面を土砂が覆うことによって遺跡として残ってきたのであり、考古学研究者からみれば、災害による埋没は現代まで残されたタイムカプセルと同義である。

2. 越後平野の特性ー潟湖と舟運

越後平野においては、洪水痕跡及び沈降が殊に著しい。遺跡は、場合によっては数mの無遺物層に覆われている場合も珍しくない。その結果、通常川跡などでしか残らない有機質の遺物が生活面から出土する場合がある。その顕著な例が15世紀代の生活面の1m下からみつかった1300年前後の生活面を有する馬場屋敷下層遺跡が挙げられる(1)。中世考古学の黎明を告げた広島草戸千軒町遺跡もその格好の事例である。越後平野は、砂丘によって河川が遮られていたため、中世における胎内川以南の水口は、信濃川の河口しか存在していなかった(2)。非常なる大河である阿賀野川でさえ、信濃川河口に合流していたのである。したがって、現在日本海へ抜けている河川はほとんどが江戸後期〜明治にかけて掘削されたものであり、それによって多くの潟を干上げ、国内有数の穀倉地帯となっていたのである。したがって、中世における越後平野の耕作可能面積は、現在と比べるべくもない。しかし、この干拓は、豊かな水産資源と水上交通の範囲を狭めるものでもあったのであり、内水面ではない近世の日本海外洋航路の幕開けと表裏一体のものでもあった。

3. 清水(しうつ)潟(3)と遺跡のかかわり

清水潟は、9世紀代に地震により出現したといわれている。それは、潟の真下からみつかった青田遺跡で9世紀後半の遺物が出土し、その上に潟由来の堆積があることによる(4)。しかし、潟端の範囲内には11世紀初葉の北宋銭が出土した船戸川崎遺跡が存在しており(5)、砂丘内側の中倉遺跡の川跡は年輪年代によって、11世紀以降にも流れていたことが明らかとなっている(6)。そして青田遺跡においても明示されていないが中世遺物の存在が示唆されている(7)。したがって、現在の地図にその範囲を示す潟の汀線は、9世紀代の地震を契機として徐々に沈降し、12世紀以降、潟を横切る荘境の記載が認められる譲状の作成前の13世紀前半までに形成されたという可能性を考えておきたい。

ここで8〜9C.の遺跡と12〜15C.の遺跡数を比較してみたい(但し旧中条町分とする)。その結果、前者42に対して、後者101である。単純に比較すると1世紀あたりの遺跡数は、20強となり、同数程度にみえる。しかし後者の内訳をみると、山城10、館10、寺院・墓6、石造物49、集落遺跡26となり、石造物が約半数を占めており、中世に特有の山城などを除けば半分程の密度になる。ただし、石造物を作るにはその造立主体が存在しているのであり、古文書に記された集落の存在を考えれば、集落総数自体はあまり変化していないようにも思える。

4. 山の開発と水害

土石流などの災害がなぜ起きるかといえば、大雨が直接の原因であるが、それに地盤が耐えられないときに生じるとすれば、山の開発が大きくかかわってくる。森林が伐採され、保水力が減少すると、

奥山が崩壊し、それが山麓部～下流域で甚大な被害をもたらす。越後で多用される建築材は杉であり、これは古来より里山周辺に盛んに植林されてきた。対して奥山の森林資源は、利用される機会は限られたものであったと思われる。山の開発にかかわる考古学的知見からいえば、漆器の木胎がケヤキからブナ主体へと転換するのが14世紀代であり(8)、ここに至って渋下地が主体的に採用されることを考え合わせると、その製作体制自体に大きな変化があったことがわかる。さらに13世紀までは集落内での漆器生産が行われていることが荒型等の出土から知られるのに対し、それ以降は集落内で生産痕跡が認められなくなるという事実は、それを裏付けるものである。それは直接的には、古代以来一貫してきたケヤキ材の枯渇に伴う動きである。そして、それまでほとんど利用価値のなかった深山のブナ材が漆器の木地に使用可能であることが判明したとき、その物理的距離により木地師と塗師は分業体制をとらざるを得なかったと考えられる。すなわち木地は、奥山でブナを切り倒してから荒型に加工されるまでの段階と、その後の挽き師によって加工される段階に分けられる。そこで市へ運ぶか、商人(問屋)に渡されて、塗師に売られるようになったと考えられる(9)。したがって、この分業を可能とするものとしては、職人間をつなぐ市場・商人の存在が不可欠である。

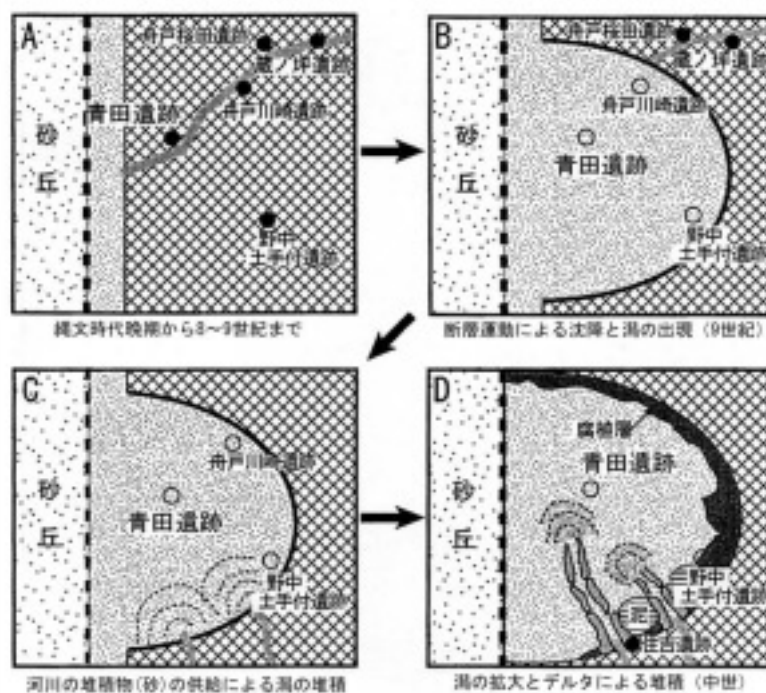
このように大量生産される普及品にブナ材が用いられるようになる考古学的事実の背景を考えると、安価な漆器の普及と山林伐開にはある程度の相関があるように思われる。もちろん、深山のブナ林を乱伐したことだけが洪水を引き起こした理由ではないであろうが、洪水記事が15世紀以降頻発する(10)ことを考え合わせると、少なくともその一因をなしている可能性を指摘できるように思われるのである(11)。

註

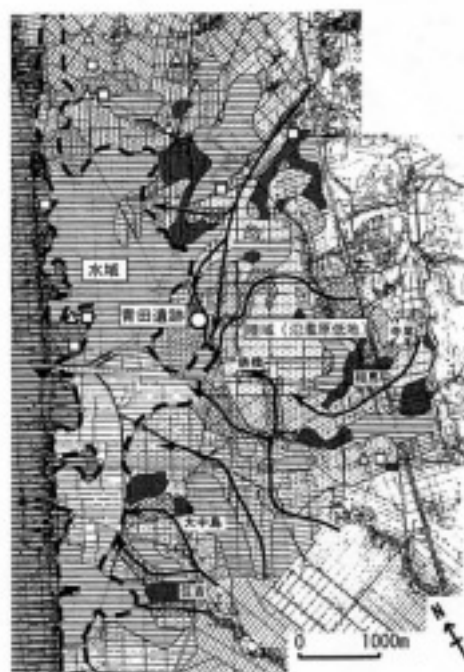
- (1) 白根市教委 1983 『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』
- (2) 坂井陽一 1991 「第Ⅰ章地形」『新潟市史 資料編12 自然』新潟市
- (3) 清水潟は、正保国絵図には塩津潟と書かれ、江戸後期には紫雲寺潟と書かれるようになる。「しうつ」は、鎌倉後期の譲状に所領として出てきており、1300年前の波月条絵図には「くさうつ」(草水)条がでてくることから、「うつ」は「水」を意味するものと考えられる。したがって、江戸初期にはその地域的発音からしうつ=塩津と記載されたものと思われる。ここでは、本来「塩」とは関係のないことを確認しておくとともに、今後中世においては「清水潟」と記載することとする。
- (4) 高濱信行・ト部厚志 2004 「青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」『青田遺跡 関連諸科学・写真図版編』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集
- (5) 中条町教委 2002 『船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』町埋文調査報告書第25集
- (6) 水澤幸一 2002 「年輪年代測定について」『船戸川崎遺跡4次』中条町埋文調査報告書第24集
- (7) 新潟県教委 2004 『青田遺跡 本文・観察表編』県埋蔵文化財調査報告書第133集
なお、ここでいう時期が下る遺物とは、V層出土の雁股鏃である(荒川隆史氏のご教示による)。
- (8) 水澤幸一 2007 「越後の中世漆器」『新潟考古』第18号
- (9) 小沢美和子 1999 「木地師の調査」『人類誌集報1999』東京都立大学考古学報告4
- (10) 藤木久志編 2007 『日本中世気象災害史年表稿』高志書院
- (11) もちろん漆器だけではなく、それまでの陶器製の水甕から樽や桶への変換なども視野に入れて、森林資源と水害等との連関にかかる人為的災害の側面を考えていく必要があろう。



正保2(1645)年越後国絵図の復元図
[坂井1991]より転載



第17図 紫雲寺地域の発達概念図
(高濱・ト部2004より転載)



第15図 紫雲寺潟形成前の層相分布と古地理



第16図 紫雲寺潟干拓直後の層相分布と古地理

(高濱・ト部2004より転載)

発行 中世考古学文献研究会（特別研究促進費「中世考古学のための日本中世・近世初期
文献研究」グループ）
事務局 〒950- 2181 新潟市西区五十嵐 2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

場所請負制下における漆器の流通と生産地

浅倉 有子（上越教育大学）

はじめに

本稿は、近世蝦夷地におけるアイヌと漆碗について、若干の検討を加えることを目的とする。

1 漆碗はどのように使われたのか

最初に、場所請負制度が展開された18世紀前半以降の蝦夷地において、漆碗がどのようにアイヌの人々によって使用されていたのかを、和人による記録から検討したい。

幕府勘定吟味役三橋藤右衛門用人の武藤勘蔵による寛政10年（1798）の「蝦夷日記」（『日本庶民生活資料集成』第4巻、三一書房、1969年）によれば、幕府役人との儀礼における酒器として用いられたのは、いわゆる盃ではなく「大きな飯碗」であったという。

また幕府御救交易の担当者であった串原正峯による、同じソウヤ場所における寛政4年（1792）の記録「夷諺俗話」（『日本庶民生活資料集成』第4巻）によれば、「交易をなすに、夷とも会所へ来りて、たとえば煎海鼠百出しアブラシヤケと望めは、清酒三盃遣す、但壺盃といふは貳合五勺入碗にて斗るなり」と、碗が「交易」の基準として用いられていることが知られる。したがって、碗が2合5勺という一定の容量を基準として製作されたことが想定される。この統一された規格がいつごろから存在したのかは明らかにしえないが、場所請負制下において、対アイヌ用の統一された規格の碗が導入された可能性を指摘しておきたい。

2 台盃はいつ頃から製作されたのか

前項で紹介した串原正峯の「夷諺俗話」には、ソウヤのヲムシヤにおいて、「汁碗」の盃とともに盃台が用いられていることが記されている。この記述は、盃と盃台が1セットのもの（いわゆる台盃）ではなく、別個の碗と盃台が組み合わされて用いられていたことを窺わせる。盃台は和人社会にも存在するが、アイヌが用いる台盃と同様の形状のものを、和人は使用しない。場所請負商人の西川家は、文政年間に蒔絵の「蝦夷台盃」を注文している（滋賀大学経済学部附属資料館所蔵）が、台盃は、当初からアイヌを対象を限定した特注品として注文・製作されたものと考えられる。

安政6年（1859）の「組頭井上元九郎廻浦中諸書付 モンへつ御用所」（北海道立文書館所蔵）によれば、「並台盃」1組の標準的な価格が銭1貫150文程度、箱入の上質な「上台盃」が1組1貫700文とされ、台盃が高価な商品であったことが知られ、威信財としての機能を有していたと考えられる。しかし、年不詳の「東地産物土人より買入直段書写」（林家文書、北海道立図書館所蔵）には、250文

という安価な台盃が記載されており〔浅倉有子 2006〕、購入者の階層の多様性が想起される。すなわち、一般アイヌのニーズに応え、彼らでも購入可能な汎用品の台盃もまた製作されていたことを意味するものと考えられる。

3 生産地を付した漆器の使用例

文政4年（1821）一同5年のフルヒラ場所のヲムシャ（「御廻状・御振留・請申渡写」、林家文書、『余市町史』第1巻資料編1、余市町、1985年）においては、「乙名・小使・脇乙名並土産取」に対して「三ツ組盃」で3盃ずつの酒が、一般アイヌへは三目椀（汁椀の椀に次ぐ大きさの椀）で酒3盃が、女性と子どもへは「南部椀」で飯1盃ずつが振舞われている。乙名層に用いられた「三ツ組盃」は、大きさの異なる3種類の盃を組み合わせたものと考えられるが、和人社会で用いられていた組盃を利用したものだろうか。そのように考えれば、アイヌ仕様の台盃は、文政段階では、必ずしも一般化していないことになる。さらに、女性・子供への飯器として「南部椀」が使用されていることが注目される。南部椀は、盛岡藩領の浄法寺地域で製作されていた浄法寺椀のこと〔浅倉 2005〕で、ヲムシャという重要な儀礼で使用されていることから、箔椀であった可能性が指摘できよう。

おわりに

以上、簡略ながら場所請負制下の蝦夷地における漆器の使用のされ方について、和人側の史料によって検討してきた。今後史料の収集を継続するとともに、分析を深めていくことを課題としたい。

〔参考文献〕

- 浅倉有子 2005 年 「浄法寺漆器の生産と流通」 矢田俊文他編『中世の城館と集散地』高志書院
- 浅倉有子 2006 年 「近世寺院の漆器生産と流通」『中世考古学文献研究会会報』第7号

中世寺院都市論の可能性

—越前国平泉寺（福井県勝山市）都市プラン復元の試み—

仁木 宏（大阪市立大学）

養老元（717）	泰澄、白山を開くと伝える
天長9（832）	越前平泉寺など、白山信仰の拠点として三馬場が開かれる
12世紀末	源頼朝、藤島荘を平泉寺に寄進
永享12（1440）	火災炎上
文明3（1471）	朝倉氏、一乗谷を本拠とする。平泉寺、朝倉氏と結ぶ
15世紀末～16世	紀初期 平泉寺の全盛期
天正元（1573）	朝倉義景、越前大野で一族の朝倉景鏡に裏切られ自刃
天正2	平泉寺衆徒、一向一揆を村岡山に攻撃するも、反撃されて炎上
天正8	柴田勝安、本拠を村岡山から袋田村に移し、勝山と改称
天正11	顕海、美濃より帰還し、平泉寺再興
明治3（1870）	平泉寺寄進地が没収され、平泉寺の名称廃止。白山神社となる
昭和10（1935）	「白山神社境内、白山平泉寺城跡」が国指定史跡に
平成元（1989）	発掘調査開始
平成6	史跡範囲の拡大、名称変更「白山平泉寺旧境内」

研究史と課題

中世の寺院都市として知られる越前国平泉寺については、福井県の調査を引き継いだ勝山市によって本格的に調査が進められてきた。『よみがえる平泉寺』（勝山市、1994年）の刊行はその第一次的な集大成というべきものである。

その後、宝珍伸一郎氏（勝山市教育委員会）が精力的に研究を主導してきた（宝珍「地名からみた平泉寺の景観」（服部英雄編『地名を歩く』、別冊歴史読本81、2004年）他多数）。また、近年発刊された『勝山市史』第2巻（2006年）（松浦義則氏執筆分）は、文献史料から平泉寺の実態に迫る、画期的な成果を上げている。

根拠もなく過大な建物群（町並み）を描いているとかつて考えられていた「平泉寺境内絵図」であったが、発掘成果の進展にともない、その信憑性が高いことが強調されてきた。ただ、ここでいう「信憑性の高さ」は、建物群の広がりや密集度についてのイメージに関してであり、「境内絵図」が詳細に描く道路網や施設の現地比定が十分におこなわれてきたわけではない。

この「境内絵図」や発掘成果をもとに描かれた「推定復元図」が『よみがえる平泉寺』に掲載されている。最盛期の平泉寺の全体像をビジュアルに伝えるもので、細部にまでこだわって研究成果が反映されている。しかし、一見した限りでは、南谷と北谷の違いや、南谷内部の地域的特色などがわからず、境内一帯に同じような建物群が建ちならぶ平板な印象も与えてしまう。また時期によって境内がどのように発展（衰退）していったのかという変遷も理解できない。

以上のような見地からすれば、現段階での平泉寺の空間構造研究の課題は、境内内部の個々の地域ごとに、微地形や地名、遺構の時代や特徴に注目して、それぞれの性格や建物が建てられた時代などを明らかにすることにある。その上で、境内の各地区の歴史的な性格を明らかにするとともに、平泉寺

の空間全体の展開過程を解明せねばならないのである。

同じことは、平泉寺の周縁部に形成された3つの市庭についてもいえる。安ヶ市、鬼ヶ市、徳市という3つの市庭の存在が地名から推測されているが、それぞれの性格のちがいは論じられていない。それぞれの市庭が接する道路の性格や、境内内外の地域的特徴を勘案した上で、市庭の特徴について論じる必要がある。

本報告は、こうした視角からおこなった検証の中間段階の結果である。

2007年8月・9月に実施した聞き取り調査の成果も盛り込んで付図を作成した。北谷は1970年頃、圃場整備されているため、付図のベースマップとして圃場整備前の図を用い、聞き取り調査では整備前のことを可能な限り記録にとどめるよう努力した。

聞き取り調査で得られた情報を中世にまでさかのぼらせてよいかどうかは判断が難しい。ただ、たとえば聞き取りによって、今は失われた石畳道がかつて境内数ヶ所に残っていたことがわかった。その場所から判断すれば、これらの石畳道が近世以降の耕作地に向かう道上に設定されたとは考えにくい。だとすれば、中世において主要な道を示す指標の一つとしてこの石畳道を利用できるのではないかと考えている。

以下の報告においては付図を参照していただきたいが、付図も論考もいまだ仮説段階であることをあらかじめ御承知いただきたい。

主要道路

まずはじめに、外部から平泉寺にいたり、境内を貫通する道路について概観しておく。

西側の平野部から平泉寺に入ってくる3本の道路について見てみよう。平泉寺が位置する台地の突端にあった下馬大橋に発し、台地の尾根上を進んで、金札、字「菩提林」を経てまっすぐ仁王門にいたる道が、メインの道路であることはまちがいない。今でも苔むした石畳（中世以来のものと言われる）がつづくが、道路の両側は鬱蒼とした森になっていて、地形も複雑で平坦地がないことから建物が建っていた形跡はない。今はアスファルトの道が並行して敷かれてしまったが、いかにも「信仰の道」というべき趣である（「菩提林石畳道」と仮称する）。

これに対して、その南に位置する車坂は、けっこう急ではあるが、両側に水田もひろがり、明るい印象である。この道が、字「安ヶ市」を経て境内に入るあたりが字「構口」で、「境内絵図」に大門が描かれている部分にあたる。境内に入ると「タテミチ」とよばれる道路になり、辻（観音堂）を経て坂をあがって南谷の中心部（南寄り）を貫通してゆく。

北側の浄谷川沿いの道は、字「徳市」、字「松尾」を経て字「中谷」から仁王門にいたる。松尾には三昧があり、周縁の墓所の一つであった。松尾から仁王門へは中谷を通っても、字「源如坊」を通ってもゆけるが、中谷の道筋の方がレベルが上と判断した。これは中谷には現在も残る石畳が敷かれており、また道の両側に比較的規模の大きい坊院跡が連続するのに対し、源如坊には石畳が敷かれていたという伝承さえないからである。

この他、境内を走る東西方向の道としては、金札で菩提林石畳道と分かれて、アズキカシ、門前ガイチ、坊中（ボウジ）とつづく道がある。この道の金札からアズキカシ付近までは路線バスが走るようになるまで石畳が敷かれていたという。またこの道の延長上の坊中では発掘によって石畳が検出されていることから、全線にわたって石畳道だった可能性が高い。

このアズキカシ、坊中の道と、先述のタテミチの間に、ムジナ道が通っている。

外部から境内にいたる南北方向の主要道は3本程度、想定できる。

一つは、女神（オナガミ）川から金坂を登ってきて、辻にいたり、観音堂のところから鳥吠小路に

なって、菩提林石畳道方面につながる道である。南方の女神川付近からの比高差が一番少なく、その意味で使いやすい道であったろう。

字「鬼ヶ市」を経由する道は2本想定できる。三味道は、鬼ヶ市付近に数十年前まであった三味に、集落から通う道であった。これを登ると、紺屋通から仁王門前にいたる。聞き取り調査によれば、北谷の花王院跡の西側下を巻くようにかつて石畳道がつづいていたという。だとすれば、この紺屋通から仁王門前にいたった道がさらに北に延びて、この石畳道に接続し、北谷の北東奥をつないでいたのかもしれない。

カミゴサカは、タテミチ、ボウジと直交した上で、平泉寺南大門にいたる。さらに、本坊地区を貫通して北側に出ると、「境内絵図」に描かれた「石大橋」で浄谷川を渡り、地蔵院にいたる。中世において、実際に本坊地区を貫通して、自由に人が行き来できていたかどうかは不明だが、「境内絵図」全体の構図をかたちづくるような重要な道として位置づけられているようである。

以上に想定した道の内、近世史料にその名前が見えるのは管見の限り、「タテミチ」「鳥吠小路」のみである。なお、紺屋通付近に紺屋が実際にあったという聞き取り情報はない。

大坊院

平泉寺の中心はもちろん白山神社を擁する本坊地区であるが、その周りを取り囲むように花王院、地蔵院、明王院、西蓮院などが立地していた。このうち、地蔵院については発掘調査がなされ、建物復元案が出されている。この他、これらは「境内絵図」や地名、現存する地割などから想定される。南大門の南東、タテミチ沿いに賢聖院が立地したようだが、その正確な場所の比定についてはなお不明である。

これらは、本坊地区を中核として、一定の距離を置いた上で、山地を背とする共通の立地をしている。それぞれが複数の削平地からなっていたようで、独立した空間を形成しているといえよう。遺物から見るかぎり、他の地域が16世紀初頭までに衰退の色を濃くするのに対し、これら的大坊院地区は16世紀にいたっても継続的に維持されていたようである。

だとすれば、15世紀末以降、平泉寺境内全体のなかでこれら少数の大坊院に権力や富が集中する傾向が見られたのかもしれない。大名、国人らの武家の社会や、村落社会の一部で顕現するような権力強化、集中化の動向が平泉寺内部に生じていたのだろうか。

工房

これまでの発掘調査によれば、平泉寺境内で、一定の規模以上の生産遺構が集中する区域は限られるという。それは、構口の入口を入ってすぐの場所にあたる辻の北東部周辺である。

大型の甕が複数、集中して発見されており、何らかの貯蔵施設と考えられている。甕の中身を販売していたのか、それとも生産のための原材料を貯蔵していたのかはわからないが、この地域の特徴を示しているものとして注目される。

タテミチ、鳥吠小路、金坂が集中し、観音堂を擁するこの付近は、現在でも集落の中心地の機能を有している（郵便局や旧公民館が立地）が、それは中世も同様だったのではないだろうか。

都市プラン試論

以上、推測に頼る部分がまだまだ多いが、とりあえずの結論を示しておきたい。

まず、平泉寺境内の内外を結ぶ主要道路の性格のちがいに注意する必要がある。菩提林石畳道は、その出口に下馬橋（これそのものは中世までさかのぼるかどうか不明であるが）があるものの、市庭をともしなわれない。道路の両側に坊院が広がった様子もなく、長いアプローチを経て仁王門付近に到達する。よって、まさに参詣路、信仰の道に特化した道路であったといえよう。

これに対して、車坂は、外部から境内への物資搬入がもっとも容易な道であり、構口の外側に安ヶ市をとまなうだけでなく、内側に推定工房地区を擁する。あえて対比的に言えば経済・流通の道であったと規定できるだろう。西側の平野部から境内にいたるもう一本の徳市道については性格がよくわからない。結構長い距離を谷間を登ってこないで徳市にいたらないし、字「徳市」付近は浄谷川がせまる隘部にあたる。

車坂や石畳道には土塁・堀からなる構（惣構）があるのに対し、徳市道周辺には明確な防御施設はない。これは徳市道が隘路であるため、自然の要害になっているという理由もあろう。ただ一方で、構口門やその南北につづく土塁や堀（「境内絵図」では高い石垣として表現されている）が本当に軍事的なものであったかどうか検討する余地がある。むしろ、境内（都市）の内外を分かつ結界としての意味合いの方が強かったのではないか。「境内絵図」で車坂に立派な構口門が描かれているものの石畳道は自由に通行できるようになっているのも、むしろ構口の象徴的な意味合いを示しているように思える。

もう一ヶ所の市庭である鬼ヶ市についての評価はいつそう難しい。境内から鬼ヶ市を下っても女神川の狭い平野があるだけで、境内西側のように遠方につながる広がりはない。鬼ヶ市には三昧があったし、聞き取り調査によれば、その先の女神川の対岸（南側）にはより大規模な墓地が広がっていた。鬼ヶ市から境内にいたるにはかなりの急坂を登らねばならない。ただ、現地に立つと、坂の中段に結構面積のある畑地が展開していることがわかる。

このように考えれば、安ヶ市がもっとも経済的な機能にすぐれており、それは構口門内側の「辻」地区と連動していると推定されよう。これに対して鬼ヶ市は、そこを通る道路が平泉寺の仁王門・南大門と結ばれていることから、むしろ本坊直結の市庭であったのかもしれない。

平泉寺境内が本坊地区からはじまったことはまちがいない。中世前期にさかのぼる遺物のほとんどはここに集中する。その後、南谷中央部から東部、北谷のうち南側の谷などに坊院群がひろがっていったのだろう。

南谷の中では東寄りの開発が早かったのではないか。地形的に平坦であり、本坊地区とのあいだの行き来も容易である。これに対し南谷の西寄りには南に高く、北が落ち込む地形で、地図で見る以上に高低差がある。そうした中で、南側の丘上は比較的安定した地形東西につづいており、やがてここにタテミチが発達してくるのだろう。

平泉寺境内と外部を結ぶ道はもちろん菩提林石畳道にはじまった。信仰の道である。しかし、境内の坊院が発達してきて大量の物資を出入りさせる必要が生じるとこの道は不向きである。そこで車坂を登り、構口にいたる道が大きな位置を占めるようになってゆくと推測される。この道は辻で分岐してタテミチと鳥吠小路に分かれる。

室町時代以降であろうか、この「辻」の周辺に工房などが集中するようになり、商業に従事する人々の居住もあったのかもしれない。こうして「辻」付近の集落と安ヶ市の市庭は相互に共鳴したと想定される。

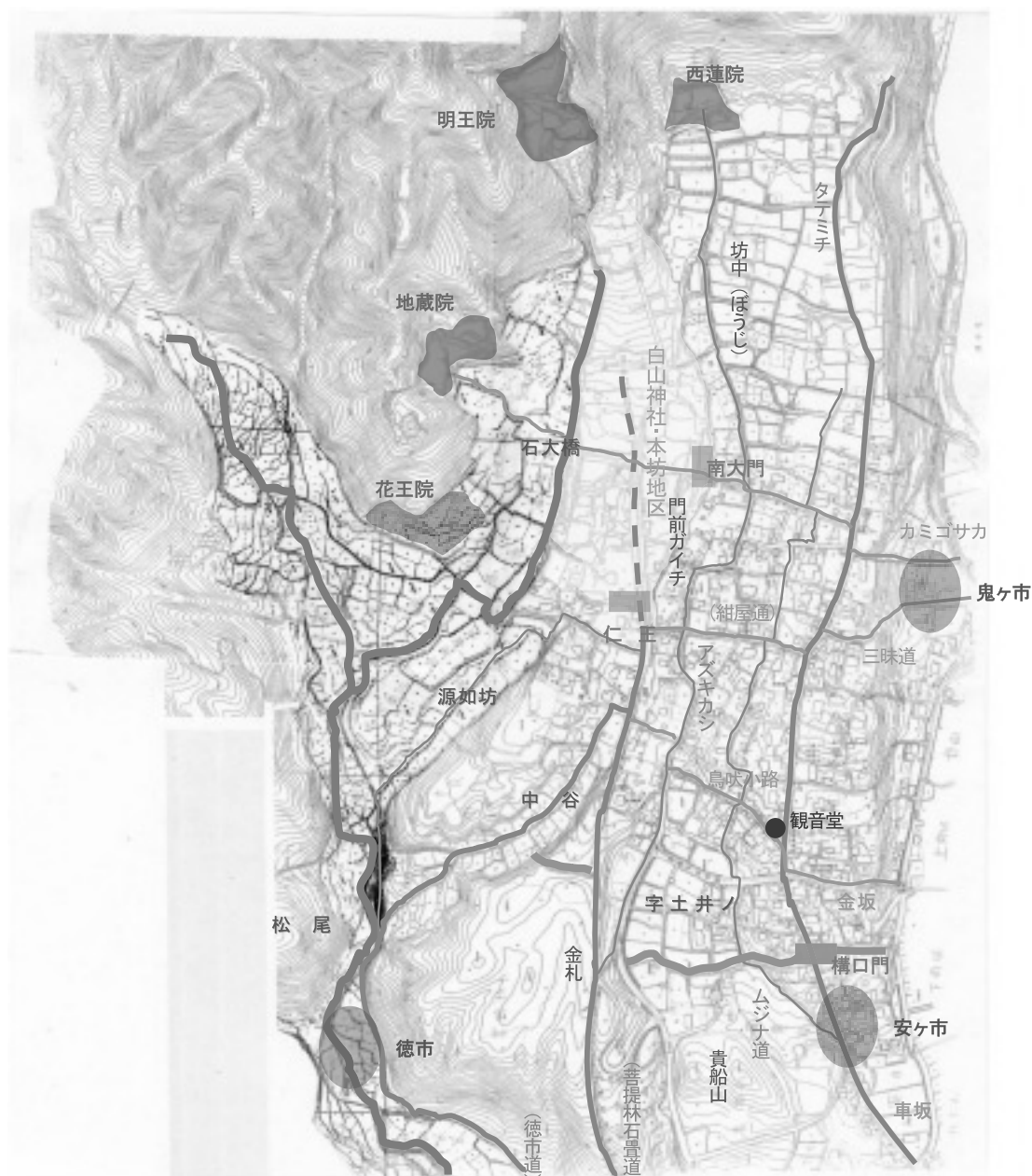
北谷の展開過程は不明といわざるをえない。「境内絵図」で描かれるような景観は戦国時代には実現していたのかもしれないが、圃場整備前の北谷は狭い棚田の集積からなり、南谷のように面積の広い坊院が立地できたポイントは少なかっただろう。

そうした中で、字「中谷」と字「源如坊」は特別な位置を占めた。いずれも徳市道から仁王門を結ぶ道路が貫通している。とりわけ字「中谷」は石畳道であり、両側に区画だった屋敷地が連続している。南谷の諸地区の展開とあとさき関係を明らかにすることはできないが、北谷の中では比較的早く

から開発され、また安定して坊院が維持された地区と考えておきたい。

天正2年（1574）、一向一揆との戦いに敗れた平泉寺は全山が灰燼に帰したといわれている。しかし、遺物からみる限り、16世紀後半の平泉寺はすでに衰退の色が濃く、人の住んでいた痕跡があるのは、本坊地区を除けば、地藏院などの大坊院地区に限られるようだ。だとすれば、この時期の一揆に対する敗退はむしろ当然であり、それは数十年間にわたる変化の総括にすぎなかったのだろう。

だとすれば、平泉寺が16世紀初頭をピークとして衰退に転じたのはなぜか。いやむしろ、15世紀末のピークを醸成した社会的背景は何なのかが今後解明すべき課題である。そのためには、平泉寺境内だけでなく、平泉寺から西の九頭竜川沿岸にいたる平野部についての検討や、より広く九頭竜川流域の国人居館や流通網の分析、さらには越前一国レベルでの府中（武生）・一乗谷・北之庄や三国湊・敦賀などとの比較研究が求められているといえよう。



中世平泉寺復元概念図（2007. 11. 3 版）

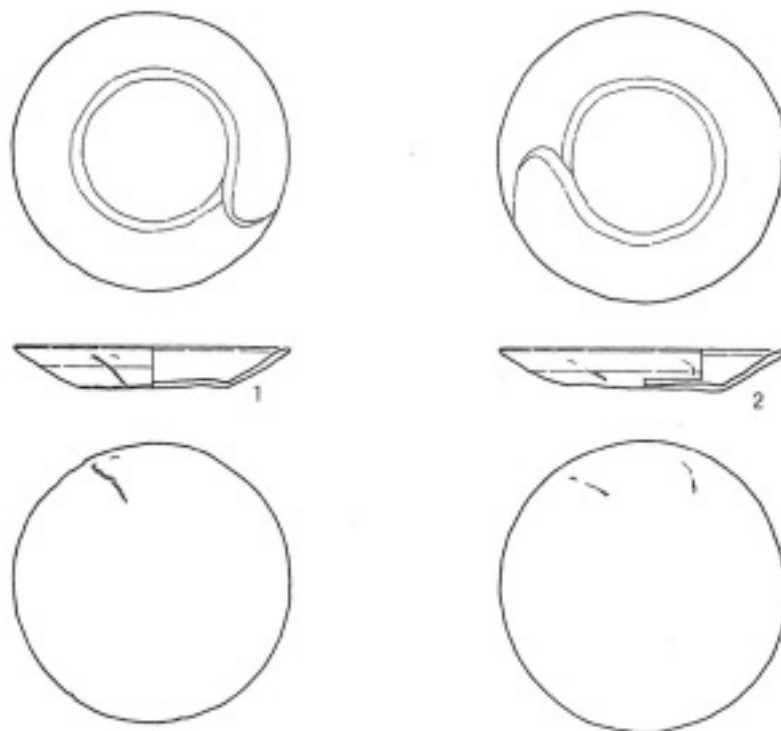
1. 旅をしたかわらけ：宮崎県総合博物館所蔵の中世土師器

宮崎県総合博物館に2点の中世土師器が所蔵されている。昭和40年代に寄贈されたものであるという。全国的にもきわめて珍しい、伝世した土師器資料である。

この土器はすでに舂木・永友・堀田氏によって胎土分析も含めた検討が加えられており（舂木・永友・堀田2006）、在地（宮崎県）製品ではないことがすでに報告されている。平成18年8月、博物館のご厚意で実見の機会をいただいた。そのときに得た知見も加えながら、以下この土器について述べる。

土師器は2点ある（第1図－1・2）。1は口径14.6cm、器高2.2cm、2は口径15.2cm、器高2.1cmを測る。器壁はどちらも2～3mmと薄手である。両者ともに茶褐色を呈し、精良な胎土で比較的堅緻な焼成である。内外面には広範囲に焼成時に生じた黒斑がのこる。器表面には光沢があり、これは一般的な土師器からみればきわめて異様であるが、伝世の過程でしばしば手入れされた結果かもしれない。器形はいずれも平たい底部をもち、体部が直線的にたちあがる、台形状の側面観をもつ。底部内面を一方向ナデしたのち、口縁部内外面を時計回りにヨコナデし、さいごは「2」字状に幅広にナデ上げる。内面のナデ調整時に、見込み（底部内面）の端部が幅3mm程度くぼんで圏線をなす。また、口縁部内面にはわずかな凹凸がある。

以上の特徴から判断するならば、この2枚の土器はかなりの蓋然性をもって京都産土師器であると



第1図 宮崎県総合博物館所蔵中世土師器（〔舂木ほか2006〕より転載、縮尺1/4）

いえる。台形状の側面観、見込み端部の圈線状のくぼみ、口縁部内面のわずかな凹凸という特徴は、天文元（1532）年焼失とされる山科寺内町石室出土土師器群（左京内膳町 SD41B 併行）よりも後出する要素である。京都市・左京内膳町遺跡の土器編年と照らし合わせるならば、寺内町よりも後出の SD164、SD170 段階あたりに位置づけられる。博物館所蔵の土器は、見込み端部の圈線が明瞭な点で SD170 出土資料に酷似するが、器壁の薄さなどはむしろ SD164 出土資料に近い。この時期の京都産土師器の実年代はまだ未確定の部分もあるが（森島 2000a・2000b など）、私は SD164 を 16 世紀第 III 四半期、SD170 を第 IV 四半期と考えている（中井 2006）。これらの中間的な様相と解釈すれば、16 世紀第 III 四半期の後半、おおよそ 1570 年代前後の実年代を与えることができる。当時「五度入」とよばれていた土器であろう（中井 2002）。

中世土師器としてはきわめて異例の伝世品であるとなると、その真贋が問題となるが、土師器が本来長い期間使用されることのない消耗品であるという性格を考えれば、安政期の土器工人が 16 世紀の土師器を模作したとは考えられない。当時に見本となるべき土器は京都にものこっていたとはまず考えられず、当時に中世土師器の考古学研究者でもないかぎり、16 世紀の土器を再現することは京都の土師器工人たちにも至難の技であったはずである。2 枚の土器は 16 世紀の京都産土師器の特徴の細部までが正確に踏襲されたものであり、贋作であった可能性は排除してよいだろう。

2. 伝来の契機：「天盃」

では、16 世紀第 III 四半期後半（1570 年代ごろ）に京都で生産されたこの 2 枚の土師器は、いかなる経緯で日向までもたらされたのであろうか。

その手がかりは土師器がおさめられていた容器にある。2 枚の土師器は漆塗りの曲物のなかに重ねておさめられ、木箱の蓋をかぶせた状態で保管されていた（第 2 図）。曲物の内径は 15cm 強を測り、皿の口径よりわずかに大きい程度である。内面は朱漆、外面は黒漆を塗り、底部に足をもつ。ただし、内径とは対照的に、器高は土師器 2 枚をおさめてもなお余裕をのこしているので、ありあわせの漆器を土師器をおさめる容器に転用したようにも思われる。木箱には表に「天盃」、裏に「文亀年中義祐公為御／名代参内天盃戴之稻／津壱岐守重定／干時此箱安永三年五月ノ吉日調之 重經」と墨書される（第 2 図）。安永 3（1774）年 5 月に今の容器におさめられたらしい。稲津壱岐守重定なる人物は、戦国期日向伊東氏の基本史料である『日向記』には一切名前がみえないが、一族の何人かは「南方御代官」や「十三人之組衆」などで確認できる。伊東氏の近習層から台頭した一族ⁱと考えられている（『宮崎県史』）。近世の稲津氏については未調査であるが、おなじ「重」という通字をもつ重經という名前から推測するに、稲津家に伝来していたと考えられる（ただし、寄贈者は稲津姓の方ではなかったという）。

箱書の文言にいま少し注目してみよう。土師器の型式学的検討から導きだされた実年代は、おおよそ永禄末期～天正初期ごろにあたる。箱書のごとく「文亀」（16 世紀初頭）の土器とは考えにくい。杣木氏ⁱⁱも指摘するように（杣木・永友・堀田 2006）、「元亀」の誤記とみるほうが自然である。さて、時期の問題以上にここで注目したいのは、この土器が「天盃」に使われたとする記述だ。稲津重定なる人物が主君伊東義祐の代理として上洛し、参内した際に天皇から受けた盃という由緒である。これが事実だとすれば、この土器の存在は土師器の用途論においてきわめて興味深い問題を提起する。というのも、室町・戦国期の土師器研究は、武家儀礼の波及や幕府儀礼体系の受容、権威の表象といった武家社会にひきつけたコンテクストで理解され、「天盃」、つまり朝廷の儀礼とのかかわりはほとん

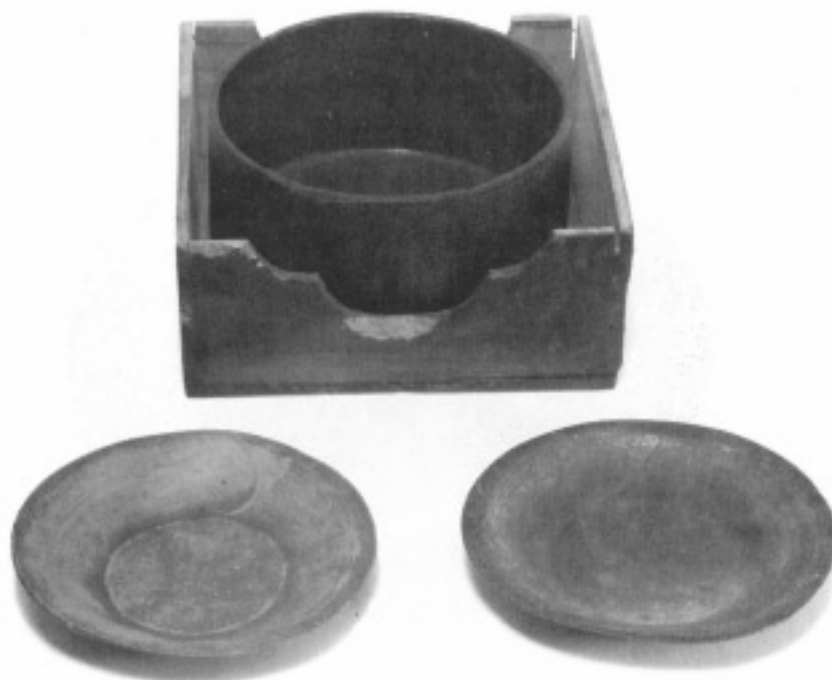


図1 「天盃」と容器



図2 内面の箱書

第2図 中世土師器収納容器（宮崎県総合博物館蔵、[初木ほか2006]より転載）

ど注目されてこなかったからである。

箱書の記すごとく、本当に天皇から授与されたのかは検討の余地が大いにあるとしても、この土師器が京都の製品で、天皇から授けられたとする「天盃」として認識されて伝世してきたことはまちがいない。京都ではごくありきたりの、消耗品にすぎない2枚の土師器は、天皇から授けられたという「履歴」を持つ（少なくともそう信じられた）がゆえに、すぐに廃棄されるような消耗品から、大事に伝えられるべき宝物という地位へ浮上した。このような器物の価値生成過程も興味深いが、それ以上に公家社会と武家社会の交流のなかで土師器がいかに使用されたかについて考察する素材としてとりあげる意義はじゅうぶんにあるだろう。

本報告では、京都の史料を手がかりに「天盃」をともなう儀礼の実態を明らかにする。「盃」という言葉をみても、これが献盃儀礼の道具であることは疑いないが、従来の土師器研究のなかで、公家社会の儀礼の検討はふじゅうぶんであった。ここでその実態を検討することは、武家儀礼とのかわりのみが重視されてきた戦国期土師器の問題の再検討にもつながろう。

3. 旅のはじまり：授与されるかわらけ

朝廷での儀礼の実態を把握するために、宮中の動静が記された『お湯殿の上の日記』をとりあげる。ここでは『続群書類従』の刊本を参照した。「天盃」の「天」とはいうまでもなく天皇をさすが、「天盃」の用例を集成していくうちに、おなじように「天」の字を冠した「天酌」なる言葉も相当数あることに気づいた。いずれも宮中の饗宴なり献盃儀礼にかんする文脈であられる語彙である。そこで、「天盃」と「天酌」の相違にも留意しながら、各語彙の用例を検討する。『お湯殿の上の日記』は、文明9（1477）年から文政9（1826）年にわたって書き継がれてきた記録であるが、本報告では、『続群書類従』収録分のうち文明9（1477）年～慶長5（1600）年までを対象とした。

「天盃」の用例 「天盃」事例を集成したのが第1表である。合計43件抽出できた。時期的な傾向をみると、もっとも古い事例として天文17（1548）年6月12日の記録があるが、その後1570年代まではほとんど事例がみられず、天正14（1586）年あたりを境に件数が増加する。大半は豊臣政権下での事例であるといっていⁱⁱ。

43件のうち、武家の参内にともなうものは9件である。将軍足利義輝（天文17.6.12.）や織田信長（永禄12.10.13.）など、将軍かそれに準ずる人物が2件ある。天正14（1586）年以降の豊臣政権確立後になると、秀頼（2件。ただし、京極高次が代参）や政権下の有力大名（前田、蒲生氏ら）が昇任御礼として参内している。武家に関していえば、室町幕府では将軍、織豊政権ではそのトップやそれに近い有力大名が参内したときにだけ、「天盃」が授与される状況であったようだ。

一方、公家については多岐にわたっているが、まず指摘できるのは、摂政・関白をつとめる五摂家の人物には、「天盃」が授与されていない点である。また、江戸時代の公家家格という清華家の人物に授与された例もほとんど皆無であり、唯一の例外としていわゆる大臣家の正親町三条家の嫡子が叙爵の御礼に参内したときに与えられた事例がみえる（文禄4年3月15日条）。これは武家に対してもある程度敷衍できそうで、秀吉の参内時には「天盃」が授けられなかったことや、さきの「天盃」を受けた武家も大臣以上の地位の者は皆無であることからみて、摂関・大臣クラスやそれにのぼり得る家格の人物に対しておこなう儀礼ではなかった可能性が高い。また、宮家や僧侶が同時に参会した事例でも、彼らに「天盃」が授与された例はみられない。皇族や寺社関係者も対象から除外される性質の

第1表 『お湯殿の上の日記』掲載「天盃」関連記事一覧（文明9(1477)年～慶長5(1600)年）

番号	年	西暦	月日	どこで	だれに	きっかけ	介添	備考
1	天文17	1548	6.12.		武家（足利義輝）	武家御参内	配膳：前左府・衛門佐、 はく侍従、手長：膳中尉	
2	永禄4	1561	9.25.		上皇院	侍従		五厨におよぶ。「天酌」 酒宴と同一形式。
3	永禄5	1562	1.9.	申のくち	水原源	新年御礼		
4	永禄7	1564	1.4.	申のくち	藤幸親	新年御礼		
5	永禄11	1568	1.16.		栗室	新年御礼		百万遍、法恩寺、二事 院、泉涌寺長老、西園 寺、横前院など僧侶も 「御礼申」が、栗室のみ 天盃
6	永禄12	1569	10.13.		織田信長	上洛、宮中見舞	酌：兵衛	男衆はみな何候
7	元龜4	1573	2.6.		日野一位	御礼		
8	天正11	1583	1.2.	すへ	柳原殿	新年御礼		
9	天正14	1586	3.22.	議定所	上野、野田	御礼	配膳：三条大納言、手 長：膳中尉	
10	天正15	1587	1.4.	おとこすへ	飛鳥井大納言、飛鳥井 中尉	御礼		
11	天正16	1588	1.4.	議定所	飛鳥井中尉、中御門	新年御礼		西園寺、大炊御門、花山 院らには天盃なし
12	天正16	1588	1.5.	議定所	鳥丸父子、飛鳥井大納 言	新年御礼		正殿町、はしはそね、久 我、阿野らも「御礼申」 も、天盃はなし
13	天正17	1589	1.2.	議定所	柳原父子	新年御礼		父（大納言）は御物、子 （侍従）は三度入を使用
14	天正18	1590	1.1.	議定所	しんくけ28人	新年御礼		うち5人に天盃
15	天正18	1590	1.4.		ときまの御養衆（正親 町父子）	新年御礼		正殿町父子、阿野権少将 は三度入を使用
16	天正18	1590	1.5.	すへ	中御門	新年御礼		
17	天正18	1590	1.8.	議定所すへ	飛鳥井父子	新年御礼		鳥丸父子も「御礼申」が天 盃なし
18	天正18	1590	1.22.	議定所	前田幸綱（利長）		配膳：正殿町三条、手 長：左少将	
19	天正19	1590	1.11.	つねの御所御 さしむしる	日野父子、鳥丸父子	新年御礼	配膳：大興格、手長：長 橋、御中参、御々の配 膳：伊予殿	僧侶も「御礼申」が天盃 なし
20	文禄4	1595	1.10.	御さしむしる	鳥丸父子、日野父子	新年御礼	配膳：左衛門のすけ、供御 配膳：菊亭中納言、手 長：右中尉	（鳥丸）光興、（日野） 興勝は三度入を使用
21	文禄4	1595	1.10.		入江殿	新年御礼		
22	文禄4	1595	1.10.	おとこすへ	柳原父子、飛鳥井父 子、正親町父子、藤左 大舟、源右大舟、治 泉、甘藷寺	新年御礼		柳原大納言、正親町中納 言は御物、そのほかは三 度入を使用
23	文禄4	1595	1.14.	議定所	武藏三好地印（三好吉 房）	参内	配膳：三条、手長：右中尉	
24	文禄4	1595	3.15.		正親町三条公伴の若様 兄（実有）	飯前の御礼		
25	文禄4	1595	3.22.	議定所	宇都宮侍従（膳生秀 行）	公家威の御礼	配膳：さねえだ、手長： 右中尉	
26	文禄4	1595	8.12.	申のくち	持明院のうしろう	御出役		
27	慶長3	1598	2.16.	申のくち	藤幸親なかよし	元服御礼		
28	慶長3	1598	2.22.	申のくち	中山大納言			
29	慶長3	1598	4.20.		有持侍従少将（京極高 次）	御礼	配膳？：三条幸綱中尉、 手長：日野源弁	太閤・秀勝の代理
30	慶長3	1598	8.24.		勧修寺、中山		配膳：三条幸綱中尉、手 長：右中尉	
31	慶長4	1599	6.3.28.		鳥津又八郎（忠實）	御礼		天皇病いにて対面はな し、天盃のみ下す
32	慶長4	1599	12.4.	おとこすへ	栗室中納言	拝賀		天盃不調のため対面なし
33	慶長4	1599	12.7.		万葉小路大納言、中御 門中納言	拝賀		
34	慶長4	1599	12.16.	おとこすへ	藤原右少将	職事の拝賀		
35	慶長4	1599	12.18.	おとこすへ	鳥丸源左中尉	拝賀		
36	慶長4	1599	12.19.		日野左大舟幸綱			
37	慶長5	1600	1.11.	清涼殿	大津幸綱（京極高次）	新年御礼		（豊臣）秀勝中納言の代 理
38	慶長5	1600	1.11.		ほうようあん	新年御礼		
39	慶長5	1600	2.2.	おとこすへ	笠野井	先懸		
40	慶長5	1600	4.19.		新公家衆			
41	慶長5	1600	8.28.	おとこすへ	こかわの右少将	拝賀		天盃のみ、献はなし
42	慶長5	1600	11.19.	おとこすへ	中御門の子	元服位官		天皇不調のため対面なし

第2表 「天盃」関連記事月別頻度

年	西暦	回数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
天文17	1548	1						1						
永禄4	1561	1									1			
永禄5	1562	1	1											
永禄7	1564	1	1											
永禄11	1568	1	1											
元亀4	1573	1		1										
天正11	1583	1	1											
天正14	1586	1			1									
天正15	1587	2	2											
天正16	1588	2	2											
天正17	1589	1	1											
天正18	1590	5	5											
天正19	1591	1	1											
文禄4	1595	8	5		2					1				
慶長3	1598	4		2	1					1				
慶長4	1599	6			1									5
慶長5	1600	6	2	1		1				1			1	
計		43	22	4	5	1	0	1	0	3	1	0	1	5

ものであったと推測される。公家でめだつのは、烏丸、日野、飛鳥井、中御門といった、いわゆる羽林家・名家といった大納言まで昇進できる家格の人物である。多くは新年の拝賀に際しておこなわれているが、元服の御礼に参内した事例もある（慶長 3.2.16.など）。「天盃」はこうした家格の人びとに対しておこなわれる儀礼であったと想定できる。

つぎに所作や儀式の構造について検討してみると、対面する人物が武家か公家かで差をつけていたようすが読み取れる。配膳役や手長役が公家衆などから指名され、献盃の応酬とともに贈答品もやりとりされるのは武家に対してであり、公家の場合は、ほとんどが単に「天盃いただきあり」といった簡素な記述にとどまっている。

武家の場合、たとえば天文17年の足利義輝参内では、太刀や馬が進上されたのち、天皇側から太刀とともに「天盃」が授与された。また、永禄12年の信長参内では、女官の長橋局が酌をして「天盃」が与えられたのち、信長側から太刀や金銭の献上があった。このような贈答品のやりとりを含む様式は武家の式三献（献盃儀礼）や御成でよくみられるものであり、武家との対面の場合は、武家のしきたりに準拠する配慮がなされていたと推測される。これは公家の場合をみれば対照的である。永禄7（1564）年1月4日に藤宰相が「御れい」に参内した際に天盃とともに扇が与えられた事例がみられる程度で、贈答品がやりとりされた事例はほぼ皆無といってよい。

概して武家の故実書が盃のやりとりを克明に記すのに比べ、『お湯殿の上の日記』ではこの種の記述に乏しい。しかしながら、天文17年の義輝参内では贈答品の応酬がなされていること、また一献、二献・・・と分けて記載されている事例（永禄 4.9.25.など）から推測するに、回数には差こそあれ、主客が盃をさしかわす行為がともなっていた可能性が高い。

では、「天盃」儀礼において、実際に盃が授与されたのであろうか。「天盃御いただき」という簡素な記述からははっきり断定できないが、慶長4（1599）年閏3月28日条の記事は手がかりになる。島津又八郎（忠恒）が御礼のために参内した時は、体調不良のため天皇は対面こそしなかったものの、

「てんはいはかりきてう所にいたたまいらせ候」と記されている。天皇が不在であっても「天盃」は成立していたのである。次に検討する「天酌」が、天皇自身の手による酌という意味であることと対比すれば、「天盃」とは器物によりシフトした表現であるといえる。同様の事例は翌5年4月19日条、8月28日条でも確認できる。「天盃」とは武家儀礼でいう「御盃被下」、すなわち道具である盃そのものの授与をともなつたと考えられる。

この盃が土師器であったことはまず疑いない。文禄4（1595）年1月10日条など随所で、間物や三度入という土師器の器名がみえるからである。興味深いのは、父子が参内した場合、父には大きい盃（間物）、子には小さい盃（三度入）が使用された点だ。年長者に大きい盃を使用させることが規式として成立していたようだ。

「天酌」の用例 「天酌」が確認できるのは、文明13（1481）年から慶長5（1600）年までで計194件と、「天盃」の5倍近い頻度である。月別の頻度を第3表にしめた。1～3月がそれぞれ33件、22件、28件を数え全体の4割強をしめる。このほか7月が突出しているが（48件）、その多くは「御めてた御さか月」と記されており、慶事にともなつた酒宴が定期的に開催されていたらしい。

開催の契機をみてゆくと、特筆すべき傾向があつたようにはみえない。連歌会（文明15.1.25.など）や能（文明16.3.16.など）、田楽（大永7.11.26.）のような芸能のあとに催された酒宴もあるが、廷臣の訪問や「こよひの御さか月いつものことし」（永禄13.1.15.）など、さしたる行事にともなわずに開催された酒宴でも用例が確認できる。要するに、宮中生活の随所で催された酒宴のなかで、ときに「天酌」があつたのであろう。

注目されるのは、ほとんどの場合において酌をした人物が記録されている点である。事例が多いためすべてを列挙できないが、たとえば「御めてた御さか月」として催された天文7（1538）年7月9日条では、伏見宮らが参会した「御さか月七こん」のなかで、三献がを「宮の御かた」、四献を「ふしみ殿」、六献を「あんせんし殿」、七献を「三條中納言」が担当し、天皇（当時は後奈良）は五献目に「てんしゃく」をしたと記されている。酒宴の規模は七献や五献、九献などその時によってさまざまであるが、おおむね三献目の酌をした人物から名前が記されており、「天酌」は三・五・七献目のいずれかにみられる。たとえば「七こん」の酒宴なら最後の七献目でおこなうことはなく、酒宴のなかの中間あたりの奇数献目（この場合だと五献目であることが多い）でおこなうことがならわしであつたようだ。

「天酌」をともなう酒宴では、「天盃」のそれとは異なり、配膳や手長などの配役について克明に記されることが大変少ないが、「御ひさけ」（提子）を持つ役目の人物が記載された例（天正15（1587）年7月4日条など）も散見されるので、やはり介添を担当する人物が存在していたと思われる。初献・二献はそうした人物によって盃がさされ、三献以降、主客が入れ替わり盃をさしていったと考えられる。

では、「天酌」を受けたのはどのような階層の人びとであつたのだろうか。事例があまりにも多く、完全に整理し得なかったが、圧倒的に多いのは公家である。「天盃」と同様、日野や烏丸、飛鳥井家といった、江戸時代の家格でいう羽林家・名家クラスの公家が多い。それ以上のクラス、とくに五摂家の参加例はほぼ皆無であるが、天正19（1591）年1月12日条のように、関白豊臣秀吉が参内した際の酒宴で「天酌」があつた事例もある。また、「ふしみ殿」（伏見宮）や「若宮の御かた」など、宮家が参加するような酒宴でも「天酌」が頻繁におこなわれているところを見ると、規式として定まっていたとみるよりはむしろ、日常的にこうした階層の公家衆との交流が盛んであつたためと考える方が

第3表 『お湯殿の上の日記』掲載「天酌」関連記事月別頻度

年	西暦	回数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
文明13	1481	2	1			1								
文明15	1483	5	3		2									
文明16	1484	1			1									
文明17	1485	2			1	1								
長享2	1488	5	1	1	1	1			1					
長享3・延徳1	1489	6	1					1		1		1	1	1
延徳2	1490	4			2			1	1					
延徳3	1491	8			1			2	3					2
延徳4・明応1	1492	6	3	1	1						1			
明応2	1493	5		4							1			
明応3	1494	4			1	1			1				1	
明応4	1495	6	1	2	1				1			1		
明応5	1496	6	2	3					1					
明応6	1497	2	1	1										
明応7	1498	5	1		2				1			1		
明応8	1499	4		2	2									
明応9	1500	4							1				1	2
文龜3	1503	1	1											
永正8	1511	1	1											
永正12	1515	1	1											
大永6	1526	1							1					
大永7	1527	3	1			1	1							
享禄2	1529	3		1									1	1
享禄3	1530	3			1					1				1
享禄4	1531	2					2							
享禄5・天文1	1532	4			1	2			1					
天文2	1533	3							1					2
天文4	1535	2			1					1				
天文5	1536	2		1	1									
天文6	1537	2	1	1										
天文7	1538	3		1		1			1					
天文8	1539	1												1
天文9	1540	2		1							1			
天文10	1541	2			1		1							
天文11	1542	3			1				1					1
天文12	1543	2		1	1									
天文13	1544	1							1					
天文14	1545	1							1					
天文18	1549	1							1					
天文23	1554	1							1					
弘治2	1556	2		1					1					
弘治3	1557	1									1			
永禄1	1558	1											1	
永禄3	1560	1								1				
永禄4	1561	2							2					
永禄5	1562													
永禄6	1563	2					1				1			
永禄7	1564	1	1											
永禄9	1566	3			1				1	1				
永禄10	1567	2							1			1		
永禄11	1568	2							1				1	
永禄12	1569	3	1						1		1			
永禄13・元龜1	1570	3	1	1					1					
元龜2	1571	1							1					
元龜3	1572	4							1		3			
元龜4	1573	2							2					
天正3	1575	2					1		1					
天正7	1579	1							1					
天正8	1580	2			1			1						
天正9	1581	2							1				1	
天正11	1583	1	1											
天正14	1586	1	1											
天正16	1587	2							1	1				
天正18	1589	3	1						1		1			
天正17	1589	6	1					1	2	2				
天正18	1590	3	1						2					
天正19	1591	3	3											
天禄4	1595	4	1		2				1					
慶長3	1598	4				1			2				1	
慶長4	1599	1												1
慶長5	1600	9	2		2	1	1		3					
計	194		33	22	28	10	7	5	46	9	10	6	6	12

自然かもしれない。なお、「女中」に酌をした記事も多くみえ、酒宴に加わった女官たちにも時に「天酌」が下されたようであるⁱⁱⁱ。

「天盃」とは対照的なのは、武士がこの「天酌」をとまなう酒宴に参加した例はほとんどみられないことである。例外となりそうなのは室町殿で、文明13(1481)年4月26日条では、室町殿(足利義尚)が参内したおりに十三献におよぶ酒宴が催され、十献目に「天酌」があった例、文明15(1483)年3月28日条では久しく「御まいり」のなかった室町殿が参内し、酒宴がもよおされて「天酌」を受けた事例などが確認できる。ただし、15世紀末以降になると、幕府が混乱していくためか、室町殿を相手にした酒宴はみられなくなるので、どこまで規式化していたものかは判断しがたい^{iv}。

武士の参内例として、天文12(1543)年5月1日条の著名な記事をみてみよう。内裏修理の要脚を献上した尾張の戦国大名・織田信秀の名代として、「ひらて」(平手政秀)が参内した記録である。修理費用を伝奏の雑掌に渡した平手政秀は、その後小御所へ案内され、「くこん」と「御たち」が与えられた。前者は酒肴だと思われるが、この場に天皇が姿をあらわした形跡はなく、当然のことながら「天盃」も「天酌」も政秀には与えられなかった。

豊臣政権下になると秀吉をはじめ、徳川家康など有力大名が参内した際に「天酌」がなされた事例

はあるが、これは彼らが公家成したためと解するべきで、それ以前では明確に武士が参加した事例はみいだせないのである。少なくとも室町殿や豊臣政権の有力者といった武家社会のかぎられた者以外には、「天酌」は与えられるようなものではなかったと考えられる

4. まとめ―旅のおわりに―

『お湯殿の上の日記』をもとに、朝廷における「天盃」・「天酌」儀礼の状況を検討してきた。さいごに、もう一度日向の土師器にたちかえって、箱書の真偽や土師器の表徴的機能の問題について若干の言及を加えてまとめたい。

戦国期日向については信頼度の高い良好な史料が乏しく、『宮崎県史』にしても『日向記』の叙述が踏襲されている。『日向記』にみえる伊東義祐の事績のなかで、京都（幕府・朝廷）との交流がうかがわれる案件を第4表に掲げた。

「天盃」そのものがあらわれるのは、天文6（1537）年8月の記事である。伊東祐清が將軍の偏諱を受けて義祐と名を改め、従四位下に叙せられた際に「天盃」と女房奉書を朝廷から受けたという。しかしこれは『お湯殿の上の日記』や『大館常興日記』など京都の史料には一切みえず、冒頭の土師器の年代とも一致しない。

土師器の実年代から考えれば、むしろ永禄4～5年ごろの叙位や家督相続に関する交渉ごとで授与された可能性が想定できる。叙位に際して幕府が仲立ちしたことは『お湯殿の上の日記』には明白であ

第4表 伊東氏と京都（『日向記』より構成）

年	西暦	月日	事項（無印はすべて『日向記』による）	その他典拠	備考
天文5	1536	7.10.	祐清、家督相続		
天文6	1537	8.23.	祐清、偏諱授与（義祐と改名） 叙従四位下、「此時天盃御頂戴并女房奉書等アリ」		寛武右京亮使者 前年の禁裏御修理料献上の功として叙位を競望
天文7	1538	6.26.	偏諱授与・叙位に関する將軍御内書到着		
天文10	1541	8.14.	大膳大夫補任の執奏を決定*	『大館常興日記』	
天文10	1541	8.27.	大膳大夫補任	伊東家文書 義輝発給文書（1546～1565）では「三位入道との」	
天文15	1546	12.3.	叙従三位		
			伊東義益（虎房丸）出生		
天文17	1548	6.10.	義祐、薨聖 幕府御相伴衆となる		
天文19	1550	5～8月	義祐、上洛（將軍義晴逝去後）		
		8月	飛鳥井左衛門督殿下向	同年12月に、飛鳥井三位が豊後より上洛した記事あり（『お湯殿の上の日記』）	
天文20	1551		大仏造立（金柏寺）のため、南都仏師を招聘		
永禄3	1560	6.2.	將軍義輝・近衛晴家より使者到来*（島津との和分の件―島津家文書）	日向へは9.4.下向	
		10.4.	將軍使者伊勢貞運との折衝	旧記雑録	
永禄4	1561	8.18-19.	武家より日向伊東の上臈について打診、過分であるが武家からの要請なので勅許	お湯殿の上の日記	
永禄5	1562		義益、家督相続		
永禄9	1568	8.11.	伊勢神宮造営等の給旨*	お湯殿の上の日記	
天正5	1577	8月	義賢（義祐孫）、家督相続		
		12.8.	義祐ら日向退去*	旧記雑録	

るが、『日向記』の伊東義益の家督相続に関しては京都との交渉過程はわかっていない。いずれにせよ幕府と交渉すべき案件であって、朝廷と直接折衝する性質のものではない。

箱書にみる「天盃」は、現在のところ確たる裏付けは得られない。先述のように地方武士が天皇から盃を直接授けられた事例がほとんどないことを考えあわせても、幕府要職との折衝のなかで得たと考えるのが^v、現状ではもっとも妥当なようだ。

箱書の記述は疑わしいとひとまず結論づけたが、それでもなお16世紀の京都の土師器がもたらされたことは動かしがたい事実である。この土器はどのような価値が与えられていたのであろうか。ここで日向の土師器生産をふりかえてみると、日向はロクロ成形土師器のみが使用される地域で(靱木・永友・堀田 2006 など)、京都系土師器の出土は現在までに報告されていない。伊東氏の本拠・都於郡城跡の出土例をみると、ロクロ成形土師器は大小2法量というシンプルな構成で、出土量も少ない。これは隣接する鹿児島でも同様で、九州南部一帯はそもそも土師器をあまり使用しなかった地域なのである。土師器を使用するという生活文化の側面で、京都と九州南部は大きな隔たりがあった。

にもかかわらず、京都の土師器はもたらされていた。京都を出発し、はるばる日向まで旅をした「かわらけ」は他地域とは異なる運命をたどった。すなわち、京都系土師器生産を開始する際のモデルとして衆目にさらされて模倣されることはなく、「家宝」として、秘すべき存在へとまつりあげられたのである。京都を表象する土器は、そのかたちが再生産され、その地の消費者たちによってさまざまな使い方をされることで(いわゆる京都系土師器の生産・消費)、オリジナルとは異なるあらたな価値を生成してきたが(中井 2004)、日向では逆に、隠されることによってあらたな価値を生成していたのであった。京都系土師器が存在しない地域にもこのようなかたちで京都産土師器がもたらされ得ること、そしてまた、模倣再生産という方法が必ずしもすべてのケースで採用されるわけではなかったこと^{vi}、「ない」ことの背景についても、私たちはもう少し眼を向けてみる必要があるようだ。

【附記】

本稿でとりあげた宮崎県総合博物館所蔵の京都産土師器については、永友良典氏・堀田孝博氏のご厚意で見学させていただく機会を得た。宮崎県下の中世土師器様相については、堀田氏からもご教示いただいた。また報告時にはシンポジウム参加者のみなさまから多くのご教示をいただいた。末筆ながら記してふかく感謝申し上げる。

【引用・参考文献】

- 小高 恭 1997 『お湯殿の上の日記主要語彙索引』、岩田書院
中井淳史 2000 「武家儀礼と土師器」『史林』83-3、史学研究会
中井淳史 2002 「土器の名前—中世土師器の器名考証試論—」『日本史研究』493、日本史研究会
中井淳史 2004 「憧憬のなかの京都：うごく<モノ情報>と価値形成—日本中世の土師器における」東京国立文化財研究所編『うごくモノ』、平凡社
中井淳史 2006 「京都産土師器の編年と地方への展開」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』(第19回北陸中世考古学研究会資料集)、北陸中世考古学研究会
二木謙一 1985 『中世武家儀礼の研究』、吉川弘文館

舩木郁朗・永友良典・堀田孝博 2006「資料紹介 本館所蔵の「天盃」について」『宮崎県総合博物館
研究紀要』第27輯
宮崎県 1998『宮崎県史 通史編 中世』
宮崎県 1999『宮崎県史叢書 日向記』
森島康雄 2000a「中世末期から近世初頭の土器・陶磁器」『近世城下町の諸相 長浜町遺跡の調査成果
から』、長浜文化財シンポジウム実行委員会
森島康雄 2000b「織豊期の基準資料と暦年代の再検討—京都を中心に—」『織豊城郭』第7号、織豊期
城郭研究会

ⁱ 一族の一人、稲津重政はのち清武城主（宮崎県宮崎郡清武町）を命ぜられ、関ヶ原の戦いに呼応して東軍方として宮崎城攻撃に参加している。役後、主家に反抗して敗死した（稲津の乱）。

ⁱⁱ 豊臣政権期以降、武家との交流のなかで影響を受けて「天盃」をともなう儀礼が規式化した可能性も考えられるが、そのあたりの検証は今後の課題としたい。

ⁱⁱⁱ 女官が酌をした記事もみられる。

^{iv} 明応2（1493）年2月1日条には、はじめて参内した室町殿（足利義澄）が「天酌」を下された記事があるが、これは酌の配役なども克明に記されており、あるいは「天盃」に近いあり方であったのではないと思われる。15世紀代には「天盃」「天酌」の区別が曖昧であった可能性も考えられるが、このあたりの検証は今後の課題としたい。

^v その傍証となりそうな史料はいくつかある。たとえば奥州伊達氏の事例であるが、文明15（1483）年に伊達成宗が上洛し、細川政国らの邸宅で饗応を受けた例がある（「伊達成宗上洛日記写」）。地方武士が上洛して幕府関係者と交流することはしばしばみられる。

^{vi} 伝世された中世土師器の集成は今後の課題であるが、人づてに聞いた範囲では対馬（宗氏関連？）、七尾でものこっているという。ちなみに、対馬は中世土師器の出土例は非常に少なく、七尾では京都系土師器が生産された地域である。近世の事例として、京都の三千院があげられる。文化年間に三千院の宮僧正が宮中に参内し、天皇から「頂戴」した盃（口径14.2～14.8cmを測る京都産土師器）6枚がのこっている（京都国立博物館『社寺調査報告22（三千院・鉄舟寺）』、2001）。

はじめに

これまでに筆者は、個人研究として地主作徳米商品化過程の研究を進め、また当共同研究で集散地遺跡論の議論に参加する中で、流通史研究にとって「蔵ネットワーク」という視点が有効なのではないか、という着想を得るに至った。それは以下のようなものである。

【史料1】⁽¹⁾

新潟見当直段

一 村上御米 三拾俵五六分

是ハ郷蔵ニ五月中迄差置可申分

一 会津御米 拾壹俵五六分

是ハ御上様より御払無之商人同士商内、四月より利足付五月六月渡し

四四入

一 潟向鳥ヶ穴蔵作徳米 千俵 着三拾貳俵

此分買付候へは十日位も蔵元ニて預り置候へ共、其余ハ預り不申、横丁蔵へ引取候節ハ在方小遣・小揚・水揚賃相懸り申候

四四入

一 加茂川作徳米 千俵

着直段三拾三俵貳分

右同断

一 小口物或ハ場所不宜作徳米類 着直段三拾三俵四五分

右同断

横丁蔵ニ有之分

一 古作徳米 千六百俵

有升三斗九升より四斗之見込 勿なし

直段三拾六俵四分

右之通見込見当并当時売買相庭申上候

三月廿四日

下石

これは新潟町の廻船問屋から北前船主に向けた相場報知である。新潟町で領主蔵米と地主作徳米が同時に売られているが、3月段階で郷蔵や「蔵元」に現米が存在したまま取引がおこなわれ相場が立っていることが重要である。この段階で問屋の「横丁蔵」（後述）にあるのは古米であり、昨秋産米は取引成立後横丁蔵に送られてくることになる。こうした取引の場合、蔵の所在地が米のブランド表示としての役割を果たしていたことも、「潟向鳥ヶ穴蔵作徳米」等の記載から導き出すことが出来る。

【史料2】⁽²⁾

売預申米之事

一 作徳米四百拾六俵也 但竹ヶ華・岡屋敷両所ニ而四斗三升入二重皮船場出し

直段金拾兩ニ付四拾壹俵六分替

此代金百兩也

右之通売極、代金不残只今慥受取、米預置申处実正ニ御座候、来ル未ノ二・三兩月中米請取ニ御向被

成次第、悪米・鼠切・輕俵差替相渡可申候、勿論如何様之変事有之候共貴殿江聊迷惑不相掛、無遅滞急度相渡可申候、為後日米売預証文仍如件

文政五年十月四日

米売預主金屋村

甚蔵 (印)

請人笹岡町

新潟買主

弥七 (印)

高橋次郎八殿

これは金屋村(現阿賀野市金屋)五十嵐家の作徳米売却に伴う証文であるが、この10月時点で売られた作徳米は竹ヶ花村・岡屋敷村(現新発田市竹ヶ花・岡屋敷)にあった地主の蔵に置かれ、翌年春に引き取られて新潟町に向かう。こうした「売預」契約はこの地域の地主に一般的なものであった。

こうして米穀流通を例にしてみると、そこには領主の郷蔵・地主の蔵・廻船問屋の蔵等々が連携して全体で成立する流通の構造を見て取ることが出来る。そして年貢米・作徳米の収納と廻船の来航との間のタイムラグを、これらの蔵を連携させて経由することによって埋めているのである。このように蔵を個々ばらばらにではなく相互に連携したものとしてとらえる視点が、「蔵ネットワーク」の視点である。この視点は、蔵という具体的な流通の場に即すとともに、物資の保管という蔵の持つ本源的な性格に基づいた「時間」の要素も加えて、いわば具体的な流通の構造を空間的・時間的に明らかにすることに繋がっていくものと考えられる。

こうした「蔵ネットワーク」の検討には、従来知られているものも含めてある地域における蔵を全体的・総合的にとりあげて再検討することが求められる。本報告は、この視点に基づく研究に向けた基礎的作業の中間報告であり、そうした再検討から、どのような論点がみえてくるかを確認することを目的としている。対象とする地域は主として新潟町とその後背地である。なお今回は準備の都合から米穀流通とのかかわりにやや偏していることをお断りしておきたい。

1. 新潟町の蔵

(1) 新潟町における各種の蔵とその立地

元和2年(1617)堀直寄が新潟町に下した掟には、「本町并かた町までの内に有之蔵座敷等をこほち、新町へ引越申間敷事」という条項があり⁽³⁾、すでにこの時期町並みの中に蔵が存在したことが判明する。また寛永20年(1643)年と推定されている「村上御上米」の買い請け証文によると、この時佐渡の船持ち商人に売却された村上領の年貢米のうち100俵は「白山嶋三郎兵衛殿蔵」に、餅米30俵は「せきや多衛門殿蔵」に収納されていた⁽⁴⁾。このうち白山島に蔵を所持していた三郎兵衛は、この証文の宛所でもある新潟町人の田巻三郎兵衛であるとみられる。このように明暦元年(1655)に移転する以前の古新潟では、町のなかに蔵が存在する一方で、領主の年貢米などを収納する蔵は白山島や隣村関屋村などの周辺地域にも展開していた。

こうした状況は明暦移転以後のあり方の前提となった。長岡藩による延宝5年(1677)の新潟町宛法度には、火災の際の「関屋御蔵并白山町蔵」への駆けつけ人足の規程があり、この頃までに関屋の蔵は「御蔵」と呼ばれる長岡藩の施設と位置づけられるようになったこと、一方白山島の蔵は新潟町が移転してきた後も白山社周辺に存続し「町蔵」と称されたこと、が判明する⁽⁵⁾。この両者の詳細については、元禄10年(1697)の新潟町の概要を記した史料に以下のような記載がみられる。

【史料3】⁽⁶⁾

(前略)

- 一 長岡御米蔵 拾六軒
但三間梁長サ拾七間、外三尺之下家
やらい南北百拾九間、東西卅六間、木戸六ツ
- 一 与板御米蔵 四軒
但三間梁長サ拾八間、外三尺之下家
やらい南北百拾九間、東西卅六間、木戸式ツ
- 一 三根山御米蔵 三軒
但三間梁長サ拾六間、外三尺之下家
やらい南北百拾九間、東西卅六間、木戸壹ツ

(中略)

- 一 町蔵数 五拾壹軒
但蔵之長サ拾八間宛、横幅四間半宛
外ニ前蔵式拾軒

(後略)

ここではそれぞれの所在地が記されていないが、延宝期の「関屋御蔵并白山町蔵」と合わせて考えれば、長岡藩とその分領⁽⁷⁾の「御米蔵」は関屋村に、「町蔵」は白山社の周辺に存在したとみてよいだろう。「御米蔵」が計23棟、「町蔵」は51棟もあり、それぞれは16～18間の長さがある長大なものであった。これは、町屋敷の内部に店とともに設けられる蔵とは性格が異なるものであることをも示している。

幕末期の町会所の日記に写し込まれた宝永7年(1710)の記録では、「関屋村蔵」14、「白山蔵」53、「島蔵」14という数がみられる⁽⁸⁾。藩の御蔵が数を減じている一方で、白山蔵が増え、さらにあらたに「島蔵」が加わっている。これは後世の史料の次のような記載とあわせて理解することが出来る。

【史料4】⁽⁹⁾

一 蔵番人

是者白山前船入川兩岸ニ有之候蔵々、昼夜共見廻り番方仕候者共ニ御座候、蔵者何れも町方之者所持仕居候、尤川向ひ白山境内之方を島蔵と唱、川手前地続之方を浜蔵と唱来候、右島蔵・浜蔵共古来より本番壱人、加番壱人宛差置申候、何れも神明町帳入之者ニ御座候得共、島蔵本番人者右島先大川端ニ居宅仕、浜蔵本番人者右蔵端往来脇ニ居宅仕候、加番人何れも神明町居懸ニ罷在も本番人ニ差添相勤申候、右蔵々者御城米始諸家様并領主津出し米等時々出入有之候ニ付、番人共者不断一刀を為帶、都而町小役之者同様取扱、且領主江申達し双方共本番人居宅前ニ三ツ道具相建、警固為致置申候、本番人居宅諸普請始給分并加番人給分共町会所ニ而取調、蔵所持之者より取集候仕来ニ御座候

白山社の前の船入川(白山堀)を境にして、白山社境内の側を「島蔵」、対岸の新潟町と地続きになっている方を「浜蔵」と呼んだという。このうち「島蔵」は共通しているので、宝永期の記録における「白山蔵」は後世の「浜蔵」に相当するとみて良いだろう。そして【史料4】と対比すると、元禄期の「町蔵」51棟が宝永期までに2棟増えて「白山蔵」53棟となり、さらにあらたに「島蔵」12棟がこの間に建設されたとみることが出来る。このことは、延宝8年(1680)の「沼垂新潟立会絵図」⁽¹⁰⁾で、「新潟町蔵」は白山社の対岸のみに描かれていることから、裏付けることが出来る。

しかし一方で天和2年(1682)に寄居村の田地1113歩が「町蔵地」として新潟町に渡されたとの記録があり、これは貞享元年(1684)に拡張されて後の浜蔵の基礎となったとされる⁽¹¹⁾。さらに年末

詳であるが、島蔵の位置に「町蔵」が描かれている一方で、後の浜蔵の位置には如来寺が描かれている絵図も現存している⁽¹²⁾。これらからは、まず島蔵のみが存在し、如来寺の移転後天和から貞享にかけて浜蔵が新規に建設されたともみることが出来、先の史料から導き出した経緯とは齟齬を来すのである。

こうした諸史料をいかに整合的に理解するかは今後の課題となろう。いずれにせよ明暦移転以後一貫して「町蔵」や「白山蔵」と表現されることも多いこの蔵であるが、17世紀末頃のある時期以後は白山堀を挟んだふたつのまとまりで立地していたのである。なおこのうちの浜蔵は、後述する関屋御蔵移転時の史料で「新潟横町浜蔵」と表現される他、これを「横町蔵」と記した絵図も存在することから⁽¹³⁾、横町蔵とも称されたことが判明する。史料1の「横丁蔵」とはこの浜蔵のことであった。

こうして新潟町とその周辺には性格の異なるいくつかの種類の蔵が成立した。しかしこれらの蔵はそれぞれ独立していたのではない。先にみた宝永期の記録には、「陸持賃大俵・小俵共ニ町蔵よりハ老俵ニ付八文、関屋蔵よりハ拾文、町之内ハ隣より隣ニ而もまたハ程遠く候ても老俵ニ付七文」との記載がある。これは町蔵（白山蔵）や関屋御蔵から新潟町に向けて俵を運搬する際の運賃の取りきめである。また年不詳の史料であるが、「白山町蔵より関屋御蔵迄御米積登セ」の際のひらた船の賃銭を取り決めたものがある⁽¹⁴⁾。これは「御買返シ」すなわち一旦藩から払い下げられた米を藩が再び買い戻すにあたっての移動である。このようにこれらの蔵の内容物は、個々の売買に伴って相互の間を移動しうるものであった。

また正徳6年（1716）、新潟町の町人田巻定右衛門が米沢藩の米宿任命を願った願書には、「拙者義町蔵、三間ばり長サ式拾間ノ蔵、前蔵共ニ白山ニ五ツ所持仕候、其外内蔵式ツ所持仕候、旁御用向無滞相勤可申候」との記載がある⁽¹²⁾。白山に所持している蔵と区別される「内蔵」とは、町屋敷内に所持する蔵であるとみてよい。先にみたように、白山蔵は関屋御蔵と類似した規模の蔵であったが、これを所持していたのは町人であり、「町蔵」と呼ばれたのもその故からであろうと思われる。そうして個々の有力町人はこうした白山の町蔵と屋敷内の内蔵とを同時に所持し、使い分けていたと思われるのである。

（2）蔵の諸機能と蔵に関わる人びと

新潟町の上知にあたって長岡藩領時代の仕来りを書き上げた史料に、以下のような記載がある。

【史料5】⁽¹⁵⁾

一 例年十月より諸大名収納米・百姓作徳米共最寄新潟江川下ヶいたし、白山蔵江入置、十一月ニ至り諸国船方翌春壺番船荷当テ買米ニ参り候頃、入札払ニ相成り候

白山蔵には年貢米も地主作徳米もともに収納されること、10月頃に川下げが開始されて蔵に入り、11月に入札払いされるが、これは「翌春壺番船荷当テ」であって、廻船が運航を休止する冬期の間は蔵入れされたままであることなどが判明する。一方で同時期の別史料には、「白山前船入堀者御城米始諸家様共早春より当所蔵々江御川下米被遊候故、雪不足之年者正月中より取懸り、御差支ニ不相成様浚方仕候」⁽¹⁶⁾とあり、冬期に郷蔵等に収納されていた年貢米が春になって川下げされてくることもあった。このように川下げは条件に応じて様々な時期に行われたが、これを支えたのは蔵の連携であったことにも注目しておきたい。

享保7年（1722）の湊定法における「蔵舗」規程からは、当時どのようなものがどのような経緯で蔵入りしたかが判明する。

【史料6】⁽¹⁷⁾

蔵舗

- 一 俵物致蔵入候ハ、百俵ニ付壹俵宛蔵鋪取可申候、但年を越候ハ、縦一日たりとも百俵ニ付式俵宛之事
- 一 在々より下り候俵物、旅人其節不相払致蔵入候ハ、百俵ニ付壹俵宛、年を越候ハ、百俵ニ付式俵宛之事
- 一 旅人他所にて買候俵物当所江積下し、旅人依勝手致蔵入候ハ、百俵ニ付壹俵宛、年を越候ハ、百俵ニ付式俵宛之事
- 一 茶・水油・たはこ・金引・白苧、其外固荷致蔵入候ハ、壹固ニ付銀三分宛取可申候、縦他所より積来候固荷積移ニ仕候共、銀三分宛取可申候、但所にて買候を直ニ船積仕候分ハ蔵敷取申間敷候、当所買にても蔵又ハ他門江入候ハ、右之蔵敷取可申事
- 一 運賃米致蔵入候ハ、百俵ニ付壹俵宛取可申候、直ニ船江積申候ハ、取申間敷事
- 一 廻船積来候西塩・能登塩致蔵入候ハ、百俵ニ付壹俵宛取可申候、縦一日にても年を越候ハ、右壹俵之外又壹俵宛年々取可申事
- 一 鉄類壹束ニ付銀三分宛取可申候、年を越候ハ、年々銀三分宛増候而取可申候、鋸固も同前之事
- 一 畳拾畳ニ付銀七分宛取可申候、御座上ハ式束結、中・下ハ三束結壹固ニ付銀壹分五厘宛、縁取ハ拾枚入壹固ニ付銀壹分五厘宛、年を越申候ハ、年々増候而取可申事
- 一 囲船之積俵物致蔵入候ハ、百俵ニ付式俵宛取可申候、并船道具蔵敷として船頭・水主共ニ拾人乗ニ付銀貳拾目宛取可申事
- 一 他所より積荷にて参候塩、蔵揚之分者勿論、縦積移にて他所江遣し候とも、百俵ニ付壹俵宛取可申事
- 一 松前物致蔵入候而所にて不相払、旅人依勝手他所江積参候ハ、百束ニ付式束宛取可申候、年を越候ハ、又壹束増候而取可申事
- 一 洲崎干鰯、蔵敷壹俵ニ付銀六厘宛取可申事
- 一 繰綿拾貳貫目入銀四分宛、六貫目入銀貳分宛之事
- 一 春夏秋冬旅人買置候蔵物・町俵物共ニ、其宿々蔵江請取候ハ、縦一日にても百俵ニ付壹俵宛取可申事
- 一 木綿・古手・紙壹固ニ付三分宛口錢之外ニ取可申事

冒頭の「俵物」を初めとして実に多様なものが蔵に入っていることが判明する。このうち「洲崎干鰯」は新潟町の産物であるが、他はすべて他所からもたらされ新潟町で売買ないし積み替えがなされる品である。これらは「在々より下り候俵物、旅人其節不相払致蔵入候」との記載から伺えるように、必ずしも新潟町の商人が買い取ったものばかりではなく、旅人（他所の商人）が荷主として所有権を保持したまま新潟町の蔵に預けられる場合も多い。松前物の積み替えの例にみられるように、これらは新潟町が当時既に広範な地域を繋ぐ中継の拠点として機能していたことを示しており、多様な関係の束の中に蔵が存在していたことを見て取ることが出来る。なお、塩や鉄類などで「年々」の増し蔵敷に言及されていることから、これらの蔵に相当の長期間預けられる場合も想定されていることをうかがうことが出来る。また、固荷について「蔵又ハ他門」との記載があることから、蔵の類似施設としての他門との関係とその機能の異同が、解明すべき論点のひとつとして浮かび上がる。

こうした蔵敷は当然蔵を所持する町人の収入となるが、この他にも蔵に関わる多様な人びとが新潟町には存在した。まずその第一にあげられるのが小揚である。かれらは荷の蔵への出し入れを初め、船への積み卸し、町内の運搬など荷扱い全般を行う存在であり、年貢米を扱うことから諸種の特権も持っていたが、彼らが扱う物は年貢米に限らず、新潟町に出入りするあらゆる物資に及んだ。享保4

年（1719）にこうした小揚の諸賃金を公定した史料には次のような記載がある。

【史料7】⁽¹⁸⁾

（前略）

- 一 白山蔵前ニ而上下江米・大豆・穀物陸持致候節者、壹俵ニ付八文ツヽ之事
但島蔵之内も右同前之事
- 一 俵物穀類白山蔵江町中より大川前川口ニ而船ニ積候迄之陸持賃八文ツヽ之事
但浜蔵・島蔵往来陸持賃同断之事

（中略）

- 一 粉こんにやく并くしがき・かち栗・かやのミ・きんなん・しらしめ油・かなひき
但此分町并横町蔵揚共ニ、壹固ニ付四文ツヽ事

（後略）

一条目は浜蔵あるいは島蔵の敷地内で、ひとつの蔵から別の蔵へ荷を移す際の「陸持」賃金の規程とみられる、二条目の内容が何を示しているのか分かりづらいが⁽¹⁹⁾、但し書きは浜蔵・島蔵間での移動に際しての賃金である。また三条目は、穀物類のみならずこうした乾物類なども「横町蔵」＝白山蔵に入れられることを示している。先にみた史料6の蔵敷規程では、これらの物資を入れる蔵がどこの蔵であるかが不分明であったが、直接荷を扱う小揚げに関わる史料からは、こうした具体的な荷の動きを復元することが可能になる。なお省略した条項からは史料6と同様の多様な荷が扱われていることも判明する。

その他白山堀兩岸の浜蔵・島蔵にはそれぞれ本番人1人・加番人1人の計4人の蔵番人が居たことが、先にあげた史料4の記載から判明する。これらの番人の給分は蔵を所持する町人から集められ町会所を介して支給された。

日常的に白山蔵はこれら蔵番人と小揚たちの世界であったと考えられる。天保期の新潟の年中行事の書き上げに、正月11日に「蔵開と唱、町方ニ而横町蔵所持仕候者、銘々持蔵江神酒を備へ、下り酒を給合候仕来ニ御座候」との記載があるが⁽²⁰⁾、手代等は別として、白山蔵を所持しているような上層町人の当主が足を運ぶのはこのような儀礼の際に限られたのではないか。

さらに新潟町での米穀等の売買に課された仲（すあい）金の徴収に関わって、次のような記載が存在する。

【史料8】⁽²¹⁾

（前略）

- 一 廻船宿穀物ハ、蔵入之節両仲取立候事
但廻船宿ハ蔵入積出し之節直ニ取立候ニ付、両仲と唱申候事

（中略）

- 一 在宿中買其外とも蔵入米致し候節ハ仲金取立不申、売買相立候節双方より仲取立候付、売立仲と唱申候、尤蔵入之節仲取立不申候ニ付、毎年十一月中売残之分残穀調致し、右残穀之分片仲取立候事

（中略）

蔵揚之品切手之事

- 一 当所廻船宿其外商人共、白山堀囲蔵江積入候節ハ、右改番所より切手江見届ノ印致し、留り御番所へ留置候事

（後略）

ここでは仲金の取立のタイミングが、売買当事者が廻船宿（株仲間解散期における廻船問屋の呼称）か在宿や仲買かによって異なっており、特に前者においてはそのタイミングが蔵入れのタイミングと連動していたことが示されている。こうした蔵入と仲金徴収との連動のため、白山蔵への物資移送は仲番所によって掌握されるべきものであった。蔵は仲役所役人ともこのようにして関わっていたのであり、また業態による売買と蔵との関わり方の差違という点でもひとつの論点を提供する事例である。

（３）土蔵と板蔵

天保期の「抜け荷」事件に関わって作成された探索書の中に、次のような一節がある。

【史料９】⁽²²⁾

（前略）多門町と申者信濃川より新潟町江堀割候川、御菜堀と唱へ候を前ニいたし、毎物便利宜敷、諸荷物問屋共此処ニ住居致し、川並土蔵相續キ、御府内ニ而者小網町河岸同様ニ相見江、其内高橋屋健蔵住居者間口拾間余、奥行壱町程も有之、河岸通りに間口五間長拾五間程之土蔵五棟有之、（後略）

多門町（他門町）は大川前通の別名であり、御菜堀の記載からその下流部とみられるが、この地域には土蔵が建ち並んでいたといい、特に高橋屋健蔵がこの地域に建てていた５棟の土蔵は間口５間に長さ１５間程と、１８世紀段階の白山蔵に匹敵する規模であった。しかしながら一方で白山蔵は、明治初年に写された写真をみても茅葺きないし板葺きの板蔵が主体であったように思われる⁽²³⁾。

明治２１年（１８８８）に早川清作が著した「星霜雜記」には、祖父の記録に「明和七寅年（１７７０）四月廿九日夜、大川前通下一之町小島屋権兵衛〔碇屋小路より上江式軒目〕板蔵より出火」した旨が記されているとあり⁽²⁴⁾、１８世紀後期には大川前通にも土蔵ばかりが並んでいたわけではないことが伺える。一方でほぼ同時期にあたる明和５年（１７６８）のいわゆる新潟明和騒動の記録には、騒動勢が「町検断長野六郎右衛門・池文右衛門式軒、家財土蔵不残打破」、「検断長野六郎右衛門土蔵ニ、諸道具之外長持式拾七棹、其内式棹ニハ羅紗之覆懸有之、不残微塵ニ致候」との記載がある⁽²⁵⁾。家財と並べて記載されている土蔵はおそらく町屋敷に建てられていたものであろう。諸道具や長持を入れた土蔵がこの時期にも町中には存在したのである。

このような打ち壊しの記録では次のような史料も注目される。

【史料１０】⁽²⁶⁾

○ 当十月廿九日新潟ニて打壊名前

（中略）

七番	同町（十七軒町）
一 家財土蔵書物	高橋治郎八
道具 質証文帳面	若衆五六人怪我
八番	同町
一 右同断道具不残	高橋次郎左衛門
古米六万七千俵	
新米七万八千俵	是ハ不残前之川江打込
九番	同町
一 右同断	阿部弥兵衛
朱廿五櫃町中へ蒔散ス	
親類三軒不残打破ス	
十番	同町
一 右同断	同出店二ヶ所

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 十一番 | 神明町 |
| 一 醤油店 油店 | 油屋忠左衛門 |
| 錫店土蔵不残 | |
| (中略) | |
| 十四番 | 本二ノ町 |
| 一 小道具 諸道具 | 小塩屋忠吉 |
| 土蔵家財不残 | |
| 十五番 | 本三ノ町 |
| 一 諸道具家蔵不残 | 町見談 ^{ケンダン} 高田與十郎 |
| 十六番 | 本三ノ町 |
| 一 蔵家財道具不残 | 三条や市十郎 |
| 十七番 | 本三ノ町 |
| 一 右同断 | 同出店 |
| 十八番 | |
| 一 右同断 | 三国屋 |
| 十九番 | |
| 一 右同断 | 七九屋 |
| (後略) | |

これは文政13年(1830)の打ち壊しに際しての記録から蔵を壊された者を抄出したものであるが、大川前通の十七軒町、古町通の神明町、本町通の二ノ町には土蔵が存在したことが判明する。これらの土蔵には道具と共に商品とみられる米や朱も収納されていた。なおこのとき膨大な米を川に投げ込まれた高橋次郎左衛門は、史料9の高橋屋健蔵と同家と思われる。

こうして板蔵が卓越した白山蔵地域の一方で、町中の町屋敷には土蔵が目立つようになっていったと思われる。ただし白山蔵地域にも土蔵は存在した。安政4年(1856)に凶作時の窮民救助の備えとして囲碁を行う蔵が白山堀際に建てられたが、この蔵は「長式拾間横五間、五戸前壺棟之囲蔵三棟、長式拾三間横五間、三戸前之囲蔵壺棟、合四棟、四方漆喰塗瓦屋根ニ仕立、孰も保方専務ニ皆出来いたし候」ものであった⁽²⁷⁾。この蔵が土蔵として造られたのは、「保方専務」という語に表現されているように、長期保存を目的とした囲碁蔵の性格によるものと判断できる。これは逆にみれば、基本的に中短期の保管を主眼とした一般の白山蔵は板蔵で充分ということでもある。さらにこれを町中の町屋敷の蔵に及ぼしてみると、短期的に出入りする商品のみならず、長く保管する道具類をも入れる蔵は土蔵であることが志向されたとみることにも出来る。また、町中に住居と隣接して存在する蔵と、町はずれに集中して立地する蔵とでは、火災リスクもまた異なるであろう。さらにこの囲碁蔵の建設費は、嘉永の凶作に際して窮民救助の原資とするため一時的に米の売買に課した「増掛」銭の残金を、白山蔵の穀物を担保として6年間運用してようやく得たものであったが、このように土蔵の建設費用が嵩むこともまた、保管期間や火災リスクとの勘案で土蔵と板蔵とがそれぞれ選択される要因となったであろう。

こうして幕末期の新潟町には、大川前通など町中に並ぶ土蔵と、白山堀兩岸の板蔵という特徴有る景観が広がっていたと考えられるのである⁽²⁸⁾。

2. 関屋蔵所

先に触れたように、新潟町の隣村関屋村には、新潟での米穀売買や積み替えに関わる蔵が遅くとも寛永期以降立地していた。寛永期の蔵は新潟町人ないし関屋村百姓の所持で村上藩の年貢米が収納されていた。先にみた年不詳の絵図にも関屋村付近に「村上蔵屋敷」がみえる。一方で延宝5年(1677)の新潟町宛法度にみられる「関屋御蔵」は長岡藩が示した法度である以上長岡藩の蔵であることは確実であり、元禄期の史料でも長岡藩とその分領の蔵だけが記されていた。こうした17世紀における変遷の詳細は、さらに検討を加える必要があるだろう。

延享4年(1747)のものと推定されている関屋村百姓の書き上げに、「御蔵儀、宝永七寅の秋、新屋敷へ御引被遊、御蔵七つ立申候、夫より年々相立、只今拾四御座候」との記載がある⁽²⁹⁾。関屋村の御蔵は宝永7年(1710)に村内で移転していた。年末詳の関屋村絵図で、川の中に「古御蔵屋敷」の文字がみられることから⁽³⁰⁾、この移転は信濃川による川欠けを契機としたものとみることが出来る。

天明6年(1786)、後述する関屋御蔵の新潟移転に伴って書き上げられたと思われる史料に、次のようなものがある。

【史料11】⁽³¹⁾

御蔵御米取扱之事

- 一 大坂御廻米壹俵ニ付五文宛ニ而、当所ニ而相勤申候
- 一 御大豆壹俵ニ付六文ツヽニ而、当所ニ而相勤申候
- 一 御払米壹俵ニ付六文ツヽニ而、当所ニ而相勤申候
- 一 御下シ米水揚げかせへ人足、当所ニ而相勤申候
- 一 御下シ米御蔵入かせへ人足、当所ニ而相勤申候
- 一 御払米新潟町人買候て横丁蔵へ取候節者、小揚方取扱壹俵ニ付拾貳文ツヽ
- 一 御払米新潟町人買候て当所御蔵借り請、蔵返いたし候節ハ小揚方ニ而取扱、右御米旅人舟積之節ハ当所ニ而取扱申候

右之通関屋村ニ而取扱来申候、尤右訳合も有之候ハヽ可申上旨被仰聞候得共、別段訳と申も無御座、御蔵所当村ニ御建被遊候故、則当村ニ而取扱来候義ニ御座候、以上

関屋村庄屋

天明六年午七月十日

岩太郎(印)

同断

羽右衛門(印)

大井弥五右衛門殿

高見定左衛門殿

年貢米の川下げ、払い米、廻米のそれぞれのタイミングでの蔵出し入れ等が基本的に関屋村の人足によって勤められていたこと、川下げの際の水揚げ・蔵入れは無賃勤めであるのに対し、廻米や払い米の際の蔵出し等は賃銭を得ていたとみられること、新潟町の町人が払い米を買い受けて横丁蔵(白山蔵)に移動する際や、新潟町人が買い受けた米を再び関屋蔵に運び入れる際などの移動には、新潟町の小揚が携わること、などが判明する。とくに最後の点は、払い米を契機として生じる白山蔵と関屋蔵の相互の関係のあり方を示すものとして注目されよう。

この関屋蔵所は、18世紀後期になると次第に砂に埋まりがちになり、年々の砂防や舟入堀浚いの入用が長岡藩領村々の大きな負担となっていたため、村々から移転の出願がなされた⁽³²⁾。これをう

けて藩は当初信濃川のいくつかの島を対象に検分を行ったが、適地を見いだすことが出来なかった。これに対し新潟町の津軽屋（高橋）次郎左衛門が、天明5年（1785）10月、「新潟横町浜蔵裏通ニ有之候蔵々買取、右之場所へ蔵相建指出申度候」との出願を行った。「裏通」としたのは白山堀に沿った表通りでは買取の金額が高く付くからとの理由であった。また買い取った蔵を利用するのではなくそれらの蔵は潰してあらたに土蔵を建てる計画であった。それまでの関屋御蔵は萱屋根であったが、土蔵土屋根とする理由は「火之元諸用心」のために加えて「更米輕俵等」が減り「御郡中御益筋ニ相成」というものであった。そしてこの買取・建築と以後の修復等の一切を次郎左衛門が引き受けるかわりに、年々金120両を下されたい、というものであった。

この出願に対し、それまで関屋御蔵の管理に携わってきた領内七組割元衆との間で、実際に建設する土蔵の規模や年々の出金額をめぐる何度もの掛け合いが繰り返された。結局5間四方を1戸前として5棟15戸前分の土蔵を建設することとし、年々の金額も含めて最終的に証文が取り交わされたのは、天明8年12月のことであった。この証文によれば、長岡領内七組村々の負担で次郎左衛門に渡される金高は年々100両とし、このほか一度限りの普請与内として金200両と関屋御蔵一式（蔵の廃材か）、さらに藩から20両の下し金、郡中七組から100両無利子10年賦の貸し金も渡されること、蔵番人は郡中村々から付けることとし、蔵番給も郡中で負担すること、牧野家の紋が入った小旗・桃燈などが渡されること、次郎左衛門はこの蔵を他に譲ったり借金の担保にしたりしてはならないこと、などが取り決められた。

こうして関屋御蔵は白山浜蔵の地に移転し、この後は「新潟御蔵」等と称されるようになる。ただし土蔵作りというその構造からみても、郡中村々に蔵番が雇用されるという点からみても、他の「町蔵」とは異質な空間であった。

3. 各地の蔵所

ここまで新潟町とその隣接地域の蔵をみてきたが、これに対し内陸部村々にも年貢収納に関わる蔵が存在した。長岡藩領巻・曾根両組の割元等の勤め方を示した史料に、次のような記載がみられる。

【史料12】⁽³³⁾

（前略）

- 一 巻御蔵ハ栗津・吉田・佐渡山・漆山・巻五ヶ組、曾根御蔵ハゆり上・曾根・中野小屋、坂井四ヶ組、壱組割元壱人充代々組支配仕、支配村々用向其組割元限ニ而取計、外組用ニ外割元相拘り不申候、惣郷へ掛り候用向初メ、不時之義ニ而内談ハ格別之儀と奉存候、随分入念取計村々庄屋役人可成丈割元迄ニ而御蔵元江不罷出、御苦労ニ罷成不申様仕候
- 一 新潟御蔵所一卷之儀、外組々打合取扱仕候事
- 一 御収納米大豆ハ、巻ハ六ヶ所、曾根五ヶ所ニ御蔵有之、一ヶ蔵ニ御蔵掛両三人ツ、被仰付、割元・御蔵掛立会入念ニ吟味上相納申候

（中略）

- 一 蔵掛取扱之事

此段前条申上候通、両組御蔵掛両三人充被仰付置、割元江差添御収納米大豆并俵拵等迄入念吟味仕候上相納、新潟御蔵所江積下し申候、其上御蔵破損修復等之儀も御蔵掛無油断見計、右入用之儀ハ御蔵組村々相寄高割ニ仕候事

長岡藩領の広域行政組織は、代官が管轄する巻組・曾根組などの大きな括りの組と、その下で割元が管轄する小さな括りの組との二重構造になっていたが、「巻御蔵」「曾根御蔵」「巻ハ六ヶ所、曾

根五ヶ所ニ御蔵有之」の記載から伺えるように、いずれも蔵の所在と密接に関係していた。ここで割元管轄の組が巻組で5組、曾根組で4組となり蔵の数と異なるが、これは割元居村にはすべて蔵があるほか、他の史料から判断すると巻組では米納津村（現燕市米納津）、曾根組では横戸村（現新潟市西蒲区横戸）にも蔵があったことによるものである。そしてこれらの蔵に年貢米等を納める村々は「御蔵組」と呼ばれ、割元と「御蔵掛」庄屋が収納・川下げや蔵の維持管理を監督した。



代官管轄の組は長岡藩領全体で7組あり、その全体が「郡中」と呼ばれたが、「新潟御蔵所一卷之儀、外組々打合取扱仕候事」とあるように、先に触れた新潟御蔵の管理は郡中全体でおこなうこととなっていた。しかし一方で、文久2年（1862）に長岡藩領から上知された関屋村で長岡領時代の慣行

を書き上げた史料によれば、新潟蔵所の蔵番給となる米 60 俵は、半分の 30 俵を巻組・曾根組が 15 俵ずつ分担して 11 月中に川下げし、のこり 30 俵を他の 5 組で割り合って翌年 3 月・4 月に川下げすることになっていた⁽³⁴⁾。これは、新潟御蔵に収納される年貢米が主として巻・曾根両組のものであったことを反映したものとみることができよう。

この関屋村の書き上げには次のような記載もある。

【史料 1 3】

- 一 年貢米金取立方者、正米ニ而相納候分ハ十一月頃坂井蔵所へ相納置、年内より翌春江掛り都合次第新潟湊江差下し、入札払ニ致し、石代金ニ申付候分者十二月中旬迄ニ直段大図りを以内金取立、翌年六月精勘定之上残金取立申候
- 一 運賃之儀、年貢正米納ニ相成候分新潟湊まで積下、地下受ニ而運賃米差出申候
- 一 欠米枿減弁米之儀、右新潟蔵所江積下シ置候米売払之節欠米枿減等有之候得者、翌年六月迄ハ地下ニ而弁米いたし、七月より者領主損失ニいたし来候、此段御心得迄ニ申送り候

関屋村は坂井村（現新潟市西区坂井）の組に所属しており、この組では年貢米は 11 月に坂井蔵所に収納し、その後翌春にかけて新潟町へ川下げして入札払いすることとなっていた。また、払い米となるまでの新潟御蔵での収納期間によって、欠米等の弁納を村方がおこなうか領主がおこなうかの区別が定められていた。こうした慣行は、より上流の中野小屋村（現新潟市西区中野小屋）でも全く同様であった⁽³⁵⁾。なお、新潟町に隣接した関屋村から一度坂井村の蔵所に納入してからまた新潟町に川下げするのは不合理であるが、こうしたことを考慮してか、最下流部の関屋村と青山村・平島村（現新潟市西区青山新町・同平島）では皆金納の定めであった。

こうして長岡藩領では、広域行政組織とも結びつきながら各所に散らばる蔵所と新潟御蔵（おそらく天明以前は関屋御蔵）とが連携しつつ、年貢の収納・川下げから払い米に至る一連の過程が秩序立てられていた。一方で同じ地域でも他領ではまた異なるあり方が存在した。例えば享保 2 年（1717）の村上藩領亀貝村（現新潟市西区亀貝）の明細帳には、以下のような記載がある。

【史料 1 4】⁽³⁶⁾

- 一 郷蔵 四つ
但、黒鳥村・北場村郷蔵貳つ、亀貝村・小新村ニ而郷蔵壹つ、計蔵壹つ、津出川ハ西川と申候、則河端土手内ニ郷蔵御座候、亀貝村より新潟町へ貳里御座候
- 一 新潟御蔵敷米之儀、千俵ニ付七俵宛之積りを以、代金ニ而上納仕来申候
- 一 河下ヶ津出之義、八十八夜過候而下シ初申候
- 一 津出運賃之儀ハ壹俵ニ付四合宛被下置候

村と蔵の数の解釈がやや困難だが、隣接する村々にそれぞれ郷蔵が存在すること、「津出川」とあわせての記載から、この郷蔵は年貢収納がおこなわれる場として位置づけられていること、などは明らかである。年代の違いもあり単純な比較は出来ないが、こうした濃密な郷蔵の分布は先にみた長岡藩領にはみられなかった特徴である。このような特徴は、例えば隣接する木戸新田村と北山新田村（現新潟市西区木山・同東山）に郷蔵が存在する幕府領の例からもうかがうことができる⁽³⁷⁾。なお「郷蔵」という呼称自体長岡領では管見の限りみられない。一方で村上領や幕府領では郷蔵呼称が幕末にかけて普通にみられる。こうした呼称と機能の違いも今後深めていく論点となろう。

また川下げを冬期におこなわず、八十八夜過ぎというかなり遅い時期になってはじめるという記載も興味深い。幕末期の史料 1 でも 3 月の時点で村上領の年貢米は郷蔵に存在し、さらに 5 月までの保管が可能であった。村々に濃密に展開する村上領の郷蔵はやや長期に年貢米を保管しておく能力を有

していた可能性がある⁽³⁸⁾。

新発田領から幕府領となった割野村（現新潟市江南区割野）組村々では、享保16年（1731）に囲籾を実施するにあたり、あらたに「組元」に「置籾郷蔵」を建てるか、これまでの郷蔵に籾も蓄えることが可能かと尋ねられたことに対し、これまでの村々の郷蔵で対応できるしその方が便宜であると返答した⁽³⁹⁾。「村々郷蔵ニ詰置」という表現からは、先にみた村上領と同様の濃密な郷蔵の展開が予想されよう。

一方で同じ新発田領でも次の史料はまた異なったあり方をうかがわせる。

【史料15】⁽⁴⁰⁾

奉差上御収納米日割御請書之事

- 一 五百五拾六俵三斗 外籾六俵 女池新田
- 一 三百五拾壹俵 外籾四俵 鳥屋野村
- 一 三拾六俵 藤巻新田
- 一 八拾七俵 外籾壹俵 網川原新田
- 一 八拾四俵 外籾壹俵 親松新田
- 一 五拾俵貳斗 外籾貳斗 小針木新田
- 〆千百六拾五俵 当川下ヶ高
- 外三石五斗 籾代米
- 内貳拾四俵 御永続金御利足米
- 貳百八拾六俵 買納
- 残而八百五拾五俵 正納
- 右之内
- 一 百八拾俵 十一月三日船積
但女池新田潟前水門口江宿船壹艘着船奉願候
- 一 百俵 十一月五日船積
但女池新田潟前水門口江◇壹艘着船奉願候
- 一 百五拾七俵 十一月七日船積
但鳥屋野村潟前水門口江宿船壹艘着船奉願候
- 一 百三拾七俵内〔九拾六俵女池、四拾壹俵小針木〕 十一月八日船積
但女池新田潟前水門口江大◇壹艘着船奉願候
- 一 百五拾五俵内〔七十六俵親松新田、七十九俵網川原新田〕 十一月九日船積
但鳥屋野村潟前水門口江大◇壹艘着船奉願候
- 一 百貳拾六俵 十一月十日船積
但鳥屋野村水門口江宿船壹艘着船奉願候
- 右之通御収納米川下ヶ日割之通積請、着船次第前書之通俵数無間違急度積申御皆済可仕候、以上
- 弘化四未十月廿五日 女池新田年番
- 権兵衛
- (他十二名略)
- 大庄屋所

(◇=舟+帶)

女池新田（現新潟市中央区女池）等6か村が組になっての川下げであるが、これらの川下げは「女

池新田潟前水門口」と「鳥屋野村潟前水門口」の二か所にひらた船等が着船して行われた。これらの場所に蔵が存在した可能性もあるが、少なくともこの史料から蔵の存在はみえてこない。仮に蔵が存在しないとすれば、11月まで年貢米はどのように保管されているかが問題となろう。

このように、各藩領によって蔵の存在形態も異なり、それは当然ながら収納や川下げのあり方とも連動していた。川下げ後に新潟あるいは沼垂でどのような蔵に納められるかも関係して来るであろう。時期の違いや同藩領でも地域の違いがあることにも着目しながら、こうした差違とその条件を具体的に明らかにしていくことは、今後の大きな課題である。なお、本報告では触れられなかったが、これらの川下げに関わった蒲原船道・沼垂船統などの舟運組織との関係もまた、重要な要素であることは言うまでもない。

4. 地主の蔵

水原町（現阿賀野市中央町等）の大地主市島家の文書中に次のようなものがある。

【史料16】⁽⁴¹⁾

一 本店棚卸二者左之通、蔵々作徳米・大豆・大麦代野直銭、質地作徳代息ニ相成様可致候

第一番	加山蔵
第二番	天王蔵
第三番	内 蔵
第四番	大月興野蔵
第五番	高森蔵
第六番	江端蔵
第七番	里飯野新田蔵
第八番	福永蔵
第九番	毛無蔵
第十番	黒瀬・法柳蔵

ズ

米払方心得

- 一 加山蔵者米性宜、升入も宜望人多く候得共、是者蔵所用必至而宜候間、翌年迄一切払不申、四月より売払土用後迄千俵位残し置、要害ニ可致候
- 一 天王蔵ハ正月より三月までニ払、春売場所ニ可致候
- 一 内蔵ハ冬中酒米ニ不残払可申候
- 一 大月興野蔵者春売ニ可致候、年柄ニ寄相庭相計ヘ夏売ニも可致候
- 一 高森蔵、冬中酒米又者春売ニ可致候
- 一 江端蔵右同断
- 一 里飯野新田蔵者春売ニ可致候年柄ニ寄相庭相計ヘ夏売ニも可致候
- 一 福永蔵、冬中酒米又者春売ニ可致候
- 一 毛無蔵者春中払可申候
- 一 黒瀬・法柳蔵者冬売可致候、小作人年々金納ニ望申候

右之通売方相守可申候、春夏売米者若飢饉之節安売施行等之備故、此末右春夏売場之米冬売ニ致間敷候

但除地懸り場所売米者、上川筋者冬売宜、下川筋者夏売宜候、横越嶋・福嶋潟・会津御米も冬売宜

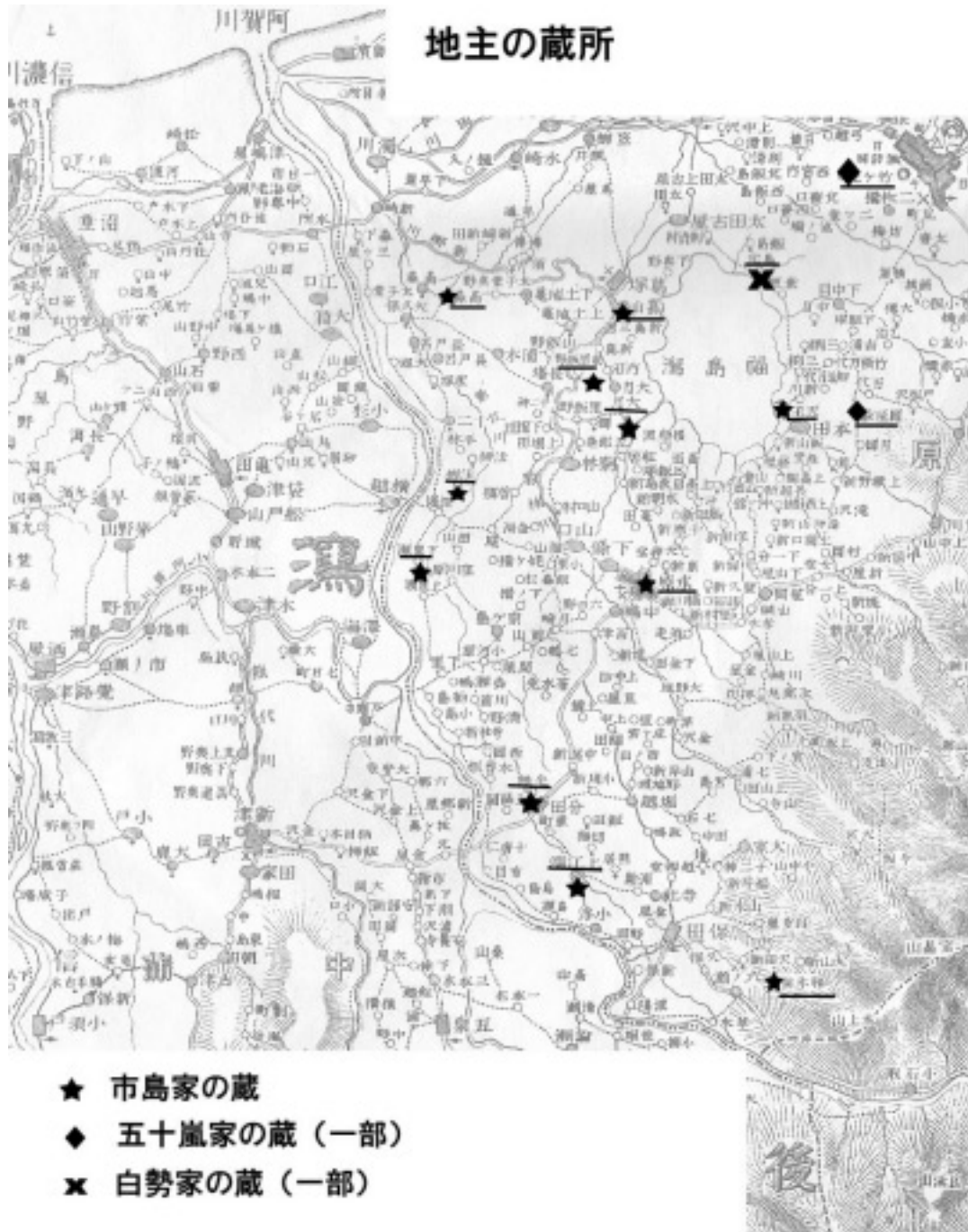
敷候、年柄ニ寄福島潟者春売も可然候

大豆売方心得

一 三ヶ二冬売宜候、三ヶ一春売宜候、夏迄持候事決而不宜候

大麦売方心得

一 年々取箇麦、加山蔵江遣し困置、凶年之節安売又者施行ニ可致候、高森者平駄船ニ積取、黒瀬・法柳者小船ニ積取可申候、商人望候共払申間敷候



「本店」が管轄するほぼ福島潟と阿賀野川に挟まれた地域の作徳米等の販売について、10 に区分された蔵ごとに分けて方針が立てられていることが判明する。こうした方針は、「加山蔵者米性宜」等の記載にみられるように、蔵毎に収納される米等の品質に差違があったことに基づいているが、一方

で輸送の条件等も加味されている可能性もある。それぞれの方針がどのような意味を持つかはこの史料からだけでは判明しがたい部分があるが、それでも米の冬売りは主として酒造に回されること、春・夏売りの時期まで蔵に米穀を置いておくことは凶作時の備えという意味合いも持つこと、等は読み取ることができるであろう。今後こうした販売の側面も含めて、地主経営を具体的に分析していくことが、地主の蔵の性格を解明する際に重要となってくる。そして史料1でみたように、こうした地主作徳米が新潟町などで領主蔵米と一緒に取引され相場が立つことを考えるならば、新潟町など集散地の商人の蔵、領主の蔵との関係も含めて考察することで、当地域の流通の構造をより立体的に把握することが今後の課題として浮かび上がって来るであろう。

おわりに

本報告は蔵に関連した史料を単にできるだけ多く並べて検討を加えるというものであったが、これだけでも性格の異なる各種の蔵が相互に連携しながらこの地域の流通構造をかたちづくっていたありさまをうかがうことが出来た。さらに土蔵と板蔵の関係、郷蔵の分布の差違など、いくつかの興味深い論点を見いだした。当地域では冬季の輸送困難という地域的条件が蔵のありかたと密接に関わっていたと思われるが、この点をより明確に位置づけて行くためには他地域との比較も重要であろう。もとより「蔵ネットワーク」の視点に基づく研究は緒に就いたばかりであり、今後今回の報告で得た諸論点を糸口にしつつ、冒頭で述べた「具体的な流通の構造を空間的・時間的に明らかにすること」にむけて、研究を深めていく所存である。

- (1) 糸魚川市鬼舞伊藤家文書、安政3年(1856)「相場」、拙稿「越後巨大地主と流通市場」原直史・大橋『日本海域歴史大系第五巻近世篇II』p168)
- (2) 新潟大学付属図書館所蔵五十嵐家文書
- (3) 元和2「覚」、『新潟市史 資料編』(以下『市史』と略記) 2、二号史料
- (4) 未「買申村上御上米之事」、『新潟県史 資料編10 近世5』第一章50号史料
- (5) 延宝5「覚」、『市史』2二〇号史料
- (6) 元禄10「新潟江従諸方参候御蔵米并雑穀諸色大積り」、『市史』2一三〇号史料
- (7) 与板藩牧野氏は元禄2年(1689)に信州小諸に移されているので、この記載は元禄2年以前の状況である可能性もある。
- (8) 文久3「一番日記」、『市史』2一三一号史料
- (9) 天保14「新潟市中風俗書」、『市史』2一五八号史料
- (10) 『新潟市史 通史編1』カラー口絵(図8)
- (11) 『新潟市史(1934年版) 上巻』所載「戊午寄居御田地の内町蔵地に成候覚」等
- (12) 『新潟歴史双書5 新潟の堀と橋』(新潟市、2001年)所載「新潟町割図」(図5)
- (13) 『新潟市史(1934年版) 上巻』所載「享保五年八月寄居村田畑地回図」
- (14) 年不詳「年々可相渡金銭并諸賃賄料等定覚控」、『市史』2三九号史料
- (15) 天保14「新潟湊仕来り凡申上候」、『市史』2三七号史料
- (16) 前掲註(9)史料
- (17) 享保7「(新潟湊取決書)」、『市史』2一二三号史料
- (18) 「諸株取調書」、『市史』2一二四号史料
- (19) 仮に「白山蔵江町中」が「白山蔵并町中」の誤写等であるとすれば、白山蔵および町中から

廻船の船繋ぎ場までの陸持と解釈できる。

- (20) 前掲註(9) 史料
- (21) 嘉永期「仲御番所勤仕録」、『市史』2一二六号史料
- (22) 天保11「北越秘説」、『市史』2四〇号史料
- (23) 『新潟市史(1934年版)上巻』所載写真(p288-291)
- (24) 明治21「星霜雜記」、『市史』2一六〇号史料
- (25) 「記事別集」、『市史』2一六四号史料
- (26) 「筆まかせ」、『市史』2一六五号史料
- (27) 「新潟表記録四」より安政5「新潟町非常之節窮民為御救御下ヶ穀之儀奉伺候書 付」、『市史』2七〇号史料
- (28) こうした対比の例は他の都市でも見られる。例えば長岡城下の「上御蔵」が描かれた延享元年(1744)「柳原町・上寺町・上田町・裏一之丁・大工町居屋敷絵図」(『長岡市史双書22 長岡の地図』所載、長岡市、1992)では、藩の米蔵が茅葺きないし板葺きの板蔵とみられる描かれ方であるのに対して、隣接する町屋敷には瓦葺きとみられる「土蔵」が点在し、対照的である。
- (29) 『新潟市史(1934年版)上巻』所載卯五月「覚」
- (30) 『新潟市史(1934年版)上巻』所載「関屋村田地変遷見取図」
- (31) 『市史』2一一六号史料
- (32) 以下天明9(1789)「御蔵所由来記」、『市史』4四〇号史料
- (33) 寛政3(1791)「蒲原両組御代官取扱心得」、『市史』4一六号史料
- (34) 文久4「精算録」、『市史』4三八号史料
- (35) 慶応4(1868)「申送書」、『市史』4一〇号史料
- (36) 享保2「亀貝村諸色書上帳」、『市史』4四六号史料
- (37) 宝暦6(1756)木戸新田村「宝暦年中之明細帳写」、『市史』4四八号史料、文政12(1829)北山新田村「差出明細帳」、『市史』4五六号史料
- (38) 村上領でも冬期の川下げが全くなかったわけではない。享保14年(1729)11月、村上領三条組等5か組の大庄屋が連印で新潟町の蔵宿とみられる商人に対し、大坂商人に渡す米2万俵余の川下げが荒天で困難なので、翌春雪消え次第に必ず川下げする旨を約した証文を差し出した(『市史』2一一二号史料)。この時は結局冬期の川下げが出来なかったのだが、もともとは冬期の川下げを前提とした計画が立てられていたのである。
- (39) 享保16「乍恐書付を以奉願候事」、市史5八一号史料
- (40) 弘化4(1847)「御用留書帳」、『市史』5三九号史料
- (41) 『新潟県史 資料編10 近世5』第五章12号史料

付記 本稿は当日の討論等を踏まえ、口頭報告の内容をさらに再構成したものである。

2003 年度からはじまった「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」のなかで、私に与えられた課題は、「城郭」をキーワードに上杉氏関係文書から事例をとりあげ、中世考古学と文献史学を切り結び解説するというものであった。はたしてその課題を消化し切れたかどうかは、心もとない部分であるが、ここでは、とりあげた事例をふりかえり総括としたい。

1 魚津城の「まるとばり」

事例としてとりあげた、天正 10 年（1582）4 月 9 日付けの 3 通の書状（上越市史 2344～2346）※1 は、当時、越中魚津城を守備していた中条景泰と蓼沼泰重が、越後に残してきた家族へあてたものである。魚津城は松倉城とともに上杉氏の越中支配の中心であった。天正 10 年、織田信長の東国侵攻がはじまると、魚津城も信長勢の攻撃をうけており、3 通の書状はこの最中に書かれたものである。

織田勢の攻撃に対し、魚津城に籠もった諸将は、それぞれ担当部署を決め、各自がそこを守るという体制を取っていた。「たてぬま方たんかう申、ひかしのまるとはりついていて申」、「せつしや事、ひかしのまるとはりにたてぬまとのとねまり申候」などとあるように、中条景泰は蓼沼泰重とともに「ひかしのまるとはり」を守備した。

上杉氏関係の文書には、いわゆる「本丸」や「二の丸」という用例の「まる（丸）」という語は、管見のかぎりみられない。「たかなしくるわ」のように、「くるわ（曲輪）」を使用するのが一般的である。このことから二人の守った「ひかしのまるとはり」は「東の」＋「まるとはり」であると考えられる。

天正 11 年（1583）に比定される卯月 16 日付の甘糟長重書状には、「仍城町表之御曲輪、今度致構を成就仕候、并林辺踞候西之円戸張、今日鋏立仕候、（『上越市史』2733）※2」とある。これは三条城の普請の様子を伝えたもので、この日「西之円戸張」の「鋏立」を行ったという。「鋏立」は普請開始に際し催される築城儀礼である※3。三条城にも「まるとはり（円戸張）」があったのである。

1600 年代はじめに刊行された『日葡辞書』※4 では「とはり」を以下のように記している。邦訳ではともに漢字の「帳」という文字があてられる。

a **Tofari** 偶像の前面とか、非常に高貴な方の御座所の前面とかに張る豪華な幕。

b **Tobari** 人を通さないように戸口に横様に座ること。 例 Tobariuo suru（帳をする）

これらを念頭に、たとえば絵巻物をみていくと、まさに b の「人を通さないように戸口に横様に座る」ようすが描かれている。『一遍聖絵』の筑前国のある武士の館では、楯をならべ、屋形に弓矢を備えた櫓門の左右に武士が三人座っている。傍らには主人の乗ってきた馬が繋がれていることから、右側の二人は侍者であると思われるが、向かって左の白い直垂に袴、革巻の太刀を履く男は「とばり」をしていると考えられる。こうした事例から「とばり」とは、「館の入口である門を守る行為」と定義できるだろう。この語義から推測すると、魚津城の「とはり」は、城の入口を守備する空間であることが想定される。城郭研究でいう「虎口」や「馬出」がこれにあたるだろうか。

「まるとはり」は「円（まる）」＋「とばり」であり、「円（まる）」は円形という「とばり」のかたちを示していると考えられる。「とばり」が「虎口」や「馬出」を指しているのであれば、まず思い浮かぶのがいわゆる「丸馬出」である。「丸馬出」は、「虎口」の前面に三日月型の堀や土塁を設けた空間で、信濃や三河・駿河・遠江など中部地方の城郭にみられる遺構である。

「馬出」の語は、八巻孝夫氏によれば、寛永年間の『甲陽軍鑑』以後、軍学を中心とした史料に頻出するが、それ以前では、後北条氏の文書あるのが唯一であるという※5。戦国期の上杉氏が「馬出」を「とぼり」と呼んでいた可能性はあろう。

しかし、「丸馬出」にあたる遺構は、北信の海津・長沼の両城にある以外、越後や佐渡、越中など上杉氏分国では知られていない。管見の限り、魚津城の絵図や復元図にも「丸馬出」は確認できないのである※6。また、「円戸張」の鋳立てをおこなっていた三条城については、はっきりとした位置や縄張りとは現状ではまったくわからない状況である。魚津城「丸馬出」の「発見」は中世考古学に頼るしかないのである。

2 亀ヶ崎城出土木簡にみる「北の関ヶ原」

亀ヶ崎城跡は、山形県酒田市亀ヶ崎に所在する城館遺跡である。現在、山形県立酒田東高等学校の敷地となっており、校舎改築にあたって発掘調査が行われた。平成16年度に調査が行われたA区では、16世紀前半から17世紀前葉の遺構が見つかった。遺物も大量に出土し、数多くの木製品が含まれている。

ここでとりあげる木簡は、このA区から出土したものである。16世紀末から17世紀前半の遺構面（第一面）の礎石建物の礎石の脇から、瀬戸美濃の皿と一緒に出土した。

木簡は、長さ166mm×幅30mm×厚さ5mm。上部を山型に整え、左右に切り込みを入れる。形状から木簡の用途は荷札であると考えられ、荷物が届けられたのち、廃棄されたものと思われる※7。

（表）「慶五

七月三日 志駄修理亮□」

（裏）「なまり玉貳千入、百分」

表には荷物の発送日と宛先、裏には荷物の内容が書かれる。「慶五」は、慶長5年（1600）。「志駄修理亮」は、米沢市立米沢図書館所蔵の「会津御在城分限帳」によれば、このころ「羽州庄内酒田城代」として5100石の知行を与えられている※8。この木簡は、志田修理亮の在番する庄内酒田城へ鉄砲の弾である「なまり玉」2000発が運ばれたことを示しているのである。

この木簡に対応する文書がある。慶長5年7月5日付の土橋内膳・上倉茂左衛門尉連署鉄砲請取状がそれである。全文を示そう。

請取申鉄砲之事

合百三拾三挺ハ 但、家康筒三拾丁／残而、ふる筒・あつめ筒
右、請取申所実正也、仍如件、
慶長五年

七月五日

上倉茂左衛門尉（黒印）

○印文末詳

内田伝丞殿

土橋内膳（黒印）

○印文末詳

参

土橋内膳と上倉茂左衛門尉が、内田伝丞へ出した鉄砲33挺の請取状である。文書の日付は、二人のもとへ鉄砲が届いた日と考えられる。送られた鉄砲の内訳は、「家康筒」が30挺、残り3挺は「ふる筒・あつめ筒」である。「家康筒」は不明であるが、「ふる筒」は中古の鉄砲、「あつめ筒」は、さまざまところからあつめてきた規格の統一されていない鉄砲という程度の意味と思われる。

『覚上公御書集』はこの文書を引用し、綱文を「同年七月、于会津表内府家康公就為御征伐御下向、

伊達政宗等、会津領于諸境及乱妨旨、依注進、為守護矢炮請取也」※9とする。土橋・上倉の在番するどこかの城へこれらの鉄砲が送られ、分国を接する伊達・最上両氏との抗争に備えられたのであろう。

慶長5年5月3日、伊王野資信へ宛てた書状※10のなかで、景勝の「討果」を表明した家康は、6月16日、会津へ向かい大坂を發った。同月20日、石田三成は、直江兼続へ宛てて書状を送り、18日に家康が伏見を出たことを報じている※11。これに先立ち伊達政宗も14日に大坂を出て帰国した※12。また、景勝は「上方勢下候日限聞届次第、半途江可打出候」と、本庄繁長等に決意を伝えた※13。

日を逐って緊張の高まるなか、上杉勢は、徳川本隊、伊達・最上両氏との抗争をにらみ、臨戦態勢を整えていた。上杉分国各地へたくさんの鉄砲や弾薬が送られていたことであろう。

1の事例では、文献史学の立場から「まるとぼり」＝「丸馬出」という仮説をたててみた。魚津城の「丸馬出」を検出するのは、今後の発掘に期待するしかなく、いわば文献史学から中世考古学への「呼びかけ」的なところみである。2の事例は逆に、中世考古学からの「呼びかけ」に文献史学として応えてみた例である。出土史料である木簡に文献史料がリンクして、「北の関ヶ原」といわれる上杉氏と伊達・最上氏との抗争への緊迫感を感じることができる。ここでとりあげた事例は、豊かな歴史像を描くためには、中世考古学と文献史学の「学融合」が求められるという好例ではないだろうか。

※1 『上越市史』別編2 上杉氏文書集二（上越市・2004年）の史料番号を掲げた。

※2 『上越市史』は「諸士来状全」を底本とするが、ここでは花押影のある『歴代古案』巻13から引用した。

※3 福原圭一「武田氏の築城についての一考察」（『信濃』第45巻11号・1993年）

※4 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店・1980年）

※5 八巻孝夫「馬出を考える ―その概念とことばの由来―」（『中世城郭研究』第3号・1989年）

※6 富山県埋蔵文化財センター編『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』（富山県・2006年）

※7 本文の記述は、山形県埋蔵文化財センター「亀ヶ崎城跡第4次 調査説明資料」（2004年）に拠った。

※8 矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦編『新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊V 上杉家分限帳―越後・会津・米沢―』（新潟大学・2005年） 66頁

※9 『覚上公御書集』下（臨川書店・1999年） 365頁

※10 中村孝也編『新訂徳川家康文書の研究』中巻（日本学術振興会・1970年） 482頁

※11 『覚上公御書集』下 364頁

※12 『仙台市史』資料編11 伊達政宗文書集2（仙台市・2003年） 1053号解説

※13 「景勝公御年譜」21（米沢市上杉博物館所蔵）

はじめに

これまでの「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究」において、筆者は『長楽寺永禄日記』の記述から、「塔婆」や「骨」といった語彙が用いられる場面について遺物・遺構を意識しつつ検討を行い、さらに各地に見られる出土卒塔婆に記された文字について、いくつかの遺跡を取りあげ、あらためて検討した。これら個々の成果については『中世考古学文献研究会会報』誌上においてもいくつか報告している。

これらの成果が中世考古学の進展に対してどのような寄与ができるか、という点は現時点ではなはだ心許ないが、遺物や遺構を意識しつつ文献史学の立場から検討する試みは、歴史を総合的に考えていく上においても、今後も引き続き行われていくべきことのひとつと考えられる。

そこで、今後の課題も含めて、あらためて出土卒塔婆文字と文献史料のあり方や検討の方向性について考えることとしたい。

1、文献史料に記される状況と中世考古学

－『長楽寺永禄日記』と長楽寺近辺の遺跡群－

まず中世考古学を意識して文献史料を検討する試みとして、上野国長楽寺に伝わる『長楽寺永禄日記』（以下『永禄日記』）を取りあげる。長楽寺は現在も群馬県太田市（旧尾島町）に所在する。新田義重の子義季を開基、栄朝を開山として承久3年（1221）に創建された寺院で、地域においても有力であった（定方嘉津夫『長楽寺史』中世編、長楽寺史中世編刊行会、2002年など）。また近世では天台宗に転宗するが、鎌倉期～戦国期にかけては臨済宗であった寺院として知られている。

また『永禄日記』は永禄8年（1565）正月～9月に長楽寺住持の賢甫義哲によって記された日記である。義哲は天文17年（1548）に住持となった人物である（史料纂集『長楽寺文書』35号「古河公方足利晴氏公帖」）。なお永禄10年（1567）には周岱が次の住持となっている。

したがって、この日記は地域における寺院の法会や地域の状況について検討する上で重要な記録といえる。

そこで、筆者はこのなかで年忌法要の実施にあたって塔婆がたてられている事例について検討し、その場面ではすべて偈頌が作成されていたことを確認した。また義哲は「赤堀御料人」とよばれる女性の葬送儀礼に関わっているが、その葬儀は長楽寺から北に3.5キロほど離れた赤堀で行われていたことがうかがえた。『永禄日記』永禄8年3月23・24日条には、次のように記されている。

廿三、早晨計、禅也相伴、饅ヲ一半用、喫茶、此内赤堀御料人死去之段、今井大蔵告来、愚ニ焼香ヲ頼間、令斟酌处ニ、頻ニ被申間、任其意焼香イタシツル、臈而號春窓妙林禅尼也、未刻赤堀へ行、時ヲ少用キ、

則頌作云、當年二十二歳也、
二十二年春一夢 世縁既尽去誰家

紅 紫

千山万木雖零落 光裡新開優鉢華

○ ○

此日ツナミ吹、頭重カリキ、ヒル麦ヲヒヤシテ少用、又赤堀へ行、時湯付ヲカサ一程用テ行ツル、
帰、ヤキメシヲ四五ケ用イヌ、普光ハ痔病ヲ俄煩不被越、岱子モ卒度煩ツル、此兩人ハ大略肝要
用所時必煩也、

廿四、早晨、地藏諷経、朝ハ行水ヲシ、喫茶、時ヲ能用ツル、ヒルハ麦飯少用、其後饅ヲ一用、
又湯ツケヲ一カサ程用、赤堀へ行、取骨以前ザウニアリ、ハシニテセ、リオヲク、取骨過テ一飯
アリ、カサニ半ボト用ツル、入夜帰ル、

上記史料から、義哲が頌を作り、赤堀へ行つて取骨を行ったことなどがわかる。前記のように『永禄日記』では塔婆のたてられる場面に偈頌がそろってみられることをあわせて考えると、この場合においても塔婆をたててそこに記していた可能性も高いと思われる。赤堀あるいは長楽寺近辺において偈頌を刻んだ、あるいは墨書した塔婆については長楽寺遺跡等からもみることができていないが（尾島町教育委員会『長楽寺遺跡』、1978年等）、塔婆に偈頌を記す例はその他の地域でも多く見られ、長楽寺においても同様の作法を行っていたことが考えられる。また『永禄日記』に記される偈頌はいずれも七言で四句の韻文であった。これらの状況について、さらに他地域における発掘成果との比較を進め、長楽寺で行われていたような場面の復元をしていく必要があるものと思う。

なお長楽寺付近に関しては、世良田宿との関係がすでに多方面から指摘されており、さらに山本隆志氏は世良田宿市の復元図を作成している（『鎌倉後期における地方門前宿市の発展—上野国世良田を中心に—』、『歴史人類』17、1989年）。そして、この近辺にあたる世良田諏訪下遺跡からも多くの遺跡が発掘されている（尾島町教育委員会『世良田諏訪下遺跡』、1998年）。なかでも早川口から石田川までの運河的な役割を担っていたとされる溝状遺構からは木製品が510点検出されており、そのうち265点が文字を記した卒塔婆である。これらの木簡はすべて14世紀前半頃と考えられ、『長楽寺永禄日記』より2世紀近くさかのぼる資料であるが、建武5年（1338）に足利尊氏から平塚郷地頭職を寄進される（史料纂集『長楽寺文書』17号「足利尊氏寄進状」）など、長楽寺文書などから当該の地域における長楽寺の位置がうかがわれるので、この卒塔婆と長楽寺の間に何らかの関係を見いだすことは可能と思われる。

木簡の出土状況から、これらの卒塔婆は一度に利用されたものではなく、定期的に利用され、運河に流されていたものと考えられている（須永光一「世良田諏訪下遺跡」『発掘速報展'96』、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財発掘調査センター、1996年など）。したがって、何らかの定期的な法要に使用されたものと考えられるであろうか。そして、この近隣においてはその法要を行う人物が世良田宿の人々あるいはそれに関わる人々である可能性もいまのところ否定できないものと思われる。山本隆志氏は前掲論文において、世良田宿住人が集団を形成して法会を営んでいたという事実を指摘したが、これらと遺跡出土卒塔婆の関係も考えていく必要があろう。

そこで、これら卒塔婆の文字を検討すると、その47.5%が「南無大日如来」あるいは「南无大日如来」と記すものであり、「南無阿弥陀仏」また「南無妙法蓮華経」とするものはごくわずかであった（前嶋「世良田諏訪下遺跡（群馬県太田市（旧尾島町））出土卒塔婆」、『中世考古学文献研究会会報』6号、2006年）。出土卒塔婆文字の観点からも、世良田宿の住人や長楽寺に関わって何らかの法会が行われ、卒塔婆が廃棄されていたと考えてよいのかもしれない。上記『永禄日記』とあわせ、卒塔婆の利用についてもさらに検討が必要と思われる。

世良田山長楽寺とその近辺については、遺跡および近世以降の絵図、また記録類からも地域の詳細

な復元がまだ可能と思われる。こうした作業のなかに、出土卒塔婆文字の検討も含めていくべきものと考えられよう。

2、出土卒塔婆文字の検討

上記では、地域の復元にあたっての総合的なとらえ方として、出土卒塔婆文字の検討の必要性が認められたとしたが、文献史料においてはなかなか見いだすことのできない地域についても、出土卒塔婆文字から検討することを試みた。これまでの検討において、事例として取り上げた遺跡は、世良田諏訪下遺跡以外には、浦廻遺跡、馬場屋敷遺跡（下層）（いずれも新潟県新潟市）、堅田B遺跡（石川県金沢市）、由比ヶ浜南遺跡（神奈川県鎌倉市）であり、おおむね13世紀後半～14世紀前半と考えられる出土卒塔婆を中心とした。なお、基本的にはすべて発掘調査報告書が刊行されている遺跡であり、それらをもとにして再検討するかたちをとっている。

これらの卒塔婆のなかで、とくに浦廻遺跡出土のものは注目された。そこでここでは浦廻遺跡とそこから近距離にある馬場屋敷遺跡の出土卒塔婆文字を中心に考えてみたい。

両遺跡は新潟県新潟市（旧白根市）に所在する遺跡であり、ともに信濃川と中ノ口川に挟まれた沖積地（浦廻遺跡は中ノ口川右岸、馬場屋敷遺跡は信濃川左岸）にある。両者間は約4kmと近接しており、またそれぞれの遺跡から「元応二年」（1320・浦廻遺跡）、「正応6年」（1293・馬場屋敷遺跡）という年紀のあるものが出土しており、卒塔婆の出土地点あたりの年代は大きく13世紀後半～14世紀前半といえよう。

浦廻遺跡に関しては、66点について文字を記した卒塔婆が確認されたが、そのうち24点が「南無阿弥陀仏」「南无阿弥陀仏」等と記していたと考えられるものであり、世良田諏訪下遺跡で見られたような「南無大日如来」については、8点と少数であった。そして、頭部を墨彩したものなどが注目された（前嶋「考古学のための出土遺物文字解説 浦廻遺跡出土卒塔婆」、『中世考古学文献研究会会報』2号、2004年）。

いっぽうの馬場屋敷遺跡（下層）では、「南無阿弥陀仏」「南無大日如来」のいずれも出土せず、符ろくを記した呪符木簡、また「蘇民将来」と記したものが多数出土している。

この差異から水澤幸一氏は、「蘇民将来は無病息災を祈るものであり、死者を弔う場であった本遺跡（浦廻遺跡＝引用者注）では必要のないものであった為に用いられなかった」（「浦廻遺跡にみる地表葬」、狭川真一編『墓と葬送の中世』、高志書院、2007年）とし、浦廻遺跡の性格を葬送関連の場として馬場屋敷遺跡との性格の違いを強調する。浦廻遺跡については葬送関連の場としてさまざまな指摘がなされているが、死者を弔う場としての性格については異論のないところと思う。

また、水澤氏は前掲論文において同遺跡から出土した人骨が「地表面に放置されていたような状態であった」とした上で、それと卒塔婆の状況をあわせて「（死体を）ただ流すだけでなく、応分の葬送儀礼を行った階層は存在していた」として浦廻遺跡はその一例とする。人骨と卒塔婆の両者を一連のものとして結びつけるかどうかについての判断は難しいところもあると思われるが、同一地域において供養を行う葬送と、地表面に放置する葬送があったことはここからも伺うことができ、文献史料においても、同一地域でさまざまな方法の葬送が行われていたことが示されている（たとえば前嶋「文献史料からみた「遺棄葬」」、前掲狭川真一編書）。こうした諸点について、さらに考古学および歴史学などからの方面から検討を深めていく必要がある。とくに、前嶋前掲論文においても指摘したとおり、放置された遺体は一夜のうちに身ぐるみはがされる状態であったと考えられるので、考古遺物の出土状況をどのように文献史料とあわせて考えるかについてはさらに検討を続けていく必要がある。

なお、馬場屋敷遺跡（下層）でも骨片とそれを囲むように指した状態で細杭が出土しているが、これらが出土した呪符木簡等と直接関わるとは考えがたい。むしろ、これら骨片などの出土状況と他の遺跡との比較検討が重要と思われる。また、墓地遺跡として知られる神奈川県鎌倉市の由比ヶ浜南遺跡についても検討したが、ここからは関連するとみられる卒塔婆はほとんど出土していない。さらに、石川県金沢市の堅田B遺跡については、修正会が行われていたことが推定できる巻数板などが出土しており、これらについても検討したが、ここでは「南無大日如来」とする卒塔婆が全卒塔婆中の35%を占めていた。浦廻遺跡の性格については、これら出土文字全体の検討ともあわせ、比較検討をかさねていくべきであろう。

おわりに

以上、出土卒塔婆の文字と文献史料という側面から、各地域をとりあげて検討する試みを行ってきたが、こうした試みはそれぞれの学問の方法論をさらに高めながら続けられていくべきであろう。

とくに葬送・墓制にかかわる研究については、さまざまな学問的見地からのアプローチが重要な分野であり、今後も文献史料および出土卒塔婆文字解読および考古学の発掘成果を結びつけたかたちでの研究が進められていくべきであろうと思う。出土卒塔婆については、たとえばその利用のあり方については考古学的な見地からではなかなか不透明な部分が多い。本研究においても、卒塔婆文字の検討からのみでは、断片的な理解となってしまう場合が多いと思われた。さらに、浦廻遺跡の人骨が地表に放置された葬法（地表葬）をとっている場合、ここに至る過程を復元することは考古学的には困難と考えられる。文献史料を含めたかたちで、卒塔婆利用の場面などについて総合的かつ詳細に検討することにより、具体的な歴史像がうかぶのではなかろうか。

はじめに

本稿は、「中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究会」において、筆者が担当した万里集九の漢詩文集『梅花無尽蔵』の資料解説、新潟県長岡市の山田郷内遺跡から出土した「東司触桶」の解説をまとめるものである。最後に、中世考古学のための禅宗資料の有効性について簡単に述べておきたい。

1. 『梅花無尽蔵』の資料解説—江戸城の施設と犬追物—

『梅花無尽蔵』では、万里集九が文明17年（1485）10月2日から長享2年（1488）8月14日まで滞在した江戸城の施設、また文明17年9月8日に万里集九が見た尾張の清洲城にあった犬追物の施設「犬の馬場」を取り上げてみたい。

（1）江戸城の施設

万里が滞在した当時の江戸城主は太田道灌であった。この時期の江戸城の遺構は、昭和54年（1979）に実施された東京都千代田区北の丸にある国立近代美術館の工事に伴う発掘調査など、まだ一部の発掘調査しか行われておらず、太田道灌時代の江戸城については不明な点が多い。

以下、万里集九の漢詩文集『梅花無尽蔵』に記された江戸城の記事をあげておく。

（史料1）

（前略）、倉廩紅陳之富、栽栗而雜皂莢、市鄽交易之樂、城門前設市場、擔薪而柳絮、僉曰一都会也、城中之五六井、雖大旱其水無縮、其壘營之為形曰子城、曰中城、曰外城、凡三重、有二十又五之石門、各掛飛橋、懸崖千万仞、而下臨無地、築弓場、每旦驅幕下之士数百人、試其弓手、分上中下、（後略）

（『梅花無尽蔵』文明18年（1486）条）

（史料2）

余此寓武之江戸城、々有丞相祠堂、栽柳挿松、不知幾数百株、

（『梅花無尽蔵』文明18年2月25日条）

（史料3）

控品河之岐軒、途中之濱而見六・七小舟品河之土、蓋為塗江戸之城壁也、

（『梅花無尽蔵』長享元年（1487）10月22日条）

史料1は、文明18年に万里集九が作り、江戸城の太田道灌の庵、静勝軒に掛けられた漢詩で、万里がみた江戸城の光景が記されてある。この漢詩によれば、江戸城は子城（出城）、中城（本丸）、外城（外郭）からなる三重構造で、25の石門があり、それぞれに橋がかけられ、石門と場外の間には深い堀があり、城内にはたくさんの物資が納められた倉庫、穀物栽培のための耕地、5・6箇所の井戸、弓場があり、場外には市場があったという。ついで、史料2によれば江戸城内には広大な境内をもつ丞相祠堂（菅原道真を祀る神社）が存在したことが分かる。

昭和 54 年（1979）の国立近代美術館の工事に伴う発掘調査では、16 世紀の武士階級が使用したと想定される遺物や遺構が発見された（古泉弘「江戸城址の発掘調査」『日本城郭史研究叢書 第 3 巻 武蔵野の城館址』、名著出版、1984 年）。このとき、発掘が行われた北の丸の地は、万里がみた江戸城（子城、中城、外城）の一部であったと思われる。このほか、城内の倉庫、祠堂などの建築物、穀物栽培の耕地、井戸（5・6 箇所）、弓場、城内と場外を結ぶ石門（25 箇所）、石門と場外の間にあったかなり深い堀、場外の市場などが、15 世紀末の江戸城の遺構として発見されることが想定される（拙稿「江戸城の郭と陶器 梅花無尽蔵」『中世の城館と集散地』古志書院 2005 年）。

つぎに、史料 3 によれば江戸城の城壁を塗るための土が品川から小舟で運ばれ、直接江戸城まで土を乗せた小舟が乗り入れられる水路があったことがわかる。

（2）尾張清洲城の犬の馬場と犬食

つぎに、『梅花無尽蔵』文明 17 年 9 月 8 日の条にある尾張の清洲城内織田敏信亭で行われた犬追物の記事を取り上げ、犬追物に関して出土するであろう遺構・遺物について検討してみたい。犬追物は現在、断絶しているが、「犬の馬場」という地名や地割りが各地に散見できる。

（史料 4）

尾之清洲城備後敏信第見犬追物、八日

犬已超縄箭各飛、長髯撿見有天機、勿論遠近疏南北、八以前三百疋時、

（『梅花無尽蔵』文明 17 年（1485）9 月 8 日条）

（史料 5）

或人謂予云、右京兆近来犬追物每日有之、去月二十九日者蔭涼軒見擊犬、蓋輪次也、犬料三百疋相定、其余調斉、犬衆相集于蔭涼軒喫之、栗餅并樽三荷、河原者賜之、希有之事也、人皆讚歎云々、

（『蔭涼軒日録』明応 2 年（1493）9 月 3 日条）

史料 4 によれば、「犬の馬場」の中心に設けられた大縄で造られた土俵の輪を犬が飛び出すと、それぞれの射手の矢が放たれること、織田敏信は犬追物の成績の判定について生まれつきの才能の持ち主であること、9 月 8 日以前には 300 疋の犬追物が開催されたことが確認できる。

犬追物の会場である「犬の馬場」が設営される場所は、①城・館の大手手正面に隣接した方形の空闲地、②河原や浜などの広大な土地の 2 つがあげられる。また、犬の馬場の周辺は竹垣で囲まれていたという（服部英雄「研究ノート 犬追物を演出した河原ノ者たち―犬の馬場の背景―」『史学雑誌』111-9、2002 年）。

「犬の馬場」の広さであるが、越前朝倉氏の一乗谷遺跡の朝倉館西門前にあった犬の馬場、近江六角氏の観音寺城の「下御用屋敷」にあった「イノ馬場」は約 50m 四方の方形の地割であったという（小島道裕「高島郡の平地城館址について」『滋賀県中世城郭分布図』8、1992 年）。

清洲城では、城内にあった敏信邸宅で犬追物が行われており、城内に敏信の邸宅と約 50m 四方の方形の地割を持った「犬の馬場」が存在したこと、9 月 8 日以前にも犬追物が開催されたとあり、敏信の邸宅にあった「犬の馬場」は恒常的な施設であったことも想定される。

『冷泉為広越後下向日記』によれば、延徳 3 年（1491）3 月から 4 月に、越後府中に滞在した細川政元と歌人の冷泉為広は、4 月 6 日から 9 日にかけて守護上杉房定から犬追物の稽古にまねかれている（『上越市史』資料編 3 古代・中世）。この犬の馬場も、守護所の周辺に約 50m 四方の「犬の馬場」

が設営されていたことが想定され、連日開催されていることから越後守護所の周辺にあった「犬の馬場」も恒常的な施設であったと考えられる。

なお、犬追物で使用される犬は河原者が集め、一日に朝と晩にわけ、1 回に 100 疋から 150 疋を用いたという。清洲城の犬追物でも、8 日以前には 300 疋の犬が使用され、「冷泉為広越後下向日記」の犬追物でも、1 日 200 疋の犬を使用している。なお、犬追物で一度使用した犬は、かなりの怪我を追い、多くの犬は河原者により処分された。なかには、犬追物の射手らにより、食べられた場合もあった。中世の日本人は、犬を薬と称して食べることが一般的であった。また、中世の鎌倉・博多の町からは解体された犬の骨、調理の痕跡のある骨が発掘されている（安楽勉「食用としての犬」『考古学ジャーナル』450、1999 年）。

史料 5 は、京都の臨済宗相国寺にあった蔭涼軒の記録である。史料 5 によれば、細川政元が毎日犬追物をしていたことや、8 月 29 日には蔭涼軒主もこの犬追物を見物していたという。また、必要な犬は 300 疋と定められ、そのほかは調理し、犬追物の射手たちは蔭涼軒に集まり、これを食べたとある。この記事は、本来、殺生禁断の場である京都の禅宗寺院内で犬食が行われていたことを示している。

すなわち、清洲城での犬追物でも、使用された犬の一部は、犬追物の終了後、参加した射手らによって食されていたことが想定される。したがって、清洲城の「犬の馬場」、京都の寺院、河原者の居住地などの周辺から食用や解体された犬の骨が発見されることが想定される（拙稿「犬追物 梅花無尽蔵・蔭涼軒日録」『中世の城館と集散地』古志書院 2005 年）。

2. 山田郷内遺跡出土「東司触桶」

山田郷内遺跡は、新潟県長岡市島崎にある縄文時代から江戸時代に至る複合遺跡である。調査面積は 2,800 m² の遺跡で、遺跡内には中世にさかのぼる可能性が高い寺院跡「禅釈寺跡」、それに関連する石塔群も存在する。

中世の出土遺物としては、土師器、陶磁器、漆器などの日用用具のほか、鎌倉時代の呪符、舟形、人面墨書石、仏具のりん、宗教施設の便所で使用されていた可能性が高い木製の曲物桶など、呪術・信仰に関わる遺物が出土している。

本遺跡の発掘成果は、新潟県長岡市教育委員会『山田郷内遺跡——般国道 116 号和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書一』（2007 年 3 月）に詳しい。

ここでは、本遺跡から出土した宗教施設の便所で使用されていた可能性が高い木製の曲物桶について解説する。この桶は長さ 21.4cm、幅 9.8cm、側面には「東」（一部破損）「司」「触」「桶」の 4 つの文字が均等間隔で墨書されている。墨書の最初の 2 文字、「東司」は仏教寺院、特に禅宗寺院内の便所のことである。伽藍の東側に位置することが多いことから名づけられたという。禅宗の僧侶の生活では、東司での作法も細かく定められていた。

その作法は、延応元年（1239）に記述された道元の『正法眼蔵』「洗淨の巻」などによれば、以下の通りである。

用を足そうとする僧侶は、触桶の置き場所におもむき、杓で触桶に水をくみ、これをもって厠に入る。触桶の水で便器を軽く濡らし、用を足す。その後、簀木または、紙を用いたのち、触桶の水を手のひらに受け、便器に付着した大小便を洗う。便器を洗淨した後、触桶を持ち厠から出て、触桶をもとの場所に戻す。

このように、「触桶」は用便を足すときに重要な役割を果たす道具であったといえる。今回、本遺跡から発掘された桶は、寺院の便所で使用する「触桶」そのものと考えられる。また、この桶は便所の

ある空間に常置されていたものではなく、別の場所から僧侶が持って便所に入るものであったといえる。また、この桶は複数回使用するものと思われ、「東司触桶」と墨書されている点は、便所用の桶と他の桶を区分するために記されたと思われる。いずれにしても、正式の作法で排泄行為を行う本格的な寺院の便所で使用されていた触桶であることは疑いないであろう。現在のところ、本遺跡からは明確な寺院の遺構は発見されていない。しかし、同地には禅釈寺跡、その関連と思われる石塔群が現存する。本遺跡からは、呪符などの祭祀遺物、仏具（りん）が出土しており、「東司触桶」も、これらの宗教施設の便所で使用されていた可能性も考えられる。

寺院の便所で使用する用具としては、禅宗以外では律宗などの寺院で使用された「浄瓶」「触瓶」がある。「浄瓶」「触瓶」の使用方法是「触桶」と同じであった。道元が中国から持ち帰った禅宗寺院の生活の指導規範書である『禅苑清規』（1103 年成立）がある。同書によれば、中国では禅宗はかつて律宗の寺院に間借りしていたという。この記事によれば、律宗の寺院の便所で使用されていた「浄瓶」「触瓶」などの用具や、便所での用の足し方などが、禅宗に取り入れられた可能性が高いと思われる。また、日本では便所で使用する用具が「瓶」から「桶」に変化したと思われる。この点からすれば、「触桶」は禅宗の寺院に限定される用具では必ずしもない。

とはいえ、桶に墨書された「東司」の文字は禅宗に由来を求められる用語であることや、『正法眼蔵』「洗浄の巻」は 1239 年に成立であり、桶自体の年代については慎重をきしたい。

おわりにかえて

最後に、中世考古学のための禅宗資料の有効性について簡単に述べておく。禅宗資料としては、「五山文学」に代表される漢詩が知られているが、漢詩は作者の禅僧による装飾、誇張表現が多くみられ、中世考古学のための資料解説での取り扱いには慎重をききたい。

研究会では、万里集九の漢詩文集『梅花無尽蔵』を取り上げた。同書も大部分は万里が作成した漢詩からなるが、他の漢詩文集とは違い、万里は文明 17 年から長享 2 年まで、美濃から江戸、そして越後をへて美濃への遍歴の旅をしており、この間の記録には万里が各地で見聞した記録が多く見られ、中世の城郭の構造・施設、さらにモノ資料を知る上で有効な情報が多く含まれている。『梅花無尽蔵』とともに、中世考古学のための資料解説で対象となる資料としては、『蔭涼軒日録』などの禅宗寺院の活動記録である公用記録、中世の禅宗寺院、禅僧が使用していたモノ資料を知る上では「東司触桶」で取り上げた道元が便所での用便の仕方を記した『正法眼蔵』「洗浄の巻」などの日常生活の規範書もその対象となろう。

はじめに

本稿では、戦国期後期（16世紀後半）の文献史料にあらわれる山城や惣構えの内に建てられた「山の小屋」と「小屋」について考察する。戦国期の城郭に関わる「山小屋」・「小屋」については、立論の視点や方法によりさまざまな解釈・見解が示され議論がなされている。

井原今朝男氏は、山小屋は、山城とは機能的・階層的に差別された防御施設であり、山城には侍身分のものが入るのに対し、地下人がたてこもるとした〔井原1983他〕。対して笹本正治氏は、山小屋は戦乱から避難するためだけに山中に建てられた施設であるとした〔笹本1984他〕。

井原・笹本両氏の議論をうけて、中世の文献史料にみえる城郭用語の事例を分析した市村高男氏は、山小屋は、山城より低位に位置づけられた簡略な軍事的構築物であるとした〔市村1987〕。

また、藤本久志氏は、笹本氏の山小屋＝避難所のように消極的にみるだけでなく、村人が自らの生活と生産を守る「自立した村の山小屋」・「百姓持タル城」であるという視点から「村の城」論を展開した〔藤本1988他〕。

以上の議論は、山小屋の存在を、領主側と村側のどちらからみるか、どのように使用したのかの捉え方によって違いがあらわれたといえる。領主側が、軍事体制を構えるために意図して作成・発給した文書類（文献史料）にあらわれる「山小屋」と、村側が実際に戦乱に巻き込まれたときに利用した「山小屋」が同一のものであることを論証しないかぎり、かみあった議論にはならないであろう。

中世史料にあらわれる用語「山小屋」には、その語を用いる者の立場の違いや、実際に山小屋を使用する方法の違いによって意味合いが異なってくるものであり、同一のものばかりではないのである。したがって、史料に「山小屋」が見えた際には、その史料は誰がどのような立場で記したのか十分に考慮した上で読みとっていく必要がある。

本稿で用いる文献史料は、主として永禄8年（1565）に上野国長楽寺の住持義哲が記した日記（『長楽寺永禄日記』）である。

第1節 金山城山上の「山の小屋」・「小屋」

1 長楽寺の「山の小屋」

ここでは西上野の戦国領主由良成繁の居城である金山城の山上に設けられた長楽寺の「山の小屋」について取り上げてみたい。

永禄8年（1565）正月4日
山へノホリ、茶ヲノミ、（後略）

永禄8年（1565）2月9日
山へ登、（中略）、行水ヲシテ寝、

永禄8年（1565）2月10日
山ニテ焼餅ニケ用、実城内カタヘムギノ粉ホカイニマツチャ、又熊寿殿、館林当年越年目出度トテ

■一雙、串柿肴トシテ、存書記ヲ以テ申届、愚ハ長手ヘ下、

永禄8年（1565）3月25日

山へ登、(中略)、山之小屋へノホリ、外居一ツイニ入、坂中へ抹茶ヲソヘマイラス、実城へモー書啓シツル、(中略)、山之小屋ニテメシヲ少用、非時ヲモ少用、寝也、及暮、金筑・南幡・長谷豊・大新・丸右、其後右衛門佐殿各へ酒ヲ進マイラス、当盞ニテ七杯ツハノマル、

永禄8年（1565）3月26日

小屋ニテ焼餅一半用、喫茶、伊徹相伴也、時ヲカサ二程用、実城へ出、(中略)、山ニテ湯ツケヲ能用テ下、

永禄8年（1565）6月3日

登山ス、於長手焼餅ヲ二三ケ用、喫茶、小屋ニ登、碁子麵ヲ用、坂中へ下、(後略)、

永禄8年（1565）6月4日

時ヲカサニ卒度弘蔵司相伴ニ用、其後ニ湯ニツケテメシヲ汁器一用ナリ、昼時分、右衛門佐殿・矢修・根参・金筑被越、麦ヲ饗、其上三蔵、右・筑ハ白ニヨシ、小染付トリ合、七ツハ酌シツル、及暮帰也、麦ヲモホシイヲモ少ツハ相伴ニ用、晚炊ヲハカサ一程モチユ、義陽・城チヨモ来リキ、寺之勤行ハ常之如クナラン、

永禄8年（1565）6月5日

焼餅イカニモ少ナルヲ兩ケ用、喫茶、時ヲカサニホト用、藤紀、南蛇井同心ニテ、道具・物本ナドサラサセツル座敷へ被越キ、干飯ニテ酒ヲ当盞五ツハ進メカヘシツル、ヤカテ愚モヒキノ粥ヲ汁器一用、令帰寺(後略)、

永禄8年（1565）7月28日

登山、長手ニテ焼餅少用、喫茶、山之小屋ニテ楊花ヲ茄子ヲ以調一椀用、喫茶、実城へ出、(中略)、申刻小屋ニ帰、非時ヲカサ二程用、高安若狭狂言帰ニコユヘキ由申程ニ、非時ヲ調置、饗シツル、高彦ハ小屋ニ留ル(後略)、

永禄8年（1565）7月29日

大ノ月ナル程ニ焼餅之用、喫茶、丸右侘言ニ局へ文ヲコシツル、心得返事アルヘキトノ挨拶也、実城へ以義陽、(中略)、カタリヲキ帰、長手ヘヨリ入麵ヲ一椀用帰、(中略)、山ニテ時ヲ小嶋・根岸肥・高彦・若狭・高子蔵司、一汁三菜之時也、相伴シテ用、丸右内カタヨリ饅ヲ信トシテコサレツル、時之上ニ出シ、進酒、各返也(後略)、

永禄8年（1565）8月10日

於長手碁子麵ヲ一椀アマリ用、山之小屋へ登、坂中へ以一札登段、旦那へ申届、懇ニ返事アリツル、則物本一皮籠晒、晚炊ヲハ卒度用寝、

永禄8年（1565）8月11日

山ニテ時ヲカサ二程用、天氣ハシカ■■ナケレトモ、地之字箱之本ヲ晒、ヒルハ楊花ヲ用、洞春相伴、

観蓮モ同座、(中略)、晩炊ヲハカサニホト用、(後略)、

永禄8年(1565)8月12日

カウノモノヲ用、喫茶、(中略)、長手へ下、時ヲカサ二程用、迎來間ヤカテカヘル、観蓮ヲハ山へ登セ、八郎左衛門證人召連ノホルヲマタスルナリ(後略)、

永禄8年(1565)9月1日

登山ス、矢修庭ヲカリ、物本ヲ晒ス、

永禄8年(1565)9月4日

登山ス、矢修庭ヲカリ、物本ヲ晒ス、其内ソト楊花ヲ一椀用、又粟粥ヲ一椀用、非時ヲモカサ二程用ツル、登儀実城へ以使申届、又夜中右衛門・藤紀ヲ以、(中略)何ニ可然ト挨拶申、兩人カヘシマイラス(後略)、

永禄8年(1565)9月5日

喫茶、時ヲイカニモコハロヨク用、道厳相伴也、根三・金筑・下平方被来、酒ヲスハム、ヒル湯ツケヲ汁器一用テ実城へ出、■ヲ一持参、悠々ト茶ヲノミ帰、非時ヲモ能用也、

永禄8年(1565)9月6日

時ヲ若狭相伴ニ能用、若狭ハツダケト昆布ヲ持参シツル、丸右侘言ニ文ヲシタハメ、右衛門佐殿ヘマイラス、(中略)、長手へ下(後略)、

永禄8年(1565)9月7日

愚モ長手ニテ楊花ヲ一椀用、則登山ス(後略)、

永禄8年(1565)9月8日

焼餅一ケ用、喫茶、時ヲ能用、丸右内ヨリ雲門・栗為信コサレツル、一ケ用、長手へ下、則令帰寺(後略)、

永禄8年(1565)9月11日

(前略)、自山、存・佐モ来、

永禄8年(1565)9月18日

長手ヘノホル、(中略)、坂中ヘ一札ヲシタハメ、存子ニ遣也、カミ(由良成繁)ヘモ伝語申ツル、自旦那委返事アルホドニ、(中略)、登山ス、

永禄8年(1565)9月19日

茶子少用、喫茶、自実城使ヲタマワ程ニ出、(中略)、宿ヘカヘリ、時ヲ能用、矢修小屋ニ画ヲサラシ、般若ヲ庭ニサラス、カヘリ来テ、非時ヲ道厳相伴ニ能用、毛利・小嶋来ル、酒ヲ当盞ニ五ツハ進メツル(後略)、

永禄8年（1565）9月20日

時ヲコハロヨク道厳・弘蔵主相伴ニ能用、藤紀モ被越、酒ヲ三杯スハメマイラセツル、ヒルハ実城へ出、(中略)、非時若狭相ハンニテ能用、(中略)、月ヲ待マイラセ、悠々ト寝ツル（後略）、

永禄8年（1565）9月21日

茶ヲ一服喫ス、道厳・若狭相伴ニテ時ヲ能用、ヒルハ麦ヲ卒度道厳・如雲相伴ニ用、実城へ出シバラクツル、非時ヲハカサニー半程用（後略）、

永禄8年（1565）9月22日

時ヲ道厳相伴ニテ能用、金筑コヘラル、酒ヲ当盞ニ五ツスハム、又心月モ被越、酒ヲ三杯スハメマイラセツル、ヒルハキシメンヲ一ワン用、非時ヲハ道厳相伴ニテ能用（後略）、

永禄8年（1565）9月23日

一服喫、時ヲ能用、(中略)、右衛門佐殿ヲリヤル、酒ヲ当盞ニテセスハム、半金筑モ来、三杯ノミ坂中へ被下、(中略)、湯ツケヲ二口三口用、帰、

以上に掲げた史料は、長楽寺の住持である義哲が、金山城山上にある「山の小屋」において行動したことがわかる記事である。

義哲は、「山の小屋」において、伊徹（3月26日）、弘蔵司（6月4日・9月20日）、道厳（9月5日・20日・21日・22日）・如雲（9月21日）などと相伴して食事をとっており、多くの寺僧が「山の小屋」への出入りが多かったことがわかる。また、「山の小屋」には、存書記のように常駐して長楽寺（義哲）と由良氏を取り次ぐ者もいたことがわかっている〔赤澤 2003〕。7月28日には、由良家中の高安彦右衛門が「山の小屋」に訪れ、その日は帰ることなく泊まっている。つまり、「山の小屋」とは、義哲一人が滞在できればよいような建物ではなかったと考えられる。

また、義哲の「山の小屋」滞在中には来客も多く、3月25日には由良家中の金筑・南幡・長谷豊・大新・丸右・右衛門佐の6名、6月4日にも右衛門佐・矢修・根参・金筑の4名が一度に訪れており、義哲は食事や酒でもてなしている。7月29日には、小嶋・根岸肥・高彦・若狭・高子蔵司の5名が訪れ、一汁三菜でもてなし相伴している。したがって、「山の小屋」は、少なくとも5・6人程度の来客を一度にもてなし饗応できるくらいの広さがあったことが知られる。

6月5日には、藤紀が南蛇井とともに「山の小屋」を訪れたので、義哲は、「道具・物本ナドサラサセツル座敷」に通して、干飯を肴に酒をふるまっている。客間である「座敷」に道具や物本等を晒していたところに、藤紀と南蛇井がやってきたのであろう。前述の5・6人程度の来客を一度にもてなしたのもこの「座敷」であったと思われる。このことから、義哲や存書記等の寺僧がふだん居る部屋（居間）とは別に「座敷」があった可能性が高い。したがって「山の小屋」には、少なくとも居間と座敷という2つ以上の部屋があったことが考えられる。

「山の小屋」において義哲は、「焼餅」（2月10日、3月26日、6月3日・5日、7月28日・29日、9月8日）、「メシ」（3月25日）、「湯ツケ」（3月26日、6月4日、9月5日・23日）、「碁子麵」（6月3日、9月22日）、「麦」（6月4日、9月21日）、「ホシイ（干飯）」（6月4日・5日）、「ヒキノ粥」（6月5日）、「楊花」（7月28日、8月11日、9月4日）、「茄子」（7月28日）、「一汁三菜」（7月29日）、「饅」（7月29日）、「カウノモノ」（8月12日）、「粟粥」（9月4日）、「茶子」（9月19日）などを食べ、「茶」（1月4日、3月26日、6月5日、7月28日・29日、

8月12日、9月4日・5日・8日・19日・21日・23日）や「酒」（3月25日、6月4日・5日、7月29日、9月5日・19日・20日・22日・23日）を飲んだり、もてなしている。

したがって、「山の小屋」には、これらの食材や酒等を保存する場所があったこと、そして、これらの食材を調理する場所があったことがわかる。とくに「一汁三菜」を出していることなど考慮すると、「山の小屋」には竈があった可能性が高い。

また、8月10日・11日、9月1日・19日条にはいずれも、金山城の上へ登った義哲が、「山の小屋」に所有する物品を晒した（虫干しした）ことが記される。8月10日・11日には、「山の小屋」で、「一皮籠」・「地之字箱」に入った物本をそれぞれ晒したことが分かる。しかし、9月1日と19日には、由良氏の家臣矢修（矢内修理亮）の小屋と庭を借りて、物本や画・般若経を晒したことが分かる。この記事から、「山の小屋」は本や絵画をひろげて晒すには手狭であったこと、庭のなかった可能性の高いことがうかがえる。一方、金山の上にある矢修の「小屋」には、物本などを晒す場所を提供できるほどの広さと庭があったこと、そして、日当たりのよい場所にあったことがうかがえる。

また、義哲は、「山の小屋」で行水もしており（2月9日）、「山の小屋」あるいは周りに、行水をできるほどの空間があったことがわかる。

以上のことから、「山の小屋」は、①義哲1人が滞在できればよいような建物ではなかったこと、②少なくとも居間と座敷の2つ以上の部屋があり、座敷は少なくとも5・6人程度の来客をもてなし饗応できるくらいの広さがあったこと、③食料や酒などを貯蔵する場所や調理できる場所があったことが明らかになった。

2 金山城山上の由良家中の「小屋」

ここでは、金山城山上に設けられた長楽寺以外の由良家中や従者の「小屋」について取り上げて考えてみたい。

A 永禄8年（1565）正月4日

一番鳥以前ヨリ各起、登山之用意イタサス、（中略）四番鳥之時分ウチ出、自山門本尊ヲヲガミ、ソノマヽ行、夜明、日之無出、大澤方へ行着、（中略）無程山へノホリ、小屋ニテ茶ヲノミ、金筑ニテ冷酒一献、二献目ニ椀麵ニテカン酒アリ、初献ヲハ内カタニノマセ、愚ノム、二献目ヲハ愚ノミ、金筑へサシツルトヲボユ、其後次第〃〃伴僧ニノマセラル、臈而実城へイヅ、イツモノコトク内カタニテ引ワタシヲ出シ、土器杯ヲ同イタシ、五度之礼ニテ、内カタニノミ愚へサハル、愚杯ヲ内カタニノミ、岱子ニサハル、当年ハ岱子ニモ五度礼アリキ、伴僧ニ三度二度ノ礼ナリ、二献目ニ杯ヲ出シ、ザウニアリ、五度礼ヲ旦那へ申、愚シヤクニ立、酒ヲマイラセ、旦那ノシヤクニテ愚ノム、愚ガ杯ヲウケ、岱子ニ三度之礼ニテ旦那ノミ、岱ニサハル、又旦那ノミ、瑞・存ニノマセラル、存杯ヲ小座ヘト旦那ユワシマスヲ愚ウケトリ、小座へ三度ノ礼ニテ愚ノミ、小座へマイラス、ソノ杯ヲ又愚ノミツル、又旦那云イコトニ、六郎御酒ヲモコレニテ可申トテ、重別ニ杯ヲ出シ一献アリ、藤紀云イコトニ、ワザト愚シヤクニテ申可然ト被申程ニシヤクニ立、六郎殿へマイラス、六郎殿シヤクニテ愚ノミツル、此時岱ニモシキリニシイラレ、三杯ノミキ、実城ヲ立、十郎殿へ行、内カタニテ冷酒一献アリ、五度之礼ニテ内カタマツノミ、愚ニサハレツル、次第〃〃伴僧ニサハル、伴僧吞アゲノ杯ヲ愚トリ、十郎殿へ礼ヲ三度申、愚先ノミ十郎殿へマイラセ、又、十郎殿之杯ヲ愚吞ツル、十郎殿へモ黄■ニ雲脚十袋、如例年梅殿ニ扇子一本マイラス、ソレヨリ右衛門佐殿へ二十疋・十袋、中書二十疋二十袋、ヲチ（落）合二十袋イタシ、丸橋右（丸橋右馬助）十疋・十袋、ソレヨリ開山へ参、別当ニ扇子一本・十袋為持

ツル、一、実城へ、如例年五十疋ニ茶廿袋・雲脚十袋ヲ重テ一ツニユイ合、二十疋御内方へ、三塔頭之三十疋酒代モ当年ハイタス、臈而イツモノコトク本尊へハツウトテ三十疋コナタヘイタサル、各茶ヲ出シ、酒代之事ハ別之注文ニアリ、山ヨリ呑嶺 御屋形、次ニ御入へ参ル、冷酒一献ニテ立、本尊へノハツウ一枝、大澤方ニテ一枝、何ヲモ行堂トル也、金龍寺へ参ス、茶子ニテ茶、土器ヲ先出、イヤ〜ヒマヲカハスルトテ土器ヲソノマハヲキ、ヌリモノハ杯ヲ出、ザウニノ上ニカン酒アリ、ソレ過テ椀メン・カン酒、瑞子・助右衛門尉ニハ椀ニテ一ノマセラレツル、中間トモマテ酒ヲ出シメシヲモテナシ、奔走ナリトモウス也、各大田へ礼ヲノベ、爰許へ戌刻ニカヘリツキ、(後略)

B 永禄8年(1565)2月9日

(前略) 山へ登、此日左衛門二郎モ留守ニテ中嶋(境町)迄乗籠由、左衛門五郎(馬場カ)一札コシツル、

上に掲げた史料Aは、正月4日に上野国長楽寺の住持義哲が、旦那である由良成繁の居城金山城へ登り、成繁やその一族・家中それぞれのもとへ年始の挨拶に赴いた際の記事である。義哲は、一番鳥の鳴く前に起きて支度をし、四番鳥の時分に寺を出発、夜明け前に世良田今井城主の大沢氏のところへ年始の挨拶に行く。程なく金山に登り、自分の山の「小屋」で一服したあと、金筑(金谷筑後守)のところへ挨拶に行き、金筑とその内方(妻)から酒(冷酒・燗酒)や椀麵を饗された。それからすぐに実城へ出て、まず成繁の内方に挨拶して酒・雑煮を饗され、そして旦那(成繁)に挨拶して酒を饗され、小座と六郎(成繁の子国繁)にも挨拶して酒を飲みかわした。その後、実城を出て、十郎殿(横瀬新十郎か)のところへ行き、十郎とその妻に挨拶をして酒をかわし、次いで、右衛門佐殿(横瀬新右衛門尉国広か)、中書(泉中務太輔)、ヲチ合(落合)、丸橋右(丸橋右馬助)それぞれのところへ挨拶に行き、そこから開山へ参り別当に挨拶し、そして「山」を出て、呑嶺御屋形(岩松守純か)と御入(坂中)にそれぞれ挨拶してから、金龍寺に参り、茶・酒・雑煮・椀麵・飯を饗されて、戌刻(夜8時ころ)に長楽寺へ帰ったことになる。

義哲はこのとき由良家の主だった者たちのところへ年始の挨拶に行ったが、「山」すなわち金山の上においては、実城以外に、金筑・十郎殿・右衛門佐殿・中書・ヲチ合・丸橋右のところへそれぞれ挨拶に行っている。このことは、彼ら6名の住居が「山」にあったことを示している。つまり、前節で述べた他の家中である矢内修理亮の屋敷「矢修小屋」と同じく、6名の「小屋」が「山」にあったことになる。

また史料Bは、2月9日に義哲は「山」に登ったが、その日に左衛門二郎(小此木)は中嶋(境町)まで出陣していて留守であったことを示している。このことから金山の上には、左衛門二郎の住居(小屋)があったことが知られる。

史料Aにみえる6名のうち、十郎殿・右衛門佐殿・中書は、いずれも由良成繁と血縁・姻戚関係にある横瀬一族・一門であり、金筑は義哲と成繁との取り次ぎ役であり、落合・丸橋右馬助は由良氏の重臣である。いっぽう、史料Bの小此木左衛門二郎は、永禄4年(1561)初めころの『関東幕注文』(上杉家文書)にも、成繁の「同心」としてみえる由良氏の重臣である。以上の点から、少なくとも由良氏の一門や重臣が居住するための「小屋」が、「山」(金山の上)にあったと考えられる。

ここで注目されるのは、少なくとも金筑と十郎殿のところではそれぞれの内方(妻)とも挨拶していることである。つまり、金筑と十郎殿の「小屋」には内方(妻)も住んでいたのである。また、丸橋右馬助は、この年六月頃から長楽寺に在寺を願い出て長期滞在するが、そのあ

いだ右馬助の内方は金山城に居たことがうかがえるので〔片桐 2003〕、おそらく内方は金山の上にある右馬助の「小屋」に住んでいたと思われる。

したがって、成繁への証人（人質）としての意味合いが大きいであろうが、いずれにせよ金山城の山上にあった由良氏の一門や重臣の「小屋」にはそれぞれの妻も居住していたのである。彼らの山の「小屋」には、少なくとも二人以上の者が居住できるスペースがあったことが明らかである。

また、金筑の「小屋」で酒（冷酒・爛酒）や椀麵、十郎殿の「小屋」で冷酒が饗されたように、それぞれの「小屋」には、前節でとりあげた長楽寺（義哲）の「山の小屋」と同様、食料や酒などを貯蔵する場所や調理できる場所だけでなく、客人を饗応するための座敷があった可能性が高い。

ところで、金筑は上田嶋城主、左衛門二郎は小此木郷の境城主、矢内氏は上江田城主といわれるように（『新田金山伝記』）、それぞれ自分の所領を持ち領内に城（屋敷）を持っていたと考えられる。実際に左衛門二郎は、ふだんにおいては山の「小屋」ではなく境の城（屋敷）に居たとみられ（『長楽寺永禄日記』正月6日・4月29日条など）、頻繁に長楽寺の義哲のもとを訪れている。

つまり、「山（金山城山上）」に自分の「小屋」があっても、それとは別に自分の領内に本来の屋敷を持っていたということになる。金山城内に「山の小屋」をもつ義哲にも、それとは別に本来住んでいる屋敷（長楽寺）があるのである。『長楽寺永禄日記』で使われる金山城内の「小屋」という語には、「本来住んでいる屋敷とは別の仮の住居」という意味合いがあるのではなかろうか。

第2節 金山城惣構え内の「小屋」

ここでは、金山の北西部に位置する長手谷（太田市長手）にあったとみられる「長手の小屋」についてとりあげる。長手の小屋には、長楽寺から派遣されたとみられる数名の僧侶が在駐して、金山城への出先機関としての役割を果たす建物であったことが分かっている〔赤澤 2003〕。また、長手には、「チャウリ（長吏）屋敷」など、長楽寺以外の屋敷や小屋もあったと考えられる（『長楽寺永禄日記』正月25日条）。

長手は、金山城の惣構えの内側にあったとみられ、由良氏の命令をうけて、長楽寺は、領民等を人足として派遣し長手の堀普請を行っている（同前正月21・22・25日、2月6・7・9日条など）。それに対して長楽寺の住持義哲は、由良氏の命令ではなく独自に長手の小屋やその周囲にも手を入れ普請を行っている。

永禄8年（1565）2月9日

長手普請ニ門前・寺中ノ者トモ六十余人申付、長手内堀ヲホラス、（中略）、長手へ来、（中略）、山へ登、（中略）、来迎寺ノ竹ヲ所望イタス、則ホラセーダコサレキ、此夜モ少アメフル、

永禄8年（1565）2月10日

山ニテ焼餅ニケ用、（中略）、愚ハ長手へ下、普請申付、注文之内六七人不来、翁蔵司カタヨリ人足四人コシツル、普請ヲサメ皆カヘシツル、（中略）、ヘイ竹ヲ河田壱岐ニ所望シテホル、五駄来、則ウヘツル、（後略）

上に掲げた両史料は、長手の内堀普請を巡見した義哲が、来迎寺（新田町）と河田壱岐守に所望した竹が届いたので植えたことを示す記事である。この竹は、2月10日条に「ヘイ竹（堀竹）」とある

ように、小屋を囲む塀にするためのものである。来迎寺から一駄、河田壱岐守から五駄の掘り出された竹が届いている。「駄」とは馬一頭に負わせる荷物の量をさすので、両所から計六頭の馬が背負う量の竹が届けられ、それを小屋の周囲に植えたということがわかる。

永禄8年（1565）2月12日

（前略）、ヲモテノ築地之近辺ナヲサス、又下男共ニウラノツヽミヲツカセ、下男五人来、（後略）

上の史料は、長手に滞在中の義哲が、小屋の「ヲモテ（表）」の築地近辺を直させ、下男たちに「ウラ（裏）」の「ツヽミ（堤）」を築かせた記事である。このことから、長手の小屋の表（正面）には築地（築地塀）があり、裏には川や池などの水があふれないように堤（土手）が築かれていたことがわかる。

永禄8年（1565）4月16日

（前略）、長手木戸用意ヲ飯田ニイタサス、（後略）

上の史料は、義哲が奉公人の飯田に頼んで、長手の小屋の木戸を用意させた記事である。木戸とは一般的に柵に作った出入り口の門のことである。長手の小屋の入り口には、規模は不明ながら木戸（門）が設けられていたことがわかる。

永禄8年（1565）5月7日

（前略）、長手へ池普請ニモ下男五人未明ニコシツル、（後略）

永禄8年（1565）5月11日

（前略）、長手之池普請ニコユ、塔頭衆・小者・常住衆十四人ニテイタシ、先ヲサムル分也キ、於長手時ヲ能用、又暮烟ヲモ能用、道厳ハ非時過來、卒度用ラレトマリ也、存モ来普請ス、ナカハ祝モ来、佐ハ来、軀而カヘリ、普請モセス、道厳ニ大茶一斤、好茶三マイラス、金彦・平藤・拾助ニハ大茶一斤ツヽ出之、申刻普請衆アゲ返ス、（後略）

上の両史料は、義哲が長手に池をつくったことを示す記事である。5月7日には下男5人、11日には塔頭衆・小者・常住衆の14人で普請している。この池は、観賞用のためではなく、夏に備えた貯水用の池であったと思われるが、長手の小屋の周囲に池が掘られていたことがわかる。

永禄8年（1565）正月19日

（前略）苗木ウヘサセニ与七・六郎三郎長手ヘコス、（後略）

永禄8年（1565）正月21日

（前略）苗木普請ニ遣六郎三郎・与七、返如申者、洞春合薬相当様ニテ候由云コス、洞春昨廿日長手へ来、日帰ニサシメスト也、（後略）

永禄8年（1565）2月11日

(前略)、晴間ニ杉苗ヲウヘサセキ、甫ヲハ朝返ス、的モ木ヲウヘアゲテ帰、(後略)

永禄8年(1565)2月16日

(前略)、長手ニウヘサセベキニテ、此日苗キヲ家中之者共ニ所望イタス、甘本ツヽ、(後略)

永禄8年(1565)2月18日

(前略)、長手苗木千本計遣也、ウヘテニ助六・神四郎兩人指越ス、(後略)

永禄8年(1565)2月19日

(前略)、長手へ木ウヘニコスモノ已刻帰、(後略)

永禄8年(1565)3月8日

(前略)、長手へ木崎ノ西海子苗三駄ツケノボス、(後略)

永禄8年(1565)3月9日

(前略)、此日、長手ニ西海子苗木ヲウユルト申コス、(後略)

永禄8年(1565)4月5日

(前略)、長手へ岩松之杉苗ヲ甫ニ云ツケコス也、(後略)

上に掲げた史料は、正月から4月にかけて長手に苗木をつかわして植えさせたことを示す記事である。3月8日・9日には皂莢、4月5日には杉の苗木を植えさせたことがわかるが、正月・2月に植えさせた苗木の品種は不明である。あえて記す必要もない一般的な品種の苗木であったのであろう。2月19日には、千本ばかりの苗木をつかわしていることからもうかがえるように、長手の小屋の周囲には多くの苗木を植えることのできるスペースがあったことがわかる。あるいは、長楽寺が長手の小屋に隣接する山の一角を所有していた可能性もあろう。

以上のことから、長手の小屋は、周囲をかこむ塀の代わりとして竹を植え、正面には築地塀をこしらえ、入り口には木戸をかまえ、裏には堤を築いていたことがわかる。そして、周囲には、池をつくり、多くの苗木を植えることのできるスペースがあったのである。したがって、「長手の小屋」は、金山の上にあった「山の小屋」よりもはるかに立派で、広い庭も有する屋敷と呼んでもよいほどの建物であったと言えよう。

おわりに

本稿では、16世紀後半に山城や惣構えの内に建てられた「山小屋」と「小屋」について、『長楽寺永禄日記』を素材として考察した。

その結果、戦国領主由良氏の居城金山の上にある長楽寺の「山の小屋」は、物本・一皮籠・画・般若経を収納できるスペースがあったこと、少なくとも居間と座敷の二つ以上の部屋があり、座敷は5、6人程度の来客をもてなし饗応できるほどの広さがあったこと、そして、食料や酒などを貯蔵する場所や調理できる場所があったことがわかった。

また、金山城の山上には、少なくとも由良氏の一門や重臣たちの「小屋」があり、その「小屋」に

は内方（妻）も居住できるスペースがあったこと、そして、長楽寺の「山の小屋」と同様、食料などの貯蔵や煮炊きできる場所だけでなく、客人をもてなす座敷があった可能性が高いことがわかった。

いっぽう、山麓にある長楽寺の「長手の小屋」は、周囲を塀のかわりに竹を植え、正面には木戸をかまえて築地塀をこしらえ、裏には堤を築いていたこと、そして周りには池をつくり、多くの苗木を植ええられる庭があったことから、山上の「山の小屋」よりもはるかに立派な住居であったことがわかった。

山城の発掘の成果から籠城の実態を探ろうとした千田嘉博氏は、16世紀後半に機能した土豪層の山城（福島県の西方館）を取り上げ、主郭・副郭を囲む帯曲輪に設けられた小屋掛けの建物に注目する。そして、この簡便な小屋掛けの建物は、籠城に際して主たる戦闘力を構成した雑兵クラスの人々、もしくは避難してともに戦うために城内に入った人びとが寝泊まりした臨時施設であり、煮炊きを行った痕跡がないことから、副郭にある建物を中心とした部分が、食料の保管や調理等の中核的機能を果たしていたとし、主郭・副郭とは同じ城とはいえ明確な階層性をもったとしている〔千田 2003〕。

「小屋」と聞くと、この帯曲輪の小屋掛け建物のような簡便な建物をイメージしがちである。しかし、同じ「小屋」であっても、「山の小屋」には、座敷もあり、食料の保管や調理する場所もあったのである。金山城内における由良家中矢内修理亮の屋敷も「小屋」と呼んでいたことを考慮するならば、金山城の中核をなし実城を支える建物群のこともそれぞれ「小屋」と呼んでいたと考えられる。

したがって、『長楽寺永禄日記』の筆者義哲が記す「小屋」とは、「はじめに」でとりあげた従来の研究による認識、すなわち地下人が籠もる防御施設あるいは村人が避難する建物とは異なっていることが明らかであるといえよう。

そもそも「小屋」という語には、「小さくて粗末な家、仮に建てた小さな家」以外に、「④主な建物に付属して建てられた従者の住居。江戸時代では、藩主の藩邸内または城中にあった軽輩の住宅」という意味がある（『日本国語大辞典』）。

山本博文氏は、近世の萩藩毛利家の「江戸麻布御屋敷土地割差図」（毛利家文庫、1770～1800年頃作成）を取り上げ、絵図では藩邸内の各長屋の一軒一軒を固屋（＝小屋）と称しており、狭い小部屋を連想しがちであるが、いまの3DKの公務員宿舍なみの広さはあると述べている〔山本 1991〕。また、同じく近世の加賀藩の江戸藩邸や京都屋敷においても、年寄をはじめ、御用番・奉行・足軽など様々な階層が生活する住居のことを「小屋」と呼んでいる（1）。したがって、近世においては、「軽輩」だけに限らず、本国から離れた江戸や京都の藩邸・屋敷内における年寄以下家中の者や奉公人の居住する建物を一般的に「小屋（固屋）」と呼んでいたことがうかがえる。

このような近世の藩邸内における「小屋」の在り方は、金山の上に建てられた由良氏一門・重臣の「小屋」や、義哲の「山の小屋」の在り方と同様ではなかろうか。すなわち、本来の屋敷を金山城から離れた別の私領内にもつ者のために、主人由良成繁の居城金山城内において仮に建てた住宅のことを「小屋」と呼んだと考えられる。

そして、この日記を十刹に列した長楽寺の住持義哲が記していることも重要である。

天正11年（1583）に京都五山の相国寺住持となった西笑承兌（1548～1607）の自筆文案集である『西笑和尚文案』の第一冊（慶長2年秋・冬ころ）の表紙見返しには、漢詩「伏見十景」を詠んだ際の草案か覚書が記されているが、その冒頭に「アビコ源左衛門 直江山城殿小屋」とある（2）。「アビコ源左衛門」については未詳であるが、「直江山城殿」とは豊臣政権の大老の一人上杉景勝の家中筆頭である直江兼統のことである。「伏見十景」を詠んでいることから、「直江山城殿小屋」とは、文禄4年（1595）冬に京都から移った伏見の直江兼統の屋敷のことであると考えられる。つまり、西笑承兌は、直江兼統の伏見邸のことを「小屋」と呼んでいるのである。兼統も、本来の屋

敷（城）は越後にあり、その意味では伏見の屋敷は仮の住居であった。

したがって、近世だけでなく少なくとも戦国期後期（16世紀後半）にはすでに、本拠の屋敷から離れて出仕する城や城下に設けられた仮の住宅のことを「小屋」と呼んでいたのである。つまり、文献史料や絵図等に「小屋」と記載されているからといって、小屋掛けの簡便な小さな建物であったとは限らないのである。「小屋」が記載される史料の作成者・書き手の立場や意図をふまえた上で、その意味するところを理解しなければならない。

〔参考文献〕

赤澤春彦「戦国期長楽寺と寺僧」（『長楽寺永禄日記』解題、続群書類従完成会、2003年）

市村高男「中世史料に見える城郭用語」（龍ヶ崎市教育委員会編『龍ヶ崎市史別編Ⅱ』第1章第3節、1987年）

井原今朝男「山城と山小屋の階級性格」（初出1983年、のち同『中世のいくさ・祭り・外国との交わり―農村生活史の断面』校倉書房、1999年所収）ほか

片桐昭彦「戦国領主由良氏と長楽寺と百姓」（初出2003年、のち同『戦国期発給文書の研究―印判・感状・制札と権力―』高志書院、2005年所収）

笹本正治「戦国時代の山小屋」（初出1984年、のち同『中世的世界から近世的世界へ―場・音・人をめぐって―』岩田書院、1993年所収）ほか

千田嘉博「戦国期城郭の空間構造」（『国立歴史民俗博物館研究報告』108、2003年）

藤木久志「村の隠物・預物」（初出1988年、のち同『村と領主の戦国世界』東京大学出版会、1997年所収）ほか

山本博文『江戸お留守居役の日記―寛永期の萩藩邸』（読売新聞社、1991年）

注

- （1）天和3年（1683）4月25日付江戸屋敷に付覚（加越能文庫所蔵「六冊之御定書」）、元禄2年（1689）閏正月21日付「元禄二年江戸江被罷越候面々江申談品々」（同前）、宝永4（1707）8月付「宝永四年若火事之刻御行列附并御定書等被仰出之帳」（同「雑録備考抄附録」八）、文化12年（1815）12月19日付京都屋敷歩数等大概（同「江戸毎日書立書抜」）、（以上4点の史料は『金沢市史資料編4近世二藩制』第2編第7章、2・4・7・26号文書）。「江戸本郷邸年寄中之小屋図」（金沢市立玉川図書館近世史料館平成13年度冬季展「加賀藩の江戸藩邸」展示品）、未確認。

- （2）『相国寺蔵西笑和尚文案』（思文閣出版、2007年）。矢田俊文氏の御教示による。

本稿の目的は、中世後期の陣の事例を取り上げ、文書・記録によって陣所の景観を考察することにある。

近年の研究によって、15 世紀後半～16 世紀初頭にかけての守護所や初期の戦国城下町の様相が明らかになってきている〔仁木 2006 など〕。ただ、当該期の東国では、享徳の乱期（1454～1482）に古河公方方と対立した上杉氏方が五十子陣へ長期にわたって在陣していたように、陣も重要な役割を果たしていた。私は以前に考古学のための文献史料の解説として、五十子陣の考察を行った〔森田 2006〕。五十子陣は 20 年以上の長期にわたり、非常に多数の軍勢を中心とした多様な構成員によって成り立っていた。中心地には、錦御旗のもとに関東管領を中心とした東国の守護や京都下りの軍勢が駐屯していた。在地社会からは訴訟が持ち込まれ、商人が出入りし、連歌会が開催されるなど、東国における政治・経済・文化の中心地の一つとして機能していたのである。

そこで、1 では五十子と同様に①当該地域における概ね最上位権力者（公方・関東管領・守護など）が中心となって、②大規模な軍勢が比較的長期にわたって駐屯していた陣、を類例として取り上げたい。2 では、陣を構成する陣所の景観がどのようなものであったのか考察したい。ただ、陣所の景観をうかがわせる史料は限られていることから、ここでは①②の条件に合致していない史料も取り上げた。

1 陣の事例

（1）入間川陣

入間川陣（埼玉県狭山市）は、鎌倉公方足利基氏や執事（関東管領）の畠山国清らが拠点とした陣であり、文和 2 年（1353）7 月から貞治元年（1362）まで約 9 年間にわたって機能していた。陣の所在地は、鎌倉街道上道が南北に走る鎌倉の防衛線で、武蔵国の東西交通路が交差する宿場としても繁栄していたという。『太平記』によって入間川宿内で在家・堂舎・仏閣が多く所在していたことが確認でき、都市集落が開けていたと想定されている。公方・管領が長期にわたって定住した東国政権の大本営であり、「入間川公方府」と評されている〔海津 1996〕。陣の所在地は狭山市徳林寺一帯に比定されているものの、発掘調査が行われていないために場所は特定できていない〔落合 2005b〕。

（2）上戸陣

上戸陣（埼玉県川越市）は、山内・扇谷両上杉氏が対立した長享の乱に際して、山内上杉氏方が明応 6 年（1497）頃から永正 2 年（1505）まで拠点とした陣であり、約 8 年間にわたって機能していた〔落合 2005a〕。山内上杉氏の軍勢のみでなく古河公方足利政氏以下、3 千余騎が在陣していた時期もあり（『松陰私語』第五）、連歌会も催された（『宗祇終焉記』）。発掘調査によって、陣の内部は土塁、塀を伴う堀で複数に区画された構造であったことが推定され、館の中では舶載の陶磁器を用いた茶の湯、立花、香が嗜まれたことが想定できるという〔荻野 2005〕。

（3）鈎陣

鈎陣（滋賀県栗東市）は、京都幕府将軍の足利義尚が長享元年（1487）10 月に近江守護の六角高頼を討伐するために近江国内で拠点とした陣であり、長享 3 年（1489）3 月に義尚が同地で没するまで

約1年半にわたって機能していた。史料によって義尚の陣所には、「御小袖ノ間」「御対面所」「小侍所」「御厩」「持仏堂」「番所」「御門」などのあったことが確認される（『滋賀県の地名（平凡社 日本歴史地名大系 第二五巻）』）。近年、鉤陣跡の推定範囲内に位置する上鉤遺跡の発掘調査が行われたが、鉤陣よりも新しい遺構・遺物が主体となって確認された〔財団法人栗東市文化体育振興事業団文化財調査課 2007〕。このことから、鉤陣のもう一つの候補地である下鉤の蓮台寺付近が注目されるという〔今谷 2007〕。

（4）篠塚陣

篠塚陣（千葉県佐倉市）は、古河公方足利政氏・高基父子が千葉氏を討伐する際に下総国内で拠点とした陣であり、文亀2年（1502）6月頃から永正元年（1504）4月までの約3年間にわたって機能していたという。所在地は佐倉市大篠塚・小篠塚一帯に比定されており、陸上交通と河川交通とが交差する交通の要衝に位置していた。現段階では、篠塚陣に関する遺跡は確認されていないという〔和氣 2007〕。

2 陣所の景観

一つの広域な陣は、個々の軍勢が集まって形成されていた。主に15世紀後半の東国の政治情勢を記した回想風の記録として、『松陰私語』がある。『松陰私語』では、五十子陣のような広域の陣の中に個々の陣所が形成されていたと記されており、陣と陣所の2つの用語は使い分けられていたという〔松岡 2005〕。したがって、以下ではこの指摘に従って、広域の陣とその陣を形成する個々の陣所とを区別して用いたい。

では、陣所の景観はどのようなものであったのだろうか。峰岸純夫氏は、『松陰私語』などに基づいて陣所の景観を次のように述べる〔峰岸 2005〕。

陣所にはにわか造りの掘立小屋の兵舎や馬小屋が立ち並び、馬場があり、その周りは幕を張り巡らし防御用の堀や柵に囲まれているであろう。

文献史学における陣所の景観の説明は、このようなものではないか。陣跡と想定される遺跡の発掘調査が進んだ結果、堀や区画溝、柵列、道路などの遺構が検出されている。考古学で検出されている遺構と、文献史料で確認できる陣所内部の記述とを突き合わせることも必要であろう。

戦国期には、合戦の際に守るべき軍中の規律を定めた史料がみられるようになる〔黒田 2004〕。ここでは、陣中での規則や規律について細かく記されていることがある。以下では、陣についての記述が比較的多い次の史料を取り上げ、陣所の景観を考察したい。

〔史料1〕「越後衆連判軍陣壁書写」（「上杉家文書」『新潟県史 資料編3 中世一』269号）

壁書

- 一、陣取之時、或陣場相論、或陣具等奪合、不可及喧嘩事、
- 一、喧嘩口論出来之時、号傍輩知音、不可助合事、
- 一、万一聊爾之子細雖有之、以古法、追而可有其沙汰事、
- 一、不可陣払、若雖致之、軍勢悉備出上、可及左右事、
- 一、陣取之時、勢衆繰引自由之様、路、同陣場之前広可被取之事、
- 一、陣取之時者、当座二尺木ヲ結、同待野伏、其外用心已下、無油断各可被成之事、
- 一、陣取之時、拔置具足、不可油断候、堅可被持軍事、

右、各連判之处、於被背彼条数、堅可為曲事虚言者也、仍如件、
享祿四年正月 日 山 浦 (花押影)
(以下、署判者 17 名省略)

〔史料 1〕は享祿 4 年（1531）正月に越後において、山浦家などの上杉一門や阿賀北の領主ら 18 名が連署して作成した壁書である。壁書とは、「法令や掟などを板や紙に書いて壁にはりつけた掲示」である（『日本国語大辞典 第二版』）。箇条書きの後に連判して背かない旨を記していることから、〔史料 1〕では戦場における 18 名の領主の軍勢間での取り決めを誓約していることになる。そして、冒頭に壁書とあるように、本史料は掲示されたのであろう。

この頃の越後では、守護代長尾為景が守護上杉定実を抑え込んで政治を行っていた。ところが、〔史料 1〕の前年の享祿 3 年（1530）11 月頃に、上杉一門の上条定憲と長尾為景とが争う享祿・天文の乱が勃発した〔森田 2001〕。本史料には長尾為景の裏花押が記されているので、ここに連署している領主は為景方であったと考えられている。享祿 4 年（1531）正月前後の戦況については〔史料 1〕があるのみであり、これらの領主がどのくらい一体的に軍事活動を行ったのかは不明である。しかしながら、1 条目では、陣取りの時の陣場の相論や陣具の奪い合いを禁止している。そして、これに背かないという旨が領主間で誓約されている。したがって、18 名の領主の軍勢は距離を非常に隔てているのではなく、ある程度まとまって陣を張ったと想定される。

考古学と直接関係してくるのは、5 条目と 6 条目であろう。5 条目では、陣取りの時には「勢衆」の操引きが自由にできるように、「路」や「陣場之前」を広く取ることが記されている。「勢衆」とは、『松陰私語』第二に「自遠国当陣下往復之勢衆・夫・雑人等討留」とあり、また 5 条目の文脈から陣中の軍勢のことを指していると考えられる。「路」とは、道路のことであろう。この箇条のみでは、道路が陣所のどこを通っているのか確定できない。

考古学の調査によって、陣における道路あるいは道路状の遺構が確認されている。豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592～1598）に際して築城された肥前名護屋城の周囲には、全国から動員された領主の陣が群集していた。その中の一つである氏家行広の陣跡の発掘調査が行われ、掘立柱建物跡や門跡、柵列、溝、土壇などが確認された（図 1 参照）。東側の調査区では建物や土壇を構成要素とする幾つかのグループが形成されており、それぞれの小ブロック間の階層性を示す遺構や遺物の差異がないことから、「兵卒の部隊別駐屯地といった印象を強める様態にある」とされている〔宮武 1998〕。そして、陣の内部では敷設面の幅が 3 m ほどの道路遺構や幅 16 m 前後の道路状の空白地が確認され、陣外と想定される場所では幅 9 m 前後の道のような共有空間を想像させる空白帯が確認できたという〔堀苑 1996・宮武 1998・宮武 2002〕。

〔史料 1〕は 16 世紀前半の史料でそれほど存続期間が長くはなかったと想定される陣であり、氏家行広の陣は 16 世紀末のある一時期に継続して機能した陣である。したがって、両者の陣として機能した時期や条件は異なり、単純に比較はできないのかもしれない。しかしながら、文献史料で確認できる陣に付設した「路」や「陣場之前」と考古学の遺構の相関関係を今後、さらに検討していく必要があろう。

次に 6 条目では、陣取りの時には当座に「尺木」を結ぶことが記されている。「尺木」とは、「短い木片。建築や陣の柵などに用いる材木」である（『日本国語大辞典 第二版』）。戦国期に他の史料によっても「陣中陣屋之廻尺木」「但尺木之事者、依地形之躰二重而可加下知之事」とあるように、一般的に認められる（「武田勝頼條目写」『群馬県史 資料編 7 中世 3』2816 号）。これは、陣や城郭の遺跡で確認できる柵列の遺構の柵そのものである可能性が高い。今後、尺木の文献史料を収集・考察す

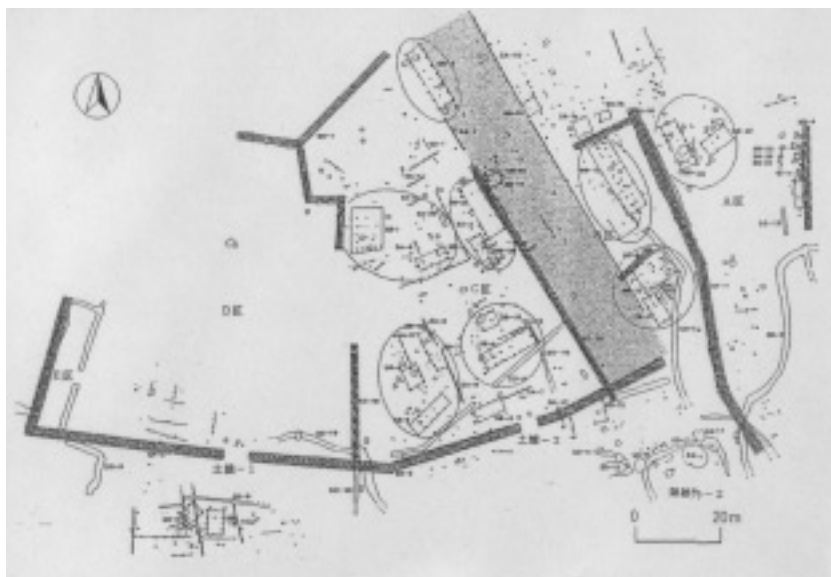
ることによって、考古学の柵列の遺構を考察する参考になるかもしれない。また、陣に限らず城郭や小屋・陣屋を考察する上で、[高鷲 1995] が収集した軍法や陣中法度といった類の史料を読み込むことが必要であろう。

最後に、これまでの研究では[史料1]に連署をしている領主が享禄4年(1531)正月の時点で、具体的にどの程度連携して軍事行動を行ったのか言及してこなかった。しかしながら、以上の[史料1]の考察によって、陣あるいは陣所での取り決めが細かく決められていたことが確認できた。したがって、連署をした領主はあるていど近接して陣を張ることを想定し、[史料1]を作成したと考えられる。

[参考文献]

- 今谷 明 2007 「応仁の乱後の近江」(同氏著『近江から日本史を読み直す』第四章2、講談社現代新書)
- 荻野将盛 2005 「河越館跡」(藤木久志監修 埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』高志書院)
- 落合義明 2005a 「武蔵国河越館の景観と変遷」(同氏著『中世東国の「都市的な場」と武士』山川出版、初出1997)
- 落合義明 2005b 「陣と芸能」(同氏著『中世東国の「都市的な場」と武士』山川出版、初出1999)
- 海津一朗 1996 「入間川公方府とその時代」(『北区史 通史編 中世』第二章第二節、東京都北区)
- 黒田基樹 2004 「戦争史料からみる戦国大名の軍隊」(小林一岳他編『【もの】から見る日本史 戦争I』青木書店)
- 財団法人栗東市文化体育振興事業団文化財調査課 2007 『栗東市埋蔵文化財調査報告 2005 年度年報』
- 高鷲江美 1995 「戦国・織豊・徳川初期の軍法」(『栃木史学』9号)
- 仁木 宏 2006 「室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町」(内堀信雄他編『守護所と戦国城下町』高志書院)
- 堀苑孝志 1996 『No. 27 氏家行広陣跡』(鎮西町文化財調査報告書第14集、鎮西町教育委員会)
- 松岡 進 2005 「戦国初期東国における陣と城館」(『戦国史研究』50号)
- 峰岸純夫 2005 「享徳の乱における城郭と陣所」(千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』高志書院)
- 宮武正登 1998 「文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)における大名陣跡の諸形態(2)」(『研究紀要』第4集、佐賀県立名護屋城博物館)
- 宮武正登 2002 「「陣」を再考する」(『歴博』114号、国立歴史民俗博物館)
- 森田真一 2001 「上条上杉定憲と享禄・天文の乱」(『新潟史学』46号)
- 森田真一 2006 「文書・記録からみた五十子陣(2)」(『中世考古学文献研究会会報』7号)
- 和氣俊行 2007 「下総国篠塚陣についての基礎的考察」(佐藤博信編『中世東国の政治構造』岩田書院)

図1 氏家行広陣跡（宮武 2002）



発行 中世考古学文献研究会（特別研究促進費「中世考古学のための日本中世・近世初期
文献研究」グループ）

事務局 〒950-2181 新潟市西区五十嵐2-8050 新潟大学人文学部 矢田俊文研究室

あとがき

平成19年度の特別研究促進費、平成15年～18年特定領域研究（計画研究）5年間にわたる研究に基づき、上記の論文・著書・会報にみられるような成果をあげた研究（中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究）は、文部科学省科学研究費補助金の交付をうけたものである。

本研究の研究成果の中間報告・最終報告は、中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究会（略称：中世考古学文献研究会）の場でさせていただいた。5年間の中世考古学文献研究会の研究経過は以下の通りである。

◇2003年

11月3日 新潟大学人文学部（新潟市）

第1部 中世考古学のための中世・近世初期の文献研究はどうすべきか

矢田 俊文「中世考古学のための中世・近世初期の文献研究について」

伊藤 裕偉（斎宮歴史博物館）「中世考古学研究者が望む文献研究」とは何か」

第2部 奥山荘下町・坊城遺跡D地点検討会

矢田 俊文「奥山荘下町・坊城遺跡D地点を検討する視点」

水沢 幸一（新潟県中条町教育委員会）「奥山荘政所条遺跡群の展開－下町・坊城遺跡D地点の新知見を加えて－」

青山 宏夫（国立歴史民俗博物館）「歴史地理学からみた波月条絵図とその周辺」

高橋 一樹（国立歴史民俗博物館）「文献史料からみた奥山荘中条の政治・経済ネットワーク－日本海交通と北越後の内水面交通に留意して－」

パネルディスカッション

司 会：堀 健彦・矢田 俊文

パネラー：伊藤 裕偉・水沢 幸一・青山 宏夫・高橋 一樹

◇2004年

11月3日 新潟大学人文学部（新潟市）

第1部 中世考古学のための文献解説

片桐 昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 「小屋」」

森田 真一「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 鎌倉街道上道利根川渡河点・長井の渡」

皆川 義孝「梅花無尽蔵解説 城郭」

福原 圭一「上杉氏関係文書解説 城郭・とばり」

第2部 シンポジウム：中近世の集散地－砥石の流通を中心に－
報告

矢田 俊文「集散地を検討する視点－文献史学と中・近世考古学の融合のために－」

竹内 靖長（松本市教育委員会）「城下町松本の上州砥石問屋遺跡について」

高桑 弘美（山形県埋蔵文化財センター）「中世砥石の流通について」

原 直史「集散地における『場』の構造－江戸・大坂の魚肥市場を例として－」

浅倉 有子「北日本における交易と流通」

仁木 宏「中世猪名川流域の地形と交通路」

パネルディスカッション

司 会：矢田 俊文・堀 健彦

パネラー：竹内 靖長・高桑 弘美・原 直史・浅倉 有子・仁木 宏

◇2005年

11月3日 新潟大学人文学部（新潟市）

第1部 中世考古学のための文献解説

報 告

矢田 俊文「考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵」

福原 圭一「考古学のための上杉関係文書解説 城郭－荒川館－」

森田 真一「文書・記録からみた五十子陣」

片桐 昭彦「考古学のための本願寺天文日記解説 町屋」

皆川 義孝「考古学のための梅花無尽蔵解説 椰子椀・陶磁器」

前嶋 敏「世良田諏訪下遺跡（群馬県太田市（旧尾島町）世良田）出土卒塔婆」

第2部 シンポジウム：中世前期阿賀野川流域（新潟県・福島県）の領主と城館

報 告

堀 健彦「会津盆地における歴史地理環境－会津と越後のつながりに注目して－」

吉田 博行（会津坂下町教育委員会）「中世初頭の会津（会津盆地西北部を中心に）」

五十嵐和博（会津坂下町教育委員会）「陣が峯城跡について－会津地方中世前期城館の一事例－」

荒川 隆史（新潟県立歴史博物館）「阿賀野市大坪遺跡の調査」

高橋 一樹（国立歴史民俗博物館）「越後・出羽の地域構造と城氏権力」

山口 博之（山形県埋蔵文化財センター）「中世前期出羽田川氏の存在空間」

パネルディスカッション

司 会：矢田 俊文

パネラー：堀 健彦・吉田 博行・五十嵐和博・荒川 隆史・高橋 一樹・山口 博之

◇2006年

11月3日 新潟大学人文学部（新潟市）

第1部

報 告

森田 真一「文書・記録からみた五十子陣(2)」

前嶋 敏「文献史料から見た遺棄葬」

仁木 宏「近江国石寺城下町の空間構造－楽市令と考古・地図資料の再検討－」

浅倉 有子「近世寺院の漆器生産と流通」

シンポジウム「中世の蔵（埴列建物）を考える－文献史学・中世考古学・建築史学－」

第2部

報 告

矢田 俊文「土蔵・埴列建物研究の意義－学融合研究の視点から－」

鈴木 康之「瀬戸内の港湾集落と蔵－広島県草戸千軒町遺跡の事例－」

續 伸一郎「堺環濠都市遺跡の蔵遺構－埴列建物の検討－」

大村 拓生「中世前期京都と蔵」

高屋麻里子「近世土蔵造の成立－建築史の立場から－」

パネルディスカッション

司 会：堀 健彦・矢田 俊文

パネラー：原 直史・鈴木 康之・續 伸一郎・大村 拓生・高屋麻理子

◇2007年

11月3日 新潟大学人文学部（新潟市）

第1部

報 告

浅倉 有子「場所請負制下における漆器の流通と生産地」

仁木 宏「中世寺院都市論の可能性―越前国平泉寺(福井県勝山市)都市プラン復元の試み―」

中井 淳史（大手前大学史学研究所）「かわらけのオデュッセイア：「天盃」「天酌」と土師器の
表象」

原 直史「近世港町をめぐる蔵ネットワーク」

第2部 シンポジウム：中世の低地と災害を考える―中世考古学・文献史学・歴史地理学―

報 告

矢田 俊文「地震被害と摂津天王寺西浦・遠江中部低地」

堀 健彦「地震・津波災害と中世安濃津」

伊藤 裕偉（三重県教育委員会文化財保護室）「中世の災害とその克服―伊勢を事例に―」

向井 裕知（金沢市埋蔵文化財センター）「加賀の低地と中世遺跡」

水沢 幸一（胎内市教育委員会生涯学習課）「中世越後の水害と低地遺跡」

パネルディスカッション

司 会：浅倉 有子・矢田 俊文

パネラー：堀 健彦・伊藤 裕偉・向井 裕知・水沢 幸一

最後に、今回の補助金交付についてご配慮いただいた関係各位に謝意を表するとともに、科研のメンバーや中世考古学文献研究会に参加された方々にお礼を申し上げむすびとしたい。

2008年3月

研究代表者 矢田 俊文

中世考古学のための日本中世・近世初期の文献研究

平成20年 3 月

編 集 研究代表者 矢 田 俊 文

発 行 新潟大学人文学部

〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町8050
電話 (025) 223-6161(代)